為漢文叢
書劉生作

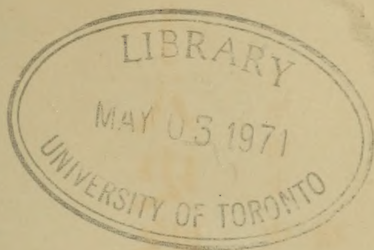




大禮記念

昭和漢文叢書





十八史略新釋 上卷

文學博士 中山久四郎
鹽野新次郎 共著



十八史[illegible]



萬里長城

緒言

一、この書の本文は十八史略の通行本に據り、訓點は主として陳殷の音釋に據つたが、尚ほ和漢諸家の說を參酌して、その宜しきに從つた。

二、解釋は、初學の人の爲めに通俗平易を旨とし、丁寧に意義を說明する外、また努めて原文の氣分を寫し出すことに注意をした。尚ほ對譯の必要上、原文の意味以外に言葉を附け添へたところは括弧（　）を劃して區別し、以て讀者が彼此對照して文義を會得せらるゝの便宜に供した。

三、十八史略は史書として最も要領を得たものであるは勿論、また一面修養の書でもあり、文學の書でもある。故に「餘論」に於て、その方面に言及したところが少なくない。

四、漢文の基礎的智識ともいふべき故事・成語・名句などの主なるものは、大抵、本書に網羅されてゐる、因てまた「語釋」に於て、その點の注意を怠らなかつた。

五、「語釋」は煩を厭はず成るべく詳細にと心がけた。同じ語の解釋を數回くりかへした處のあるのも、一に讀者の便を思ふ婆心に外ならない。

十八史略新釋上卷目次

卷一

十八史略新釋上卷目次終

十八史略解題

文學博士　中山久四郎

一　著者

十八史略の著者は支那の宋末元初の曾先之である。先之、字は從野といひ廬陵の人なり。廬陵は今の中華民國の江西省廬陵道吉安縣に當る處である。彼は前進士の資格ある者なれども、其傳記が元史、江西通志及び廬陵縣の選擧志などに記されてない。（こゝにいふ所の選擧とは選擇して之を推擧することで、支那の諸地方より學德のすぐれたる人物を選擇して之を朝廷に推擧す

ることで、今の政治上の投票によりて自己の適當と信ずる人を選擧することではない。」けれども明初（洪武年代）の陳殷の十八史略叙文によれば、『曾氏は廬陵の學者』とあれば、江西省では、相當の學者であつたと思ふ。〔欽定四庫全書總目卷二、開有益齋讀書志卷二、及び十八史略刊本の明の陳殷の叙文等參考〕

二　書名

十八史略は、其元時代の刊本には、或は古今歷代十八史略とあれども、通例十八史略の名で知られて居る。十八史略といふ名は上記の明の陳殷の叙文によれば、左記の加き十八部の歷史を採錄節略して編輯したから起つたものである。

一、司馬遷の史記　二、班固の前漢書
三、范曄の後漢書　四、陳壽の三國志
五、唐太宗の晉書　六、沈約の宋書
七、蕭子顯の南齊書　八、姚思廉の梁書
九、同人の陳書　一〇、魏收の後魏書
一一、李百藥の北齊書　一二、崔仁師の後周書
一三、魏徵の隋書　一四、李延壽の南史
一五、同人の北史　一六、歐陽脩、宋祁の唐書
一七、歐陽脩の五代史　一八、李燾、劉時擧の宋鑑

最後の宋鑑といふのは、宋の李氏の續宋編年資治通鑑（もしくは續資治通

鑑長編）と、同じく宋の劉氏の續宋中興編年資治通鑑をいひ、前者は北宋の史實を記し、後者は南宋の事蹟を記し、無論二書なれども、同じく宋一代の事を記し、二書相まつて一代の完史ともなるべきものなれば、便宜併せて一史としたのであらう。

三　體裁內容

支那は古來世界中書籍の最も多い國で、特に史籍の多いことは驚く程である。所謂正史二十五史＝通例二十四史といふが、民國七年に公認された新元史を加へると二十五史である。もし近き將來に完成する清史を加へると二十六史となる。＝だけでも、非常のもので、三千三百餘卷もあり、之に正史以外の諸種の史籍、史料を加へると十數萬卷の多きとなり、專門家でも一々之

を通讀することは出來ない。そこでせめて正史の事蹟なりと、之を採錄節略して一般の人に讀ませたいとするのは、當然のことである。宋の司馬光の資治通鑑の如きも、支那上古史上の戰國時代より五代十國時代の末に至るまで、史記以下正史にて一千九百七十五卷となるものを節略して編年體に改造して、頗る簡略になつたといふけれども、猶ほ二百九十四卷の大部の史籍である。これでは一般の世人には多過ぎるものである。もつと〳〵節略しなければならない。

十八史略は即ち大に思ひ切つて正史を節略して、僅に七卷としたものである。しかも著者曾氏の原本はもと二卷であつたのを、上記の明初の陳殷が字音と字義の解釋を加へて出版した時に分ちて七卷としたものである。

十八史略は僅々二卷または七卷の小史なれども、支那太古より宋末に至るまでの歴代の治亂、盛衰、及び興亡の大體に通じ、其間に出でたる大小の聖賢、偉人、諸豪傑、列女、義人等の善言嘉行の以て模範とし、以て鑒戒とし、以て種々の資料となすべき事實の大要を知ることが出來、且つ作文乃至は文學上の補助となるべき詩文其他の故事熟語を學ぶことが出來るから、決して「鄕塾課蒙」（初學の童蒙に課すといふこと）の小史籍と輕視することは出來ない。

次に特筆すべきは其内容である。今の普通の刊行本は、曾氏の原本よりも卷數の多いのみならず、大事の處で相異して居る處がある。例へば、普通本卷三の三國時代の處が、曾氏の原本には蜀、魏、呉の地位に高下を論じない

といひ乍らも、文面上では魏を筆頭とし、蜀と呉を附錄して、

三國　魏蜀呉

魏文皇帝。名丕。姓曹氏。云々。

とあるのを、明の劉剡は蜀を正統の國とし、魏、呉二國の位を下げて、次の如く今の普通本にある樣にした。

三國

漢

附魏呉二僭國

昭烈皇帝。諱備。字玄德。云々。

こゝにある所の「漢」とは蜀漢の義である。此事に關しては、兩森精翁校正

の十八史略校本（明治十三年刊）の卷三の三國の條の標註に記してあるものが簡明であるから、左に鈔錄する。

劉剡曰く、按ずるに曾氏いふ、天下一統に非ざる者は、もと各自一國編集すべし。又初學の讀者その時代の先後に迷ふを恐る。今たゞ一國源流相接するものを以て提頭とし、而して同時の國を其間に附す。而して曾氏（先之）陳壽の舊（陳壽の三國志の舊狀のまゝ）により、魏を以て帝と稱し、而して漢（蜀漢）吳を附す。剡、既に朱子の綱目（資治通鑑綱目）の義例に遵ひ、而して少微（宋の江贄、少微先生と號す）の通鑑擥要を改正せり。今復此書を正し、漢（蜀漢）を以て正統に接すといふ。（原文は漢文）

これは即ち支那史上に大事の正統論に關係するものである。此外、著者の

曾氏は元人なれば、その原本には蒙古又は元を大朝といつて居るのを、普通本には、皆蒙古又は元と改訂してあるなど、原本と普通本と相異して居る處が少くない。

四　傳來及び流布

十八史略は、支那に於ても「鄉塾課蒙」の史籍、その他として相應に行はれたが、我國に於てはなほ一層廣く行はれた。その始めて我國に傳來した年代は不明なるも、栃木縣の足利市の足利學校には、大永六年丙戌の歳（皇紀二一八六年）上杉憲房寄進の十八史略があることとなれば、足利時代の中葉以後には既に我が國に傳來したことは明である。〔近藤正齋（守重）の右文故事附錄卷四參考〕

徳川時代に至りては、各藩多く之を用ひて教科書とし、諸漢學塾も殆んど皆之を用ひた。巖垣龍溪標記、同東園増補の十八史略の卷一にのせてある服部南郭の寛保二年（皇紀二四〇二年）の序文には

昔初讀書。父老教以覽十八史略。唯其言是敬從。而朝夕目之。云々。

と記してある。又江都北海の授業編（天明三年著者凡例）卷五の「歷史之學」の條の中には、次の如く記してある。

モシ初學ノ徒ナラバ、マヅ十八史略ヲ讀ムモヨシ。十八史略ハイヨ〳〵アラキモノナレドモ、編輯ノ仕方ハ、反ツテ綱鑑易知錄ニマサレリ。其ワケヲイハバ、客歳ノ冬、余濃州ヨリノ歸次ニ、柚伯華ヲ訪テ、其家ニ信宿ス。

伯華綱鑑ノ唐ノ文宗紀ヲ出シテ、甘露ノ變ヲ記スルトコロ、事ノワカレガタキヨシヲ問フ。余コレヲミルニ、イカニモワカレガタシ。試ミニ十八史略ヲトリヨセ見レバ、其事反テ分明ナリ。カヽル類多シ。

又讃岐の三野謙谷の十八史略便蒙の序文(天保八年)には、十八史略が『當今家ごとに藏し、戸ごとに誦し、日に童蒙に課して、讀書の階梯となす、亦宜ならずや。』と記してある由。德川時代の十八史略流布の狀の一斑これ等にて知る事が出來よう。明治維新より現代にかけても、初めは小學校に、後には中等學校に、漢文もしくは歴史として頗る廣く用ひられ、或は全本として、或は抄本として、また或は講義錄として或は講座本として、廣く世人に讀まれて居る。國字解も少くない。

之を要するに、十八史略は最も廣く我が國の人々に愛讀せられた漢文史籍である。

こゝに記し奉るも甚だ畏れ多い事であるが、明治神宮寶物殿の『御書籍』の御遺籍として拜觀し奉る十七部の御書物の中に、十八史略があり、明治神宮社務所御發行の御目錄及說明によると、左の如く記してあります。

十八史略

明治二年六月、侍讀秋月種樹始メテ進講セシモノニシテ、最モ御愛讀ノ書ナリキ。

五　註釋書類

十八史略　明の陳殷音釋

十八史略　巖垣龍溪、同東園(松苗)標記增補

此書の特色は十八史略の史實によりて日支の國體の異同を論ぜる處にある。

十八史略便蒙　村山隆注

十八史略校本　兩森精翁校正

十八史略　平田宗城補訂

十八史略讀本　淺田耕

十八史略讀本　宮脇通赫

(十八史略記事本末)　福田重政

十八史略　(富山房漢文大系本)

十八史略　（有朋堂漢文叢書本）
十八史略國字解　（早稻田大學出版部本、桂湖村解釋）
（續十八史略）　宮脇通赫

十八史略新釋 卷一

文學博士 中山久四郎
鹽野新次郎 著

序説

十八史略第一卷は、支那の太古より、三皇、五帝の世、夏、殷、周の三代を經て春秋戰國に至るまでの事を記したものである。支那は世界最古の國の一にして、文化の發生は遠く五千年以前にあり、たゞ其時の傳ふる所の事跡は、奇怪に類する事が少くない。蓋し太古は文字なく、書籍なく、記錄する所なくして、たゞ祖先の口述によるのみであるが、その口述は兎角誤解、謬傳に陷り易い傾向があるものであるのと、又當時の人智は極めて幼稚簡單で、神秘、神奇の事を好み、其思想が轉輾相傳はつて、遂に荒誕（荒は空、誕は大で、廣大放漫にして取りとめもないこと）無稽（確實なる證據の考

へられないこと）を致す樣になるとの二つの理由によつて、太古の事跡が奇怪不可思議の感想を起さしめるものが少くないのである。而して是は支那の太古に限つた事でなく、東西諸國いづれも皆其太古の事は之に類似して居る。

歷史家は此樣の時代の、事實の考ふべきなきによつて、神話時代といひ、又は傳疑時代といふ。

古といふ字を「說文」（後漢の許愼の著述したる字書）に解說して「古の字は十口にしたがふ、前言をしるすものなり」といひ、又それを宋の徐鉉といふ文字學者が敷衍して「十口傳ふる所、是れ前言なり」といふ。許、徐二氏の言、簡單ではあるが、古代といふものは口述、口傳によつて後に傳はり、傳はる間に誤解謬說が生じ、遂に其眞相が知れない樣になるといふ消息を傳へて居る名言であると思ふ。

之を要するに、本卷に於ては、伏羲氏以前は、原始人類發達の狀態を推察するに足り、伏羲氏より夏、殷二代に至りては、上古文化の漸く發展せる狀態を徵するに足り、周代に至りては、政治、經濟、禮儀其他の文化が漸く整頓したることを知り、春秋戰國の世に至りては、社會の劇變と、之に伴つて起りたる政治學術思想の發達を知ることが出來る。

無爲而化

爲巢火食

太古

天皇氏。以木德王。歲起攝提。無爲而化。兄弟十二人。各一萬八千歲。地皇氏。以火德王。兄弟十一人。亦各一萬八千歲。人皇氏兄弟九人。分長九州。凡一百五十世。合四萬五千六百年。人皇以後。有曰有巢氏。構木爲巢、食木實。至燧人氏始鑽燧、敎人火食。在書契以前、年代國都不可攷。

【訓讀】天皇氏、木德を以て王たり。歲、攝提より起る。無爲にして化す。兄弟十二人。各々一萬八千歲。地皇氏、火德を以て王たり。兄弟亦各々一萬八千歲。人皇氏、兄弟九人、分れて九州に長たり。凡て一百五十世、合せて四萬五千六百年なり。人皇以後、有巢氏と曰ふ有り。木を構へて巢を爲り、木實を食ふ。燧人氏に至つて、始めて燧を鑽つて人に火食を敎ふ。書契以前に在りて、年代國都攷ふ可からず。

【通釋】(支那開闢の始を尋ぬるに、最初の治者たる)天皇氏といふのは、(五行の第一たる)木の德を

天より受けて王者となつたものである。寅の歳を以て紀元とする。（人民が純朴であるから）上より世話をやかずとも、その德自然と下に及んで、よく國が治まつた。兄弟は十二人あつたが、各〻一萬八千歳の壽を保つたと傳へられる。之に次いのだは地皇氏であるが、これは（木より火を生ずる五行の性質より）火の德を受けて王者となつた。兄弟また各〻一萬八千歳であつたといふ。次は人皇氏、これは兄弟九人あり、それ〴〵分れて九州の君長となつた。かくて子孫相繼ぐこと都合百五十代、四萬五千六百年に亘つた。人皇氏より以後に、有巢氏といふのがあつて、（從來の穴居の風に對して）木を組み合せて鳥の巢のやうなものを作り、（家居することを教へた。けれども食物は、まだ）木の實を食つてゐた。然るに燧人氏に至つて、始めて木を擦り合せて火を出し、これによつて物を煮たり燒いたりして食ふことを民に教へた。併し、まだ文字のない時代の事だから、その年代も國都も考へ知ることは出來ない。

【語釋】天皇氏（天は天地の天、皇は大であり君である、氏は姓氏の謂ではなく、古は氏を以て美稱とした。地皇氏・人皇氏も亦この意味。而して此三者は古代漢民族の三才（天地人）の思想によつて生み出されたものと見るべきである。）〇木德（これも古くからある五行思想の所產である。五行とは木火土金水をいひ、此氣が天地間に運行して萬物を化育する。而して「木生レ火、火生レ土、土生レ金、金生レ水、水生レ木」といふのが、五行相生の順序である。天皇氏は始めて世に出て天下を治めた者であるから、その五行の第一たる木の德に配したのである。）〇歳起二攝提一（歳は太歳といふ星、歳星ともいふ、木星のこと。この星は十二年で天を一周するから、その運行と十二支とを配合して年のまはりを定める。歳星が寅の方に宿る歳を攝提格といふ。即ち攝提とは寅の年をいふ意。こゝはその寅の歳を以て紀元とする。）

したといふことである。）○無爲而化（古は人間が皆淳樸であるから、何も爲すこと無くして上の德が自然と人々に及んだのである。）○火德（地皇氏は天皇氏に繼いで立つたのであるから、五行説の木より火を生ずる義に取つて火德に配した。）○各一萬八千歳（この二つの各の字は合の字の誤、八千は八百の誤であらうとの説がある。併し何れにしても混沌たる太古の事で、たゞ傳説のまゝを傳ふるに過ぎないのだから、一々拘泥する要はないと思ふ。）○九州（冀・兗・青・徐・揚・荊・豫・梁・雍の九州、又は九大方面。大體今の支那本部の區域をいふ。併し此時はまだ九州の名目はないから、後人が稱したものである。三皇・五行・九州などの數詞は漢人が神聖視する數である。）○有巢氏（有は有虞氏・有夏・有周などの有と同じく、言ひ添へて語調を整へる字である。「構レ木爲レ巢」の事業によつて名號としたもの。次の燧人氏も亦然り。）○鑽燧（檜のやうな發火性の木片を擦り合せて火を出すこと。キリビを取ること。）○書契（契は契約の義、人の相約するには文字に記し一證とするが故に、文字のことを書契といふ。）○攷（考の古字。）

餘論 太古開闢の歴史が神話的傳奇的のものであることは、いづれの國も變りはない。支那史に於ても亦同じ事。これを事實として皆が皆まで信ずるといふことは無論できぬ。併しながら、この記事によつて、少くとも黄河の沿岸に發達した漢族が、その原始的な生活から、だん〲と文化的生活への歩みを進めて行つたことが想見される。天皇氏・地皇氏・人皇氏といつても、固より一統の君主といふ程のものではなく、天地人三才の思想によつて古を人格化し神聖化したもの又は擬人した者であり、木德・火德などいふのは五行思想から出たものである。また有巢氏・燧人氏などは、その其時々の社會の程度及び生活狀態によつて名づけたもので、社會文化の進步を人格化したもので、これによつて文化の進運と世態を暗示してゐるのである。

畫二八卦一
造二書契一

三　皇

太昊伏羲氏

太昊伏羲氏、風姓。代二燧人氏一而王。蛇身人首。始畫二八卦一、造二書契一、以代二結繩之政一。制二嫁娶一、以二儷皮一爲レ禮、結二網罟一、敎二佃漁一。養二犧牲一、以庖廚。故曰二庖犧一。有二龍瑞一。以レ龍紀レ官、號二龍師一。木德王。都二於陳一。

訓讀 太昊伏羲氏、風姓なり。燧人氏に代つて王たり。蛇身人首なり。始めて八卦を畫す。書契を造つて以て結繩の政に代ふ。嫁娶を制し、儷皮を以て禮と爲す。網罟を結んで佃漁を敎ふ。犧牲を養うて以て庖廚にす。故に庖犧と曰ふ。龍の瑞あり。龍を以て官に紀し、龍師と號す。木德の王たり。陳に都す。

通釋 太昊伏羲氏は風といふ姓である。燧人氏に代つて王となつたが、蛇身人首の（英雄神）であつたといふ。伏羲氏は始めて八卦を作つた。また文字を造つて、從來、繩を結んで約束のしるしにし

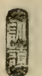
た習慣に代へ、婚姻の法を定めて、一對の皮を以て結納の禮となし、網を製して鳥獸魚類を捕ふることを教へた。また神に供へる犧牲の牛羊豕を養ひ、これを料理して（天地祖先を祭つた）。それ故に庖犧とも稱せられた。また黃河から龍馬（と云つて特異な馬）が現はれたのを瑞兆ありとなして、官職の名には皆龍の字を附け、（その長官を）龍師と稱した。木德の王で、陳に都を定めた。

語釋　三皇（天下を治める三人の王者の意。この書には伏羲・神農・黃帝を指してゐるが、異說には或は黃帝に代ふるに祝融を以てし、或は天皇・地皇・人皇を稱するなど、一定しない。）　○太昊伏羲氏（太は大、昊は明の意。その聖德を日月の明に象つたといふ。伏羲は庖犧の音通であるといふ。其他諸說あつて一定しない。）　○蛇身人首（これには種々の說があるが、要するに、神農氏の「人身牛首」と同じく、傳奇的英雄神の風采を傳へんとしたものに外ならぬ。字面に拘はつて事實を附會することは避けねばならない。）　○八卦（易の八卦。算木の面に表はれる八つの象。即ち☰乾・☱兌・☲離・☳震・☴巽・☵坎・☶艮・☷坤をいふ。之を組合せて六十四卦となり、以て森羅萬象の變化消長する所以を示し、人事の得失死生の理を明かにして、正を守り變に應ずるの敎を寓したものと稱せられる。畫すとは八卦の形を作り出すこと。）　○結繩之政（上代、文字の無かつた頃、物事を記憶し、又は約束の手段として繩を結んでそのしるしにしたことを云ふ。政とは風習といふ程の意。結繩については、昔琉球に行はれたといふ藁算と、中米メキシコの古代にあつたといふQuippu（Quippo）を參考されたし。）　○嫁娶（嫁はヨメにゆくこと。とつぐ。娶はヨメを取ること。めとる。婚姻の禮をいふ。）　○儷皮（儷は對といふ意。一對の皮である。一對の皮を以て結納の禮となし、嫁と婿と互に取りかはす制を定めたことをいふ。當時は狩獵牧畜の時代で、まだ布帛の製作がなかつたから、皮革を以て衣としてゐたのである。）　○網罟（二字ともにアミと訓ず、大なるを網・小なるを罟といふ。一說に、網は魚を捕るアミ、罟は禽獸を捕るアミと。）　○佃漁（佃は鳥獸を狩ること。やまがり。漁は魚類を捕ること。すなどり。）　○犧牲（祭に供へるイケニヘ。それに用ふる牛羊豕を牲といひ、その色の純なるを犧といふ。イケニヘは色の雜らざるを尙ぶ。）　○庖廚（料理所。臺所。庖は肉類を切る所。廚は煮炊きする所。）　○庖犧（庖廚に於て犧牲を料理し以て祭に供するの禮を始めたといふので斯く稱したのである。）　○龍瑞（龍は所謂龍ではない、龍馬といつて馬の八尺以上もあつて、その相の特異なること龍の如きをいふ。當時龍が黃河から出現したが、その背に旋毛の形狀によつて一種の圖が表されてあつた。伏羲氏はその圖を見て八卦を畫したと云はれてゐる。世に「河圖洛書」といふ河圖はこれ。洛書とは禹の時に洛水から出た神龜の背にあつた文のことで、書經洪範の基礎となつたと云はれるもの。瑞は瑞兆めでたいきざし。）　○龍師（師は長官の意。）

天柱折地維缺

當時飛龍氏・潛龍氏・居龍氏などいふ官名を設け、その官の長官を飛龍師・潛龍師・居龍師などと號したといふ。） ○陳（舊注に「州、屬河南」とある。今河南淮陽縣は古の陳州であるが、果して其處かどうかは分らない。）

庖犧崩。女媧氏立。亦風姓。木德王。始作笙簧。諸侯有共工氏。與祝融戰、不勝而怒。乃頭觸不周山。崩。天柱折、地維缺。女媧乃鍊五色石以補天、斷鼇足以立四極。聚蘆灰以止滔水。於是地平天成、不改舊物。女媧氏沒、有共工氏・太庭氏・柏皇氏・中央氏・歷陸氏・驪連氏・赫胥氏・尊盧氏・渾沌氏・昊英氏・朱襄氏・葛天氏・陰康氏・無懷氏。風姓相承者十五世。



庖犧、崩ず。女媧氏立つ。亦風姓なり。木德の王たり。始めて笙簧を作る。諸侯に共工氏あり。祝融と戰ひ、勝たずして怒る。乃ち頭、不周山に觸る。崩る。天柱折け、地維缺く。女媧乃ち五色の石を鍊りて以て天を補ひ、鼇の足を斷ちて以て四極を立て、蘆灰を聚めて以て滔水を止む。是に於て地平かに天成つて、舊物を改めず。女媧氏歿して、共工氏・太庭氏・柏皇氏・中央氏・歷陸氏・驪連氏・赫胥氏・尊盧氏・渾沌氏・昊英氏・朱襄氏・葛天氏・陰康氏・無懷氏有り。風姓相承くる者十五世なり。

【通釋】庖犧卽ち伏羲が崩じて、女媧氏が立つた。これも亦風の姓であり、同じく木德の王である。始めて笙の笛を作つて（音樂の端を開いた）。時に諸侯のうちに共工氏といふものがあつて、祝融と戰つたが、敗けて腹を立て、頭を不周山に打付けた。すると其山忽ち崩れて、天地もひつくり返るばかりになつた。そこで女媧は五色の石を錬り合せて天の破損を塡め繕ひ、大龜の足を斷ち切つてその害を除き、四方の端に柱を立てゝ天を支へ、蘆を焼いた灰をあつめて洪水を堰き止めたので、地も平かに、天も直つて、すべて元の通りに返つたと云ひ傳へられてゐる。（此事は「列子」湯問篇にも見えてゐて、固より傳說に過ぎないが、强ひていへば他に意味を含めた寓言である。卽ち諸侯、兵を起して天下大いに亂れたので、天子、亂賊を平げて、紀綱を立て法度を定め、以て天地の化育を賛け、終に天下の大平を致した意味を寓したものと見ることが出來る）。女媧氏が歿すると、その後には共工氏以下の十四人が立つた。伏羲氏以來、皆風姓を承けつぐこと十五代であつた。

【語釋】笙簧（俗に笙の笛といふもの。笙は匏で作り、其中に十三の管を立て並べた樂器。簧はその管の端に附けた薄金の舌。笙を吹くと其舌が鼓動して音を發するのである。）〇天柱折地維缺（天を支へる柱が折れ、地をつなぐ綱が斷れたといふので、天地がひつくりかへり、此世がつぶれること。蓋し其意は天下の騷亂を比喩したものである。同時にまた當時の漢人の宇宙觀を暗示する。）〇錬㆓五色石㆒（五色は五行に配された青・白・黄・赤・黒の五色。それを君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の五倫に譬へ、その五倫の道を正しうして以て天道の化育の及ばざる所を補うたことを意味する。列子の註に「五常の精を錬して以て陰陽を調和し、日月をして序に順はしむ」とある。）〇斷㆓鼇足㆒（オホガメの足を斷ち切る。亂賊の黨類を切り平げることを意味する。）

神農始敎耕

醫藥交易

○立二四極一（四方の果てを四極といふ。よすみの極を立て直して天を支へたといふこと。新に綱紀を立てたことを意味する。）　○滔水（水のはびこり、溢ること。洪水。共工の反亂に喩へたもの。）　○地平天成（天下泰平に復したことに喩へる）

炎帝神農氏

炎帝神農氏、姜姓、人身牛首。繼二風姓一而立。火德王。斲レ木爲レ耜、揉レ木爲レ耒、始敎レ耕。作二蜡祭一。以二赭鞭一鞭二草木一、嘗二百草一、始有二醫藥一。敎三人日中爲二レ市、交易而退。都二於陳一、徙二曲阜一。傳二帝承・帝臨・帝則・帝百・帝來・帝襄・帝楡一。姜姓凡八世、五百二十年。



炎帝神農氏は姜姓、人身牛首なり。風姓に繼いで立つ。火德の王たり。木を斲りて耜と爲し、木を揉めて耒と爲し、始めて耕を敎へ、蜡祭を作す。赭鞭を以て草木を鞭ち、百草を嘗めて始めて醫藥有り。人をして日中に市を爲し、交易して退かしむ。陳に都し、曲阜に徙る。帝承・帝臨・帝則・帝百・帝來・帝襄・帝楡に傳ふ。姜姓凡て八世、五百二十年なり。

通釋 炎帝神農氏は姜姓で、人身牛首の英雄神であつたが、風姓の後をついで天子に立つた。火德の王である。木を削つてすきをつくり、木を曲げてすきの柄をこしらへ、（農具を製作して）、民に耕作を敎へ、十二月に百物を供へて神を祭り、田畑の恩を報謝した。（かくて漢民族は、牧畜狩獵の時代から一步を進めて農耕の時代に入るのである）。また赤い鞭を以て草木をたゝいてその性質を調べ、多くの草を嘗めて見て（その藥草か毒草かを試し）、かくて始めて病を癒す藥を發明した。（醫道これより興り、濟生の道これより開かれた）。また人民に敎へて、毎日晝間に市を開いて、有無相交換して家に歸るやうにさせた。（經濟・商業の道こゝに始まる）。陳に都したが、後に曲阜に遷つた。その後、帝承以下の七王が立つた。みな姜姓で、合せて八代、五百二十年間であつた。

語釋 炎帝神農氏（木德の伏羲氏に繼いで立つたから、五行相生の序によつて火德に配して炎帝と號し、始めて民に農作を敎へたが故に神農と稱したとの說である。）○耜（音シ。訓スキ。鋤である。後世はその頭に鐵を附けるが、當時はまだ鐵を用ふることを知らず、總て木製であつた。）○耒（音ライ。スキの柄。）○畊（耕の古字。）○蜡祭（蜡は音サ。十二月の祭。歲の終に萬物を合せあつめて神に饗し、田畑の恩に報謝する祭。後に臘といふ。）○以赭鞭鞭草木（赭は赤色。蓋し神農氏は火德の王であるから赤色を用ひたのであらうといふ。草木を鞭つとは、草木をたゝいてその性質を驗すること。一說に草木を打つて刺戟を與へその萌芽を促すことであると。）○交易（物品と物品とを互にとりかへること。所謂物々交換によつて需要供給の關係を充たすこと。）○曲阜（山東濟寧道曲阜縣、孔子の廟のある處。古の炎帝の墟と稱せられてゐる。）

餘論 この記事によつて、漢族が今までの狩獵牧畜の時代を去つて、漸く農耕の時代に入つたこと

用二干戈一
征二不享一

が知られる。而して神農氏は漢族の文化發展の過程に於ける此の農耕時代を人格化したものと見るべきであらう。

人身牛首傳說は、神農氏を農業の神又は農祖と考へると、成程と理解される。それは北支那の農業には牛が多く使用される。卽ち牛耕農業であつた。孔子樣のお弟子に冉耕、字は伯牛といふ人があつた。支那人の名と字とは密接不可離の關係があつて、「耕」といふ名に「伯牛」といふ字をつけたのである。神農氏の「牛首」說は、卽ちその農祖たることを表徵したものであらう。

又神農氏は醫の祖であるから、漢法醫（又は皇漢醫道）は之を祭つて崇めて居る。大阪市東區道修町に神農樣を祀つて居る祠がある。

黃帝軒轅氏

黃帝。公孫姓。又曰、姬姓。名軒轅。有熊國君少典子也。母見大電繞北斗樞星。感而生帝。炎帝世衰、諸侯相侵伐。軒轅乃習用干戈、以征不享。諸侯咸歸之。與炎帝戰于阪泉之野克之。蚩尤作亂。其人銅鐵額、能作大霧。軒轅

作指南車、與蚩尤戰於涿鹿之野、禽之。


訓讀　黄帝は公孫姓なり。又曰く姫姓と。名は軒轅。有熊國の君少典の子也。母、大電が北斗の樞星を繞るを見て、感じて帝を生む。炎帝の世衰へ、諸侯相侵伐す。軒轅乃ち干戈を用ふることを習ひ、以て不享を征す。諸侯咸く之に歸す。炎帝と阪泉の野に戰つて之に克つ。蚩尤、亂を作す。其の人銅鐵の額にして、能く大霧を作す。軒轅、指南車を作り、蚩尤と涿鹿の野に戰つて之を禽にす。


通釋　黄帝は姓を公孫といひ、又姫ともいふ。名は軒轅。有熊の君の少典といふ者の子である。その母が、大きな電光が北斗星の第一星をぐるりと繞つて走つたのを見て、それに感じて姙娠し、生んだのが此の黄帝であるといふ。炎帝神農氏の子孫の徳がだん〳〵衰へて、諸侯が互ひに侵略攻伐するやうになつたので、黄帝は武藝を練習して、服從せぬものを攻め討つたところ、諸侯は悉く從ひなづいて來た。遂に炎帝(の子孫の帝楡)と阪泉といふ處で戰つて、これに克つた。然るに諸侯に蚩尤といふ者があつて反亂を起した。彼れの額は銅鐵のやうに堅く、自由に霧をおこし、(方角の分らぬやうにして敵の軍勢をなやましたので)、黄帝は(これに備へる爲めに)、(常に南を指してゐる)指南車と稱

作舟車

天象律曆算數

制十二律

する車を作り、（之に乘つて方角を明かにしつゝ）蚩尤と涿鹿の野に戰つて、終に之を捕虜にした。

語釋　黄帝（火德の炎帝に繼ぎ立つた故に土德に配し、土の色は黄なるが故に黄帝といひ、軒轅の丘に生れたが故に以て名とした云ふ。）　○少典（史記の索隱によると、少典は諸侯の國號で、人名ではなく、黄帝はその少典侯の後代の子孫であるとの說であろう、さすれば子は子の孫の意とせねばならぬ。一說として存しておく。）　○北斗樞星（北斗星の第一星を天樞といふ。）　○炎帝世衰（こゝに炎帝とあるは神農氏ではない、神農氏の子孫、主として其最後の君たる帝楡罔を指す。下文の「與炎帝戰于阪泉之野」の炎帝も亦然り。）　○干戈（干はタテ。戈はホコ。共に武器をいふ。故に「干戈を交ふ」「干戈に及ぶ」「干戈を以て相見ゆ」などいへば、すべて戰爭する意味である。）　○不享（享はス、ムと訓じ、貢を献上すること。不享は朝命に從つて貢を献じない者。即ち服從せざる者。）　○阪泉（地名、直隸保安縣の東。）　○作大霧（これを神話的に見れば暴風雨神といふべきもの。）　○指南車（常に南方を指す器で、車の上に置いたもの。大霧の中にあつても方向を誤らぬ仕掛をした兵車でなる。その古制は分らないが、唐憲宗の時に始めて其制を定めた。それによるに、車上に樓あり、上に仙人の像を刻み、車は回轉しても仙人の手は常に南を指してゐるもの。一說に磁石を裝置した車であるといふ。）　○涿鹿（地名。今直隸涿鹿縣の東南。）

餘論　黄帝といふ名號の如きは、北支那が黄土質の土壤に富んで居る事と關係のあるものと解釋すべきであらう。

遂代炎帝爲天子。土德王。以雲紀官、爲雲師。作舟車以濟不通。得風后爲相、力牧爲將。受河圖。見日月星辰之象、始有星官之書。師大撓占斗建、作甲子、容成造曆、隸首作算數、伶倫取嶰谷之竹、制十二律筩、以聽鳳鳴。雄鳴六、雌鳴六。以黄鐘之宮、生六律六呂、以候氣應。鑄十二鐘、以和五音。

【訓讀】遂に炎帝に代つて天子と爲る。土德の王たり。雲を以て官に紀し、雲師と爲す。舟車を作つて以て通ぜざるを濟す。風后を得て相と爲し、力牧を將と爲す。河圖を受く　日月星辰の象を見、始めて星官の書有り。師大撓、斗の建を占うて甲子を作り、容成、曆を造り、隷首、算數を作り、伶倫、嶰谷の竹を取つて、十二律の筩を制し、以て鳳鳴を聽く。雄鳴六、雌鳴六。黃鐘の宮を以て六律六呂を生じ、以て氣の應を候ふ。十二鐘を鑄て五音を和す。

【通釋】黃帝は遂に炎帝(の子孫たる帝楡)に代つて天子となつた。土德の王である。時にめでたい雲が現はれたといふので、官名に雲の字をつけ、(その長官を)雲師と云うた。黃帝は舟や車を作つて、今まで交通の叶はなかつた處までも往來達漕の出來るやうにした。また風后といふ人物を得て政治の長官となし、力牧といふ人物を得て軍の大將となし、(以て文武の兩方面を統制した)。嘗て黃河の大魚から圖面を受けたといふ話もある。又日や月や星の位置や運行を觀察して天文の書を作つたが、師の職の大撓といふ人も北斗星の指す方角を窺うて(月日の移動を計り)、十干十二支を配當することを考へた。(これによつて歳時を記すことが出來るやうになつた)。そのほか容成といふ人は曆を作り、隷首といふ人は計算の法を考へ出した。また伶倫といふ人は、嶰谷(地名)の竹を取つて、十二の音調

に叶ふそれ〴〵の笛十二を作り、鳳凰の鳴聲——雄の鳴聲六種（陽聲即ち六律）と雌の鳴聲六種（陰聲即ち六呂）とを聽いて、（笛の音を之に合せて十二の音調を定めた）。即ち黄鐘の宮といふ音を根本として、これより陽聲六律と陰聲六呂とを生じ、（合せて十二律といひ）、これを又十二ケ月に配當して、天氣が、よく之に應ふや否やを考へた。また十二の鐘を鑄て、（一々その音を分つて、それ〴〵十二律に配當し）、いづれも五音の和合するやうにした。

語釋　雲師（當時青雲・白雲などいふ官名を設け、その長官を青雲師・白雲師など稱したこと。恰も伏羲氏の時の龍師の如し。）　○受二河圖一（この河圖は伏羲氏の時の河圖とは別である。一説に、黄帝は夢に兩龍が圖を挾くと見たので、河へ行つて見ると、流を溯る大魚が白圖を泛べたので、黄帝は跪いてこれを受けたといふ。）　○日月星辰（辰は星のやどり。星辰はホシのこと。）　○星官之書（星官は天文官のこと。）　○斗建（斗は北斗星、建はそのケンサキの指す所をいふ。北斗七星は常に回轉して十二ケ月により其の指す所が違ふから、その移動を見て干支の配當を察するのである。）　○甲子（甲は甲乙丙丁云々の十干の首、子は子丑寅卯云々の十二支の首、故に甲と子とを以て十干十二支を代表せしめるのである。十干と十二支とを組合せると六十回にして再び同じ干支に還元する。）　○伶倫（人名。此の故事により、後世、樂人を伶人といふ。）　○嶰谷（地名。大夏の西、崑崙山の北にあるといふ谷。）　○十二律（音樂の十二の調子。陽六を六律、陰六を六呂といひ、合せて十二律といふ。黄鐘（十一月）・太簇（正月）・姑洗（三月）・蕤賓（五月）・夷則（七月）・無射（九月）は六律。大呂（十二月）・夾鐘（二月）・仲呂（四月）・林鐘（六月）・南呂（八月）・應鐘（十月）は六呂。）　○筩（音トウ。竹の筩。筒の類と見てよい。）　○黄鐘之宮（黄鐘は十二律の首、宮は五音の首。故に黄鐘之宮は音の始であり根本である。十二律はこれから生ずる。）　○氣應（天氣の感應。十二律の音と十二ケ月の氣とは互に感應し互に一致するものとされてゐる。その配合は前項に註した。）　○十二鐘（十二律に應じた十二の鐘。）　○五音（五つの音色。宮（喉音）・商（齒音）・角（牙音）・徵（舌音）・羽（脣音）をいふ。徵は音チ。）

餘論　黄帝は、その出現が普通支那史の起源と見なされる程に、支那史上に重要なる地位を占むる

夢遊華胥

騎龍上天

ものて、傳說を基礎として考へれば、彼は支那文化の先驅をなし、支那統一の事業をなした英雄である。隨つて黃帝についての議論も中々多く、或は非實在的人物であるとし、或は西方亞細亞カルデア方面から移住したものであるといひ、諸說紛々として定まらぬが、それは兎に角、本文の記事によつて、黃帝を人文の擁護神として、漢族がこの時代に至つて餘程統整ある社會を作り出し、漸次秩序的に文明的に進み來つたことが知られる。

嘗晝寢。夢遊華胥之國。怡然自得。其後天下大治。幾若華胥。世傳黃帝采銅鑄鼎。鼎成。有龍垂胡髯下迎。帝騎龍上天。群臣後宮從者七十餘人。小臣不得上。悉持龍髯。髯拔。墮弓。抱其弓而號。後世名其處曰鼎湖。其弓曰烏號。黃帝二十五子。其得姓者十四。


嘗て晝寢ぬ。夢に華胥の國に遊び、怡然として自得す。其の後天下大いに治まり、幾んど華胥の若し。世に傳ふ、黃帝、銅を采りて鼎を鑄る。鼎成る。龍有り、胡髯を垂れて下り迎ふ。帝、龍

に騎りて天に上る。群臣後宮、從ふ者七十餘人。小臣は上るを得ず、悉く龍髯を持す。髯拔く。弓を墮す。其の弓を抱いて號く。後世其の處を名づけて鼎湖と曰ひ、其の弓を烏號と曰ふ。黄帝二十五子あり。其の姓を得る者十四。

【通釋】黄帝は嘗て晝寢をしたとき、華胥の國といふ理想郷に遊んで、心うれしく獨り滿足した夢を見た。その後(帝は政治を勵み教化を布いたので)天下がよく治まつて、(夢に見た樂土)華胥の國のやうになつた。傳説によると、黄帝は嘗て銅を採掘して鼎を鑄た。鼎が出來上ると、一つの龍が長いほゝひげを垂れて天から迎へに下りて來た。帝はその龍に跨つて天へ上らうとする。多くの家來や后妃女官たち七十餘人が一緒にお供した。が、身分の低い家來共は上ることが出來ない。で、みんな龍の髯につかまつてゐた。すると髯が拔けた。(と同時に龍は忽ち上天した)。その時黄帝は持つてゐた弓を墮した。(そこで小臣共はそれを帝の形見と思つて)弓を抱いて泣いた。後世その場所を名づけて鼎湖(銅を採り鼎を造つたあとが池のやうにでもなつてゐたのであらうか)といひ、その弓を烏號(烏は泣く聲、オゝとばかりに泣きさけぶ意)と稱した。黄帝には二十五人の子があつたが、その中、姓を得て(諸侯となつたものは)十四人。(その他は皆民間に降つたのである)。

【語釋】華胥之國（「列子」の黄帝篇に出てゐる寓言である。全く無爲自然にして天下泰平であるといふので、其國には師長といふ者なく、其民には慾望なく、生死を超越し、自他を混一し、老子の流を汲んだ列子が、淸虛自然の思想を寓した假託の言である。こゝはそれを引いて黄帝の德化を現はしたものと見ればよい。因みに、この故事から「華胥の國」を理想郷の意に、「華胥の夢」を晝寢の意に用ひる。）○怡然自得（怡然は心の嬉しい樣子。自得は心にかなひて滿足すること。）○世傳云々（この黄帝上天說は偉人の死を偉大にする爲になされた英雄神話の一つの型である。と同時に秦漢時代に道敎を奉ずる方士によつてなされた神仙說でもある。殊に方士は老子の道敎を偉大化せんが爲に之を黄帝に本づくとなして、合して黄老の學と稱へたことを思へば、黄帝の死が後人によつて神仙化されたであらうことは想像に難くない。）○鼎（一種の鍋で、食を熟する器。その形、壺に似て二耳三足あり、大小いろいろある。古は非常に鼎を尊重したもので、帝王の寶器となつた鼎もある。後に詳し。）○胡髯（胡は頷の下に垂れた肉をいふ。そこに生えたヒゲといふので、つまりアゴヒゲのこと。）○後宮（后妃女官など奥向きの貴婦人。）

五帝

少昊金天氏

少昊金天氏、名玄囂。黄帝之子也。亦曰青陽。其立也、鳳鳥適至。以鳥紀官。

【訓讀】少昊金天氏、名は玄囂、黄帝の子なり。亦青陽といふ。其の立つや、鳳鳥適〻至る。鳥を以て官に紀す。

【語釋】五帝（五帝の名については、或は黄帝・小昊・顓頊・帝嚳・帝堯となし、或は黄帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜となすなど諸說あつて一定しない。本書の編者は孔安國の尙書の序によつて斯く定めたのである。）○少昊金天氏（よく太昊の法

を修めたといふので少昊といひ、土德の黃帝に繼ぎ立つたから五行相生の序によつて金德を以て之に配す、故に金天氏と稱すといふ。）○鳳鳥適至（適はタマ〳〵と訓じ丁度の意、瑞鳥鳳凰が丁度世に現はれた。）○以ㇾ鳥紀ㇾ官（官に鳥の名をつけたこと。例へば鳳鳥氏・玄鳥氏など。）

顓頊高陽氏

顓頊高陽氏、昌意之子、黃帝ノ孫也。代ツテ二少昊ニ一而立ツ。少昊之衰フルヤ、九黎亂リㇾ德ヲ、民神雜糅シテ、不ㇾ可カラ二方物ス一。顓頊受ケㇾ之ヲ、乃チ命ジテ二南正ノ重ニ一司ラシメㇾ天ヲ以テ屬シㇾ神ヲ、火正ノ黎ニ司ラシメㇾ地ヲ以テ屬シㇾ民ヲ、使ㇾ無カラ二相侵瀆スル一コト。始メテ作リㇾ曆ヲ、以テ二孟春ヲ一爲スㇾ元ト。

訓讀 顓頊高陽氏は昌意の子、黃帝の孫なり。少昊に代つて立つ。少昊の衰ふるや、九黎、德を亂り、民神雜糅して、方物す可からず。顓頊之を受け、乃ち南正の重に命じて天を司らしめ、以て神を屬し、火正の黎に地を司らしめ、以て民を屬し、相侵瀆すること無からしむ。始めて曆を作り、孟春を以て元と爲す。

通釋 顓頊高陽氏は昌意の子で、黃帝の孫である。少昊に代つて天子に立つた。少昊の政が衰へ

るに及んで、黎氏を名乘る九人の諸侯もまた德を失ひ人心を亂したので、（社會の秩序が亂脈となり）、神と民とが入り交つて一緒くたになり、區別することが出來なくなつた。顓頊は、かうした亂世の後を受けついだので（これを治め正すために）、南正の官の重といふ者に命じて天に關する事業を掌らしめ、これに一切の神事を委ね、火正の官の黎といふ者に地の事を掌らしめ、これに總ての民政を委ね、斯くして神は民を侵すことなく、民は神を瀆すことなく、（兩者の分限を截然と區別させた）。また曆を改め作つて、正月を以て年の始とした。

語釋 顓頊高陽氏（顓は專、頊は正、よく天人の道を專正するが故に名づくと云ふ。高陽に國する故に號とす。）○九黎（同じく黎と名乘る九人の諸侯。）○民神雜糅（糅は入り亂れること、神と民との區別が亂れて雜居すること。神は民に狎れ近づき、民は神を侮つて敬せず、神の道と民の道と互に亂れて筋目の立たぬこと。或はいふ、君臣の分亂れて相攻伐するの寓言であると。）○方物（方は別・物は類。類によつて別つこと。物事を區別する意。）○南正重（南正は官名。注に、南は當に木に作るべし、木正は春官であると―春官は周代の六職の一で、禮社祭祀を掌る職、即ち宗伯の官である―重は人名。）○屬レ神（屬は委ねる意、委任すること。）○火正黎（火正は官名・一說に夏官―司馬の官、軍政を掌る―黎は人名。）○始作レ曆（既に黃帝の時、容成が曆を作つた記事があるから、始の字は改の字にすべしとの說。通鑑綱目に「改作二曆象一」とある。）○以二孟春一爲レ元（孟はハジメと訓ず。孟春は春三ケ月の初めの月、即ち正月。元もハジメ。歲首の意。）

帝嚳高辛氏

茆茨不剪
土階三等

帝嚳高辛氏、玄囂之子、黃帝曾孫也。生而神靈。自言其名。代顓頊而立。居於亳。

【訓讀】帝嚳高辛氏は玄囂の子、黃帝の曾孫なり。生れながらにして神靈なり。自ら其の名を言ふ。顓頊に代りて立つ。亳に居る。

【語釋】帝嚳高辛氏（嚳は極で、道德を行うて至極する意とは白虎通の說く所。高辛は地名、以て號となす。）○玄囂之子（世紀によると、黃帝―玄囂―蟜極―帝嚳となつてゐる。卽ち子は孫の誤。又さうでなければ黃帝の曾孫とはならないわけである。）○神靈（不思議に聰明なこと。）○自言其名（生れた時すぐに我が名を言つたといふのである。）○亳（音ハク。今の河南偃師縣。後の殷の地。）

帝堯陶唐氏

帝堯陶唐氏、伊祁姓。或曰、名放勛、帝嚳子也。其仁如天、其知如神。就之如日、望之如雲。都平陽。茆茨不剪。土階三等。有草生庭。十五日以前、日生一葉、以後日落一葉。月小盡、則一葉厭而不落。名曰蓂莢。觀之以知旬朔。

【訓讀】帝堯陶唐氏は伊祁姓なり。或は曰く名は放勛（勳の古字）なりと。帝嚳の子なり。其の仁は天

の如く、其の知は神の如く、之に就けば日の如く、之を望めば雲の如し。平陽に都す。茆茨剪らず、土階三等のみ。草有り。庭に生ず。十五日以前は日に一葉を生じ、以後は日に一葉を落す。月小にして盡くれば、則ち一葉厭して落ちず。名づけて蓂莢と曰ふ。之を觀て以て旬朔を知る。

【通釋】帝堯陶唐氏（堯は初め陶といふ地に居り、後に唐といふ地に移つたから、併せて陶唐といふ、氏は美稱である。）は姓を伊祁といふ。或說に名は放勛といふと。帝嚳の子である。その惠みの大きいことは、天の萬物を覆ひ育てるがやうに到らぬ隈もなく、その智の秀でたことは、神の靈妙にして測るべからざるが如く、近づいて其の人に接すると、其の德、太陽の威光あるが如く、遠くから其の人を望むと、その風采、雲の盛なるがやうである。平陽に都を定めた。その皇居の樣子は、茅葺の屋根の端も切り揃へず、土の階、僅かに三段に過ぎぬ（といふほど、簡素なものであつた）。（不思議な）草が庭に生えた。每月十五日以前には日に一枚づゝ葉を生じ、十六日以後からは日に一枚づゝ落ちた。もし小の月で（二十九日までしかない時は）殘つた一枚の葉が枯れたまゝ落ちずにあつた。そこでこの草を蓂莢と名づけ、これを觀て月の一日十日を知り、（斯くして曆日を繰つてゐた。）

【語釋】就レ之（近づいて其の人に接する。）○望レ之（遠くから其の人を仰ぎ望む。）○平陽（今山西河東道臨汾縣。）○茆茨（茆はカヤ、茨はカヤを並べて屋根をふくこと。）○土階三

康衢之謠

鼓腹擊壤

等（皇居の階級は玉石で作り九段とするのが後世の制であるが、それを土で作り、而もたつた三段位の低いものであつたといふので、上古の簡素な風俗を表はしてゐる。）○厭（カワクと訓ず、乾の意。ひからびること。枯れること。）○蓂莢（その草につけた名。）○旬朔（旬は十日、朔は一日、ついたち。）

治天下五十年。不知天下治歟、不治歟、億兆願戴己歟、不願戴己歟。問左右不知。問外朝不知。問在野不知。乃微服游於康衢。聞童謠曰、立我烝民、莫匪爾極。不識不知、順帝之則。有老人、含哺鼓腹、擊壤而歌曰、日出而作、日入而息。鑿井而飲、畊田而食。帝力何有於我哉。

訓讀　天下を治むること五十年、天下治まる歟、治まらざる歟、億兆已を戴くを願ふ歟、已を戴くを願はざる歟を知らず。左右に問ふに知らず。外朝に問ふに知らず。在野に問ふに知らず。乃ち微服して康衢に游ぶ。童謠を聞くに、曰く、「我が烝民を立つるは爾の極に匪ざる莫し。識らず知らず、帝の則に順ふ」と。老人あり、哺を含み腹を皷ち、壤を擊つて歌うて曰く、「日出でて作し、日入りて息ひ、井を鑿つて飲み、田を畊して食ふ。帝の力何ぞ我に有らん哉」と。



堯は天下を治めること五十年に及んだが、その間、天下が治まつてゐるのか、治まつてゐないのか、萬民が自分を天子として戴くことを望んでゐるのか、ゐないのか、一切知らなかつた。そこでお側付の者に尋ねて見たが知らない。朝廷の役人たちに問うて見たが分らない。更に民間の或者にも尋ねたが、やつぱり知らない。そこで姿を窶して衆人にまぎれ、人通りのはげしい街に出た。さうして子供の歌ふ流行唄を聞いた。(さうした謠は、その時代に於ける民意を最も露骨に言ひ表はすものであるから、それによつて廣く民意に聽かうとするのである)。歌に曰く「我が烝民を立つるは云々」と。その意は「我等多くの民が、かうして日々を安穩に暮らすことの出來るのは、皆わが堯帝の此の上ない御聖德のお蔭でないものはない。(さう思ふと我々は、それと意識する所はないけれども)、知らず〱のうちに、我が君のお手本に順うてゐるわけである。有難いことだ」といふのである。又老人があつて、何か食べながら腹鼓をうち、地面を叩いて拍子を取りつゝ歌つてゐる。「日出でゝ作し云々」と。どんな意味かといふと、「俺等は夜が明けると野らへ出て働き、日が暮れると家へ入つて休む。水は井戸を掘つて飲み、飯は田を耕して食ふ。我れが働いて我れが生活をする。天子樣のお蔭といふものも、俺等には何の關係もないことだ」といふのである。

語釋　外朝（天子の奥御殿を内朝といふに對して、政治を執る表御殿を外朝といふ、こゝは朝廷の役人といふ意。）○在野（在朝に對して民間に居るものをいふ。所謂草莽の臣。）○微服（微賤の者の服。人目に立たぬやうに賤しい服装をすること。）○康衢（二字ともに四通八達の道路。）○烝民（烝は衆。衆民。）○爾極（爾は堯帝を指す、極は至極の德。）○帝之則（天子の示される手本、天子のなされる事。）○含レ哺（哺は食物を口にくくむこと。）○鼓腹（飽食の狀。）○撃レ壤（足で地面をたゝいて拍子を取ること。鼓腹撃壤と熟して天下泰平のさまにいふ。）

餘論　「天下治るか治らざるか、億兆己を戴くことを願ふか願はざるかを知らず」などいふ處は、いかにも堯らしい王者ぶりが見えて面白く、童子の歌と老翁の歌とは、いはゆる「無爲而化」の政治を謳歌したものであらねばならぬ。「帝の力何ぞ我にあらんや」などは、さながら我々が太陽の恵みを受けつゝもそれを知らざるが如く、堯の至大の德を極言したものである。微服して康衢に出で民意を聞くといふのは、主權を天意に歸し、その天意を民意に代表せしめる支那の政治思想の表現と見るべく、堯は民意の趨勢を察して、自己の政治が民意に適ふかどうかを究めようとしたものであらう。

觀二于華一。華封人曰、嘻、請祝二聖人一。使三聖人壽富多二男子一。堯曰、辭。多二男子一則多レ懼。富則多レ事。壽則多レ辱。封人曰、天生二萬民一、必授二之職一。多二男子一而授二之職一、何

使鯀治水

懼之有。富而使人分之、何事之有。天下有道、與物皆昌。天下無道、修德就閒、千歳厭世、去而上僊、乘彼白雲、至于帝鄕、何辱之有。堯立七十年。有九年之水。使鯀治之。九載弗績。堯老倦于勤。四嶽擧舜。攝行天下事。堯子丹朱不肖。乃薦舜於天。堯崩舜卽位。

訓讀 華に觀る。華の封人曰く、「嘻、請ふ聖人を祝せん。聖人をして壽富にして男子多からしめん」と。曰く、「辭す。男子多ければ則ち懼多し。富めば則ち事多し。壽なれば則ち辱多し」と。封人曰く、「天、萬民を生ずるや、必ず之れに職を授く、男子多くして之に職を授けば、何の懼か之有らん。富みて人をして之を分たしめば、何の事か之有らん。天下道有らば、物と皆に昌え、天下道無くば、德を脩めて閒に就き、千歳世を厭はば、去つて上僊し、彼の白雲に乘じて帝鄕に至らんに、何の辱か之有らん」と。堯立ちて七十年、九年の水あり。鯀をして之を治めしむ。九載績あらず（弗は不と同じ）堯老いて勤に倦む。四嶽、舜を擧ぐ。天下の事を攝行せしむ。堯の子丹朱、不肖なり。乃ち

舜を天に薦む。堯、崩じ、舜、位に即く。

通釋　堯が華の池に遊觀した。その時、華の國境を守る番人が奏して曰ふには「あゝ我が聖人の君を祝福することをお許し下さいませ。——我が君をして生命長く、富み榮えて、男の御子が多くお出來なさるやうに」と。堯帝曰く「それはお斷りする。男の子が多ければ心配事が多く、金持になれば面倒が殖え、長生きをすると、いろんな恥をかく。(そんな事は祈らぬやうにして呉れ)。」番人のいふには「神樣が多くの人間をお造りになるについては、必ず之に職業をお授けになります。されば男の御子が多くても、それ〴〵職業をお與へになれば、何の心配がありませう。又お金持になられても、人々に之をお分ちになれば、何の面倒もありませぬ。天下に道德行はれて(太平の世とならば)、萬物と共にその繁榮を受けさせられ、天下に道德行はれず(亂世とならば)、ひとり德を修めて(御一身を清くせられ)、(隱退して)閑靜無爲の境に身をおかれ、千年も久しく生きて最早此の世が厭になられたならば、去つて仙人となつて天に上り、白雲に乘つて、天帝の在すところへ往かれるなら(いかに長生きをなさつても)何の恥をお掻きになることがございませう。」と。堯は七十年間、天子の位に在つた。その間に九年續いて大洪水があつた。で堯は鯀といふ人に命じて之を治めさせたが、鯀は九年

かゝつても功績が擧らなかつた。堯は年とつて政治に倦んで來た。時に四嶽の官が舜を推薦したから、堯は之に天下の政治を代つて總べさせた。堯の子には丹朱といふのがあつたが、愚か者で（天子の位を繼がせることが出來ないので）、堯は天に奉告して、舜を帝位に薦めた。堯が崩ずるに及んで、舜は愈々天子の位に卽いた。

語釋 觀（遊觀の意。觀を直ちにアソブと讀む說もある。） ○華（地名。今の華州のことだといふ。或は云ふ華山と。華山とは五嶽の一、今陝西省華陰縣にあり、西嶽ともいふ。） ○皆（偕と通じ、トモニと訓む。） ○閒（閑に同じくヒマなこと。閑散の地位、閑地。） ○上僊（僊は仙に同じ。仙人となりて天に上ること。） ○千歲厭レ世（千歲の後の意。年老いて世に飽きたならば。） ○帝鄕（天帝のみやこ。天國。天上。） ○九載（載は年、千載などいふ。） ○四嶽（泰山・華山・衡山・恒山といふ四大山、その祭事及び諸侯の事を掌る官をいふ。） ○攝行（代つて總べ行ふ。） ○不肖（肖は似る。人に似ずとも、親に似ずともいふ、おろかもの。） ○薦ニ舜於天一（天子は天の命を奉じて天下の民を治めるものといふ思想から、民意を得て天子の位に卽くものを天に奉告することを天に薦むといふ。）

餘論 堯と封人との問答は、「莊子」天地篇に見える寓言であるのを、そのまゝ採り入れたものである。

帝舜有虞氏

帝舜有虞氏姚姓。或曰名重華。瞽瞍之子顓頊六世孫也。父惑於後妻、愛

烝々乂不格姦

擧於畎畝

少子象。常欲殺舜。舜盡孝悌之道。烝烝乂不格姦。畊歷山民皆讓畔。漁雷澤人皆讓居。陶河濱器不苦窳。所居成聚。二年成邑。三年成都。堯聞之聰明。擧於畎畝。妻以二女。曰娥黃・女英。釐降于嬀汭。遂相堯攝政。放驩兜。流共工。殛鯀。竄三苗。擧才子八元八愷。命九官。咨十二牧。四海之內。咸戴舜功。

訓讀 帝舜有虞氏は姚性なり。或は曰く、名は重華と、瞽瞍の子なり、顓頊六世の孫なり。父後妻に惑ひ、少子象を愛し、常に舜を殺さんと欲す。舜、孝悌の道を盡し、烝々として乂めて姦に格らざらしむ。歷山に畊せば民皆畔を讓り、雷澤に漁すれば人皆居を讓り、河濱に陶すれば、器、苦窳せず。居る所聚を成し、二年にして邑を成し、三年にして都を成す。堯之が聰明を聞き、畎畝に擧げ、妻はすに二女を以てす。娥黃・女英と曰ふ。嬀汭に釐め降す。遂に堯に相として政を攝す。驩兜を放ち、共工を流し、鯀を殛し、三苗を竄し、才子八元八愷を擧げ、九官に命じ、十二牧に咨る。四海の內、

咸舜の功を戴く。

〔通釋〕帝堯有虞氏（舜の先祖が虞といふ地に居つたから有虞氏といふ、有は有夏・有周などの有と同じく、言ひ添へて語調を整へる字）は、性は姚といふ。一說に名は重華といふと。瞽瞍の子で、顓頊から六代の後の孫である。父の瞽瞍が後妻に溺れて末子の象（卽ち後妻の出）を愛し、舜（卽ち先妻の出）を憎んで、いつも舜を殺さうとしてゐた。けれども舜はよく親には孝、弟には仲よくし、その感化によつて、親や弟をして段々と善に進んで自らその身を修め、大惡人とまではならさなかつた。舜が歷山といふ處で耕作してゐると、その土地の民が舜の德に感化されて、田の境界を讓りあひ、（少しでも我が田を廣く取らうとして境を爭ふのが常であるのに）雷澤といふ處で漁をした時にも、人は皆魚のよく漁れる場所を他に讓りあひ、黃河のほとりで陶器を燒いた時にも、（舜の誠實な働きぶりに感じて）誰も粗末ないびつ物なぞは作らなかつた。（斯樣に到るところ舜の德を慕ひなづいたから）舜の居る所は忽ちに一部落を成し、二年目には町となり、三年目には都となつた。堯は、さうした舜の優れた人柄を聞いて、之を民間から拔いて重く用ひ、二人の娘を妻はせた。娘の名は娥黃・女英といつたが、嬀水の北の地で結婚の式を擧げた。舜は遂に大臣となつて、堯に代つて政治を總べ

た。先づ悪人の驩兜を（崇山に）放逐し、共工を（幽州に）流し、鯀を（羽山に）おしこめ、三苗を（三危に）追ひやつて禁錮し、才能ある八人の良善の臣、九人の溫和の德ある士を擧げ用ひ、（中央政府では）九人の大臣を任命し、（地方では）十二州の長官に政治を問ひはかることにした。そこで天下よく治まつて、皆舜の功德を有難く戴くやうになつた。

語釋　瞽瞍（瞽は目の見えぬもの、瞍は全然目のないもの。頑愚で善惡の辨へないこと盲目のやうだとて、人がから呼んだといふ。或は本當のめくらだとも、又本當の名であるともいふ。）　○孝悌（悌は兄弟相親愛すること。）　○烝々（進むさま。段々と善道に進んでゆくこと。）　○乂不レ格レ姦（乂は治む、姦は姦惡、親や弟が自ら其の身を修養して姦惡に至らないやうに舜がさせたといふ意。）　○苦窳（粗末で形のゆがむこと、いびつ。）　○畎畝（田畑轉じて田舍又は民間などの意。）　○釐降（釐はヲサムと訓み、こゝは婚姻の禮をとゝのへること、降はクダスで、王女を臣下に嫁入らせること。降嫁。）　○嬀汭（嬀は河の名、汭は河の名。）　○驩兜・共工・鯀・三苗　驩兜は人名。共工は官名、百工を掌る。官を以て世族としたのであらう。鯀は前に出づ。三苗は種族の名、所謂苗族で、今湖南貴川邊に最も多いといふ。この四人は當時四凶といつて國家の害をなした巨魁であつたといふ。　○放（放逐することであるが、一定の場所に置いて他行を許さぬこと。）　○流（水の流るゝ如く遠方に逐ひ拂ふこと。）　○殛（押込めて苦しめること。）　○竄（遠方に流しものにしてそこに禁錮すること。以上の四刑は相似たものであるが、輕重の順をいへば殛が最も重く以下竄・放・流となり、流が最も輕いとせられる。）　○才子（才智の秀でた人。）　○八元（元は善の意、八人の善良の士。）　○八愷（愷は和の意、八人の溫和の德ある人。）　○九官（九人の國務を掌る大臣、後の九卿といふに當る。禹を司空となし、棄を后稷となし、契を司徒となし、皐陶を士となし、垂を共工となし、益を虞となし、伯夷を秩宗となし、夔を典樂となし、龍を納言となしたことを指す。）　○十二牧（牧は牧民で民を養ふ意、地方長官をいふ。天下を十二州に分ち、その各州の長官を指す。）　○咨（ハカルと訓じ、諮に同じく、はかり問ふ、相談する、諮詢。）

彈五絃之琴、歌南風之詩、而天下治。詩曰、南風之薰兮、可以解吾民之慍

兮。南風之時兮、可以阜吾民之財兮。時景星出卿雲興。百工相和而歌曰、卿雲爛兮。禮縵々兮。日月光華。旦復旦兮。舜子商均不肖。乃薦禹於天。舜南巡狩、崩於蒼梧之野。禹卽位。

訓讀 五絃の琴を彈じ、南風の詩を歌ひ、而して天下治まる。詩に曰く、「南風の薫ぜる、以て吾が民の慍を解く可く、南風の時なる、以て吾が民の財を阜にす可し」と。時に景星出で、卿雲興る。百工相和して歌うて曰く、「卿雲爛たり、禮縵々たり。日月光華あり、旦復た旦」と。舜の子商均不肖なり。乃ち禹を天に薦む。舜南に巡狩し、蒼梧の野に崩ず。禹、位に卽く。

通釋 舜は五絃の琴をひき、南風の詩を歌うて民に臨んだが、天下はよく治まつた。その詩の意味は「南の風がそよ〳〵と長閑に吹きわたる。それは我が民の心を和らげて不平不滿を解き去るであらう。南の風が程よい時々に吹いて來る。それは萬物を養ひ育てゝ、吾が民の生活を裕かにするであらう」といふのである。當時めでたい星が表はれ、めでたい雲が湧き起つた。百官これを見て、舜の詩に和せて歌を歌つた。その意は「めでたい雲が美しく輝き映える。朝廷の儀式制度もあの雲のやうに

立派に盛んだ。日も月も華やかに光りかゞやく。さうした泰平晴明の世が、毎日々々と續いて盡きる時もない」といふのである。舜の子商均も亦暗愚で（舜の後をつぐことが出來なかつた）。そこで舜は禹を天子にしようと天帝に奉告した。それから舜は南方の國々を視察して歩いたが、蒼梧といふ處で崩じた。禹が代つて位に卽いた。

語釋　五絃之琴（五すぢの糸を張つた琴。）○南風之薰（南風は和らかにして長閑で五穀を生長せしめる。薫はそよ〳〵と爽かに吹きわたること。薫風といひ「風かをる」ともいふ。）○慍（不平不滿の結ばれて解けないこと。心にムツとすること。）○南風之時（五風十雨といふやうに程よい時節々々に吹くこと。）○阜ニ吾民之財一（阜は厚、ゆたか、財は財産・生活の道。）○景星（めでたい兆を表はす星、徳星ともいふ。一説に大きな星。）○卿雲（慶雲に同じ、めでたい兆の雲、景星と共に聖王の瑞祥だといふ。）○百工（天の工即ち天の仕事を人が代つて行ふといふので百官のこと、工は官人をいふ、百工はもろ〳〵の細工といふ意もあるが、こゝは違ふ。）○爛（あやあるさま、光り輝くさま。）○禮縵々（朝廷の威儀禮式がよく整うて美しく盛なこと。一説に「糺縵々」で、慶雲が渦卷きたなびいたさまをいふと。）○旦復旦（旦は朝、毎朝々々とつゞくこと、今日も明日も。）○巡狩（狩は守で天子が諸侯の守る所を巡りあるいて政治のよしあしを檢分すること。）○蒼梧（今湖南・廣西の境といふ。）

餘論　堯舜二帝以後の歴史は、上古の支那の中でも漸く信ぜられる樣になつたので、孔子樣も書經を修むるや、二帝より始めて、書經の初めは堯典、舜典である。又此二帝は特に儒教の方で尊ぶ所の二大聖天子で、殆んど理想化されて居る。中華民國の今日になつても、なほ支那人が天子、其他の主權者の頌德には二帝に比していふことが多い。

過家門不入

又今の中華民國の初めに支那で國定となつた國歌は、帝舜の故事から取つたもので、「卿雲爛兮、糺縵々兮。日月光華。旦復旦兮。日月光華。旦復旦兮。」といふものである。

夏后氏

家后氏禹姒姓。或曰名文命。鯀之子、顓頊孫也。鯀湮洪水。舜擧禹代鯀。勞身焦思、居外十三年、過家門不入。陸行乘車、水行乘船、泥行乘橇、山行乘檋。開九州、通九道、陂九澤、度九山、告厥成功。舜嘉之、使率百官行天下事。舜崩、乃踐位。

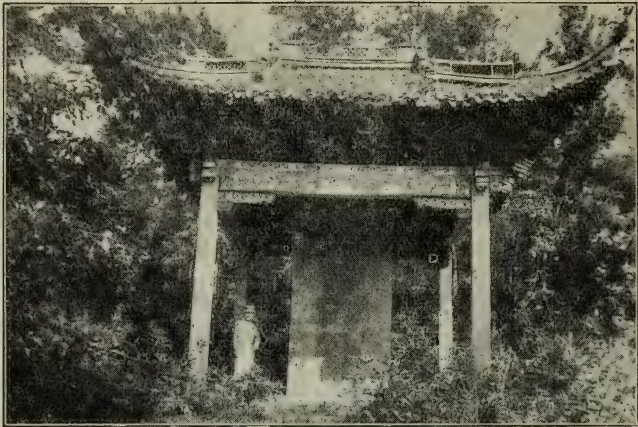
訓讀 夏后氏禹は姒姓なり。或は曰く名は文命と、鯀の子、顓頊の孫なり、鯀、洪水を湮ぐ。舜、禹を擧げて鯀に代らしむ。身を勞し思を焦し、外に居ること十三年、家門を過ぐれども入らず。陸行には車に乘り、水行には船に乘り、泥行には橇に乘り、山行には檋に乘る。九州を開き、九道を通じ、九澤に陂し、九山を度り、厥の成功を告ぐ。舜、之を嘉し、百官を率ゐて天下の事を行はしむ。舜崩

じ、乃ち位を踐む。

通釋 夏后氏（夏は禹王が始めて封ぜられた地の名であるが、後に天下を有するに及んで其の國號とした。后は君。故に夏后は夏の君といふ意）は、姓は姒、名は或は文命ともいふと。鯀の子で、顓頊の孫に當る。鯀は堯の時に洪水を防ぎ止めようとしたが（效果がなかつたので）、舜はその子の禹を擧げて鯀に代らせた。そこで禹は、體を苦しめ心を痛め、十三年間も外へ出てゐて、その間偶〻我が家の前を通つても、立ち入ることもなかつた。陸を行くには車、水を渡るには船、沼地を行くには橇、山地を行くにはかんじきに乘つて天下を巡り步いた。さうして九州を開拓しその九州の道路を通じ、沼澤に堤防を築き、山岳を測量し、遂にその完成したことを舜帝に奏上した。舜帝はこの大なる功績を褒めて、禹に百官をひきすべて天下の政務を執り行ふやうにさせた。やがて舜帝が崩じると、禹は帝の位を踐んで天子となつた。

語釋 檋（「くつ」の裏に錐のやうなものを打ちつけて山を登るとき滑つたり轉んだりしないやうにしたもの、かんじき。） ○九州（冀州・兗州・青州・徐州・揚州・荊州・豫州・梁州・雍州をいふ。これは今の支那本部のことであるが、必ずしも支那本部全體といふのではなく、たゞ多くの國々と見ればよい。九といふ數を拿んで附けたのである。） ○九道・九澤・九山（以上の九州の道路・沼澤・山岳といふ意、これも九といふ數に拘はる必要はない。） ○厥（其の古字。）

餘論 この洪水は、世界の多くの民族の說話に見える洪水神話例へば「ノアの洪水」の類とは、やゝ



大禹陵

趣を異にし、黄河の地理的現象が背景となつて出來た國民的說話と思はれる。

聲爲律、身爲度、左準繩、右規矩。一饋十起、以勞天下之民。出見罪人、下車問而泣曰、堯舜之人、以堯舜之心爲心。寡人爲君、百姓各自以其心爲心。寡人痛之。

訓讀 聲は律と爲り、身は度と爲り、準繩を左にし、規矩を右にす。一饋に十たび起ちて以て天下の民を勞ふ。出でて罪人を見れば車を下り問うて泣いて曰く、「堯舜の人は堯舜の心を以て心と爲せり。寡人君と爲りてより、百姓各〻自ら其の

心を以て心と爲す。寡人之を痛む」と。

【通釋】禹の言ふことは音樂の調子に協つたやうに正しく、行ふことは尺度にあてはめたやうに道理に合ひ、一言一行、誠に聖人の德である。その身を持するの謹嚴なことは、恰も規矩準繩を左右に置いてそれに合せたやうであつた。（身を以て範を示し、率先して下を率ゐたのである）。又政治に熱心で、（何か申出るものがあれば）一度の食事中に何遍も起つて之を聽くといふやうにして、民の心を勞り慰めた。外出して罪人にでも行き遇ふと、車から下りてその罪の次第を尋ね、泣いて言ふには、「昔、堯舜の世の民は、皆堯舜の心を理解し、堯舜と同じく正しく美しい心であつたから（罪を犯すやうなものは無かつたが）、自分が天子となつてからは、萬民が自分の心を理解してくれず、銘々身勝手な心でゐるから（そのやうに罪を犯すやうにもなるのである）。（畢竟は自分の德の足らぬのによるのであるが）、自分は之を遺憾に思ふ」と。

【語釋】律（音律、音樂の調子。）○度（尺度、ものさし。）○準繩（ミヅモリとスミナハ。土地の高低を量る器と、物の曲直を量る器。）○規矩（ブンマハシとサシガネ、物の圓みを量る器と、角を量る器。）
一饋十起（饋は食事すること、十は數の多いこと。）○寡人（寡德の人といふ意、君王諸侯が自らを謙遜していふ語。）

儀狄作酒

生寄也死歸也

古有醴酪。至禹時、儀狄作酒。禹飲而甘之、曰、後世必有以酒亡國者。遂疏儀狄、收九牧之金、鑄九鼎。三足象三德。以享上帝鬼神。會諸侯於塗山。執玉帛者萬國。禹濟江。黃龍負舟。舟中人懼。禹仰天歎曰、吾受命於天、竭力而勞萬民。生寄也。死歸也。視龍猶蝘蜓。顏色不變。龍俛首低尾而逝。南巡至會稽山而崩。

訓讀 古、醴酪有り。禹の時に至り、儀狄、酒を作る。禹、飲んで之を甘しとして曰く、「後世必ず酒を以て國を亡す者有らん」と。遂に儀狄を疏んず。九牧の金を收めて、九鼎を鑄る。三足は三德に象る。以て上帝鬼神に享す。諸侯を塗山に會す。玉帛を執る者萬國。禹、江を濟る。黃龍、舟を負ふ。舟中の人懼る。禹、天を仰ぎ歎じて曰く、「吾命を天に受け、力を竭して萬民を勞す。生は寄なり。死は歸なり」と。龍を視ること猶蝘蜓のごとし。顏色變ぜず。龍、首を俛し尾を低れて逝る。南巡して會稽山に至つて崩ず。

通釋　古くから甘酒はあつたが、禹の代になつて、儀狄といふ者が始めて酒を作つた。禹はその酒を飲んで、これは甘いと思つて曰ふには、「しかし後の世に必ずこの酒のために國を亡ぼす者が出來るであらう。(不都合なものを作り出したものだ)」と。遂に儀狄を遠ざけて寄せつけなかつた。また金國九ケ國の長官から献上させた金で九つの鼎を鑄造した。その足を三本にしたのは剛・柔・正直の三徳にかたどつたのである。禹はこれを天の神や祖先の靈を祭る用に供した。(爾來、夏、殷、周の三代相傳へて國家の重寶とした九鼎は即ちこれである)。その後、諸大名を塗山に召集したところ、大名は玉を持ち、小名は帛を持ち、これを進物として來り會する者が一萬餘の多きに及んだ。(これによつて禹の威徳の盛さが知られる)。禹が揚子江を渡つた時である、黄色の龍があらはれて、舟の底に入つてひつくりかへさうとしたので、乘合はした者は皆ふるへ上つた。禹は天を仰いで歎いて曰ふには、「吾は天の命によつて(天子となり)、あらん限りの力を盡して萬民を勞り安んじてゐる。(何物も吾を害する筈はない。龍だとて何を恐るゝことがあらう)。且つや人間の此の世にあるは、ほんの一時の假の住ひのやうなもの。死ぬのは故郷に歸るも同然だ。(たとひ龍が舟を覆へしたとて恐るゝことはない)」と言つて、龍を守宮か何ぞのやうに見下して、顏色一つ變へなかつた。(龍もこれに感じたか)、

吾君之子也

首を下げ尾を低れて逃げ去つたといふ。禹はそれから南方の國々を巡つて會稽山に至つて崩じた。

語釋 醴酪（あまざけ。）　○疏（疏外すること。遠ざけて親しまないこと。）　○九牧（九州の長官。牧の意は前に出づ。堯の時までは全土を分つて九州としたが、舜の時に十二州となし、禹が洪水を治むるに及んで再び堯の時と同じく九州としたのである。）　○九鼎（鼎のことは黄帝の條下に述べた。この九鼎は以後夏殷周の三代相傳へて傳國の重器となつたものである。殊に周代には祖廟の大呂といふ大鐘と並べて九鼎大呂と稱し、非常に貴重なものとなつた。）　○三德（正直・剛・柔の三をいふ。書經洪範篇に「三德・一曰正直、二曰剛克、三曰柔克」とある。克は治の意、剛克は剛を以て柔を治むるをいひ柔克は柔を以て剛を治むるをいふ。）　○享（祭の禮物を神に供へること。禮物を供へて神を祭ること。）　○鬼神（鬼は我國でオニと訓じて恐るべき怪物の意に解くが本義ではない。本義は人の死せるタマシヒをいふ。鬼神は人の魂の神として祭らるべきもの即ち祖先の靈や山川社稷の神の類。）　○塗山（山名。今の安徽懷遠縣の東南といふ。）　○執玉帛（玉は公侯伯子男五等の諸侯の持つ玉、帛は諸侯に附屬する小國の君の持つ絹布。諸侯及び附屬の君が天子に謁する時は玉帛を進上するのが禮であつた。執は執り持つことで持參して献上する意。）　○江（漢文で單に江といへば揚子江、河といへば黄河の意である。併しこゝの江は史實としては揚子江でなからうといふ説もある。）　○負舟（舟を背に載せることで、舟底に入つて舟を持ち上げて顛覆させうとするをいふ。）　○勞萬民（勞はネギラフと訓む。いたはり慰めること。）　○生寄也死歸也（寄は寄留・寄宿の寄の如く一時の假の宿りである。人の此の世に於けるや僅かに五十年、恰も客の外より來つて一時寄寓するが如くである。而して人に死なき能はざるは、宛ら客が家に歸らざるを得ざるが如く、必然また當然のことであると。）　○蝘蜓（とかげ。やもり。）　○俛（音フ。俯と同じく、うつむくこと。ベンの音の時は勉に通用する。）　○會稽山（今浙江省會稽道紹興縣。）

餘論 禹王の治水は、大に後の支那人をして感謝の心を盛ならしめたもので、支那の別名に禹域、禹甸などあるは、即ち此心をあらはしたものである。

子啓、賢能繼禹道。禹嘗薦益於天。謳歌朝覲者、不之益而之啓。曰吾君之子也。啓遂立。有扈氏無道。啓與戰于甘。啓崩。子太康立。盤遊弗返。有窮后

田一成 衆一旅

羿立其弟仲康、而專其政。羲和守義不服。羿假王命、命胤侯征之。仲康崩。子相立。羿逐相自立。嬖臣寒浞又殺羿自立。相之后、有仍國君女也。方娠。奔有仍、而生少康。其後少康有田一成、有衆一旅。因夏舊臣靡、擧兵滅浞、而復禹之績。

訓讀 子の啓、賢にして能く禹の道を繼ぐ。禹嘗て益を天に薦む。謳歌朝覲する者、益に之かずして啓に之く。曰く「吾が君の子也」と。啓遂に立つ。有扈氏、無道なり。啓、與に甘に戰ふ。啓崩ず。子太康立つ。盤遊して返らず、有窮の后羿、其の弟仲康を立てゝ、其の政を專にす。羲和、義を守つて服せず。羿、王命を假り、胤侯に命じて之を征せしむ。仲康崩ず。子相立つ。羿、相を逐うて自立す。嬖臣寒浞、又羿を殺して自立す。相の后は、有仍國の君の女なり。方に娠す。有仍に奔つて少康を生む。其の後、少康、田一成有り、衆一旅有り。夏の舊臣靡に因り、兵を擧げて浞を滅し、禹の績を復す。

通釋 その子の啓は賢人で、みごとに禹の政道を繼いで行つた。（それで人民は皆その德に服してゐ

た)。これより先、禹は前例に從つて益といふ人(舜の時の九大臣の一人)を天子とすべく天に奉告したが、人民は益を美め稱へないで、啓を讚美し、益に參內しないで、啓に參內した。さうして「これこそ吾が先帝の太子にまします。(先帝の後を繼がるゝ方は此の人の外にはない)」といふのであつた。かくて啓は天子の位に卽いた。時に有扈の君が道にそむく行ひが多かつた。そこで啓は之と甘といふ所で戰を交へ、(遂にこれを滅した)。やがて啓が死んで、子の太康が位に卽いた。ところが此の太康は諸方を遊樂して歩くことが好きで、都を外にして永らく還らなかつたので、有窮國の君の羿といふのが、太康の弟の仲康を位に卽けて、夏の政を我儘勝手に行つた。此の時、羲氏と和氏の二人のみは義を守つて服從しなかつたので、羿は仲康の命であるといつはつて胤國の太守に命じて二人を征伐させた。その後仲康が死んで、其の子の相が位に卽いたが、後に羿は相を放逐して自ら天子の位に登つた。ところが羿の寵臣の寒浞といふ者が、また羿を殺して位を奪つた。さて相(先に羿に放逐された夏の血統の最後の君)の皇后は有仍國の君の娘であつた。當時姙娠してゐたので、さとの有仍國に逃げ歸つて、そこで少康といふ子供を生んだ。其の後少康は生長して、方十里程の土地と五百人ばかりの兵隊を持つやうになつたので、夏の舊臣の靡といふ者に相談して、兵を起して寒浞を滅し、

夏の國を回復して、先祖の禹の事業を繼ぐことが出來た。

〔語釋〕謳歌（その德望をほめたゝへて歌ひ詠ずること。）○朝覲（朝廷へ出て天子にお目見えすること。參內。）○有扈氏（國名。今の陝西鄠縣の地にあつた。）○盤遊（盤は般と通じて、樂しむこと。遊樂に耽ることをいふ。書經の五子之歌に「盤遊無レ度」とある。）○有窮后（有窮は國名。后はキミと訓む。君のこと。）○專二其政一（專はホシイマヽにすること。我儘勝手にすることをいふ。）○羲和（羲と和との二氏。堯の時に天文官に任ぜられ、代々その職を襲ぎ、合して羲和といふ。書經の胤征篇には「仲康肇めて即位し、胤侯に命じて六師を掌らしむ。羲和その職を廢し、酒に沈亂し、天紀を擾す。因て胤侯に命じて之を征せしむ」とあつて、本書の記事とは一致しない。古來いろ〱議論のある所である。）○嬖臣（身分賤くして君の寵愛を得た臣。お氣に入りの家來。）○相之后（この后は皇后の意。）○有仍國（今の山東濟寧縣にあつた國。）○田一成衆一旅（一成は方十里の地。一旅は五百人の兵。皆極めて貧弱なることを意味する。）○績（いさをし。業績、事業。）

御龍氏

自少康以來、歷王杼・王槐・王芒・王泄・王不降・王扃・王廑、至王孔甲。好鬼神、事淫亂、夏德衰。天降二龍。有雌雄。陶唐氏之後、有劉累者。學擾龍、以事孔甲。賜之姓、曰御龍氏。龍一雌死。潛醢以食孔甲。復求之。累懼而逃。

〔訓讀〕少康より以來、王杼・王槐・王芒・王泄・王不降・王扃・王廑を經て王孔甲に至る。鬼神を好み、淫亂を事とし、夏の德衰ふ。天、二龍を降す。雌雄有り。陶唐氏の後に劉累といふ者有り。龍を擾らすことを學び、以て孔甲に事ふ。之に姓を賜ひて御龍氏と曰ふ。龍一雌死す。潛に醢にして以て孔甲

に食はしむ。復た之を求む。累、懼れて逃る。

通釋 少康の後、杼・槐・芒・泄・不降・扃・廑と後をついで孔甲に傳へた。孔甲は無暗に鬼神を信じて迷信に陷り、又婦人に溺れて（政治を怠つたので）、禹王以來 夏の德も漸くすたれて來た。時に天の支配の下に雌雄二つの龍が現はれたが（孔甲は之を養ふ方法を知らない）。こゝに堯帝の子孫に劉累といふ者があつて、龍を手なづけ馴らすことを學び知つてゐたので、孔甲に仕へて其の二龍を預ることになつた。そこで孔甲は累に姓を御龍氏（龍を自由に扱ふ人の意）と賜はつた。しばらくして雌龍の方が死んだので、累は内緒で之をしほからに料理して孔甲に食はせた。孔甲は（龍とは知らず、その味のよさに）もう一度食ひたいと求めたが、（もう差し上げることが出來なかつたので）、發覺することを恐れ、遂に逐電してしまつた。

語釋 天降二龍（舜の時に董父といふ者があり能く龍を畜ひ馴らすといふので帝に事へたが、帝は之に豢龍―龍を養ふ―といふ姓を賜つたことが、左傳昭公二十九年に見える。さすれば龍を養ひ馴らすといふやうな事は、古くから言はれてゐたものと思はれる。史記には劉累まこの豢龍氏に龍を馴らすことを學んだものだとある。一説に、こゝの龍は龍馬の意、馬の高さ八尺なるものを龍といふ、それであると。） ○陶唐氏（帝堯陶唐氏のこと、前に出づ。） ○擾（音ゼウ。馴らすこと。宋史の祭五龍樂章に「欲二豢擾一兮、無二董與一レ劉」とあるのは、前項の董父と劉累とを指したものである。） ○醢（音カイ。シシビシホと訓ず。乾肉をきざんで麹・鹽・酒などに漬して製したもの。シホカラの類である。肉醬。）

孔甲之後、歷二王皐・王發・王履癸一、號シテ爲レス桀ト。貪虐ニシテ力能ク伸ブ二鐵鉤索一ヲ。伐ツ二有施氏一ヲ。有

肉山酒池

施以末喜女焉。有寵所言皆從。爲傾宮瑤臺殫民財。肉山脯林、酒池可以運船、糟堤可以望十里。一鼓而牛飮者三千人。末喜以爲樂。國人大崩。湯伐夏。桀走鳴條而死。夏爲天子一十有七世、凡四百三十二年。

【訓讀】孔甲の後、王皐・王發を歴、王履癸、號して桀となす。貪虐にして力能く鐵鉤索を伸ぶ。有施氏を伐つ。有施、末喜を以て女す。寵有り、言ふ所皆從ふ。傾宮瑤臺を爲り、民の財を殫す。肉山脯林、酒池は以て船を運す可く、糟堤は以て十里を望む可し。一鼓して牛飮する者三千人。末喜以て樂と爲す。國人大いに崩る。湯、夏を伐つ。桀、鳴條に走つて死す。夏天子たること一十有七世、凡て四百三十二年なり。

【通釋】孔甲の後、王皐・王發を歴て王履癸となる。王履癸は、一名桀と稱せらる。（桀はアラシと訓じて凶暴の意。この王、多くの人をあやめ殺したから後世桀と稱したといふ）。性質貪虐で、腕力強く、鐵の鎖を引きのばす程であつた。曾て有施氏といふ諸侯を攻めたところが、有施は末喜といふ美人を獻じた。桀は末喜を寵愛して、それの言ふ事は何でも聽き入れた。即ち玉の宮殿樓臺などを造つて、

人民の財産を絞り盡した。肉は山と積み、乾肉は林と掛け、酒を湛へた池には船をこぎまはることが出來、酒の糟は堤のやうに盛られて、見渡したところ十里(假に六町一里として)もあらうかと思はれる位。それで一たび合圖の太鼓を打つと、三千の宮人が、牛が水を飲むやうに、酒池に口をつけがぶ、、〴〵と飲むのである。(これは一度の酒宴に大酒を飲みに來るものが三千人もあるといふ意味だと解する說もある。「三千人」は大數を擧げたので、三千とは限らない。弟子三千人、食客三千人などいふも皆同じい)。末喜はそれを見て樂とした。(こんな風だから國民は愛憎をつかして)、恰も山の崩れるやうに、どん〳〵王室を離れて行つた。とう〳〵湯が夏を攻めて來た。桀は鳴條といふ處へ逃げたが、そこで死んでしまつた。(崩とはいはずして死といつたのは、貶したのであらう)。夏が天子たることは十七代、すべてが四百三十二年であつた。

語釋 貪虐(慾ぶかくして人をしひたけ苦しめること。) 〇鐵鉤索(鉤は曲つたかね、索は繩(鐵のくさりをいふ。)) 〇女焉(焉はコレニ、コレヲ、コヽニなどの意を有ち、又文章にスワリをつける助辭であるが、多くは讀まない。) 〇傾宮瑤臺(傾は瓊で赤色の玉、瑤は美玉。臺は展望のきくやうに造つた物見のうてな。つまり玉をちりばめた御殿や高臺のこと。) 〇肉山脯林(脯は乾した肉、ほじし。) 〇牛飲(牛の如く飲むといふ意、よく馬食と並べていふ語。) 〇國人大崩(崩とは山が崩れて支へやうのないやうに民心が天子を離れて國が亂れること。) 〇鳴條(山西安邑の西。)

殷王成湯。子姓、名履。其先曰契。帝嚳子也。母簡狄、有娀氏女。見玄鳥墮卵

德及二禽獸一

左左。欲右右。不用命者、入吾網。諸侯聞之曰、湯德至矣。及禽獸。伊尹相湯伐桀、放之南巢。諸侯尊湯爲天子。

訓讀 人をして幣を以て伊尹を莘に聘せしめ、之を夏桀に進む。用ひず。尹復た湯に歸す。桀、諫者關龍逢を殺す。湯、人をして之を哭せしむ。桀怒り、湯を召して夏臺に囚ふ。已にして釋さるゝを得たり。湯出でて網を四面に張りて之を祝するもの有るを見る。曰く、「天より降り、地より出で、四方より來る者は、皆吾が網に罹れ」と。湯曰く、「噫、之を盡せり」と。乃ち其の三面を解き、改め祝して曰く、「左せんと欲せば左せよ。右せんと欲せば右せよ。命を用ひざる者は、吾が網に入れ」と。諸侯之を聞いて曰く、「湯の德至れり、禽獸に及ぶ」と。伊尹、湯に相として桀を伐ち、之を南巢に放つ。諸侯、湯を尊んで天子と爲す。

通釋 湯は使を遣はし進物を持たせて、莘といふ處にゐた賢人伊尹を迎へさせ、之を夏の桀王に推薦した。（それは桀王のお側において其の亂行を直させよう爲めであつた）。然るに桀は伊尹を用ひない。そこで伊尹は復た湯の許へ戻つて來た。（湯が後に大をなしたのは此の伊尹の輔佐によることが多

い)。その中に桀は、自分を忠諫した關龍逢を殺してしまつた。それと聞いて湯は使をやつて之を弔はせたところ、桀は怒つて湯を呼び出し、夏臺といふ獄屋に押しこめた。が兎角してゐるうちに湯は釋放された。」ある日、湯が外へ出たところが、獵師が網を四方に張つて鳥を捕るべく禱つてゐた。その詞に曰く、「天から降りて來たものも、地から飛び立つものも、東西南北の四方から來るものも、すべての鳥は皆この網に罹りまするやうに」と。湯は之を見て、「それでは鳥の逃げ場がない。あまりに酷い仕方だ」と言つて、その三方の網を解き一方ばかりにして、改めて禱つていふには「左へ行かうと思ふ者は左へ行け、右へ行かうと思ふものは右へ行け。(どこへでも行きたい處へ勝手に行け)。たゞ天命に順はないものだけはこの網にかゝれ」と。諸大名これを聞いて、「湯の惠みは(人間のみならず)鳥獸にまで行き渡る。偉いもんだ」と感激した。(さうして愈々湯の德に歸服するやうになつた)。伊尹が湯の宰相となつて輔佐し、(とう〳〵桀の暴政を見るに忍びず)、之を攻め伐つて南巢(安徽)といふ處へ追放した。そこで諸侯は(湯に天命が歸したものと認め)湯を尊んで天子とした。

語釋　幣(人に贈る進物、幣帛。)　○聘(禮を以て人を招きよせる。)　○莘(伊尹の耕作してゐた所謂有莘之野。今の河南陳留縣の東に當る。一說に陝西郃陽縣の東南有莘里であると。又一說に山東曹縣の北有莘城と。)　○哭(大きな聲をあげて悲しみ泣く、支那ではそれが死者を弔ふ禮でもあつた。)　○夏臺(夏の牢獄の名。)　○祝(祈禱する。)　○盡レ之矣(盡レ之は餘り十分すぎて備れゝがないといふ意、矣は斷定の助辭。おき字として讀まない。)

六事自責

○南巢（地名。今安徽巢縣。）

大旱七年。太史占之、曰、當以人禱。湯曰、吾所爲請者民也。若必以人禱、吾請自當。遂齋戒剪爪斷髮、素車白馬、身嬰白茅、以身爲犧牲、禱于桑林之野。以六事自責曰、政不節歟、民失職歟、宮室崇歟、女謁盛歟、苞苴行歟、讒夫昌歟。言未已、大雨方數千里。

訓讀 大いに旱すること七年。太史之を占ひて曰く、「當に人を以て禱るべし」と。湯曰く、吾が爲に請ふ所の者は民なり。若し必ず人を以て禱れとならば、吾請ふ自ら當らん」と。遂に齋戒し、爪を剪り髮を斷ち、素車白馬、身に白茅を嬰け、身を以て犧牲と爲し、桑林の野に禱る。六事を以て自ら責めて曰く、「政、節あらざる歟。民、職を失へる歟。宮室崇き歟。女謁盛なる歟。苞苴行はるゝ歟。讒夫昌なる歟」と。言未だ已まざるに、大いに雨ふること方數千里。

通釋 非常なひでりが七年も續いた。天文官が之を占つて曰ふには、「このひでりは人身御供を以て

祈らなければ止みませぬ」と。湯の曰く、「余が雨乞ひをするのは、人民の爲にとてである。(然るにその民を一人たりとも犧牲にすることが出來ようか)。若しどうしても人を供へて禱らなければならぬのならば、余自身其の人身御供にならう」と。遂にものいみをして心身を清め、爪を切り髮を落し、白木の車に乘り白馬に挽かせて、身には白いちがやをまとひ、我が身をいけにへとすることを表はし、桑林の野に出て雨を祈つた。そこで次の六ケ條を以て(我が身の不德が此の天變を致したことを)自ら責めて曰く「予の政治に取締りがないために(神明の怒に觸れたのであらう)か。人民が職業を失つて苦しんで居るためであらうか。(民は飢饉に苦しめるに、予ひとり宮殿を立派にして傲奢を極める)と思召しての事であらうか。女官などの秘密の賴み事が盛に行はれて(政治の公明を缺く)ためであらうか。賄賂が行はれてゐるからであらうか。讒言するものが多いためであらうか。若しこの中の一つでも當つて居るならば、それは予の罪である。予の一身を献ずるが故に、なにとぞ萬民の生命を救ひ給へ)」と。(天もこの成湯の至誠に感じたか)、その言葉の終らぬうちに、何千里四方といふ區域に亘つて忽ち大雨が降つた。

語釋 大旱七年(一說に、これは湯の在位十三年中に、旱魃の年が七年もあつたといふ意で、七年間も引續いて旱魃だつたといふ意ではない。さうでないと七年間旱魃の後始めて雨を祈つたといふでは餘りに緩漫な話であると、) ○太史(天文

を掌る官。）　○以レ人禱（人を殺していけにへとして神に供へて禱ること。いはゆる人身御供(ひとみごく)をいふ。）　○齋戒（ものいみ。神に事る前に心身を清めて飲食を愼んで汚れのないやうにすること、齋戒沐浴ともいふ。）　○剪レ爪斷レ髮。素車白馬（いづれも清淨を意味する。素車は白木造りの車。）　○身嬰ニ白茅一（茅は茅に通じチガヤのこと。神に供へるいけにへの下には白きチガヤを敷く例である。今成湯自らいけにへとなる、故に身に白茅をつけて犧牲の精神を具體したわけである。嬰はカクと訓み、まとふこと。）　○犧牲（いけにへ、神に祭るとき供へる牛。色純なるを犧といひトして吉を得て未だ殺さざるを牲といふ。後世、人の爲に身を棄てることを犧牲となるといふは湯の此の故事に本づく。）　○桑林之野（一說に、桑山の林であるといふ。）　○以ニ六事一自責（以下言ふ所の六ケ條の惡政あればこそ斯くの如く長い間の天譴を蒙るのであらう、果して然らば是れ我が罪なり、宜しく我を誅して萬民を救ひ給へと、自ら其の罪を責めるのである。）　○政不レ節（節は節制、節度。物事に筋目立ちて締りあること。こゝは政治が亂れてダラシのないことをいふ。）　○宮室崇（崇はタカシと訓む、高大の意。）　○女謁（婦人の内々の賴み事。女官などが奸臣と結託して情實によつて君主に請ひ求めること。）　○苞苴（苞はツト。苴は下に敷くワラ。人に物品を贈る時ツトに包み或はワラを下に敷く故、轉じて賄賂の意に用ひる。）　○讒夫（言葉を巧にして人を陥る、者。讒人。）

餘論　この話は湯王が民本主義の王者であつたことを物語ると共に、一面また民意を得るために如何に努力したかを語るものである。

湯崩。太子太丁早卒。次子外丙立。二年崩。弟仲壬立。四年崩。太丁之子太甲立。不明。伊尹放ニ之桐宮一居レ憂三年。悔レ過自責。尹乃奉歸レ亳。修レ德。諸侯歸レ之。自ニ太甲一歷ニ沃丁・太康・小甲・雍己一至ニ太戊一。亳有レ祥。桑穀共ニ生于朝一。一日暮大拱。伊陟曰、妖不レ勝レ德。君其修レ德。太戊修ニ先王之政一。二日而祥桑枯死。殷

祥桑枯死

道復興。號稱中宗。

【訓讀】湯、崩ず。太子太丁早く卒す。次子外丙立つ。二年にして崩ず。弟仲壬立つ。四年にして崩ず。太丁の子太甲立つ。不明なり。伊尹之を桐宮に放つ。憂に居ること三年。過を悔い自ら責む。伊尹乃ち奉じて亳に歸し德を修めしむ。諸侯之に歸す。」太甲より沃丁・太康・小甲・雍已を經て太戊に至る。亳に祥有り。桑穀、朝に共生す。一日の暮に大さ拱なり。伊陟曰く、「妖は德に勝たず。君其れ德を修めよ」と。太戊、先王の政を修む。二日にして祥桑枯死す。殷道復た興る。號して中宗と稱す。

【通釋】湯が崩じた。皇太子の太丁は早く逝去したので、次子の外丙が、卽位したがそれも二年で崩じ、弟の仲壬が立つた。然るにまた四年で崩じたので太丁の子の太甲が位に卽いた。ところが太甲は愚で(政治を執ることが出來ない。そこで)、伊尹は之を(湯王の墓のある)桐といふ地に宮殿を作つて共處に居らせた。(不義より遠ざかり、湯王の德に近づけんとした伊尹の苦心である)。太甲は先王仲壬の喪にこもること三年。遂に過を悔い、我が身の不德を責めるやうになつた。そこで伊尹は太甲

をつれて都の亳に歸し、益々徳を修めさせたので、天下の諸侯は皆太甲になづき從つた。太甲から沃丁・太康・小甲・雍已の四代を歷て太戊の代になつた。或時亳に怪しいことがあつた。それは御所の庭に一本の幹から桑と穀とが生え、(めき〳〵と大きくなつて)、其の日の夕方には一かゝへ程の太さになつた。伊陟(伊尹の子)が太戊に向つて曰ふには、「如何なる妖怪も徳に勝つことは出來ませぬ。君にはどうか徳を修めて下さいませ。(然らば妖怪は自然に退散するでありませう)」と。そこで太戊は徳を修めて先王湯の政治を行うたところ、二日の後、その奇怪な共生木は枯れてしまつた。かくて殷の徳が再び盛になつた。太戊崩じ、號して中宗といふ。

語釋 桐宮(桐は地名、湯の墓のある所。そこに宮殿を作り、桐宮といふ。) ○居レ憂(憂は喪。喪にこめること。) ○祥(すべて吉凶禍福の前兆をいふ。普通は吉事をいふのであるが、こゝは凶事の意である。) ○桑穀(クハとカウゾ(楮)) ○共生(合生。一本の幹から二種の木の枝の出來ること。二木合生するは不恭の罰といふ。一説に桑穀は野に生ずる木、それが朝廷に生ずるのは朝廷が亡んで野となるの前兆であると) ○朝(朝廷、宮中の庭。) ○拱(兩手で抱く。一かかへ。) ○祥桑枯死(不吉な桑が枯れてしまつたといふ意。桑といつて穀を云はないのは省略したのである。) ○中宗(廟號である。中は中興の意。宗は尊、徳高く尊ぶべきを言ふ。)

自太戊歷仲丁・外壬至河亶甲。避水患遷于相。至祖乙居耿、又圮于耿。歷祖辛・沃甲・祖丁・南庚・陽甲至盤庚。自耿復遷于亳。殷道復興。自盤庚歷小・

高宗得傅說

武乙無道

辛・小乙至武丁。夢得良弼。曰説。説爲胥靡、築于傅巖。求得之、立爲相。武丁祭湯。有飛雉、升鼎而雊。武丁懼而反己。殷道復興。號稱高宗。自武丁歷祖庚・祖甲・廩辛・庚丁、至武乙。無道。爲偶人、謂之天神、與之博、令人爲行。天神不勝、乃僇辱之、爲革囊盛血、仰射之。命曰射天。出獵、爲暴雷震死。

訓讀 太戊より仲丁・外壬を歴て河亶甲に至り、水患を避けて相に遷る。祖乙に至りて耿に居り、又耿に圮る。祖辛・沃甲・祖丁・南庚・陽甲を歴て盤庚に至り、耿より復た亳に遷る。殷道復た興る。盤庚より小辛・小乙を歴て武丁に至る。夢に良弼を得。説と曰ふ。説、胥靡と爲り、傅巖に築く。求めて之を得、立てて相と爲す。武丁、湯を祭る。飛雉有り。鼎に昇つて雊く。武丁懼れて己に反る。殷道復た興る。號して高宗と稱す。武丁より祖庚・祖甲・廩辛・庚丁を歴て武乙に至る。無道なり。偶人を爲りて之を天神と謂ひ、之と博し、人をして爲に行はしむ。天神勝たざれば、乃ち僇辱し、革嚢を爲りて血を盛り、仰いで之を射る。命けて天を射ると曰ふ。出でて獵し、暴雷の爲に震死す。

【通釋】(初の自二太戊一云々から三行目の至二武丁一までは文意明かであるから通釋を省略するなほ語釋を參照されたい)。武丁は或時に說といふ良き輔佐の大臣をかゝへた夢を見た。當時その說は罪人となり、傅巖といふ所で道普請をしてゐたが 武丁はこれを搜し出して一躍大臣に任命した。武丁が先祖成湯の祭をした時、雉が飛んで來て鼎の耳にとまつて鳴いた。(野鳥が宗廟に鳴くのは、やがて宗廟が野になるの前兆である。これは祖先の神靈が雉を假りて我の不德を警告するのであらうと)武丁は恐懼して、自ら不德惡行がありはせぬかと反省して(修養につとめたので)、殷の勢が盛になつた。崩じて高宗と號した。」武丁から祖庚・祖甲・廩辛・庚丁を歷て武乙の代になつた。武乙は道にそむいた行多く、人形を作つて之を天神といひ、一人の近臣をその天神の代理として、自分と雙六をさせ、天神が負けると之を辱しめて喜んでゐた。又革嚢を作つて血を容れ、(それを高い所に懸けておいて)、下から仰向いて之を射た。そして天を射るのだと言つてゐたが、(武乙はこんな亂暴な事をやつてゐたが)、或日獵に出て暴かに起つた雷に打たれて死んだ。

【語釋】 水患(水害といふに同じい。) ○祖(地名、河南安陽縣の地。) ○耿(地名、山西永濟縣。) ○圮(音ヒ、やぶる。圯(音イ。つちばし―土橋)とは別。こわれること。圮二于耿一とは水害のために都の耿が破壊されたといふ意。) ○亳(この亳は河南歸德府偃師縣で一に殷といふ。である。故に盤庚がこゝに都してより以後、從來の商といふ國號を改めて殷といふやうになつた。因みに成湯の都した亳は同じく河南歸德府中の商丘縣であつて、少しく地を異にしてゐる。) ○良

弼（弼はタスクと訓じ、天子の政治をたすける大臣のこと。輔弼の臣。）　○胥靡（ショビ。胥は相で、たがひに。靡は繋で、つなぐこと。鐵鎖で相つながれた者。囚人。刑徒。）　○傅巖　地名。今山西平陸縣の東。武丁、說を傅巖に得たので氏を傅と命じ、爾來傅說といふ。）　○僇（音コウ。ナクと訓ず、鳴くこと。）　○反ㇾ己（己にかへりみる。悪い事はないかと自ら反省すること。）　○偶人（偶はヒトガタの意。でく。人形のこと。木偶・土偶などいふ。）　○博（博奕の意。今の双六のこと。）　○僇辱（二字ともにハヅカシムと訓む。凌辱すること。）　○暴雷（暴はニハカと訓む。急に起つた雷のこと。）　○震死（雷に打たれて死ぬこと。）

歷₂太丁・帝乙₁至₂帝辛₁。名受、號爲ㇾ紂。資辯捷疾、手挌₂猛獸₁。智足₃以拒ㇾ諫、言足₃以飾ㇾ非。始爲₂象箸₁。箕子歎曰、彼爲₂象箸₁。必不ㇾ盛以₂土簋₁。將ㇾ爲₂玉杯₁。玉杯象箸、必不ㇾ羹₂藜藿₁、衣₂短褐₁、而舍₂茅茨之下₁。則錦衣九重、高臺廣室、稱ㇾ此以求、天下不ㇾ足矣。

訓讀　太丁・帝乙を歷て帝辛に至る。名は受、號して紂と爲す。資辯捷疾、猛獸を手挌す、智は以て諫を拒ぐに足り、言は以て非を飾るに足る。始めて象箸を爲る。箕子歎じて曰く、「彼、象箸を爲る。必ず盛るに土簋を以てせじ。將に玉杯を爲らんとす。玉杯象箸、必ず藜藿を羹にし短褐を衣て茅茨の下に舍らじ。則ち錦衣九重、高臺廣室、此に稱うて以て求めば天下も足らず」と。

【通釋】(武乙から)太丁・帝乙を歴て帝辛に傳へた。帝辛は名は受、人は稱して紂(沒義道の意)と云つた。紂は生れつき辯舌が達者ですばしこく、又(腕力が強くて)猛獸を手うちにした。その惡かしこい智慧は、みごとに人の忠告を言ひ伏せてしまひその巧みな言葉は、まんまと己が惡いところを巧く言ひまげてしまふ。紂が象牙の箸を造つたことがある。その時箕子(箕の國の子爵の意、名は胥餘、紂の諸父である。)が歎いていふには、「紂王、今や象牙の箸を作つた以上は、もう土器に食物を盛るやうなことはあるまい。きつと玉の杯を作るだらう。さて玉の杯と象牙の箸を用ひる以上は、今までのやうに、あかざや豆の葉の汁を吸ひ、短い毛皮の着物を着て、茅葺の家に住むやうなことはあるまい。そこで錦の衣を幾重も重ね、高いうてなに廣い部屋と、すべて玉杯象箸に相應するやうにして行つた日には、天下の寶を取り盡しても足りなからう」と。

【語釋】資辯捷疾(天資辯舌巧みにして敏捷なること。)　○手格(手で撃ち殺す。)　○土器(かはらけ。)　○玉杯(杯は、こゝは酒を入れるサカヅキではなく、すひものを入れる器である。)
○藜藿(アカザと豆の葉、粗食をいふ。)　○短褐(褐は毛織の着物。粗衣をいふ。)　○錦衣九重(九重ねの錦の衣、一説に九重は九重の門で、奥深い皇居の意であると。)　○稱レ此(稱はカナフと訓む、つりあふこと。)

妲己有寵
長夜之飲
炮烙之刑
殷之三仁

紂伐有蘇氏。有蘇以妲己女焉。有寵。其言皆從。厚賦稅、以實鹿臺之財、盈鉅橋之粟、廣沙丘苑臺、以酒爲池、縣肉爲林、爲長夜之飲。百姓怨望、諸侯有畔者。紂乃重刑辟。爲銅柱、以膏塗之、加於炭火之上、使有罪者緣之。足滑跌墜火中。與妲己觀之大樂。名曰炮烙之刑。淫虐甚。庶兄微子數諫不從。去之。比干諫、三日不去。紂怒曰、吾聞、聖人之心、有七竅。剖而觀其心。箕子佯狂爲奴。紂囚之。殷大師持其樂器祭器奔周。

訓讀 紂、有蘇氏を伐つ。有蘇、妲己を以て女す。寵有り。其の言皆從ふ。賦稅を厚うして、以て鹿臺の財を實て、鉅橋の粟を盈つ。沙丘の苑臺を廣め、酒を以て池と爲し、肉を懸けて林と爲し、長夜の飲を爲す。百姓怨望し、諸侯畔く者有り。紂乃ち刑辟を重くす。銅柱を爲り、膏を以て之に塗り、炭火の上に加へ、罪有る者をして之に緣らしむ。足滑にして跌いて火中に墜つ。妲己と之を觀て大いに樂しむ。名づけて炮烙の刑と曰ふ。淫虐甚だし。庶兄微子數〻諫むれども從はず。之を去る。

比干諫めて三日去らず。紂、怒つて曰く「吾れ聞く聖人の心には七竅有り」と。剖いて其の心を觀る。箕子佯狂して奴と爲る。紂、之を囚ふ。殷の大師、其の樂器、祭器を持して周に奔る。

通釋 紂王は有蘇氏を伐つた。有蘇氏は(降を乞うて)妲己といふ美女を紂王の夫人にと獻上した。妲己は紂王の寵愛を得て、言ふことは何でも聽き入れられた。紂王は收税を多くして、鹿臺の金庫には財寶を一杯入れ、鉅橋の倉庫には穀物を詰めこみ、沙丘の庭園や展望臺を擴張し、(夏の桀王のやうに)酒を湛へた池を造り、肉を林のやうに吊し、夜の明くるのも知らずに酒宴に耽つた。人民達は(王の暴虐を)うらみ、諸侯の中にはだん〳〵謀叛する者が出來て來た。そこで紂王は(怨んだり叛いたりする者を無くする爲に)刑法を重くした。即ち銅の圓柱を作つて膏を塗り、之を炭火の燃えさかつてゐる上に渡して、罪人に其の上をつたはした。すると罪人は足が滑つて、途中で踏み外して火の中に墜落する。紂王は妲己と一緒にそれを見て大いに樂しんだ。此の刑を火あぶりの刑と名づける。斯くて紂王が色をあさり民を虐げることは益〻甚だしかつた。そこで兄の微子(微國の子爵、名は啓といふ)が度々意見したけれども、聽き入れない。そこで(君臣の間は義を以て結ぶ。三たび諫めて聽かれずんば則ち去るべしといふ信條から)微子は、紂の側を去つてしまつた。比干(紂の諸父)は紂

王を諫めて三日の間その側を去らなかつた。紂王は怒つて、「(卿は聖人さ)、聖人なら心に七つの孔があると聞いてゐる。(果してさうか、一つ見てやらう)」と言つて、比干の體を解剖して、その胸を檢べて見た。箕子も亦紂の怒に觸れたから、狂人のまねをして奴隷の仲間へ入つて(紂の手をのがれようとしたが)、紂は之を牢獄に囚へた。又音樂官長は樂器や祭の道具を持つて(せめて禮樂祭祀だけも保存せんが爲に)周の國へ逃げて行つた。

語釋 有蘇氏(諸侯の名。今河南濟源縣の西北にその城址があるといふ。) ○賦税(とりたて。租税。) ○鹿臺(財寶を入れおく所の名。) ○鉅橋(米穀を入れおく倉庫の名。粟はモミの意。) ○沙丘苑臺(沙丘は地名。苑は庭園、臺は土を高く盛つて上を平かにし遠望の便にした遊樂の所。展望臺。うてな。) ○以酒爲池縣肉爲林(縣は懸に通ずる。夏の桀王の故事に同じ。後世途方もない豪奢な遊を酒池肉林といふは之に本づく。) ○長夜之飲(夜通し酒宴を張ること。夜が明けても尚ほ戸を閉ぢ燭を點じて飲酒に耽けるといふ意である。) ○怨望(うらむこと。この場合は望もウラムの意である。) ○畔(叛に通じ、ソムクと訓ず。) ○刑辟(刑罰といふに同じい。辟は罪すること。) ○緣(ヨルと訓ず。つたひ行くこと。) ○炮烙之刑(炮はアブル、烙はヤク。所謂火あぶりの刑。) ○庶兄(妾腹の兄。) ○七竅(七つのあな。) ○佯狂(佯はイツハル又はアラハニと讀む。陽と音義相通じて、表面さう見せかけること。) ○大師(朝廷の音樂を掌る官の長。史記によると大師、名は疵、小師、名は彊、其の樂器を持して周に奔るとある。然るに韓愈の伯夷頌には、祭器を抱いて去つたは微子であるとしてある。當時はさうした事が言はれてゐたのであらう。)

餘論 微子・箕子・比干、これを殷の三仁といふ。論語に曰く「微子去レ之、箕子爲ニ之奴一、比干諫而死。孔子曰、殷有ニ三仁一焉。」と。

昌修レ德

殷亡

周侯昌及九侯・鄂侯爲紂三公。紂殺九侯。鄂侯爭。幷脯之。昌聞而歎息。紂囚昌羑里。昌之臣散宜生求美女珍寶進。紂大悅乃釋昌。昌退而修德。諸侯多叛紂歸之。昌卒。子發立。率諸侯伐紂。紂敗于牧野、衣寶玉自焚死。殷亡。

訓讀 周侯昌及び九侯・鄂侯は紂の三公たり。紂、九侯を殺す。鄂侯爭ふ。幷せて之を脯にす。昌聞きて歎息す。紂、昌を羑里に囚ふ。昌の臣散宜生、美女珍寶を求めて進む。紂大いに悅び、乃ち昌を釋す。昌退きて德を修む。諸侯多く紂に叛きて之に歸す。昌卒す。子發立つ。諸侯を率ゐて紂を伐つ。紂、牧野に敗れ、寶玉を衣て自ら焚死す。殷亡ぶ。

通釋 周の太守昌、及び九の太守、鄂の太守の三人は當時紂の三公の役に居た。すると（無道な事によつて）紂王が九侯を殺したので、鄂侯は之を諫めた。（紂王は怒つて鄂侯をも殺し）、二人の屍を一緒にほじしにして了つた。周侯昌は此の事を聞いて溜息をついて歎いた處、紂はまた昌を捕へて羑里といふ所に監禁した。そこで昌の臣の散宜生といふ者が（紂王の歡心を買つて主人を赦して貰は

うと）美しい女や珍しい寶を搜し出して之を紂王に献上した。果して紂王は大いに悦んで昌を釋放した。昌は自分の國に退いて專ら己の德を修めて（善政を布いた）。諸侯は多く紂王に叛いて昌を慕つて心を寄せた（これが有名なる周の文王である）。やがて昌が死んで子の發（周の武王）が立つたが、遂に諸大名をひきつれて紂を攻めた。紂は之と牧野といふ處に戰つて敗れ、多くの寶玉を身につけたまゝ、自ら火中に燒け死んだ。殷は斯くて亡んだのである。

語釋 三公（天子の輔佐役たる最高の官。時代によつて名稱は異るが、周までは太師・太傅・大保の三人。） ○諍（强く諫めて言ひ爭ふこと。諫爭。） ○脯（乾した肉。ほじし。） ○羑里（地名。今河南省湯陰縣の北。） ○歸（心を寄せてなづき來ること。味方するといふ意。） ○牧野（地名。今河南省淇縣の南。）

箕子後朝周、過故殷墟、傷宮室毀壞生禾黍。欲哭不可、欲泣則爲近婦人。乃作麥秀之歌曰、麥秀漸漸兮。禾黍油油兮。彼狡童兮。不與我好兮。殷民聞之皆流涕。殷爲天子三十一世、六百二十九年。

訓讀 箕子、後に周に朝し、故の殷の墟を過ぎ、宮室毀壞して禾黍を生ずるを傷む。哭せんと欲す

れば不可なり、泣かんと欲すれば則ち爲婦人に近し。乃ち麥秀の歌を作りて曰く、「麥秀でて漸々たり。禾黍油々たり。彼の狡童や我と好からざりき」と。殷の民、之を聞いて皆涕を流せり。殷天子たること三十一世、六百二十九年なり。

〔通釋〕箕子（紂に囚へられてゐたが、周の武王が攻め入つた際これに救はれたのである）は、後に周の朝廷へ參つた。その時に故の殷の都の墟を通り過ぎたところ、宮殿は破れ壞れて麥や黍が生え茂つてゐるのを見て、心痛く思うた。聲をあげて泣きたいけれども、それでは今の朝廷を恨むことになつてはいけない。こつそり泣かうとすれば、何となく婦女子の行爲のやうで男らしくない。そこで麥秀の歌を作つて我が懷を述べた。曰く「麥秀でて漸々たり。云々」と。その意は「麥はづん〳〵伸びてゐる。黍はみづ〳〵と長じてゐる。――（併し、それが昔の、あの盛であつた御殿の跡だと思ふと、その荒れかたの甚だしさに一入かなしい）――あのいたづらツ兒の紂王が、俺と仲がよくなくて、（俺の諫を聽かぬが爲めに、こんな事になつてしまつたのぢや。さても殘念な事よ）」と。之を聞いた殷の民は、箕子の心中に同情し、殷の舊恩を回顧して皆涙を流したといふ。（この故事からして、故國の頽廢を歎ずることを「麥秀の歎」といふ）。殷の天子たることは三十一代、六百二十九年であつた。

【語釋】禾黍（禾は五穀の總稱、黍はキビ。）○欲哭不可（滅んだ故國を歎くことは、今の朝廷に憚りがある。）○漸々（秀づるさま。）○油々（盛なさま。）○狡童（ずるい子供、いたづらツ兒といふ意で、紂を指したのである。）

【餘論】箕子に就ては種々の傳說がある。周に仕へることを屑しとしないで、東して遼東に朝鮮國を興したとも、周から朝鮮國に封ぜられたのだともいふ。箕子を古朝鮮の始祖とすることには多くの疑點があるが、畢竟、箕子の如き賢者の終りが愚圖々々になつてゐるのは、人情として甚だ慊らぬ所があるので、例へば義經・辨慶などの蝦夷渡りの傳說と同樣の心理から編み出されたものであらうが、兎に角、古傳は箕子が朝鮮國を建てたことをいひ、本書では箕子が周に仕へたことを公認してゐる。

周

周武王姬姓名發、后稷之十六世孫也。后稷名棄。棄母曰姜嫄、爲帝嚳元妃。出野見巨人跡、心欣然踐之。生棄以爲不祥、棄之隘巷。馬牛避不踐。徙置山林。適會山林多人。遷之氷上。鳥覆翼之。以爲神、遂收之。兒時屹如巨

后稷故ニ稼穡ー

人之志。其游戲好種樹。及成人、能相地之宜、致民稼穡。興於陶唐虞夏之際、爲農師、封于部。別其姓、號后稷。

訓讀　周の武王は姫姓にして、名は發、后稷の十六世の孫也。后稷名は棄。棄の母は姜嫄と曰ひ、帝嚳の元妃たり。野に出でて巨人の跡を見、心欣然として之を踐み、棄を生む。以て不祥と爲して之を隘巷に棄つ。馬牛避けて踐まず。徙して山林に置く。適〻山林多きに會す。之を氷上に遷す。鳥之を覆翼す。以て神と爲して遂に之を收む。兒たりし時屹として巨人の志の如し。其の游戲するに種樹を好む。成人に及んで能く地の宜しきを相し、民に稼穡を敎ふ。陶唐虞夏の際に興り、農師と爲り、部に封ぜらる。其の姓を別ち后稷と號す。

通釋　周の武王は、姓は姫、名は發といひ、后稷から十六代目の子孫に當る。后稷は名は棄といふ。棄の母は姜嫄といひ、帝嚳(堯の父)の第一夫人となつた。或日野原に出て巨大な人の足跡を見、何となく心に嬉しく思つて之を踐むと、(感じて妊娠し、やがて)棄を生んだ。(しかし人として普通の妊娠でなかつたので)不吉な子供であると思ひ、之を狹い路地に棄てた。(通行の牛馬に踏み殺させよう

としたのである)。ところが牛馬も之をよけて踏まなかつたので、今度は場所を變へて山林の中に捨てた。(鳥獸の食ふに任せようとしたのである)。すると折惡しく山に人が大勢ゐたので、遂に之を渠の氷の上に置いて(こごえ死にさゝうとした)。然るに鳥がやつて來て、翼の間に入れて保護してゐた。これを見た姜嫄は、これこそ神の子であると思ひ、遂に抱き上げて連れ歸つた。棄は子供の時から、其の心がしつかりして大人の考へのやうであつた。遊び戯れるにも草木を植ゑることを好んだが、成長の後も、よく土地のよしあしを見分けて、(一々どんな植物が適當してゐるかを知り)、人民に農業の方法を敎へてやつた。堯舜禹三代の間に身を起し、農務大臣となり、邰といふ所の大名となつた。(從來、公孫姓と姫姓との二つを名乘つてゐたのを)、別つて姫の一姓と定め后稷と號した。

語釋 周(武王の曾祖父たる古公亶父が、岐山の下、周原といふ地に居つたのに因んで國號としたものである。) ○后稷(后は尊稱、稷は五穀。故に農業を掌る長官をいふ。) ○元妃(支那では貴族は數人の夫人あり。元は首の意。其の第一位にある者。) ○巨人(「巨人跡」の巨人は大男で、「巨人之志」の巨人は成人の意、即ち一人前のおとな。) ○不祥(こゝの祥は吉祥の意、從つて不祥は不吉。) ○隘巷(狹くやゝこしい路地。) ○覆翼(フヨクと讀む。覆はオホフの時は音フで、クツガヘルの時は音フクである。こゝは翼を以ておほひかばふこと。) ○屹(音キツ。卓立のさま。シヤンとしてゐること。) ○種樹(種はウヽと訓む。木を植ゑること。) ○稼穡(音カショク。稼は植ゑつけ、穡は取りいれ。二字で農業の意。) ○陶唐虞夏(陶唐は堯、虞は舜、夏は禹を指す。) ○農師(農務大臣とでもいふべきもの。意味は后稷も同じい。) ○邰(音タイ。地名、今陝西武功縣。) ○別二其姓一(后稷は帝嚳の子。帝嚳は黄帝の曾孫で、本姓は公孫、一の姓は姫である。然るに后稷は専ら姫の一姓のみを稱した。故に別レ姓といふ。或はいふ、黄帝から堯舜まで皆同じ血族であるに、今、后稷は新に姫姓を立てたから、別レ姓といつたのだと。)

古公亶父

太伯至德

卒。子不窋立。夏后氏政衰、不窋失其官、奔戎狄之間。不窋卒、子鞠立。鞠卒、子公劉立。復修后稷之業、務耕種。百姓懷之。公劉卒、子慶節立。國於豳。歷皇僕・參弗・毀隃・公非・高圉・亞圉・公叔鉏、至古公亶父。獯鬻攻之。去豳、渡漆沮、踰梁山、邑於岐山下居焉。豳人曰、仁人也、不可失。扶老攜幼以從。他旁國皆歸之。古公長子太伯。次虞仲。其妃太姜生少子季歷。季歷娶太任生昌。有聖瑞。太伯・虞仲、知古公欲立季歷以傳昌、乃如荊蠻、斷髮文身、以讓季歷。古公卒、公季立。公季卒、昌立。爲西伯。

訓讀　卒す。子不窋立つ。夏后氏の政衰へ、不窋其の富を失ひて、戎狄の間に奔る。不窋卒して、子鞠立つ。鞠卒して、子公劉立つ。復た后稷の業を修め、耕種を務む。百姓之に懷く。公劉卒して、子慶節立つ。豳に國す。皇僕・參弗・毀隃・公非・高圉・亞圉・公叔鉏を歷て、古公亶父に至る。獯鬻之を攻む。豳を去り、漆沮を渡り、梁山を踰えて、岐山の下に邑して居る。豳人曰く、「仁人也、失ふ

可からず」と。老を扶け幼を携へて、以て從ふ。他の旁國皆之に歸す。古公の長子は太伯。次は虞仲。其の妃太姜、少子季歷を生む。季歷、太任を娶りて昌を生む。聖瑞有り。太伯・虞仲、古公の季歷を立てゝ以て昌に傳へんと欲するを知り、乃ち荆蠻に如き、髮を斷ち身に文し、以て季歷に讓る。古公卒し、公季立つ。公季卒し、昌立つ。西伯と爲る。


后稷が死んで其の子の不窋が後をついだ。(太康の時)夏の政治が衰へ、(農官を廢したので)、不窋は役を失つて蠻國に逃げて行つた。不窋が死んで子の鞠が立ち、鞠が死んで其の子の公劉が立つた。(公劉は蠻國に居つても)、復び后稷の遺業を起して、農業に精を出したので、人民は皆之に懷いた。公劉が死んで子の慶が立ち、豳といふ所に國を作つた。それから皇僕以下の七代を歷て、古公亶父の代になつた。此の時獯鬻といふ北方の夷が攻め入つたので、代々住んだ豳の地を去り、漆水と沮水を渡り、梁山を越えて、岐山の麓に邑を作つて住んだ。すると豳の人達は「古公亶父は仁君である。あゝいふ方に離れてはならぬ」と云つて、老人には手をかしてたすけ、子供は手をひいて、隨いて來た。附近の國々の民も皆なづきたよつて來た。古公の長男は太伯、次男は虞仲といふ。其の後古公の妃太姜が末子季歷を生み、季歷は成長して太任といふ婦人を妻にして昌を生んだ。昌が生れる時に聖

人の誕生を祝する目出度いしるしがあつた。太伯・虞仲の二人は、父の古公が先づ末子の季歷を立て丶おいて、行く〳〵は（季歷の子の）昌に繼がせたい希望であることを知り、（自分等が居ては邪魔になるだらうといふので）、吳の國に逃れ行き、髮を斬り、身に入れ墨して（蠻地の風になりきつて二度と國に歸らぬ意を示し）、斯くすることによつて位を弟の季歷に讓つた。古公が死ぬと公季（季歷）が立ち、公季が死んで其の子の昌が立つた。昌は西方諸侯の長となつた。

語釋　戎狄（共に蠻國。支那では古來自ら其地を中國又は中華と稱し、四方の異民族を東夷、西戎、南蠻、北狄と呼んだ。戎狄は西北の蠻族である。）○畊種（畊は耕の古字、耕し種ゑる。即ち農業。）○豳（音ヒン、地名。古の西戎の地で、今の陝西省邠州。）○古公亶父（古公は號、亶父は名。）○獯鬻（音クンイク。古の北狄の一族。蒙古族で、後の匈奴と同種である。）○岐山（山名、今陝西省關中道、その麓の周源といふ地に邑を作つたのである。周といふ國號はこれから起る。）○少子（末子。）○聖瑞（聖人となるべき吉兆。赤い雀が赤い字で記した文書をくはへて昌の産室の戸にとまつたといふ。）○荊蠻（荊は吳の別名。吳は南方に凑するから南蠻として荊蠻といつたのである。）○文レ身（文は入れ墨。斷髮文身は吳の風俗であつた。）○公季（季歷のこと。季歷は公然周の世系を繼承したのであるから、尊んで公季と云つたのである。）○西伯（伯は「かしら」。西方諸侯の首長といふ意。史記に紂王が文王昌を西伯に任じたことが見えてゐる。）

虞芮爭田

西伯修レ德。諸侯歸レ之。虞芮爭レ田、不レ能レ決。乃如レ周。入レ界見二畊者一、皆遜レ畔、民俗皆讓レ長。二人慙、相謂曰、吾所レ爭、周人所レ恥。乃不レ見二西伯一而還、俱讓二其田一不

取。漢南歸西伯者四十國。皆以爲受命之君。三分天下有其二。

訓読 西伯、德を修む。諸侯之に歸す。虞芮田を爭ひ、決すること能はず。乃ち周に如く。界に入りて畔（耕に同じ）す者を見るに、皆畔を讓り、民俗皆長に讓る。二人慙ぢ、相謂ひて曰く「吾が爭ふ所は、周人の恥づる所なり」と。乃ち西伯に見えずして還り、倶に其の田を讓つて取らず。漢の南、西伯に歸する者四十國。皆以て受命の君と爲す。天下を三分して其の二を有つ。

通釈 西方諸侯の長となつた文王昌は、自ら仁德を修めて（善政を行うた）。それ故、諸侯は皆なづき從つて來た。その頃、虞・芮といふ二つの國の君が、田地の境界について爭ひ合ひ、どうしても決着しなかつた。そこで當時最も人望の高い周の國へ往つて（文王に裁判をして貰はうと思つた）。さて周の國境へ入つて、田畑に耕作してゐる百姓を見ると、お互ひに田の畔（田の境界）を讓り合つてゐる（奪ひ合ふどころの話でない）。一般に土地の風俗が目上の者を敬つてへりくだるといふ有樣であつた。二國の君は之を見て心から恥入つて、互ひに話し合つていふには、「吾々の言ひ爭つてゐる事は、周の人にあつては恥とする事である。（思へば誠に面目ない次第だ）」と。そこで西伯には、とう〳〵會は

太公望

ないで歸つてしまひ、今度はお互ひに田地を讓り合つて取らうとしなかつた――といふ話がある。こんな風だから周の人望は大したもので、漢水（川の名）の南の方では、西伯になびき從ふものが四十ケ國もあつた。さうして皆が「これこそ天子たるべき天命を受けなされた君である」と思つた。かくて天下の三分の二は西伯の有になつてしまつた。

語釋 虞芮（並に古の國名。虞は今の山西平陸縣の地。芮は同芮城縣の地。）○漢南（漢水の南。漢水は湖北省を貫流して揚子江に注ぐ川。）○受命之君（天子たるべき命を天から受けた君主。天意によつて天子たるべく運命づけられた人をいふ。）

有呂尙者。東海上人。窮困年老、漁釣至周。西伯將獵、卜之。曰非龍、非彲、非熊、非羆、非虎、非貔。所獲覇王之輔。果遇呂尙於渭水之陽。與語大悅曰、自吾先君太公曰、當有聖人適周。周因以興。子眞是耶。吾太公望子久矣。故號之曰太公望。載與俱歸、立爲師。謂之師尙父。

訓讀 呂尙といふ者あり。東海上の人なり。窮困して年老い、漁釣して周に至る。西伯將に獵せん

とし、之を卜ず。曰く「龍に非ず、彲に非ず、熊に非ず、羆に非ず、虎に非ず、貔に非ず、獲る所は覇王の輔ならん」と。果して呂尙に渭水の陽に遇ふ。與に語り大いに悅びて曰く、「吾が先君太公より曰く、『當に聖人有つて周に適くべし、周因つて以て興らん』と。子は眞に是なる邪。吾が太公子を望むこと久し」と。之を號して太公望と曰ふ。載せて與に倶に歸り、立てゝ師と爲し、之を師尙父と謂ふ。

通釋 こゝに呂尙といふ者がある。東海岸の人である。年とるまで貧乏してゐたが、魚を捕り釣をしながら周の領內へやつて來た。時に西伯（文王昌）は狩に出ようと思つて獲物を占つた。（それは彼の國の習慣であつた）。その結果「今日の獲物は龍でもなければ彲でもない。又熊でも羆でも、乃至、虎でも豹でもない。天下を統べ治める者の片腕ともなるべき人を獲るであらう」といふことであつた。（西伯は愈〻狩に出た）。すると果して渭水（川の名）の北に於て、（釣を垂れてゐる）呂尙に出遇つた。一緒に話をして見ると（實に立派な人物なので、これこそ天の與へと）大いに悅んでいふには、「實は亡き父君は平生から、『後の世には必ず聖人が周に來られるに違ひない、それによつて周も大いに盛になるであらう』といはれたが、御身こそ其の人ではあるまいか。思へば父君が御身を待ち望まれたの

も久しいことであつた」と。そこで（太公望レ子久矣といふ意味で）太公望と號し、呂尙を我が車に同乘させて連れ歸り、先生と立て、師尙父といつて尊敬した。

語釋　東海上（上は「ほとり」と訓ず、邊の意。）○彲（龍の一種。）○羆（熊の大なるもの。しぐま。ひぐま。）○貔（豹の種類、猛獸である。）○霸王（霸は諸侯の長・はたがしら、霸者、王は王者で天子のこと。）○陽（山では南を陽といふが川では北をいふ。）○先君太公（亡くなられた御父上。太公は祖父とすれば古公亶父、父とすれば季歷を指す、兩說ある。）○師尙父（尙はタットブ。師として尙ぶべく父として尙ぶべき人といふ意。）

武王觀兵

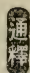
西伯卒、子發立。是爲武王。東觀兵、至於盟津。白魚入王舟中。王俯取以祭。既渡。有火。自上復于下、至于王屋、流爲烏。其色赤、其聲魄。是時諸侯不期而會八百。皆曰、紂可伐矣。王不可、引歸。紂不悛。王乃伐紂。載西伯木主以行。

伯夷叔齊

伯夷・叔齊叩馬諫曰、父死不葬、爰及干戈。可謂孝乎。以臣弑君、可謂仁乎。左右欲兵之。太公曰、義士也。扶而去之。

訓讀　西伯卒し、子發立つ。是を武王と爲す。東のかた兵を觀して盟津に至る。白魚、王の舟中に

入る。王俯して取り、以て祭る。既にして渡る。火有り。自ら上つて下に復り、王の屋に至りて、流れて烏と爲る。其の色赤く、其の聲魄たり、是の時諸侯期せずして會する者八百。皆曰く「紂、伐つ可し」と。王可かずして引き歸る。紂、悛めず。王、乃ち紂を伐つ。西伯の木主を載せて以て行く。伯夷・叔齊、馬を叩へて諫めて曰く「父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ、孝と謂ふ可けん乎。臣を以て君を弑す、仁と謂ふ可けん乎」と。左右之を兵せんと欲す。太公曰く「義士なり」と。扶けて之を去らしむ。



西伯（文王昌）が歿つて、その子の發が立つた。之を武王といふ。武王は東の方（紂の暴逆を改悛させよう爲に、）兵威を示さうと、盟津といふ渡頭まで兵を率ゐて進んだ。河を渡るとき白い魚が跳ね上つて武王の舟の中に飛びこんだ。（これぞ殷が我が周に歸するの兆であるとて）自ら俯いてそれを取り、（之を神に捧げて祭つた。既にして渡り了ると、一點の怪火が地上より天に立ち上つたかと見ると、また地上へと舞ひ下り、武王の陣屋に至つて、さつと横に流れて忽ち烏と變じた。その色は赤く、その聲は引き裂くやうに鋭かつた。（これ武王、父の志を達成して周室興隆するの瑞象であるとて喜んだ）。時に（武王、紂を伐つと聞いた）諸大名は豫ねて約束もしないのに、來り會するもの八百

人の多きに及んだ。さうして皆曰く「紂、伐つべし」と。併し武王はそれを承知せず、そのまま兵を引いて歸つてしまつた。（この示威運動によつて紂王は必ず改心されるであらうと、それを祈つてゐた）。けれども紂は何等改める樣子もない。そこで武王は愈々紂を伐たねばならぬと決心して、西伯の位牌を戰車に載せて出征した。（その意味は、萬民を安んずる爲に紂を伐たねばならぬといふことは、父文王以來の志である。されば我はその遺志を受けついで此の征伐に及ぶのである、といふ意を明かにしたのである）。然るに茲に伯夷・叔齊といふ兄弟がある。武王の馬を引き止めて出征を諫止した。曰く、「父君かくれさせ給うて未だ御葬儀も濟まぬ御喪中に（事もあらうに）戰爭をなさるといふことは、果して孝と申されませうや。又（いかに暴君なりとはいへ）、苟且にも臣下の身分として君主を弑し奉る、これ果して仁と申すことが出來ませうや。（不孝不仁、是れ暴擧でござる。切に思ひ止らせ給へ）」と。お側の者は、この無禮者を斬らうとした。と見た太公望は之を止めて、「いや〱、感心な義士だ」といつて、護衞のものをつけて二人にその場を去らせた。

【語釋】觀レ兵（兵威を示す。今の謂はゆる示威運動。）○盟津（盟は孟と通じてマウと讀む。河南孟縣の南。）○白魚（支那では、歴代の朝、その尙ぶ所の色を異にし、夏は黑を、殷は白を、周は赤を尙んだ。魚は鱗を被つてゐるから甲冑を裝うた兵の象とする。而して白は殷の尙ぶ色である。故に白魚が武王の舟中に入つたのは、殷の兵が周に歸する前兆とするのである。）○王屋（王の陣屋。一說に山名といふ。）○其色赤（赤は周の尙ぶ色。また烏は反哺の孝と云つて孝鳥

である。故に赤い鳥とは武王が父文王の志を遂して大孝を申べ、周室を興隆する瑞祥となすのである。）　○魄（聲の迸り裂けるやうな形容。一說に安定の意といふ。）　○木主（神主。位牌のこと。）　○伯夷叔齊（伯夷は兄、叔齊は弟である。今「史記」を引いてその略傳を示す。曰く、「伯夷叔齊は孤竹君の二子なり。父、叔齊を立てんと欲す。父の卒するに及んで、叔齊、伯夷に讓る。伯夷曰く　父の命なりと、遂に逃れ去る。叔齊も亦立つことを肯んぜずして之を逃る。國人、その中子を立つ。是に於て伯夷叔齊、西伯昌の善く老を養ふを聞き、往いて之れに歸す。」）　○干戈（タテとホコ。武器。轉じて戰爭のこと。）　○兵レ之（兵は武器。こゝはそれを動詞として用ひ、斬り殺すこと。）　○義士（道を守る正しい人。）

王既滅殷爲天子。追尊古公爲太王、公季爲王季、西伯爲文王。天下宗周。伯夷叔齊恥之、不食周粟、隱於首陽山。作歌曰、登彼西山兮、采其薇矣。以暴易暴兮、不知其非矣。神農虞夏、忽焉沒兮。我安適歸矣。于嗟徂兮。命之衰矣。遂餓而死。


王既に殷を滅して天子と爲る。古公を追尊して太王と爲し、公季を王季と爲し、西伯を文王と爲す。天下周を宗とす。伯夷・叔齊之を恥ぢ、周の粟を食はず、首陽山に隱る。歌を作つて曰く、「彼の西山に登つて其の薇を釆（採）る。暴を以て暴に易へて其の非を知らず。神農虞夏、忽焉として沒しぬ。我れ安くにか適歸せん。于嗟徂かん。命の衰へたるかな」と。遂に餓ゑて死せり。

通釋　武王は既に殷を滅して天子となると、古公亶父(曾祖父に當る)に尊號を上つて太王といひ、公季卽ち季歷(祖父に當る)を王季といひ、西伯(卽ち父)を文王というた。(太王・王季・文王、みな天子としての尊號である)。天下の人民は皆周を天子として推戴した。たゞ伯夷・叔齊の兄弟のみは周の臣民となることを恥とし、周の扶持米を受けず、世をのがれて首陽山に隱れてしまつた。(そこでは薇を食つて生命をつないでゐたが)、とう〳〵餓死してしまつた。その時わが懷を詠んで「彼の西山に登つて云々」と云つた。その意は、

われは彼の西山(首陽山)に登り、山中の薇を食つて、今日まで露命をつないで來た。(想へば情けない今の世の有樣よ。紂王も亂暴であつたが、臣として君を伐つ武王も亂暴だ)。されば亂暴な武王が亂暴な紂王に易つたといふに過ぎぬ。而も武王は自分の惡いといふことを悟らない、淺ましい事だ。あゝ彼の古の神農氏や堯舜禹の如き、德を以て德に易る理想の世は忽ちに過ぎ去つてしまつて、復た逢ふことも出來ぬ。かういふ穢はしい世となつては、何處に我が身を落ちつけたものであらう。我が心の安んじ處がない。あゝ寧そ死んでしまひたい。我が身の運が盡きたのだ。

といふのである。

語釋 宗レ周（宗は本家・主人の意。周を君主・天子とする。）○周粟（粟は我が國ではアハと訓ずるが、もとモミのまゝの米モミゴメである。米と見てよい。こゝは扶持米の意。）○首陽山（今山西河東道永濟縣にある。雷首山ともいふ。）○西山（首陽山の別名。）○薇（ゼンマイ。蕨（ワラビ）の類。こゝは古來ワラビと讀み習はしてあるからワラビでよい。）○以レ暴易レ暴（上の暴は臣を以て君を伐つたをいふ、武王を指す。下の暴は紂の暴虐を指す。）○神農虞夏（神農は太古の帝王で三皇の一。虞は舜。夏は禹。）○適歸（適はユクと訓む。適歸は其人を慕ひゆきてたよること。たよつて身をおちつけること。適從。）○徂（ユクと訓じ往に同じ。死ぬこと。殂とも書く。）

餘論 殷の湯王が桀王を放ち、周の武王が紂王を伐つたことは、君臣の大義名分論より觀れば、不穩當で、湯武二王を聖人とする支那に於て種々の議論もある事である。特に萬世一系の天皇を奉戴する我が國體と比較すると大相異がある。しかし殷周革命の際にも、伯夷叔齊の如き義人が出て、あくまで君臣の大義名分を高唱強調したのは、君臣道德より見て喜ばしいことである「心學文集」（中江藤樹と熊澤蕃山の文集）に左記の歌がある。

思ひきや蕨にあらぬ梅が枝を折りて首陽の人を知るとは

武王崩、太子誦立。是爲二成王一。成王幼。周公位二冢宰一、攝レ政。管叔・蔡叔流言曰、公將レ不レ利二於孺子一。與二武庚一作レ亂。武庚者、武王所レ立紂子祿父、爲二殷後一者也。周公東征、誅二武庚・管叔一、放二蔡叔一。王長、周公歸レ政。

【訓讀】武王崩じ、太子誦立つ。是を成王と爲す。成王幼し。周公、冢宰に位して政を攝す。管叔・蔡叔、流言して曰く、「公將に孺子に利あらざらんとす」と。武庚と亂を作す。武庚とは、武王の立つる所の紂の子祿父にして、殷の後たる者なり。周公、東征して、武庚・管叔を誅し、蔡叔を放つ。王長じて周公政を歸す。

【通釋】武王が崩じて太子の誦が立つた。是を後に成王といふ。成王は幼少で(即位の時年十三)であつたから、叔父の周公が大宰相となつて、成王に代つて政治を行うた。時に(周公の兄弟の)管叔・蔡叔の二人が根もなき事を言ひふらして言ふには「周公は、あの幼兒(成王)の爲めにならぬ。(速く除く必要がある」と。かくて二人は武庚と謀つて亂を起した。武庚といふのは紂王の子の祿父と言ふ者で(武王が殷を滅した時)立てゝ殷の後繼者とした者である。そこで周公は(王命を奉じて)兵を東に進め、武庚と管叔の二人を誅し、蔡叔を追放した。成王の成長するに及んで周公はその政を成王に返した。

【語釋】周公(名は旦、武王の弟。道德政治家として孔子始め古來の儒者の讃美する所である。)　○冢宰(家は大、宰は主の意。大宰相といふこと。周代の最上の官である。例へば我が總理大臣の如きもの。)　○不レ利ニ於孺子ニ(孺子は幼兒のこと。成王を指す。管蔡二人、周公の心を知　○管叔蔡叔(管も蔡も共に封地の名。管叔鮮と蔡叔度の二人をいふ。共に文王の子、武王の弟である。叔鮮は周公の兄、叔度は弟に當る。武王が殷の武庚の監視人として置いた者である。)

西都東都

相成王

らず、周公は陽に王室を輔くるが如くなれども、陰に二心を抱き周室を奪はんとするものであると無根の流言をなしたのである。）○武庚（紂の子、字を祿父といふ。武王、殷を滅すや、殷の祀を存するが爲に武庚を殷に封じ、管蔡二弟をして之を監督せしめた。）

初武王作鎬京。謂之宗周。是爲西都。將營洛邑。未果。王欲如武王之志。召公遂相宅。周公至洛、築王城。是爲東都。以洛爲天下之中、四方入貢、道里均也。王居西都、而朝會諸侯於東都。周公・召公相成王爲左右。自陝以西、召公主之、自陝以東、周公主之。

訓讀 初め武王、鎬京を作る。之を宗周と謂ふ。是を西都と爲す。將に洛邑を營まんとす。未だ果さず。王、武王の志の如くせんと欲す。召公遂に宅を相る。周公、洛に至り、王城を築く。是を東都と爲す。洛は天下の中たり、四方入貢の道里均しきを以てなり。王、西都に居り、諸侯を東都に朝會す。周公・召公、成王を相けて左右の人と爲る。陝より以西は、召公之を主り、陝より以東は、周公之を主る。

通釋 これよりさきに武王が鎬に都を作り、之を宗周と謂ひ、西都となした。更に洛邑を築いて（東

重三譯而來

都となさうと思つてゐたが）、成し遂げずに崩じた。そこで成王は父武王の遺志通りに（東都を造營しよう）と思つた。先づ召公が（王命によつて）宅地を檢分し、周公が洛邑に行つて王城を築いた。これを東都といふ。（洛邑に築いたわけは）洛邑は天下の中央に位し、四方の諸國から貢物を運搬するのに道程が平均してゐるからであつた。成王は、平生は西都（鎬京）に居り、諸大名のお目見えは東都（洛邑）で行つた。周公召公の二人は成王を助けて左右の大切な輔佐役となつた。（天下を二つに區分して）、陜（河南省）から西は召公、それより東は周公の管轄とした。

語釋　鎬京（陝西長安縣の西。卽ち後に漢・隋・唐の帝都となつた長安の地である）　○宗周（宗は基本の意。周の王業の因つて興つた基本の地といふ義。）　○洛邑（河南洛陽縣の地。洛水の北に當るから後世これを洛陽といひ、後漢・西晋・後魏・隋の煬帝等の都した處である。我國で京都を洛陽に比し上洛・入洛・洛中・洛外などいふは之に因つたのである。）　○召公（名は奭、周公の弟で、共に周初の名臣である。）　○相レ宅（相はミルと訓ず。見定めること。宮殿を築くべき地を檢分することをいふ。「地を卜す」といふも同じ。）　○朝會（諸侯や臣下が朝廷へ參集すること。）　○左右人（左右側近にあつて輔佐する人。輔弼の臣。）

交趾南有越裳氏。重三譯而來、獻白雉。曰、吾受命國之黃耇。天無烈風淫雨、海不揚波三年矣。意者中國有聖人乎。周公歸之王、薦于宗廟。使者迷歸路。周公錫以軿車五乘。皆爲指南之制。使者載之、由扶南林邑海際、期

年而至レ國。故指南車常爲二先導一。示下服二遠人一而正中四方上。

訓讀 交趾の南に越裳氏有り。三譯を重ねて來り、白雉を獻ず。曰く、「吾、命を國の黃耇に受く、天に烈風淫雨無く、海、波を揚げざること三年なり。意ふに中國に聖人有るか」と。周公之を王に歸し、宗廟に薦む。使者、歸路に迷ふ。周公錫ふに軿車五乘を以てす。皆指南の制を爲す。使者之に載り、扶南林邑の海際に出り、期年にして國に至る。故に指南車常に先導を爲す。遠人を服して四方を正すを示す。

通釋 交趾（安南の北部）の南に越裳（安南の南部）といふ國があつた。成王の時、幾度も通譯を換へ（何ケ國かの異境を通つて）遙々と周に來て、めでたい白雉を獻上して曰ふには、「私は吾が國の長老の命を受けて使者として參りました。此の三年といふもの、天に暴風長雨の災害なく、海に怒濤海嘯の危險なく、（おかげ樣で泰平を樂しみ安樂に生活することが出來ます）。これは思ふに御國に聖人が出て善政を布いて下さるので、（天がそれに感じて、私共の國にまでこのやうな惠みを與へて下さるのに違ひございません。私は長老の命によつて御禮に上つたわけであります）」と。周公はこの天惠を

成王の仁徳によるものとし、（實は周公が聖人である爲であるが）、その白雉を先祖の靈廟に捧げて（此の由を報告した）。越裳氏の使者は國が餘り遠い所なので歸り路に迷つたから、周公は（越裳氏の國が南方だから）常に南方を示す裝置をした幌車五臺を與へた。で使者はこの車に乘り、扶南・林邑二國の海岸を傳つて、滿一年にして國に着いた。この事からして、後世天子の鹵簿には必ず指南車をつけて道案内とするやうになつた。これは遠方の人を歸服せしめ四方の國を正す意味を示すのである。

語釋 交趾（カウチ。國名。安南の北部、東京州附近を云つた。） ○越裳（國名。安南の南部。） ○重ニ三譯ニ（三は必ずしも三度と限らず、幾度もの意。譯は通譯。言葉が通じないから異つた國を通る每に通譯を要する。そこで「三譯を重ぬ」とは幾度も通譯を經たといふので、遠方から幾多の異國を過ぎて遙々來たことをいふ。） ○白雉（白色のきじ。瑞祥と稱せらる。） ○黃耇（クワウコウ。黃は老人の髮が白くなり更に黃ばんで來ること。耇は老人の顏に黑いシミの出來ること。二字ともに老人の意。故老。） ○淫雨（ながあめ。霖雨。） ○中國（支那人は其國が自ら世界の中央にあり、文華の中心であると考へてゐたので、中國とも中華とも稱した。但しこゝは交趾人が尊稱した御國といふ意を中國と譯したのである。） ○歸ニ之王ニ（その効果を我が所爲とせず王の德に本づけたこと。） ○錫（音セキ又はシヤク。訓タマフ。賜に同じ。） ○輧車（ほろをかけた車。四方にかこひのある車。一說に輕快なる車をいふと。） ○指南之制（南方を指す裝置。指南車のこと。黃帝の創意によるといふ。黃帝の條に出づ。） ○期年（期は滿の意滿一年。）

餘說 周公は實に稀に見る良政治家であり、大德行家であつた。勵精、治を圖り、禮樂制度を制定して文王武王の帝業を大成し、周八百年の基を定め、範を後世に垂れた人である。されば周初の政治は夏・殷初期の治世と合せて「三代の治」と稱し、夙に儒家の讚美する所である。孔子も之を理想の人と

して、天下に周公の道を行はんとせられたが、後年その老を歎じて、「甚だしいかな吾が衰へたるや。久しいかな吾れ復た夢に周公を見ず。」（論語述而第七篇）といはれたのに見ても、その如何に周公を慕ひ望まれたかが想はれる。

刑錯不用

得八駿

西王母

徐偃之亂

成王崩。子康王釗立。成康之際、天下安寧、刑錯四十餘年不用。康王崩。子昭王瑕立。昭王南巡狩至楚。以膠舟載之。溺不返。子穆王滿立。有造父者。以善御幸於王。得八駿馬遊行天下。將皆有車轍馬跡。王西巡。世傳、王以此時觴西王母瑤池上。樂而忘歸。徐偃王作亂。造父御王長驅歸救亂。告楚伐徐。徐敗。王將征犬戎。祭公謀父諫曰、先王耀德不觀兵。王不聽征之、得四白狼四白鹿以歸。自是荒服不至。諸侯不睦。



成王崩じ、子康王釗立つ。成康の際、天下安寧にして、刑錯きて四十餘年用ひず。康王崩じ、

子昭王瑕立つ。昭王南に巡狩して楚に至る。膠舟を以て之を載す。溺れて返らず。子穆王滿立つ。造父といふ者有り。善く御するを以て王に幸せらる。八駿馬を得て、天下を遊行し、將に轍馬跡有らしめんとす。王、西巡す。世に傳ふ、王此の時を以て西王母に瑤池の上に觴し、樂みて歸るを忘ると。徐の偃王、亂を作す。造父、王に御し、長驅して歸りて亂を救ひ、楚に告げて徐を伐たしむ。徐敗る。王將に犬戎を征せんとす。祭公謀父諫めて曰く、「先王、德を耀かして兵を觀さず」と。王聽かずして之を征し、四白狼四白鹿を得て、以て歸る。是より荒服至らず。諸侯睦じからず。

通釋　成王が崩じて子の康王（諡）名は釗といふのが立つた。成王・康王二代の間は天下太平で、（人民に法を犯す者がないので）、刑罰の設はあつても、四十餘年の久しい間、差し置いて用ふる必要がなかつた。康王が崩じて子の昭王瑕が立つた。昭王は南方諸侯の國々を巡視して楚に行つたが、（德少くして土人に憎まれてゐた爲に、漢水を渡る時）膠づけの舟に乘せられ、（中流に出ると膠が解け、船が壞れて）溺れ死んだ。で遂に都に歸ることも出來なかつた。」（昭王が崩じて）子の穆王滿が位に卽いた。時に造父といふ者があつて、馬を馭する術にすぐれてゐたので穆王の寵愛を受けてゐた。王は或時八頭の駿馬を得たので、それに車を牽かせて天下を遊びまはり、到る處に車馬のあとを殘さうと

する程であつた。王は嘗て西方に巡幸したが、世間では、此の時に王は西王母といふ仙女と瑤池のほとりで酒宴をして、樂しさの餘り歸ることを忘れたと言ひ傳へてゐる。この隙をねらつて徐の國の偃王が亂を起したので、造父は王の御者となつて、一氣に馬に鞭ち、都に歸つて亂を救ひ、楚國に命じて徐を征伐させた。徐は敗れた。其の後、王は西方のえびす犬戎を征伐しようとしたので、祭國公謀父が諫めて曰ふには、「先代の王樣方は德を盛んにして萬民を服せられ、兵力を示して壓へ付けることはなさいませんでした。（君にも軍を起すことはお止め下さいませ）」と言つたが、王は聽き入れずに犬戎を伐ち四匹の白い狼と四匹の白い鹿とを獲物にして凱旋した。（此の征伐は周の信望を落し）、此の後は遠隔の地からは貢物を持つて來ず、諸侯も次第に不和になつて來た。

語釋 刑錯（錯は差置く意。刑法はあつても其儘に放置して使用しないこと。罪人が出ないから法律を用ひる必要がないのである。） ○膠舟（ニカハづけの舟。釘を用ひないで膠で粘合した舟。中流に至れば膠がとけて舟がこわれる仕掛である。） ○善御（御は馭に同じく、馬を乘り使ふこと。） ○幸二於王一（幸は寵愛されること。） ○車轍馬跡（車のわだち、馬のあしあと。） ○觴二西王母瑤池上一（觴はサカヅキ。これより盃を取りかはすこと、卽ち酒宴の意に用ふ。西王母は仙女の名、瑤池は池の名。崑崙山中にありといふ。この話に西方巡狩に結びつけた傳說で、史傳とは爲し難い。） ○長驅（長途を一氣に馬を驅ること。） ○犬戎（西方蠻族の一種。西藏族に屬す。） ○祭公謀父（祭は畿内の國名、謀父は字、周公の裔である。） ○耀レ德（德を盛にすること。） ○四白狼四白鹿（白は方角では西に當る。犬戎は西方の蠻夷であるから、それに因んだ白色の動物で、五行思想に本づくものである。） ○荒服（天子の國都を中心として其四方千里を王畿といひ、その外五百里四方を甸服、又その外五百里を侯服、又その外五百里を綏服、又その外五百里を要服、又その外五百里を荒服と云つた。故に荒服は最も王都に遠く王化に霑はぬ僻遠の蠻夷の地である 荒は

田野荒れて人口稀薄の地の意。服は王事に服する意である。以上これを五服と稱した。)

餘論 西王母は陰陽五行說の產物で、實在の人でないと思ふ。西王母の名は是より後の世にあらはれて、其時代々々の支那人の知つて居た西方の極の地方をさすものと解すべきである。

厲王防口

共和之政

崩。子共王繄扈立。崩。子懿王囏立。崩。弟孝王辟方立。崩。子夷王燮立。下堂而見諸侯。楚始僭稱王。夷王崩。子厲王胡立。無道、暴虐侈傲。得衛巫、使監國人之謗者、以告則殺之。道路以目。王喜曰、吾能弭謗矣。或曰、是障也。防民之口、甚於防川。川壅而潰、傷人必多。王弗聽。於是國人相與畔。王出奔彘。二相周召共理國事。曰共和者十四年。而王崩于彘。子宣王靜立。任賢使能。有召穆公・方叔・尹吉甫・仲山甫等。爲政於內外。王化復行、周室中興焉。

訓譯 崩ず。子共王繄扈立つ。崩ず。子懿王囏立つ。崩ず。弟孝王辟方立つ。崩ず。子夷王燮立

つ。堂を下つて諸侯を見る。楚始めて僭して王と稱す。夷王崩ず。子厲王胡立つ。無道にして暴虐侈傲なり。衞の巫を得て、國人の謗る者を監せしめ、以て告ぐれば則ち之を殺す。道路目を以てす。王喜んで曰く、「吾能く謗を弭む」と。或ひと曰く、「是れ障ぐなり。民の口を防ぐは、川を防ぐよりも甚だし、水壅つて潰ゆれば、人を傷ふこと必ず多し」と。王聽かず。是に於て國人相與に畔く。王、彘に出奔す。二相周召共に國事を理む。共和といふ者十四年にして、王、彘に崩ず。子宣王靜立つ。賢に任じ能を使ふ。召穆公・方叔・尹吉甫・仲山甫等有り。政を内外に爲す。王化復た行はれ、周室中興す。

【通釋】(前略)夷王燮が立つたが、自ら堂上より下つて諸侯に會見するといふ程に、(天子の威光が衰へてゐた)。だから楚國の如きは始めて僭越にも王と稱するやうになつた。夷王崩じて子の厲王が立つたが、沒義道な人で、民を虐げ苦しめながら、自らは侈を極め高ぶつてゐた。そして衞國生れの巫女を得て、之に國民の王の惡口をいふ者を探偵させ、巫女が告發したものは悉く之を殺した。(そこでウツカリ口に出しては言へないから)、道路に相遇ふものは、互ひに目と目を見合せて怨を語り合つた。(かくて國人の非難が聞えなくなつたので)、王は、「朕の威光でそしりがやんだ」と曰つて喜んだ。こ

れを聞いた或人が諫めて曰ふには、「(これは民が心から服して謗らないのではありませぬ)。無理やりに民の口を塞いだのであります。民の口を堰きとめるのは、その危險さは川の水をせき止めるよりも甚しうございます。水路がふさがつて堤防が切れると、必ず多くの人命を損ふ。まして(民心を抑へつける害は思ひやられます」と。しかし王は聽き入れなかつた。國民は堪へきれなくなつて、我も彼もと徒黨を組んで謀叛を起した。王は遂に都に居たたまらず、彘の國へ逃げて行つた。(厲王の去つた後は)周公(周公旦の子孫)召公(召公奭の子孫)の二人が心を合せて國家を治めた。此の間を共和の世と曰つた。斯くすること十四年にして、厲王は彘で崩じたので、子の宣王が位をついだ。宣王は賢人を信任し、有能の人物を採用した。その中でも召穆公・方叔・尹吉甫・仲山甫等が有名である。(宣王はこれらの賢人と內治外交に精を出したので、周の德の感化が復び行はれ、(一時衰へかかつた)王室はこゝにまた興隆するやうになつた。

語釋　下レ堂而見ニ諸侯一(天子は堂上にあつて諸侯を見るが禮である。今、堂を下る。これ周室の衰へたるをいふ。)　○楚始僭稱レ王(僭は分を越えて目上の眞似をすること。上に擬すること。僭越。僭稱。)　○侈傲(二字ともにオゴルと訓ずるが、侈は奢侈贅澤のこと。傲は傲慢。不遜なること。)　○巫(音フ。みこ。かんなぎ。男を覡、女を巫といふ。神のお告げを受けて吉凶禍福を前知すると稱するもの。)　○道路以レ目(路上で行き逢ふもの、口に出して言へば殺されるから、互に目と目を見合せて心を通ずること。)　○弭(音ヒ。やむ。とゞむ。)　○水壅而潰(壅は音ヨウ。ふさぐ。壅塞。潰はツキユと訓む。破れつぶれること。川の水が流れ場が無くなつて遂に堤防を切るをいふ。)

○共和（協和の義。こゝは二相が心を協せて政事を執るの意。寡頭貴が政治の一種である。今の所謂共和政治とは本質的に異る。）

崩。子幽王宮涅立。初夏后氏之世、有二龍降于庭。曰、予褒之二君。卜藏其漦、歷夏殷、莫敢發。周人發之。漦化爲黿。童妾遇之而孕、生女。棄之。宣王時、有童謠。曰、檿弧箕服、實亡周國。適有鬻是器者。宣王使執之。其人逃。於道見棄女、哀其夜號而取之、逸於褒。

訓讀 崩ず。子幽王宮涅立つ。初め夏后氏の世に、二龍有りて庭に降る。曰く、「予は褒の二君なり」と。卜して其の漦を藏めしむ。夏殷を歷て、敢て發くもの莫し、周人之を發く。漦、化して黿と爲る。童妾之に遇ひて孕み、女を生む。之を棄つ。宣王の時に童謠有り。曰く、「檿弧箕服、實に周國を亡さん」と。適〻是の器を鬻ぐ者有り。宣王之を執へしむ。其の人逃る。道に於て棄女を見、其の夜號くを哀みて之を取り、褒に逸す。

通釋 宣王が崩じて子の幽王（名は）宮涅が立つた。（幽王の時に一つの事件が起つたが、其の起りは

褒似不レ笑

ずつと昔にある、といふのは)、夏の世に二つの龍が王宮の庭に降りて來て曰ふには、「吾等は褒の國の二先君である」と。夏王が之を卜はせると、龍の(口から吐いた)沫を請ひ受けて藏つて置くとよいといふことだつたので、その通りに龍の沫を櫝に入れて密封しておいた。夏殷の世に於ては誰もこの櫝をひらいて見る者はなかつたが、周になつて(厲王の時)始めて之をあけて見た。すると沫は流れ出て忽ちゐもりに變つた。若い腰元がこのゐもりに出會つて妊娠し、女の子を生んだので、恐れて棄てた。その後、宣王の時に「山桑の弓、荻のえびら、これを賣る者、周を亡さん」といふ童謠が流行した。折も折、この二つの物を商ふ者があつたので、宣王は早速その者を逮捕させようとした。商人はいちはやく逃げ出した。だんだん行く中に女の棄兒(かの童妾が生んだ子供である)が夜泣いてゐるのを見て、可哀さうに思つて拾ひ上げ、褒の國へ逃げて行つた。

語釋 漦(音シ。あわ。龍の吐いたあわ。) ○黿(音ゲン。ゐもり。又とかげ。) ○童妾(若い腰元。めのわらは。) ○檿弧箕服(檿は山桑、弧は弓、箕は草の名で荻に似てゐる。一說には竹の名といふ。服は箙に通じてエビラ、矢を盛るもの。こゝではその弓と箙とを賣る者をさす。) ○鬻(音イク。ヒサグと訓む。賣ること。) ○逸(にげる。はしる。)

至二幽王之時一、褒人有レ罪。入二是女於王一。是爲二褒姒一。王嬖レ之。褒姒不レ好レ笑。王欲

其笑萬方不笑。故王與諸侯約、有寇至則擧烽火、召其兵來援。乃無故擧火。諸侯悉至。而無寇。褒姒大笑。王廢申后及太子宜臼、以褒姒爲后、其子伯服爲太子。宜臼奔申。王求殺之。弗得。伐申。申侯召犬戎攻王。王擧烽火徵兵。不至。犬戎殺王驪山下。諸侯立宜臼。是爲平王。王以西都逼於戎、徙居東都王城。時周室衰微、諸侯強幷弱。齊・楚・秦・晉、始大。平王之四十九年、卽魯隱公之元年。其後孔子修春秋始此。


幽王の時に至り、褒人罪有り。是の女を王に入る。是を褒姒と爲す。王之を嬖す。褒姒笑ふことを好まず。王其の笑はんことを欲し、萬方すれども笑はず。故て王、諸侯と約す、寇、至る有らば、則ち烽火を擧げ、其の兵を召して來援せしめんと、乃ち故無くして火を擧ぐ。諸侯悉く至る。而も寇無し。褒姒大いに笑ふ。王、申后及び太子宜臼を廢し、褒姒を以て后と爲し、其の子伯服を太子と爲す。宜臼、申に奔る。王求めて之を殺さんとす。得ず。申を伐つ。申侯、犬戎を召して王を攻

む。王、烽火を擧げて兵を徵す。至らず。犬戎、王を驪山の下に殺す。諸侯、宜臼を立つ。是を平王と爲す。西都の戎に逼れるを以て、徙つて東都の王城に居る。時に周室衰微して、諸侯、强は弱を倂す。齊・楚・秦・晉、始めて大なり。平王の四十九年は、卽ち魯の隱公の元年なり。其の後孔子春秋を修する、此に始る。

通釋 次の天子幽王の代になつて、褒國が或事によつて王に罪を得た。(褒は罪の贖の爲に、旣に成長してゐた此の妖しい)女を王にさし上げた。これを褒姒と名づけ、王はいたく寵愛した。ところが褒姒はどうしたことか笑ふことを好まないので、王は是非とも其の笑顏を見たいと思ひ、色々方法を講じて見たが成功しない。(そこで一策を案じた)。それは嘗て王は諸侯に向つて、若し外敵が都に攻め寄せて來たならば、のろしを擧げるから、各々兵を引きつれて救ひに來いと約束をしておいたので、突然何の理由も無しにのろしをあげたものだ。諸侯は驚いて約束通り悉く援けに來た。しかも敵は何處にも居ない。(まるで狐につままれたやうな恰好であつた)。此の有樣を見た、褒姒は、始めて大笑いをした。王は愈々褒姒を愛し、申皇后及び皇太子の宜臼を退けて、その代りに褒姒を皇后に進め、褒姒の生んだ伯服といふ子を皇太子に立てた。宜臼は母の國の申をさして逃げて行つたので、王はこ

れを見付けて殺さうとしたが、遂に捜し出すことが出來なかつた。そこで王は申國征伐の軍を起したが、申の君は(西方蠻族の)犬戎を招いて却て王を攻めた。王は又のろしを擧げて諸侯を召集したが、(諸侯の方ではまたかと言つて)誰も援けに來るものはなかつた。その爲に王は犬戎の王に驪山の麓で殺された。諸侯は相謀つて宜臼を迎へて位に卽けた。是を平王といふ。平王は(犬戎の勢が益々强く)西都(鎬京)はこれに接近してゐるので危險に思ひ、都を東都の洛邑に遷した。當時、周の皇室は威光益々衰へ弱つて(威令全く行はれず)、諸侯の勢力のある者は勝手に弱い者を征服して土地を廣めた。(後に出てくる)齊・楚・秦・晉は此の時分からだん／＼强大になつて來た。平王の四十九年は、卽ち魯の國の隱公の元年に當る。後に孔子が「春秋」を書かれたが、それはこの年の事から書き起されたのである。

語釋 萬方(百方も同じ、あらん限りの方法を講ずること。) ○故(カツテと訓む。嘗の意。或はモトと訓む、舊の意、また通ず。史記には「萬方故不レ笑」とある。さすればコトサラニの意で故の字の置き場が間違つたのだらうといふ。或はさうかも知れない。) ○寇(音カウ。あだ。敵。特に大擧して來る外敵をいふ。) ○烽火(のろし、山上に煙をあげて合圖とするもの。) ○驪山(リザン。山名。陝西省臨潼縣の東南。) 逼ニ於戎一(戎は犬戎で西方の蠻族。逼はそれに接近してゐるの意で危險であるといふ意。) ○西都・東都(西都は武王の營んだ鎬京。東都は成王の時周公召公に命じて造らせた洛邑。詳しくは成王の條に出づ。) ○徙ニ東都一(これを周の東遷といひ、それ以前を西周以後を東周といふ、) ○强幷レ弱(强國は弱國を侵略して其の地を幷合すること。弱肉强食。) ○孔子修ニ春秋一(春秋は書名。魯の隱公元年卽ち周の平王四十九年＝西紀前七二二年から哀公十四年卽ち周の敬王三十九年＝西紀前四八〇

年まで、十二代、二四二年間の史實を、孔子が魯の記錄によつて年表的に書かれたもの。之を春秋と名づけたのは四季中春秋の二字を借りて一年中の記錄といふ意味を表はしたものである　當時周室衰へ、諸侯専恣にして、天下無政府の状態となり、民、生を安んずるを得ず、孔子大いに之を歎じ、是非得失を論じ、大義名分を明にせんが爲に此の書を作られた。文章簡勁にして嚴正、故に孟子は「孔子、春秋を成して亂臣賊子懼る」と云つた。）

齊桓晉文

問鼎輕重

孔子生

趙魏韓爲侯

平王崩。太子之子、桓王林立。崩。子莊王佗立。崩。子釐王胡齊立。齊、桓公始霸。釐王崩。子惠王閬立。崩。子襄王鄭立。晉、文公始霸。襄王崩。子頃王壬臣立。崩。子匡王班立。崩。弟定王瑜立。楚、莊王使人問鼎輕重、王孫滿卻之。定王崩。子簡王夷立。吳始僭稱王。簡王崩。子靈王泄心立。孔子生於其時。靈王崩。子景王貴立。崩。子悼王猛立。庶弟、子朝弒之。晉人攻子朝、而立敬王丐。孔子歿於其時。敬王崩。子元王仁立。崩。子貞定王介立。崩。子哀王去疾立。弟思王叔襲弒之而自立。少弟考王嵬又攻殺思王而自立。崩。子威烈王午立。晉、趙氏・魏氏・韓氏始侯。周自東遷以來、及是二十世、而愈微。諸

諸侯稱王

侯用レ兵ヲ爭フレ强ヲ。號シテ爲ス二戰國一ト。

訓讀 訓讀・通釋ともに略す。この條は春秋時代に於ける周室王統の次第を述べ、併せて後に記すところの五霸の出現、及び聖人孔子の生卒の年代を記したものである。なほ語釋を參照されたい。

語釋 齊桓公始霸（霸の意義は前に出づ。當時の覇者とは諸侯の長となつて王者の政教を把持するものをいふ。こゝは覇者の第一たる齊の桓公の出現を明かにしたもので、以後、晉の文公、楚の莊王と段々に覇者が出て來る。） ○問二鼎輕重一（鼎は夏の禹王が九州の金を鑄て造つた所謂九鼎である。夏殷周三代の天子が相傳へて寶器としたことも前に述べた。その重さを問ふといふのは周の勢力を見くびり、天下を取らうとする下心を示したものである。事は「左傳」宣公三年に出てゐる。それによると、楚の莊王が陸渾の戎を伐つて、周の都洛邑に至り、大に兵威を周の郊外に示したので、周の定王は大夫の王孫滿を遣はして之を慰勞せしめた處、莊王は人をして周の傳國の寶たる鼎の重さ如何と問はしめた。王孫滿は「天下を有つのは王天の德によることで、鼎の大小輕重に關係はない。今周の德衰へたりと雖も天命未だ改まらず、鼎の輕重を問はれることは御無用でござる」と答へて、その野望を一蹴した。この故事によつて、人の內兜を見すかすとか、實力を見くびつて馬鹿にするとかいふ意味に「鼎の輕重を問ふ」といふ。） ○庶弟（妾腹の弟。） ○殺二思王一（一本に「弑二思王一」とある。） ○趙・魏・韓（共に晉の家老であつたが、周の威烈王の時、獨立して大名となり、遂に戰國七雄の中に數へられるやうになる。） ○戰國（周の東遷以後威烈王まで約三百年を春秋、威烈王より周の滅亡まで二百餘年を戰國といふ。詳しくは後章に讓る。）

威烈王崩ズ。子安王驕立ツ。齊ノ田氏始メテ侯タリ。安王崩ズ。子烈王喜立ツ。崩ズ。弟顯王扁立ツ。諸侯皆僭シテ稱スレ王ト。顯王崩ズ。子愼靚王定立ツ。崩ズ。子赧王延立ツ。五十九年、與二諸侯一約シテレ從ヲ攻ムレ秦ヲ。秦ノ昭王攻ムレ周ヲ。赧王奔リレ秦ニ、頓首シテ受ケレ罪ヲ、盡ク獻ズ二其ノ邑ヲ一。秦受ケテレ獻ヲ、而歸ス二赧王ヲ一

於周。以卒。周爲天子三十七世。初夏亡九鼎遷殷。殷亡遷周。成王定鼎於郟鄏。卜曰、傳世三十、歷年七百。至是乃過其歷。凡八百六十七年。

訓讀 (前略)子赧王延立つ。五十九年、諸侯と從を約して秦を攻む　秦の昭王、周を攻む。赧王、秦に奔り、頓首して罪を受け、盡く其の邑を獻ず。秦、獻を受けて赧王を周に歸す。以て卒す。周、天子たること三十七世なり。初め夏亡びて、九鼎、殷に遷る。殷亡びて周に遷る。成王、鼎を郟鄏に定め、トして曰く、「世を傳ふること三十、年を歷ること七百ならん」と。是に至りて乃ち其の歷に過ぐ。凡て八百六十七年なり。

通釋 (前略)赧王の五十九年、(東六ケ國の)大名と同盟して、西のかた秦を亡さうとしたが、却て秦の昭王に攻められ、赧王は敗れて秦に降參し、平身低頭して罪を詫び、一切の領地を秦王に差出した。秦王は之を受け入れて赧王を周に歸した。間もなく赧王は崩じた。周は武王が帝位に卽いてから三十七代つゞいたが、(是に至つて滅亡した)。昔、夏が亡んだ時、寶器の九鼎は殷の手に渡つたが、殷が亡んで周に傳へられた。周の成王が(東都洛邑を造營して)此の鼎を郟鄏(洛邑)に安置し、「國の土臺を

据ゑた時、周の命數を卜つて見た所が、王位を繼承すること三十代、年數にして七百年であらうと出た。しかし事實はその年數を超過し、凡てゞ八百六十七年であつた。

語釋 約レ從攻レ秦（從は縱でタテのこと。南北を縱といひ東西を横といふ。戰國の世、諸侯の主なるもの七。その中、秦だけは西方に偏してゐる。而も最も强盛である。そこで他の韓・魏・趙・齊・楚・燕の六國が南北に合同して西方の秦に當ることを合從といふ。後章に詳かである。） ○頓首（頭を地につけて禮すること。ひれふしてお辭儀をすること。ぬかづく。） ○定二鼎於郟鄏一（郟鄏は地名。即ち東都洛邑のこと。九鼎をこの地に安置して帝都と定めたこと。この故事により都を定めることを定レ鼎といふ。） ○過二其歷一（歷は數の意。年數のこと。）

餘論 東周も赧王の後、なほ東周君といふのが七年間、祖先の祀を奉じて居た故、周一代はすべて三十八世八百七十四年と見る說もある。

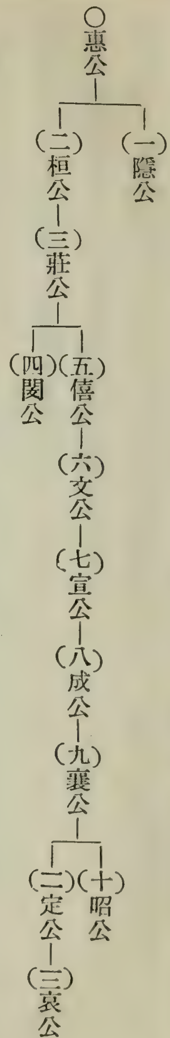
春秋戰國

序説

春秋時代は支那史上最も深く注意すべき時代の一にして、漢文史籍の一としての「春秋」の內容、精神、及び其後世に及ぼせる勢力影響は甚だ偉大なものである。よつて今序説として「春秋」について解說し、且つ其大體を考察しようと思ふ。

第一、總說……「春秋」は周時代の魯の史記にして、孔夫子の筆削修正にかゝるものである。魯侯伯禽周公の元子より第十三世なる隱公の元年より始まつて、哀公の十四年卽ち所謂獲麟の年に至るまで、十二公、二百四十二年間の歷史にして、實に支那の編年體歷史の元祖である。而して其十二公二百四十二年とは左の如し。

隱公十一年	桓公十八年	莊公三十二年	閔公二年
僖公三十三年	文公十八年	宣公十八年	成公十八年
襄公三十一年	昭公三十二年	定公十五年	哀公十四年



孔夫子が春秋を筆削するや、名を正し實を顯はし、以て僭亂を討ずるを旨とした。換言すれば當時列國君臣の行事を擧げて、以て其善惡邪正を明にされたと云はれる。蓋し教を史編に寓するものにして、儒者は之を尊重して、「王法之に寓す」と爲した。然れども其文辭は簡潔にして、其旨は博く、以て其詳密なる史實を考ふるに足らない。是に於てか公羊、穀梁、左氏の三家、各〻之が傳をつくり、以て其旨を解說した。是れ卽ち所謂春秋三傳である。

第二、名義。……何故に編年體の歷史を春秋と名けたかといふと、晉の杜預の註の春秋左傳の序に

記事者、以事繫日、以日繫月、以月繫時、以時繫年、所以紀遠近別同異也、故史之所記、必表年以首事、年有四時、故錯擧以爲所記之名也、

とあるが如く、一年四時春夏秋冬の內、春と秋とを錯へ擧げて、夏と冬とを略し、春を以て夏を兼ね、

秋を以て冬を兼ね、而して編年繫月史の名としたのである。彼の春は陽にして襃賞を司り、秋は陰にして、刑罰を司り、一賞一罰、春の如く秋の如くなるが故に春秋と名くといひ、或は又、春、麟を獲て、秋に至つて書成れるが故に春秋と名くるなりといふ說の如きは、いづれも俱に首肯し難き後人附會の說たるに過ぎない。

　而してまた單に春秋といへば、直に孔夫子が筆削せる魯の春秋を意味するを常とするが、右に述べたるが如く、春秋とは魯國の史記にのみ限れる定名にあらずして、一般編年體國史の總稱たる普通名詞と考ふるを允當とする。漢書藝文志にいはく、

　古之王者、左史記言、右史記事、事爲春秋、言爲尙書、

と、亦以て春秋が編年體歷史の普通名詞たることを知るべきである。

　斯の如く春秋は普通名詞にして、魯國の史記にのみ限れる定名にあらざるが故に、當時の列國多くは春秋を有した。例へば「國語」の晉語第七には、

　羊舌肸習於春秋、乃召叔嚮、（叔嚮卽羊舌肸也）使傅太子彪、

とあり。また同書の楚語上に、楚の申叔時が楚の莊王より太子を敎ふるの法を問はれたるに對へたる

言を記して、

敎之春秋、而爲之聳善而抑惡焉、以戒勸其心、云々

とあり。管子の權數篇には、

春秋者、所以記成敗也、

とある。是れ晋楚齊、皆春秋を有したのである。また墨子の明鬼篇には、周春秋、宋春秋、齊春秋、燕春秋、百國春秋などの名を列ね、韓非子の備內篇には、桃左春秋の名あり、而して又汲冢瑣語には夏春秋、殷春秋あることをいふ。是れ皆以て魯國の外の當時の列國に於て、しかも孔夫子以前よりして、何れも春秋を有したことを想知することが出來る。果して然らば、孟子の離婁章句下に於て、

王者之迹息而詩亡、然後春秋作、晋之乘、楚之檮杌、魯之春秋、一也、

といふ所の晋の乘及び楚の檮杌のごときは、如何に之を解すべきやといふに、是等の二名は、晋楚二國が普通一般の春秋といふ本名の外に私に立てたる別號にして、魯國にはかゝる別號なきが故に、其本名たる春秋の稱を用ひたるものと解して不可なきものである。

春秋が孔夫子の創めたる名稱でないことは、大略上陳の如し。而してまた魯國に於ては、伯禽が

はじめて魯に封ぜられたる頃よりして、已に祝宗卜史といつて、大史は大祝、宗人、大卜の三官と相併び立ちて、國史編纂の職務に從事したことは、春秋左傳の定公四年の傳に明文がある。次にまた魯國に於る春秋の明文に見ゆるものは、昭二年の左傳に、

晉侯使韓宣子來聘、中略 觀書於大史氏、見易象與魯春秋、曰、周禮盡在魯矣、

とあるを始とする。是れ實に孔夫子が春秋を修められたるより數十年前の事である。尙またこゝに注意すべきは、上に引きたる文に於て魯春秋とあることである。春秋がもし魯史に限れる定名ならば、それはたゞ春秋とのみいへばよい。何ぞ蛇足にあらずんば即ち贅疣ともいふべき魯の一字を加ふるの要があらう。然るに今既に魯の一字を加ふるを以て考ふれば、是れ亦以て春秋は魯史の定名にあらずして、各國史書の通名たることの一證となすに足りる。

第三、春秋の趣意。……孔夫子が春秋を筆削修正せる趣意は果し何れの邊に存するやといふに、孔夫子の世に出でたるは、恰も東周の季世にして、君臣上下の顚倒、大義名分の乖亂、いよ／＼激しき時代である。孔夫子は之を觀て大に痛歎し、其生國にして而かも史官の法明かなる魯の春秋を修め、之を本據として筆削修正を加へ、極めて愼重にして且つ極めて謹嚴なる筆法によりて、名を正し實を顯

はし、以て大義名分の存する所を明にされたのである。孟子滕文公章句下に、

世衰道微、邪説暴行有作、臣弑其君者有之、子弑其父者有之、孔子懼作春秋、

とあり、漢書藝文志には、

周室既微、載籍殘缺、仲尼思存前聖之業、乃稱曰、夏殷之禮、杞宋不足徵也、以魯周公之國、禮文備物、史官有法、故觀其史記、據行事仍人道、因興以立功、就敗以成罰、假日月以定曆數、藉朝聘以正禮樂、有所褒諱貶損、

とあるが如き、或はまた莊子の天下篇に、

春秋道名分、

といひ、漢の董仲舒の對策に

春秋大一統者、天地之常經、

といふが如きは、いづれも皆この意をいへるものである。

すでに孔夫子の趣意は、君臣上下の別を正し、大義名分の存する所を明にせんとするものなれば、もし君臣上下の別を顚倒し、大義名分を乖亂するが如き亂臣賊子あらば、孔夫子は極めて愼重なる筆

を執つて其是非順逆を判決し、極めて謹嚴なる褒貶を下し、以て亂臣賊子の心膽をして戒懼する所あらしめんとした。是れ即ち孟子滕文公章句下に、

孔子成春秋、亂臣賊子懼、

とある所以。蓋し誣言でない。

以上述べたる所によりて考ふれば、孟子の言はやゝ誇張に失するやの嫌なきにしもあらざれども、兎に角、孔夫子の意は、名分を正し亂賊を禁ずるにあり、而して其春秋は褒貶の書なりと考ふるが妥當である。

果して然らば、其褒貶の法如何といふに、孔夫子の褒貶は、彼の一字褒貶などゝいひて、其極端に至りては、史上の人を論ずるに苛細峻酷、宛然として法吏の罪を決するが如く、春秋を引いて以て法律の原とするが如き論者の褒貶にはあらずして、たゞ其事實有りの儘を直書して、其人の善惡をして隱るゝ所なく、其善惡をして後世に沒せざらしむるやうに、至つて穩當中正なる褒貶であると考ふるを允當とする。この事については、清朝の名儒錢大昕（字は曉徴、一字は辛楣、竹汀と號す、或はまた其官號によりて錢詹事とも稱せらる、經史の學に深く、殊に史類の著書に富み、純粹の經學者たる

惠棟の門下に於て異彩を放てるもの）のいふ所尤も妥當なる點あるを以て、煩を顧みずして之を抄錄すること左の如し。

春秋論

春秋褒貶善惡之書也、其褒貶奈何、直書其事、使人之善惡無所隱而已矣、曰崩、曰薨、曰卒、曰死、以其位爲之等、春秋之例、書崩、書薨、書卒、而不書死、死者庶人之稱、庶人不得見於史、故未有書死者、此古今史家之通例、非褒貶之所在、聖人不能以意改之也、魯之桓公宣公、皆與聞乎弑者也、其生也書公、其死也書薨、無異詞、文姜淫而與聞乎弑者也、其生也書夫人、其死也亦書薨、書小君、無異辭、書薨者、內諸侯與小君之例也、非褒之也、春秋不奪之也、然猶可、曰此爲君諱爾、公子遂之弑其君之子、季孫意如之逐君、皆大惡也、其死也亦書卒、無異辭、書卒者、內大夫之例也、非褒之也、春秋不奪之也、然猶可、曰此爲宗國諱爾、吳楚僭王之君也、鄭伯寤生射王中肩者也、宋公鮑與聞乎弑者也、其生也書爵、其死也書卒、皆無異辭、書卒者、外諸侯之例也、非褒之也、春秋亦不奪之也、弑逆之罪大矣、以庶人之例、斥之曰死、可乎、曰不可、是諸人者論其罪、當肆諸市朝、僅々夷諸庶人、不足以蔽其辜、論其位、則彼固諸侯也、大夫也、夫人也、未嘗一日降爲庶人、而我以庶

人書之、非其實矣、紀其實於春秋、使其惡不沒於後世、是之謂褒貶之正也、……（潛研堂文集卷二）然り而して宋の鄭樵の「六經奥論」及び宋の呂大圭の「春秋五論」（二書ともに通志堂經解の中にあり）等には、春秋には褒貶なしとの論がある。亦一讀の價値ないでもない。宋の歐陽修、明の王守仁等も、また春秋褒貶なしとの說を立てたが、一家見たるに過ぎない。新唐書並に新五代史の如きは、ともに歐陽修の手に成つたものであるが、この二史を見るに、また褒貶を用ひたるを以て考ふれば、其家說の信ずるに足らざることを知るというても不可ないやうである。然れども彼の朱子の通鑑綱目、及び宋の胡安國の春秋傳の如きは、峻嚴に失し、史家の正法と爲すことは出來難いやうである。

元來、褒貶を以て歷史の第一の大趣意となし、事實を傳ふるを以て第二の副務となし、歷史を以て道德修身の教科書視するは、支那の古今の歷史家に免れ難き所であつて、孔夫子の如き才學識德行の五長を兼備されるにもかゝはらず、褒貶の史はなか／＼容易の事でないやうである。されば韓愈も之を戒めて左の如くいつて居る。

史氏褒貶大法、春秋已備之矣、後之作者、在據事跡實錄、實錄則善惡自見矣、然此非淺陋偸惰者所能、況褒貶邪、

之を要するに、春秋は孔夫子が

知我者其惟春秋乎、罪我者其惟春秋乎、……(孟子滕文公章句下)

といはれたるを見れば、之を作るに於ては、實に特別の趣意を有せられたことを想知することが出來る。

第四、三傳。……秦皇焚書の後、春秋を傳ふるものに、公羊、穀梁、左氏、及び鄒氏、夾氏の五家があつたが、鄒夾二家は微にして前漢の末に至つて亡び、今存するものは、公、穀、左氏の三家のみである。是れ卽ち所謂春秋の三傳であつて、いづれも皆孔子の春秋が其趣旨は博くして、且つ深きにもかゝはらず、其文辭甚だ簡潔にして以て詳細の史事を考ふるに足らざるによつて、各々其傳を作つて以て春秋の本旨を發揮せんとしたものである。

周平王以後、爲春秋之世。其列國與周同姓者、曰魯、曰衞、曰晉、曰鄭、曰曹、曰蔡、曰燕、曰吳。其與周異姓者、曰齊、曰宋、曰陳、曰楚、曰秦。此其大者。餘小國若春秋所書杞・許・滕・薛・邾・莒・江・黃之屬、不可盡述。於十二列國之中、有齊桓公・宋襄公・晉文公・秦穆公・楚莊王五霸。事跡。若論春秋諸國之終始、有未及戰國而先亡者。有既及戰國而後亡者。各擧其槩。周威烈王以後、爲戰國之世。則秦・楚・燕・齊・趙・魏・韓、七大國而已。秦・楚・燕、猶爲春秋之舊國。田齊・韓・魏・趙則爲戰國之新國。凡春秋戰國之國、雖繫周之諸侯、而國異政、實不繫於周。難於盡載。附見周之下方。其時各有前後。則觀者詳之。

訓讀 周の平王以後を、春秋の世と爲す。其の列國、周と同姓なる者を、魯と曰ひ、衞と曰ひ、

晉と曰ひ、鄭と曰ひ、曹と曰ひ、蔡と曰ひ、燕と曰ひ、吳と曰ふ。其の周と異姓なる者を、齊と曰ひ、宋と曰ひ、陳と曰ひ、楚と曰ひ、秦と曰ふ。此れ其の大なる者なり。餘の小國、春秋に書する所の杞・許・滕・薛・邾・莒・江・黃の屬の若き、盡くは述ぶ可からず。十二列國の中に於ては、齊の桓公・宋の襄公・晉の文公・秦の穆公・楚の莊王の五霸の事跡有り。若し春秋諸侯の終始を論ぜば、未だ戰國に及ばずして先づ亡びし者有り。既に戰國に及んで後亡びし者有り。各〻其の槩を擧ぐ。周の威烈王以後を、戰國の世と爲す。則ち秦・楚・燕・齊・趙・魏・韓の七大國のみ。秦・楚・燕は猶ほ春秋の舊國たり。田齊・韓・魏・趙は則ち戰國の新國たり。凡そ春秋戰國の國は、周に繫るの諸侯なりと雖も、而も國ごとに政を異にし、實は周に繫らざれば、盡くは載せ難し。周の下方に附載せり。其の時、各〻前後有れば、則ち觀る者之を詳かにせよ。

【通解】（これは編者曾先之の小序である）。周の平王以後（二百四十餘年間は孔子の「春秋」にその事蹟が記されてあるので、この時代を）春秋の世といふ。當時の諸侯の中、周と姓を同じうして（親族關係にあるものは）、魯以下の八國、周と姓を異にし（親族の關係のない外様の大名は）、齊以下の五國で、（都合十三國が）、大國である。その他の小國――「春秋」に記されてある杞以下の

諸國の如きは、皆が皆まで本書に書くといふわけには行かぬから(省略した)。大大名の十三國の中では、齊の桓公以下五人が覇者となつたといふ顯著な事跡もある。もしそれ春秋諸國の興亡の終始を考へて見るに、未だ戰國の世に入らぬ先に早く滅んだ國もあれば、既に戰國に入つてから亡んだ國もあつて一定しないが、何れもその概略を擧げることにした。周の威烈王以後(凡そ二百年間)を戰國の世といふ。(この時代には諸侯の數も減じて)秦・楚・燕・齊・趙・魏・韓の七大國だけがあつた。いはゆる戰國の七雄である。(その他は皆これらの國に併呑されてしまつたのである)。この七大國中、秦・楚・燕の三國は春秋時代からの舊國であり、田齊・韓・魏・趙の四國は戰國になつてから新に勃興した國である。凡て春秋戰國時代の國は元來周の支配を受ける諸大名であるのだが、彼等は(周の朝廷を侮つて)めい〳〵勝手な政治を施して事實上、周の支配を離れてるるので、(さきに周の歷史を述べた際に)其の中に入れ込んで記すことは出來なかつた。よつて今こゝに周章の下に(春秋戰國といふ)一項を設けて附載することにした。(但し國ごとに事件を記してゆくから、年代順にはなつて居らず)、後に起つた事件が前になり、前に起つた事件が後になつてゐることがあるから、讀者は詳しく知り分けるやうにされたい。

季札懸レ劍

吳姬姓、太伯・仲雍之所レ封也。十九世至二壽夢一、始稱レ王。壽夢四子。幼曰二季札一。札、賢。欲下使二三子相繼立一、以及上レ札。札、義不レ可。封二延陵一。號曰二延陵季子一。聘二上國一、過レ徐。徐君愛二其寶劍一。季子心知レ之。使還、徐君已歿。遂解レ劍懸二其墓一而去。

語釋 列國(諸侯の國をいふ。) ○與レ周同姓(姓は生で、その由つて出でし所を明にして種族を分つたものである。故に同祖から出たものを同姓といふ。周は初め多くの同姓を封じて王室の藩屏となし兼て異姓諸侯を掣肘せしめた。こゝにいふ與レ周同姓とは卽ちそれで、周室に同じ姬姓を稱する周の同族の諸侯を指す。) ○江黃之屬(屬は類の意。) ○十二列國(上來列擧せし所の春秋時代の列國は十三國である。然るに玆に十二列國としたのは史記十二諸侯年表の說に據つて吳を除いたのである。吳は其地夷狄の域にあり、故に夷狄として賤んで數へないとも云ひ、吳は最後にて事蹟も簡略であるからだとも云ふ。) ○田齊(齊はもと太公望が封ぜられ姜姓であるが、その國老の田氏が後に獨立して諸侯となつたから、それを區別する爲に田齊と云つた。田氏齊の意である。) ○繫レ周之諸侯(繫はカヽルと訓む。又ツナガルとも訓み、周に統制され、周の支配を受けることをいふ。) ○周之下方(方は邊といふに同じく、章下の意。周の紀の章下に附載したといふこと。)

訓讀 吳は姬姓にして、太伯・仲雍の封ぜられし所なり。十九世にして壽夢に至り、始めて王と稱す。壽夢、四子あり、幼を季札と曰ふ。札、賢なり。三子をして相繼いで立たしめ、以て札に及ぼさんと欲す。札、義もて可かず。延陵に封ぜらる。號して延陵の季子と曰ふ。上國に聘して徐に過る。徐君其の寶劍を愛す。季子心に之を知る。使して還れば徐君已に歿せり。遂に劍を解き、其の墓に懸



けて去りぬ。

通釋　吳は姬姓の國で、(周の先祖古公亶父の二子)太伯仲雍の封ぜられた所である。十九代を傳へて壽夢に至り、始めて王と稱した。壽夢に四人の子があつた。季子を季札といふ。札は賢明であつた。それで壽夢は、先づ上の三人の子を次々に王位に卽かせて、さうして最後に季札に傳へるやうにしたいと思つた。(その目的は無論、季札を位に卽けるにある。上の三人に繼がせるのは、その手段に過ぎない。それは季札としては兄に對して濟まないことであり、又長子が相續するといふ習俗にも反することで

あるから)、季札は義を守つて承知しなかつた。つひに延陵郡に封ぜられ、延陵の季子と云はれた。或時季札は王命によつて上方の諸侯へ御機嫌伺に廻つた。さうして徐の國へ立寄つたところ、徐の君は季札の佩びてゐる寶劍を見て大いに珍重し、(いかにも欲しさうな様子が見えた)。季子は心にそれと察して、(この役目を終つたら劍を進上しようと竊かに思ひきめてゐた)。さて使を濟まして徐へ還つて見ると、徐君はいつか死んでゐる。そこで季札は徐君の墓の樹にその劍を懸けて去つた。

語釋 吳(國名。今の江蘇・浙江に跨り、姑蘇(江蘇々常道吳縣)に都した。) ○太伯・仲雍(周の先祖たる古公亶父の二子、卽ち文王の伯父に當る。仲雍は卽ち虞仲である。太伯・仲雍の二人が弟季歷に位を讓つて荊蠻に逃げたといふことが前にあつた。太伯に子なく、弟仲雍が繼いで遂に壽夢に至つたのである。) ○延陵(吳の地名。今江蘇武進縣。) ○聘(諸侯が大夫などを遣はして他の諸侯を訪問して起居の安否を見舞はせること。聘問ともいふ。又禮物を贈つて人を召し寄せること卽ち招聘の意もあるが、こゝはさうでない。) ○上國(中國といふこと。地方から京都の方を指していふ。我が國のカミガタといふやうなもの。) ○過(こゝではヨギルと訓み、通過の意ではなくて、立ち寄ることである。) ○徐(江蘇徐州府。)

壽夢後、四君而至闔廬。擧伍員謀國事。員、字子胥、楚人伍奢之子。奢、誅而奔吳、以吳兵入郢。吳伐越。闔廬傷而死。夫差立。子胥復事之。夫差志復讎。朝夕臥薪中、出入使人呼曰、夫差、而忘越人之殺而父邪。周敬王二十六年、夫差敗越于夫椒。越王勾踐、以餘兵棲會稽山、請爲臣妻爲妾。子胥言、

不可。太宰伯嚭受越賂、說夫差赦越。勾踐反國、懸膽於坐臥、即仰膽嘗之曰、女忘會稽之恥邪。擧國政屬大夫種、而與范蠡治兵、事謀吳。

【訓讀】壽夢の後、四君にして闔廬に至る。伍員を擧げて國事を謀る。員、字は子胥、楚人伍奢の子なり。奢、誅せられて吳に奔り、吳の兵を以て郢に入る。吳、越を伐つ。闔廬傷きて死す。夫差立つ。子胥復た之に事ふ。夫差讐を復せんと志す。朝夕薪中に臥し、出入するに人をして呼ばしめて曰く、「夫差、而は越人の而の父を殺しゝを忘れたる邪」と。周の敬王二十六年、夫差、越を夫椒に敗る。越王勾踐、餘兵を以て會稽山に棲み、臣と爲り妻は妾と爲らんと請ふ。子胥言ふ、不可なりと。太宰伯嚭、越の賂を受け、夫差に說きて越を赦さしむ。勾踐國に反り、膽を坐臥に懸け、即ち膽を仰ぎ之を嘗めて曰く、「女(汝に同じ)會稽の恥を忘れたる邪」と。國政を擧げて大夫種に屬し、而して范蠡と兵を治め、吳を謀ることを事とす。

【通釋】壽夢の後四代の君を經て闔廬が立つた。闔廬は伍員を擧げ用ひて、これと國の政治を相談した。員は字を子胥といひ、楚の人伍奢の子である。奢は(楚の平王に)殺されたので、子胥は吳の國へ

亡げてゆき、呉の兵を借りて楚の都の郢に攻め入り、(平王の墓を發いてその屍に鞭つたこともあつた)。さて呉王闔廬は隣國の越を伐つたところ、戰ひ敗れ、傷いて死んだ。そこで子の夫差が立つたが、伍子胥はまた夫差に事へた。夫差は父のために仇討をしたいと心がけ、(その志氣を壯にし復讐心を激勵するために)朝夕、積み重ねた薪の中に寢起きして、(決して安心して寢るやうなことなく)、又出入の度ごとに、人に命じて自分に對して斯う言はせた――「夫差よ、御身は、あの越の奴どもが、御身の父上を殺したことを忘れたか、(それを口惜しいとは思はぬか)」と。周の敬王の二十六年に、夫差は越を夫椒といふ處で破つて、積る怨みを霽らした。負けた越王勾踐は、殘つた兵をまとめて會稽山に立てこもり、呉王夫差に對して、「我は大王の臣となり、我が妻は大王の婢妾となりませうから、(どうぞ降參をお許し下さるやうに)」と願ひ出た。けれども伍子胥は、それは可けない、(どうしても此の際、越を滅ぼして了はねばならぬ)と言つた。然るに執政の大臣たる伯嚭といふのが、越の賄賂を貰ひ受けてゐたので、夫差に說さすゝめて越の罪を赦させることにし、(こゝに和睦がとゝのうた)。そこで越王勾踐は國に歸つたが、獸の膽を寢起きする所へ吊り下げておいて、仰向いては膽を嘗め、(その苦い〳〵のを我慢することによつて我が心を刺激しつゝ)、みづから「勾踐よ、汝は、あの會稽山で

受けた恥辱を忘れたか」と言つて、（我れと我が心に鞭うつのであつた）。さうして國の政治は、すべて家老の種にまかせて、自分は家來の范蠡と兵を練りひたすら吳を破る計畫にのみ沒頭した。

語釋　字（支那では男子が二十歳になると冠即ち元服をして、實名の外に字（アザナ）を附ける。それは大人（オトナ）として待遇される資格に達したわけだといふ。それで名は自ら稱するもの、又は上より下を呼ぶもので、字は他人から尊敬して呼ばれるものとなつてゐる。無論所謂綽名（アダナ）と混同してはならない。字には伯・仲・叔・季・公・君・士・卿・子・甫などの文字を添へるのが例である。）　○郢（音エイ。楚の都。今湖北荊南道江陵縣。）　○越（國名、今の浙江省地方。會稽に都した。）　○而（ナンヂと訓む。古く汝に通じ用ひる。）　○夫椒（山名。今江蘇吳縣の西、太湖中にある。）　○會稽山（前に出づ。四一頁。）　○妻爲レ妾（この妾は妻妾の妾（メカケ）ではなくて臣妾の妾、コシモトであるといふ說に從つておく。左傳に「男ハ人臣ト爲リ女ハ人妾ト爲ル」とあり、主人の左右に給事する女を妾といつたのである。こしもとはしため。）　○太宰（官名。家宰ともいひ執政の大臣である。大夫の上に位する重職。）　○懸二膽於坐臥一（史記の越世家には「置膽於坐、坐臥卽仰膽」とある。膽を座席に懸けておいて、坐臥する度毎にそれを仰いで嘗めるといふ意で、その方がよいと思ふが、今姑らく本文のまゝに說いておく。）　○大夫種（種はこゝではショウと讀む。姓は文といつた人。）

子胥賜レ劍

太宰嚭、譖子胥恥謀不用怨望。夫差乃賜子胥屬鏤之劍。子胥、告其家人曰、必樹吾墓檟。檟可材也。抉吾目懸東門。以觀越兵之滅吳。乃自剄。夫差取其尸、盛以鴟夷、投之江。吳人憐之、立祠江上、命曰胥山。

生聚教訓

越、十年生聚、十年教訓。周元王四年、越伐吳。吳三戰三北。夫差上姑蘇、亦請成於越。范蠡不可。夫差曰、吾無以見子胥。爲幎冒乃死。

【訓讀】太宰嚭、子胥謀の用ひられざるを恥ぢて怨望すと譖す。夫差乃ち子胥に屬鏤の劍を賜ふ。子胥、其の家人に告げて曰く、「必ず吾が墓に檟を樹ゑよ。檟は材とす可き也。吾が目を抉りて東門に懸けよ。以て越兵の呉を滅ぼすを觀ん」と。乃ち自剄す。夫差其の尸を取り、盛るに鴟夷を以てし、之を江に投ず。呉人之を憐み、祠を江上に立て、命じて胥山と曰ふ。越、十年生聚し、十年教訓す。周の元王の四年、越、呉を伐つ。呉三たび戰ひて三たび北ぐ。夫差、姑蘇に上り、亦成を越に請ふ。范蠡可かず。夫差曰く、「吾れ以て子胥を見る無し」と。幎冒を爲りて乃ち死す。

【通釋】太宰の伯嚭は夫差に向つて、「伍子胥は、(是非とも越を伐つやうに申し上げた)自分の謀が採用されなかつたことを面目なく思つて大王を怨んでをります」と讒言した。そこで(それを信じた)夫差は、伍子胥に、屬鏤の劍と名づける名劍を與へて(これで自殺せよといふ意を示した)。その時、子胥は家族に告げていふには、「俺の墓にはきつと檟の樹を植ゑて呉れ。檟は棺を作る木材となるものぢや。(この木が成長して木材に用ひられる頃には、呉は越に亡ぼされるであらう、その時この木は呉王の御遺骸を收める棺の材木となるであらう)。又俺の目玉をゑぐり出して城の東門に懸けておけ。俺は越の兵が(東の方から攻め入つて)我が呉の國を滅ぼすのを見物しようわい」と。(かう言ひおいて彼

は）自ら我が首を刎ねて死んだ。夫差は（それを聞いて大いに怒り）、子胥の死骸を取つて、馬の革で作つた嚢に入れ、それを楊子江に投げ捨てた。吳の人はそれを氣の毒に思ひ、楊子江の邊に祠を立て胥山と名づけて（子胥の靈を祀つた）。一方、越王勾踐は、（どうしても會稽の恥を雪がねばならぬと）、先づ十年間は民を養ひ國を富まし、次の十年間は民を教へ軍事を仕込み、（斯くして根本的に準備を整へ）、愈々周の元王の四年（西紀前四七二年）といふに、越は吳を伐つた。果然、吳は三度戰つて三度とも負けて逃げた。夫差は姑蘇臺といふ展望臺へ逃げこんだ。（さうして先に勾踐が會稽山で行つたやうに）、また和睦を越へ願へ出た。けれども范蠡は聽き入れなかつた。（夫差は始めて眼が覺めた――あゝ子胥の諫を用ひたならば、こんな事にはならなかつたらうに）、「俺は死んでも彼の世で子胥に會はす顏がない」と言つて、覆面を爲つて顏をかくしたまゝ自剄して死んだ。

語釋 譖（音シン。ソシルと訓ず。わるくつげすること。讒言する。）○諫不レ用（吳王夫差が齊を伐つに當り、子胥は先づ越から伐たねばならぬと懇々諫めたが、夫差はそれを用ひずして齊を伐つた。その事をいふ。）○怨望（望も亦うらむ意。）○屬鏤之劍（劍の名。その劍の出來た地名を取つたのだとも、銳利なる劍といふ意だともいふ）○檟（音カ。ヒサギと訓ず。材木の美なるもので、古人はこれを以て棺槨をつくつた。）○可レ材也（こゝは棺材の意。）○懸二東門一（越は吳の東にあるから越が吳を攻めるには東方より來る故にいふ。）○自剄（自殺をいふ。剄は刀を以て首を斷つこと。くびきる。くびはぬ。）○鴟夷（馬の革で作つた袋で昔時酒を入れるに用ひたもの、鴟はフクロフ、夷は鵜でガランテウといふ鳥（ペリカンのこと）。袋の形がフクロフの腹の如くガランテウの咽喉の如くふくれてゐるから斯く名づけたといふ。）○生聚（民を生し財を聚（アツメ）る義で、人民をそだて財貨をあつめ、國力を養ふこと。）○教訓

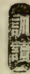


越王臺

(人民を教育し軍事を訓練すること。) ○姑蘇(こゝは姑蘇臺をいふ。高さ三百丈、夫差之を造り、常に美人西施を侍らせて、その上に遊宴したといふ。臺は展望臺のこと。) ○成(タヒラギと訓ず。和睦すること。媾和。) ○冥冒(帛を四角に切り四隅に紐をつけ、顔にあてゝ面を覆ひ、後ろで結ぶやうにしたもの(恰も今日のマスクのやうに)かほかくし。覆面。)

越既滅呉。范蠡去之。遺大夫種書曰、越王爲人長頸烏喙。可與共患難、不可與共安樂。子何不去。種、稱疾不朝。或讒種且作亂。賜劍死。范蠡、裝其輕寶珠玉、與私從乘舟江湖、浮海出齊、變姓名、自謂鴟夷子皮。父子、治產至數千萬。齊人聞其賢、以爲相。蠡喟然曰、居家致千金、居官致卿相。此布衣之極也。久受尊名不

祥。乃歸相印、盡散其財、懷重寶、閒行止於陶。自謂陶朱公。貲累鉅萬。魯人猗頓往問術焉。蠡曰、畜五牸。乃大畜牛羊於猗氏。十年、閒富擬王公。故天下言富者、稱陶朱・猗頓。



越既に呉を滅ぼす。范蠡之を去る。大夫種に書を遺りて曰く、「越王は人と爲り長頸にして烏喙なり。與に患難を共にす可く、與に安樂を共にす可からず。子何ぞ去らざる」と。種、疾と稱して朝せず。或人「種、且に亂を作さんとす」と讒す。劍を賜はりて死す。范蠡、其の輕寶珠玉を裝ひ、私從と舟に江湖に乘じ、海に浮びて齊に出で、姓名を變じて、自ら鴟夷子皮と謂ふ。父子、産を治めて數千萬に至る。齊人其の賢を聞き、以て相と爲す。蠡、喟然として曰く、「家に居ては千金を致し、官に居ては卿相を致す。此れ布衣の極也。久しく尊名を受くるは不祥なり」と。乃ち相の印を歸し、盡く其の財を散じ、重寶を懷き、閒行して陶に止まる。自ら陶朱公と謂ふ。貲、鉅萬を累ぬ。魯人猗頓、往いて術を問ふ。蠡、曰く、「五牸を畜へ」と。乃ち大いに牛羊を猗氏に畜ふ。十年の間にして、富、王公に擬す。故に天下の富を言ふ者、陶朱猗頓を稱す。

通釋 (斯の如くにして)越は既に呉を滅ぼした。すると范蠡は役を引いてしまつた。さうして大夫の種に手紙を贈つていふには、「越王(勾踐)は、その御人相が、頸長く、口は烏のやうに尖つてゐる。(かういふ人相の人は、とかく性質が殘忍であつて)、困難な時は互ひに力になり合ふが、(安樂になると相手を見捨てゝしまつて)、共に幸福を樂しむといふことが出來ないものである。(越王の艱難時代は既に去つて、今や安樂時代に入つた。これ大いに警戒すべき時機である)。貴殿、どうして早く役目を罷められぬか。(危いですよ)」と。(范蠡自身が朝を去つた理由もこれで知られるわけである)。そこで種は病氣と言ひたてゝ朝廷へ出仕しなかつた。すると或人が種は謀反しようとしてゐる。(だから出仕しないのだ)」と讒言した。越王は之を信じた。やがて種は(自殺せよといふ意味で)劍を賜はり、(その刄に伏して)死んだ。(范蠡の言は是に至つて的中したのである)。范蠡は輕くて持つて行き易い寳物・珠玉などを荷造りして、妻子家臣と共に舟に乘つて河や湖水を渡り、海へ浮び出て、終に齊の國(山東省)へ行つた。そこでは姓名を變へて鴟夷子皮と稱し、親子ともに財産を作つて、數千萬の富を積むに至つた。齊の人々は范蠡の賢者たることを聞いて、これを推して宰相(家老)とした。然るに范蠡、溜息ついていふには、「一家の主人としては千金の富をつくり、役人となつては大臣宰相にまでも上る

といふことは、これこそ平民最上の出世である。いつまでもさうした名譽を受けてゐることは不吉である、（禍の本だ）」と。そこで宰相の印を君に返して（職を辭し）、その財產をすつかり人々に分け與へ、大切な寶物だけを持つて、こつそりと間道を行き、陶といふ處に足をとゞめた。さうして自ら陶朱公と名乘つたが、こゝでも又金を大變と貯めた。魯の人の猗頓といふ者が、范蠡の許へ往つて、金持になる方法を尋ねた。蠡は「五匹の牝牛を飼ひなさい。（子牛が蕃殖して利益が多からう）」と言つた。そこで頓は猗氏縣へ行つて大いに牛羊を飼養したところ、十年間で財產が大名に比べる程になつた。されば天下の人、金持といへば先づ陶朱と猗頓をいふやうになつた。

語釋　長頸烏喙（くびすぢが長くて口の先が烏のやうに尖つてゐること。喙はクチバシ。かういふ人相の人は性質が殘忍だといふのである。）○輕寶（輕くて携帶に便な寶物。カサがなくてカネメなもの。）○珠玉（珠は海から出るタマで眞珠などの類。玉は山から出るタマで寶石類。）○私從（我家の妻子や召使ふ家臣。）○江湖（吳越の地は揚子江や太湖を始め河や湖が多い。江湖は又「世間」といふ意に用ひることもあるが、こゝはさうではない。）○鴟夷子皮（伍子胥の故事により、自分も長居をしたら馬の革のふくろに入れられ、伍子胥の二の舞をするのであつた、といふ意味で斯く稱したものであるといふ。）○喟然（歎息するさま。溜息をつく。）○布衣（フイと讀む。昔一般人民は、老人でなければ絹物を着ず、總べて布の衣を着る風習であつたから、無位無官の平民を布衣と云つた。身分の賤しいもの。（我國では之をホイ又はホウイと讀んで、古くは六位以下の着る無文の狩衣をいひ、德川時代には幕臣の御目見以上の地位のものを云つた。））○相印（官吏は官ゝを刻した印章を持ち、職を辭する時はそれを返す。相印は即ち宰相の印章で、「相印をかへす」とは宰相の職を辭すること。「相印を帶ぶ」といへば宰相に就任することである。）○重寶（貴重なタカラのこと。重量の意ではない。前出の「輕寶」といふも事實は同じものである。）○間行（ひそかに行く。又間道（ぬけみち）を通つて行く。）○陶（山東定陶縣。）○貲（財產かね。）○鉅萬（鉅は巨に同じく大の意。鉅萬は萬々といふに同じく、億を以て數へること。）○五牸（五匹の牝牛。）

その意は牡一匹に牝五匹の割合で牛羊類を畜養することだといふ。さすれば蕃殖生育が速かで利益が多いといふのである。） ○猗氏（地名。今山西河東道猗氏縣。孔叢子によると、頓は猗氏の南に牛羊を畜うて富を致したので、それから猗頓と稱したやうである。） ○擬二王公一（王公は爵位の最上なるもの。擬はナゾラフと訓じ、くらべ似せること。）

蔡姫姓、蔡仲之所レ封也。周公蔡二蔡叔於郭鄰一。其子胡率レ徳改レ行。復封二于蔡一。後世至二春秋之末一、爲二楚惠王一所レ滅。

【訓讀】蔡は姫姓、蔡仲の封ぜられし所なり。周公、蔡叔を郭鄰に蔡つ。其の子胡、徳に率ひ行を改む。復た蔡に封せらる。後世、春秋の末に至りて、楚の惠王の滅す所と爲る。

【通釋】蔡は周と同姓の姫姓であつて、(文王の孫)蔡仲の封ぜられた所である。(初め文王の第五子叔度が蔡に封ぜられて蔡叔と云つたが武庚を煽動して叛を謀つたので)、周公は蔡叔を郭鄰といふ所に追放した。しかし其の子の胡は祖父文王の徳に循うて父の非行を改めたので、復び蔡に封ぜられた。(これを蔡仲といふ)。後世、春秋の末(周の貞定王二十二年)に楚の惠王に滅された。

【語釋】蔡（今の河南省汝南・上蔡・新蔡縣の地。） ○蔡二蔡叔一（上の蔡は音サツ、「はなつ」と訓む。放に同じ、一定の場にとゞめ置くこと。事は周の成王の條下に詳である。） ○郭鄰（註に中國外の地であると見えるが、詳しくは分らぬ。）

曹姬姓、武王弟、曹叔振鐸之所封也。其後世、至春秋中、爲宋所滅。

訓讀 曹は姬姓、武王の弟の曹叔振鐸の封ぜられし所なり。其の後世、春秋中に至り、宋の滅す所と爲る。

語釋 曹（山東省荷曹州府の地。）○其後世（後の代の意。其の子孫。）

宋子姓、商紂庶兄微子啓之所封也。後世至春秋、有襄公茲父者、欲霸諸侯、與楚戰。公子目夷、請及其未陣擊之。公曰、君子不困人於阨。遂爲楚所敗。世笑以爲宋襄之仁。

訓讀 宋は子姓、商紂の庶兄微子啓の封ぜられし所なり。後世春秋に至り、襄公慈父といふ者あり、諸侯に霸たらんと欲し、楚と戰ふ。公子目夷、其の未だ陣せざるに及びて之を擊たんと請ふ。公曰く、「君子は人を阨に困しめず」と。遂に楚の敗る所となる。世笑ひて以て宋襄の仁と爲す。

通釋 宋は子姓の國で、殷の紂王の腹違の兄微子啓の封ぜられた所である。後世春秋の時代に至り、

襄公、名は慈父といふ人が出たが、此の人は諸侯の霸者とならうとして、先づ楚の國と戰つた。時に公子の目夷といふ人が、「まだ敵の用意が整はず、陣立の出來ない前に攻擊いたしたい。(敵の虛を衝いたらば、きつと勝つでございませう)」と申した。すると襄公は、「いや、君子は人の難儀につけこんで苦しめるといふ事はしない。(宜しく敵の陣立の整ふのを待つて、正々堂々と戰ふべきである」と云つて聽かなかつた。さてさうして戰つた果は、とう〳〵楚に破られてしまつた。世人はこれを「宋襄の仁」といつて嘲笑した。

語釋 宋(今の河南商邱縣。) ○商紂(商は殷、殷の紂王のこと。) ○微子啓(微は國名、子は子爵、啓は名、微子が紂王を諫めて去つたことは前に見えた。) ○楚(今の湖北・湖南・江蘇・安徽・江西・浙江及び河南の南部を占めた大國であつた。) ○公子(諸侯の子をいふ。) ○阨(苦しみ惱むこと。危難の境をいふ。)

其後有景公者。熒惑嘗以其時守心。心宋之分野。公憂之。司星子韋曰、可移於相。公曰、相吾之股肱。曰、可移於民。公曰、君者待民。曰、可移於歲。公曰、歲饑民困。吾誰爲君。子韋曰、天高聽卑。君有君人之言三。宜有動。候之果徙一度。

【訓讀】其の後景公といふ者有り。熒惑嘗て其の時を以て心を守る。心は宋の分野なり。公之を憂ふ。司星子韋曰く、「相に移す可し」と。公曰く、「相は吾の股肱なり」と。曰く、「民に移す可し」と。公曰く、「君は民に待つ」と。曰く、「歳に移す可し」と。公曰く、「歳饑うれば民困む。吾、誰が爲に君たる」と。子韋曰く、「天は高くして卑きに聽く。君、人に君たるの言三有り。宜しく動くこと有るべし」と。之を候すれば果して徙ること一度なり。

【通釋】其の後景公の代になつたが。或年（凶星といはれてゐる）火星が、（天をめぐつて）丁度その時に（二十八宿の一つの）心宿の位置までやつて來たが、どうしたことか其處に止つたきり少しも移動しない。（心宿は地に配當して見ると）宋の領地に當るので、景公は（これは何か禍のある前兆であらうと）心配して（天文官の子韋といふ者に相談した）。子韋は「（君の災難をのがれる爲には已むを得ず、大臣を犧牲にして）禍を大臣に移されるがよろしいでせう」と答へた。景公の曰ふには「いけない。大臣は吾が手足となつて働いてくれる大事な人である。（これに禍をなすりつけるには忍びない」。子韋「では禍を人民に移されませ」。公「人君は民をたよりとしてゐる者である。（その民に禍をかぶせては相成らぬ」。子韋は重ねて「では歳に禍を轉ぜられますやう」。公「もし禍を歳に移して今歳が飢

饉になつたならば、人民がどんなに難儀することであらう。一體、予は誰のための君であるか、（民の爲ではないか、その民を棄てゝ何の人君があらうぞ。歲に移すことも出來ない）」と言つて（承知しない）。子韋これを聞いて曰ふには、「天の神は、あの高い大空の上にましますけれど、常にこの低い地上の世界の事をお裁きになる。今、我が君から、人に君たるべき尊きお言葉三ケ條を承はりました。（定めし天も感動して）その位置を動かれるで御座いませう」と。そして直ちに天文を觀測して見たところ、果して火星は一度ほど心宿から移動してゐたといふ。

語釋 熒惑（火星のこと。支那では之を凶星となし、災禍の前兆として忌む。） ○以二其時一（火星がその當然居るべき其時に於ての意。丁度その時。） ○守レ心（心は二十八宿の一。東方の一星座である。二十八宿とは天上の星の宿りを東西南北の四宮に分ち、更に各宮を七分して都合二十八區としたるもの。星座のこと。守とはそこに止つて動かぬ意。） ○分野（天の二十八宿を支那全土に配當して分野といふ。） ○司星（天文を掌る官。） ○移（災難を他へ向けかへること。轉嫁すること。） ○移レ歲（その年の穀物の成熟を歲といふ。禍を歲に移せば、五穀を飢饉にすることになる。） ○候（うかゞふ。觀測すること。測候。） ○一度（天を三百六十五度四分の一とする。その一度を指す。）

歷二數世一至二康王偃一。有二雀生一レ鸇。占レ之。曰、必霸二天下一。偃喜、敗二齊・楚・魏一、與爲二敵國一。偃淫虐。天下號レ之曰二桀宋一。周愼靚王時、齊湣王與二楚魏一共伐レ宋、滅レ之而分二

て、（暫らくも人を待たせることなく直ぐに）起ち上つて對面するといふ風にして人を待遇してゐるが、それでもまだ天下の賢人を取逃がしはしないかと心配するのである。（國を治めるものが、身分を鼻にかけて、人に遇ふことを勿體ぶつたり臆劫がつたりするやうでは駄目だ）。御身、愈〻魯へ往つたら、よく氣をつけて、一國の君だといつて人民を横柄に取扱ふやうなことがあつてはならぬぞよ」。

語釋　魯（曲阜に都した。即ち今の山東濟寧道曲阜縣）　○一沐三握髪（沐は髪を洗ふこと、沐浴と熟す。三は三度に限らず、たび〳〵といふこと。）

太公封於齊。五月而報政。周公曰、何疾也。曰、吾簡其君臣禮、從其俗。伯禽至魯、三年而報政。周公曰、何遲也。曰、變其俗、革其禮、喪三年而後除之。周公曰、後世其北面事齊乎。夫政不簡不易、民不能近。平易近民、民必歸之。周公問太公、何以治齊。曰、尊賢而尚功。周公曰、後世必有簒弑之臣。太公問周公、何以治魯。曰、尊賢而親親。太公曰、後寖弱矣。

訓讀　太公、齊に封ぜらる。五月にして政を報ず。周公曰く「何ぞ疾きや」と。曰く「吾れ其の君

臣の禮を簡にして、其の俗に從ふ」と。伯禽、魯に至り、三年にして政を報ず。周公曰く「何ぞ遲きや」と。曰く「其の俗を變じ、其の禮を革め、喪は三年にして後之を除けり」と。周公曰く「後世其れ北面して齊に事へん乎。夫れ政簡ならず易ならずんば、民近づく能はず。平易にして民を近づけば、民必ず之に歸せん」と。周公、太公に問ふ「何を以て齊を治むる」と。曰く、「賢を尊んで功を尙ぶ」と。周公曰く「後世必ず簒弑の臣あらん」と。太公、周公に問ふ「何を以て魯を治むる」と。曰く「賢を尊んで親を親しむ」と。太公曰く「後寖く弱からん」と。

通釋 太公望呂尙は齊の國に封ぜられた。すると五ケ月たつて、その政治の成績を周の朝廷へ報告に來た。攝政周公これを受けて、周公「どうしてさう早く成績を擧げられたか。」太公「他でもござりませぬ。私、任に就くや、まづ君臣の間の禮儀を簡單にして（臣下が君主に近づき易いやうに致し）、禮儀作法なども古來ありきたりの風俗に從ふやうに致しました」。ところで伯禽は魯の國に赴任してから三年も經つてからやつと報告に來た。周公「どうしてさう遲いのぢや。」伯禽「私は、着任以來、魯の風俗を變更し、禮儀作法を改正し、父母の喪の如きも三年たつて始めて除くといふやうに致しました。（その爲め今日に及んだ譯でございます）。」周公「（それは餘りに嚴し過ぐる）。想ふにそんな

風では、ゆく／＼は人民が魯を離れて、齊の國に臣下となつて事へるやうになるであらう。(齊は政治を簡易にして民を近づけるからだ)。一體、政治といふものは手輕にせぬと、人民が親しみ寄りつくことが出來ぬ。手輕にして人民の寄りつき易いやうにさへすれば、人民はきつと君の德に懷き慕うて來るものぢや」。又或時、周公と太公との間に、こんな問答が取りかはされた。周公「卿は、どういふ方針で齊を治めてござるか。」太公「才德の勝れた賢人を尊び、又手柄ある家來を尚んで、(それ／＼優待重用するやうに致し居ります)。周公「(賢人を尊ぶのは結構だが、功臣を餘り優待すると、だんだん威權が加はり勢力が强大となり、行末は國を奪ひ君を弑する樣な者が出るでござらう」。太公「では、公は如何なる主義によつて魯をお治めになりまするか。」——註。魯は周公が武王から與へられた地であるが、周公は魯に往かず、留まつて武王を佐け、又成王を輔けたので、其の子伯禽をして代つて魯を治めさせたのである。今、太公が周公に向つて魯の政治を尋ねたのは此の故である——周公「賢者を尊敬し、みうちの者を親愛することでござる」。太公「(親戚を親愛すると、次第に狎れて我儘になり、遂に本家を凌ぐやうになる)、そのため將來だん／＼とお國が衰弱するでござりませうぞ。」——註。齊は功臣を尙び過ぎたが爲に、遂にその臣田氏に滅され、魯は親族を親しみ過ぎたが爲に、遂に三分家

（いはゆる三桓）の勢力に壓伏されるやうになつた。周公・太公の問答は、果して後世の讖をなしたのである。

【語釋】齊（臨淄に都した。即ち今の山東膠東道臨淄縣。） ○報レ政（自分の治めてゐる國の政治の様子を朝廷へ申上げること。） ○喪（父母の忌中。忌服ともいふ。「喪を除く」とは忌服のあけること。） ○北面（臣としての禮を執ること。支那では君臣が相見ゆる時、君は北にあつて南に面し、臣は南に居つて北に面する禮である。故に「南面する」といへば天子となつて萬民を治めること。「北面する」といへば臣となつて事へることをいふ。天子の座ばかりでなく、皇居も南面してゐる。皆これ衆星が北極に向つてゐるのに象つたものである。） ○簒弑（簒は國を奪ふこと。弑は君を殺すこと。） ○寢（ヤヽともヤウヤクとも讀む。漸に同じく、じり〳〵だん〳〵といふ意。）

伯禽十三世而至隱公。爲春秋之始。隱公之弟曰桓公。桓公之子。莊公、莊公有庶弟三人。曰慶父。其後爲孟孫氏。曰叔牙。其後爲叔孫氏。曰季友。其後爲季孫氏。是爲三桓。世執國命。歷子班・閔公・僖公・文公・宣公・成公・襄公、至昭公、伐季氏。三家共伐之。公奔乾侯、以卒。

【訓讀】伯禽より十三世にして隱公に至る。春秋の始と爲す。隱公の弟を桓公と曰ふ。桓公の子は莊公、莊公に庶弟三人有り。慶父と曰ふ。其の後を孟孫氏と爲す。叔牙と曰ふ。其の後を叔孫氏と爲

す。季友と曰ふ。其の後を季孫氏と爲す。是を三桓と爲す。世々國命を執る。子班・閔公・僖公・文公・宣公・成公・襄公を歷て、昭公に至り、季氏を伐つ。三家共に之を伐つ。公、乾侯に奔り、以て卒す。

語釋　爲二春秋之始一（後に孔子が魯の歷史「春秋」を作られた際、筆を隱公元年に起された。卽ち隱公は謂はゆる春秋の世の初に當る。）○隱公之弟曰二桓公一（隱公の後はその弟が繼いだ、それを桓公と曰ふといふ意。）○三桓（三氏ともに桓公から出たのであるから三桓といふ。）○執二國命一（國の命令をにぎる。卽ち一國の政權を掌握すること。）○子班云々（これは魯の公室に就て云つてゐるので、三桓の事ではない。）○季氏（季孫氏。）○三家共伐レ之（他の孟孫・叔孫の二家も季氏を助け、三家聯合して昭公を伐つたのである。）○乾侯（地名。當時晉の領內。今の直隸成安縣。）

弟定公立。以孔子爲中都宰。一年四方皆則之。由中都爲司空、進爲大司寇。相定公會齊侯于夾谷。孔子曰、有文事者、必有武備。請具左右司馬以從。既會。齊有司、請奏四方之樂。於是旗旄劍戟、鼓譟而至。孔子趨而進曰、吾兩君爲好、夷狄之樂、何爲於此。齊景公心怍麾之。齊有司請奏宮中之樂。優倡侏儒、戲而前。孔子趨而進曰、匹夫熒惑諸侯者、罪當誅。請命有司。加法焉。首足異處。景公懼。歸語其臣曰、魯以君子之道輔其君。而子獨以

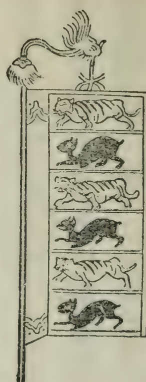
夷狄之道教寡人。於是、齊人乃歸所侵魯鄆・汶陽・龜陰之地、以謝魯。

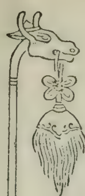
訓讀 弟定公立つ。孔子を以て中都の宰と爲す。一年にして四方皆之に則る。中都より司空と爲り、進んで大司寇と爲る。定公を相けて齊侯に夾谷に會す。孔子曰く、「文事ある者は必ず武備あり。請ふ左右の司馬を具へて以て從へんことを」と。既に會す。齊の有司・四方の樂を奏せんと請ふ。是に於て旗旄劍戟、鼓譟して至る。孔子趨つて進んで曰く、「吾が兩君、好みを爲すに、夷狄の樂、何すれぞ此に於てする。」と。齊の景公心に怍ぢて之を麾く。齊の有司、宮中の樂を奏せんと請ふ。優倡侏儒、戯れて前む。孔子趨つて進んで曰く、「匹夫諸侯を熒惑する者は、罪、誅に當す。請ふ有司に命じて法を加へしめん」と。首足、處を異にす。景公懼る。歸りて其の臣に語げて曰く、「魯は君子の道を以て其の君を輔く。而るに子は獨り夷狄の道を以て寡人に教へたり。」と。是に於て齊人乃ち侵す所の魯の鄆・汶陽・龜陰の地を歸して以て魯に謝す。

通釋 次は昭公の弟の定公が立つた。定公は孔子を中都の町奉行に任じた。（然るに孔子の政が宜しいので）、一年ほどの間に、四方の諸侯が、皆孔子の政治向を手本として見習ふやうになつた。

孔子は中都の町奉行から進んで司空といふ土木を掌る大臣となり、更に進んで大司寇とて司法大臣になられた。(孔子がまだ中都の奉行であつた時分)、定公の接伴役となつて、齊の景公と夾谷といふ處で、好みを結ぶための會合を催すことになつた。その時孔子は「學問の心得あるものは同時に又武藝の嗜みもあると聞いてをります。(今日の會盟は平和の修好で所謂文事でありますが、同時に武力の警備がなくてはなりません)。どうか近衛の武官を引きつれておいでなさるやうに」と申し上げた。斯くて魯齊の二侯は夾谷に會した。(對面の挨拶、修交の會禮、事なく畢つた後で)、齊の役人は(定公を劫かさうとして)、鄙びた夷狄の音樂を演奏して(この座の興を添へたい)と申し出で、(景公がこれを許した)。そこで旗さしものを立て劍や戟を振りまはし鐘太鼓を鳴らして大勢のものがわい／＼さわいで出て來た。それと見た孔子ははやあしで進み出て云はれた。「わが齊魯の二君、善隣の好みを結ばるゝ嚴肅なる御會合に、左樣な穢はしい夷の音樂なんぞ、何とてこゝに爲さるゝ要がござらう。(奇怪千萬ではござらぬか)。」と。さういはれて景公はさすがにきまり惡くなり手まねして(彼處へ去らせた)。すると齊の役人達は(第二の手段として)御殿の內儀で行ふ音樂を奏したいと申し出た。(景公は又それをも許した)。そこで物まね師の俳優や一寸法師が、ふざけた體で前み出て來た。孔子は再び足

早に進み出て、「尾籠者、(その淫靡な踊や滑稽な眞似事によつて)、勿體なくも大名衆の目を眩まし心を惑はさうと致すこと、その罪、正しく討首にすべきものである。よつて役人に命じて相當の處分を致させるでござらう。」と宣言した――彼等は斬り殺された。齊の景公は(折角の謀を孔子に破られたので、大いに孔子の威力勇力に)恐れをなし、國へ歸つてから其の群臣につげていふには、「魯の國は、あの孔子のやうに、堂々たる文明國の君として德高き君子としての道を以て、その君を輔佐してるるのに、お前達ばかりは、鄙しい野蠻人たるの道を以て此方に敎へたものだ。(だからあんな恥かしい結果に終つたのぢや。魯君に對して此儘には濟まされぬ)」といふので、嘗て侵略して取つた魯の土地の鄆・汶陽・龜陰の三ケ所を返して、魯にお詫をした。


旗


旄


劍


戟

語釋 中都(今の山東汶上縣。) ○宰(邑長。昔の町奉行、今の町長といふやうな役。) ○司空(土木水利などのことを掌る大臣。) ○大司寇(司法警察の事を掌る大臣。) ○相(タスクと

讀み、定公の爲に接伴役となつて會盟のとりもちをすること。）○齊侯（こゝは齊の景公を指す。）○夾谷（魯の地。今の山東萊蕪縣にある地。）○有二文事一者必有二武備一（個人としては文武兩道の嗜みあるをいひ、國家としては治にゐて亂を忘れざるを云つたもの。下に「武事アルモノハ必ズ文備アリ」とある。蓋し古語であらう。）○左右司馬（左右は親衛、司馬は武官、即ち近衛の武官のこと。）○四方之樂（四方とは東夷・西戎・北狄・南蠻などいふ中國以外四方のエビスをいふ。樂は音樂。）○旗旄（旗は昔は特に虎と熊とを書いたハタを云つた。軍將のしるしとしたもの。旄は旄牛（からうし）の尾をつけたハタである。さしづばた。）○劍戟（劍はモロハのつるぎ、戟はフタマタのほこ。）○趨（ハヤアシで歩むこと。長上の前を行くときにはハヤアシするのが漢土の禮であつた。）○怍（恥ぢて赤面すること。）○侏儒（一寸法師。宮中内儀の諸人などを喜ばす爲に、こんな者を置いたのである。）○匹夫（一夫といふに同じく、身分のない賤しい者といふこと。）○熒惑（くらましまどはすこと。）○首足異レ處（首は首、足は足と離れ〴〵に別々になることで、斬り殺されるをいふ。）


孔子が初めて中都の宰となられたのは、その五十二歳の時である。爾來五年間、魯に仕へられたが、この間に特筆すべき二つの大きな事業をなされた。一つは此の夾谷の會であり、一つは次に掲げる三都を墮たれたことである。而して二つともに、孔子の性格の一面として極めて意志の鞏固な人であつたといふことを物語るものであることも、亦一奇といふべきであらう。さてこの夾谷の會では、先づ「文事あるものは武備あり」といふ周到なる用意、それは謂はゆる「心小」の極致である。次に會盟の場に於て、正々堂々天下の公道を說いて、齊の君臣をして顏色なからしめるの大勇氣、それは謂はゆる「膽大」そのものゝ權威である。この「心小」と「膽大」との渾然たる融合が、即ち夾谷の會となつて、魯を救うたのみならず、失つた地をも取戻して、國威を彌が上に宣揚することが出

來たのである。季氏の吏、司檝の吏の賤役に從つて、十分にその本務を遂行された孔子は、今また一國興廢の運命を双肩に荷つて、みごと輔弼の大任を完うされたのである。そこに孔子の偉大さがある。人は誰れも溫厚篤實なる孔子を知る。而も斯の如き秋霜烈日の一面あることをも知らねばならぬ。「義」の前には、「道」の前には、何物をも打碎いて邁進するといふこの鞏固なる意志あることを知らねばならぬ。熱烈なる信念あることを知らねばならぬと思ふ。

孔子言於定公、將墮三都以强公室。叔孫氏先墮郈、季氏墮費。孟氏之臣不肯墮成。圍之弗克。孔子由大司寇、攝行相事。七日而誅亂政大夫少正卯。居三月魯大治。齊人聞之懼、乃歸女樂於魯。季桓子受之不聽政。郊又不致膰俎於大夫。孔子遂去魯。

訓讀 孔子、定公に言ひ、將に三都を墮ち以て公室を强くせんとす。叔孫氏先づ郈を墮ち、季氏、費を墮つ。孟氏の臣、成を墮つことを肯んぜず。之を圍みて克たず。孔子、大司寇より相の事を攝行

す。七日にして政を亂る大夫の少正卯を誅す。居ること三月にして魯大いに治まる。齊人之を聞いて懼れ、乃ち女樂を魯に歸る。季桓子之を受けて政を聽かず。郊して又膰俎を大夫に致さず。孔子遂に魯を去る。

【通釋】（魯は家老職の三分家が政權を執り、その勢力本家を凌いで國の害をなすので）、孔子は定公に申し上げて、三家の私邑の居城をこぼつて、其の勢力を殺ぎ、魯の本家の權力を强めようとされた。（三家はそれを承諾して）叔孫氏が先づ第一に自分の領地の郈といふ都城を毀ち、季孫氏は費といふ都城を毀つた。然るに孟孫氏の臣（公斂處父といふ人、時に成の奉行であつた）が、その都城の成を毀つことを承知しない。で已むなく定公は成を攻圍したが、戰は敗であつた。（その爲に折角の三都を墮つの策は徹底することが出來なかつた）。孔子は司法大臣の官にあつて宰相の事務を兼ね行はれたが、僅か七日目に、魯の政治を亂す少正卯といふ家老を死罪に處せられた。斯くて三ケ月經つと、魯の國は孔子の政治によつて大層よく治まつた。すると隣の齊の人たちがそれを聞いて、（魯が强大になることを）懼れ、魯の君臣を誑かして國を亂してやらうと）、美しい歌妓（八十人）を魯の國へ贈つて機嫌を取つた。家老の季桓子が、（そんな計略があらうとは知らずに）それを貰ひ受け、（定公にすゝめて共々に

遊樂に耽り、政治を顧みなかつた。そんな風だから、天地のお祭をしても、そのお餘肉の牲を大夫に頒つといふ大切な禮儀をも怠つて爲なかつた。孔子は（それを見て到底駄目だと見切をつけ）、遂に魯の國を去つてしまはれた。（時に孔子年五十六歳であつた）。


三都（魯の三桓、即ち孟孫氏・叔孫氏・季孫氏の三分家の城邑。周代には諸侯の一族や卿・大夫の領地及び其の居城を「都」といつた。）○墮（こゝではコボツと讀んで、破壞すること。）○不肯（ガヘンゼズと讀む。うけがはぬこと、きゝいれぬこと。）○相事（宰相の事務。總理の政務。）○歸（オクルと讀む。物を進上すること。）○女樂（伎妓。舞姬。）○季桓子（魯の大夫、季孫氏、名は斯、桓はその謚である。）○郊（郊は郊外で、町はづれの意。支那では冬至に天を南郊に祭り、夏至には地を北郊に祭る。故に天地の祭を郊といふ。この時は冬至の天の祭であつた。）○不致膰俎於大夫（膰は燒肉、俎はそれを載せる器。お供への牲肉をいふ。祭が終ればその「おさがり」を大夫に分ち贈る禮であつた。それは國の重臣を優待する意味であるといふ。「致」は贈りとゞけること。）

定公卒、子哀公立。欲以越伐三桓、不克。歷悼公・元公、至繆公。知尊子思、而不能用。歷共公・康公、至平公。嘗欲見孟子、而不果。歷文公、至頃公。爲楚考烈王所滅。魯自周公至頃公、凡三十四世。

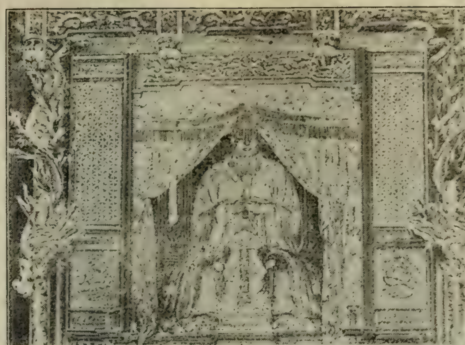

定公卒し、子哀公立つ。越を以て三桓を伐たんと欲す。克たず。悼公・元公を歷て、繆公に至る。子思を尊ぶことを知りて、用ふること能はず。共公・康公を歷て、平公に至る。嘗て孟子を見んと

三命益恭

陳ニ俎豆一設ニ禮容一

欲して、果さず。文公を歴て、頃公に至る。楚の考烈公の滅す所と爲る。魯は周公より頃公に至るまで、凡て三十四世なり。

語釋 以レ越伐ニ三桓一（越の國の兵力を假りて三桓を伐たうとした。）○知レ尊ニ子思一云々（子思は孔子の孫。詳しくは後に出づ。意は、子思の賢人なることを知つて之を尊敬したが、之を登用して政治を執らせ得なかつたといふこと。）○欲レ見ニ孟子一不レ果（事は「孟子」梁惠王下篇に見ゆ。孟子の事は後に出づ。）



孔子像

孔子、名丘、字仲尼。其先宋人也。有ニ正考父者一、佐レ宋。三命滋益恭。其鼎銘云、一命而僂。再命而傴。三命而俯。循レ牆而走。亦莫ニ余敢侮一。饘ニ於是一、粥ニ於是一、以餬ニ予口一。孔氏滅ニ於宋一。其後適レ魯。有ニ叔梁紇者一、與ニ顏氏女一、禱ニ於尼山一而生ニ孔子一。爲レ兒、嬉戲常陳ニ俎豆一、設ニ禮容一。長爲ニ季氏吏一。料量平。嘗爲ニ司樴吏一。畜蕃息。適レ周問ニ禮於老子一。

反而弟子稍益進。適齊。齊景公將待以季孟之閒。孔子反魯。定公用之不終。

【訓讀】孔子名は丘、字は仲尼、其の先は宋人なり。正考父といふ者あり、宋に佐たり。三命にして滋益恭し、其の鼎の銘に云ふ「一命して僂す。再命して傴す。三命して俯す。牆に循ひて走る。亦余を敢て侮る莫し。是に饘し、是に粥し、以て予が口を餬す」と。孔氏、宋に滅ぶ。其の後魯に適く。叔梁紇といふ者あり、顏氏の女と尼山に禱りて孔子を生む。兒たりしとき、嬉戲するに常に俎豆を陳ね禮容を設く。長じて季氏の吏と爲る。料量平かなり。嘗て司職の吏と爲る。畜蕃息す。周に適き禮を老子に問ふ。反りて弟子稍く益々進む。齊に適く。齊の景公、將に待つに季孟の間を以てせんとす。孔子魯に反る。定公之を用ひて終へず。

【通釋】孔子は名を丘といひ、字は仲尼といふ。その先祖は宋の人である。その後に正考父（正は諡考父は字）といふ人があつて、宋の君侯を輔佐した。（非常に謙遜な人で、士から大夫、大夫から卿へと）三たび君命を拜して出世をしたが、（出世すればするほど）愈々益々我が身を低くへりくだつた。此

の人が鼎に彫りつけた戒めの言葉にも「一命而僂」云々とある。その意味は「はじめて君命を拜して士となつた時には、少しく背をかゞめ、（俯向き加減にして謙遜の態度を取つた）、二度目に命を拜して大夫に上つた時には、更に腰をかゞめ、三度目に拜命して卿に昇進した時には、一層頭を低うして（恭敬の意を表した）。道を歩くにも、（眞中を大手を振つて歩くやうなことなく）、道側の垣根に沿うてこそ〳〵と歩いた。而も誰一人われを侮り輕しめるものは無かつた。（食物の如きも極めて質素に）、この鼎で、濃い粥、薄い粥を煮て、それを食つて、口を濕ほすばかりであつた」といふので（これによつて自らを戒め、且つ子孫の驕泰を戒めたものである）。宋の孔家は滅んでしまひ、その子（木金父）は魯の國へ移つた。（それから五代目）に叔梁紇（叔梁は字、紇は名）といふ人があつたが、妻の顏氏の女（名は徵在）と共に尼丘山の神に（男の子を授かるやうに）禱つて、孔子を生んだ。孔子は子供の時遊戲をするにも、俎や豆などを並べて祭のまねをしたり、禮儀作法のまねをしたりした、（そんなに子供の時から變つてゐた）。大人になつて、季氏（魯の三家老の一）に仕へて倉庫役人となられたが、（出納嚴明で）穀物の桝目も公平であつた。又或時は牛や羊を飼ふ役になられたが、（飼育の方法が宜しかつたので）家畜が殖えて行つた。その後周へ往つて老子（老子のことは後に見える）に就いて禮を問はれ

た。さうして魯に歸られたが、その時分から弟子がだん〳〵と殖えて來た。又齊の國へ往かれた。その時、齊の景公は、魯の上卿の季氏と下卿の孟氏との中間の待遇を以て孔子を任用しようとしたが、(齊の大夫の中には孔子を喜ばぬものもあり、景公も亦是非とも孔子を採用しようといふ熱心もなかつたので、孔子はそれと知つて之を謝絕し)、魯に歸られた。魯の定公は暫く孔子を用ひたが、長く用ひ得なかつた。

〔語釋〕三命(周の禮に「一命に士となり、再命に大夫となり、三命に卿となる」とあり。蓋し當時の官吏は卿・大夫・士の三等に分れてゐたが、その三階級を段々と昇進してゆくをいふ。卿は上大夫ともいひ、君侯輔弼の大官である。) ○滋益(二字ともにマス〳〵と讀む。それを重ね用ひたのである。) ○鼎銘(鼎は一種の鍋、その形壺(ツボ)に似て二耳三足あり、大小いろ〳〵ある。銘は器物に彫りつけて自ら戒め又は後世に傳へる文辭をいふ。こゝは鼎にほりつけたのである。) ○饘ニ於是一粥ニ於是ニ(饘はカユの濃いのをいひ、粥はそのうすいのをいふ。是は鼎を指す。) ○餬レ口(餬もカユといふ字。カユを食ふこと。「口をぬらす」といふ位の貧しげな暮らしをすること。「くちすぎする」「生活する」などの意に用ひる。) ○尼山(尼丘ともいふ。曲阜縣の東南六十里にある山の名。) ○俎豆(ともに祭器。俎は牲肉を盛る臺で机のやうな形のもの。又マナイタとも讀むがこゝはさうでない。豆はマメではない。其器の形を取つた文字で、祭祀や儀式の時にヒタシモノやヒシホのやうなものを盛る器である。後に豆をマメの意にも假り用ふるやうになつた。) ○設ニ禮容一(禮儀の容態をなす意で、禮儀作法の眞似をすること。) ○料量(量目。ますめ。はかりめ。) ○司職吏(職は牛などをつないでおく杙(クヒ)のこと。故に牧畜の官をいふ。) ○畜(家に飼ふ動物のこと。その時の音はキク又はキウである。チクと讀む時は蓄と同じくタクハフの意となる。併し我が國では皆通じてチクと讀んでゐる。家畜(カチク)など。) ○蕃息(しげりふえること。繁殖。) ○稍益(稍はヤウヤクと訓じてダン〳〵の意。ヤヽと訓じてスコシの意ではない。) ○季孟之間(魯侯の分家に孟孫氏・叔孫氏・季孫氏といふ三家があり、共に魯の桓公から出てゐるので之を三桓ともいひ、世々魯の三卿即ち三家老となつて國政を執つて來た。其の勢力なか〳〵強盛で、却つて宗室(本家)を凌ぐの概がつた。三家の中、季氏は上卿で最も貴く、孟氏は下卿で最も低かつた。故に今その中間を取つて待遇しようといふのである。) ○定公用レ之(夾谷の會や三都を毀つたことなど、すべて此の間のことである。)

【通釋】孔子の祖先は宋の公族である。周の成王のとき、殷の三仁の一人たる微子啓、宋に封ぜられたが、その後、閔公の子に弗父何といふがあり、その曾孫が卽ち正考父である。而して正考父の子を孔父嘉といふ。孔父は字、嘉は名である。宋の大夫であつたが、太宰の華父督の爲めに殺されたので、その子の木金父は難を避けて魯の國へ行つた。爾來子孫代々魯の人なり、當時の禮俗に從つて、孔父嘉の字「孔父」を取つて氏を孔と云つた。

孔子の名を丘といひ字を仲尼といふのは、卽ち尼丘(尼山)に取つたのである。その生年月については諸說あるが、今は魯の襄公二十一年十月庚子(我が紀元一百九年、綏靖天皇の三十年)といふ說に從つておく。生地は魯の昌平鄕卽ち今の山東曲阜縣の東南である。早く父を喪ひ母の手に養はれたが、その家の貧賤であつたことは、藏役人となり牧畜の事に從はれたといふに徵しても窺ひ知られる。而も料量平かであり、畜蕃息したといふことは、こんな卑い役目でも、職務とあれば、どこまでも、その職責を盡さうとされる忠實さの表はれであり、又、廟堂に立つては國政を行ひ、賤官にあつては賤官に稱ふといふやうに、往く所として可ならざるなき孔子の才能の豐かさを見ることが出來る。

畏二于匡一

適レ衞、將レ適レ陳。過レ匡。匡人嘗爲二陽虎所一レ暴。孔子貌類二陽虎一、止レ之。旣免反二于衞一

醜靈公所爲去之。適曹適宋、與弟子習禮大樹下。桓魋伐拔其樹。適鄭。鄭人曰、東門有人、其顙似堯、其項類皐陶、其肩類子産。自要以下、不及禹三寸。纍纍然若喪家之狗。適陳、又適衛、將西見趙簡子。至河。聞竇鳴犢・舜華殺死、臨河歎曰、美哉水、洋洋乎。丘之不濟此、命也。反于衛。適陳、適蔡、如葉、反于蔡。


衛に適き、將に陳に適かんとす。匡を過ぐ。匡人嘗て陽虎の暴する所と爲る。孔子の貌、陽虎に類せしかば之を止む。既にして免れて衛に反る。靈公の爲す所を醜として之を去る。曹を過ぎて宋に適き、弟子と禮を大樹の下に習ふ。桓魋、其の樹を伐り拔く。鄭に適く。鄭人曰く「東門に人あり、其の顙は堯に似、其の項は皐陶に類し、其の肩は子産に類す。要(腰)より以下、禹に及ばざること三寸、纍々然として喪家の狗の若し」と。陳に適き、又衛に適き、將に西のかた趙簡子を見んとす、河に至り、竇鳴犢・舜華の殺死せるを聞き、河に臨んで歎じて曰く「美なる哉水、洋々乎たり。丘の此

れを濟らざるは、命也」と。衛に反り、陳に適き、蔡に適き、葉に如き、蔡に反る。

 孔子は魯を去つて衛の國に適かれた。(孔子の天下を周游されることは茲に始まる)それから陳の國へ適かうとして匡といふ地を通られた。ところが匡の人は嘗て魯の陽虎といふ者に亂暴されて、(大變苦しみ困つたことがあつたが)、今、孔子の容貌がその陽虎に似てゐるといふので、陽虎と思ひ誤つて、孔子を遮り止め、(兵を以て圍むこと五日に及んだ。併し孔子は平然として懼るゝ所はなかつた。やがて匡の人も、それが人違ひであつた事が分つたので、圍を解いて罪を謝し)孔子は難を免れて再び衛に戻られた。然るに衛の靈公の(色に溺れて德を失つた)仕業を苦々しく思うて、衛を去られた。さうして曹を過ぎて宋の國へ行かれたが、そこで門弟達と、大きな樹の下で禮儀を講習して居られた時、宋の武官の桓魋といふものが、その樹を伐りその根を拔いて、孔子を厭殺しようとした。(この時も孔子は、泰然として動じなかつた)。孔子は鄭の國へゆかれた。(その時門人達とはぐれて、たつた一人、城下の東門に立たれた)。それを見て鄭の人のいふには「城下の東門に不思議な旅人が來た。その額の具合は昔の聖人の堯に似てゐるし、えりくびの樣子は、舜を輔けた皐陶に似てゐるし、肩のつきは我が鄭國の賢人子產に似てゐる。腰から下は、聖人禹に三寸ほど足りない。(まことに不思議な

風采の人である)。そして如何にもやつれ衰へて悄然たる様子は、ちやうど不幸のあつた家の犬の(食物も與へられないで)痩せ衰へてゐるやうだ。(一體、何人であらう)」と。(孔子、亂世に生れて、道行はれず、到るところ迫害を受けて、志を得ず、その心情が自然に容貌風采に表はれたものであらう)。

それから陳にゆき、又衞にゆき、更に西して晉の趙簡子に會はうと思はれた。さうして黄河のほとりまで行かれたところが、晉の竇鳴犢・舜華といふ二人の賢人が、趙簡子に殺されたといふことを聞いて、(このやうな賢人を殺すやうな趙簡子なら、聞きしに變る小人だ。もう面會する必要はない、と往くことを見合はせて)、黄河の岸に立つて言はれるには「あゝ美しいかな水の色、どんどと盛んに流れることよ此の河は。(あゝ此の水この流を目前にしながら)、これを濟らずに引返すといふのは天命ぢや、致し方がない。(それにしても、世には頼もしい人物は少くて、小人ばかりが跋扈することぢやわい)」と歎息された。孔子はまた衞にかへり、更に陳にゆき、(論語衞靈公篇に「在レ陳絶レ糧、從者病、莫二能興一」とあるのは、此時である。)又蔡にゆき、葉に行つて、再び蔡に返られた。

語釋 衞(國の名。今の直隷大名府開州より西、河南衞輝府懷慶に至るまでの地。) ○陳(國の名。今の河南開封府以東、安徽亳州に至るの地、) ○匡(宋の地名。今の直隷長垣縣。) ○陽虎(魯の季氏の家臣。) ○曹(國名。山東曹州府。) ○桓魋(宋の司馬(軍事を掌る官)の向魋(シヤウタイ)といふ者。桓公から出たので又桓氏を稱した。) ○顙(音サウ。ひたひ。額。) ○項(音カウ。うなじ。くびすぢ。) ○皐陶(人名

、カウエウと讀む。)舜の時の獄官の長。) ○子產(鄭の大夫、公孫僑の字。博學にして政治に長じ、國を治むること四十年、賢人の名が高かつた。) ○要(腰に通ず。こし。) ○纍々然(痩せ衰へ疲れ果てた樣子。) ○喪家之狗(死者のあつた家では、家人が悲哀の餘り犬に食物を與へることを忘れるので、犬が痩せ衰へるといふことで、人が非常にやつれて見るかげもない樣子を形容する語。一説に、主家を喪(ウシナ)つた犬の意で、宿なし犬のことだともいふ。) ○趙簡子(晉の大夫趙鞅のこと。簡は諡。) ○至レ河(河は黃河をいふ。) ○竇鳴犢・舜華(二人とも晉の賢大夫である。趙簡子が未だ志を得なかつた時に、この二人の力を假りて政治をしたが、自分が成功すると、二人を暗殺にして殺してしまつた。) ○洋々乎(水の盛んに流れるさま。その他場合によつて種々の意味に用ひられる語である。) ○蔡(國名。今の河南汝南・上蔡・新蔡諸縣の地。) ○葉(人名又は地名の時はセン、セツと讀む。こゝは楚の邑で、今の河南省葉縣。)

【餘說】孔子、匡人に圍まれ、門人大いに懼る。孔子自若として謂ひて曰く「文王既沒、文不レ在レ茲乎。天之將レ喪ニ斯文一也、後死者不レ得レ與ニ於斯文一也。天之未レ喪ニ斯文一也、匡人其如レ予何」(論語、子罕)と。我は天意を奉じて斯道を後世に傳へるの使命を有するのだ、匡人いかに強暴なりとも、豈天意に反いて我を如何することが出來るものぞといはれたのである。桓魋が樹を拔いて孔子を殺さうとした時にも、門人は恐れあわてゝ、「速くお遁げなさい」と言つたが、孔子は「天生ニ德於予一。桓魋其如レ予何」(論語、述而)と言つて泰然たるものであつた。平生は謙遜に謙遜を重ねられた孔子が、斯樣な危難の際に當つては、凛乎として犯すべからざる態度と、秋霜烈日の如き此の言ある所以は、天命を知ることの如何に深く、自ら信ずることの如何に強きかを見ることが出來る。靈公の事は「史記」によると、孔子が衛に居られた時、靈公がその夫人(南子といひ、素行が修まらぬ人であつた)と同車し、

孔子を次の車に載せて次乘となし、市中をぶら〳〵と遊びまはつたので、孔子は「吾未レ見下好レ德如上レ好レ色者上也」（論語、子罕）と言つて、靈公が色に溺れて德を失へる所業を惡むべしとせられたのだとある。

楚使人聘之。陳蔡大夫謀曰、孔子用於楚、則陳蔡危矣。相與發徒、圍之於野。孔子曰、詩云、匪兕匪虎、率彼曠野。吾道非邪。吾何爲於是。子貢曰、夫子、道至大。天下莫能容。顏回曰、不容何病。然後見君子。楚昭王興師迎之。乃得至楚。將封以書社地七百里。令尹子西不可。孔子反于衞。季康子迎歸魯。哀公問政。終不能用。


楚、人をして之を聘せしむ。陳蔡の大夫謀りて曰く、「孔子、楚に用ひられば、則ち陳蔡は危からん」と。相與に徒を發して、之を野に圍む。孔子曰く、「詩に云ふ、兕に匪(非に同じ)ず、虎に匪ず、彼の曠野に率ふと。吾が道、非なる邪。吾れ何爲れぞ是に於てする」と。子貢曰く、「夫子の道は

至つて大なり。天下能く容るゝこと莫し」と。顏回曰く、「容れられざる、何ぞ病へん。然る後に君子を見る」と。楚の昭王、師を興して之を迎ふ。乃ち楚に至るを得たり。將に封ずるに書社の地七百里を以てせんとす。令尹子西可かず。孔子衛に反る。季康子迎へて魯に歸らしむ。哀公、政を問ふ。終に用ふること能はず。

(孔子が陳・蔡の間に居られた時)、楚の國から使を以て孔子を招待して來た。それを聞いた陳・蔡兩國の家老達が相談していふには、「(孔子は賢者である、而して楚は大國である)、孔子が若し楚に用ひられることになると、われ〳〵陳蔡の二國が危い。(孔子を楚にやらぬやうにせねばならぬ)」と。そこで互ひに部下の兵卒を出して、野原に於て孔子を取り圍んだ。孔子の言はれるには、「詩經の詩に『野牛でもなく虎でもなくして、あのひろ〳〵とした荒野に沿うてさまよひ行くは、何物であらう』とあるが、(我々の今の有樣が丁度それぢや)。これは予が平生說く所の道がわるいからであらうか。さうでも無ければ、どうして我々は、こんなことになるのであらう」と歎かれた。時に門人子貢の曰く、「先生の道は廣大至極であるが爲に、天下の者が誰も先生を容れ用ひることが出來ないのでございます。(されば先生、今少しその主張を貶し卑められては如何でせう――史記に據る)」と。すると顏回これ

を辯じていふ、「いや、(道德を蔑して利害を事とする今の世の人たちに)、容れられぬからとて、何の氣にかけることがござらう。さういふ天下の俗人どもに容れられないでこそ、始めて君子の君子たる所以がわかると思ひます。(容れられたら、これ卽ち小人であります)」と。楚の昭王は、(孔子の難を聞いて)軍隊を出して迎へに遣つたので、(孔子は難を免れて)楚に行かるゝことが出來た。(孔子が楚にゆかれたといふことは事實でないとする說もある)。昭王は孔子に書社七百里の地、卽ち一萬七千五百戸を知行として宛て行はうとした。然るに宰相の子西は(孔子は王者の道を天下に行はんとするものであるから、之に土地を與へて根據を作らしめ、多くの賢弟子をして之が輔佐たらしむることは、危險である、斷じて楚のためにならぬと言うて)可かない。(そこで昭王はこれを中止したので)、孔子は又衞に返られた。やがて魯の家老の季康子に迎へられて魯に歸られることになつた(時に魯の哀公十一年、孔子年六十九)。そこで魯の哀公は政治について孔子の意見を尋ねたけれども、終に孔子を任用し得なかつた。(孔子も亦仕へることを求められなかつた)。


發レ徒(徒は卒徒で、召使ひの人夫や兵卒の類。) ○詩云(詩は「詩經」を指す。その小雅「何草不黃」篇に「兕ニ匪ズ、虎ニ匪ズ、率ニ彼曠野ニ。哀シ我ガ征夫、朝夕暇アラズ。」とあるに本づく。) ○兕(音ジ。野牛に似て靑く一本の角ある獸といふ。) ○率ニ彼曠野ニ(率はシタガフと訓じて循の意。そうて行く。ひろびろした荒野に沿うてゆく。) ○何爲於レ是(「如何にしてか此に至れる」といふやうな意味。どうして斯うなつたのだらうといふこと。)

○子貢(孔子の門人、姓は端木、名は賜、子貢はその字。)　○夫子(夫は夫子・夫婦などの時は音便でフウと讀む。夫子は子といふに同じく、先生長者を呼ぶ辭。特に孔子の門人は孔子を稱して夫子又は子といった、先生といふこと。)　○顔回(姓は顔、名は回、字は子淵といふ。孔子の門人中、最もすぐれた人。)　○病(こゝではウレフと訓む。氣にかけること。)　○若子(學者・有德者・在位者など種々の意味があるが、こゝでは人格完成し道德の備はった人の意、)　○興レ師(師はイクサと訓じて軍隊のこと。周代の制では二千五百人を一師としたが、それに拘はる必要はない。)　○書社地七百里(古制によれば、二十五家を里とし、里毎に社を立つ。社とは土地の神を祀つた處である。その社の人名は之を名簿に書きのせるが故に書社の地といふ。それを七百といふのだから、卽ち一萬七千五百家の土地人民を以て、孔子の知行として與へようとするのである。七百里といっても道程ミチノリ、をいふのではない。)　○令尹子西(楚では宰相を令尹といった。子西は其の字である、)　○季康子(魯の大夫季孫氏、名は肥、康は諡。)

【餘論】陳蔡の厄に於ける子貢と顔淵との言葉に對して、孔子は、子貢には「汝の志遠からず」として、これに與せず。顔淵には「是れあるかな」と云つて欣然として許されたと「史記」の作者は言つてゐる。

孔子は魯の定公十三年五十六歳にして故國を去られてから、哀公十一年六十九歳にして再び故郷へ歸られるまで十四年間、(その間に暫らく魯に歸られたともいふ)天下を周遊して道を說き、匡人の畏、桓魋の難、陳蔡の厄と、一再ならぬ危難を冒して、少しも屈撓する所なく、ひたすら社會を救ひ道德を正しうするに盡された。而もその高き人格と大いなる道とは、終に天下の容るゝ所とならず、今や老脚蹉跎として再び故郷に歸り來られたのである。その狀とその情とを想ふとき、誰か心痛まぬ

韋編三絶

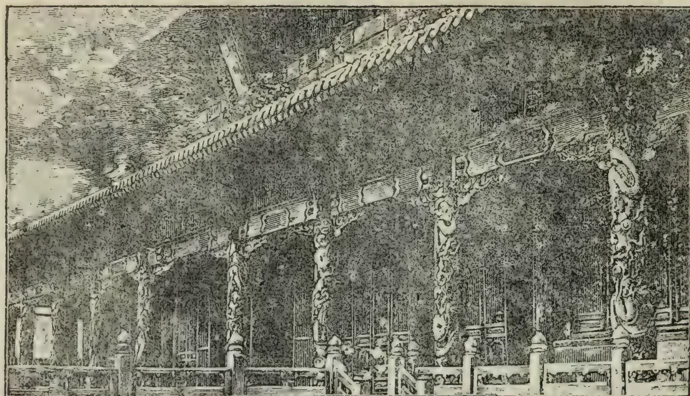
ものがあらう。誰か涙なきを得るものがあらう。こゝに於てか我々は「容れられずして、然る後に君子を見る」の語に、無盡の尊嚴を覺ゆるのである

孔子の偉大なる所以は、その人格。道德によることは勿論であるが、その後世に及ぼした影響の廣く且つ大いなる所以は、次章の著述によることを知らねばならぬ。その中でも「春秋」は、孔子が當時の時勢に顧みるところあつて、大義を明かにし、名分を正しうするが爲に、心血を濺いで書かれたものであることは、既に前に詳述したところである。

乃序書上自唐・虞、下至秦繆、删古詩三千、爲三百五篇、皆絃歌之。禮樂自此可述。晩而喜易、序彖・象・繫辭・說卦・文言。讀易、韋編三絶。因魯史記、作春秋。自隱至哀十二公。絶筆於獲麟。筆則筆、削則削。子夏之徒、不能贊一辭。弟子三千人。身通六藝者、七十有二人。年七十三而卒。子鯉、字伯魚。早死。孫伋、字子思。作中庸。

【訓讀】乃ち書を序で、上は唐・虞より、下は秦繆に至る。古詩三千を刪つて三百五篇となし、皆之を絃歌す。禮樂・此れより述ぶ可し。晩にして易を喜み、彖・象・繫辭・說卦・文言を序づ。易を讀んで韋編三たび絕ゆ。魯の史記に因つて春秋を作る。隱より哀に至るまで十二公。筆を獲麟に絕つ。筆すべきは則ち筆し、削るべきは則ち削る。子夏の徒・一辭を贊する能はざりき。弟子三千人。身、六藝に通ずる者、七十有二人。年七十三にして卒す。子鯉、字は伯魚。早く死す。孫伋、字は子思。中庸を作る。

【通釋】（魯に歸られてからの孔子は・最早その道を政治の實行に表はすことを斷念し　專ら古への典籍を修訂して・これによつて聖賢の道を明かにし、以て後世を敎へようと決心された）そこで先づ書經を整理して、古くは堯舜（堯典・舜典の二篇）より・近く秦の繆公（秦誓の篇）に至るまでの順序を正された。又古くから傳はつてゐる詩が三千篇もあるのを、善きを取り惡しきを削り捨てゝ三百五篇となし・皆これを樂器に上せて演奏し、（世道人心の敎化に資せられた）。これからして古への禮法音樂が・明かになるやうになつた。孔子は晩年に易を好まれ、彖・象・繫辭・說卦・文言などの諸篇を整理もし、注釋もされた。易を愛讀することの甚だしさに、なめしがはの綴が三度も切れたといふことであ



大成殿

る。孔子は又魯の國の歷史に本づいて「春秋」を作り、魯の隱公から哀公に至るまで十二代（二百四十二年間）の出來事を記して、「哀公十四年春西狩獲レ麟」といふ一句で筆を止めて了はれた。（その筆法は極めて嚴正で）、書くべきことは書き、削るべきことは削り、（一字一句も苟くもせられなかつたから）、文學に長じた子夏達ですら、一言も附け足すことは出來なかつた。孔子の弟子は凡そ三千人もあつたが、一身にして六藝に通達したものが七十二人あつた。（その中、最もすぐれた十人を「孔門の十哲」といふ）。かくて孔子は七十三歳にして亡くなられた。（孔子の卒年月は魯の哀公十六年四月己丑である。即ち周の敬王四十一年。皇紀一百八十二年で懿德天皇の三十二年、西紀前四百七十九年である。享年は七十、七十四が正しい

とされてゐる)。孔子の子は鯉といひ、字を伯魚といつたが、早く死んだ、孫の伋は、字を子思といひ、「中庸」といふ書物を著はした。

【語釋】 序レ書(「書」は書經(ショキャウ)のこと。もと尚書といひ、堯舜夏殷周の二帝三王の政道を書いた書物で、古文・今文の二種ある。五經の一。「序」はツイヅと訓み、整理して順序を立てること、) ○刪(ケヅルと訓む、わるい所を削り去ること。取捨すること。) ○絃歌(樂器に合せて歌ふこと。絃は糸を張つた樂器、琴の類。) ○可レ述(述とは前人の言つたことを受けついで、更に之を精しく明かにすること。) ○易(エキと讀む。周易ともいふ。易經のこと。五經の一。天地萬象の變化、人事興廢の道を、八卦によつて說いた書。伏羲・文王・周公・孔子の手を經て成つたものである。) ○彖・象・繫辭・說卦・文言(みな易經の篇名。彖・象・繫辭は各々上下に分れ、外に序卦・雜卦の二篇を加へて易の十翼といふ。孔子の注釋されたものである。) ○韋編(ナメシガハの綴ぢ目。昔、支那で紙のない間は竹簡(竹のフダ)に漆を以て字を書き、之を韋(ナメシガハ)で編み連ねたものである。故に韋編といふ。今で云へば書物の綴糸(トヂイト)といふに當る。又讀まない時は卷いておくから、書物を數へるに卷一・卷二など云つたのである。) ○魯史記(魯の史官の記錄。魯の國の歷史のこと。漢の司馬遷の著作した「史記」とは別。) ○春秋(孔子が魯の記錄に就いて筆削された書。出來事を繫せるのに一々年月日を記したから、四季中の春秋を取つて一年中の記錄たる意味を表はしたのである。たゞ魯ばかりでなく、各國とも其國の記錄を春秋と云つた。) ○絕二筆於獲麟一(麟は麒麟。今日見る所のそれではない。仁獸と信ぜらるゝ想像上の靈獸である。聖王が世に出る時には此の獸が現はれると信ぜられてゐた處、魯の哀公が十四年の春、西狩して麒麟を捕へたといふので、孔子は此の亂世にして此事あるを歎じ、王道の興らざることを慨して「哀公十四年春西狩獲麟」の一句を終として春秋の筆を擱かれた、と云ひ傳へられる。) ○子夏(孔子の門人、姓は卜、名は商、子夏はその字、文學を以て稱せられた。) ○不レ能レ贊二一辭一(贊は贊功の意で、つけ足すこと。一言も附け足すことが出來ぬ。容喙する能はず。) ○六藝(禮・樂・射・御・書・數の六種の學藝。即ち禮儀・音樂、以上德育、射術・御術、以上體育、習字・算術、以上智育のことである。) ○中庸(書名、孔子の孫子思の著。孔子の學が中正不變であることを說いたもの。)

孟母三遷之教

孟子其門人也。名軻。魯孟孫之後。生二於鄒一。幼被二慈母三遷之教一、長受二業子思之門一。道既通、游二齊・梁一不レ用。退與二萬章之徒一難疑答問、作二七篇一。

訓讀 孟子は、その門人也。名は軻。魯の孟孫の後なり。鄒に生る。幼にして慈母三遷の教を被り、長じて業を子思の門に受く。道既に通じ、齊・梁に游ぶ。用ひられず。退きて萬章の徒と難疑答問して七篇を作る。

通釋 孟子は子思の門人である。名は軻といふ。魯の公族の孟孫氏の子孫である。鄒といふ處に生まれた。幼いころ慈愛深き母から、謂はゆる三遷の教といふ心こめた教育を受け、成長してから子思の門下に入つて學業を受けた。學問が出來上つてから、齊・梁などの國々を遊歷して（その國主―齊の宣王、梁の惠王―などに道を說いたが、當時はもう戰國で、力の強いものが勝つといふ世の中であつたから、孟子の說く道德政治などは、高尙に過ぎて實際に疎いものとして）、どこでも用ひられなかつた。そこで孟子は鄉里に退いて、門人の萬章等と互ひに討論し問答し合つて、それを七篇の書に編述した。（いはゆる「孟子」の書が是れである）。

語釋 鄒（今山東濟寧道鄒縣。孔子の鄉里に近い。） ○慈母三遷之教（孟子の母が其の子の教育の爲に三たび住所を移したといふこと。「小學」稽古篇によると、初めは墓地のそばに住んでゐたところ、孟子は葬式のまねばかりした。そこで町に移つたところ今度は商賣のまねをする。三度目には學校の傍に移つたら、禮儀作法の稽古のまねをするやうになつた。それで母はこれこそ教育の地であると言つて、そこに落ちついたといふことである。） ○梁（魏の國をいふ。大梁に都したので、一に梁とも云つたのである。） ○萬章（孟子の弟子の名。） ○難疑答問（難は論難・辯難の難で、責めなじること。難疑は疑はしい所を問ひなじること。討論すること。答問は問答といふに同じい。）

老子

猶龍乎

列子莊子

老子者楚苦縣人也。李姓。名耳、字伯陽。又曰字聃。爲周守藏吏。孔子問焉。老子告之曰、良賈深藏若虛、君子盛德容貌若愚。孔子去謂弟子曰、鳥吾知其能飛。魚吾知其能游。獸吾知其能走。走者可以爲網、游者可以爲綸、飛者可以爲矰。至於龍、吾不能知。其乘風雲而上天也。今見老子、其猶龍乎。老子見周衰、去至關。關令尹喜曰、子將隱矣、爲我著書。乃著道德五千餘言而去。莫知其所終。其後有鄭人列禦寇・蒙人莊周。亦爲老子之學。莊周著書、侮孔子、而詆諸子焉。

【訓讀】老子は楚の苦縣の人也。李姓。名は耳、字は伯陽。又曰く字は聃と。周の守藏吏と爲る。孔子焉に問ふ。老子之に告げて曰く、「良賈は深く藏めて虛しきが若くし、君子は盛德あつて容貌愚なるが如し」と。孔子去り、弟子に謂ひて曰く、「鳥は吾れ其の能く飛ぶを知る。魚は吾れ其の能く游ぐを知る。獸は吾れ其の能く走るを知る。走る者は以て網を爲す可く、游ぐ者は以て綸を爲す可く、飛ぶ

者は以て矰を爲す可し。龍に至つては吾れ知ること能はず。其れ風雲に乘じて天に上らん。今老子を見るに、其れ猶ほ龍のごとき乎」と。老子、周の衰へたるを見て、去つて關に至る。關の令、尹喜曰く「子將に隱れんとす、我が爲に書を著はせ」と。乃ち道德五千餘言を著はして去る。其の終る所を知る莫し。其の後、鄭人列禦寇・蒙人莊周あり。亦老子の學を爲む。莊周、書を著はし、孔子を侮り、而して諸子を詘る。

【通釋】老子は楚の苦縣の人である。姓は李、名は耳、字は伯陽といふ。一說には字は聃といふとも云ふ。周に仕へてその藏書室の役人となつた。孔子は嘗て周に行つて、禮のことを老子に問はれたことがある。その時に老子は孔子に告げて、「よい商人といふものは、貨物を深くしまひこんで、賣る物が何もないやうに見せる。(物持だといふやうな氣振もない)。又君子は、立派な道德があつても、(それを深く內に養うて外へ表はさないから)、うち見たところ愚物のやうに見えるものぢや。(貴殿も左樣にあらねばならぬ)」と言つた。(これは老子の主義とする所の「自ら隱して名無きを以て務となす」——自分のすぐれた處を隱して人に名の聞えないやうにすることを專一とするといふ謙虛の意義を說いたのである。)孔子は老子の許を去つて國へ歸り、門人たちに言はれるには、「鳥はよく空を飛ぶといふこ

とは、予も知つてゐる。魚はよく水を游ぐことも、予は知つてゐる。獸はよく野山を走ることも、予は知つてゐる。（併しどんなによく飛び、游ぎ、走らうとも）、走るものなら網を張つて捕ることが出來るし、游ぐものなら綸を垂れて釣り取ることが出來るし、飛ぶものならいぐるみで射取ることが出來るものだ。併しながら、あの龍に至つては、予は如何にして之を捕るべきかを知り得ない。それは風雲に乘じて天に上り、（變幻測るべからず）、全くえたいの知れぬものである。今、老子を見るに、ちやうど龍のやうなものであらうか、（その人物は、なかなか測り知るべからざるものである）」と。老子は周室の衰へゆくのを見て、（世をつまらなく思つたものか）、官を去つて函谷關まで來た。すると關所を守る尹喜といふ人が「あなたはこれから世を遁れ隱れようとなさるらしい。（すればもうあなたの御說を承はることも出來ぬゆゑ）、どうかあなたの考へを書物に書いて私に下さい」と賴んだ。そこで老子は五千餘字の「道德經」といふ書を著はして、そこを去つた。（それが今日傳はつてゐる「老子」といふ書である）。さて老子は、どこで死んだか、誰も知るものはない。其の後に鄭の人に列禦寇、蒙の人に莊周といふのがあつて、（前者は列子といひ、後者は莊子といつて）、どちらも老子の學問を修めた。その莊周は書（「莊子」八卷）を著はして、（無爲自然・虛無恬澹などを說いて聖人仁義の道に反對

し)、孔子を輕蔑し、其の門人達を譏つた。(さうして自ら高く構へてゐた)。

語釋 苦縣(苦はコと讀む。今河南鹿邑縣。) ○守藏吏(史記に「守藏室之史」とあり、藏書室之史といふ意。圖書室を守る役人のこと。) ○綸(釣糸のこと。) ○矰(矢に糸をつけて鳥を射るもの。射てあたるとその糸が鳥にまとひつくやうにしたものである。イグルミといふ。) ○關令(この關は函谷關(河南)であるといひ、或は散關(陝西)だといひ、或は玉門關(甘肅)だといひ、諸説あつて一定しない。今姑らく函谷關としておく。令は關を守る官をいふ。) ○道德五千餘言(「道德」は普通にいふ道德の意ではない、「道德經」といふ書名である。老子道德經ともいひ、後世は專ら「老子」といふ。上下二卷、凡て八十一章、一切の人爲を去つて無爲自然の大道に歸れといふことを根本思想として說いたものである。「五千餘言」は五千餘字の意。言は句をいふこともあり、字をいふこともある。こゝは後者の意。) ○列禦寇(鄭の國の人。世に列子といふ。其の著「列子」八卷あり。その學は老子に本づき、淸虛無爲を說き、寓言が多い。) ○蒙人莊周(蒙は宋國の邑で今河南歸德府に屬する。莊周は世に莊子といひ、その著「莊子」三十三卷あり。その說は老子に本づきて寓言多く、その文は博辯宏辭にして壯大を極めてゐる。) ○諸子(孔子の門人たち、所謂七十子の徒をいふ。又諸子百家といつて老・莊・申・韓その他儒教以外の學者を指していふこともあるが、こゝはさうでない。)

南子之亂

子路結纓

衞姬姓、武王之母弟康叔封之所封也。後世至春秋、有靈公夫人南子之亂。子蒯聵欲殺南子、不果出奔。公卒。立蒯聵之子輒。蒯聵入。輒拒之。子路與其難。太子之臣、以戈擊子路、斷纓。子路曰、君子死、冠不免。結纓而死。衞人醢子路。孔子聞之、命覆醢。

訓讀 衞は姬姓、武王の母弟康叔封の封ぜられし所なり。後世春秋に至り、靈公の夫人南子の亂有

り。子蒯聵、南子を殺さんと欲し、果さずして出奔す。公卒す。蒯聵の子輒を立つ。蒯聵入る。輒、之を拒ぐ。子路其の難に與る。太子の臣、戈を以て子路を撃ち、纓を斷つ。子路曰く、「君子は死すとも、冠をば免がず」と。纓を結んで死す。衞人、子路を醢にす。孔子之を聞き、命じて醢を覆さしむ。

通釋　衞は姫姓で、周の武王の弟康叔封の封ぜられた國である。後世春秋の世になつて、靈公の夫人南子の騷動が起つた。（それは南子夫人の素行が修らぬ爲に、太子蒯聵が繼母南子のふしだらを恥しく思つて）殺害しようとしたが、失敗して國をとび出したのである。間もなく靈公が卒したので、衞の國民は蒯聵の子の輒を立てた。其の後、蒯聵は（色々と計畫して窃に國に）歸つて（位に即かうとし）、子の輒（位に即いて出公といふ）はこれを食ひ止めようとして、（こゝに親子の爭ひが起つた）。當時孔子の門人子路は（衞の大夫孔悝に仕へてゐたので）、此の戰ひに關係し、（蒯聵に敵對した）。太子蒯聵の臣（石乞・孟黶の二人）が戈を以て子路に斬りつけ、その冠の紐を斷ち切つた。子路は「君子は死するとも、冠は免がぬ」と叫び、紐を結んで殺された。（この爭の結果は蒯聵の勝に歸し、位に即いて莊公といふ）。衞の民（即ち莊公の臣）は子路の屍體を刻んでしほからにして罰した。孔子は此

以二二卵一棄二干城之將一

の事を聞かれ、(子路の死を痛むの餘り、しいしほからを食ふに忍びずとて)、家人に命じて貯藏のしいしほからを全部棄てさせたといふ。

語釋 衛(國名。直隷省舊大名府から開州以西、河南の衛輝・懷慶に至る地。始は朝歌―河南衛輝府淇縣―に都したが後しば〳〵遷つた。) ○南子之亂(南子はもと宋侯の女で、衛の靈公の夫人となつたものであるが、國に居る時から宋の公子宋朝といふ美男と通じてゐたのを、衛に嫁いでからも靈公に頼んで宋朝を招き寄せ、頗る醜聲あり、國民ははやり唄など作つてやかましく非難した。そこで靈公の太子で夫人には繼子である蒯聵が、これを恥辱として、南子を殺害しようとしたのである。) ○子路與二其難一(子路は孔子の門人仲由の字、一に季路ともいふ。孔子の門人中最も武勇を以て知られた人。「與二其難一」とは、其の變に關係したといふ意。この事件は複雜であるが、簡單にいへば、子路は衛の大夫孔悝に仕へてゐた。蒯聵は窃かに國に歸つて、孔悝を脅迫して味方につける爲に無理に孔悝をつれて行つたので、子路はもとの主人孔悝を奪還すべく蒯聵等の居る臺に火をつけようとして、蒯聵の家來の爲に擊たれたのである。) ○太子之臣(太子は靈公の太子蒯聵を指す。上文の「子蒯聵」の子も當に太子とあるべきである。) ○纓(冠の紐をいふ。然るに我國では冠の後に挿む一種の裝飾で、一に燕尾と稱するものを指し、それに立纓・垂纓・卷纓などの種類がある。) ○君子死冠不レ免(孔子の門下たる子路が死に臨んで禮儀を重んじた毅然たる意氣を示す。) ○衛人醢二子路一(この戰爭の結果、蒯聵勝つて國に入り、自立して莊公といひ、輒は魯に出奔し、之を出公といふ。こゝに衛人といふは其の莊公の臣を指す。故に子路を醢にしたのである。醢はシシビシホと訓じ、シホカラのこと。前に詳し。人を醢にするとは、その刑に處するだけで、食ふ爲ではない) ○覆レ醢(覆は、ぶち明けて棄てゝしまふこと。)

戰國ノ時、子思居ル二於衛ニ一。言フ二苟變ヲ可シト一レ將トス。衛侯曰ク、變ハ嘗テ爲リシトキレ吏ト、賦シテ二於民ニ一食ヘリ二人ノ二雞子ヲ一。故ニ弗レ用ヒ。子思曰ク、聖人ノ用フルハレ人ヲ、猶ホ二匠之用フルガ一レ木ヲ。取リテ二其ノ所ヲ一レ長キ、棄ツ二其ノ所ヲ一レ短キ。故ニ杞梓連抱ニシテ、而モ有リトモ二數尺之朽一、良工ハ不レ棄テ。今君處リ二戰國之世ニ一、而シテ以テ二二卵ヲ一棄ツ二干城之將ヲ一。此レ不ル

可レ使レ聞ニ於鄰國一也。

訓讀　戰國の時、子思、衛に居る。苟變を將とす可しと言ふ。衛侯曰く、「變は嘗て吏たりしとき、民に賦して人の二雞子を食へり。故に用ひず（弗は不に同じ）」と。子思曰く、「聖人の人を用ふるは、猶ほ匠の木を用ふるがごとし。其の長き所を取りて、其の短き所を棄つ。故に杞梓連抱にして數尺の朽ありとも、良工は棄てず。今君、戰國の世に處り、而して二卵を以て干城の將を棄つ。此れ鄰國に聞かしむ可からざる也」と。



孟子像

通釋　子思が、戰國の頃、衛の國に仕へてゐたとき、苟變を大將になさるがよいといふ事を衛侯に申し上げたところ、衛侯（愼公といふ）のいはれるには：「苟變は嘗て役人の頃、人民に割りあてゝ、一人あて二個づつの雞卵を取り立てゝ食べたことがある。（その行ひは甚だ感心しない）、故に彼を用ひることは出來ぬ」

と。そこで子思は斯う申した「聖人が人物を任用される仕方は、丁度大工が材木を使ふやうなものです。卽ち材木の長い所、間に合ふ所を取り用ひて、その短い所、間に合はぬ所を棄てまする。(つまり長所を取つて短所を棄てるのでございます)。それ故に、やなぎとかあづさとかの立派な木で、幾抱へもあるといふやうな大材になりますと、たとひ數尺ぐらゐの腐朽がありましても、よい大工は、それを捨てませぬ。(大人物とあれば、よしや多少の缺點があつても、之を用ひて、その長所を發揮させるものでございます)。我が君には、今や最も人材の必要な戰國の世に立たれながら、僅か二個の卵のために、國の守りとして大事な大將苟變を、棄てゝお用ひなされぬ。(それは丁度、連抱の杞梓を、僅かの朽のために捨てゝしまふと同樣、誠に惜しいことでございます)。かやうな事は恥かしくて隣の國へも聞かされませぬ。(聞えたら國辱であります)」と。

語釋 賦二於民一(賦は租稅などのやうに割りつけて取り立てること。賦課。) ○人二雞子(雞子は雞卵のこと。顧炎武の日知錄に、「人二雞子ハ人每ニ二雞子ヲ出サシムルナリ」とある。今それに從ふ。) ○匠(タクミと訓じ、大工のこと。轉じて廣く技術家や考案などの意味に用ひる。畫匠・意匠など。) ○所ㇾ長所ㇾ短(木の長き短きに喩へて人の長所短所をいうたのである。) ○杞梓(杞はカハヤナギの一種、一說にアフチの一種と。梓はアヅサ。ともに材木の立派なもの。) ○連抱(抱はひとかゝへ。連抱はいくかゝへ。材木の大きいこと。) ○干城(干はタテ、城はシロ。干となり城となつて國を守る人。卽ち國家に重要なる武人をいふ。)

衞侯言ㇾ計。非ㇾ是。而羣臣和者如ㇾ出二一口一。子思曰、君之國事、將二日非一矣。君出

誰知烏之雌雄

言自以爲是、而卿大夫莫敢矯其非。卿大夫、出言、自以爲是、而士庶人莫敢矯其非。詩曰、具曰予聖。誰知烏之雌雄。周之諸侯、惟衞最後亡。至秦幷天下爲帝二世、始廢君角爲庶人。

訓讀　衞侯、計を言ふ。是に非ず。而も群臣和する者、一口に出づるが如し。子思曰く、「君の國事、將に日に非ならんとす。君、言を出して、自ら以て是と爲し、而して卿大夫敢て其の非を矯むる者莫し。卿大夫、言を出して、自ら以て是と爲し、而して士庶人敢て其の非を矯むる莫し。詩に曰く、『具に予を聖なりと曰ふ。誰か烏の雌雄を知らん』と」。周の諸侯、惟、衞最も後に亡ぶ。秦、天下を幷せ帝たること二世に至つて、始めて君角を廢して庶人と爲す。

通釋　衞の愼公は、いろ〳〵計策を考へて、言ひ出されるが、どれも感心したものでない。然るに多くの家來達は、みな君に阿り調子を合せて、その言ふ事が(結構でございます、御尤もでございますと)恰も一人の口から出るやうに(誰も彼も)同じであつた。子思が(さうした氣風を非常に憂へて)いふやうには、「これでは君の御政治も、日に〳〵衰へゆくばかりぢや。君は何か仰せ出されると、もう

御自分で善いと定めてかゝられる。すると朝廷の役人達は、(よし君の言葉に宜しくないところがあつても)、おしきつて其の惡い點を正さうとするものがない。同樣に朝廷の役人達が何か言ひ出す場合、始めから自分で善いとしてかゝる。すると其の下の士分や一般の人民までが、誰も押して其の惡い點を正すものがない。(かやうに上は下を壓し、下は上に諂ひ、上下を通じて御無理、御尤もで人の意を迎へてるやうでは、政治の向上も綱紀の肅正も、到底望むことは出來ない、國事は益々墮落するばかりである)。詩經の詩に、『具曰二予聖一、誰知二烏之雌雄一』――誰も彼もが皆自分を聖人だ、偉いもんだとばかり思つてるが、誰も烏の雌雄でさへ見分けるものがないではないか、(誰が本當の聖人だか分つたものでない)とある。(今、君も臣も共に自分の言ひ出した事を善いとして、人の忠言を聽くことを欲しないが、それの是であるか非であるかは、誰が分つたものぞ」と。周の諸侯の中では、衞の國だけが一番あとに亡んだ。(言ひ換へれば一番あとまで殘つたのである)。卽ち秦が(周を亡ぼして)天下を統一し、帝號を稱すること二代(始皇帝、二世皇帝)にも及んで、始めて衞侯の君角をしりぞけて平民としたのであつた。(世紀に、衞は康叔から君角に至るまで凡て四十三世とある)。

語釋 言計(一說にゲンケイと讀んで、言を出し事を計るをいふと、亦通ず。) ○詩曰云々(詩經小雅正月の篇の句。)

子産

鄭姫姓、周宣王庶弟桓公友之所封也。桓公子武公、與其子莊公、並爲周司徒。數世至聲公、相子産。子産者公族、國氏、名僑。孔子過鄭、與子産如兄弟云。穆襄以來、鄭無歲不被晉楚之兵。子産受之、以禮自固。雖晉楚之暴、不能加焉。鄭至周威烈王時、君乙爲韓哀侯所滅。韓徙都之。

訓讀 鄭は姫姓、周の宣王の庶弟桓公友の封ぜられし所なり。桓公の子武公、其の子莊公と、並びに周の司徒と爲る。數世にして聲公に至り、子産を相とす。子産は公族にして、國氏、名は僑といふ。孔子、鄭に過り、子産と兄弟の如しと云ふ。穆襄以來、鄭は歲として晉楚の兵を被らざること無し。子産之を受け、禮を以て自ら固うす。晉楚の暴と雖も、加ふること能はず。鄭は周の威烈王の時に、君乙、韓の哀侯の滅す所と爲る。韓徙りて之に都す。

通釋 鄭は周と同姓の姫姓で、周の宣王の腹違ひの弟の桓公(名は)友といふ人の封ぜられた國である。桓公の子武公と、その子の莊公とは、共に周の文部卿に任ぜられた。其の後數代を歷て聲公の

世になつて、賢人子産を大臣に任じた。子産はもと鄭の公族で、氏は國といひ、名は僑といふ。（子産は其の字である）。曾て孔子が鄭國に立寄られた時、子産と親しく交られて、兄弟のやうであつたと云ふことである。鄭は穆公・襄公の世から此の方、北の晉や南の楚から攻められぬ歳とては無かつた。子産は（大臣として此の多難な）國政を受け繼ぎ、專ら禮を以て諸侯に對して鄭國の地位の堅固につとめたので、さすが強暴な晉や楚も鄭を威服することが出來なかつた。鄭は周の威烈王の時に至つて、其の君の君乙が韓の哀公の爲に滅されたので（鄭の國運は絕えてしまつた）。韓は鄭の都の新鄭（河南省開封府）に遷つて、こゝを都と定めた。（世紀に鄭は桓公より君乙に至るまで凡て二十三世とある）。

語釋 司徒（周の六官の一。文教を掌る。文部大臣といふが如し。） ○聲公（左傳 史記等によると簡公とすべきである。） ○公族（諸侯の一族をいふ。） ○國氏（氏は家といふが如く家門を分つ爲に名づけたもので、一姓より分出したものである。卽ち子產は鄭の公族で姓は姬であるが、その姬姓より分出して國氏を稱したのである。—子產の父の字を子國と云つたので國を以て氏とした—然るに後には姓と氏とは混同して、史記にも「姓趙氏」「姓田氏」などと書くやうになり、氏を以て姓としたので終に姓は亡んで氏のみとなつてしまつた。姓氏の混同は我國も同じ事である。） ○不レ能レ加（相手に威力を加へて凌ぎ犯すことが出來ぬといふこと。敵を壓へつけることが出來ぬとか、相手より上に出ることが出來ぬとかいふ意味に用ひる。） ○至ニ周威烈王時ニ（威烈王は烈王（姬烈王の孫）の誤であらう。鄭の君乙は周の烈王九年に韓の哀公に殺され、鄭國こゝに滅んだ。）

晉ハ姬姓、成王ノ弟唐叔虞之所レ封ゼラレシ也。成王幼キトキ、與ニ叔虞一戲レ、削リテ桐葉ヲ一爲シテレ圭ト曰ク、以チレ此ヲ

晉文公
介子推

封若。史佚請擇日。王曰、吾與之戲耳。佚曰、天子無戲言。遂封唐。後世至文公霸諸侯。文公、名重耳、獻公之次子也。獻公嬖於驪姬、殺太子申生、而伐重耳於蒲。重耳出奔、十九年而後反國。嘗餒於曹。介子推割股以食之。及歸、賞從亡者狐偃・趙衰・顚頡・魏犨、而不及子推。

訓讀　晉は姫姓、成王の弟、唐叔虞の封ぜられし所なり。成王幼きとき、叔虞と戲れ、桐葉を削つて圭と爲して曰く、「此れを以て若を封ぜん」と。史佚、日を擇ばんと請ふ。王曰く、「吾、之と戲れし耳」と。佚曰く、「天子は戲言無し」と。遂に唐に封ず。後世文公に至つて諸侯に霸たり。文公、名は重耳、獻公の次子なり。獻公、驪姬を嬖して、太子申生を殺し、而して重耳を蒲に伐つ。重耳出奔し、十九年にして後、國に反る。嘗て曹に餒う。介子推、股を割いて以て之に食はしむ。歸るに及んで、從亡の者狐偃・趙衰・顚頡・魏犨を賞し、而も子推に及ばず。

通釋　晉は姫姓で、周の成王の弟の唐叔虞が封ぜられた國である。初め成王の幼少の時、弟の叔虞と遊んでゐたが、桐の葉を切つて圭といふ玉の形に作り、叔虞に向つて「これを證にしてお前を

大名にしてやらう」と言つた。(圭は天子が諸侯を封ずるとき、證として授ける玉である)。これを聞いた太史の官の佚といふのが、「では御任命の日を定めませう」と申し上げた。成王曰く「いや、冗談だよ」。佚曰く、「天子様に御冗談は無い筈であります」と。(そこで冗談が事實になつて)、叔虞は唐に封ぜられた。(唐は今の山西冀城縣である。然るに其子の燮に至つて晉――山西太原縣の東北――に遷り、爾來、國號を晉と稱した)。後世文公に至つて諸侯の覇者となつた。文公は名を重耳といひ、獻公の次男である。獻公は驪姫(驪戎といふ西方の夷狄の女)を寵愛し、(驪姫の生んだ子奚齊に後を嗣がせたい爲に)太子の申生を殺し、重耳を蒲といふ處に攻めた。そこで重耳は國を逃げ出して、(諸方を流浪し)十九年目に晉の國に戻つて來て(位に即いた。これを文公といふ)。流浪中、西國に於ては食ふものがなくなり饑に迫つたので、お供の介子推が我が股の肉を割き取つて重耳に食べさせたことがあつた。重耳今や國に歸つて(晉君となるに及んで)、お供をして逃げた者、狐偃・趙衰・顚頡・魏犨の四人に褒美を與へたが、介子推にはその沙汰がなかつた。

語釋 晉(今の山西平陽・太原以東、直隷廣平・大名の地を占有してゐた。) ○圭(天子が諸侯を封ずる時に證として授ける玉。上は圓く下は角で、笏を倒にしたやうな形、玉を以て材となし、その長さと彫刻とは等級によつて異り 從つて其名を異にする。) ○史佚(史は太史の官、即ち記錄を掌る官。佚は名。) ○蒲(今の山西河東道蒲縣。當時重耳の領地であつた。) ○曹(今の山東濟寧道曹縣。) ○從亡者(亡はニゲルと訓ず。亡ぐるに從ふ者の意で君の出奔にお供して行つた者

一蛇無穴

介山

といふこと。)

子推之從者、懸書宮門曰、有龍矯矯。頃失其所。五蛇從之、周流天下。龍饑乏食。一蛇刲股。龍返於淵、安其壤土。四蛇入穴。皆有處處。一蛇無穴。號于中野。公曰、噫寡人之過也。使人求之。不得。隱綿上山中。焚其山。子推死焉。後人爲之寒食。文公環綿上田、封之、號曰介山。文公卒。其後遂世爲霸。歷襄公・靈公・成公・景公・厲公、至悼公、霸業復盛。

【訓讀】子推の從者、書を宮門に懸けて曰く「龍あり矯々たり、頃く其の所を失ふ。五蛇之に從ひて天下を周流す。龍饑ゑて食に乏し。一蛇股を刲く。龍淵に返り、其の壤土に安んず。四蛇穴に入る。皆處々あり。一蛇穴なし。中野に號く」と。公曰く、「噫、寡人の過なり」と。人をして之を求めしむ。得ず。綿上の山中に隱る。其の山を焚く。子推死す。後人之が爲に寒食す。文公、綿上の田を環らして之を封じ、號して介山と曰ふ。文公卒す。其の後遂に世々霸たり。襄公・靈公・成公・景公・厲公

を歴て、悼公に至り、覇業復た盛なり。

（それを本意なく思つた）子推の從者が、文公の御殿の門に貼札をして、かういふ意味のことを書いた――「威勢のよい一頭の龍（重耳に喩へる）があつたが、暫らく己が居所に居れなくなつた。そこで五匹の蛇（狐偃等五人に喩ふ）がお供をして世間を流浪してまはつた。そのうちに龍は食物缺乏して饑に迫つた。時に一匹の蛇（介子推に喩へる）は股の肉を切り取つて龍に食べさせた。さて龍は元の棲處の淵に歸つて、己が居所に落ちつくことになり（重耳、晉に歸つて位に卽いたことに喩へる）、お供した四匹の蛇も穴へ入つて、皆それ〲棲處が出來た（狐偃等四人賞せられて領地を得たことに喩へる）。たゞ彼の股の肉を切り取つた一匹の蛇だけは、入るべき穴がなくて野中に泣いてゐる。（介子推が賞に漏れたことをいふ）」と。文公はこれを見て、「あゝ、予がわるかつた」と云つて、人を遣はして子推を探させたが、見つからない。然るに綿上といふところの山の中に隱れてゐるといふことなので、（山を燒いたら子推が逃げ出して來るだらうと思つて）その山を燒いた。併し子推は出て來ないで燒け死んでしまつた。後世の人は、（子推の燒け死んだことを哀れに思ひ、火を焚くに忍びないといふので）、其の日はひ、ものだちをして、（子推の魂を弔うた）。文公はその綿上のぐるりの田地を以て子推の所

領となして（その祭祀の料に宛て）、名をば（介子推の姓に因んで）介山と云つた。文公が亡くなつて、其の後も晋は代々覇者であつた。それから襄公以下五代を歷、悼公に至つて、復び覇者たるの事業を振ひ興した。

語釋　矯々（高く擧るさまで、威勢のよい盛んな樣子。又強くたけしいさまにもいふ。）　○刲（サクと訓む。割と同意で、さききること。）　○壤土（土壤。國土。）　○處々（それ〴〵落ちつくべき處。定處。）　○中野（野中といふに同じく、野の中の意。）　○號（サケブともナクとも訓む。大聲で泣くこと。號泣。）　○寒食（火で煮燒したものを食はないこと。ひものだち。それは三月二日といひ、或は五月五日といひ、其他諸說あるが、要するに周時代からの舊制で、介子推の故事から始まつたのではないといふ。）

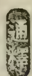
六卿皆大

又歷平公・昭公・頃公、公室益弱、而六卿范氏・知氏・中行氏・趙氏・魏氏・韓氏皆大。歷定公至出公。知氏與趙・魏・韓氏分范・中行氏。公怒。四卿反攻之。公出奔而死。哀公立。韓・趙・魏氏、又滅知氏而分之。幽公立。晋獨有絳・曲沃。餘皆入韓趙魏氏。號爲三晋。烈公立。三卿以周威烈王命爲侯。又歷孝公至靜公。魏武侯・韓哀侯・趙敬侯共廢靜公爲家人而分其地。晋絕不祀。

三晋



又平公・昭公・頃公を歷て、公室益々弱く、而して、六卿范氏・知氏・中行氏・趙氏・魏氏・韓氏皆大なり。定公を歷て出公に至る。知氏、趙・韓・魏氏と范・中行氏を分つ。公怒る。四卿反つて公を攻む。公出奔して死す。哀公立つ。韓・趙・魏氏、又知氏を滅して之を分つ。幽公立つ。晉獨り絳・曲沃を有つ。餘は皆韓・趙・魏氏に入る。號して三晉と爲す。烈公立つ。三卿、周の威烈王の命を以て侯と爲る。又孝公を歷て靜公に至る。魏の武侯・韓の哀公・趙の敬侯、共に靜公を廢して家人と爲し、其の地を分つ。晉絕えて祀らず。



それから平公・昭公・頃公を經る三代の間に、晉の公室は次第に衰へて、家老の范・知・中行・趙魏・韓の六氏が何れも勢を得て來た。定公を經て出公の時になると、知氏（智伯といひ、最も勢力があつた）が趙・韓・魏の三氏と同盟して、范・中行の二氏を滅して、其の地を分け取つて了つた。出公が（この無法を）怒つたところ、却つて知氏等四人の家老に攻め立てられて（齊に）逃げてゆき、そこで死んだ。次は哀公が立つたが、韓・魏・趙の三氏は知氏を滅してその地を分け取つた。（このやうに家老達の橫暴は益々募るのみで）、幽公の立つた時には、晉の公室は、僅かに絳と曲沃（竝に山西省）の二ケ所を領するに過ぎずして、他は悉く韓・魏・趙三家に占有されてしまつた。（この三家は皆晉から出たとい

胡公封陳

ふので）三晉と號した。烈公の時に、三家老は周の威烈王の命を受けて、獨立して諸侯の列に上つた。その後、晉は孝公を經て靜公の世になつたが、遂に韓・魏・趙の三侯が相談して、靜公を廢して平民に降し、その地を分け取つた。これで晉室は斷絶して、祖先の祀を行ふものも無くなつた。

陳、嬀姓、虞舜之後、胡公滿之所封也。周武王求而封之。後世至春秋、有公子完者。出奔而仕于齊。陳後爲楚惠王所滅。而完之後、遂大于齊。爲田氏。

〔訓讀〕陳は嬀姓、虞舜の後、胡公滿の封ぜられし所なり。周の武王求めて之を封ず。後世春秋に至り、公子完といふ者有り。出奔して齊に仕ふ。陳は後に楚の惠王の滅す所と爲る。而して完の後は、遂に齊に大なり。田氏と爲る。

〔通釋〕陳は嬀といふ姓で、舜帝の子孫の胡公滿（胡公は謚、滿は名）といふ者の封ぜられた國である。それを周の武王が捜し出して封じたのであつた。その後春秋の世になつて、公子の完といふのがあつたが、（事によつて）國を飛び出し、齊の國に仕へて居つた。陳は後に惠王に滅されたが、完の子孫は遂に齊で勢力を得、田氏と稱することになつた。（後には主家の齊を滅して新に田氏齊といふのを

興すことになる。後に詳かである。)

語釋 陳(今の河南舊開封府以東、南安徽舊亳州に至るの地を領し、河南陳州に都した。)

齊姜姓、太公望呂尚之所封也。後世至桓公霸諸侯。五霸桓公爲始。名小白。兄襄公無道。羣弟恐禍及。子糾奔魯。管仲傅之。小白奔莒。鮑叔傅之。襄公爲弟無知所弑、無知亦爲人所殺。齊人召小白於莒。而魯亦發兵送糾。管仲嘗遮莒道、射小白中帶鉤。小白先至齊而立。鮑叔牙薦管仲爲政。公置怨而用之。

訓譯 齊は姜姓、太公望呂尚の封ぜられし所也。後世桓公に至つて諸公に覇たり。五覇は桓公を始と爲す。名は小白、兄襄公、無道なり。群弟、禍の及ばんことを恐る。子糾は魯に奔る。管仲之に傅たり。小白は莒に奔る。鮑叔之に傅たり。襄公、弟無知の弑する所と爲り、無知も亦人の殺す所と爲る。齊人、小白を莒より召く。而して魯も亦兵を發して糾を送る。管仲嘗て莒の道を遮り、小白

を射て帶鉤に中つ。小白先づ齊に至つて立つ。鮑叔牙、管仲を薦めて政を爲さしむ。公、怨を置いて之を用ふ。

【通釋】齊は姜姓で、その昔太公望呂尙が始めて封ぜられた國である。それからずつと後の十六代目桓公に至つて、諸大名の覇者となつた。五覇といつて五人のはたがしらがあつたが、桓公がその眞先であつた。桓公は名は小白といつた。兄の襄公といふのが道に外れた惡い人なので、多くの弟たちは、我が身に災難が降りかゝることを恐れ、子糾といふのは魯へ逃げた。管仲がそのお守役となつて附いて行つた。小白は莒（今山東濟寧道にある）といふ處へ逃げた。これには鮑叔が守役となつて行つた。ところが襄公は、今一人の弟の無知といふ者に殺され、無知も亦或者の爲に殺されてしまつた。そこで齊の國の人たちは小白を莒から迎へて君としようとした。すると魯の國でも兵隊をつけて子糾を送り込んで來た。（こゝで小白と子糾との兄弟が、國入の爭ひが起つた）。その時管仲は（子糾を先へ入國させる爲に）、小白が莒から來る道をくひとめて、小白を射た。矢は帶鉤に中つた。（小白は佯つて死んだ風をした。管仲はそれを信じて、油斷して入國が遲れた）。その間に小白は先へ齊の國へ入つてしまつた。さうして、立つて齊君となつた。（卽ち桓公である）。さて桓公を輔佐して來た鮑

叔牙（牙は名）は、（もとより管仲の親友であつたが）、こゝに至つて管仲を桓公に推薦して政治をなさしめた。桓公は（管仲が嘗て自分を狙ひ撃つた）怨を捨てゝ、管仲を重く用ひた。

語釋 齊（今の山東省の地を領し、營丘に都した。） ○霸（大名のはたがしら。我が國でいへば足利氏・徳川氏の如きもの。） ○無道（道徳にそむいた惡い行。） ○帶鉤（腰に帶びた金の環。おびがね。）

管鮑之交

仲、字夷吾、嘗與鮑叔賈。分利多自與。鮑叔不以爲貪。知仲貧也。嘗謀事窮困。鮑叔不以爲愚。知時有利不利也。嘗三戰三走。鮑叔不以爲怯。知仲有老母也。仲曰、生我者父母。知我者鮑子也。

九合一匡

桓公九合諸侯、一匡天下、皆仲之謀。一則仲父、二則仲父。

訓讀 仲、字は夷吾、嘗て鮑叔と賈す。利を分つて多く自ら與ふ。鮑叔以て貪と爲さず。仲の貧しきを知れば也。嘗て事を謀つて窮困す。鮑叔以て愚と爲さず。時に利と不利と有るを知れば也。嘗て三たび戰つて三たび走る。鮑叔以て怯と爲さず。仲に老母あるを知れば也。仲曰く、「我を生む者は父母、我を知る者は鮑子也」と。桓公、諸侯を九合し天下を一匡せるは皆仲の謀なり。一にも則ち仲父、

二にも則ち仲父といへり。

【通釋】管仲は字を夷吾といふ、(實は夷吾は名であつて字ではない、著者の誤であらう)。嘗て鮑叔と商賣をしたが、利益を分配する時に、管仲は、いつも自分の方へ餘計に取つた。けれども鮑叔は、仲を貪るとは思はない。なぜなら仲の貧乏なことを知つてゐたから。又或時、仲が事を企てゝ見込違ひをして大いに困り果てた。でも鮑叔は、仲が智慧がないとは思はない。なぜなら運不運といふことがあるから。又或時、仲は三度戰つて三度とも逃げたことがある。それでも鮑叔は、仲を卑怯者とはしない。なぜなら仲には年老いた母があつて(それを養はねばならぬ爲に生命を惜しむのだといふことを)知つてゐたから。(そこで管仲も、鮑叔の好意に感激して)、「我を生んで下されたのは父母である。さうして我を本當に理解してくれるのは鮑君である」と云つた。(父母にも比すべき恩義として感謝したのである)。桓公が諸侯をまとめひきすべ、天下を統一して亂れを正したのは、皆管仲の謀によるのである。それで何事にも仲父々々といつて管仲をたよりにした。

【語釋】賈(あきなひ。商賈と熟す。)　○九合(九は糾に通じて、たゞし合はすこと。割據の諸侯を一つにまとめることをいふ。又、九たび諸侯を會合したことゝする說もある。)　○一匡(匡はタヾスと讀み、正すこと。一匡は天下を統一して亂れたるを正し直すこと。又、一たび天下をたゞすとする說もある。)　○仲父(父は、文王が太公望を尊んで師尚父といつたと同じく、父として尊敬する意。管仲の名に配して仲父と云つたのである。)

易牙豎刁非人情

仲病。桓公問、群臣誰可相。易牙何如。仲曰、殺子以食君。非人情。不可近。開方何如。曰、倍親以適君。非人情。不可近。蓋開方、故衞公子來奔者也。豎刁何如。曰、自宮以適君。非人情。不可近。仲死。公不用仲言。卒近之。三子專權。公內寵如夫人者六、皆有子。公薨。五公子爭立、相攻。公尸在牀無殯斂者六十七日、尸蟲出于戶。

訓讀 仲、病す。桓公問ふ、「群臣誰をか相とす可き。易牙は何如」と。仲曰く、「子を殺して以て君に食ましむ。人情に非ず。近づく可からず」と。「開方は何如」と。曰く、「親に倍いて以て君に適ふ。人情に非ず。近づく可からず」と。蓋し開方は故の衞の公子の來奔せる者なり。「豎刁は何如」と。曰く、「自ら宮して以て君に適ふ。人情に非ず。近づく可からず」と。仲、死す。公、仲の言を用ひずして、卒に之を近づく。三子、權を專にす。公、內寵、夫人の如き者六、皆子有り。公、薨ず。五公子立たんことを爭うて相攻む。公の尸、牀に在つて殯斂する無き者六十七日、尸蟲、戶より出づ。

管仲が危篤に陷つた時、桓公は之を見舞つて、「お前が死んだら、群臣の中で誰を大臣にしたらよからうか。あの易牙は(よささうに思ふが)、お前の考へはどうぢや」と問うた。管仲答へて曰く、「易牙は我が子を殺して其の肉を君にすすめました。これは人情にはづれた事であります。斯様な者はお近づけにならぬやうに願ひます」と申し上げた。桓公曰く、「では開方はどうか」と。管仲の答へに、「開方は親の意にそむいて國を飛び出して君の思召に叶はうとした者であります。これも亦人情に外れた行ひで御座るから、お近づけになつてはなりませぬ」と。いふのは、開方はもと衛の公子であるのが、齊に逃げて來た者であるからである。桓公は重ねて問うて曰く、「では宦官の刁はどうだ」と。管仲答へて、「刁は我れと我が身に去勢して(奥向に入りこみ)、君の御機嫌を取つて出世した男であります。これも人情ではありませぬ。御近づけにならぬがよろしい」と申した。斯くて管仲は死んだ。ところが桓公は管仲の言葉を反古にし、つひに此の三人の者を近づけ用ひたので、三人は權力をほしいまゝにし、(齊の國政が亂れ出した)。のみならず、桓公には、妾で奥方のやうに羽振を利かした婦人が六人あつて、いづれも男の子をもうけた。ところで、桓公が亡くなると、その五人の公子が後嗣にならうと爭つて、互に戰をし出した。そんな騷ぎで、桓公の屍體は寢臺に横つたまゝ、衣を着せる

でもなく、棺に收めてかりもがりするでもなく、六十七日といふ長い間うち捨てゝあつたので、屍體が腐つて蛆がわき、室の外までも這ひ出すといふ始末であつた。

語釋 仲病（疾病と熟して普通ヤマヒの義に用ひるのであるが、本義は病はヤマヒの重くなつて危篤に陷つたのをいふ。論語の述而篇に「子疾病」とある。之を「子、ヤマヒ、ヘイナリ」と讀む。孔子の病氣が危篤に陷つたといふのである。こゝの病もその意である。）○殺レ子以食レ君（桓公が蒸した兒を食ひたいと言つた時、易牙が我が子を蒸して獻じたといふ。（一説には、桓公が易牙の子を憎んでゐるので、易牙が子を殺して君の意を迎へたので、肉を食はしめたのではないといふ。史記には食を適に作る。他の二句皆適とある所よりすれば適の方がよいやうである。）○何如（何如はイカニと讀んでも、意は、其物のよしあしいかにといふので、その本質の可否を問ふのである。如何は、どうしたらよいかと、その方法を尋ねるので、自ら其意味が違ふ。）○倍（音ハイで背に通じソムクと訓む。）○適レ君（君の意に迎合して立身出世を謀ること。とりいる。）○豎刁（豎は豎の俗字、小童の義であるが、こゝでは宮廷の奥向に仕へる官吏、卽ち宦官の意。姓ではない。刁は名である。）○宮（去勢すること。宦官は宮廷の奥向に仕へる關係上、皆去勢することになつてゐた。）○內寵（天子諸侯の侍妾。）○夫人（諸侯の正妻。後には轉じて一般に人の妻を呼ぶ尊稱となる。夫は扶で、良人をたすける人の義である。）○牀（床の本字。寢臺のこと。）○殯斂（死者に衣物を着せ、棺にをさめて祭ること。殯はカリモガリと訓じ、葬るまで棺に入れて祭ること。之を賓として遇する意だといふ。斂は、こゝは殮に同じく、死者に衣物を着換へさせること。）

一狐裘三十年

自桓公八世至景公。有晏子者、事之。名嬰、字平仲。以節儉力行重於齊。一狐裘三十年、豚肩不掩豆。齊國之士、待以擧火者、七十餘家。晏子出。其御之妻、從門閒窺、其夫擁大蓋、策駟馬、意氣揚揚自得。既而歸。妻請去曰、晏子身相齊國、名顯諸侯。觀其志、嘗有以自下。子爲人僕御、自以爲足。妾是

晏子之御

以求去也。御者乃自抑損。晏子怪而問之。以實對。薦爲大夫。公使晏子之晉。與叔向私語、以爲、齊政必歸陳氏。如其言。景公後五世至康公。田和受周安王命爲侯、遷康公海濱以死。姜氏遂絶不祀。

訓讀　桓公より八世にして景公に至る。晏子といふ者あり、之に事ふ。名は嬰、字は平仲、節儉力行を以て齊に重んぜらる。一狐裘三十年、豚肩豆を掩はず。齊國の士、待ちて以て火を擧ぐる者、七十餘家あり。晏子出づ。其の御の妻、門間より(從)窺へば、其の夫、大蓋を擁し、駟馬に策ち、意氣揚々として自得す。既にして歸る。妻去らんことを請ひて曰く、「晏子は身齊國に相として、名諸侯に顯はる。其の志を觀るに、嘗に以て自ら下ること有り。子は人の僕御と爲りて、自ら以て足れりと爲す。妾是を以て去らんことを求むる也」と。御者乃ち自ら抑損す。晏子怪んで之を問ふ。實を以て對ふ。薦めて大夫と爲せり。公、晏子をして晉に之かしむ、叔向と私語し、以爲らく、「齊の政は必ず陳氏に歸せん」と。其の言の如し。景公の後五世にして康公に至る。田和、周の安王の命を受けて侯と爲り、康公を海濱に遷して以て死せしむ。姜氏遂に絶えて祀らず。

桓公から八代にして景公になつた。時に晏子といふ人があつて（大夫卽ち家老職として）景公に事へた。晏子、名は嬰・字は平仲といひ、儉約家・努力家として齊國に重んぜられてゐた。（その儉約の例をいへば）一着の狐のかはごろもを三十年も着續け、祭の時に供へる豚の肩の肉が小さくて豆に盛つても一杯にならない程であつた。（では吝嗇かといふと、さうではない。なか／＼情ぶかい人で）、齊國の士で晏子のお蔭で生活を立てゝゆくものが七十餘軒もあつた。或時晏子が外出した。その馭者の妻が門の隙間から覗いて見たら、夫は大きな傘をさしかけ、四頭だての馬に鞭うつて、えらい意氣ぐみで、これ見よがしと得意滿面だつた。とかくする中に馭者は出先から歸つて來た。すると細君が開き直つて「離緣を下さい」と言ひ出したもんだ。「御覽なさい、晏子樣は、齊の國の大臣といふ御身分で、天下の諸大名衆にも名を知られた立派なお方です。併しそのお心がけを觀てみると、いつも身をへりくだつて（車の上でも小さくなつていらつしやる）。それに、（あなたはどうでせう）、其の人に召し使はれる下部の身分でありながら、えらい氣になつて滿足していらつしやる。（なさけないぢやありませんか、そんな人は迚も末の見込がありませんから）、妾はお暇を戴きたいのです」と。（これが其の離婚請求の理由であつた）。馭者の態度はこれから變つた。自分で慢心をおさへおとして頗る

謙遜になつた。晏子も變に思つてその理由を尋ねた。御者は事實を有りのまゝに答へた。晏子は（その過を改むるに憚る所のない立派な心がけを褒めて）これを大夫に推薦した。景公は嘗て晏子を晉に使にやつた。その時、晏子は晉の叔向といふ人と內證話をして、「わが齊の國政は將來必ず陳氏の手に移つて（齊は滅びなければなるまい）」と言つたことがあつたが、やがてそれが事實となつてあらはれた。景公の後五代目、康公の時になつて、（陳の公子完の孫）田和といふ者が、周の安王の命を受けて諸侯となり、康公を海岸の地に追ひやつて、そこで死に至らしめた。これで姜氏の齊は斷絕して、先祖の祭祀を行ふ者もなくなつた。

語釋　晏子（子は敬稱である。先生といふやうな意味。）○狐裘（狐の皮で作つたカハゴロモ。それは大夫卽ち家老職の服裝である。）○豚肩不レ掩レ豆（豆はトウと讀む。俎豆の豆である。孔子の條に詳述した。さて周の時代には肩の肉を貴んだ。併し肩肉は俎に載せるもので、豆に入れるべきものではない。それを不掩豆といつたのはその肉の非常に小さいことを示す爲に、假に豆に盛つても豆を掩ふに足りないと形容したのである。）○待以擧レ火（晏子の供給を受けて、それによつて火を焚いて炊事をするといふので、晏子のおかげで生活するといふ意。）○御（馬を乘りつかふこと。馭者。轉じて人を自由に使ひこなすことにもいふ。制御。）○駟馬（四匹の馬。四頭立の馬車。古代の馬車は皆四頭立であつた。ここは「擁大蓋」と共に堂々として得意な樣を表はしたのである。）○擁二大蓋一（大蓋は車上の人にさしかける爲に車の上に立てる大きな傘。きぬがさ、車蓋。擁とは車蓋の柄を抱きかゝへてゐること。但しこゝは御者が車蓋の側に坐してゐる樣子を、斯う形容したのである。）○揚々自得（自得は自ら得意になること。揚々はその自得の樣子、えたり顏。）○嘗（嘗は常と音通じて、ツネニと讀む。）○抑損（わが心をおさへおとして控へ目にすること。）○私語（さゝやく。內證話をすること。）○陳氏（前に陳の條に「有二、子完者一、出奔而仕二于齊一、遂大二于齊一。爲二田氏一」とあつた、それである。田和は卽ち陳の公子完の子孫。なは次章にくはし。）

以小斗受以大斗予

田・氏・齊・者本嫣姓、故陳厲公佗子完之後也。完奔齊爲陳氏、後又以陳爲田氏。完事齊桓公、爲工正。卒。諡敬仲。五世至釐子乞、事齊景公、爲大夫。其收賦稅於民、以小斗受之、其粟予民、以大斗、行私惠於民。而公弗禁。由是得齊衆。乞專政。卒。子成子恒、弑簡公立平公。封邑大於公所食。恒卒。襄子盤立。與韓・趙・魏通使。蓋三家且有晉、而田氏且有齊也。歷莊子白至太公和、遂以周安王命爲侯。



田氏齊は、本嫣姓にして、故の陳の厲公佗の子完の後なり。完、齊に奔つて陳氏と爲り、後又陳を以て田氏と爲す。完、齊の桓公に事へて、工正と爲る。卒す。敬仲と諡す。五世にして釐子乞に至り、齊の景公に事へて、大夫と爲る。其の賦稅を民より收むるには、小斗を以て之を受け、其の粟を民に予ふるには、大斗を以てして、私惠を民に行ふ。而も公、禁ぜず。是に由りて齊の衆を得たり。乞、政を專にす。卒す。子の成子恒、簡公を弑して平公を立つ。封邑、公の食む所よりも

大なり。恒、卒す。襄子盤立つ。韓・趙・魏と使を通ず。蓋し三家は且に晉を有せんとし、田氏は且に齊を有せんとする也。莊子白を歷て、太公和に至り、遂に周の安王の命を以て侯と爲る。

通釋 田氏の齊は、もと嬀姓であつて、（陳の條に「陳は嬀姓」とあつた）、さきの陳の厲公（名は）佗といふ人の子の完といふ者の子孫である。事によつて完は齊に逃げてゆき、（本國の名を取つて）陳氏を名乘つたが、後また陳を田に變へて田氏と稱した。完は齊の桓公に事へて土木長官となつたが、死んで敬仲と諡された。その後五代目、釐子乞に至つて齊の景公に事へて家老となつた。乞は人民から年貢を取り立てるには小さい枡を用ひ、穀物を人民に貸し出す際には大きな枡で量つて、民に私恩を賣つた。それでも景公は之を止めることが出來なかつた。かうして乞は齊の民の人望を得ておいて、國政を勝手に行つた。乞が死ぬと其子の成子恒は簡公を弑して平公を立てるやうな事までした。當時田氏の知行は齊の公室の領地よりも廣大だつた。恒、卒して、襄子盤が立つて、（晉の家老の）韓魏趙の三家と互に使者をやりとりして（交を結んだ）。これは三家は主家の晉を押領せんとし、田氏も主家の齊を押領せんとして、（斯くは互に氣脈を通じたのである）。田氏は莊子白を歷、太公和に至つて遂に周の安王の命によつて自立して諸侯となつた。

【語釋】 厲公佗（厲は死後の諡で、佗は生前の名である。以下の齊子乞・成子恒など皆然り。今一々註せず。） ○完奔レ齊（陳の宣公が太子禦寇を殺したので、禦寇と親しくしてゐた完は、禍が自分に及ぶことを恐れて齊に出奔したのである。） ○得二齊衆一（齊の衆望を得る。齊の人心を收攬した。） ○工正（官名。土木工藝等の事を掌る。） ○小斗・大斗（斗は米粟をはかる桝である。） ○行二私惠一（公職を枉げて私人の恩惠を與へること。私恩を賣ること。） ○所レ食（食はハムと訓じ、食レ土、食レ邑、食レ祿など、それを秩祿として生活する意。こゝは食邑の義で、領地といふこと。） ○且（マサニ……トスと反り讀む。將の字に同じい。）

卒。子桓公午立。卒。子威王因齊立。初不レ治。諸侯皆來伐。八年楚大發レ兵加レ齊。齊使三淳于髡請二救於趙一。齎二金百斤・車馬十駟一。髡仰レ天大笑。王曰、先生少レ之乎。髡曰、臣見三道傍有二禳レ田者一。操二一豚蹄・酒一壺一、祝曰、甌窶滿篝、汙邪滿車、五穀蕃熟、穰穰滿レ家。臣見二其所レ持者狹、所レ欲者奢一。故笑レ之。王乃益二黃金千鎰・白璧十雙・車馬百駟一。髡乃行。

【通釋】 卒す。子桓公午立つ。卒す。子威王因齊立つ。初め治まらず。諸侯皆來り伐つ。八年、楚大いに兵を發して齊に加ふ。齊、淳于髡をして救を趙に請はしめ、金百斤・車馬十駟を齎さしむ。髡、天を仰ぎて大いに笑ふ。王曰く、「先生、之を少しとする乎」と。髡曰く、「臣、道傍に田を禳ふ者有る

を見る。一豚蹄・酒一壺を操りて祝して曰く、『甌窶滿篝、汙邪滿車、五穀蕃熟し、穰々として家に滿てよ』と。臣其の持する所の者狹くして、欲する所の者奢なるを見る。故に之を笑ふ」と。王乃ち黄金千鎰・白璧十雙・車馬百駟を益す。髡乃ち行く。

通釋 太公・桓公を經て、威王(名は)因齊が立つた。即位當時は國內治らず(そこをつけ込んで)四方の諸侯が來り攻めた。中でも威王即位の八年には楚が大擧して押し寄せ來た。齊は辯論家の淳于髡を趙に遣はして援兵を賴ませることゝなり、その進物として黄金百斤と馬車馬四十頭を持たせてやらうとしたところ、髡はたゞ天を仰いでから〳〵と笑ふばかり。王は怪しんで「先生は、これでは進物が少な過ぎるとでも思はれるのですか」と訊いた。髡は答へて、「私は今日、道ばたで田畑の厄除の祈禱をしてをるものを見ましたが、その男は、たつた豚の片足と一壺の酒ぐらゐを持つて來て(神樣に供へながら)、禱つて曰ふ(ことが面白いぢやありませんか)。『畑の作物もよく出來て籠に一杯になりますやう。田の作物もよく實つて車に山と積まれますやう。五穀が豐かにしげりみのつて、家に滿ち溢れまするやう』と、斯うなのです。僅かばかりの物を持ち出して、とても贅澤な望みを抱く、(蝦で鯛を釣るやうな慾の深さ)、(それを思ひ出して、をかしさに)つい笑つたのでございます」と言つた。

王は（成程と氣がついて）、黄金千鎰に白璧十對、それに馬四百頭を追加した。髡はそれを携へて趙に出かけた。（趙王は此の進物に喜んで、精兵十萬と兵車千乘とを貸したので、楚の軍は夜の中に退却した）。

語釋 金百斤（一斤は十六兩。） ○車馬十駟（駟は馬四頭で馬車一臺分である。馬車に用ひる馬四十頭。） ○穰田（穰はハラフと訓じ、神を祭り、厄難をはらつて幸福を祈ること。こゝは田畑の厄をはらつて豐作を祈ること。） ○蹄（獸の足をいふ。又ヒヅメのことをもいふ。） ○甌窶（地勢の高い作地。畑のこと。） ○滿篝（篝はカゴと訓ず。カゴ一ぱいに收穫のあること。） ○汙邪（地勢の低い作地、即ち田のこと。） ○五穀（稻・黍・稷（アハ）麥・菽（マメ）の五種の穀物。又一般に廣く穀物といふこと。こゝもそれである。） ○穰々（ミノルと訓ず、豐熟のさま。） ○千鎰（一鎰二十四兩をいふ。一説に二十兩又三十兩ともいふ。） ○白璧一雙（璧は環狀の玉。雙は二個、即ち一對。）

封即墨大夫

烹阿大夫

時齊國幾不振。王乃召即墨大夫、語之曰、自子之居即墨也、毀言日至。然吾使人視即墨、田野辟、人民給、官無事、東方寧。是子不事吾左右以求助也。封之萬家。召阿大夫、語之曰、自子之守阿、譽言日至。吾使人視阿、田野不辟、人民貧餒。趙攻甄、子不救。衛取薛陵、子不知。是子厚幣事吾左右以求譽也。是日烹阿、大夫與嘗譽者、羣臣聳懼、莫敢飾詐、諸侯不敢復致兵。

【訓讀】時に齊國殆んど振はず。王乃ち卽墨の大夫を召し、之に語げて曰く、「子の卽墨に居りしより、毀言日に至る。然れども吾れ人をして卽墨を視しむるに、田野辟け、人民給し、官事無く、東方寧し。是れ子、吾が左右に事へて以て助を求めざれば也」と。之を萬家に封ず。阿の大夫を召し、之に語げて曰く「子の阿を守りしより、譽言日に至る。吾れ人をして阿を視しむるに、田野辟けず、人民貧餒す。趙、鄄を攻むれども子救はず。衞、薛陵を取れども子知らず。是れ子、幣を厚くし、吾が左右に事へて以て譽を求むれば也」と。是の日、阿の大夫と嘗て譽めし者とを烹る。群臣聳懼し、敢て飾詐する莫し。諸侯敢て復た兵を致さず。

【通釋】當時齊の國は、とかく勢が振はぬがちであつた。そこで威王は（綱紀を肅正し人心を緊張せしめ、以て國勢を挽回せねばならぬと考へて）、或時、卽墨の知事某を呼び出し、之につげて、「御身が卽墨へ赴任してから、御身の惡口を每日のやうに聞く。けれども人を遣はして卽墨の實際を視察させて見ると、（評判とは反對に）田畑もよく開墾されてゐるし、人民は何不自由なく暮らしてゐるし、（よく治まつてゐるから）役所の仕事も閑散である。おかげで我が國の東部は太平無事だ。（それにも拘らず御身の評判が惡いといふのは）、御身が此方の近侍の者の機嫌を取つて、（賄賂をつかつて）よく言

つて貰ふやうな事をせぬからだ。(畢竟、御身が正しいからだ、感心の至だ)と言つて、その知事を一萬戸の大名にした。次には阿といふ土地の知事を呼び出して斯う言つた「御身が阿の地へ赴任してから、よい評判を毎日のやうに聞く。で人を遣はして實際を調べさせて見ると、田畑は開けず、人民は貧しくてかつえてゐる。趙の國が鄄(齊の地)を攻めても、御身は救はうとゝせず、衞の國が薛陵を取つても知らぬ顔をしてゐる(評判とは全然反對だ。にも拘らず御身の評判のよいといふのは)、全く御身が賂の進物を手厚くして、此方の近侍の者に巧く取り入り、自分を譽めてもらふやうにするからだらう(甚だ以て不都合である)」と。卽日、阿の知事と、知事を譽めた者とを烹殺してしまつた。それを聞いて多くの家來共は身ぶるひして懼れ、爾來いつはり飾つて虛名を求めるものは無くなつた。(かくて齊の綱紀は肅正され人心は緊張して、敵のつけ入る隙もなかつたので)諸侯もゝう兵を送つて攻め寄せなくなつた。

語釋 卽墨(今山東膠東道平度縣東南。) ○毀言(毀はソシルと訓ず、惡しざまに言ふこと。惡口。) ○田野辟(辟は闢に同じ。ひらく。) ○阿(今の山東東臨道陽穀縣の東北。) ○貧餒(餒は音タイ、饑うること。) ○鄄・薛陵(並びに齊の地、阿に近いところ。) ○幣(幣は進物。こゝは賄賂のための進物である。) ○烹(釜で煮殺す刑。) ○聳懼(聳は竦に同じく、ゾツとして身竦るひすること。) ○飾詐(かざりいつはる。人前をよくして虛名を取ること。)

威王以賢爲寶

威王與魏惠王會田于郊。惠王曰、齊有寶乎。王曰、無有。惠王曰、寡人國雖小、猶有徑寸之珠、照車前後各十二乘者十枚。威王曰、寡人之寶、與王異。吾臣有檀子者。使守南城、楚不敢爲寇泗上。十二諸侯皆來朝。有盻子者。使守高唐、趙人不敢東漁於河。有黔夫者。使守徐州、則燕人祭北門、趙人祭西門。有種首者。使備盜賊、道不拾遺。此四臣者、將照千里。豈特十二乘哉。惠王有慙色。


威王、魏の惠王と郊に會田す。惠王曰く、「齊に寶ある乎」と。王曰く、「有ること無し」と。惠王曰く、「寡人の國小なりと雖も、猶ほ徑寸の珠、車の前後各〻十二乘を照らす者十枚有り」と。威王曰く、「寡人の寶は王と異り。吾が臣に檀子といふ者有り。南城を守らしむれば、楚敢て寇を泗上に爲さず。十二諸侯皆來朝す。盻子といふ者有り。高唐を守らしむれば、趙人敢て東のかた河に漁せず。黔夫といふ者有り。徐州を守らしむれば、則ち燕人北門に祭り。趙人西門に祭る。種首といふ者有り。

盜賊に備へしむれば、道遺ちたるを拾はず。此の四臣は將に千里を照らさんとす。豈特に十二乘のみならん哉」と。惠王、慙づる色あり。

［通釋］齊の威王は、或時、魏の惠王と城外の地に會合して狩をした。そのとき惠王が威王に向つて、「貴國は（定めし種々の珍らしい）寶物をお持ちでせう（承はりたいものです）」と言つた。威王は、「いや、何もありませぬ」と答へた。すると惠王は、「私の國は小さな國ですが、それでも直徑一寸の珠がございまして、（それを車の上に置きますと）、車の前と後と各々十二臺づゝ（合せて二十四臺）の間を照らすだけの光力があります。そんなのが十個もありますよ」と、（自慢さうに）言つた。そこで威王は斯う言うた、「私の寶といふのは、あなたのとは違つて（少々風變りです）。私の家來に檀子といふ者がありますが、これに我が南境の南城といふ地を守らせたところ、南隣の楚國は泗水の上へ攻め入るやうな無禮を致さない。その上、界隈の十二の諸侯も皆私の方へ來り從ふやうになりました。又朌子といふ者がある。これに西方の高唐といふ地を守らせると、西隣の趙人は、自國の東境（即ち齊の西境）の黄河へ出て來て魚を漁ることを致さなくなりました。又黔夫といふ者がある。これに徐州を守らせたところ北隣の燕人は我が北門へ來て、西隣の趙人は我が西門へ來て、それ〴〵祭を致

稷下學士

し、(我が國の侵伐を免れようとて神に禱るといふことです)。また種首といふ家來があります。これに盜賊の取締をさせたところ、道に遺し物があつても拾つてくすねるといふやうな者は無くなりました。この四人の家來の光は實に千里の遠きまで照らすもの、どうしてたゞ車十二臺を照らす位でありませうぞ、(我が國の寶といへば、まづこんなものです)」と。惠王は赤面した。

語釋 會田(田は畋と同じく用ひて獵すること。會田は一所に會合して狩獵をする意。) ○郊(郊外、町はづれ。一說には地名であるともいふ。) ○十枚(十個といふ意。枚は今は專ら紙のやうな薄い物を數へるに用ひる。) ○寇(音コウ。アダと訓ず。外敵の攻めよせること。又群をなして人民を劫かし掠めることをもいふ。) ○泗上(上はホトリと訓ず。泗水は齊の南方を流れる川。) ○十二諸侯(當時泗上諸侯と言つて泗水のほとりに小さな國が幾つもあつた。それを指すのであらう。) ○肦子(肦は盼(ベン)と書くべきで、齊の將田盼のことであるといふ。) ○東漁於河(東は趙人から指して東をいふ。當時黃河は趙・齊の境界をなしてゐた。故に趙からいへば東境である、齊からいへば西境である。) ○燕人祭北門(燕は齊の北にあり、趙は齊の西にある。燕趙の人、齊の侵伐を恐れて、各々齊の北門・西門に祭つて祈願するのである。) ○慙色(慙は慚とも書く、はづかしい顏付。赤面。)

威王卒。子宣王立。喜文學游說之士。騶衍・淳于髠・田駢・愼到之徒七十六人、皆爲上大夫。是以齊稷下學士盛、且數百千人。然而孟子至而不能用。

訓讀 威王、卒す。子宣王立つ。文學游說の士を喜み、騶衍・淳于髠・田駢・愼到の徒七十六人、皆上大夫と爲る。是を以て齊の稷下、學士の盛なること、且に數百千人ならんとす。然り而して孟子至つ

て用ふること能はず。

【通解】威王が卒し、其の子の宣王が位に卽いた。宣王は文學に秀でた者や四方を說き廻る策士を好み、騶衍・淳于髡・田駢・愼到など其道の連中七十六人が召抱へられて皆上大夫となつて待遇せられた。(こんな風だから)齊の都の城下には殆んど何百人といふ學者が集つて來た。それにも關らず、(仁義の教を說き廻つた)孟子が訪れて來たのに、王は之を用ひ得なかつた。

【語釋】游說(游は遊に同じ、四方に旅して己の主張を說き廻ること。この際、說はゼイと訓み、ときすゝめる意。) ○稷下(稷は齊の城門の名。その門內に多くの館を建て、そこに文學遊說の士を置いたといふ。一說に稷は山名であると。) ○學士(學者といふに同じい。こゝは文學遊說の士を指す。) ○數百千人(數百人から千人に至るをいふ。卽ち數百人乃至千人といふに同じい。)

魏伐韓。韓請救於齊。齊使田忌爲將、以救韓。魏將龐涓嘗與孫臏同學兵法。涓爲魏將軍、自以所能不及、以法斷其兩足而黥之。齊使至魏、竊載以歸。至是臏爲齊軍師、直走魏都。涓去韓而歸。臏使齊軍入魏地者爲十萬竈、明日爲五萬竈、又明日爲二萬竈。涓大喜曰、我固知齊軍怯。入吾地三

成豎子之名

日、士卒亡者過半矣。乃倍日并行逐之。臏度其行、暮當至馬陵。道陿而旁多阻、可伏兵。乃斫大樹、白而書曰、龐涓死此樹下。使齊師善射者萬弩夾道而伏、期暮見火、擧而發。涓果夜至斫木下、見白書、以火燭之。萬弩俱發。魏師大亂相失。涓自剄。曰、遂成豎子之名。齊大破魏師、虜太子申。

通釋　魏、韓を伐つ。韓、救を齊に請ふ。齊、田忌をして將たらしめ、以て韓を救ふ。魏の將龐涓、嘗て孫臏と同じく兵法を學ぶ。涓、魏の將軍と爲り、自ら所能の及ばざるを以て、法を以て其の兩足を斷ちて之を黥す。齊の使、魏に至り、竊かに載せて以て歸る。是に至つて臏、齊の軍師と爲り、直ちに魏都に走く。涓、韓を去つて歸る。臏、齊軍の魏の地に入る者をして、十萬竈を爲り、明日は五萬竈を爲り、又明日は二萬竈を爲らしむ。涓大いに喜んで曰く、「我れ固より齊軍の怯なるを知る。吾が地に入ること三日にして、士卒亡ぐる者過半なり」と。乃ち日を倍し行を倂せて之を逐ふ。臏、其の行を度るに、暮に當に馬陵に至るべし。道陿くして旁に阻多く、兵を伏す可し。乃ち大樹を斫り白く

して書して曰く、「龐涓此の樹下に死せん」と。齊の師の善く射る者をして、萬弩、道を夾んで伏せしめ、暮に火の擧るを見て發せよと期す。涓果して夜、斫木の下に至り、白書を見、火を以て之を燭す。萬弩倶に發す。魏の師大いに亂れて相失す。涓、自剄す。曰く、「遂に竪子の名を成せり」と。齊、大いに魏の師を破り、太子申を虜にす。

　魏が韓を伐つたことがあつた。時に韓は救を齊に求めて來たので、齊では田忌を大將として韓を救ふことになつた。然るにこゝに魏の將に龐涓といふのがあり、嘗て孫臏と一緒に兵法を學んだものである。其後、涓は魏に用ひられて將軍となつたが、自分の才能が迚も孫臏に及ばないことを知り、(臏が居つては自分の出世が出來ないと考へたので、魏の惠王に申して臏を呼びよせさせた。さて臏が來ると事を構へて)、法律にあて、臏の兩足の筋を絶ち切つて其の額に入墨をした。(卽ち臏を刑餘の人となして再び世間に用ひられないやうにしたのである)。ところが齊の使者が魏の國へ往つた時、(臏の才能を惜しんで)、こつそりと我が車に載せて連れ歸り、(田忌は之を客分として優遇してゐた)。さて今や魏を伐つの軍を起すに至つたので、臏は齊の參謀長となつて、すぐに魏の都(大梁)へと赴いた。龐涓は(韓を攻めてゐたが、齊軍が本國魏へ向つたと聞いて)、韓をすてゝ魏へ歸つて來た。孫臏

は(こゝに一策を案じ)、魏へ攻め入つた齊軍に命じて、初めの日は兵糧を炊く竈を十萬つくらせ、翌くる日は半分に減じて五萬の竈を築かしめ、翌々日は又更に減じて二萬の竈を築かせつゝ(逃げてゆく風に見せかけた)。それを見た龐涓は大いに喜んで、「齊軍の卑怯なことは始めから分つてゐたが、愈々我が國へ侵入するや、僅か三日の間に、士卒の逃げ出すものが半分以上もある。(それは、あの竈の數の日々に減じてゆくので明かだ。齊軍何ぞ恐るゝに足らんや、一擧に追撃して全滅せしむべし」といふので、晝夜兼行の大急ぎで齊軍を追つかけた。孫臏は、龐涓軍の行程を見積ると、日暮に馬陵といふ處へ行き着く筈になる。馬陵は道幅が狹くて兩側には險阻な處が澤山あり、伏兵を置くのに適してゐる。(孫臏は是れ屈竟の地とばかり)、そこの大きな樹を斫つてその皮を剝ぎ「龐涓死二此樹下一」と書いた。さうして齊軍の中の射撃の巧みなものに命令して、一萬の弩を道の兩側に並べて待伏させ、「暮方に火が擧るのを見たら、それを合圖に射かけること」と手筈を定めた。果然、龐涓はその夜、斫木の下へ來ると、白く削つて字が書いてあるのを見て、火をともして照らして見た。と同時に、一萬の弩が一齊に放たれた。(不意を打たれて何かは堪るべき)、魏軍は忽ち總崩れとなつて味方同志互ひに見失うて逃げ散つた。涓は非常に口惜しがり、「とう〳〵あの孫臏の小僧に手柄をしてやられた」と

言つて、自分で首刎ねて死んでしまつた。斯くて齊は大いに魏軍を破り、太子の申といふ人を生捕にした。

語釋　孫臏（臏はアシキルと訓ず。刖と同じく足の筋を切る刑罰である。この人、本名は傳らず、臏刑を受けてから人皆孫臏と稱するやうになつた。恰も漢の黥布が入墨の刑を受けてから黥布といつたのと同じ例である。史記によると臏は、「孫子の兵法」として有名な孫武の子孫で、孫武より百餘年の後であるといふ。）　○所能（能くする所。能力。才能。うでまへ。）　○以レ法（事を構へ法律にかこつけて。）

○至是（叙述の途中で他事を說いた時、その事終つて再び前に戻つて說き出す詞である。漢文には常に用ひられる語であるから心得ておかれたい。こゝでは前の「齊、田忌ヲシテ將タラシメ、以テ韓ヲ救フ」を承けて、「さてそこで」と說き起すのである。）　○爲二十萬竈一（行く先々の露營地で兵粮を炊くために人數に應じて必要なだけの竈を築く。それを段々に減じて、いかにも士卒が日々に逃げ出すので人數が段々と減ずるかのやうに見せかけたのである。中井履軒の說に、十萬とか五萬とかいふのは人數のことであつて竈の數をいふのではない。大抵一竈として、十萬人ならば一萬竈を築けばよいと。一說として揭げておく。）　○倍レ日并レ行（「日を倍す」とは一日に二日分の路程（ミチノリ）を行くこと。「行を并す」とは、例へば一日十里の行程を二十里にする類をいふ。何れも大急ぎで走り行くことである。晝夜兼行。）　○馬陵（魏の地。今の直隷大名道大名縣の東南。）　○萬弩（弩はイシユミと訓ず。ばね仕掛で矢又は石を放つやうにしたもの。手で張るのと足で踏んでするのとある。）　○期下暮見二火擧一而發上（彼は必ず火を以て白書を照らしゐるに違ひないといふ見込で、火が見えたら射よと命じたのである。期は約束すること。手筈を定めること。）　○燭レ之（照らして見ろといふ意。）　○相失（味方同志が互に見失ふほど混亂して逃げ散ること。）　○自剄（自分で首を斬つて死ぬこと。）　○成二豎子之名一（豎は俗に竪とも書く、子供のこと。蓋し人を輕蔑して「あの小僧」「この野郎」「青二才」などいふ意味に「豎子」といふ。さてこゝは「あの小僧に手柄させてしまつた」と殘念がつて罵り言うたのである。）

弩

宣王卒、湣王立。靖郭君嬰者、齊宣王之庶弟也。封於薛。有子曰文。食客數千人。名聲聞於諸侯。號爲孟嘗君。秦昭王聞其賢、乃先納質於齊、以求見。至則止囚、欲殺之。孟嘗君使人抵昭王幸姬求解。姬曰、願得君狐白裘。蓋孟嘗君嘗以獻昭王、無他裘矣。客有能爲狗盜者。入秦藏中、取裘以獻姬。姬爲言得釋。卽馳去、變姓名、夜半至函谷關。關法、雞鳴方出客。恐秦王後悔追之。客有能爲雞鳴者。雞盡鳴。遂發傳。出食頃、追者果至。而不及。孟嘗君歸怨秦、與韓・魏伐之、入函谷關。秦割城以和。孟嘗君相齊。或毀之於王。乃出奔。

通釋　宣王卒し、湣王立つ。齊郭君田嬰は、齊の宣王の庶弟也。薛に封ぜらる。子有り文と曰ふ。食客數千人。名聲諸侯に聞ゆ。號して孟嘗君と爲す。秦の昭王、其の賢を聞き、乃ち先づ質を齊に納れ、以て見んことを求む。至れば則ち止め囚へて之を殺さんと欲す。孟嘗君人をして昭王の幸姬に抵りて

解かんことを求めしむ。姬曰く、「願はくは君の狐白裘を得ん」と。蓋し孟嘗君嘗て以て昭王に獻じ、他の裘無し。客に能く狗盜を爲す者有り。秦の藏中に入り、裘を取りて以て姬に獻ず。姬爲めに言つて釋さるゝを得たり。即ち馳せ去り、姓名を變じて、夜半、函谷關に至る。關の法、雞鳴いて方に客を出す。秦王の後に悔いて之を追はんことを恐る。客に能く雞鳴を爲す者有り。雞盡く鳴く。遂に傳を發す。出でゝ食頃にして追ふ者果して至る。而して及ばず。孟嘗君歸りて秦を怨み、韓・魏と之を伐ち、函谷關に入る。秦、城を割いて以て和す。孟嘗君、齊に相たり。或ひと之を王に毀る。乃ち出奔す。

【通解】 宣王が卒して、湣王が立つた。靖郭君田嬰は齊の宣王の腹違ひの弟である。薛といふ地を知行所として貰つてゐた。嬰に文といふ子があつた。(さて此の田文は食客を置くことが好きで)、何千人の食客を養ひ、その評判は諸侯の間に鳴りひゞいてゐた。號して孟嘗君といふ。(孟とは田文の字、嘗は知行地の邑の名で、薛の旁にあつた)。秦の昭王は孟嘗君の賢れた人であることを聞いて、(一度呼びよせて會つて見たいと思つたが、孟嘗君に危害を加へる意思のないことを示す爲めに、當時の習慣に從つて)、まづ人質を齊におくり、然る後に面會を申込んだ。そこで孟嘗君が秦に行き着くと、昭王

はこれを引き止めて一室に押し込め、殺害しようと思つた。(孟嘗君は驚いた。さうして考へた――その結果)、人を昭王のお氣に入りの妃の所へやり、妃から言ひ開きをして(この場を救うて下され)と頼んだ。妃は「(承知いたしました。就てはその報酬として)、どうか貴方の御秘藏の狐の白毛のかはごろもを戴きたいものです」と言つた。實はそのかはごろもは孟嘗君が先に昭王に(お目見えの)獻上品に使つてしまつて、今は代りになるかはごろもとても無いのである。(丁度そのとき、一緒に連れて來た)食客の中に、狗の眞似して忍び込むこそどろの名人がゐた――そいつが秦の寶物庫の中に忍びこんで、まんまと例の狐のかはごろもを盜み出して、お妃に獻上した。そこで妃は孟嘗君のために色々と言ひ開きしてやつたので、孟嘗君は釋されることが出來た。孟嘗君は、時をうつさず馬を馳せて逃げ去り、名を變へて(途中の關所の番人をごまかし)、眞夜中に函谷關に至り着いた。この關の規程では、雞が曉をつげるのを待つて、旅人を通すことになつてゐた。孟嘗君は、後で秦王が自分を釋放したことを悔いて追手を向けさうな氣がして心配でならぬ。(さう思ふと迚も夜の明けるまで待つては居れないさあ困つた)。ところが食客のうちに、雞の鳴聲の上手なのがゐた。(それが一聲高くコケコツコウとやつた。するとそれに釣れて、本物の關の)雞が一齊に歌ひ出した。(關の番人は正しく夜が明けた



函谷關

ものと早合點して）、遂に驛つぎの車を通したので、（孟嘗君は虎口をのがれた思ひで關を出た。さうして一たび關を出ればそこはもう秦の地ではない）。一行が關を出ると間もなく、果して追手が驅けつけて來た。併しもう追つ付かなかつた。斯くて孟嘗君は（命からがら）齊に歸つたが、深く秦を怨んで、韓・魏の二國と共に秦を征し、（思ひ出深い）函谷關にと攻め入つた。秦は城を割き與へて孟嘗君と和睦せねばならなかつた。孟嘗君は齊の宰相となつたが、或人が（孟嘗君は謀反の心がある）と齊王に讒言したので、（誅せられんことを恐れて）國を逃げ出した。（その後孟嘗君は寃罪の證が立つて、復び齊に召し歸されることになる）。

語釋 靖郭君田嬰（靖郭君は謚。田は姓。嬰は名。）　○薛（音セツ。地名。今の山東滕縣の西南。）　○食客（ゐさふらふ（居候）のこと。但し戰國の謂はゆる居候とはやゝ異り、隨分智謀材藝秀でたものもあつた。我が國でいへば戰國以後の浪人といつたやうなもの。）

○質（ひとじち。質は、べつ質物のときは音チ、本章の納レ質の如き。又は委レ質の如き。その他は音シツと心得てよい。） ○幸姫（幸は、かにゆがること。寵幸と熟す。姫は婦人の美稱。我が國語ではヒメといふ語に此の字を當てる。） ○抵（音はテイ。イタルと訓ず。ゆきつくこと。抵は至の字と同じい。） ○求レ解（解は辯解、言ひ開きすること。） ○狐白裘（狐の腋の下の白い毛をあつめて造つた美しいかはごろも。深山出來ないので貴ばれるのだといふ。史記には「値千金天下無雙」とある。） ○狗盜（犬のまねして忍び込む小盜人。一説に犬が人家に來つて食物を盗むやうに密かに盗みをする賊といふ。こそどろ。） ○函谷關（關所の名。今の河南河洛道靈寶縣の南にある。當時、秦の東方の關門をなし、兩崖壁立して、中、函の如しといふので函谷と名づけたと云ふ。陥る要害の地である。） ○出レ客（この客は旅客のことで、食客の意ではない。） ○發レ傳（傳は傳車といひ、驛から驛へと旅客や荷物を送る車のこと。宿（シユク）つぎの車。發とは關門を開いて車を出すこと。一説に、傳は旅行券のこと。即ち旅行券を所持する旅人を出發させる意だともいふ。） ○食頃（で、食事を終るほどの時間といふ義、僅かの時間。間もなく。）

湣王滅宋而驕。燕昭王以齊嘗破燕之故、與諸侯合謀而攻之。燕軍入臨淄。湣王走莒。楚將淖齒救齊、反殺湣王、而與燕共分齊之侵地。王孫賈從湣王於莒而失王處。其母曰、汝朝出而晩來、吾則倚門而望。汝暮出而不還、吾則倚閭而望。汝今事王、王走、汝不知處。汝尚何歸焉。賈乃攻淖齒殺之、求湣王子法章而立之、保莒以抗燕。


湣王、宋を滅して驕る。燕の昭王、齊の嘗て燕を破りしの故を以て、諸侯と謀を合せて齊

王孫賈

倚門之望

を攻む。燕軍、臨淄に入る。湣王、莒に走る。楚の將、淖齒、齊を救ひ、反つて湣王を殺して燕と共に齊の侵地を分つ。王孫賈、湣王に莒に從ひて、王の處を失ふ。其の母曰く、「汝、朝に出でて晩に來れば、吾れ則ち門に倚つて望む。汝、暮に出でて還らざれば、吾れ則ち閭に倚つて望む。汝、今、王に事へ、王走り、汝、處を知らず。汝尙ほ何ぞ歸る」と。賈乃ち淖齒を攻めて之を殺し、湣王の子法章を求めて之を立て、莒を保ちて以て燕に抗す。


湣王は宋を滅してから慢心するやうになつた。そこへ、燕の昭王は嘗て齊に破られた怨みがあるので、諸侯(秦・楚・韓・魏・趙)と謀をしめし合せて齊を攻め、非常な勢で齊の都の臨淄になだれ込んだ。湣王は都を逃れて莒といふ所へ避難した。すると、楚の將の淖齒といふものが齊を救ひに來たが、あべこべに齊の湣王を殺して、侵し取つた齊の土地を燕と共に分け取つてしまつた。時に(湣王に仕へてゐた)王孫賈といふ少年は、湣王が莒へ逃げてゆくのに從いで行くうち、(王にはぐれて)王の所在がわからなくなつた。(已むを得ずしてすごすごと家へ歸つて來た)。すると其の母親が曰ふには、「(これ賈よ、よくお聞き)。お前が朝、家を出て晩方に歸つて來る時には、わたしはいつも門にもたれて(お前の歸りを今か今かと)待ち望んでゐる。(又何か急な御用でも出來て)日暮から出かけて、

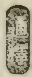
なか〳〵還つてな來いやうな時には、わたしは（心配で堪らず）村はづれの門まで行つてそれに倚りかゝつて、（お前のかへりを）待ち望むのです。（お母さんは、それほどにお前を賴もしいものに思うてたよりにしてゐる）。然るにお前は今、殿樣にお事へ申す身で、殿樣がお逃げなさるといふ際に、そのお所在も知らないで、何しにおめ〳〵と歸つて來ましたか。（全く母の期待に背いた見下げ果てた子おやじ」と叱りつけた。王孫賈は（母の言葉に感憤し、城下に叫んで同志を集め）、共に淖齒を攻めて之を殺し、湣王の子の法章といふのを探し求めて齊王の位に卽け（之を襄王といふ）、けなげにも莒の城を守つて燕の軍に對抗した。


臨淄（齊の都。今山東省靑州府。）○王孫賈（賈は普通カと讀んでゐるが、商賈の賈と同じくコと讀むがよいとの說、今姑らくそれに從つておく。）○汝朝出而晩來云々（母が之を言ふ目的については種々の說がある。或は曰く、君が難に遇うて臣の救ひを望むことは、慈母が子の歸るを望むのに異らぬ。然るに今、王の所在が分らぬとて歸つて來るが如きは恩に背き義を忘れた所爲であるとの意と。或は曰く、我の汝を思ふこと斯くの如く切である、汝の王を思ふも亦斯くの如くなければならぬとの意と。共に意味は通ずるけれども、やゝ論理に拘泥し過ぎた嫌があるやうだ。）

時齊城惟莒卽墨不下。卽墨人推田單爲將軍。身操版鍤、與士卒分功、妻妾編於行伍。收城中得牛千餘。爲絳繒衣、畫五彩龍文、束兵刃其角、灌脂

束葦於尾、燒其端、鑿城數十穴、夜縱牛、壯士隨其後。牛尾熱、怒奔燕軍。所觸盡死傷。而城中鼓譟從之。聲振天地。燕軍敗走。七十餘城皆復爲齊。迎襄王於莒、封單爲安平君。


時に齊の城、惟だ莒と卽墨とのみ下らず。卽墨の人、田單を推して將軍と爲す。身づから版鍤を操り、士卒と功を分ち、妻妾は行伍に編す。城中に收めて牛千餘を得たり。絳繒の衣を爲り、五彩の龍文を畫き、兵刃を其の角に束ね、脂を灌ぎて葦を尾に束ね、其の端を燒き、城に數十穴を鑿ち、夜、牛を縱ち、壯士其の後に隨ふ。牛尾熱し、怒つて燕軍に奔る。觸るゝ所盡く死傷す。而して城中鼓譟して之に從ふ。聲天地に振ふ。燕軍敗走す。七十餘城、皆復た齊と爲る。襄王を莒に迎ふ。單を封じて安平君と爲す。


その時、(齊の城は七十餘ケ所殆んど皆燕に攻め落されて)、たゞ莒と卽墨との二城だけが落ちずにゐた。さうして卽墨の人々は田單の(人物を見込んで)將軍に推戴した。田單は(將軍の重職に居りながら)自身に板やすきを持つて、士卒と一緒に(築城の)仕事をなし、自分の妻妾までも兵隊の中

なか／＼還つて來いやうな時には、わたしは(心配で堪らず)村はづれの門まで行つてそれに倚りかゝつて、(お前のかへりを)待ち望むのです。(お母さんは、それほどにお前を賴もしいものに思うてたよりにしてゐる)。然るにお前は今、殿樣にお事へ申す身で、殿樣がお逃げなさるといふ際に、そのお所在も知らないで、何しにおめ／＼と歸つて來ましたか。(全く母の期待に背いた見下げ果てた子ぢや)」と叱りつけた。王孫賈は(母の言葉に感憤し、城下に叫んで同志を集め)、共に淖齒を攻めて之を殺し、湣王の子の法章といふのを探し求めて齊王の位に卽け(之を襄王といふ)、けなげにも莒の城を守つて燕の軍に對抗した。

【語釋】臨淄(齊の都。今山東省靑州府。)　○王孫賈(賈は普通カと讀んでゐるが、商賈の賈と同じくコと讀むがよいとの說、今姑らくそれに從つておく。)　○汝朝出而晩來云々(母が之を言ふ所以については種々の說がある。或は曰く、君が難に遇うて臣の救ひを望むことは、慈母が子の歸るを望むのに異らぬ。然るに今、王の所在が分らぬとて歸つて來るが如きは恩に背き義を忘れた所爲であるとの意と。或は曰く、我の汝を思ふこと斯くの如く切である、汝の王を思ふも亦斯くの如くなければならぬとの意と。此意味は通ずるけれども、やゝ論理に拘泥し過ぎた嫌があるやうだ。)

時齊城惟莒卽墨不下。卽墨人推田單爲將軍。身操版鍤與士卒分功、妻妾編於行伍。收城中得牛千餘。爲絳繒衣、畫五彩龍文、束兵刃其角、灌脂

束葦於尾、燒其端、鑿城數十穴、夜縱牛、壯士隨其後。牛尾熱、怒奔燕軍。所觸盡死傷。而城中鼓譟從之。聲振天地。燕軍敗走。七十餘城皆復爲齊。迎襄王於莒。封單爲安平君。


時に齊の城、惟だ莒と卽墨とのみ下らず。卽墨の人、田單を推して將軍と爲す。身づから版鍤を操り、士卒と功を分ち、妻妾は行伍に編す。城中に收めて牛千餘を得たり。絳繒の衣を爲り、五彩の龍文を畫き、兵刃を其の角に束ね、脂を灌ぎて葦を尾に束ね、其の端を燒き、城に數十穴を鑿ち、夜、牛を縱ち、壯士其の後に隨ふ。牛尾熱し、怒つて燕軍に奔る。觸るゝ所盡く死傷す。而して城中鼓譟して之に從ふ。聲天地に振ふ。燕軍敗走す。七十餘城、皆復た齊と爲る。襄王を莒に迎ふ。單を封じて安平君と爲す。


その時、(齊の城は七十餘ケ所殆んど皆燕に攻め落されて)、たゞ莒と卽墨との二城だけが落ちずにゐた。さうして卽墨の人々は田單の(人物を見込んで)將軍に推戴した。田單は(將軍の重職に居りながら)自身に板やすきを持つて、士卒と一緒に(築城の)仕事をなし、自分の妻妾までも兵隊の中

へ組み入れた。又、卽墨の城中から寄せあつめて千餘頭の牛を得だが、赤い絹の着物を造り、それに五色の龍の模樣を畫いて（牛に被せ）、その角には刀を結びつけ、尾には葦を縛りつけてそれに油をそゝぎかけて、其の端に火をつけたもんだ。一方かねて城壁に四五十の穴を掘りあけておいて、夜間、その穴から右の牛を放つた――血氣のつはものが其の後について突擊した。牛の尾が燒けて熱くなると、牛は怒り狂うて（遮二無二に）敵の燕軍へと飛び込んだ（から堪らない）、牛の觸るゝ所一人のこらず皆やられた。と見た卽墨城内のものは、攻鼓を打ち鬪の聲をあげて牛の後から、どつと攻め立てた。その聲は天地に振ひわたつた。燕軍は見る〳〵敗れて逃げる――七十餘城は再び齊の有に返つた。そこで田單は莒に逃げてゐた襄王を迎へ立てゝ齊の君となし、襄王はまた（その功を賞し）、田單に安平といふ土地を與へて安平侯とした。

語釋　版鍤（版は板で、壘を造るに用ひる板。鍤はスキと訓ず。皆城壘を築く道具。）○分レ功（功は功程の意で、仕事のこと。勳功の意ではない。士卒の仕事を大將が分けてするのである。）○行伍（軍隊で二十人を行といひ、五人を伍といふ。兵士の隊列のこと。）○絳繒衣（絳は赤、繒はカトリギヌと訓じ、目を細かく堅く緻つた帛。）○灌レ脂束ニ葦於尾ニ（「尾ニ葦ヲ束ネテ脂ヲ灌ギ」の意である。）○安平君（安平は今の山東臨淄縣の東にある地。）

單攻レ狄。三月不レ克。魯仲連曰、將軍在ニ卽墨ニ、曰、無レ可レ往矣、宗廟亡矣。將軍在ニ

死之心、士卒無生之氣。莫不揮泣奮臂欲戰。今將軍東有夜邑之奉、西有淄上之娛。黃金橫帶、騁乎淄澠之間。有生之樂、無死之心。故不勝也。單明日厲氣、巡城、立於矢石之所、援枹鼓之。狄人乃下。

【訓讀】 單、狄を攻む。三月克たず。魯仲連曰く、「將軍、即墨に在りしとき曰く『往く可き無し、宗廟亡びぬ』と。將軍、死の心有りて、士卒、生の氣無し。泣を揮ひ臂を奮つて戰はんと欲せざる莫し。今、將軍、東に夜邑の奉有り、西に淄上の娛有り。黃金帶に橫たへ、淄澠の間に騁す。生の樂み有りて、死の心無し。故に勝たざる也」と。單、明日、氣を厲まし城を巡り、矢石の所に立ち、枹を援いて之に鼓す。狄人乃ち下る。

【通釋】 その後田單は齊の狄縣といふところを攻めたが、どうしても勝てなかつた。それについて齊の賢人魯仲連が田單に忠告して曰ふには、「閣下が即墨の孤城を苦守された時分には、（士卒と苦勞を共にして）、『あゝ國は滅んでしまつた、もう賴つてゆく所もない』、（たゞこの上は敵を倒して自ら運命を開拓するばかりだ、と曰つて士卒を勵まされたものぢや）。この時閣下には決死の覺悟があり、士卒

にも生きて還る氣はなかつた。だから(悲憤の)涙を拂ひ、(慷慨の)腕を振つて、勇み立つて敵と戰はうと思はぬものはなかつた。(斯樣に上下ともに精神が緊張してゐたればこそ燕の大軍に勝つて、見事に七十餘城を取り戻すことが出來たのでござる。然るに今はどうかと申すに)、閣下は東には夜邑萬戸の知行があり、西には淄水の上に宴遊の樂しみがある。常に大層な黄金を腰帶に着け、馬を淄水・澠水のあたりに馳せて豪遊なさるといふ。既に生の享樂あつて、死の決心がない。(精神がすつかりダレ切つて居られる)。だから(高の知れた狄縣ぐらゐを攻めて三月かゝつても)勝てないんでござる」と。田單これを聞いて(大いに發憤し)、明くる日から勇氣を勵まし、矢玉の飛び來る所に立つて、自身、撥をふりあげて攻太鼓を打つた。(かやうに自ら率先して軍を指揮したから、士卒も大いに奮ひ起つて力戰したので)、狄人も遂に降參する樣になつた。

語釋 狄(縣名、齊の邑。) ○魯仲連(齊の賢人、高踏して官に仕へず、俠氣あり、後に田單が齊王に申して爵位を與へようとしたところ、魯仲連は逃げて行方をくらました。) ○宗廟(人の祖先を祀つたオタマヤであるが轉じて國家といふ意に用ひる。) ○夜邑之奉(夜は掖と通じてエキと讀む。今の山東掖縣。奉は俸と同じで俸祿のこと。これより先、田單は夜邑一萬戸の地に封ぜられた。) ○淄上之娯(淄は音シ。下文の澠水と共に齊の都を流れるの名である。その川のほとりに遊行酒宴して樂しむこと。) ○援レ枹鼓レ之(枹は音フ。太鼓を打つ棒、バチのこと。援はヒクともトルとも訓じ、持つこと。主將たる田單自らバチを持つて太鼓を打ち士卒を勵ましたのである。)

餘論 前段は田單火牛と稱して有名な話。どこまで信ずべきかは疑しいが、何しろ奇拔なやり方

長鋏歸來乎

馮驩燒レ券

だ、牛の尾に燃えさかる炬火が、五彩の龍文の緋衣と相映じて、見る目も眩い中に、ふりかざす白刃の閃く様など想像されて、いかにも花々しい場面だ。後段は、卽墨の孤城を以て能く七十餘城を下し得た田單が、全齊の兵を擧げて一狄城を攻めるに三月を要して尙ほ勝ち得なかつたといふ事實を叙して、精神の緊張を强調したものである、當時、口さがなき京童は、田單の無力をひやかして、「大冠若レ箕。脩劍拄レ頤。攻レ狄不レ能レ下。壘ニ枯骨一成レ丘。」と謠つたといふ。田單も手痛く感じたであらう。

襄王既立。而孟嘗君中立爲ニ諸侯一、無レ所レ屬。王畏レ之、與連和。初馮驩聞ニ孟嘗君好一レ客而來見。置ニ傳舍一十日。彈レ劍作レ歌曰、長鋏歸來乎、食無レ魚。遷ニ之幸舍一。食有レ魚矣。又歌曰、長鋏歸來乎、出無レ輿。遷ニ之代舍一。出有レ輿矣。又歌曰、長鋏歸來乎。無ニ以爲一レ家。孟嘗君不レ悅。時邑入不レ足ニ以奉一レ客。使ニ人出ニ錢於薛一。貸者多不レ能レ與レ息。孟嘗君乃進レ驩請レ責レ之。驩往、不レ能レ與者、取ニ其券一燒レ之。孟嘗君怒。驩曰、「令ニ薛民親一レ君。孟嘗君竟爲ニ薛公一、終ニ於薛一。

【[illegible]】襄王既に立つ。而して孟嘗君中立して諸侯と爲り、屬する所無し。王之を畏れ、與に連和す。初め馮驩、孟嘗君客を好むと聞いて來り見ゆ。傳舍に置くこと十日。劍を彈じ歌を作つて曰く、「長鋏歸んなんか、食に魚無し」と。之を幸舍に遷す。食に魚有り。又歌つて曰く、「長鋏歸んなんか、出づるに輿無し」と。之を代舍に遷す。出づるに輿あり。又歌つて曰く、「長鋏歸んなんか、以て家を爲す無し」と。孟嘗君悅ばず。時に邑入、以て客に奉ずるに足らず。人をして錢を薛に出さしむ。貸る者多く息を與ふること能はず。孟嘗君乃ち驩を進めて之を責めんことを請ふ。驩往き、與ふること能はざる者は、其の劵を取りて之を燒く。孟嘗君怒る。驩曰く、「薛の民をして君に親ましめん」と。孟嘗君竟に薛公と爲り、薛に終りぬ。

【通釋】(齊の湣王卒して)襄王が位に卽いた。そして孟嘗君は獨立して自ら諸侯となり、誰の支配にもつかなかつた。襄王は孟嘗君の勢力を畏れて、互に和睦することになつた。これより先、馮驩といふものがあつて、孟嘗君が食客を好むといふことを聞いて、訪ねて來て謁見した。(孟嘗君は驩を最下等の宿舍の)傳舍といふのに泊めておいた。やがて十日ばかり經つと、驩は長劍の把をたゝき、歌を作つて曰ふには、「長劍よ、故鄉へ歸らうぢやないか、食膳に魚の影さへ見えぬ、(ひどい扱ひぢやもの)」

と。（孟嘗君、これを聞いて、それではといふので、一段上の）幸舍といふ宿舍に遷してやつた。今度は食事に魚がついた。（それで滿足するかと思ふと、又長劍の把をたゝきながら）歌ひ出した「長劍よ歸らうぢやないか、外出するのに乘物もないのだ、（つまらないぢやないか）」と。（孟嘗君は彼を最上等の宿舍の）代舍といふのに遷してやつた。今度は外出する際に乘物を用ひることが出來た。（しばらくすると）また歌ひ出した。「長劍よ歸らうぢやないか。これぢやア妻子を養うてゆくことが出來ないもの」と。これにはさすがの孟嘗君も面白く思はなかつた。當時孟嘗君は知行所からの年貢だけでは、食客連を養うてゆくのに不足を感じた。そこで人に命じて錢を薛の人民たちに貸しつけ、（その利息を取つて食客の費用の足しにしようと考へた。考へはよかつたが）、借りた人民たちは、大部分利息を支拂ふことが出來なかつた。孟嘗君はそこで馮驩を呼びよせて、利子を催促することを賴んだ。驩は薛に出かけたが、どうしても利息の拂へない貧乏人に對しては、彼等の借用證書を取り出して（目の前で）燒き棄てゝ見せた。孟嘗君もそれには怒つた。驩が曰ふには、「（かうして彼等を君の御仁德に感ぜしめることは）これ卽ち薛の民をして永く君に懷き親しましむる所以でございます」と。孟嘗君は（その言葉の通り、大いに薛の民の人望を得て）、とう〳〵薛の君となり、薛で一生を終つた。

松柏之歌

語釋　馮驩（フウクワンと讀む。馮は姓、驩は名である。馮の字は通常ヒヨウの音であるが、人の姓の時はフウ又はフと讀む。）　○傳舍・幸舍・代舍（宿。宿舍の名。上中下三等の客の宿る舍。傳は下、幸は中、代は上。）　○長鋏（長い劍のツカ。鋏は刀のツカである。一說にサヤをいふと。ここでは單に長劍の意に用ひた。）　○歸來乎（カヘランカ又はカヘリナンカと讀む。來は「歸去來」などの來と同じく助辭で、意味はない。歸らうよ、歸らうぢやないか位の意である。）　○邑入（知行地からの收入。即ち領地の年貢。）　○奉レ客（奉とは生活の爲めに用ひること。食客にまかなふとか、食客を養ふとかいふ意。）　○輿（のりもの。又コシとも訓ず。車やコシの類。）　○爲レ家（一家の生活を立ててゆくこと。ここは妻子を養うてゆく意。）　○貸者（貸はカスともカルとも兩訓する字。ここは借る意。）　○息（利息。利子。）

襄王卒。子建立。母君王后賢。事レ秦謹、與二諸侯一信。君王后卒。齊客多受二秦金一、爲二反間一、勸二王朝一レ秦、不レ修二攻戰之備一、不レ助二五國一攻レ秦。秦王政既滅二五國一、兵入二臨淄一。王建遂降。遷二于共一、處二之松柏之間一而死。以齊人歌レ之曰、松邪、柏邪、住レ建共者客邪。

訓譯　襄王卒す。子建立つ。母君王后、賢なり。秦に事ふるに謹み、諸侯と信あり。君王后卒す。齊の客多く秦の金を受けて反間を爲し、王の秦に朝するを勸めて、攻戰の備を修めず。五國を助けて秦を攻めず。秦王政、既に五國を滅して、兵、臨淄に入る。王建遂に降る。共に遷し、之を松柏の間

に處きて死せしめ、齊を以て郡と爲す。齊人之を歌うて曰く、「松か柏か、建を共に住ましむる者は客か」と。

襄王卒して、其子の建といふが位についた。此人の母の君王后といふは頗る賢婦人で、強國の秦に對しては(その鋭鋒を避ける爲に)よく氣をづけて事へ、他の諸侯には信義を以てつきあつたので、(内治外交ともに平穩であつたが)、君王后が亡くなると、(今まで養はれてゐた)食客達は、多くは秦の賄賂に目がくれて秦の反間になつてしまひ、王に、秦の屬國となつて秦王の御機嫌伺に出るやうに勸め、戰爭の準備もしなければ、韓魏等の五國を助けて秦を攻めようともしなかつた。とかくする中に秦王政(即ち始皇帝)は五國を滅して、兵を齊に向けて都の臨淄を陷れた。王の建は遂に秦に降服した。秦は建を共といふ所に遷し、松や柏の林の中に置いて餓死せしめ、齊を秦の一郡にしてしまつた。齊の人達はこの悲運を歌つて「松か柏か、建を共に住まはせたのは客か」と、言つた。その意味は、吾等の王建をば、あの共の地に遷して餓死させたのは、そこに生えてゐた松であらうか、柏であらうか。それとも裏切者の食客であらうか――(といふので、王があまりに客を信じ過ぎたが故に、こんな事になつたのだと悔んだのである)。

冬日可レ愛夏日可レ畏

【語釋】 反間(まはしもの。詐つて敵國の人となつて其の軍中に入り、間隙を窺ひ、反つて其主に報ずる者をいふ。一説に、敵の間者を利用して、敵の間に仲間割れをさせることであると。) ○五國(韓・魏・趙・燕・齊の五國。) ○秦王政(政は名。六國を滅して支那を統一した有名な始皇帝のこと。) ○共(地名。今河南省輝縣。) ○松栢(栢はカシハと訓するが、カシハではない。コノテガシハ又は檜の類である。)

趙之先、本與レ秦同姓。祖二於蜚廉一。有二子季勝一。其後有二造父者一。事二周穆王一以レ功、封二趙城一。由レ是爲二趙氏一。春秋時、有二趙夙者一。事レ晉。夙生二成子衰一。衰生二宣子盾一。人曰、趙衰冬日之日也。趙盾夏日之日也。冬日可レ愛、夏日可レ畏。盾生レ朔。大夫屠岸賈滅二朔之族一。朔有二遺腹子武一。賈索レ之不レ得。朔客程嬰・公孫杵臼相與謀。臼曰、立レ孤與レ死孰難。嬰曰、死易、立レ孤難耳。杵臼曰、子爲二其難一。杵臼取二他兒一匿二山中一。嬰出謬曰、與二我千金一、吾告二趙氏孤處一。賈喜。乃使三人隨レ嬰殺二杵臼及孤一。而趙氏眞孤在。嬰後與レ武滅レ賈、竟立レ武而自殺、以下報二宣孟及杵臼一。

【訓讀】 趙の先は、本、秦と同姓なり。蜚廉を祖とす。子季勝有り。其の後造父といふ者有り。周の穆王に事へ、功を以て趙城に封ぜらる。是に由りて趙氏と爲る。春秋の時、趙夙といふ者有り。晉に

事ふ。夙、成子衰を生む。衰、宣子盾を生む。人曰く、「趙衰は冬日の日なり。趙盾は夏日の日なり。冬の日は愛す可し。夏の日は畏る可し」と。盾、朔を生む。大夫屠岸賈、朔の族を滅す。朔に遺腹の子武有り。賈之を索むれども得ず。朔の客、程嬰・公孫杵臼、相與に謀りて曰く、「孤を立つると死すると孰れか難き」と。嬰曰く、「死するは易く、孤を立つるは難き耳」と。杵臼曰く、「子其の難きを爲せ」と。杵臼、他の子を取りて山中に匿る。嬰出でて謬りて曰く、「我に千金を與へば、吾趙氏の孤の處を告げん」と。賈喜ぶ。乃ち人をして嬰に隨ひて杵臼及び孤を殺さしむ。而して趙氏の眞の孤は在り。嬰後に武と賈を滅し、竟に武を立てゝ自殺し、以て下、宣孟及び杵臼に報ず。

【通釋】（二行目「衰生宣子盾」まで略す）。或人が衰・盾親子を批評していふには、「父の趙衰は冬の陽のやうに（溫和な人柄であるが）、子の趙盾は夏の陽のやうに（鋭く嚴しい人だ）。冬の陽は（物やはらかで）なつかしいものだが、夏の陽は（烈しすぎて）恐ろしい」と。趙盾の子に趙朔といふがあつた。（趙盾が死ぬと）家老の屠岸賈が趙朔の一族を滅ぼした。（その後で生れた）朔のおとしだねを武といふ。賈は（この武をも殺さうとして）捜し求めたが、遂に發見し得なかつた。さて朔の食客の程嬰と公孫杵臼の二人が、互に相談していふには「この後、孤兒（武）を守り立てゝ（主家を再興するのと）、今、生命を

捨てるのとは、どちらが難しいだらうか」と。嬰曰く、「無論、死ぬのは何でもないことだ。併し孤兒を守り立てることは容易でない」と。そこで杵臼はいふ、「では貴公、(御苦勞だが)、その難儀な方をやつて呉れ、俺は直ぐに死なう」と。(二人の相談がまとまつた)。杵臼は何處かの子供を取つて來て、(これを趙氏の孤兒に仕立てゝ)山中に匿れ棲んだ。程嬰は(時分はよしと)、屠岸賈の所へ出かけて、僞つて曰ふには、「私に千金を下さるなら、趙朔の子供の在處を教へて上げませう」と。賈は大いに喜び、人を遣はし、嬰に隨いて行つて杵臼と趙氏の孤兒武とを殺させた。(しかしそれは例の仕組んだ芝居で)、本當の趙朔の孤兒武はちやんと生き殘つてゐた。程嬰は後に(その成長した)趙武と力をあはせて屠岸賈を滅ぼし、遂に武を立てゝ(主家を再興したが、今は思ひ殘すこともなしと)自殺して、地下の祖父趙盾や同志の杵臼にこの事を報告したといふ。

【語釋】與レ秦同姓(秦は嬴姓である。) ○造父(有名な馭者。周の穆王を乘せて急ぎ歸つて亂を救うたことは既に周の條に見えた。) ○趙城(今の山西省趙城縣。) ○遺腹子(父が死ぬ時まだ母の胎内にあつて父が死んでから生れた子をいふ。おとしだね。) ○他兒(一說に程嬰の子であるといふ。新序に見ゆ。) ○千金(漢以前は鎰を金といふ。千金は千鎰である。鎰は二十四兩。漢以後は斤を金といふ。斤は十六兩である。) ○下(地下。あの世。) ○宣孟(趙盾のこと。宣と諡す。長の意で美稱。後に趙孟といふに同じい。) ○報(報告する意。)

武卒ス。號ス二文子ト一。文子生ム二景叔ヲ一。景叔生ム二簡子鞅ヲ一。簡子有リレ臣、曰フ二周舍ト一。死ス。簡子每ニ聽ク

千羊之皮不如一狐之腋

朝不悦曰、千羊之皮、不如一狐之腋。諸大夫朝、徒聞唯唯。不聞周舍之鄂鄂也。簡子長子曰伯魯、幼曰無恤。書訓戒之辭於二簡、以授二子曰、謹識之。三年而問之。伯魯不能擧其辭。求其簡、已失之矣。無恤誦其辭甚習。求其辭出諸懷中而奏之。於是立無恤爲後。

訓讀 武、卒す。文子と號す。文子、景叔を生む。景叔、簡子鞅を生む。簡子、臣有り、周舍と曰ふ。死す。簡子、朝を聽く毎に悅ばずして曰く、「千羊の皮は一狐の腋に如かず。諸大夫の朝する、徒唯々を聞くのみ。周舍の鄂々を聞かざる也」と。簡子の長子を伯魯と曰ひ、幼を無恤と曰ふ。訓戒の辭を二簡に書して、以て二子に授けて曰く、「謹んで之を識せ」と。三年にして之を問ふ。伯魯は其の辭を擧ぐること能はず。其の簡を求むれば已に之を失へり。無恤は其の辭を誦すること甚だ習ふ。其の簡を求むれば諸を懷中より出して之を奏す。是に於て無恤を立てゝ後と爲す。

通釋 武が死んだ。號を文子といふ。文子の子は景叔、景叔の子が有名な趙簡子、名は鞅といふ者

である。趙簡子に周舍といふ家來があつた。(常に直諫を好んで能く輔佐の任を盡したが)、それが死んだ。(さてそれに代るやうな立派な人物がないので)、爾來、簡子は毎日政治を執る度ごとに、不滿足な顏をして言つた。「羊の皮は千疋分あつめても、一疋の狐の腋の皮には及ばない、といふことがある。多くの大夫達がこゝへ出仕するが、(予が言ふことに對して、何事も御尤も〳〵とばかり)、たゞハイ〳〵といふだけで、周舍のやうにどん〳〵意見を述べて直諫するものがない。(多くの大夫は一周舍に及ばぬ。實に遺憾なことである)」と。趙簡子に二人の子供があつた。長男を伯魯といひ、弟を無恤といふ。ある時、簡子は戒めの言葉を二枚の竹の札に記して、これを一枚づゝ二人の子に授け、「よく注意してこの言葉を覺えて置け」と命じた。それから三年經つた或日、(二人を呼んで)これを尋ねて見たところ、兄の伯魯はすつかり忘れてしまつて、その言葉を曰ふことが出來ない。竹札はと曰へば、早や失ひましたといふ。ところが弟の無恤の方は、其の言葉をよく暗記して、非常によく熟練してゐる。札を出せと言へば、すぐ懷から出して父に差し上げた。そこで簡子は兄をしりぞけて弟無恤をあとゝりにした。


千羊之皮云々(狐の腋の下の白毛は裘(カハゴロモ)として一番よいといふので、その價格は千枚の羊の皮にもまさると稱せられた。それゆゑ多くのつまらぬ人間よりも一人の賢人の方が價値があるといふ譬にしたのである。) ○唯

繭絲保障

沈竈產蛙

々（はい〳〵と返事すること。それから轉じて、人の意に逆はぬやう、迎合する意に、こゝは用ひたのである。唯々諾々。） ○鄂々（諤々に同じい。忌み憚らず思ふ存分に直言すること。正々堂々と議論するさま。侃々諤々。） ○簡（竹を削つてフダにしたもの。昔時紙のない時代には竹木のふだに漆で文字を書いたもので、今の紙の用をなした。） ○識（こゝは音シで、誌と同じくシルスと訓ず。書記することにもいふが、こゝに記憶の意である。） ○擧（あげ示すこと。こゝは讀み上げること。） ○誦（ソランズと訓じ、そらで言ふこと。諳誦。） ○諸（「出之於懷中」の之於の二字を約したシヨの音を諸の字音を假りて表はしたのである。諸の字その者に意味があるのではない。） ○奏（こゝは差上げる意。）

簡子使尹鐸爲晉陽。請曰、以爲繭絲乎、以爲保障乎。簡子曰、保障哉。尹鐸損其戶數。簡子謂無恤曰、晉國有難、必以晉陽爲歸。簡子卒、無恤立。是爲襄子。知伯求地於韓・魏。皆與之。求於趙。不與。率韓・魏之甲以攻趙。襄子出走晉陽。三家圍而灌之。城不浸者三板。沈竈產蛙。民無叛意。襄子陰與韓魏約、共敗知伯、滅知氏而分其地。襄子漆知伯之頭、以爲飲器。

【訓讀】簡子、尹鐸をして晉陽を爲めしむ。請ひて曰く、「以て繭絲を爲さん乎、以て保障を爲さん乎」と。簡子曰く、「保障なる哉」と。尹鐸、其の戶數を損す。簡子、無恤に謂ひて曰く、「晉國、難あらば、必ず晉陽を以て歸と爲せ」と。簡子卒し、無恤立つ。是を襄子と爲す。知伯、地を韓・魏に求む。皆之

を與ふ。趙に求む。與へず。韓・魏の甲を率ゐて以て趙を攻む。襄子出でて晉陽に走る。三家圍んで之に灌ぐ。城浸さざるもの三版なり。沈竈、鼃を產すれども民叛意無し。襄子陰に韓・魏と約し、共に知伯を敗り知氏を滅ぼして其の地を分つ。襄子、知伯の頭に漆して以て飲器と爲す。

【通釋】簡子は尹鐸に命じて、その領地の晉陽を治めさせることにした。（そのとき尹鐸が政治の方針に就て指圖を）請うて曰ふには、「晉陽を治めるのには、繭絲に致しませうか、保障に致しませうか」と——繭絲とは、租稅を取り立てるのに、繭の絲を抽きとるやうに、取れるだけ絞り取つて、お上の富を作らうといふ方法。また保障とは、保は堡でとりで、障は垣で敵を防ぐさゝへ物である。保障は蕃屏といふに同じい。卽ち民力を休養し、人民に恩惠を施しておいて、事ある時は、人民が蕃屏となつてお上を守るやうにさせること。德を施して國の守を作る方法である——それを聞いた簡子は、「それは勿論、保障が宜い」と言つた。そこで尹鐸は晉陽へ往くと、戶籍面から晉陽の戶數を減した。（さうして人民から取り立てる戶數割のやうな稅金を少くしたのである。卽ち人民の生活をらくにし、民力を休養する所以の方法であつて、いはゆる保障である。）當時、簡子は我が子の無恤に向つて、「將來もし我が晉の國に國難があつたらば、その時はきつと晉陽を御身の逃げ場とするがよい。（晉陽の民は

必ず御身のために保障となつて守つて呉れるであらう」と言つた。趙簡子が死んで、子の無恤が立つた。これを襄子といふ。その頃、晉の家老の一人たる知伯が、他の家老の韓氏・魏氏に、領地を分けてくれと迫つた。韓氏・魏氏は(知伯の勢力を憚つて)土地を與へた。知伯はまた趙氏に迫つた。併し趙氏は與へなかつた。そこで知伯は韓氏・魏氏の兵を率ゐて趙氏を攻めた。趙の襄子は(かねての父の言葉に從うて)晉陽に遁げた。すると知伯・韓氏・魏氏三家の兵が晉陽を圍んで水攻にした。城は(すつかり水に浸されてしまつて)、たゞ僅かに上の方六尺ばかり水が浸かないだけだつた。水に沈んだ竈には蛙が生き出るほど、(久しい間、水攻めに遇つてゐたが)誰れ一人裏切る料簡のものはなかつた。(尹鐸の保障の効はこゝに始めて顯はれた。趙簡子が「晉陽を以て歸となせ」と言つた言葉は果して徒爾ではなかつた)。そのうちに趙襄子は、ひそかに韓・魏と內通して(謀を合せ)、共に知伯を破り、その家を滅ぼして、領地を分け取つた。襄子は(それでもまだ恨が盡きなかつたのであらう)智伯の頭骨に漆を塗つて杯を作り、(客ある毎にそれを出して酒を飲み、以て憤を泄らしたといふことである。)

【語釋】晉陽(今山西太原縣。)　○損ニ其戸數ー(損は減ずること。民をして成るべく一家に同居させて戸數を減じたのであると解く說もある。)　○歸(身の落ちつけどころといふ意。ここは逃げ場、避難所。)　○韓魏之甲(甲は甲兵の意で、鎧をつけた武士のこと。)　○灌レ之(灌はソヽグ。河水をせいて城中に流し込み、城を水浸しにすること。いはゆる水攻め。)　○三板(板は版に通じ用ひ、一版は高さ二尺、三版は六尺である。一版は一丈といふ

を與ふ、趙に求む。與へず。韓・魏の甲を率ゐて以て趙を攻む。襄子出でて晉陽に走る。三家圍んで之に灌ぐ。城浸さざるもの三板なり。沈竈、鼃を產すれども民叛意無し。襄子陰に韓・魏と約し、共に知伯を敗り知氏を滅ぼして其の地を分つ。襄子、知伯の頭に漆して以て飲器と爲す。

通釋　簡子は尹鐸に命じて、その領地の晉陽を治めさせることにした。（そのとき尹鐸が政治の方針に就て指圖を）請うて曰ふには、「晉陽を治めるのには、繭絲に致しませうか、保障に致しませうか」と——繭絲とは、租稅を取り立てるのに、繭の絲を抽きとるやうに、取れるだけ絞り取つて、お上の富を作らうといふ方法。また保障とは、保は堡でとりで、障は垣で敵を防ぐさゝへ物である。保障は藩屛といふに同じい。卽ち民力を休養し、人民に恩惠を施しておいて、事ある時は、人民が藩屛となつてお上を守るやうにさせること。德を施して國の守を作る方法である——それを聽いた簡子は、「それは勿論、保障が宜い」と言つた。そこで尹鐸は晉陽へ往くと、戶籍面から晉陽の戶數を減した。（さうして人民から取り立てる戶數割のやうな稅金を少くしたのである。卽ち人民の生活をらくにし、民力を休養する所以の方法であつて、いはゆる保障である）。當時、簡子は我が子の無恤に向つて、「將來もし我が晉の國に國難があつたらば、その時はきつと晉陽を御身の逃げ場とするがよい。（晉陽の民は

必ず御身のために保障となつて守つて吳れるであらう」と言つた。趙簡子が死んで、子の無恤が立つた。これを襄子といふ。その頃、晉の家老の一人たる知伯が、他の家老の韓氏・魏氏に、領地を分けてくれと迫つた。韓氏・魏氏は（知伯の勢力を憚つて）土地を與へた。知伯はまた趙氏に迫つた。併し趙氏は與へなかつた。そこで知伯は韓氏・魏氏の兵を率ゐて趙氏を攻めた。趙の襄子は（かねての父の言葉に從うて）晉陽に遁げた。すると知伯・韓氏・魏氏三家の兵か晉陽を圍んで水攻にした。城は（すつかり水に浸されてしまつて）、たゞ僅かに上の方六尺ばかり水が浸かないだけだつた。水に沈んだ竈には蛙が生き出るほど、（久しい間、水攻めに遇つてゐたが）誰れ一人裏切る料簡のものはなかつた。（尹鐸の保障の効はこゝに始めて顯はれた。趙簡子が「晉陽を以て歸となせ」と言つた言葉は果して徒爾ではなかつた）。そのうちに趙襄子は、ひそかに韓・魏と內通して（謀を合せ）、共に知伯を破り、その家を滅ぼして、領地を分け取つた。襄子は（それでもまだ恨が盡きなかつたのであらう）智伯の頭骨に漆を塗つて杯を作り、（客ある每にそれを出して酒を飲み、以て憤を泄らしたといふことである。

【語釋】晉陽（今山西太原縣。）○損二其戶數一（損は減ずること。民をして成るべく一家に同居させて戶數を減じたのであると解く說もある。）○歸（身の落ちつけどころといふ意。ここは逃げ場。避難地。）○韓魏之甲（甲は甲兵の意で、鎧をつけた武士のこと。）○灌レ之（灌はソヽグ。河水をせいて城中に流し込み、城を水浸しにすること。いはゆる水攻め。）○三板（板は版に通じ用ひ、一版は高さ二尺、三版は六尺である。一版は一丈といふ

豫讓報仇

說もあるが採らない。）　〇鼃（音ア、蛙に同じ。カヘル。）　〇飲器（これには凡そ三說ある。（一）酒を飲む器・さかづき、（二）酒樽、酒を盛るもので、飲むものではない、（三）便器。俗にいふオマル（虎子）の類。中井履軒曰く、「溺ヲ盛ルニ之ヲ置キ溺ヲ其口ニ入ルレハ内讀クシテ乃ク溺ヲ飲ム故ニ飲器ト曰フ」と。溺は尿で小便のこと。併しながら私は高島長孫の說に、呂氏春秋には「飲器」を「觴」に作り、韓非子には「飲杯」に作る、觴・杯ともに酒器の外はない、といふのに從つて、酒杯として說いておく。）

知伯之臣豫讓、欲為之報仇。乃詐為刑人、挾匕首、入襄子宮中塗廁。襄子如廁、心動。索之獲讓。問曰、子不嘗事范・中行氏乎。知伯滅之。子不為報讎、反委質於知伯。知伯死。子獨何為報仇之深也。曰、范・中行氏、衆人遇我。我故衆人報之。知伯國士遇我。我故國士報之。襄氏曰、義士也。舍之。謹避而已。

〔通釋〕知伯の臣、豫讓、之が爲めに仇を報ぜんと欲す。乃ち詐りて刑人と爲り、匕首を挾み、襄子の宮中に入りて厠を塗る。襄子、厠に如き心動く。之を索めて讓を獲たり。問うて曰く、「子嘗て范・中行氏に事へざりし乎。知伯之を滅せり。子爲めに讎を報ぜず、反つて質を知伯に委す。知伯死す、子獨り何爲れぞ仇を報ずるの深きや」と。曰く、「范・中行氏は衆人もて我を遇す。我、故に衆人もて

之に報ず。知伯は國士もて我を遇す。我、故に國士もて之に報ず」と。襄子曰く、「義士なり。之を舍せ。謹んで避けん而已」と。

通釋 知伯の臣の豫讓といふもの、主人のために仇討をしようと思ひ、(當時は囚人に賤しい仕事をさせる習はしであつたから)、詐つて囚人の仲間に混じ、短刀を隱し持つて、襄子の御殿へ入つて便所の壁塗りをした。(さうして襄子を刺す機會を狙つてゐた。それとは知らず)、襄子は便所へ行つたところ、何となく胸さわぎがする。(これたゞ事ならずと感づいて)捜索させたら、豫讓が捕まつた。そこで襄子が問うていふには、「お前は先に范氏にも中行氏にも事へたでないか。その范氏・中行氏を滅ぼしたものは知伯である。然るにお前は、范氏・中行氏の爲に仇討をしようとはしないで、反つて仇の知伯に禮物まで出して家來となつた。さうして今、知伯が死ぬと、(さあ仇討だと言つて俺を狙ふ、理屈が分らんぢやないか)お前、どうして知伯の爲にばかり、さう深く仇討を思ひ込んだのか」と。すると豫讓は斯う言つた、「(仰せ一應は尤もだが)かの范氏・中行氏は拙者を普通の人間として扱ひ、(何等特別の待遇をして吳れなかつた)。だから拙者も、普通の人のするやうにして報ゆるまでのことだ。然るに知伯殿は國士——天下の名士として拙者を待遇して下された(實に感激の至に堪へぬ)。それゆゑ

漆レ身爲レ厲

將レ愧下懷二二心一者上

に拙者も亦國士として之に報いんとするものである。（この際身命を賭して仇を討ち、以て舊主の恨みを霽らすこそ國士の所業といふべきだ。衆人と異る所以はそこにある）」と。聽いた襄子は（その義に感じて）、「彼は義を重んずる勇士である。舍して取らせ。今後は予に於て彼を避けるやうに氣をつけるばかりぢや」と言つた。

語釋 刑人（罪あつて刑を受くる者。囚人のこと。昔は刑人に賤しい仕事をさせたものである。）〇匕首（短刀のこと。匕はサジ。短刀の頭がサジのやうな形をなしてゐるから云ふ。）〇委レ質（質はここでは贄（シ）と同じく用ひ、進物のこと。委は置くといふ意。始めて仕臣の約束をするものは禮物を差出して君の前に置くのが禮儀である。故に官に就いて臣となることを「質を委す」といふ。一說に質はシツと讀んで身體のこと、身體を君に任せて事へる意であると。）〇國士（一國の人皆その才德を推し重んずる程の立派な人士をいふ。天下の名士といふやうなもの。）

讓漆レ身爲レ厲、呑レ炭爲レ啞、行乞二於市一。其妻不レ識也。其友識レ之曰、以二子之才一、臣二事趙孟一、必得二近幸一。子乃爲レ所レ欲レ爲、顧不レ易邪。何乃自苦如レ此。讓曰、不可。既委レ質爲レ臣、又求レ殺レ之。是二心也。凡吾所レ爲者、極難耳。然所三以爲二此者一、將下以愧中天下後世、爲二人臣一懷二二心一者上也。襄子出。讓伏二橋下一。襄子馬驚。索レ之得レ讓。遂殺レ之。



豫讓報讎圖

訓讀 讓、身に漆して厲と爲り、炭を呑んで啞と爲り、行きて市に乞ふ。其の妻識らざる也。其の友之を識つて曰く、「子の才を以て趙孟に心事せば、必ず近幸を得ん。子乃ち爲さんと欲する所を爲さば、顧ふに易からず邪。何ぞ乃ち自ら苦しむこと此の如くなる」と。讓曰く、「不可なり。既に質を委して臣と爲り、又之を殺さんことを求む。是れ二心也。凡そ吾が爲す所の者は極めて難き耳。然れども此を爲す所以の者は、將に以て天下後世人臣と爲りて二心を懷く者を愧ぢしめんとする也」と。襄子出づ。讓、橋下に伏す。襄子の馬驚く。之を索めて讓を得たり。遂に之を殺す。

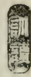
通釋 豫讓は(尙ほも趙襄子をつけ狙ひ、人目を晦ます爲に)體に漆を塗り(そのかぶれによつて)癩病患者の態になり、また炭を呑んで(音聲を變じて)啞の眞似をなし、市の中を乞食し

て歩いた。（あまりな變りやうに）妻が途中で遇つても豫讓とは知らぬ位であつた。然るに其の友人がそれと知つて、豫讓に曰ふには、「君の才を以て趙襄子の家來となつて事へるならば、きつと氣に入つて近づけられるであらう。さうしておいて君の行りたいと思ふこと（復讐）を行るならば、譯のないことだらうと思ふ。それだのに、どうして自分でさう苦しむのであらう、（何もそんなに苦しむに及ばぬではないか）」と。それに對して豫讓は斯う曰つた、「それは可かぬ。既に君臣の禮を結んで家來となつておきながら、又これを殺さうとするのは、これ二心を懷くものである。實は今自分のしてゐることは、最も苦しいことには違ひない。併しながらその苦しいことを敢てするわけは、天下後世の、人臣となりながら二心を持つやうな卑怯な者を愧かしめてやらうとするに外ならぬ」と。（さう言つて豫讓は、益々復讐の念を堅うして襄子を狙つた）。或日、襄子が外出した。豫讓は橋の下に隱れ忍んでゐた。（その上を襄子が馬に乘つて渡ると、）馬は俄かに驚いて飛び上つた。（怪しいと見て襄子は直ぐに）四邊を搜索させたところ、果して豫讓が捕まつた。で、とうとう豫讓を殺してしまつた。

【語釋】漆レ身爲レ厲（厲はここではライと讀み癩と同じく用ひ、癩病のこと。漆を塗ると、かぶれてデキモノになり癩病やみのやうに見える。）○呑レ炭爲レ啞（啞はオシである。併し炭を呑んだからとて啞になるといふ譯はない。事實また豫讓が友人に話してゐるのを見ても啞でないことは明かだ。ここは炭を呑んで音聲を變じて啞の眞似をしたといふ位に見てよい。）○趙孟（孟は長の意で美稱であることは旣に述べた。趙氏は文子以後世々趙孟と稱した。知氏が知伯といふやうなもの。ここは趙襄子を指す。）

○近幸（近づけて愛すること。幸は寵の意。） ○何乃自苦如レ此（乃は通常ソコデと譯す、上文「子乃チ爲サント欲スル所ヲ爲サバ」の乃がそれである。またソレダノニとかカヘツテとか譯すべき場合がある。ここの乃がそれである。）

襄子立伯魯之孫浣。是爲獻子。獻子生烈侯籍。以周威烈王命爲侯。歷武公・敬侯・成侯至肅侯。秦人恐喝諸侯、求割地。有洛陽人蘇秦。游說秦惠王不用。乃往說燕文侯、與趙從親。燕資之、以至趙。說肅侯曰、諸侯之卒十倍於秦。幷力西向、秦必破矣。爲大王計、莫若六國從親、以擯秦。肅侯乃資之、以約諸侯。蘇秦以鄙諺說諸侯曰、寧爲雞口、無爲牛後。於是六國從合。



襄子、伯魯の孫浣を立つ。是を獻子と爲す。獻子、烈侯籍を生む。周の威烈王の命を以て侯と爲る。武公・敬侯・成侯を歷て肅侯に至る。秦人、諸侯を恐喝して地を割かんことを求む。洛陽の人蘇秦といふもの有り。秦の惠王に遊說して用ひられず。乃ち往いて燕の文侯に說き、趙と從親せしむ。燕之に資し、以て趙に至らしむ。肅侯に說いて曰く、「諸侯の卒、秦に十倍せり。力を幷せて西に向はゞ、秦必ず破れん。大王の爲に計るに、六國從親して以て秦を擯くるに若しくは莫し」と。肅侯乃

ち之に脅し、以て諸侯に約せしむ。蘇秦、鄙諺を以て諸侯に說いて曰く、「寧ろ雞口と爲るとも牛後と爲る無かれ」と。是に於て六國從合す。

通釋　(二行目「至肅侯」まで略す)秦は(愈々强大となつて)諸侯をおどかして土地を割き讓らせようとした。時に洛陽の人で蘇秦といふものがあつた。初め秦の惠王に對して(天下統一の策を)說きすゝめたが、用ひられなかつた。そこで燕の國へ往つて文侯に說き、趙と合從同盟して(秦にあたるの利益であることを勸めた)。燕の文侯は(それに贊成し)、旅費を與へて趙を說きに遣つた。そこで蘇秦は趙へゆき肅侯に說いて曰ふには、「今の諸侯の兵力を合しますと、秦の十倍はあります。されば諸侯が一致協同して西の方秦に向ひ攻めるならば、秦は負けるに相違ございませぬ。よつて大王のお爲めに計り考へまするに、この際六國(楚・燕・齊・韓・魏・趙等、秦を除いた六つの强國)が合從同盟して秦を斥け倒すに越したことはありませぬ」と。肅侯も(亦これに同意して)、旅費を與へ、諸侯を說いて、同盟の約束を結ばせた。蘇秦は卑近なことわざを以て諸侯を說きまはつた。曰く、「いつそ雞の口となつても、牛の尻となることはお止めなさい(小さくても頭は頭だ、大きくても尻は尻だけさ)」と。斯くて六國は(蘇秦の說に從ひ)、同盟して秦に當ることになつた。

妻不レ下レ機

前倨後恭

語釋 恐喝（おどしつけること。） ○遊説（説は「ときすすめる」意のとき音ゼイとなる。遊説は諸方を廻つて己が意見を説きすすめること。） ○從親（合從して和親すること。從は縦（タテ）、南北を縦といふ。故に六國が南北に合同して西の方の秦に當ることを合從（ガツシヨウ）といふのである。） ○資（旅費を給與すること。） ○鄙諺（鄙俗なコトワザ。卑近にして通俗的な譬喩。） ○雞口牛後（後は尻で共に音コウ。「シリ」をいふ。雞の口は小さくても上にあるから貴いが、牛の尻は大きくても汚い。六國が各〻一本立になれば、小さくても頭だ。大きな秦の尻につくよりも幾らマシだか知れないといふので、小國の君となるとも大國の臣となる勿れとの意。） ○從合（合從といふに同じい。）

蘇秦者、師鬼谷先生。初出游、困而歸。妻不下機、嫂不爲炊。至是爲從約長、幷相六國。行過洛陽。車騎輜重擬於王者。昆弟妻嫂側目不敢視。俯伏侍取食。蘇秦笑曰、何前倨而後恭也。嫂曰、見季子位高金多也。秦喟然嘆曰、此一人之身。富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之、況衆人乎。使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六國相印乎。於是散千金以賜宗族朋友。既定從約、歸趙。肅侯封爲武安君。其後秦使犀首欺趙、欲敗從約。齊・魏伐趙。蘇秦恐去趙、而從約解。

訓讀 蘇秦は鬼谷先生を師とす。初め出游し、困して歸る。妻は機より下らず、嫂は爲めに炊がず。

是に至りて從約の長と爲り、六國に幷せ相たり、行いて洛陽を過ぐ。車騎輜重、王者に擬す。昆弟妻嫂、目を側てゝ敢て視ず、俯伏して侍して食を取る。蘇秦笑つて曰く、「何ぞ前には倨りて後には恭しきや」と。嫂曰く、「季子の位高く金多きを見れば也」と。秦、喟然として歎じて曰く、「此れ一人の身なり。富貴なれば則ち親戚之を畏懼し、貧賤なれば則ち之を輕易す。況んや衆人をや。我をして洛陽負郭の田二頃有らしめば、豈能く六國の相印を佩びん乎」と。是に於て千金を散じ、以て宗族朋友に賜ふ。既に從約を定めて趙に歸る。肅侯、封じて武安君と爲す。其の後、秦、犀首をして趙を欺かしめ、從約を敗らんと欲す。齊・魏・趙を伐つ。蘇秦恐れて趙を去り、而して從約解けぬ。

【通釋】蘇秦は鬼谷先生を師として（縱横の術と稱する一種の外交政略）を學んだ。嘗てその學を以つて諸侯に說きすゝめようと）、國を出て諸國を巡つたが、（誰も用ひるものがないので）困りきつて悄然として歸つて來た。時に妻は（機を織つてゐたが、蘇秦の樣子を見て）、機織臺から下りても來ず、（知らん顏してゐる）。嫂も蘇秦の爲めに暖い飯を炊いてやらうともしなかつた。然るに前にいうたやうな次第で、今や蘇秦は合從同盟の盟主となり六國の宰相を兼ね、故鄕の洛陽に立ち寄つたのである。護衞の車馬、荷物車（何十臺となく續いて、その堂々たる行列の盛さは）さながら天子のそれにも比す

べきものがあつた。それを見た蘇秦の兄弟、妻、嫂、（みな恐れ入つてしまつて）目をそらして正面に見得ない。その前にへいつくばつて食事のお給仕をするといふ始末。（あまりな變りやうに）蘇秦もをかしくなつて嫂に向ひ、「先には、あんなに意張つてた人が、今日はどうしてさう丁寧なんでせう、をかしいぢやありませんか」と曰つた。すると嫂は曰ふ、「だつて季子さん、あなたは高位高官に上り、うんとお金持になつてゐらしたんですもの、（尊敬するに不思議はないぢやありませんか）」と。（それを聞いた）蘇秦は、（その餘りに現金な挨拶に）溜息して歎いて曰ふ、「（前も今も俺は同じ）一つ身體だ。然るに出世をすれば親戚のものまで畏れはゞかり、おちぶれると親戚のものまでが馬鹿にしてあなどる。まして他人は尚更のことだ。あゝ俺に若し城下近くの田地の二頃もあつたなら、（生活の氣樂さに安心してしまつて）とても六國の宰相の印を身につけるやうな（奮發心は起らなかつたらう。今では貧乏が身のためになつたのだ」と。そこで多くの金を撒いて一族の者や友達に分け與へた。それから合從同盟を結んで趙へ戻つて來た。趙の肅侯は（その功を賞し河南の武安といふ土地を與へて）武安君とした。その後、秦王は、（六國の合從が秦のために恐るべき强敵であることを知つたので）、犀首（公孫衍）を遣はして趙を欺いて（諸侯を離間せしめ）、それによつて合從の同盟を打壞さうと圖つた。

齊・魏の二國は（その煽動に乘つて）趙を伐つた。驚いたのは蘇秦で、早速、難を恐れて趙を逃げ去つた。そこで合從の約束は破れてしまつた。

語釋 鬼谷先生（戰國時代に於ける縱橫家といつて、一種の外交政略の學を講じた人である。本名は王翊といつたといふ說もあるが確かでない。河南の鬼谷といふ地にゐたから鬼谷先生といつたものであらう。今「鬼谷子」と題する書一卷あり、戰國游說家の縱橫說を書いたもので、鬼谷先生の著だともいひ、然らずともいふ。）○機（ハタオリ。ここはハタオリ臺のこと。）○輜重（旅行者の手荷物を運ぶ車。）○昆弟（昆は兄の意。）○側レ目（側はソバダツと讀む、目をそらして橫目で見ること。恐れ入つてまともに見得ないのである。）○季子（蘇秦の字（アザナ）である。）○輕易（易はここでは侮る意。）○洛陽負郭田（洛陽は蘇秦の鄕里である都城、郭は都城の外ぐるわ。それを背に負うた田といふので、鄕里の城下近くの田地といふ意。それに就ては都城近い田は肥沃であるから、肥えた良い田地の意だといふ說もあるが、そこまで考へなくともよからう。）○二頃（一頃は百畝、我が國の二町七段八畝十步に當るといふ。）○犀首（もと魏の官名であるが、魏人公孫衍が嘗て此の官に居つたので、公孫衍の號のやうになつたのである。この時衍は秦に仕へてゐた。彼も亦遊說家で蘇秦の亞流である。）○欺レ趙云々（史記の蘇秦傳に「秦使下犀首欺二齊魏一、與共伐上レ趙、欲レ敗二從約一」とあるのが事實である。本文は編者の誤脫であることは、先人が既に論證してゐる。）

和氏璧

藺相如完レ璧

肅侯子武靈王、胡服招騎射、略胡地、滅中山、欲南襲秦、不果。傳子惠文王。惠文嘗得楚和氏璧。秦昭王、請以十五城易之。欲不與畏秦強、欲與恐見欺。藺相如、願奉璧往。城不入、則臣請完璧而歸。既至。秦王無意償城。相如乃紿取璧、怒髮指冠、卻立柱下曰、臣頭與璧俱碎。遣從者懷璧、間行先歸、

身待命於秦。秦昭王賢而歸之。

【訓讀】肅侯の子武靈王、胡服して騎射を招き、胡地を略し、中山を滅し、南のかた秦を襲はんと欲して果さず。子惠文王に傳ふ。惠文嘗て楚の和氏の璧を得たり。秦の昭王、十五城を以て之に易へんと請ふ。與へざらんと欲すれば秦の強きを畏れ、與へんと欲すれば欺かれんことを恐る。藺相如、璧を奉じて往かんと願ふ。「城入らずんば、則ち臣請ふ璧を完うして歸らん」と。既に至る。秦王、城を償ふに意無し。相如乃ち紿いて璧を取り、怒髪、冠を指し、柱下に卻立して曰く、「臣が頭は璧と倶に碎けん」と。從者をして璧を懷いて、間行して先づ歸らしめ、身は命を秦に待つ。秦の昭王、賢として之を歸す。

【通釋】肅侯の子の武靈王は(輕快にして便利な)胡の服を着て(武藝を練習し)、馬に乘り弓を射ることの巧みな者を招き集めて、北方蠻族の地を攻め取り、中山國を滅ぼし、又南の方の秦を攻めようとしたが、それは成功しなかつた。次は子の惠文王に傳へた。惠文王は、嘗て楚の卞和の璧といふ美玉を手に入れて(重寶としてゐた)。秦の昭王は(それが欲しくて堪らず)、十五ケ所の城と交換したいと

申込んで來た。(趙は固より與へたくはないが)、與へまいとすれば、秦の強兵の寇するのが恐ろしく、與へようとすると欺されて(城は貰へず璧は取られてしまひさうな)心配があつた。そこで藺相如といふ者が、璧を持つて秦へ往かうと願ひ出た。そして曰ふには「萬一、秦の十五城が貰へない時は、この璧を無事に持ち歸りませう」と。(そこで相如を秦へ遣ることになつた)。相如は秦に着いた。(さうして璧を献上した)。けれども秦の昭王には、城を代りに與へる意志が見えなかつた。相如はそこで(その璧には瑕があります、どれお示し申しませう)と、僞つて璧を取り戻すや、態度一變、髮は逆立つて冠を衝くかとばかり、(怒れる形相ものすごく)ジリジリと後退りして、柱を楯にとつて突つ立つた「(是非とも此の璧を取らうと仰せあるならば)、拙者の頭は璧と共に、(この場で柱にたゝきつけて)打ち砕いてしまひますぞ」とどなつた。(相如が今にも璧をぶツつけさうな勢ひを見て、秦王は大いに驚き、已むを得ず地圖を出して十五城を與へる約束をした。しかし相如は直ぐには璧を與へず、「五日間、齋戒沐浴をなさい、その上で璧を献上いたさう」と言つて一旦宿へ引き取つた。が、どうしても秦王の當にならぬことを見抜いたので)、供の者に璧を持たせて、拔道からこつそりと先へ歸らせ、自身は(秦に留まつて、秦王を欺いた罪の)沙汰を待つてゐた。けれども秦王は(璧を手に入れることが

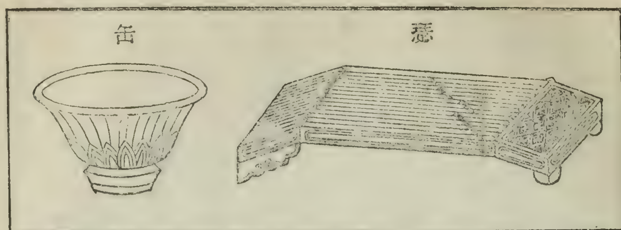
出來ぬ以上は相如を殺したとて仕樣がないと思つたので）、相如は賢人だから（許してやれと、その罪を尤めずに）、趙へ歸らせた。

【語釋】胡服（胡は北方の蠻族。その服は簡易で騎射に便利であるから、それに倣つたのである。）○中山（國名。今の直隷正定府から保定府に至る地方にあつた國。）○楚和氏璧（和氏は卞和（ベンク）といふ人。璧は環狀の玉。昔楚の卞和といふ者、璞（アラタマ。まだ磨かぬ玉）を荊山に得て、楚の厲王に獻じた。王は之を玉人（タマを磨く人）に鑑定させた處、玉ではない石だと言つたので、王は怒つて和の左の足を斬らしめた。次に武王が立つと、和は再たびその璞を獻じた。玉人は又石だと言つた。王怒つて和の右足を斬つた。次に文王が立つた。和は璞を抱いて荊山に泣くこと三日三夜、涙盡きて繼ぐに血を以てした。王これを聞いて試みに玉人をして磨かしめたところ、果して立派な玉であつた。よつて之に和氏之璧と稱して珍重したといふ。「韓非子」卞和篇參照。なほ淮南子、新序等の書に見える。）○奉璧（奉は捧、ささげ持つこと。）○完璧（璧を完全に持ち返ること。この故事から凡て物を完全なまま返すことを完璧といふ。又別に、完全な璧卽ち無瑕の璧といふ意味で、物の完全無缺なことを完璧といふこともある。）○紿（音タイ。アザムクと訓ず。欺瞞する意）○怒髮指冠（忿怒の餘り髮が逆立つて冠をつくこと。激しく怒つた形容である。）○卻立（卻は却の本字。しりぞき立つこと。）○閒行（人目に立たぬやうにコツソリと行くこと）○身待命於秦（自身は秦の沙汰をまつてゐるといふ意。命は處分の命令をいふ。（命は處分の命令をいふ）。

秦王約趙王、會澠池。相如從。及飲酒、秦王請趙王鼓瑟。趙王鼓之。相如復請秦王擊缶爲秦聲。秦王不肯。相如曰、五步之內、臣得以頸血濺大王。左右欲刃之。相如叱之。皆靡。秦王爲一擊缶。秦終不能有加於趙。趙亦盛爲之備。秦不敢動。

【讀方】秦王、趙王に約し、澠池に會す。相如從ふ。酒を飮むに及び、秦王、趙王に瑟を鼓せんことを請ふ。趙王之を鼓す。相如復た秦王に缶を擊つて秦聲を爲さんことを請ふ。秦王肯んぜず。相如曰く「五歩の內、臣、頸血を以て大王に濺ぐを得ん」と。左右之を刃せんと欲す。相如之を叱す。皆靡く。秦王爲に一たび缶を擊つ。秦終に趙に加ふること有る能はず。趙も亦盛に之が備を爲す。秦敢て動かず。

【通釋】秦王は趙王と約束して澠池といふ所で會合した。(これは表面は誼みを結ぶ平和の會ではあるが、實は秦が趙王に恥辱を與へて威壓し、これを屈服せしめようとする示威運動に外ならぬ)。藺相如は趙王のお供をして往つた。さて酒宴に入ると、秦王は趙王に(座興として)瑟を彈いて下されと頼つた。(瑟は趙の遊女どもが好んで彈く琴。趙王に取つては堪へられぬ恥辱であるが、秦の威力が恐ろしさ、言はるゝまゝに)趙王は瑟を彈じた。(しかし此の儘おいては趙の屈辱である)。そこで相如は復た秦王に(お國名物の)缶を叩いて、秦の流行唄を謠うて下されと申し出た。(そんな恥かしいことは)秦王は勿論承知をしない。(と見るや相如は缶を持つて秦王の側へ詰めよつて)、さあ、大王と臣とは今僅かに五歩の間に過ぎませぬ。(もしお聽入れなきに於ては)、臣の頸の血を大王にふりかけるばかり



でござるぞ！」と叫んだ。お側の家來どもは驚いて相如を斬り殺さうといきり立つたが、相如の一喝に逢ふと震へ上つた後退りした。秦王は（已むを得ず）一度缶を撃つた。（これで趙の受けた侮辱は立派に雪がれた。かくて此の會議の終るまで）秦は終に趙を壓服することが出來なかつた。趙もまた盛に警戒したので、秦は手が出せなかつた。


澠池（澠は前章の川の名の時は音ジョウであるが、こゝは地名で音ベン又はメン。澠池は韓の地。今河南河洛道澠池縣の西北。）○瑟（音シツ。二十五絃の大琴、當時趙の都の邯鄲の遊女たちが彈いたものだといふ。）○缶（音フ。ホトギと訓ず。酒を入れる土器。野蠻な秦人は之を叩いて拍子を取りながら怪しげな唄を歌つたものである。秦王が之を打つて秦の俗歌を歌つたのは恥を被うる以上の皮肉だ。）○五步之内（五步は極めて近い距離の意。この近距離に於ては逃げようとしても逃がしはせぬ、生殺は我が手中にある、といふやうな意味を含めて見る。）○得下以二頸血一濺中大王上（我が頸を刎ねその血を大王にそゝぎかけることが出來るといふので、王を殺して我も死ぬ。直ちに王と刺し違へて死ぬ、といふ意味を婉曲に言つたのである。）○加二於秦一（加は淩ぐ義。淩辱するとか威嚇するとかいふ意義。趙に對して無禮をすること。）○趙亦盛爲二之備一（史記には「趙亦盛設レ兵以待レ秦」とある。これによれば備は兵備のことで、この會合中、兵備を整へて非常に備へたといふ意である。）○不敢動（おしきつて手出しをしなし得ないといふ意。）

趙王歸、以二相如一爲二上卿一。在二廉頗右一。頗曰、我爲二趙將一、有二攻城野戰之功一。相如素賤人。徒以二口舌一居二我上一。吾羞レ爲二之

下。我見相如必辱之。相如聞之、每朝常稱病、不欲與爭列。出望見、輒引車避匿。其舍人皆以爲恥。相如曰、夫以秦之威、相如廷叱之、辱其羣臣。相如雖駑、獨畏廉將軍哉。顧念强秦不敢加兵於趙者、徒以吾兩人在也。今兩虎共鬪、其勢不俱生。吾所以爲此者、先國家之急、而後私讎也。頗聞之、肉袒負荊、詣門謝罪、遂爲刎頸之交。


趙王歸り、相如を以て上卿と爲す。廉頗の右に在り。頗曰く「我趙の將と爲り、攻城野戰の功有り。相如は素賤人なり。徒口舌を以て、我が上に居る。吾れ之が下たるを羞づ。我相如を見ば、必ず之を辱めん」と。相如之を聞き、朝する每に常に病と稱し、與に列を爭ふを欲せず。出でて望み見れば、輒ち車を引いて避け匿る。其の舍人皆以て恥と爲す。相如曰く、「夫れ秦の威を以てすら、相如之を廷叱して、其の群臣を辱しむ。相如、駑なりと雖も、獨り廉將軍を畏れんや。顧念するに强秦の敢て兵を趙に加へざる者は、徒吾が兩人の在るを以て也。今兩虎共に鬪はば、其の勢俱に生きず。

吾の此を爲す所以の者は、國家の急を先にして、私讎を後にする也」と頗之を聞き、肉袒して荊を負ひ、門に詣りて罪を謝し、遂に刎頸の交を爲す。

通釋 趙の惠文王は(澠池から)歸ると、相如の(功勞を稱して)上席家老に引き上げた。その地位は故參の大將廉頗の上にあつた。廉頗曰く「俺は趙の將軍となつて、或は城を攻め、或は野に戰ひ、幾多の戰功があるのだ。相如は元來身分賤しき奴、たゞ口先が達者なばかりに、俺よりも上に乘り越えて來た。俺は彼奴の下位に立つことは不面目ぢや。もし相如に出會つたら、きつと辱しめて呉れよう」と。相如はその事を聞いて以來朝廷へ出る日には、いつも病氣だと言つて缺席し、廉頗と席次を爭ふことを好まず又外出した際、遠くに廉頗の來るのが見えると、その都度、車を引きかへして避けかくれてゐた。で相如の從者は(あまりに腑甲斐ないなされ方だと)恥かしく思つてゐた。(舍人の不平が甚だしいので)、相如はその譯を說明してやつた。曰く、「あの强暴な秦の威力にさへビクともせず、俺は澠池の會合の席上で怒鳴りつけて、秦の群臣を辱しめて來たものだ。俺は如何につまらぬ人間であつても、なにも廉將軍ぐらゐを畏れて居るものか。併しよく／＼考へて見ると、强國の秦が押してつて趙に兵を向けて來ないといふのは、たゞ廉將軍と俺との二人が居るからぢや。(二人を憚つて攻め

得ないのぢや)。然るに今、二匹の虎が噛み合つたならば、その結果は兩方ともが無事といふことは出來ぬ(きつとどちらかゞ斃れるに定つてをる)。(それと同じく、俺と廉將軍とが爭つたならば、必ずどつちか一人が斃れねばならぬ。一人でも斃れたならば、すぐさま秦がつけ込んで攻めて來るに違ひない)。だから俺がかういふ風にして(廉將軍を避けて居る)といふわけは、國家の危急を救ふことを第一として、個人の怨みなんぞは後まはしにして居るからぢや」と。廉頗はこの事を傳へ聞いて(痛く己が淺慮を恥ぢ、當時の謝罪の作法に從つて)、肌ぬぎになつた上に荊の鞭を背負つて、相如の家を訪ひ、(これで存分に鞭うつて呉れと)、罪を詫びた。(斯くて双方の眞意が分つたので二人はすつかり理解し合つて)、死生を誓ふ親交を結ぶやうになつた。

語釋　在レ右(右は上の義。漢土では古は多く右を上とした「其右に出づる者なし」といへば、其上に出るものがないといふ意であり、榮轉の反對を左遷といふなどもその意味である。尤も必ずしも右を上とは限らず、左を上とすることもあつたが。)　○舍人(近侍の家來。左右の近臣。)　○廷叱(群臣の居並ぶ朝廷の上で叱りつけること。こゝは澠池の會が君臣ともに揃うて居つたから、之を廷と言つたのである。)　○駑(鈍い最下等の馬。轉じて人の愚鈍なことをいふ。)　○兩虎共闘其勢不二俱生一(兩虎は兩雄に譬ふ。其勢とは其の自然のなりゆき、自然の結果などいふ意。不俱生とは、双方揃つて生きてゐるといふことは出來ぬ、少くとも一方は死なねばならぬといふ意。)　○肉袒負レ荊(袒はハダヌグと訓ず、肌をぬいで肉體をあらはす、故に肉袒といふ。荊はイバラと訓ず。こゝはイバラで作つた鞭。負荊とは、その鞭を背に負うてこれで打つてくれと罪を請ふ意。共に謝罪の意を表はす當時の作法である。)　○刎頸之交(その人の爲めには自分の頸を刎ねても惜しくないといふ親しい交り。死生を共にする程の堅い交りをいふ。)

膠柱鼓瑟

坑四十萬

惠文王子孝成王立。秦伐韓。韓上黨降於趙。秦攻趙。廉頗軍長平、堅壁不出。秦人行千金爲反間曰、秦獨畏馬服君趙奢之子括爲將耳。王使括代頗。相如曰、王以名使括。若膠柱鼓瑟耳。括徒能讀其父書、不知合變也。王不聽。括少學兵法、以天下莫能當。與父奢言。不能難。然不以爲然。括母問故。奢曰、兵死地也。而括易言之。趙若將括、必破趙軍。及括將行、其母上書言、括不可使。括至軍。果爲秦將白起所射殺。卒四十萬皆降。坑於長平。

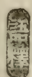
訓讀　惠文王の子孝成王立つ。秦、韓を伐つ。韓の上黨、趙に降る。秦、趙を攻む。廉頗、長平に軍し、壁を堅うして出でず、秦人千金を行つて反間を爲して曰く、「秦獨り馬服君趙奢の子括の將と爲るを畏るゝ耳」と。王、括をして頗に代らしむ。相如曰く、「王、名を以て括を使ふ。柱に膠して瑟を鼓するが若き耳。括、徒らに其の父の書を讀んで、變に合ふを知らざる也」と。王聽かず。括少うして兵法を學び、以へらく、「天下能く當るもの莫し」と。父の奢と言ふ。難ずること能はず。然れども以

て然りと爲さず、括の母、故を問ふ。奢曰く「兵は死地也。而して括、易く之を言ふ。趙若し括を將とせば必ず趙の軍を破らん」と。括の將に行かんとするに及び、其の母、上書して言ふ「括、使ふ可からず」と。括、軍に至る。果して秦の將白起の射殺する所と爲る。卒四十萬、皆降り、長平に坑にせらる。



通釋 趙の惠文王の子の孝成王が位に即いた。時に秦が韓を伐ちに來た。韓の上黨郡は（秦に降ることを屑しとせず）、趙に附いて（その助を請うた）。そこで秦は趙を攻めて來た。趙の大將廉頗は長平といふ所に陣し、城壁を堅固にして（立てこもり）、出でて戰はない。（さうして軍を疲らせる計略を取った。これには秦も業を煮やし）、澤山の金を趙の間者にふりまいて、趙の軍に宣傳させて曰ふには「秦は、たゞ馬服君趙奢の子の括が、趙の大將となることを畏れてゐるばかりだ」と。（實は廉頗では手が出ないので、趙括と交代させようとの計略である）。趙王は（この計略に乘せられて）廉頗を罷めさせて趙括を代りに遣った。このとき藺相如が（趙王を諫めて）曰つた「我が君には、たゞ評判だけで

趙括を任用なさいましたが、彼の兵法は恰も柱を膠づけして瑟を彈くやうなものでございます。彼は無暗と父の兵書を讀んで(學問はありますが、實戰に當つては)臨氣應變の活用の才がありません。(長平軍の大將には適しますまい)」と。しかし王は聽き入れなかつた。括は少年の頃から兵法を學び、「天下に已れに敵するものは無い」と自惚れてゐた。父の奢と議論しても、奢は一歩も突きこむことが出來なかつた。(では括の兵法に感服したかといふに、さうではない。理窟には敵はぬが)贊成はしなかつた。括の母が、そのわけを尋ねると、奢は斯う答へた。「戰といふものは、死生を決する重大な場合である。それにも拘らず、括は事もなげに輕々しく兵法を論じてゐる。趙が若し括を大將に任じたならば、彼はきつと我が趙の軍を破滅に陷らすであらう。(案ぜられたものだ)」と。處が今度、その括が長平軍の大將となつて行かうとするので、括の母は書を趙王に奉つて、「括は大將にしてはいけませぬ」と言上した。(けれども王は取り上げなかつた)括は長平軍に赴任した。果して秦の大將白起のために射殺され、四十萬の趙兵は皆秦に降參したが、長生に於て生埋めにされた。


上黨(韓の郡名。今山西冀寧道の南部の地。) ○長平(趙の地名。今山西冀寧道高平縣の西北。) ○行千金(千金を散ずること。千金は、漢代には金一斤を以て一金とした。その一斤は我が六十匁程に當るから、千金といへば六十貫になり、大した金高である。それほど當時は黃金が多かつたのだといふ。とにかく大金といふ意に解してよい。卽ち大金をふりまくこと。) ○馬服君趙奢(馬服君は惠文王から賜つた封號、趙は姓、奢は名。趙の名將である。) ○膠

堅白同異

毛遂自薦

レ柱鼓レ瑟（柱はこゝではコトヂと訓じ、琴の絃を支へるコマのこと。之を適宜に動かして音の高低を整へるのである。然るにそれを膠づけにして琴をひいたのでは、いつも同じ音しか出ないことになる。故に變通活用の才のないことを云ふ。）〇只、只言に同じくオモヘラクと訓む。）〇不レ能レ難（難は、難をうつこと、非難する意。）〇死地（死ぬべき場所。死ぬか生きるかといふ危い場合。「孫子」計篇に「兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不レ可レ不レ察也」とある。）〇僞（詐に將白起所ニ射殺ニ（必ずしも白起の放つた矢に中つて死んだといふ譯ではない。白起の軍の爲にやられたといふ意味である。）〇坑（阬とも書く。古來「アナにす」と訓じ、生き埋めにすると解して居るが、わざわざ穴を掘つて入れたものではない、詐謀を以て殺多の兵を一時に谷間などへ落し入れたものらしい。）

趙相平原君公子勝、食客常數千人。客有公孫龍者。爲堅白同異之辯。秦攻趙邯鄲。平原君求救於楚。擇門下文武備具者二十人、與之倶。得十九人。毛遂自薦平原君。平原君曰、士處世、若錐處囊中。其末立見。今先生處門下三年、未有聞。遂曰、使遂得處囊中、乃穎脫而出。非特末見而已。平原君乃以備數。十九人目笑之。



趙の相、平原君公子勝、食客常に數千人あり。客に公孫龍といふ者有り。堅白同異の辯を爲す。秦、趙の邯鄲を攻む。平原君、救を楚に求む。門下の文武備具する者二十人を擇び、之と倶にせ

んとす。十九人を得たり。毛遂自ら薦む。平原君曰く、「士の世に處るは、錐の嚢中に處るが若し。其の末立どころに見はる。今先生、門下に處ること三年、未だ聞ゆること有らず」と。遂曰く、「遂をして嚢中に處るを得しめば、乃ち穎脱して出でん。特に末の見はるゝ已に非ず」と。平原君乃ち以て數に備ふ。十九人之を目笑す。

通解 趙の大臣である平原君公子勝は常に數千人の食客を置いて居た。その中に公孫龍といふ者がゐたが、この者は堅白同異の辯と云つて一種の理論法に巧みなのであつた。

（話は前へ戻る——趙括の軍が長平で敗れると）、秦は進んで趙の都の邯鄲を攻め圍んだ。趙の宰相平原君は援兵を楚に求めようとした。（この人は平生食客を養ふことが好きで、その數、數千人に及んだといふ）。そこで食客中の文も武も兼ね備はつた人物二十人を擇んで倶につれてゆかうと思つた。かくて十九人だけは擇び出したが、（どうしても一人足りない）。すると食客中の毛遂といふものが、私が適任でございますと申し出た。平原君曰く、「すぐれた人物が世に居るのは、恰も錐が嚢の中にあるやうなもので、穂先が忽ち外へ突き出す——何か光つて見える筈です。（ズバぬけた處が露はれる筈であります）。然るに先生は私の家に三年も居られますが、まだこれと云つて目立つたことを聞いたことが

兩言而決

ありませぬが……」と。(毛遂の自薦運動を怪しんだ)。毛遂は(そりやア錐を――拙者を――囊の中にお入れなさらぬからぢや)若し囊の中へお入れにさへなるならば、穂は全部スツポリと突き出てしまひます。そんな、先だけ一寸出る位のことではござりませぬ」と豪語した。(これまで人に知られぬのは、畢竟、自分の力を現はすべき機會を與へられぬからだ、といふのである)平原君も、それではといふので、ともかくも人數に加へた。他の十九人は(毛遂の圖々しさに)目と目を見合して冷笑した。

　平原君公子勝(子は諸侯の子をいふ。こゝは武靈王の子。名は勝。平原に封ぜられて平原君といふ。平原は山東省の地名。かの孟嘗君等と共に食客を好んだ戰國四公子の一人である。)　○堅白同異之辯(こゝに堅い白い石がある。是は堅いといふ性質と白いといふ性質と石といふ物質と此の三つの概念を持つたものであるが、公孫龍は此の三つの屬性を持つのではない、二つであるといふ。即ち手で觸れて見れば堅石であつて、白石たることは分らぬ。目で視れば白石であつて堅石たることは分らぬ。これ即ち堅石と白石であつて、合して堅白石といふ一つの物とすることは出來ぬといふのである。是は一種の詭辯法であつて、かのギリシアのソフィストに類するものである。同異とは、同じき者を異ならしめ、異る者を同じからしむることで、鷺を烏とし、烏を鷺と言ひくるめる詭辯をいふ。)　○邯鄲(趙の都、今の直隸大名道邯鄲縣。)　○門下(その家に寄寓する者、即ち食客のこと。今日の所謂門下生の意と異る。)　○自薦(自己推薦をすること。)　○穎脫(穎は俗に穎と書く、もと稲のノギ(芒)、こゝは錐の穂をいふ。脫は突き出ること。二字で錐の穂が全部すつぽり外へ出るをいふ。一說に、穎は、錐の柄である、即ち穂が突き出るばかりでなく、柄ぐるみ飛び出すことだといふ。)　○目笑(聲を出さず目と目とを見合せて冷笑すること。)

至ㇾ楚、定ㇾ從。不ㇾ決。毛遂按ㇾ劍歷ㇾ階升曰、從之利害、兩言而決耳。今日出而言、日中不ㇾ決、何也。楚王怒叱曰、胡不ㇾ下。吾與ニ而君一言。汝何爲者。毛遂按ㇾ劍而

王命懸ニ
於遂手一

前曰、王所以叱遂者、以楚國之衆也。今十歩之內、不得恃楚國之衆也。王之命懸於遂手。以楚之强、天下莫能當。白起小豎子耳。一戰而擧鄢・郢、再戰而燒夷陵、三戰而辱王之先人。此百世之怨、趙之所羞。合從爲楚、非爲趙也。

訓讀 楚に至りて從を定む。決せず。毛遂、劍を按じ歷階して升つて曰く、「從の利害は、兩言にして決せん耳。今、日出でて言ひ、日、中して決せざるは何ぞや」と。楚王怒り叱して曰く、「胡(何)ぞ下らざる。吾、而(汝)の君と言ふ。汝、何爲る者ぞ」と。毛遂、劍を按じて前んで曰く、「王の遂を叱する所以は、楚國の衆を以て也。今十歩の內、楚國の衆を恃むを得ざる也。王の命は遂の手に懸れり。楚の强を以てせば、天下能く當る莫し。白起は小豎子耳。一戰して鄢・郢を擧げ、再戰して夷陵を燒き、三戰して王の先人を辱しむ。此れ百世の怨、趙の羞づる所なり。合從は楚の爲にして、趙の爲に非ざる也」と。

通釋 愈々平原君の一行は、楚に着いて聯盟を結ぶことになつたが、(その席上、楚王――考烈王―

一寸躊躇して）なかなか決定しない。毛遂は（それと見ると遽かに）刀の柄に手をかけたまゝ、トントンと階段を一段ごとに駈け上つた。曰く、「聯盟のよしあしはたゞ二言で決する筈でござる。然るに早朝からかゝつて、眞日中になつても、まだ愚圖々々して居るとは、何としたことでござるぞ」と。楚王は怒つた。「下れ、なぜ下らぬか。余は汝の主人と相談して居るのぢや。（汝ごときに用はない）。一體、汝は何者だ」と叱りつけた。毛遂は愈々刀の柄を握りしめて王の前ににじり寄つた。曰く、「大王が拙者をお叱りなさるのは、貴國の兵の多數を恃んでござらうが、併し十歩に過ぎぬ間近にあつて、楚國の大軍が何の役に立ち申さう。大王の生命は拙者の手の中にある。（生かすも殺すも此方の勝手次第だ）」――抑々貴國の強兵を以てすれば、天下いづれの國と雖も刃向ひ得るものはない筈であります。（ところが事實は如何でございませう）。秦の白起は取るにも足らぬ青二才でありながら、貴國に攻め入るや）、最初の戰ひに於て鄢・郢の兩地を陷れ、二度目には夷陵を燒き、三度目には亡き御父君を辱しめたではありませぬか。これ楚國百代の後までの怨み、我が國（趙）だつたら迚も面目なくて、（默つては居れませぬ、必ず仇を報いますう）。さすれば今、楚・趙兩國が聯盟して秦に當るといふことは、楚の爲であつて、趙の爲ではありませぬ（この道理が分りませぬか）」と辯じ立てた。

公等碌々

使重於九鼎大呂

語釋 從（合從のこと。二二九頁。） ○按劍（按はサスルと訓じ、刀を拔かうとして柄に手をかけること。） ○歷階（階段を上るのに、一段毎に兩足を揃へるのが禮であるのを、急いで足を揃へずに一足一段にトン〱と駈け上つてゆくこと。） ○兩言而決耳（利か害かの二言で定まるといふ意。一說に兩言は下文の「合從爲楚非爲趙也」を指すので、「楚の爲めか、趙の爲めか」の二言であるともいふ。） ○豎子（二〇七頁に出づ。） ○擧（攻めおとすこと。拔く。） ○鄢（音エン。楚の地名。今の湖北襄陽道宜城縣。） ○郢（音エイ。楚の都。今湖北荊南道江陵縣。） ○夷陵（楚の先王の陵名。今湖北荊南道宜昌縣にある。） ○辱王之先人（先人は亡父のこと。考烈王の亡父頃襄王が、白起の爲に郢を落されて陳に出奔したことを指す。一說に先人を汎く祖先の意に解して、楚の陵廟を燒き毀つて祖先を辱しめたことを指すともいふ。）

王曰、唯唯、誠如先生之言。謹奉社稷以從。遂曰、取雞狗馬之血來。捧銅盤、跪進曰、王當歃血而定從。次者吾君。次者遂。左手持盤血、右手招十九人、歃血於堂下曰、公等碌碌。所謂因人成事者也。平原君定從歸、曰、毛先生一至楚、使趙重於九鼎大呂。以遂爲上客。楚將春甲君救趙。會魏信陵君亦來救趙。大破秦軍邯鄲下。

訓讀 王曰く、「唯唯、誠に先生の言の如し。謹んで社稷を奉じて以て從はん」と。遂曰く、「雞狗馬の血を取り來れ」と。銅盤を捧げ跪き進んで曰く、「王當に血を歃つて從を定むべし。次は吾が君。

次は遂」と。左手に盤を持ち、右手に十九人を招き、血を堂下に歃らしめて曰く、「公等碌碌たり。所謂人に因つて事を成す者也」と。平原君從を定めて歸り、曰く、「毛先生一たび楚に至り、趙をして九鼎大呂よりも重からしむ」と。遂を以て上客と爲す。楚、春申君を將として趙を救ふ。會々魏の信陵君も亦來りて趙を救ふ。大いに秦の軍を邯鄲の下に破る。

【通解】 楚王は（氣を呑まれてしまつて）、「はい〱、本當に先生の仰せの通りぢや。謹んで楚の一國を擧げて（唯だ先生の命のまゝに）從ひまする」と。（とう〱冑をぬいでしまつた）。そこで毛遂は「雞狗馬の血を用意なされい」と命ずると、（早速、楚の家來がそれを運んで來た）。毛遂は血を盛つた銅製の鉢を捧げ持ち、跪いて楚王の前に進み「大王、先づ血をすゝつて合從の盟を遊ばされよ。次は我が君、次は毛遂仕るでござらう」と曰つて、（鉢をさしつけた。さうして三人が式の如くなし終ると、毛遂は）左の手に鉢を持ち、右の手で例の十九人を招いて、座敷の下で血をすゝらせ、さて曰ふやうには、「君等は本當に役に立たない人間どもだナア。人の尻にくつ附いて仕事をするといふのは、君等のことだよ」と、（さきに目笑された怨みに報いた）。かくて平原君は聯盟を取りきめて歸つたが、「毛先生一たび楚に赴かれて、我が國をば九鼎大呂よりも重く貴いものにして下された、（誠に感謝の至り

である)」と曰つて、毛遂を食客中の第一位においた。(間もなく約束どほり)楚は春申君を大將にして趙を救ひに來た。同時に魏の信陵君も亦趙を救ひにやつて來、邯鄲城の下で大いに秦の軍を打ち破つた。



盤

語釋 唯々(二二九頁に出づ。) ○社稷(社は土地の神、稷は五穀の神。國は必ず社稷を祀る。故に國家又は朝廷の意に用ひる。) ○雞狗馬之血(昔支那で盟をする時には、その儀式として天子は牛馬、諸侯は犬豚、大夫以下は雞の血を口のまはりに塗つたものである。之を「血をすゝる」といふ。今、雞狗馬の血を揃へたのは、之をくるめて言つたのである。一説に、この三物の血を雜へて用ひるのは當時の風俗であつて、必ずしも天子・諸侯・大夫と分つべきではないといふ。) ○銅盤(盤は鉢又は皿のこと。) ○歃レ血(歃は音サフでス、ルと訓ず。但しこゝは吸ひこむことではない、犧牲の血を口の周圍に塗ることである。) ○碌々(小石のゴロゴロした形容から、人の平凡で役に立たぬことをいふ。一説に、隨從の貌で人の後に附く形容であるともいふ。) ○九鼎大呂(九鼎は夏の禹王が洪水を治めて九州を開き、各州から金を獻ぜしめて作つた鼎。夏・殷・周三代相傳へて傳國の寶としたことは前に見えた。大呂は周の祖廟の大鐘で、その音が大呂の調に合するところから斯く名づけたといふ。共に國家の寶器である。それ故に重々しいものゝ譬へに引いて、趙を九鼎大呂よりも天下の重んずる所とならしたと云つたのである。) ○春申君(楚の黃歇といふ人、食客三千人を養うたといはれてゐる。) ○信陵君(これも食客三千人といふ人、次の段に出て來る。)

廉頗示レ可レ用

孝成王子悼襄王立。思下復用二廉頗一爲上レ將。時頗奔在レ魏。使三人視二頗。頗之仇郭開、與二使者金一、令レ毀レ之。頗見二使者一。一飯斗米肉十斤、被レ甲上レ馬、以示レ可レ用。使

三遺矢矣

者還曰、廉將軍尚善飯。然與臣坐頃之三遺矢矣。王以爲老、遂不召。楚人迎頗於魏。頗爲楚將無功矣。曰、我思用趙人。尋卒。

【訓讀】孝成王の子悼襄王立つ。復廉頗を用ひて將と爲さんと思ふ。時に頗、奔つて魏に在り、人をして頗を視しむ。頗の仇、郭開、使者に金を與へて之を毀らしむ。頗、使者を見る。一飯に斗米、肉十斤、甲を被り馬に上り、以て用ふ可きを示す。使者還つて曰く「廉將軍、尚ほ善く飯す。然れども臣と坐すること之を頃にして、三たび遺矢す」と。王以て老いたりと爲し、遂に召さず。楚人、頗を魏に迎ふ。頗、楚の將と爲り功無し。曰く「我れ趙人を用ひんことを思ふ」と。尋いで卒す。

【通釋】趙の孝成王の子の悼襄王が立つた。(屢々秦の兵に困しめられるので)、復び廉頗を任用して大將としたいと思つた。當時、廉頗は趙を亡げて魏に行つて居つた。そこで王は使者を遣はして、廉頗が(まだ役に立つかどうか)その樣子を視察せしめることにした。ところで廉頗と仲のわるい郭開といふものが、右の使者に金を與へて、廉頗に不利な報告をしてくれと頼んだもんだ。廉頗は(そんな事とは知らず)使者を迎へると、一食に一斗の飯を食ひ十斤の肉を平げて(その頑健さを示し)鎧

李牧破匈奴

を着て馬に乘り、(年は老つても此の通り)まだ〳〵戰の役に立つぞといふことを示した。それを見た使者は還つて趙王に報告するとて「廉將軍はまだなか〳〵健啖で、(いかにも强さうに見えます)けれども私と對談して居る僅かの間に、三度も便所へ立ちました。(年のせいは爭へないものと見えます)」と言つた。(便所のことは全く使者の附たりで、郭開の賄賂の効能である)。趙王は、(使者の言葉を信じて)、廉頗は老衰してゐると思ひ、遂に召し還さなかつた。その後、楚人が廉頗を魏から迎へ、頗は楚の大將となつたが、これといふ功を立てることも出來なかつた。さうして「俺は(やつぱり平生てしほにかけて訓練した)趙の兵隊を率ゐて戰がしたいのだ。(楚の兵隊では仕樣がない)」と愚痴をこぼした。彼はそれから間もなく死んだ。

〔語釋〕斗米(當時の一升は今の我が國の一合强に當るから、斗米は一升飯といふ意である。) ○肉十斤(この一斤は今の我が國の二十三匁に當るといふ說。すれば十斤は二百三十匁である。) ○遺矢(矢は屎に通じて大便をいふ。遺矢は大小便をもらすこと。ここは度々便所へたつたといふ意。便の近いのは老衰を意味する。)

趙得李牧爲將。先居北邊、破匈奴。悼襄王子幽繆王遷立。秦王政遣兵攻趙。牧爲大將敗之。秦縱反間、言牧將反。遷誅之。秦兵至虜遷。趙之七大夫

立趙嘉爲王。王于代。秦進攻破嘉、遂滅趙爲郡。

【訓讀】趙、李牧を得て將と爲す。先に北邊に居て、匈奴を破る。悼襄王の子、幽繆王遷立つ。秦王政、兵を遣して趙を攻む。牧、大將と爲つて之を破る。秦、反間を縱つて、牧將に反せんとすと言ふ。遷之を誅す。秦兵至つて遷を虜にす。趙の七大夫、趙嘉を立てゝ王と爲す。代に王たり。秦進み攻めて嘉を破り、遂に趙を滅して郡と爲す。

【通釋】その後、趙では李牧を大將に任じた。李牧は前に北方の國境地方にゐて匈奴を破つた勇將である。悼襄王の後にその子の幽繆王（名は）遷が立つたが、秦王政は兵を遣はして趙を攻めて來た。李牧は趙軍の總大將となつて之を破つた。秦は（李牧を除く爲に）間者を出して、「李牧は謀叛しようとしてゐる」と宣傳させた。趙王遷は（それを信じて）李牧を殺した。そこへ秦の軍がやつて來て遷を虜にした。趙の重立つた七人の大夫は趙嘉（悼襄王の子）を立てゝ王とした。趙嘉は代に都してゐたが、秦は更に進み攻めて趙嘉を破り、とう／＼趙を滅ぼして、秦の一郡としてしまつた。（世を傳ふること十一、王と稱すること六、秦の始皇二十五年に及ぶ。西紀前二二八年である）。

語釋　七大夫（史記には七を亡に作る。）

魏之先、本與周同姓、文王子畢公高之後也。國絶。有苗裔、曰畢萬。事晉邑于魏。數世有絳。絳後四世曰桓子者、與韓・趙共滅知氏而分之。桓子之孫曰文侯斯者、以周威烈王命爲侯。以卜子夏・田子方爲師。過段干木之閭必式。四方賢士多歸之。

訓讀　魏の先は、本、周と同姓にして、文王の子畢公高の後なり。國絶ゆ。苗裔有り、畢萬と曰ふ。晉に事へて魏に邑す。數世にして絳有り。絳の後四世にして桓子と曰ふ者、韓・趙と共に知氏を滅して之を分つ。桓子の孫、文侯斯と曰ふ者、周の威烈王の命を以て侯と爲る。卜子夏・田子方を以て師と爲す。段干木の閭を過ぐれば必ず式す。四方の賢士多く之に歸す。

通釋　魏の先祖は、もと周と同姓（姬姓）で、文王の子の畢公高の子孫である。其の國は暫く絶えて居たが、子孫に畢萬といふ者が出て、晉の家來になつて、魏といふ地に封ぜられてそこに住んでゐた。

それから數代たつて絳といふ者があり、絳の後四代目に桓子といふ者が出で、韓・趙（當時魏と共に晉に事へてゐた家老である）と力を協せて知氏（やはり晉の家老で勢力を振つてゐた）を滅し、その領地を分割した。桓子の孫に文公（名は）斯といふ者が出で、周の威烈王の命によつて始めて諸侯となつた。卜子夏・田子方などいふ賢人を師として道を學んだ人で、段干木といふ隱君子が住む村の門の前を通る時なぞは、きつと車の横木に頭をつけて敬禮したものだ。（さういふ風に身を卑うして賢人君子を敬したので）、諸國の賢人が澤山文公をたよつて來た。

語釋 魏（今の河南開封府の地。） ○卜子夏（孔子の門人、卜商、字は子夏。） ○田子方（文侯これを師とし、稱して仁人と云つた。） ○段干木（高尙にして仕へず。曾て文侯が過ひに行つたところ、段干木は垣を越えて逃げたといふことが孟子に見えてゐる。後に文侯の師となつた。） ○閭（村の入口の門。） ○式（ショクと讀み軾に同じく、車の前の横木である。昔は車中立乘したので、敬禮をする際には、俯して軾に憑つて頭を俛れるのであつた。）

貧賤者驕人

文侯之子擊、遇子方于道、下車伏謁。子方不爲禮。擊怒曰、富貴者驕人乎、貧賤者驕人乎。子方曰、亦貧賤者驕人耳。富貴者安敢驕人。國君而驕人、失其國。大夫而驕人、失其家。夫士貧賤者、言不用、行不合、則納履而去耳。安往而不得貧賤哉。擊謝之。

【訓讀】文侯の子擊、子方に道に遇ひ、車より下つて伏謁す。子方、禮を爲さず。擊怒つて曰く、「富貴なる者人に驕るか、貧賤なる者人に驕るか」と。子方曰く、「亦貧賤なる者人に驕る耳。富貴なる者安んぞ敢て人に驕らんや。國君にして人に驕らば、其の國を失ひ、大夫にして人に驕らば、其の家を失はん。夫れ士の貧賤なる者は、言用ひられず、行合はずんば、則ち履に納れて去らん耳。安くに往くとして貧賤を得ざらん哉」と。擊之を謝す。

【通釋】文侯の子の擊といふ人、或時道で田子方に出遇つた。(父の師であるから)車から降りて平伏して禮をしたが、子方は答禮もしない。擊は腹を立てゝ「富貴の者が人に高ぶるか、貧賤な者が人に高ぶるか」ときめつけた。(その意は、蓋し、我は大名の子といふ富貴の身分なれども、車を降つて禮をなしてゐるのに、お前は低い身分でゐながら　おごり高ぶつて答禮もしないとは、全くあべこべでないか、一體何と心得る、といふのであらう)。田子方は答へて言つた、「それは貧賤な者が人におごるのが當然でござる。富貴の者はどうして人に高ぶることが出來ませうぞ。なぜと申すに、一國の君ともある人が、やたらに威張り散らしたなら、(忽ち人望を失ひ、やがては)國を滅すことになりませう。(同じ道理で)大夫が人に高ぶれば家を滅ぼしてしまひます。たゞ、(それより以下の一般の)士といふ

國亂思良相

子夏・田子方・段干木

者は貧賤なものでござるが、これは己の言ふことが用ひられず、己の行ふことが氣に入らねば、何時でもさつさと去つてしまふまでのこと。(もと〳〵貧賤なもの)、どこへ往つたとて貧乏する積りなら暮らせぬことはありませぬからね」と。擊は(成程と覺つて)さきの失言を詫びた。

【語釋】○謁(拜伏して謁見すること。首を地につけて目見えすること。)○納履而去(履はハキモノ又てクツ。足をクツに入れて立ち去る義で、未練氣なくさつさと立ち去る意味。)○安往而不得貧賤哉(どこへ往つても、富貴になるのはむつかしいが、貧賤になるには仔細はない。貧賤で暮らす積りなら何處へ往つても困りはせぬといふ意。)

文侯謂李克曰、先生嘗教寡人。家貧思良妻、國亂思良相。今所相、非魏成則翟璜。二子何如。克曰、居視其所親、富視其所與、達視其所擧、窮視其所不爲、貧視其所不取。五者足以定之矣。卜子夏・田子方・段干木、成所擧也。乃相成。

【訓讀】文侯、李克に謂つて曰く、「先生嘗て寡人に教ふ。家貧しうしては良妻を思ひ、國亂れては良相を思ふと。今、相とせんとする所は、魏成に非ずんば則ち翟璜なり。二子は如何」と。克曰く、「居

ては其の親しむ所を視、富んでは其の與ふる所を視、達しては其の擧ぐる所を視、窮しては其の爲さざる所を視、貧しうしては其の取らざる所を視る。五つの者以て之を定むるに足る。卜子夏・田子方・段干木は成の擧げし所也」と。乃ち成を相とす。

【通釋】文侯、或るとき其の臣李克に告げて曰ふには、「先生は嘗て私に敎へて、家が貧乏になると（よく家政を取締つて身代を引きおこして吳れる）良い妻を欲しく思ふし、國が亂れた時には、（よく民を治めて國運を盛んにして吳れる）良い宰相を欲しく思ふものだ、と申されましたが、（誠にその通りで、今この亂世に當つて私は切に良い大臣を得たく存じますが）、その宰相とすべきものは、私の考では魏成か、さもなくば翟璜かと思ひますが、この二人の中どちらが宜しいでせうか」と。李克は之に對へて曰ふには、「（凡そ人物を鑑識するには五つの着眼點がござります）。その人がまだ仕へないで家にゐる時には、どんな人と親しくしてゐるか、といふ點を見るのであります。（その場合、善人と親しみ交はつてゐる人ならば、それは君子である）。金持になつた時には、如何なる事柄に金を出し、如何なる人に金を與へるかといふ點を見るのであります。（その與へる所、施す所が道にかなつてゐれば、其の人は君子であります）、立身して高位高官に上つた時には、其の人の擧げ用ひる人物のよしあしを

吳起吮疽

見ます。何か事に當つて困りきつた時には、(苦しまぎれに兎角道ならぬ事をしたがるものだが、)そんな場合にも、道に外れた事をしないか、どうか、といふ點に着眼します。貧乏な時は、(取るまじきものでも取るものだが)、そのやうな物を取らないか、どうかを見ます。この五ケ條、(其の中の一つを見れば)大臣たる人物を定めることが出來ます。(今、魏成子は、身分高くして朝廷に重用されて居るゝ、これ謂はゆる達なるものである)。而して卜子夏・田子方・段干木の三賢人は、實に魏成子が推薦して(君の師とした)人であります。(魏成子こそ宰相たるべき人物と存じます)」と。そこで魏成を宰相とした。

語釋 ○魏成(註に文侯の弟とある。) ○達(顯達、榮達の意。)

有衛人吳起者。初仕魯。魯欲使起擊齊。而起娶齊女。疑之。起殺妻以求將。大破齊師。或曰、起殘忍薄行人也。起恐得罪、歸魏。文侯以爲將、拔秦五城。起與士卒同衣食。卒有病疽。起吮之。卒母聞而哭曰、往年吳公吮其父。不

旋踵死敵。今又吮其子。妾不知其死所矣。

【訓讀】衞人吳起といふ者あり。初め魯に仕ふ。魯、起をして齊を撃たしめんと欲す。而して起、齊の女を娶る。之を疑ふ。起、妻を殺して以て將たらんことを求め、大いに齊の師を破る。或ひと曰く、「起は殘忍薄行の人なり」と。起、罪を得んことを恐れ、魏に歸す。文侯以て將と爲し、秦の五城を拔く。起、士卒と衣食を同じうす。卒に疽を病むもの有り。起之を吮ふ。卒の母聞いて哭して曰く、「往年、吳公、其の父を吮ふ。踵を旋さずして敵に死せり。今又其の子を吮ふ。妾、其の死所を知らず」と。

【通釋】衞の人に吳起といふのがあつた。初め魯の國に仕へてゐた。魯は吳起に命じて齊の國を伐たせようと思つた。然るに起は齊の婦人を娶つて妻としてゐたので、(魯人は、起が妻の關係から二心を懷きはしないか)と疑つた。そこで起は妻を殺して(二心のないことを明かにし)、それによつて魯の大將となり、大いに齊の軍を破つた。すると或人が起を譖つて、彼は酷くて愛情のない人間だ。(大將の地位を得んが爲めには、その最愛の妻まで殺すといふ奴だ。そんな人格の男では迚も國家の爲めに

はなるまい」と言つた。吳起はその爲めに罪せられようかと恐れて、（魯を逃げ出して）魏の文侯をたよつて行つた。文侯は之を大將として用ひ、秦と戰つてその五つの城を陷れた。吳起は（其の身將軍であるにも拘らず）、士卒と衣食を同じうして、（よく部下を勞はつた）。或時、兵卒のうちに疽といふ腫物に苦しんでゐる者があつた。すると起はその膿を吸ひ出してやつた。兵卒の母がその事を聞いて聲をあげて泣いて曰ふには、（先年、あの子の父――この婦人の夫――が（腫物に苦しんだ時にも）、吳公は膿を吸うて下されたが、父はその御恩に感じて直きに討死してしまうた。それに今又あの子の膿まで吸うて下されたといふからには、あの子もやつぱり御恩に感じて、何處かで討死するに違ひない、さて何處で死ぬことやら。」

語釋　殘忍薄行（その性の殘酷にして行ひに愛情のないこと。）　○疽（音ソ。腫物の惡性なるもの。）　○吮（スフと訓ず、口をつけて、膿や血を吸ひ出すこと。）　○不レ旋レ踵（踵はクビス、キビス。カガト。足を向けかへる程の僅かな時間もないといふ義で、「後久しからず直ちに」といふ意。一説に敵に、うしろを見せずの義、即ち一歩も引かずの意といふ。）　○妾不レ知二其死所一矣（わたしは其の子の死ぬ場所を知らぬといふので、その子は何處かで必ず戰死するであらうといふこと。一説に、この婦人自身の死所を知らずといふ意に取つて、たよりに思ふ夫も戰死し、子も戰死し自分は何處で死ぬのだか分らぬ、恐らく路頭に迷うて死ぬであらう、といふ意であると。）

文侯卒、子擊立ツ。是ヲ爲ス二武侯ト一。武侯浮ンデ二西河ニ一而下ル。中流ニシテ顧ミテ謂ヒテ二吳起ニ一曰ク、美ナル哉山河

在レ德不レ在レ險

惠王招レ賢

之固、魏國之寶也。起曰、在レ德不レ在レ險。昔三苗氏、左洞庭、右彭蠡、禹滅レ之。桀之居、左河・濟、右泰華、伊闕在其南、羊腸在其北、湯放レ之。紂之國、左孟門、右太行、恆山在其北、大河經其南、武侯殺レ之。若不レ修レ德、舟中人皆敵國也。武侯曰、善。武侯卒、子惠王䓨立。東敗於齊、將軍龐涓與太子申皆死。南敗於楚、西喪地於秦。乃卑レ辭厚レ幣、以招賢者。孟子至。而不レ用。子襄王立。孟子去之レ齊。

【訓讀】文侯卒し、子擊立つ。是を武侯と爲す。武侯、西河に浮んで下る。中流にして顧みて吳起に謂ひて曰く、「美なる哉、山河の固、魏國の寶也」と。起曰く、「德に在りて險に在らず。昔、三苗氏は、洞庭を左にし、彭蠡を右にせしが、禹之を滅せり。桀の居は、河・濟を左にし、泰華を右にし、伊闕其の南に在り、羊腸其の北に在りしが湯之を放てり。紂の國は、孟門を左にし、太行を右にし、恆山其の北に在り、太河其の南を經しが、武王之を殺せり。若し德を修めずんば、舟中の人皆敵國なり」と。

武侯曰く「善し」と。武侯卒す。子の惠王立つ。東のかた齊に敗られ、將軍龐涓、太子申と皆死す。南のかた楚に敗られ、西のかた地を秦に喪ふ。乃ち辭を卑うし幣を厚うして、以て賢者を招く。孟子至る。而も用ひず。子襄王立つ。孟子去つて齊に之く。

〔通釋〕文侯が亡くなつて、その子の擊といふのが立つた。これを武侯といふ。武侯一日、黄河に舟を浮べて下つたが、中流に至つて吳起を顧みて「なんと見事なことよ、この山この河、要害の堅固さ。これこそ我が魏國の寶だ。(これある以上我が國は萬代安全といふものぢや)」と言つた。吳起答へて曰ふには、「いえ〳〵、(國の安全といふのは)、君の德によることで、山河の險岨によることでは御座りませぬ。昔、三苗氏は、左に洞庭湖を控へ、右に彭蠡澤を備へて、(湖北・湖南・江西の要害を占めて居たが)、有德の禹王に滅ぼされてしまひ、桀王の都は、河水(黄河)濟水を左にし、華山を右にし、伊闕といふ險岨な塞が其の南にあり、羊腸といふ險しい坂が其の北にあつて、(山西陝西の要害を占めてゐたが、德を失つたが爲めに)、殷王成湯は之を放逐してしまつた。そのまた殷の國は(河南の要害に據り)左に孟門山あり、右に太行山あり、恒山はその北に聳え、太河(黄河)その南を流れたが、紂王、德を失つたが爲めに、周の武王は之を殺してしまつたではござらぬか。若し君が德を修められぬ時は、

張儀說連衡
我舌在否

この舟の中のものだとて皆敵國となりませうぞ」と。武侯は「誠に尤もぢや」と曰はれた。武侯卒して、子の惠王(名は)罃といふのが立つた。(この人の代には)東の方では齊と戰つて敗れ、將軍の龐涓、太子の申が戰死を遂げ、南の方は楚に破られ、西の方は秦に(七百里の)土地を奪はれるなど(さんぐ\な目に遇つた。そこで惠王は國勢を挽回してこの辱を雪ぐため)、言葉を卑うし贈物を手厚くして天下の賢者を招いた。時恰も孟子がやつて來たが、しかも惠王はこの大賢を用ひ得なかつた。次の襄王の代になつて、孟子は(魏を見限つて)齊に向つた。

語釋 西河(黃河のこと。その山西陝西の間を流れるとき之を西河といふ。) ○三苗氏(上古苗族の占據した一國。今の江西湖南湖北一帶の地。) ○洞庭(湖南の大湖。) ○彭蠡(彭蠡澤といふ、江西にあり、即ち鄱陽湖。) ○泰華(太華に同じ。華山のこと。陝西省にある。五嶽の一。) ○恒山(直隸にあり、五嶽の一。) ○惠王罃(孟子に梁の惠王とある人。魏の都を大梁と云つたから、魏の惠王のことを又梁の惠王とも云つたのである。) ○將軍龐涓與太子申皆死(既に齊の條に見えた。)

魏人有張儀者。與蘇秦同師。嘗遊楚爲楚相所辱。妻慍有語。儀曰、視吾舌。尚在否。蘇秦約從時、激儀使入秦。儀曰、蘇君之時、儀何敢言。蘇秦去趙而從解。儀專爲橫、連六國以事秦。秦惠王時、儀嘗以秦兵伐魏得一邑、復以

與魏。而欺魏割地以謝秦。歸爲秦相。已而出爲魏相。實爲秦也。襄王時、復歸相秦。已而復出相魏以卒。

語釋　魏人に張儀といふ者有り。蘇秦と師を同じうす。嘗て楚に遊び、楚の相の辱しむる所と爲る。妻慍つて語有り。儀曰く「吾が舌を視よ、尚ほ在りや否や」と。蘇秦、從を約する時、儀を激して秦に入らしむ。儀曰く「蘇君の時、儀何ぞ敢て言はん」と。蘇秦、趙を去つて從解く。儀專ら横を爲し、六國を連ねて以て秦に事へしむ。秦の惠王の時、儀嘗て秦の兵を以ゐて魏を伐ち、一邑を得、復た以て魏に與ふ。而して魏を欺き地を割いて以て秦に謝せしむ。歸つて秦の相と爲る。已にして出でて魏の相と爲る。實は秦の爲めにする也。襄王の時、復た歸つて秦に相たり。已にして復た出でて魏に相となり、以て卒す。

通釋　魏の人で張儀といふ者があつた。蘇秦と同じく鬼谷先生を師として學んだ。嘗て楚の國へ遊說に行つた時楚の宰相のために非常な侮辱を蒙つた（委細は後に說く）。すると細君が腹を立てゝ「あなたが詰らない本なんか讀んで、おしやべり商賣などをしなければ、こんな侮辱を受けなくてもよい

のです)」と小言を云つた。張儀は（赤い舌をぺろりと出して見せ）、「おい、俺の舌を見ろ、まだ在るか、どうだ。（舌さへあれば、この腹いせをするに譯はないんだ、愚圖々々いふなよ）」と曰つた。蘇秦は合從の同盟を結んだ時、（秦が合從の邪魔をすることを恐れたので、張儀に秦を牽制させようと思ひ、謀を以て）わざと張儀を怒らせて、秦に入つて（惠王に仕へさせ、一方、内々に張儀の秦に入る旅費なぞを支給してやつたので、張儀は蘇秦の恩に感じて）、「蘇秦君が從約の長である間は、（その妨げになるやうなことは）何も言ふまい」と曰つた。併し蘇秦は（犀首の計略にかゝつて）趙を去つたので、合從の同盟は解けてしまつた。そこで張儀は專ら連衡說を唱へて、六國を連合して秦に事へるやうにさせた。秦の惠王の時に、張儀は嘗て秦の兵を率ゐて秦の國を伐ち、一つの城下（蒲陽といふ土地）を取つたがまたそれを魏へ返してやつた。（又秦王に言うて公子繇を人質として魏へ入れさせた。かやうに秦から魏へ恩を被せさせておいて、さて之に對して魏も返禮をせねばならぬと云つて）魏を欺き、（魏の上郡の五縣の）地を割いてお禮として秦に與へさせた。さうして歸ると秦の宰相となつたが、とかくして又秦を出て魏の宰相となつた。併しそれは（魏のためにするのではなく）、實は秦の利益をはかる爲めの策略であつた。だから秦の襄王の時には、再び秦に歸つて宰相となつた。ところが

信陵君

蹈東海而死耳

又しばらくすると秦を出て魏に歸り、魏の宰相となつて死んだ。

語釋　爲楚相所辱（嘗て楚の宰相と共に酒を飲んでゐた處、宰相の璧が紛失したといふので、張儀が盜んだのだらうと疑ひ、むちうつこと數百に及んだといふのである。）　○有語（史記によると、「ア、子、書ヲ讀ミ遊說スルコトナクバ、安ンゾ此ノ辱ヲ得ンヤ」と言つたとある。）　○激儀使入秦（激は激怒で、わざと怒らせること。蘇秦は秦王が六國の合從を破ることを恐れたので、同學の張儀を秦へ遣つて策動させようと思ひ、張儀を招いておいて而も數日間も會はず、やつと會ふと傲慢な態度で儀を侮辱したものだ。果して儀は大いに怒り、この腹いせをすべく秦王に說いて合從を破らせようと決心して秦の國へ入つた。併し貧乏で旅費もなければ運動費もない、すると蘇秦はまた部下を遣はして、內々金銀幣物車馬などを持たせて、それと明かさずに張儀にみつがした。儀はそれによつて旅費や運動費を得て、首尾よく秦王に取り入り、客分の大臣となることが出來た。そこで蘇秦の部下は、自分の提供した金銀車馬一切はこれ皆蘇秦の好意に出づるものであることを打明けた。張儀は始めてそれと知り、初め怨んだ蘇秦の恩誼に感激して我れ今日の成功は全く蘇君のお蔭である、蘇君の天下である間は、斷じて合從の妨害するやうなことは言ふまいと誓つたといふのである。）　○横（衡とも書く。東西を横といふ。合從とは反對に六國を連ねて西のかた秦に事へしめようとする政策。連衡說。）

魏安釐王立、封公子無忌爲信陵君。無忌愛人下士。食客三千人。秦攻趙。魏王使晉鄙救之。秦昭王欲移兵先擊救者。王恐、止晉鄙兵、壁于鄴、又使新垣衍說趙、共尊秦爲帝。魯仲連往見衍曰、彼秦者棄禮義上首功之國也。卽肆然帝天下、則連有蹈東海而死耳。衍再拜曰、先生天下士也。吾不敢復言帝秦矣。

【訓讀】魏の安釐王立ち、公子無忌を封じて信陵君と爲す。無忌、人を愛し士に下る。食客三千人あり。秦、趙を攻む。魏王、晉鄙をして之を救はしむ。秦の昭王、兵を移して先づ救ふ者を撃たんと欲す。王恐れ、晉鄙の兵を止めて鄴に壁せしめ、又新垣衍をして趙に說き、共に秦を尊びて帝と爲さしむ。魯仲連往きて衍を見て曰く、「彼の秦は禮義を棄て首功を上ぶの國也。卽し肆然として天下に帝たらば、卽ち連は東海を踏んで死する有る耳」と。衍、再拜して曰く、「先生は天下の士也。吾敢へて復た秦を帝とすと言はじ」と。

【通釋】魏の安釐王、位に卽き、公子の無忌といふのに所領を與へて信陵君とした。無忌は廣く人民を愛し、また賢士にへりくだつて(これを禮遇した)。さうして食客を三千人も養うた。秦が趙の邯鄲を攻めたとき(前章)、魏王は晉鄙といふ將軍に命じて趙を救ひにやつた。そこで秦の昭王は、(趙を拔いたら其の足で)軍兵を魏へ向け換へて眞先に趙を救ふものを撃つてしまはうとした。それと知つた魏王は縮みあがつて、(趙を救ひにゆく)晉鄙の軍を途中で止めて、鄴といふ處の城に駐屯させ、一方新垣衍といふものを使者にして趙を說き伏せ、(この際、秦に敵するのは不利だから)、お互ひに秦をおだてゝ天子と崇めることにしようと勸めさせた。(さうして秦の鋒先を免れようとした)。この時魯仲連

無忌救趙

（それは齊の賢人で、ちやうど邯鄲に來て居つたが、新垣衍が主命を帶びて窃かに邯鄲に入つて來たことを知つたので）、衍を訪ねて行つて面會した。（もつとも衍は既に趙の平原君に會つては居つたが、まだ秦に降參することは決定してゐなかつた）。で魯仲連の曰ふには、「一體、かの秦といふ國は、禮儀道德を顧みず、たゞ首切りの手柄を第一とする無道極まる國である。若しこんな國がほしいまゝに天下の帝王となるやうなことがあつたら、拙者は海へ入つて死んでしまふまででござる。（不義無道の暴君を天子として戴くことは死んでも出來ない。この際、是非とも貴下の御一考を願ひたい）」と激勵した。衍は（魯仲連の言葉に感動して）、再拜、禮をなし、「先生は天下の賢人でございます。私はもう決して秦を天子とするなどとは申しませぬ」と答へた。

語釋　壁二於鄴一（鄴は郡名、今の河南河北道臨漳縣。壁は城壁にたてこもること。ここは屯する意。卽ちそこに駐屯して形勢を觀望したのである。）　○移兵（兵を向けかへること。史記の信陵君列傳に「諸侯敢テ救フ者ハ已ニ趙ヲ拔ケバ必ズ兵ヲ移シテ先ヅ之ヲ擊タントス」とある。趙を陷れたらその兵を魏へ振り向けて擊たうといふのである。）　○上二首功一（上は尙と通じてタフトブと訓ず。首功は敵の首を切る手柄。秦の法に敵の首一つを斬れば爵一級を進めるとある。）　○肆然（ほしいまゝにの意。）　○東海（魯仲連は齊（山東省）の人であり、齊は東の方に海があるから東海といつたのである。）

趙ノ平原君ノ夫人ハ、無忌ノ姉也。趙急ナリ。使者冠蓋相望ミ、責二ム救ヲ於無忌一ニ。無忌請二フ於王一ニ、

侯嬴献策

及使賓客游說萬端王不聽。客侯嬴敎無忌禱於王幸姬竊得晉鄙兵符、且薦力士朱亥與俱、謂晉鄙合符而疑、則擊殺而奪其軍。一如嬴言、得兵以進、大破秦兵、解邯鄲圍。而無忌不敢歸魏。

訓読 趙の平原君の夫人は、無忌の姉なり。趙、急なり。使者冠蓋相望み、救を無忌に責む。無忌、王に請ひ、及び賓客をして游說萬端せしむれども、王聽かず。客侯嬴、無忌をして王の幸姬に禱はしめて、晉鄙の兵符を竊み得、且つ力士朱亥を薦めて與に俱にせしめ、謂ふ、「晉鄙、符を合はせて疑はば、則ち擊殺して其の軍を奪へ」と。一に嬴の言の如くし、兵を得て以て進み、大いに秦の兵を破り、邯鄲の圍を解く。而して無忌は敢て魏に歸らず。

通釈 さて趙の平原君の夫人は、魏の無忌の姉に當るので、今趙が(秦に攻められて邯鄲城の守が)危險となるに及び、趙の使者は幾人も〳〵引切りなしに魏に向つて、援兵を無忌に催促した。そこで無忌は自ら王に願ひ、且つ食客連をして樣々の手段を講じて王を說き伏せさせようとしたが、王は(ひどく秦を怖れて)聽して吳れない。すると食客の中に侯嬴といふものが居て、無忌に敎へて、內々、

王のお氣に入りの女官に賴んで、晉鄙（に渡してある軍兵繰出し）の割符（の片割れ）を盜み出させ、それから力强い勇士の朱亥といふものを推薦して、これと一緒に（晉鄙の許に）往かせる事とし、さて曰ふには、「割符を示して、王の命令だから直ぐに趙を救ふ爲に急行せよと傳へなさい）萬一、晉鄙が割符を合せて見て疑ふやうな事があつたら、（この朱亥に命じて）擊ち殺させて、晉鄙の軍隊を奪ひ取り、（これを率ゐて趙へ往かれよ）」と。無忌はすべて侯嬴のいふ通りに實行し、（晉鄙を殺して）その兵を以て趙に進入し、大いに秦の兵を破つて、邯鄲城の包圍を解いた。さうして無忌は（王の怒を恐れ、そのまゝ趙に留つて）魏へは歸らなかつた。

語釋　冠蓋相望（冠蓋は車のおほひ、乘車の屋根、前車は後車の冠蓋を望み、後車は前車の冠蓋を望むといふので、行く車の打ちつゞいて絶えないこと。使者が後から〳〵と續いて引きも切らぬ形容。）　〇請（ここはコフと訓じ、請ふの意。）　〇兵符（符はワリフ。札に文字を記し、之を二分して一は委任者に渡し、一は手許に留めて、以て證據としたもの。兵符とは兵を徵發し又は出還せしめる命令の證とするワリフのこと。一は大將に渡し、一は王の所に留む。銅で虎の形に造つたものだといふ。今信陵君は私かに晉鄙に代らうとする、故に王の手許の符を盜み、晉鄙の符と合せて、その兵を奪はうとしたのである。）　〇一如二嬴言一（ここの一はモツパラといふ意。ひたすら。）

秦伐魏。魏患之、使人請無忌。不肯歸。客毛公・薛公見曰、魏急、而公子不恤。一旦秦克大梁、夷先王宗廟、公子何面目立於天下乎。無忌趣駕還。諸侯

毛公薛公

無忌還爲將

聞無忌爲魏將、皆遣救。無忌率五國兵、敗秦兵於河外、追至函谷關而還。無忌卒。十八年而魏王假立。後又二年、秦王政遣兵伐魏、殺王假、而滅魏爲郡。

訓讀 秦、魏を伐つ。魏之を患へ、人をして無忌に請はしむ。歸ることを肯ぜず。客の毛公・薛公見えて曰く、「魏、急にして、公子恤へず。一旦、秦、大梁に克ちて、先王の宗廟を夷げば、公子何の面目あつてか天下に立たん乎」と。無忌、駕を趣して還る。諸侯、無忌が魏の將と爲りしを聞き、皆救を遣す。無忌、五國の兵を率ゐて、秦の兵を河外に敗り、追うて函谷關に至つて還る。無忌卒す。十八年にして魏王假立つ。後又二年、秦王政、兵を遣して魏を伐ち、王假を殺し、而して魏を滅して郡と爲す。

通釋 後秦は兵を遣して魏を伐つた。魏は大いに恐れ、使を趙に遣して無忌を呼び戻さうとしたが、無忌は歸ると言はない。ここに無忌の食客毛公・薛公の二人、無忌に見えて、「（今あなたの故國の）魏は、危急に瀕してゐるのに、あなたは一向御心配なさらぬやうですが、一朝、秦の兵が都の大梁を陥

れて、御先祖累代のお靈屋を毀すやうなことになりましたら、あなたは、どのお顏して天下の人に對せられますか。（今は一刻の御猶豫もなく急ぎお歸りあつて國難をお救ひ下さい）」と進言した。無忌は（其の言に服して）直ちに車を急き立てゝ魏に歸つた。諸侯は（この信用ある）無忌が（魏の大將となつた聞き、皆援兵を遣したので、無忌は（魏及び救援の楚・燕・韓・趙）の五ヶ國の兵を率ゐて、秦の兵を黃河の南で破り、勝に乘じて秦の東境の函谷關まで追ひつめて還つた。無忌が卒して後十八年にして魏王假が位に卽いたが、それから又三年の後に、秦王政が兵を魏にさし向けて假を殺し、魏を滅して秦の一郡となした。（世を傳ふること九、王と稱するもの七。秦の始皇二十三年に亡ぶ。西紀前二二五年である。

語釋　不レ恤（恤は音ジユツ。恤兵・救恤など熟して、ウレフ又はアハレムと訓ず。こゝは魏を救ふことを指す。）　○大梁（魏の都。今の河南開封府の地。）　○宗廟（國王の先祖のおたまや。）　○夷（タヒラグと訓み、平ぐの義。敵が國を滅せば其の宗廟をこぼつて平地とするをいふ。故にこゝは毀つ、破壞するなどの意。）　○趣レ駕（趣はウナガスと訓み、促す義。急がせること。駕はもと車に馬をつける義。それより馬車のことにいふ。）　○河外（古は帝王の都が多くは黃河の東又は北にあつたので、黃河の北を河内といひ南を河外と云つた。）

韓之先ハ、本與レ周同姓ニシテ、武王ノ子韓侯之後也。國絕ユ。其ノ後裔事ヘテレ晉ニ爲ル二韓氏ト一。韓武

聶政刺俠累

賢弟之名

子之三世曰厥。厥五世至康子、與趙魏共滅知氏。又二世曰景侯虔。以周威烈王命為侯。韓相俠累、與濮陽嚴仲子有惡。仲子聞軹人聶政之勇、以黃金百鎰為政母壽、欲因以報仇。政曰、老母在。政身未可以許人也。及母卒、仲子乃使政圖之。俠累方坐府。兵衞甚嚴。政直入刺之、因自皮面抉眼。韓人暴其尸於市、購問莫能識。姊嫈往哭之曰、是深井里聶政也。以妾在故、重自刑以絕蹤。妾奈何畏沒身之誅、終沒賢弟之名。遂死政尸旁。

訓讀 韓の先は、本周と同姓にして、武王の子、韓侯の後なり。國絶ゆ。其の後裔、晉に事へて韓氏と爲る。韓武子の三世を厥と曰ふ。厥より五世、康子に至りて、趙・魏と共に知氏を滅す。又二世を景侯虔と曰ふ。周の威烈王の命を以て侯と爲る。韓の相俠累、濮陽の嚴仲子と惡むこと有り。仲子、軹の人聶政の勇なるを聞き、黃金百鎰を以て、政の母の壽を爲し、因つて以て仇を報ぜんと欲す。政曰く、「老母在り。政の身未だ以て人に許す可からざる也」と。母卒するに及び、仲子乃ち政をして之

を圖らしむ。俠累方に府に坐す。兵衞甚だ嚴なり。政、直ちに入つて之を刺し、因つて自ら面を皮はぎ眼を抉る。韓人其の尸を市に暴し、購問すれども能く識るもの莫し。姉嫈、往きて之に哭して曰く、「是れ深井里の聶政なり。妾の在るを以ての故に、重く自ら刑して以て蹤を絕つ。妾、奈何ぞ身を沒するの誅を畏れて、終に賢弟の名を沒せんや」と。遂に政の尸の旁に死す。

【通釋】(三行目「以二周威烈王一命爲レ侯」まで意味明かなれば略す)。(景侯の次の烈侯の代のことである)。韓の大臣の俠累といふ者、濮陽(河南)の人の嚴仲子といふ者と仲が惡く、(互に敵視し合つてゐた)。仲子は軹(河南)の人聶政の武勇にすぐれてゐることを聞き、黃金百鎰を贈つて、政の母の長壽のお祝となし、それを因緣として彼をして仇俠累を討ち取らせようと思つた。聶政は「私には老母がありますので、この身を人に任せることは出來ませぬ」と言つて、(俠累暗殺の時機の猶豫を請うた)。その後、政の母が死んだので、愈〻仲子は聶政に賴んで俠累を殺させることにした。(聶政は俠累を襲つた)。時に俠累は役所の椅子にかけてゐた。身邊には武士が嚴重に警護して居つたが、聶政は(少しも臆せず)つか〱と入り來つて、俠累を刺し殺した。それから自分の顏の皮を剝ぎ、眼を抉つて、(何者とも分らぬやうにして自殺した)。韓人は其の屍を廣場に梟し、其の側に「此の者の姓名を告げた者には

賞金を與へる」と記した高札を立てゝ廣く搜したが、誰一人として聶政だと知る者がなかつた。さて政の姊の嫈といふ者、(その梟首場へ往つて、弟の屍骸にとりつき)大聲をあげて泣いて曰ふには、「これは軹縣深井里の聶政ぢや。(それと知れては妾の身に禍の及ぶことを恐れて)、わたし故にかくも慘しい死樣をして手がかりを無くしたのであらう。妾はどうして我が身の殺されるのを恐れて、此のえらい弟の名を闇に葬つてしまふことが出來ようぞ」と。遂に聶政の屍骸の旁で自殺した。



韓(戰國七雄の一。今の河南省の中部及び山西省澤潞地方に占據した國。) ○黄金百鎰(鎰は當時二十四兩、一兩は三匁七分ばかりといふ。) ○爲レ壽(その人のいのち長かれと祈ること。又その長生きを祝ふこと。こゝは長生きを賀して祝物を贈ることをいふ。) ○坐レ府(府は政府のこと。役所。) ○皮レ面抉レ眼(皮はカハハグと動詞に讀む。雨をアメフルと讀む類である。當時の法律では、一人大罪を犯す者あれば、何の關係のない親兄弟までが處刑された故に聶政は姊に禍のかゝることを恐れて、人相の知れぬやうにしたのである。) ○暴二其屍一(尸は屍に通ず、シカバネと訓ずる。暴は音バク。サラスと訓じ、曝に同じ。さらしくびにすること。) ○購問(購はアガナフで賞金を懸けて尋ね求めること。懸賞付で問ふ。) ○重自刑(ひどく自分で體に傷をつけること。一說に重をカサネテと讀む。史記の索隱に、重は複の如し。人の爲に仇を報じて死し、又姊の爲に重ねて其身を刑するなりとある。) ○絕レ蹤(蹤は音ショウ。蹤跡と熟す。アトと訓じめと足あとのこと。轉じて實跡の義。こゝは罪跡を絕つ義で、手がかりを無くしてしまふこと。)

景侯四世至哀侯。徙都鄭。哀侯二世至昭侯。鄭人申不害以黄老刑名之學爲昭侯相。國治兵强。昭侯有弊袴。命藏之。不以賜左右。侍者曰、君亦不

仁者矣。昭侯曰、明主愛一嚬一笑。嚬有爲嚬、笑有爲笑。今袴豈特嚬笑哉。吾必待有功者。昭侯卒。子宣惠王立。三世至桓惠王。韓上黨守降趙。致趙受秦兵。而有長平之敗。又一世至王安。秦王政遣將虜安、遂滅韓爲郡。

訓讀 景侯より四世にして哀侯に至り、都を鄭に徙す。哀侯より二世にして昭侯に至る。鄭人申不害、黄老刑名の學を以て、昭侯の相と爲る。國治り兵強し。昭侯、弊袴有り。命じて之を藏せしめ、以て左右に賜はらず。侍者曰く「君も亦不仁者なり」と。昭侯曰く「明主は一嚬一笑を愛む。嚬するも爲に嚬する者有り。笑ふも爲に笑ふ者有り。今、袴、豈特に嚬笑のみならん哉。吾必ず功有る者を待たん」と。昭侯卒す。子宣惠王立つ。三世にして桓惠王に至る。韓の上黨の守、趙に降る。趙、秦の兵を受くるを致して、長平の敗有り。又一世にして王安に至る。秦王政、將を遣して安を虜にし、遂に韓を滅して郡と爲す。

補講 景侯から四代で哀侯の代となつて、都を鄭に遷した。哀侯から二代で昭侯となる。この時、

鄭の人で申不害といふ者、黄老刑名の學(語釋に詳述する)を得意として、これを以て昭侯の大臣に任ぜられた。(このやり方が當時の國情に適應して)、韓の國はよく治まり、軍隊も强くなつた。或時昭侯は破れ袴を人に命じて(大事さうに)藏はせておき、お附の家來にも下げ與へなかつた。近侍の者共は「わが君も餘りひどいお方ぢや」と批評した。(それを聞いて)昭侯は、「明君賢王といはるゝ人は、嫌な顔をしたり笑つたりすることさへも、謹んで無暗にしないものである。そのわけは、君主たる者が一度顔をしかめると、之に迎合して顔をしかめる家來が出來る。一度笑顔を見せると、又之に迎合して笑顔をする者が出來る。(一顰一笑と雖も、その臣下に影響するところ重大である)。然るに今あの袴を近臣に與へることは、どうしてただ一顰一笑ぐらゐの比ではない。(更に〳〵大切である。貰つたものは得意になり、貰はぬものは不平を抱き、その影響するところ鮮少でない。故に理由なくして與へることは出來ぬ)。自分は(之を與へてもよいやうな)手柄を表はす者のあるのに待たうと思ふのぢや」と云つた。(その細心な公平ぶりが想はれる)。昭侯卒して子の宣惠王が立ち、三代して桓惠王に至る。(この時、秦が韓を攻め、韓の上黨郡は孤立に陷つたので)、上黨の郡守は遂に趙に降つて、(趙の援を得て秦を拒がうとした)。その結果は、趙が秦の兵の攻撃を受けるやうな事になり、(さきに趙の

條に見えたやうに）長平の大敗となつたのである。それから又一代を經て王安に至つたが、秦王政は將を遣はして安を虜にし、遂に韓を滅ぼして秦の一郡としてしまつた。（凡て十世、王と稱するもの五、秦の始皇十七年に亡ぶ。時に西紀前二三〇年である）。

語釋　黃老刑名之學（黃老とは黃帝と老子の二人。併し黃帝は後の道家者連にかつがれた迄で、實は何の關係もない。從つて黃老の學と云つても實は老子を教祖とする道教のことである。申不害の學はこの老子の說に本づくのだ、天下を治むるに仁義禮樂の要を認めず、君主が臣下に僞られない爲めには無爲自然でなければならぬとした。次に刑名とは、刑は形でカタチであり、實である。名は名目でトナへである。例へば忠といひ孝といふ、それだけならば名である。それを實際に行つた結果を形卽ち刑といふ、申不害の說は、君主が臣下を治めるのはこの名を以て形を正し、形と名とを一致せしめ、其間に僞を設けさせず、信賞必罰を以てせんとするにある。この說は管仲・李悝を祖とし、申不害・商鞅・韓非等が之を唱へたもので、その學を法術といひ、その學者を法家と稱する。）　〇愛二一嚬一笑一（愛はヲシムと讀む。愛惜して輕々しくせぬ意。嚬は顰に同じく、眉をひそめて愁ひの狀をなすこと、しかめづら。この話は「韓非子」內儲說の上に出てゐる。）　〇長平之敗（趙括が趙の大將となつて大敗し、四十萬の兵が秦の爲に長平で坑にされたことは前に趙の條下に見えた。）

楚之先

楚之先出レ自二顓頊一。顓頊之子爲二高辛火正一、命曰二祝融一。弟吳回復居二其職一。吳回二世。有二季連者一、得二羋姓一。季連之後有二鬻熊一、事二周文王一。成王封二其子熊繹於丹陽一。

熊渠僭王

至二夷王時一、楚子熊渠者僭爲レ王。十一世至二春秋一。有レ曰二武王一、益强大。至二文王一始都レ郢。成王與二齊桓公一盟二召陵一、尋與二宋襄公一爭レ霸、後與二晉文公一戰二

城濮。

訓讀 楚の先は、顓頊より出づ。顓頊の子は高辛の火正と爲り、命ぜられて祝融と曰ふ。弟吳回、復其の職に居る。吳回より二世にして、季連といふ者有り。羋姓を得たり。季連の後鬻熊といふもの有り。周の文王に事ふ。成王其の子熊繹を丹陽に封ず。夷王の時に至りて、楚子熊渠といふ者、僭して王と爲る。十一世にして、春秋に至り、武王と曰ふもの有り、益〻强大なり。文王に至りて始めて郢に都す。成王、齊の桓公と召陵に誓ひ、尋いで宋の襄公と覇を爭ひ、後晉の文公と城濮に戰ふ。

通釋 意味明かなれば略す。なほ語釋を參看されたい。

語釋 楚（其地は宋の條下に出づ。） ○顓頊（五帝の一。顓頊高陽氏。） ○高辛火正（高辛は高陽の誤。これは顓頊高陽氏の子の黎といふ者が父帝の下に火正の官に任ぜられたことをいふ。前に顓頊高陽氏の條下に「火正黎、司レ地以屬レ氏」とあつたのがそれである。火正は官名。火を掌る。漢書には「古之火正、謂二火官一也、掌下祭二火星一行中火政上」とある。） ○祝融（史記の註によると祝は大、融は明の義で、火正の官たる黎の功德を褒めて美號である。然るに火正の官は火を掌るが故に、後にはその美號たる祝融を火の神又は夏の神の名として用ひるやうになつた。火事に逢ふことを「祝融の災に罹る」などいふのは其故である。） ○武王・文王・成王（「至二春秋一有レ曰二武王一」より以下の武王・文王・成王は、楚王の僭稱であるから、周の文武成王と混同せぬやうにせねばならぬ。） ○丹陽（今湖北荊州府内の地。） ○楚子熊渠（楚は周の諸侯として子爵である、故に楚子といふ。） ○召陵（今の河南郾城縣の東。） ○宋襄公（楚宋の戰は「宋襄之仁」で名高く、詳しくは宋の條下に出づ。） ○城濮（今の山東濮縣の南。）

莊王

三年不レ蜚不レ鳴

歴穆王至莊王。卽位、三年不出令、日夜爲樂。令國中、敢諫者死。伍擧曰、有鳥在阜。三年不蜚不鳴。是何鳥也。王曰、三年不蜚、蜚將衝天。三年不鳴、鳴將驚人。蘇從亦入諫。王乃左執從手、右抽刀、以斷鐘鼓之懸。明日聽政、任伍擧・蘇從。國人大悅。又得孫叔敖爲相。遂覇諸侯。



穆王を歴て莊王に至る。位に卽き、三年令を出さず、日夜樂みを爲す。國中に令す、「敢て諫むる者は死せん」と。伍擧曰く、「鳥あり阜に在り、三年蜚（飛）ばず鳴かず。是れ何の鳥ぞや」と。王曰く「三年蜚ばず、蜚ばゞ將に天を衝かんとす。三年鳴かず、鳴かば將に人を驚かさんとす」と。蘇從も亦入りて諫む。王乃ち左に從の手を執り、右に刀を抽きて、以て鐘鼓の懸を斷つ。明日政を聽き、伍擧・蘇從に任ず。國人大いに悅ぶ。又孫叔敖を得て相と爲し、遂に諸侯に覇たり。



穆王を歴て莊王の世となつたが、この人は位に卽いて三年にもなるのに、何等の政令をも出さず、日夜酒食宴遊の樂しみに耽つてゐた。さうして、「おして意見する者あらば死刑に處すべし」と

國内に觸れ渡した。(だから誰も諫める者も無かつた。がその中に)伍擧といふ家來が、「一羽の鳥が岡の上に居ります三年の久しい間、飛びもせねば鳴きもしない。一體これは何うした鳥でございませう」と、(王を鳥に譬へて、それとはなしに王を諷した)。莊王の答は斯うであつた。「そりや、三年も飛ばずにゐるといふのは、飛んだら最後、天を衝くほど高く翔らう爲めぢや。三年も鳴かずにゐるといふのは、一旦鳴いたら人をびつくりさせよう爲めぢや。(斷じて凡くらな鳥ではないぞ)」――(王は伍擧の心をちやんと讀んでゐた。さうして自己の大いに爲すあらんとする抱負を、相手の隱語をそのまゝ使つて語つたのである)。蘇從といふ臣も亦王の前へ行つて意見した。その時、王は左の手に蘇從の手を握つて(その忠誠に感激し)、右の手に刀をぬいて、(今まで宴遊に使つてゐた鐘や鼓を吊した懸紐をすつぽりと切り斷つて、(再び遊樂をしないといふ決心の程を表はした)。果然、その明日からは政治を聽き、萬事伍擧と蘇從に信任した。蘇の國民は大いに悅んだ。莊王は又孫叔敖といふ賢者を手に入れて之を大臣となし、遂に諸侯の霸者となつた。

【語釋】　阜(をか。小山のこと。)　○三年不レ蜚(蜚は音ヒ、とぶ。飛に同じい。)　○鐘鼓之懸(鐘や鼓は、それぞれ之を框(ワク)のやうな器につり下げて用ひる。懸はその框に鐘鼓をつるす紐のこと。)

張儀說懷王
商於之地六百里

歷共王・康王・郟敖・靈王・平王・昭王・惠王・簡王・聲王・悼王・肅王・宣王・威王至懷王。秦惠王欲伐齊、患楚與從親、乃使張儀說楚懷王曰、王閉關絕齊、請獻商・於之地六百里。懷王信之、使勇士北辱齊王。齊王大怒、而與秦合。楚使受地於秦。儀曰、地從某至某、廣袤六里。懷王大怒、伐秦大敗。

訓讀　共王……威王を經て、懷王に至る。秦の惠王、齊を伐たんと欲し、楚の與に從親せんことを患へ、乃ち張儀をして楚の懷王に說かしめて曰く、「王、關を閉ぢて齊に絕たば、請ふ商・於の地六百里を獻ぜん」と。懷王之を信じ、勇士をして北のかた齊王を辱かしめしむ。齊王大いに怒りて秦と合す。楚、地を秦に受けしむ。儀曰く、「地は某より某に至るまで廣袤六里なり」と懷王大いに怒り、秦を伐つて大いに敗る。

通釋　(「至懷王」まで略す)。懷王の時、秦の惠王は齊の國を伐たうと思うたが、南方の楚の國が齊とともに合從することを心配した。そこで張儀を遣はして楚の懷王に說かしめた——「貴國が國境

の關門を閉ぢて齊の國と通交を絶たれるならば、秦の商・於二縣の地六百里を進上いたしませう」と。懷王はそれを信じて、(宋遺といふ)勇士を北方の齊へ遣つて齊王(湣王)を侮辱させた。齊王は非常に怒つて(楚と絶交して)秦と同盟してしまつた。楚は(かねて約束によつて)秦へ土地を貰ひ受けにやつたところ、張儀は、「(そのお約束をした)土地といふのは、何處から何處まで廣さ六里でござる。(さあお受取り下されう)」と曰つた。それと聞いて懷王は大いに怒り、秦を伐つたが慘敗した。

語釋 六百里(例の六町一里として我が國の百里ばかりに當る。) ○廣袤(東西のひろさを廣といひ、南北のひろさを袤といふ。面積。)

秦昭王與懷王盟于黃棘。既而遺書懷王。願與君王會武關。屈平不可。子蘭勸王行。秦人執之以歸。楚人立其子頃襄王。懷王卒於秦。楚人憐之、如悲親戚。初屈平爲懷王所任、以讒見疏、作離騷、以自怨。至頃襄王時、又以譖遷江南。遂投汨羅以死。秦拔郢。楚徙於陳。頃襄王卒。考烈王立。又徙於壽春。

【讀方】秦の昭王、懷王と黃棘に盟ふ。既にして書を懷王に遺る。「願はくは君王と武關に會せん」と。屈平可かず。子蘭、王に勸めて行かしむ。秦人之を執へ、以て歸る。楚人其の子頃襄王を立つ。懷王、秦に卒す。楚人之を憐むこと、親戚を悲しむが如し。初め屈平、懷王の任ずる所と爲りしが、讒を以て疏んぜられ、離騷を作つて以て自ら怨む。頃襄王の時に至り、又讒を以て江南に遷る。遂に汨羅に投じて以て死す。秦、郢を拔く。楚、陳に徙る。頃襄王卒す。考烈王立つ。又壽春に徙る。

【通釋】秦の昭王は楚の懷王と、黃棘で會見して好みを結んだが、間もなく又懷王に手紙をおくつて、「もう一度、武關でお目にかゝりたい」と申込んで來た。大夫の屈平は（その危險を慮つて）不贊成を唱へたが、（懷王の末子の）子蘭が王にすゝめて武關に行かせた。秦は果して懷王を引つ捕へて、（都の咸陽へと）つれ歸つた。そこで楚は懷王の子の頃襄王を立てた。懷王は（終に國に歸ることが出來ず）秦で亡くなつた。楚の國人は懷王の死を氣の毒がること親戚の不幸を悲むがやうに嘆いた。さて、かの屈平は、初めは懷王に信任されたのであるが、讒言やるものがあつて段々と粗末にせられ、離騷といふ詩を作つて、我が身の不遇を怨み悲しんだ。然るに頃襄王の時になると再び讒言されて、楊子江の南の地に流され、遂に汨羅といふ川に身を投げて死んだ。秦は（更に楚を攻めて都の）郢を

陷れたので、楚は陳に遷つた。頃襄王が卒して考烈王が立つたが、また都を壽春に遷した。

語釋 黄棘（今の河南新野縣。）　○武關（今の陝西商縣の東、秦の南關である。）　○屈平（屈は姓、平は字、名は原といふ。楚の公族懐王に仕へて三閭大夫となつたが、讒によつて疎ぜられたことは本文にある通り。多感多涙の詩人で、南方文學の宗師である。）　○離騷（離は遭、騷は憂、憂に遭ふといふ義である。或は離別の憂と解し、騷亂に遭ふ義と解する説もある。我が罪の無實を訴へ、姦臣の横暴を怨み、反覆して君を思ふの情を述べた詞賦である、後に宋玉出でて屈原の詩風を善くし、並び稱して屈宋といふ。又屈宋等南方文學家の詞賦を稱して楚辭といひ、支那文學の一特色である。因みに、詩人のことを騷人といふのは離騷から出たのである。）　○以歸（以はキルと訓み、引き入れること。）　○譖（音シン。そしる、讒訴すること奥の條下に出づ。）　○汨羅（ベキラと讀む。今の湖南長沙の湘陰縣にある川の名。屈原がこゝに投身したのは五月五日であつたといふので、五月節句にチマキに就ての傳説などがある。）　○壽春（安徽壽縣、）

春申君

春申君黄歇行相事。當是時、齊有孟嘗君、魏有信陵君、趙有平原君、楚有春申君。皆好客。春申君、食客三千餘人。平原君使人於春申君、欲夸楚、爲玳瑁簪、刀劍、室飾以珠玉。春申君、上客、皆躡珠履以見之。趙使大慚。趙人

荀卿

荀卿、至楚。春申君以爲蘭陵令。梨園以妹獻春申君。有娠。而後納之考烈王。是生幽王。園使盜殺春申君以滅口、而專楚政。

楚亡

幽王卒。弟哀王爲楚人所弑。而立其庶兄負芻。秦王政遣將破楚、虜負芻、滅楚爲郡。

【訓讀】春申君黃歇、相の事を行ふ。是の時に當り、齊に孟嘗君あり、魏に信陵君あり、趙に平原君あり、楚に春申君あり。皆、客を好む。春申君食客三千餘人あり。平原君、人を春申君に使せしめ、楚に夸らんと欲し、玳瑁の簪を爲り、刀劍の室は飾るに珠玉を以てす。春申君の上客、皆、珠履を躡みて、以て之を見る。趙の使、大いに慙づ。趙人荀卿、楚に至る。春申君、以て蘭陵の令となす。梨園、妹を以て春申君に獻ず。娠むあり。而して後に之を考烈王に納る。是れ幽王を生む。園、盜をして春申君を殺さしめ、以て口を滅し、而して楚の政を專らにす。幽王卒す。弟哀王、楚人の弑する所となる。而して其の庶兄負芻を立つ。秦王政、將を遣して楚を破り、負芻を虜にし、楚を滅して郡と爲す。

【通釋】春申君黃歇が宰相の事務を執つた。當時、齊には孟嘗君（田文）あり、魏には信陵君（無忌）あり、趙には平原君（趙勝）あり、楚には春申君あつて、皆食客を養つた。（これ謂はゆる戰國の四公子である）。春申君の食客は三千餘人もあつた。ところで、平原君はその食客を春申君の許に使せしめ、（その如何に食客を優遇してゐるかを）楚に自慢するつもりで、玳瑁の簪、鞘を珠玉で飾つた刀劍、いとも美々しく扮裝たせた。すると春申君門下の一流どこの客が、いづれも珠で飾つた履を穿いて之に

面會したので、趙の使者に立つた客は大いに赤面した。そのころ趙の人荀卿といふ學者が楚の國へやつて來た。春申君はこれを任用して蘭陵縣の縣令とした。(これが有名な荀子である)趙の人李園といふ者が、その妹を春申君に差上げた。婦人は妊娠した。(然るに李園は春申君と相談の上)、この妹を考烈王の奥殿に納れて妾とした。かくてこの婦人の生んだ子が幽王である。(實は春申君の子だ)。そこで李園は(愈々惡心を起し)忍びの者を遣はして春申君を殺させ、秘密がその口から洩れるのを防いだ。さうして自ら楚國の政事を思ひのまゝに振舞うた。幽王卒して、弟の哀王が立つたが、楚人に弑せられたので、その腹ちがひの兄の負芻を立てた。この時、秦王政は將を遣はして楚を破り、負芻を虜にし、楚を滅ぼして秦の一郡となした。(凡て四十一世、二十五王、始皇の二十四年に亡ぶ。時に西紀前二二三年である)。

【語釋】玳瑁簪(玳瑁は海にゐる龜、その甲は鼈甲の類で、種々の裝飾品を作るに用ふ。玳は瑇の俗字である。簪は冠をとめる爲に髮に挿すもの。かんざし。)　○刀劍室(刀は片刃、劍は兩刃、室は鞘のこと。)　○躡(フムと訓ず。こゝは足につつかけること。)　○荀卿(荀况のこと。時人これを尊んで荀卿と云つて公卿に比した。儒者の一派で、性惡論を唱へた人。「荀子」を著はす。)　○蘭陵令(蘭陵は今の山東嶧縣の東。令は縣の長官。縣令。)　○盜(こゝは刺客のこと。穀梁傳に春秋に三種の盜あることを載せ、其の一に「微かに大夫を殺すもの、之を盜と謂ふ」とある。)

燕、姬姓、召公奭之所封也。三十餘世、至文公、嘗納蘇秦之說、約六國爲從。

易王噲

昭王招賢

文公卒、易王噲立。十年、以國讓其相子之、南面行王事、而噲老不聽政、顧爲臣。國大亂。齊伐燕取之、醢子之而殺噲。燕人立太子平爲君。是爲昭王。弔死問生、卑辭厚幣、以招賢者。問郭隗曰、齊因孤之國亂而襲破燕。孤極知燕小不足以報。誠得賢士與共國、以雪先王之恥、孤之願也。先生視可者。得身事之。



燕は姬姓、召公奭の封ぜられし所也。三十餘世にして文公に至る。嘗て蘇秦の說を納れて、六國に約して從を爲す。文公卒し、易王噲立つ。十年にして國を以て其の相、子之に讓り、南面して王事を行はしめ、而して噲は老して政を聽かず、顧つて臣と爲る。國大いに亂る。齊、燕を伐ちて之を取り、子之を醢にし、噲を殺す。燕人、太子平を立てゝ君と爲す。是を昭王と爲す。死を弔ひ生を問ひ、辭を卑うし幣を厚うし、以て賢者を招く。郭隗に問うて曰く、「齊、孤の國の亂るゝに因りて襲うて燕を破る。孤、極めて燕の小にして以て報ゆるに足らざるを知る。誠に賢士を得て與に國を

共にし、以て先王の恥を雪がんこと、孤の願ひ也。先生、可なる者を視せ。身、之に事ふるを得ん」と。



燕は姫姓で、昔（周の武王の弟の）召公奭の封ぜられた國である。それから三十餘代の後文公の時に至つて、蘇秦の說を採用して、（韓魏趙齊楚燕の）六國が互に約束して合從をなし（秦に當つた）ことがある。文公卒して易王（名は）噲が立つたが、在位十年にして、（昔、堯が天下を舜に讓つた眞似をして）、國を宰相の子之といふものに讓り渡し、その子之をして燕の王となつて君主の仕事を執らせ、噲自らは隱居して政務を執らず、あべこべに子之の家來となつた。（さういふ風だから）、國の秩序が大變みだれた。（そこをつけこんで）齊は燕を伐つて國を取り、子之を鹽漬にし、噲を殺した。そこで燕の人々は太子の平といふものを立てゝ燕の君とした。これを昭王といふ。昭王は戰死者を弔ひ生存者を見舞うて（國の爲めに盡したものを勞ひ）、又、言葉を卑うし進物を手厚うして勝れた人を呼びよせた。當時、郭隗といふ賢人に尋ねて曰ふには、「齊は、予の國が亂れたのにつけこんで、襲ひ討つて我が燕を破つた。（その無禮は實に惡むべきであるが）、何分にも燕は小國で、迚もこの復讎は出來ないことは、予は十分に承知してゐる。ついては勝れた人を手に入れて共に國事を相談して、

（國勢を挽回し）、よつて以て父祖の恥辱を洗ひ去りたいといふのが、予の念願ぢや。先生、どうか適當な人をお示し下さい。予は躬らその人を師として事へるでござらうから。」と。

語釋　易王噲（易は諡法としてはエキと讀むの正しいといふ説もある。又史によると易王と噲とは別で、噲は易王の子である。本文に一人の如く書いたのは誤脱であらう。）○南面（君は南面し、臣は北面するのである。故に君位に卽くことを南面するといふ。）○老不ㇾ聽ㇾ政（老はラウと音讀して隱居すること。）○顧爲ㇾ臣（顧はカヘツテと訓じ、反と同じ意。）○臨（衞條下に出づ。一六九頁參照。）○弔ㇾ死問ㇾ生（一説に、家來のうちに死者があるとそれを弔ひに行き、出產があると喜びに行くことで、君臣の間の親密なるをいふと。）○孤（王侯の謙稱。一説に諸侯が民と話す時は「寡人」といふが、喪中に居る時は「孤」といふと。）○掔（スヽグと訓じ、洗ひきよめること。除くこと。誤つてソヽグと讀まないやうに注意を要する。）○視二可者一（視は示と通じ用ひ、シメスと訓ず。）

死馬骨

隗曰、古之君、有下以二千金一使二涓人求一千里馬者上。買二死馬骨五百金一而返。君怒。涓人曰、死馬且買ㇾ之。況生者乎。馬今至矣。不ㇾ期年、千里馬至者三。今、王必欲ㇾ致ㇾ士、先從ㇾ隗始。況賢二於隗一者、豈遠二千里一哉。於ㇾ是昭王爲ㇾ隗改築ㇾ宮、師二事之一。

從ㇾ隗始

訓讀　隗曰く、「古の君、千金を以て涓人をして千里の馬を求めしめし者あり。死馬の骨を五百金に買ひて返る。君怒る。涓人曰く『死馬すら且つ之を買ふ。況んや生ける者をや。馬、今至らん』と。

期年ならずして千里の馬至る者三といふ。今、王必ず士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ。況んや隗より賢なる者、豈千里を遠しとせん哉」と。是に於て昭王、隗の爲に改めて宮を築き、之に師事す。

通釋 それに對する郭隗の答は、斯うであつた。「昔、某國の君が近侍の臣に千兩の金を持たせて、一日千里を走る駿馬を買ひにやりました。(ところが行つて見ると其の馬は既に死んでしまつてゐたので)、その死馬の骨を五百兩で買つてかへりました。その君は大立腹です。すると近侍の臣の申すには、『死んだ馬でさへ五百兩も出してお買ひになるなら、生きた馬は何ほど出して買はれるやも知れぬ——さう言つて今に千里の馬を牽いて來るでございませう』と。果して一年たゝぬうちに、千里の馬は三匹も參つたと申します。今、是非とも有爲の士を招かうと思召すならば、(死馬の骨を買つたやうに)、まづこの隗——私からお用ひ始めなさい。さすれば隗より勝れたものは、千里の道も遠いと思はずに參るに違ひございませぬ(丁度千里の馬のやうに)」。そこで昭王は(なるほどと感心し、郭隗を引き立てゝ重く用ひ)、隗のために、改めて邸宅を新築して提供し、これを師として敬ひ事へた。

語釋 涓人(官名。涓は潔の意で、拂ひ淸めること。故に主君の左右に近侍して掃除や取次などをする小官をいふ。近習。) ○馬今至矣(馬は千里の馬を指す。間もなく千里の馬が參りませうといふ意。) ○期年(一周年。まる一ケ年のこと。一ケ月を期月といふ類である。)

樂毅

田單縱ニ反間ー

於是、士爭趨燕。樂毅自魏往。以爲亞卿、任國政。已而使毅伐齊。入臨淄。齊王出走。毅乘勝、六月之閒、下齊七十餘城。惟莒・卽墨不下。昭王卒、惠王立。惠王爲太子、已不快於毅。齊田單乃縱反閒曰、毅與新王有隙、不敢歸。以伐齊爲名。齊人惟恐他將來、卽墨殘矣。惠王果疑毅、乃使騎劫代將、而召毅。毅奔趙。田單遂得破燕而復齊城。

訓讀 是に於て士爭うて燕に趨く。樂毅は魏より往く。以て亞卿と爲し。國政を任ず。已にして毅をして齊を伐たしむ。臨淄に入る。齊王出で走る。毅、勝に乘じ、六月の閒に齊の七十餘城を下す。惟だ莒と卽墨とのみ下らず。昭王卒し、惠王立つ。惠王、太子たりしとき、已に毅に快からず。齊の田單、乃ち反閒を縱ちて曰く、「毅、新王と隙あり、敢て歸らず。齊を伐つを以て名と爲す。齊人惟だ他將の來りて卽墨の殘せられんことを恐る」と。惠王果して毅を疑ひ、乃ち騎劫をして代りて將たらしめ、而して毅を召す。毅、趙に奔る。田單遂に燕を破つて齊の城を復するを得たり。

【通釋】そこで天下の人物は（昭王がよく人材を優遇すると聞いて）われがちにと燕の國へ往つた。その中に樂毅といふ將軍があるが、これは魏から燕へ往つたものである。昭王は之を二番家老として國の政事を任せた。とかくして昭王は樂毅を遣はして齊を伐たせ（年來の怨みを霽らさうとした）。樂毅は直ちに齊の都の臨淄へ攻め入つた。齊王（湣王）は拒ぎかねて都を逃げ出した。樂毅は勝ちに乘つてどん〳〵敵を破り、六ケ月の間に齊の七十餘城を落してしまつた。今は落ちないものは莒と即墨との二城だけとなつた。

その中に燕の昭王が死なれて、惠王が立つた。惠王はまだ太子であつた時から樂毅と仲がよくなかつた。（そこを睨んだのが）齊の田單で、早速まはしものを出して、（こんな宣傳をさせたものだ）——「齊の將軍樂毅は今度の新王（惠王）との間がどうも面白くないもんだから、（齊へ出征したまゝ）、國へ歸らうとせず、齊を伐つ爲めだといふことを口實にして、（いつまでも愚圖ついてゐる。だから樂毅が齊に留まつてゐる間は齊も安心だ）。たゞ齊の人の恐れるのは、もし他の將軍がやつて來て、即墨を打ツ壞さうかといふことにある」と。惠王は果して（この宣傳に乘つて）樂毅を疑ひ、遂に騎劫といふ人をその代りの將軍となし、さうして樂毅を呼び戻した。（併し毅は燕へは歸らないで）趙へ逃げて行

つた。そこで田單はとう〳〵燕を破つて齊の七十餘城を取り戻すことが出來た。

語釋 亞卿（亞はツグと訓じ次の意。執政大臣に次ぐ官をいふ。） ○臨淄（齊の都。今の山東省臨淄縣。） ○隙（「すきま」の義で、兩者の間に隔りがあり密接でない意から、不和、仲たがひ、などの意味に用ひる。） ○爲レ名（名目とする。口實にする。） ○殘（ソコナフと訓じ、害すること。こゝは破壞の意。）

太子丹　**荊軻**　**於期自刎**

惠王後、有武成王・孝王、至王喜。喜太子丹質於秦。秦王政不禮焉。怒而亡歸。怨秦欲報之。秦將軍樊於期、得罪亡之燕。丹受而舍之。丹聞衛人荊軻賢、卑辭厚禮請之。奉養無不至。欲遣軻。軻請得樊將軍首及燕督亢地圖以獻秦。丹不忍殺於期。軻自以意諷之曰、願得將軍之首以獻秦王。必喜而見臣。臣左手把其袖、右手揕其胸、則將軍之仇報、而燕之恥雪矣。於期慨然自刎。

訓讀 惠王の後、武成王・孝王有りて、王喜に至る。喜の太子丹、秦に質たり。秦王政、禮せず。怒つて亡げ歸る。秦を怨んで之に報いんと欲す。秦の將軍樊於期、罪を得、亡げて燕に之く。丹受け

て之を舍す。丹、衞人荊軻の賢を聞き、辭を卑うし禮を厚うして之を請ふ。奉養至らざる無し。軻を遣さんと欲す。軻、樊將軍の首及び燕の督亢の地圖を得て以て秦に獻ぜんと請ふ。丹、於期を殺すに忍びず。軻自ら意を以て之に諷して曰く、「願くは將軍の首を得て、以て秦王に獻ぜん。必ず喜んで臣を見ん。臣、左手に其の袖を把り、右手に其の胸を揕さば、即ち將軍の仇報いられて、燕の恥雪がれんと。於期、慨然として自刎す。


燕の惠王の後に、武成王・孝王が立つて、王喜の代になつた。王喜の太子の丹といふのが、秦の國に人質となつてゐたが、秦王の政が禮遇しなかつたので、丹は怒つて燕の國へ逃げ歸つた。それから秦を怨んで復讐しようと考へてゐた。たま〳〵秦の將軍の樊於期が秦王から罪されることがあつて燕へ逃げて來た。丹はそれを引き取つて館にかくまつて置いた。丹は又、衞の生れの荊軻といふものが、しつかりした人物であることを聞き、言葉を卑うし、禮儀を丁寧にして、荊軻を招き、届かぬところもなきまでに大切にして養うた。さていよ〳〵荊軻を遣はして（かねての復讐を遂げようと）思つた。すると荊軻は、（秦のお尋ね者の）樊將軍の首と、（燕の一等地たる）督亢といふ所の地圖とを戴いて行つて、それを秦王に獻上して、（秦王に取り入る手段と致したい）と願つた。しかし丹は樊於期

を殺すに忍びない。（何とか他の方法を取つてくれと頼んだ）。そこで軻は勝手に自分の考へで於期に喩して曰つた。「どうか將軍の御首を戴いて行つて、それを秦王に獻上したいものでございます。さすれば秦王は、きつと喜んで私を引見するでありませう。その時、私は左手に王の袖をつかまへ、右手で王の胸を一刺したならば、それで將軍の仇も報いられるし、又燕の耻辱も晴らされる譯であります。」と。それを聞いた於期は、慨然として自ら首を刎ねた。

語釋　舍レ之（舍は舍匿の意。我が家にかくまつておくこと。）　○奉養（大切にして事へ養ふこと。）　○樊將軍首（當時秦は千斤の金と一萬戸の土地とを懸けて樊於期の首を求めてゐた。）　○督亢地圖（督亢は地名、今直隷順天府涿州にあり、燕の最も肥沃な土地であつた。この地圖を献ずるといふことは即ちその土地を献ずる爲の證である。）　○自以レ意諷レ之（自分だけの考へで…太子には内密で於期にさとした、諷とは、それとなく遠まはしに敎へること。但しこゝでは堂々と打明けて言つてゐるのであるから、單に「さとす」位の意味に取つてよい。）　○揕（揕はチンでサスと訓ず。ねらつて突きかゝること。）　○將軍仇報（於期が出奔すると、秦王は大いに怒つて其の父母宗族を捕へて之を殺し重賞を懸けて於期の首を求めてゐた。それで「將軍の仇報いられ」と言つたのである。）　○慨然（深く感激するところあつて・いさみ歎く形容。）　○自刎（われと我が頸をハネること。自剄と同じい。）

風蕭々兮　白虹貫レ日

丹奔往、伏哭。乃以レ函盛二其首一。又嘗求二天下之利匕首一、以レ藥焠レ之、以試レ人血如レ縷立死。乃裝遣レ軻。行至二易水一、歌曰、風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不二復還一。于レ時白虹貫レ日。燕人畏レ之。軻至二咸陽一。秦王政大喜見レ之。軻奉レ圖進。窮而

王負レ劍

燕亡

匕首見。把二王袖一揕レ之。未レ及レ身。王驚起絶レ袖。軻逐レ之。環レ柱走。秦法羣臣侍二殿上一者、不レ得レ操二尺寸兵一。左右以レ手搏レ之。且曰、王負レ劍。遂拔レ劍斷二其左股一。軻引二匕首一擿レ王。不レ中。遂體解以徇。秦王大怒、益發レ兵伐レ燕。喜斬レ丹以獻。後三年秦兵虜レ喜、遂滅レ燕爲レ郡。

訓讀 丹奔り往き、伏して哭す。乃ち函を以て其の首を盛る。又嘗て天下の利匕首を求め、藥を以て之を焠し、以て人に試みるに、血、縷の如くにして立ろに死す。乃ち軻を裝遣す。行いて易水に至り、歌つて曰く、「風は蕭々として易水寒し。壯士一たび去つて復還らず」と。時に白虹日を貫く。燕人之を畏る。軻、咸陽に至る。秦王政、大いに喜んで之を見る。軻、圖を奉じて進む。圖窮つて匕首見はる。王の袖を把つて之を揕す。未だ身に及ばず。王驚き起つて袖を絶つ。軻之を逐ふ。柱を環つて走る。秦の法に羣臣の殿上に侍する者は、尺寸の兵を操るを得ず。左右手を以てこれを搏つ。且つ曰く、「王、劍を負へ」と。遂に劍を拔いて其の左股を斷つ。軻、匕首を引いて王に擿つ。中らず。遂に體解して以て徇ふ。秦王大いに怒り、益々兵を發して燕を伐つ。喜、丹を斬つて以て獻ず。後三年、

秦兵、喜を虜にし、遂に燕を滅して郡と爲す。


丹は(樊於期の死を聞くと)、直ちに馳けつけて、屍にとりすがつて大聲に泣いた。それから其の首を函に入れ、又かねて天下無雙の鋭利な短刀を搜し出し、刄に毒藥を塗つて燒きつけて人に試して見たところ、血がほんの絲すぢほど出たばかりの傷で、その者は見る間に死んでしまつた。(そこで首桶と短刀とを持たせ)旅裝を整へて荊軻を出發させた。軻は易水の畔まで來た時、(見送つて來た太子丹に別れるとて)、「風蕭々として易水寒し」云々――風は蕭々と物さびしく、易水の流れ寒うして腸にしみる。我れますらを一たびこの河を渡つて秦へ往けば、生きて復び還らぬものぞ――と歌つて(その決意を示した)。あたかも此の時、白い虹が太陽の面を横ぎつて見えた。燕の人々はこれを見て、(兵亂の兆であるとして)畏れをなした。軻は秦の都の咸陽に着いた。秦王政は(荊軻が樊於期の首と燕の督亢の地圖とを持つて來たといふので)、大いに喜んで軻を引見した。その時、軻は督亢の地圖を捧げて王の前へと進んで行つた。(さうして之を秦王に獻じた。秦王はその卷物になつた地圖を段々と披いてゆく中に)地圖が終りになると、(圖の心に卷きこんで丁度軸のやうにしてあつた)短刀が飛び出した。(と見るや軻は素早くその短刀を取り上げ)、秦王の袖を摑んで、王を突き刺さうとし

たが、その切先がまだ王の體に觸れない先に、王は驚いて袖をひきちぎつて逃げ出した。軻は王を追ひかけた。かく二人は柱の周圍をぐる〳〵と走りまはつた。一體、秦の掟では群臣の宮中に侍くものは、小さな刄物でも身につけることを許されてゐなかつた。そのために近侍の者たちは素手で以て荊軻を打ちながら、「我が君、早く御劒を後へまはしなさい――(すぐ拔けます)」と叫んだ。王は(それを聞くと鞘を後へ押しやつて)長劍を拔き、軻の左の股を斷ち切つた。軻は(最後の手段として)持つた短刀を後ろへ引いて勢をつけ秦王めがけて發止と投げつけた。(しかし狙ひは外れて)中らなかつた。(軻は遂に殺された)。王は軻を八つ裂にして後の見せしめにした。(この事件あつてより)秦王大いに怒り、益々兵を出して燕を攻めた。燕王喜は太子丹を斬つて秦に獻じ(秦の壓迫を免れようとした。)後、三年、秦の兵は燕王喜を捕へ、遂に燕を滅ぼしてその地を秦の一郡としてしまつた。

語釋 焠(音サイ。ニラグと訓ず。燒いた刄を水に入れて堅め鍛へること。こゝは毒藥を刄に塗つてにらぎかためるをいふ。) ○血如レ縷立死(縷は絲筋。血が絲筋ほどしか出ない極めて小さい傷であるのに、毒がまはつて直ちに死んだといふのである。) ○裝遣(仕度を整へて出立させること。) ○易水(河の名。今直隷省易縣から出て白河に入る。) ○蕭々(物さびしい形容。) ○壯士(荊軻自身をいふ。) ○白虹貫レ日(白い虹が太陽の面を横ぎる。白虹は兵の象で、日は君の象である。故に國君が兵を被るの兆で、大戰爭が起るしるしであるといふ。又一說にそれは精誠が天に感じたしるしであるともいふ。) ○咸陽(秦の都。今陝西關中道咸陽縣。) ○圖窮而匕首見(短刀を地圖に卷きこんで卷物の軸のやうにしてあつた。今、地圖をだん〳〵と披いてゆく。地圖がおしまひになると短刀が出て來たといふのである。窮は盡きる意。) ○殿上(御段の上、宮中。) ○尺寸兵(兵は兵器・武器の意。兵隊のことではない。)

非子封秦

繆公

五羖大夫

「尺寸兵」は小さな武器といふ意。）○搏（ウツと訓じ手打ちにすること。）○王負劍（王の劍が長くて拔きにくい、それにあわてゝゐるから尚更拔けない。そこで鞘を背後へ押しやつて身を伸して拔くと拔き易いから、さうさせようとするのであるが、[illegible]いてゐるので、たゞ「劍を負へ」と云つたのである。）○擿（音テキ。擲と同じ。なげうつ。なげつける。）○體解（手は手、足は足と、體をバラバラに斬り離すこと。）

秦之先、本顓頊之裔。曰大業者、生柏翳。舜賜姓嬴氏。其後有蜚廉。蜚廉子曰女防。女防之後有非子。好馬。爲周孝王主馬於汧渭之間。馬大蕃息。分土爲附庸、邑之秦。閱二世、至秦仲、始大。歷莊公至襄公。犬戎殺幽王。襄公救周有功。封爲諸侯、賜以岐西地。歷文公・寧公・出子・武公・德公・宣公・成公、至繆公。有百里傒者。故虞大夫也。爲繆公夫人媵亡秦、走宛。楚人執之。繆公聞其賢、以五羖羊皮贖得之、授之政。號曰五羖大夫。百里傒進其友蹇叔、以爲上大夫。



秦の先は、本と顓頊の裔なり。大業といふ者、柏翳を生む。舜、姓を嬴氏と賜ふ。其の後に

蜚廉あり。蜚廉の子を女防といふ。女防の後に非子あり。馬を好む。周の孝王の爲に、馬を汧渭の閒に主り、馬、大いに蕃息す。土を分つて附庸と爲し、之れを秦に邑せしむ。二世を閲して、秦仲に至り、始めて大なり。莊公を歷て、襄公に至る。犬戎、幽王を殺すや、襄公、周を救うて功あり、封じて諸侯と爲し、賜ふに岐西の地を以てす。文公・寧公・出子・武公・德公・宣公・成公を歷て、繆公に至る。百里奚といふ者あり、故の虞の大夫なり。繆公の夫人の媵と爲る。秦を亡げて宛に走る。楚人之を執ふ。繆公其の賢を聞き、五羖羊の皮を以て之を贖ひ得て、之に政を授く。號して五羖大夫と曰ふ。百里奚、其の友蹇叔を進めて以て上大夫と爲す。

【通釋】秦の先祖は本と顓頊高陽氏の子孫である。卽ち大業といふ人があつて、その子を柏翳と云ひ、(これは舜の九官の一人として虞の職にゐた益のことであるが)、舜は之に嬴といふ姓を賜うた。其の子孫が蜚廉・女防・非子といふやうに傳へたが、この非子は馬が好きで、周の孝王に仕へて、汧水・渭水(竝に陝西)のあたりで馬の飼育を掌つところ、馬が大層繁殖して(成績がよかつたので、孝王は非子に)土地を分け與へて、附屬の小名となし、秦州を知行所とさせた。(これが秦といふ國名の由つて來る所以である)。それから二代を經て秦仲の時に至つて始めて勢力大となり、莊公を歷て襄公に至り、

犬戎が攻め入つて周の幽王を殺した時、襄公は周の亂を救うて功勞があつたので、（周の平王）は襄公を大名となし、岐山以西の地を賜うた。次いで文公以下の七代を歴て繆公に至る。時に百里傒といふ者があつた。もと虞の國の大丈であつた。（然るに虞を去つて晉にゆき、晉侯の女が秦の繆公の夫人となつて嫁かれるに就て）、その繆公夫人の附添となつて秦へ行つた。がまた秦を亡げ出して宛といふ處まで行つたところを、楚の人に捕へられた。秦の繆公は百里傒の賢人たることを聞いて（その人物を惜しく思ひ）、高價なる五匹の牡羊の皮を楚人に差出して、百里傒を取り戻し、（大夫に任じて）政治をまかせた。人は之を五羖大夫と稱して尊重した。百里傒は又友達の蹇叔といふ人を推薦して上大夫とした。

語釋　汧渭（二水の名。ともに陝西省にあり、汧水は渭水の支流である。）　○蕃息（魯の孔子の條に「畜蕃息」とあつた。一四九頁參照。）　○附庸（庸は墉と同じで小城のこと。諸侯に附屬した小城の主をいふ。庸の意義については其他にも說があるが、今は略する。）　○邑二於秦一（邑は采邑。知行所として秦を領すること。祖は秦州で、今の甘肅省・秦州・鞏昌・階州の地。秦の場名はこれより起つた。繆公に至つて甘肅・四川・陝西の地を併せて西方の大國となつた。）　○閱二一世一（閱は歷るといふ意。）　○犬戎殺二幽王一（周の條下に出づ。九五頁參照。）　○岐西（岐山以西の地。岐山は陝西鳳翔府にある。）　○虞（今の山西平陸縣の地にあつた國の名。）　○媵（諸侯の娘が嫁入る時に附き添うてゆく臣。）　○羖羊（牡羊のこと。）　○贖（代りに物を出すこと。質受する、受け出す、などいふ意。金品を出して罪を免れることを贖罪といふが如し。「購ふ」（アガナフ）は買ふこと。意義異なる。）　○上大夫（大夫、上中下の三等に分つ、その上大夫。我が國で一家老といふやうなもの。）

食公馬

覇西戎

繆公送晉、惠公歸晉。已而倍秦、合戰于韓。繆公爲晉軍所圍。岐下有嘗食公馬者三百人。馳冒晉軍。晉解圍。遂脫繆公以反。先是繆公亡善馬。野人共得而食之。吏逐得、欲法之。公曰、食善馬不飲酒傷人。皆賜酒而赦之。至是聞秦擊晉、皆願從、推鋒爭死以報德。繆公後又送晉、文公歸國。立而覇諸侯。晉文公卒。秦遣孟明襲鄭、因破滑。晉襄公敗之崤。繆公不替孟明、修國政。後伐晉得志、遂覇西戎。



繆公、晉の惠公を送つて晉に歸す。已にして秦に倍き、韓に合戰す。繆公、晉軍の圍む所となる。岐下、嘗て公の馬を食ふ者三百人あり。馳せて晉の軍を冒す。晉、圍を解く。遂に繆公を脫して以て反る。是より先、繆公、善馬を亡ふ。野人共に得て之を食ふ。吏、逐ひ得て、之を法にせんと欲す。公曰く、善馬を食うて酒を飲まずんば、人を傷ると。皆、酒を賜うて之を赦せり。是に至つて秦、晉を擊つと聞き、皆從はんことを願ひ、鋒を推し死を爭うて以て德に報ゆ。繆公、後又、晉の文

公を送つて國に歸す。立つて諸侯に覇たり。晉の文公卒す、秦、孟明を遣はして鄭を襲はしめ、因つて滑を破る。晉の襄公、之を殽に敗る。繆公、孟明を替てずして國政を修めしむ。後、晉を伐つて志を得、遂に西戎に覇たり。

通釋 (これより先、晉の獻公の子夷吾——後に惠公といふ人は、晉の內紛を避けて秦へ逃げて來てゐたが)、秦の繆公は、その夷吾即ち惠公を送つて晉の國へ歸らせてやつた。(然るに惠公は國に歸つて位に卽くと)やがて秦の恩誼に背いて、繆公と韓の地に會戰し、繆公は晉軍のために包圍された。すると茲に、岐山の麓に、嘗て繆公の大事の馬を殺して食つた村人があり、その村の者三百人ほどが、晉の軍へとまつしぐらに突擊したので、晉は(堪らずして)包圍を解いた。(かくて三百人の村人は)繆公を危難から脫け出させて秦へ連れ歸つた。(一體その村人といふのは)、これより以前、繆公の大事の良馬が逃げてゐなくなつたところ、百姓達が皆して之をつかまへて殺して食つてしまつた。役人は(馬の跡を)逐うてゆき、(この亂暴な百姓達を)捕へて、法律にあてゝ處罰しようとした。すると繆公は「良馬の肉を食つて酒を飲まぬと體に害がある」と言つて、一同に酒まで與へて、その罪を赦してやつたのであつた。(百姓達の罪は一時の出來心である、之を罰するに忍びないといふのが繆公の

心中。百姓は又その情に感激して、この御恩忘れてならうかと心に誓つた）。ところで今や秦が晉と戰爭すると聞いて、一同從軍を志願し、敵の鋒先を押しわけ、我れ先に討死の覺悟で突貫し、前日の恩に報いたのである。繆公は後にまた晉の文公（獻公の子の重耳、諸方に流寓し、十九年にして晉に歸つて文公と云つた事は、既に晉の條下に見えた）が秦に亡げて來てゐたのを本國へ送り歸してやつた。その文公は位に卽いて諸侯の覇となつた。その後、文公が亡くなつたので、秦は孟明（百里傒の子）を大將として、鄭の國を攻めさせたところ（秦軍は鄭人の謀に欺かれて鄭を攻めることを止め、却つてその附近の晉の地の）滑といふ處を攻め取つた。そこで晉の文公の子襄公は、（父文公の忌中につけ込んで我が領地を伐つのは不都合だと云つて大いに怒り、喪服を着けたまゝで兵を出し）、秦の軍を崤といふ處で散々に破つた。（史記に「一人の脫るゝを得る者なし」とあるので秦の慘敗さが想像される）。けれども繆公は、敗軍の將孟明を見棄てないで、國の政治を執らせた。（その結果、後遂に孟明の力によつて）晉を伐つて年來の望みを果し、とう／＼西方の夷狄の間に覇を稱へるに至つた。

【語釋】倍レ秦（倍は音ハイ。背と通じ、ソムクと訓む。）○馳冒（馳せて敵の中を憚はず突き入ること。突擊）○推レ鋒（敵の鋒を推し却けて勇敢に斬り入ること。）○孟明（姓は百里、名は視、孟明はその字アザナである。百里傒の子。）○鄭（今の河南新鄭縣の地にあつた國の名。）○滑（今の河南滑縣。當時晉の邊邑であつた。）○崤（今河南洛寧縣の北にある山の名。）○棄（スツと訓む。捨てる。廢する。）

孝公下令強秦

公孫鞅

○西戎（支那の西方化外の蕃民。主としてチベット族であつた。）

歴康公・共公・桓公・景公・哀公・惠公・悼公・厲公・共公・躁公・懷公・簡公・惠公・出子・獻公、至孝公。河山以東、強國六、小國十餘。皆以夷狄遇秦、擯不與諸侯之會盟。孝公下令。賓客羣臣、有能出奇計強秦者、吾其尊官與之分土。衞公孫鞅入秦、因嬖人景監以見、說以帝道王道三變爲霸道、而後及強國之術。公大悅、欲變法、恐天下議己。鞅曰、民不可與慮始、而可與樂成。

【訓譯】康公……獻公を歴て、孝公に至る。河山以東、強國六、小國十餘あり。皆夷狄を以て秦を遇し、擯けて諸侯の會盟に與らしめず。孝公、令を下す。「賓客・羣臣、能く奇計を出し秦を強くする者あらば、吾れ其れ官を尊くし之に分土を與へん」と。衞の公孫鞅、秦に入り、嬖人景監に因りて以て見え、說くに帝道・王道を以てし、三變して霸道となりて、而る後に強國の術に及ぶ。公大いに悅び、法を變ぜんと欲すれども、天下の己を議せんことを恐る。鞅曰く、「民は與に始を慮る可からず、而し

て與に成を樂しむ可し」と。


康公以下十六代を歷て孝公に至る。この時に(秦の孝公の時に)、黄河・華山から東の方、(つまり秦以外には)、强國が六つ(即ち楚・燕・齊・趙・魏・韓)あり、小國は十幾つとあつたが、皆、秦を野蠻扱ひにして、諸大名の盟の會合などにも、のけものにして仲間入りをさせない。孝公(大いに之を憤慨して)、お布令を出した「來遊中の客人でも多くの家來たちでも、何か變つた計畫を立てゝ我が秦國を强くして吳れるものがあるならば、予は其の人の官爵を高くし、領地を與へるであらう」と。その頃、衞人の公孫鞅といふのが秦へやつて來て、孝公のお氣に入りの景監といふものの手蔓によつて孝公にお目見をして、先づ帝道即ち堯舜の道を說き、次に王道即ち禹・湯・文・武・周公等の道を說いたが、(孝公はそんな廻りくどい事は迚も待ち遠くて堪らないとて採用しないので)、三たび說を變へて覇道即ち五覇が武力を以て天下を始めた道を說き、然る後に國を强くするの方法を論じた。孝公は(公孫鞅の說を聽いて)大いに悅び、早速それによつて政治を變へようと思うたが、さうしては、國民が自分を何彼と非難しようかと心配した。それに就て鞅は、「およそ民といふものは、(無知なものであるから)物事の手始めを相談することは出來ませぬ(相談すればきつと文句を言つて反對するに違ひない)。

だからその出來上つたところで、その有難味を知らせればよろしい、（出來上つてしまへば、これは結構だといつて有難がるものであります。だから人民の非難などは御心配には及びませぬ）と言つた。

語釋　擯（シリゾクと訓じ、おしのけること。擯斥（ヒンセキ）すること。）○會盟（諸國が集まつて約束を定め盟を立てること。）○分土（土地を分ち開いて與へる意で、領地のこと。）○公孫鞅（衞の庶公子で刑名法術の學を奉じ、その本領は富國強兵にあつた。）○嬖人（君王から特に寵愛される人所謂お氣に入り。）○帝道（五帝の道。即ち堯舜が天下を治めた仕方。無爲にして化する理想の道。）○王道（三王の道。即ち禹王・湯王・文王・武王などが天下を治めた仕方。つまり仁義の德を以て國を治めること。）○覇道（五覇の道。武力を以て諸侯を統一すること。）

什伍之制

卒定令、令民爲什伍、相收司連坐。不告姦者腰斬、告姦者與斬敵同賞、匿姦者與降敵同罰。有軍功者、各以率受爵、爲私鬭者、各以輕重被刑。大小戮力本業耕織。致粟帛多者、復其身、事末利及怠而貧者、擧以爲收孥。

移木之令

令既具、未布。立三丈之木於國都市南門、募民有能徙北門者予十金。民怪之、莫敢徙。復曰、能徙者予五十金。有一人徙之。輒予五十金。乃下令。

太子犯法

太子犯法。鞅曰、法之不行、自上犯之。君嗣不可施刑。刑其傅公子虔、黥其師公

孫賈。秦人皆趨令。

訓讀 卒に令を定め、民をして什伍を爲し、相收司連坐せしむ。姦を告げざる者は腰斬し、姦を告ぐる者は、敵を斬ると賞を同じうし、姦を匿す者は、敵に降ると罰を同じうし、軍功ある者は、各〻率を以て爵を受け、私鬭を爲す者は、各〻輕重を以て刑せらる。大小力を戮せ、耕織を本業とし、粟帛を致すこと多き者は、其の身を復し、末利を事とし及び怠りて貧しき者は、擧げて以て收孥と爲す。令既に具はりて、未だ布かず。三丈の木を國都の市の南門に立て、民を募る「能く北門に徙す者あらば十金を予へん」と。民之を怪み、敢て徙すもの莫し。復た曰く「能く徙す者には五十金を予へん」と。一人有り、之を徙す。輒ち五十金を予ふ。乃ち令を下す。太子、法を犯す。鞅曰く「法の行はれざるは上より之を犯せばなり。君の嗣は刑を施すべからず」と。其の傅公子虔を刑し、其の師公孫賈を黥す。秦人、令に趨く。

通釋 そこで孝公もとう〳〵決心して法令を改定した。即ち、人民に五軒と十軒の組合を作らせて、その組合内のものは、互ひに監督し合ひ、若し一軒に罪があれば他の九軒も同罪に處せられる制であ

る。人の惡事を知りながら告發しない者は腰から斬つて二つにせられる。人の惡事を告發したものは、戰に出て敵を斬つたと同樣に賞せられ、人の惡事を隱したものは、敵に降參したと同樣に罰せられる。軍の手柄あるものは、それ〴〵割合を以て（手柄次第で）位を賜はる。個人の怨みを以て鬪爭をするものは、それ〴〵罪の輕重によつて刑せられる。貴賤貧富ともに力をあはせて農業機業を本業として努めること。穀物や布帛を多く上納したものは、其の身の租稅や夫役を免される。商工業などの、農業以外の儲けに骨折るもの、及びなまけてゐる貧乏なものは、之を檢擧して、その妻子までも取り上げて、お上の奴婢とするといふのであつた。新法令は出來たけれども、まだ發布しない（その前に先づ以てお上の命令の威信を人民に示しておく必要があるといふわけで）、三丈の木を人通りの多い都の市中の南門に立てゝ、「この木を北門の方へ移すものがあつたならば、十金を與へよう」と、懸賞募集をした。併し人民は之を疑ひ怪しんで、思ひ切つて移さうとする者がなかつた。そこで再び布達して、「北門へ移したものは五十金を與へよう」と曰つた。すると或一人が（半信半疑で）それを北門に移した。鞅は文句なしに約束通りの五十金を與へた（斯樣にしてお上の威信を十分に知らしめておいて）、始めて新法令を出した。然るに間もなく孝公の太子が、その法令を犯した。鞅は、「一體、法令が

行はれないといふのは、先づ身分の高い人からして之を犯すからである。（宜しく罰すべきものであるが）、君侯のお世嗣には刑罰を加ることが出來ないから、（その輔佐役の者が責任を負ふべきだ）」といふので、お守役の公子虔を刑し、御指南役の公孫賈に入墨して罰した。秦の人民（これを聞いてその嚴格さに恐れをなし）、皆その法令に從つた。

語釋 什伍（民家十軒を什といひ、五軒を伍といふ。これを一つの組合に造つて、小さな自治組織にすること。德川時代にあつた五人組といつたやうなものである。）　○收司（たゞし戒めること。即ち互ひに取締り合ふこと。）　○連坐（まきぞへを食ふこと。ここでは一家が罪を犯せば、組合の九家ともに同罪に處せらるることをいふ。）　○腰斬（こしぎりの刑、腰を斬つて一身を兩斷すること。）　○率（音リツ。利率などの率で、わりあひ、差等の意。）　○大小（大は富貴、小は貧賤。人民の身分の區別をいふ。）　○復二其身一（復は免除すること。其ノ身に割り當てられた租税や夫役などを免除されるをいふ。）　○末利（農業本位なるに對して、商工業によつて利益を得ることを末利といつたのである。）　○收孥（收は沒收、孥は妻子のこと。その妻子をも沒收して官の奴婢とするをいふ。）　○三丈之木（周末戰國時代の一尺は今の我が曲尺六寸一分弱であるといふ說によると、三丈は略ぼ我が一丈八尺餘になる。）　○予二十金一（予は與に通じてアタフと訓ず。）　○輒（スナハチと訓じ、タヤスクの意。「すら〱と文句なしに」などいふ意を含めたのである。）　○黥（いれずみ。額に入墨してその罪せられたことを標示することで、刑罰の一つ。）　○趨レ令（趨は、はしりおもむく意、命令に服從すること。）

行レ之十年。道不レ拾レ遺、山無二盜賊一、家給人足、民勇二於公戰一、怯二於私鬭一、鄉邑大治。初言二令不便一者、來言二令便一。鞅曰、皆亂レ法之民也。盡遷二之邊一。民莫二敢議一レ令

爲法之弊

渭水盡赤

民、父子兄弟同室内息者爲禁。廢井田、開阡陌、更爲賦稅法。秦人富强。封鞅商於十五邑、號曰商君。孝公薨、惠文王立。公子虔之徒、告鞅欲反。鞅出亡。欲止客舍。舍人曰、商君之法、舍人無驗者坐之。鞅歎曰、爲法之弊、一至此哉。去之魏。魏不受、内之秦。秦人車裂以徇。鞅用法酷。步過六尺者有罰。棄灰於道者被刑。嘗臨渭論囚。渭水盡赤。

訓讀 之を行ふこと十年。道、遺ちたるを拾はず、山に盜賊なく、家々給し人々足り、民、公戰に勇んで私鬪に怯れ、郷邑大いに治まる。初め令の不便を言ひし者、來つて令の便を言ふ。鞅曰く、「皆、法を亂るの民也」と。盡く之を邊に遷す。民敢て議するもの莫し。民に令して父子兄弟の同室内息するものは禁と爲し、井田を廢し、阡陌を開き、更めて賦稅の法を爲す。秦人富強なり。鞅を商於の十五邑に封じ、號して商君と曰ふ。孝公薨じ、惠文王立つ。公子虔の徒、「鞅、反せんと欲す」と告ぐ。鞅、出亡す。客舍に止まらんと欲す。舍人曰く、「商君の法、人の驗無き者を舍すれば之に坐す」と。

鞅、歎じて曰く、「法を爲すの弊、一に此に至る哉」と。去つて魏に之く。魏受けずして之を秦に內る。秦人、車裂して以て徇ふ。鞅、法を用ふること酷なり。步、六尺に過ぐる者は罰あり。灰を道に棄つる者は刑せらる。嘗て渭に臨んで囚を論ず。渭水盡く赤し。

【通釋】かくて新法を行ふこと十年に及んだが、(人民はその刑法の嚴しさに恐れて)、道に遺し物があつても、(拾つては罰せられるから)拾はず、山中にも盜賊が出なくなり、どこの家もゆつたりとして、誰も滿足に暮らしてゆけるやうになつた。また人民は國家の爲めの戰爭には勇んで戰ふが、個人間の喧嘩には臆病になり、町村ともに大變よく治まつた。(扨さうなると勝手なもので)、初めは新法の不便さを非難したものも、今は却つてそれが便利であることを讚美して來るやうになつた。そこで鞅は、(「譽めるにしろ毀るにしろ、人民として國家の法令を彼是と批評するといふことが可ない、さういふ者が卽ち)國家の法を亂すものなのである」と言つて、盡く國はづれの邊鄙へ逐ひやつてしまつた。(この勢ひに愈〻恐れをなして)、人民は思ひ切つてお上の政治を彼是いふものも無くなつた。鞅は更に人民に命令して、親子兄弟が一つ家に同居することを禁じた。(それによつて戶數を殖して家每に稅金を取り兵役を課さうとするのである)。又、從來の井田の法を廢めて、田と田の間の縱橫の畦道をつ

ぶして田地を廣くし、新たに税を割りあてる方法を設けた。(かういふ風な政治によつて)、秦は、富み兵は強くなつた。(これ皆鞅の功によるといふので)、秦は、鞅に、商・於を首めとして十五の城下を領地として與へ、尊んで商君と云つた。(公孫鞅を商鞅といふのはこの故である)。秦の孝公薨じて惠文王が立つた。ところで公子虔の一類の者は、(前に虔が商鞅の爲めに罰せられた怨みがあるので)、この時、「商鞅は謀反の企てがある」と訴へ出た。そこで商鞅は(罪せられることを恐れて)秦の國を亡げ出した。さて或る宿屋に泊らうとすると、宿の主人の曰ふやうには、「商君の掟として、旅行免狀を持たぬ旅人を泊めたものは、本人同罪に處するといふことで御座いますから、(旅行劵をお持ちでないならばお泊め申すことは出來ません)」と。商鞅それを聞いて、「あゝ、あんまり細かな法律を作ることの弊害は、何とこんなものかなあ」と言つて(自縄自縛の悲哀を)歎いた。そこを去つて魏の國へ往つたが、(魏は嘗て商鞅の爲めにだまし討に遇うた怨みがあるので)、商鞅をかくまつて世話しようとは爲ないで、却て(商鞅を捕へて)秦の國へ突出した。そこで秦人はこれを車裂の刑にして、世人の見せしめにした。抑ゝ商鞅は法令を行ふことが嚴しすぎた。(たとへば人民の田地を測量して)、一歩が六尺以上になつてゐると、(田地は廣くして税は減ずるわけになるから)之を罰する。また灰は(肥料となるものだ

のに、之を粗末にして）道路に棄てたりするものは、（農業をなまけるものだといふので）刑せられる。或時渭水のほとりに於て多くの囚人の罪を斷じたが、（片ツ端から死刑にしてしまつたので、その血の爲に）、渭水の水が眞赤になつたといふことである。

		百畝 私田
	百畝 公田	

語釋 家給人足（一家としても生活がゆつたりとし、一人としても滿足して暮らしてゆくこと。國家全體が富裕で太平なるをいふ。）○同室內息（一つ家の内に同居すること。支那は古來家族制度の一現象として、父子兄弟が一大家族をなして一つ家に同居して生活するといふ風習があつた。商鞅がそれを禁じてそれ〴〵別居せしめたのは、それによつて戸數を增加し、家毎に課する賦稅・兵役を多くしようと計つたのである。）○井田（周代の田制で、耕地を圖の如く井の字形の九區に分ち、各一區を百畝とし、中央の一區を公田とし、他の八區を私田として八家に分與する。八家は相共に一公田を耕してその收穫を官に上納し、又各々私田を耕して自己の產を立てるといふ制度である。）○開二阡陌一（阡は南北の道、陌は東西の路のこと。井田の縱橫の經界に設けた道路をいふ。「開」とはその道路をつぶして開墾し、それだけ田地を擴めたといふ意。）○商於（今河南淅川縣の西にある二邑。）○出亡（亡はニグと訓ず、出奔すること。）○驗（證、しるし、である。てがた。こゝは旅行劵の意。）○坐（前出の「連坐」と同意。）○一至レ此哉（一はヒタスラとかヒトヘニとかいふ意で、下の「此ニ至ル」を强める詞。ひとへに斯うまでに立ち至るものかと、自ら驚き異しんだのである。一說に一は亦の義であると。）○內二之秦一（內は納と通じて用ひて送り込むこと。こゝは魏が商鞅を捕へて秦へ突き出しだといふ意。）○車裂（クルマザキといふ刑。兩手兩足と首とを五つの馬につなぎ、之を鞭ち走らせて五體を引き裂くのだといふ。最も殘酷な刑である。）○徇（トナフと訓ず、見せしめのために遍く衆人に示すこと。）○步過二六尺一（秦の制では、田地を量るのに六尺を一步とし、二百四十步を一畝とする。然るに今六尺以上を以て一步として計る時には、地積は內實は多くして表面は少いことになり、それだけ租稅が減ずるわけである。當にそれを罰するといふのである。）○棄二灰於道一（灰は田の肥料となる、之を路上に捨てるが如きは惰農の所爲であるといふので刑を加へるのである。其他これには種々の說があるが、さまではと思つて省略した。）○渭（川の名。秦の都咸陽（陝西

甘茂伐韓

曾參殺人

息壤在彼

省)の南を流れて黄河に注ぐ。)

惠文王薨、子武王立。武王使甘茂伐韓。茂曰、宜陽大縣、其實郡也。今倍數險、行千里、攻之難。魯人有與曾參同姓名者。殺人。人告其母。母織自若。及三人告之、母投杼下機、踰牆而走。臣賢不及曾參。王之信臣、又不如其母。疑臣者非特三人。臣恐大王之投杼也。魏文侯使樂羊伐中山。三年而後拔之。反而論功。文侯示之謗書一篋。再拜曰、非臣之功。君之力也。今臣羇旅之臣也。樗里子・公孫奭挾韓而議、王必聽之。王曰、寡人弗聽。乃盟息壤。茂伐宜陽。五月而不拔。二人果爭之。武王召茂、欲罷兵。茂曰、息壤在彼。王乃悉起兵佐茂、遂拔之。武王有力好戲。力士任鄙・烏獲・孟說、皆至大官。王與孟說舉鼎、絶脈死。

訓讀 惠文王薨じて、子の武王立つ。武王、甘茂をして韓を伐たしむ。茂曰く、「宜陽は大縣にして、其の實は郡なり。今、數險に倍き、千里を行き、之を攻むること難し。魯人、曾參と姓名を同じうする者あり。人を殺す。人、其の母に告ぐ、母織ること自若たり。三人之を告ぐるに及んで、母、杼を投じ、機を下り、墻を踰えて走る。臣の賢は曾參に及ばず、王の臣を信ずること又その母に如かず、臣を疑ふ者特に三人のみに非ず。臣、大王の杼を投ぜんことを恐るゝ也。魏の文侯、樂羊をして中山を伐たしむ。三年にして後之を拔く。反つて功を論ず。文侯之に謗書一篋を示す。再拜して曰く、『臣の功に非ず、君の力なり』と。今、臣は羇旅の臣なり、樗里子・公孫奭、韓を挾んで譏らば、王必ず之を聽かん」と。王曰く、「寡人聽かず」と。乃ち息壤に盟ふ。茂、宜陽を伐つ、五月にして拔けず。二人果して之を爭ふ。武王、茂を召して、兵を罷めんと欲す。茂曰く、「息壤彼に在り」と。乃ち悉く兵を起して、茂を佐け、遂に之を拔く。武王力あり、戲を好む。力士任鄙・烏獲・孟說、皆、大官に至る。王、孟說と鼎を擧げ、脈を絕つて死す。

通釋 惠文王が亡くなつて、子の武王が立つた。武王は、將軍甘茂に、韓を伐ち（その宜陽の地を取るやうに）命じた。甘茂は答へていふ、「韓の宜陽は大きな縣で、（縣とは申すものゝ）實は郡であり

ます。然るに今、數ケ所の險岨を冒し、千里の遠きに出征して、これを攻め取るといふことは、なか〳〵困難な事であります。(それで隨分時日を要する事と思ひますが、さうなると、いろ〳〵の非難や讒言が入るのが常で、隨つて大王にも疑惑の心を起され、その爲に出先の大將は功を全うすることが出來ぬやうになるのが見えすいて居ります。それに就てこんな話があります)。魯の人で、(孔子の門人の)曾參と同名のものがあり、それが人殺しを致した。或人がその事を(孔子の門人たる)曾參の母親に知らせてやりました。が、母親は(我が子を信ずることが厚いから)いつものやうに機を織つてゐて驚いた樣子も御座らぬ。然るに、一人のみならず、二人、三人までが、(あなたの息子が人殺しをした)と知らせて來たので、さすがの母も(さてはと驚いて)、持つてゐた杼を投げ捨て、機臺を飛び下り、垣根を乘り越えて、急いで其場へ走つて行つたと申しまする。(曾參の賢と其の母の信とを以てしても、人の言葉の入り易いこと斯くの如くであります。まして)私は曾參の賢に及ばず、大王が私を御信用下さる程度も、曾參の母が其子を信ずるには及ばず、而して私を疑ふ者はたゞに三人のみではありませぬから、私は、大王が、(私を誹る者の言葉を信ぜられて)、杼を投げ捨てらるゝに至ることを恐るゝものであります。又魏の文侯が、その臣樂羊に中山を伐たせたとき、三年もかゝつてやつと

攻め落し、國に返つて手柄話を致したところ、文侯は（樂羊を）非難した手紙が（積つて）一函もあるのを示されました。（樂羊はそれを見て）、文侯の前に拜謝し、「（中山を伐つたのは）私の手柄では御座りませぬ。（これほどの非難をもお取上げなく、私を信用して、戰爭を續けさせて下さつた）、大王のお力でござります」と申したさうであります。今、私は他國のわたり者で、（譜代の臣のやうに信用も厚くありませぬ）。そこへ樗里子や公孫奭など（韓と因緣の深い人達が）、韓の爲めを思ふ心を腹に持つて私の事を惡く言ふならば、大王はきつとそれを信用なさるでありませう。（そんな事では到底出先の我々は堪りませぬ）」と申した。武王は「いや、予はそんな事は信じない」と言ふ。そこで息壤といふ處で、（讒言を信じないといふ）堅い誓ひを立てた。甘茂は愈々宜陽を征伐した。ところが五ケ月經つても落ちない。すると樗里子・公孫奭の二人は、案の定（甘茂を呼び戻すがよいと）切つて王に申すので、武王は甘茂を呼び戻し、戰をやめようとした、「（堅いお約束を致した）あの息壤は、あれ、あすこに御座ります。（よもや誓を忘れにはなりますまい）」と甘茂が言つた。そこで武王も悟つて）全部の兵を出して甘茂の軍を佐け、遂に宜陽を攻め落した。この武王といふ人は勇力があつて、常に力業の遊びを好んだ。それで任鄙・烏獲・孟說などいふ力士が（寵愛されて）、皆立派な役目に取立てられた。或

時、武王はその孟說と（力競べをして）重い鼎を持ち上げたところ、筋が切れて死んでしまつた。

語釋　宜陽大縣其實郡也（宜陽は韓の邑。今河南河洛道に屬する。郡と縣との關係は我國とは反對で、郡の方が縣より大きかつた。）　○倍數險（倍は背と同じでソムクと訓むことは前に述べた。險に倍くとは險阻みぬこと。險を冐す意。）　○曾參（を顧孔子の門人。篤實を以て知られ、孔門の高弟である。孝經はその著。）　○自若（そのまゝで動かぬこと。おちついて平然たること。）　○杼（音チヨ。ひ。機織の時、ヨコイトを卷いたくだを入れる。且つ古は木製で、多く舟の形をなす。之をタテイトの間へ左右から通はして緯絲を組織する。）　○中山（國名。今の直隷定縣。）　○謗書一篋（そしりの手紙一はこ。）　○羈旅之臣（羈は寄の義で、旅して身を寄寓すること。また旅をいふ。羈旅之臣とは他國者、又はワタリ者、旅の者などいふ意。甘茂はもと楚の人、來つて秦に仕へたものである。故にいふ。）　○樗里子・公孫奭（樗里子は秦の惠文王の弟で、名は疾といふ人。その鄕に大樗があるといふので樗里子と號した。その母は韓の女である。公孫奭は、もと韓の公子。故に二人ともに韓と關係あり、韓に好意を有するものである。）　○挾韓（韓をかばふ心を腹に持つて。）　○息壤（秦の邑。後世、息壤を約束といふ意に用ひるのは此に本づく。）　○爭之（強ひて自分の言ふ事に從はせようとして、相手の說を排して言ひ爭ふ意。）　○絕脈（脈は血理の脈管である。然るに史記の秦本紀には絕臏とある。臏は足の筋である。隨つて又足の筋を切ることをもいふ。前出「齊」の「孫臏」の條參照。）

范雎佯死

弟昭襄王稷立。有魏人范雎者。嘗從須賈使齊。齊王聞其辯口、乃賜之金及牛・酒。賈疑雎以國陰事告齊、歸告魏相魏齊。魏齊怒、笞擊雎、折脅拉齒。雎佯死。卷以簀、置廁中、使醉客更溺之、以懲後。雎告守者得出、更姓名曰張祿。秦使者王稽至魏、潛載與歸、薦于昭襄王、以爲客卿。

遠交近攻

教以遠交近攻之策。時穰侯魏冉用事。雎說王廢之、而代爲丞相、號應侯。魏使須賈聘秦。

睢蔽衣間歩、往見之。

訓讀 弟の昭襄王稷立つ。魏人范睢といふ者有り。嘗て須賈に從つて齊に使す。齊王、其の辯口を聞き、乃ち之に金及び牛酒を賜ふ。賈、睢が國の陰事を以て齊に告げしかと疑ひ、歸つて魏の相の魏齊に告ぐ。魏齊怒り、睢を笞撃し、脅を折り齒を拉く。睢、佯り死す。巻くに簀を以てし、厠中に置き、醉客をして更々之に溺せしめ、以て後を懲す。睢、守者に告げて出づるを得、姓名を更めて張祿と曰ふ。秦の使者王稽、魏に至り、潛かに載せて與に歸り、昭襄王に薦めて以て客卿と爲す。敎ふるに遠交近攻の策を以てす。穰侯魏冉、事を用ふ、睢王に說きて之を廢せしめ、而して代りて丞相と爲り、應侯と號す、魏、須賈をして秦に聘せしむ。睢、敝衣間歩し、往きて之を見る。

通釋 (武王の後には)その弟の昭襄王(名は稷)が立つた。時に魏の人で范睢といふものがある。嘗て魏の大夫の須賈といふ人に附いて齊の國に使したことがあつた。齊王はかねて范睢が辯舌の才あることを聞いてゐたので、金や牛肉や酒などを與へて(大いに優待した)。すると須賈はそれを見て、(こいつ怪しいぞ)きつと魏國の秘密を齊へ内通したに違ひない、(だから齊王があんな眞似をするん

だ」と疑つて、歸ると魏の宰相の魏齊にその事を告げた。魏齊は怒つて雎をむちうち、その肋骨を折り、齒を碎き落してしまつた。雎は死んだ風をしてゐた。魏齊は（それとは知らず、本當に死んだものと思ひ）雎を簀に卷いて便所の中へ入れ、酒に醉うたお客に更る〲小便をしかけさせた。さうして今後の賣國奴の懲らしめにした。雎は隙を見て、番人に賴んで、やつとそこを逃げ出すことが出來たが、それからは張祿と變名して世を忍んでゐた。ところが秦の使の王稽といふのが魏へ來て、（范雎を見つけ出し）こつそり自分の車に載せて一緒に連れかへり、秦の昭襄王に推薦して、賓客扱ひの大臣とした。そこで范雎は秦王に對して、遠い國々とは親睦を結び、近い國々を攻め取るといふ政策を教へた。その頃（秦の國では）魏冉といふ者が穰侯と號して政事を一人で切りまはし我儘を極めてゐた。そこで范雎は昭襄王に說いて魏冉を罷めさせ、その代りに自分が宰相となり、應といふ地を賜はつて應侯と云つた。（そんな事とは知らず）魏の國では須賈を使として秦を訪問させたものだ。それと聞いた范雎は、わざと破れた着物を着て人目を忍んでこそ〱と、その宿屋へ往つて須賈に會つた。

【語釋】范雎（この人の名はスヰだといひショだといひ、古來やかましい議論がある。目扁ならばスヰだし、且扁ならばショである。通鑑の注には音雖（スヰ）とある。併し韓非子に范且となつてゐる處から考へるとショがよいやうである。だが姑らく普通の說に從つて目扁のスヰとしておく。）○折レ脅拉レ齒（脅は音ケフ、肋骨をいふ。拉は音ラツ。クダクと訓ず。たたきくだくこと。）○簀（音サク。すのこ。竹、葦で編んだスダレの類。）○溺（この字デキと讀めばオボルであり、ネウと讀めば尿に

一寒如レ此

綈袍戀々

睚眦之怨必報

通じて小便の意となる。）　○客卿（賓客として禮遇する大臣。）　○遠交近交之策（遠い國に親み近い國を伐ち、その近い國が我が有となれば段々と遠い國に及ぼしてゆくといふ政策で、領土を擴張するのに一番都合のよい謀である。）
○敝衣間歩（敝は弊に同じく破れること。間歩は人目を避けてコソ〳〵と歩いてゆくこと。しのびあるき。）

賈驚曰、范叔固無恙乎。留坐飲食、曰、范叔一寒如此哉。取一綈袍贈之。遂爲賈御至相府、曰、我爲君先入通于相君。賈見其久不出、問門下。門下曰、無范叔。鄕者吾相張君也。賈知見欺、乃膝行入謝罪。睢坐責讓之曰、爾所以得不死者、以綈袍戀戀尚有故人之意爾。乃大供具、請諸侯賓客、置莝豆其前而馬食之、使歸告魏王曰、速斬魏齊頭來。不然且屠大梁。賈歸告魏齊。魏齊出走而死。睢既得志于秦、一飯之德必償、睚眦之怨必報。

訓讀　賈驚いて曰く「范叔、固に恙なき乎」と。留り坐して飲食せしめ、曰く「范叔、一寒此くの如き哉」と。一綈袍を取りて之に贈る。遂に賈の爲に御して相府に至り、曰く「我れ君の爲に先づ入りて相君に通ぜん」と。賈、其の久しく出でざるを見て、門下に問ふ。門下曰く、「范叔無し。鄕の者

は吾が相の張君なり」と。賈欺かれたるを知り、乃ち膝行して入りて罪を謝す。睢、坐して之を責讓して曰く、「爾が死せざるを得る所以の者は、綈袍戀々として故ほ故人の意あるを以て爾」と。乃ち大いに供具し、諸侯の賓客を請ひ、莝豆を其の前に置きて之を馬食せしめ、歸つて魏王に告げしめて曰く、「速かに魏齊の頭を斬り來れ。然らずんば且に大梁を屠らんとす」と。賈歸つて魏齊に告ぐ。魏齊出で走りて死す。睢既に志を秦に得、一飯の德も必ず償ひ、睚眦の怨も必ず報いたり。

〔通釋〕須賈は驚いて「范叔（叔は睢の字）、お前、ほんとにまだ無事だつたのか」と言つて、引き留めて一緒に坐らせて食事をした。（須賈は范睢のみすぼらしい風體をつくぐ〵が見て）、「范叔、お前、（まあ、寒さうぢやないか）、そんなに、貧乏なのか、（氣の毒なことぢやなあ）」と言つて、一枚の厚い絹の綿入を取り出して與へた。それから范睢は須賈の爲めに馬車を御して宰相の役所の門まで行つたが、「（暫らくお待ちなさい）、私が貴君のために一足先へ入つて宰相樣にお取次を致しませう」と言つて入つてしまつた。須賈は何時まで待つても范睢が出て來ないものだから、門番に（范叔はどうしたのだらうと）尋ねて見た。すると門番の曰ふには、「范叔などといふ人は居りません。さつき入つて行かれたのは宰相の張祿樣ですよ」と。そこで須賈は始めて欺されたことが分つたが、（分ると同時に全く恐

れ入つてしまひ）膝でにじり歩いて邸内へ入り、范睢にお詫を申し上げた。すると范睢は横柄に坐つたまゝ須賈を責め咎めて曰ふには、「（昔の事を思ひ出せば、本來お前は生けておくべき者でないのだが）併し生命だけは助けてやる、といふ譯は、あの綿入を惠んでくれた心が、いかにも懷かしさうに濃やかで、今なほ昔なじみの友人の情誼があるからだ」と。そこで大いに御馳走をして、（折から咸陽へ來合せた）諸大名の使者たちを招待し、須賈の前には藁を切つて豆を交ぜた秣を置いて、馬あつかひにしてそれを食はせた。（さきに簀卷にして小便をかけられた返報である）。さうして歸つて魏王に言はせるには「早速、魏齊の首を斬つて持つてござれ。さもなくば大梁の都を攻め落すでござらう」と。須賈ははふ〳〵の體で逃び歸つて、その事を魏齊に告げた。魏齊は恐れて國を逃げ出して死んでしまつた。斯くて范睢は秦に於て成功し大得意であつたが、以前たつた一杯の飯を惠まれた恩でも必ず返禮をなし、その代り人がちよつと睨んだといふ位の僅かな怨みでも、きつと返報をせねばおかなかつた。



一寒（寒は「サムイ」といふ意からして貧乏といふ意味。「一」はその程度の甚だしいことを意味する添字である。）○綈袍（綈は荒い絲で厚く織つたキヌ。つむぎの類。袍は綿入である。綈袍は我國のドテラの類と見ればよからう。）○鄕（嚮の字に同じい。これを「鄕」とも書けば「向」とも書く。）○膝行（ヒザでゐざつてあるく。恐縮の體である。）○責讓（讓もセメルと訓ずる。但し口上で責めとがめる意である。）○戀々（なつかしい意。）○故

周亡

四時之序成功者去

人之意（昔なじみの友人の情誼。）　○供具（酒食をそなへる意で、御馳走すること。）　○諸侯賓客（史記には「諸侯之使」とある。諸大名の使者として當時秦の都へ來合せてゐた者をいふのである。）　○請（人をまねくこと。音讀して「請す」ともいふ、招待。）　○莝豆（莝は短く切つたワラ。それに豆をまぜたもので、馬に食はせるカヒバである。）　○馬食（「馬ノ如ク食ハシム」の意で、馬扱ひにして食はせること。一説に、馬がカヒバを食ふやうに箸なしに口づけにして食はせたのだともいふ。）　○大梁（魏の都。今の河南開封府。）　○睚眦（どちらもニラムと訓ず。怒つて目にかど立てゝにらみ合ふこと。）

王既用雎策、歲加兵三晉、斬首數萬。周赧王恐、與諸侯約從、欲伐秦。秦攻周。赧王入秦、頓首請罪、盡獻其邑三十六。周亡。秦將武安君白起與范雎有隙。廢爲士伍、賜劍死于杜郵。王臨朝嘆曰、內無良將、外多強敵。雎懼。蔡澤曰、四時之序、成功者去。雎稱病。澤代之。昭襄王薨、子孝文王柱立。薨。子莊襄王楚立。薨。嗣爲王者政也。遂幷六國。是爲秦始皇帝。

【通解】王既に雎の策を用ひ、歲ごとに、兵を三晉に加へ、首を斬ること數萬なり。周の赧王、恐れて諸侯と從を約し、秦を伐たんと欲す。秦、周を攻む。赧王、秦に入り、頓首して罪を請ひ、其の邑三十六を獻ず。周亡ぶ。秦の將武安君白起、范雎と隙あり、廢せられて士伍となり、劍を賜うて、杜

郢に死す。王、朝に臨んで、歎じて曰く、「内に良將なく、外に強敵多し」と。睢懼る。蔡澤曰く、「四時の序、功を成すものは去る」と。睢、病と稱す。澤之に代る。昭襄王薨じて、子孝文王柱立つ。薨ず。子莊襄王楚立つ。薨ず。嗣いで王たるものは政なり。遂に六國を幷す。是を秦の始皇帝と爲す。

【通釋】（二行目「周亡」までは意味明かなれば略す。なほ語釋を參照されたい）。秦の大將の武安君白起は范睢と仲がわるい。そのために大將の官を罷められて平侍となり、更に劍を賜うて（自殺を命ぜられ）杜といふ宿場で死んだ。昭襄王は朝廷へ出たとき嘆いて曰ふには「内には賴みとすべき良將が無くなり、外には恐るべき強敵が多い。（わが國の運命が案ぜられるわい」と、（白起の死を悲しみ、范睢の處置を怨んだ）。范睢それを聞いて内心おそれを抱いてゐたが、蔡澤これを見て曰ふには「春去つて夏來り、夏去つて秋來る。四季それ〴〵の仕事を濟ませば去つて次に讓るのが自然の順序といふものだ。（貴公も功成り名遂げたら、去つて後役に讓るゝが順序でござらう」と。そこで范睢は病氣と云つて（職を辭し）、蔡澤が之に代つた。（以下、意味明かなれば略す）。

【語釋】睢策（前に見えた遠交近攻の策をいふ。韓魏趙の三晋は最も秦に近い。）○頓首（頭を地につけてお辭儀をすること。）○共邑三十六（邑は城邑と熟し城下町のこと。大なるを都といひ、小なるを邑といふ。）

又ひろく知行所、領地の意味にいふ。周の領地は段々に減じて三十六邑だけを有してゐたのである。）○士伍（士卒の列伍といふ意で、並兵の仲間。ひらざむらひ。卒伍ともいふ。）○杜鄭（杜は地名、鄭は縣即ち宰邑のこと。杜は秦の首都たる咸陽附近にあつた。）○四時之序云々（春は萬物を發生し、終れば去つて夏となり、夏は萬物を成長せしめ、終れば去つて秋なり、秋は成熟し、冬は收藏す。各〻その功を成し終れば去つて代るのが自然の順序である。功成り名遂げたものは退いて後者に讓るべきものだと云つて、范雎に勇退を勸めたのである。）

黄帝以來、天下列百里之國萬區。蓋自中國以達四裔。中國之制、可放於王制者、九州千七百七十三國。古之建侯、各君其國、各子其民、而宗主於天子。歷夏殷至周、强併弱、大呑小、春秋十二國外、存者無幾、戰國存者六七。至是遂併於秦。

訓譯 黄帝より以來、天下、百里の國を列ぬること萬區。蓋し中國より以て四裔に達す。中國の制の王制に放ふべき者は、九州千七百七十三國なり。古の侯を建つるや、各〻その國に君とし、各〻その民を子とし、而して天子を宗主とす。夏殷を歷て周に至り、强は弱を併せ、大は小を呑み、春秋には十二國の外、存するもの幾もなく、戰國には存するもの六七のみ。是に至つて遂に秦に併せらる。

【通釋】黄帝から以來、支那の天下に方百里の國が一萬國もあつたといふ。察するところ中原の地から、四方のはての蠻夷に至るまで、（朝命が屆いて、一統されてゐたものであらう。併し太古の事は精しく分らない）、中國の制度の、「禮記」の王制篇によつて調べ得らるゝ所によると、（冀・兗・靑・徐・揚・荆・豫・梁・雍の）九州に、千七百七十三國があつた。昔、諸侯を置いた時は、諸侯は各〻その國の領主となり、その人民を子の如く愛し、而して上、天子を本家と仰ぎ尊んでいつたものであるが、夏・殷を歷て周となり、（その末春秋戰國となると）、强國は弱國を取り、大國は小國を取つて、春秋の世には主なる十二國（魯・衞・晉・鄭・曹・蔡・燕・齊・宋・陳・楚・秦）の外には、いくらの國もなく、戰國の世は（秦・楚・燕・齊・韓・魏・趙の）六七國だけとなつた。然るに今それも遂に秦の一手に併合されてしまつたのである。

十八史略新釋　卷二(上)

序説

十八史略卷の二は、秦と西漢の事を記したものである。秦は戰國時代の六國を滅して、支那本部を統一して、完全に近い一大帝國を建て、上古より此に至りて一大變局を成し、支那史上に一新紀元を開いた。「先秦」といふ辭があつて、秦の始皇帝以前の時代をさして居る位である。

先秦といふ、辭は「漢書」の河閒献王傳に、「献王所レ得ル書。皆古文先秦舊籍。〔注〕顏師古曰。先秦。猶レ言二秦先一。謂二未レ焚レ書之前一。」による。

秦は僅に二世十五年に亡んだけれども、秦以前の古法は殆んど之を改革し、秦以後の官制治道も、悉く之を創め、漢族は此時に於て優勝的大統一の地位に立ち、新舊古今の時代を劃したものとして注意すべきである。即ち變古と開新と優勝を兼備した時代と稱して不可なき程である。變古開新の大なる者は(一)皇帝といふ尊稱を創めたこと、(二)封建を廢して郡縣としたこと(三)丞相、太尉、御史大夫、即ち行政、兵馬、監察の三大權區別併立の制を定めたこと、(四)萬里長城の築營、(五)文字

の改良普及などである。

次に西漢(又は前漢)は秦に次いで起り、帝權時代の文化を整理總合し支那帝國の建設を完全にした時代である故に漢といふ一王朝の名を以て支那の古今全體を總稱することなり、漢土漢人といへば直に支那及び支那人の義となり、漢文、漢學、漢籍、漢方、漢字、漢竹、漢名などの漢はすべて支那といふ義である。

尙西漢創業初期の諸功臣の身分が多く微賤であつたことは、明治維新初期の諸功臣の身分と比較評論して面白い點があり、又秦と西漢との關係は、豐臣氏と德川氏との關係に似て居るなど、和漢（日支）の比較評論に注意すべきことがある。

秦始皇帝

不韋自殺

秦

秦始皇帝名政。始生于邯鄲。昭襄王時、孝文王柱爲太子。有庶子楚。爲質于趙。陽翟大賈呂不韋適趙、見之、曰此奇貨可居。乃適秦、因太子妃華陽夫人之姉、以說妃、立楚爲適嗣。不韋因納邯鄲美姫。有娠而獻于楚。生政。實呂氏。孝文王立。三日而薨。楚立。是爲莊襄王。四年薨。政生十三歲矣。遂立爲王。母爲太后。不韋在莊襄王時、已爲秦相國。至是封文信侯。太后復與不韋通。王既長。不韋事覺自殺。太后廢處別宮。茅焦諫、母子乃復如初。


秦の始皇帝、名は政、始め邯鄲に生る。昭襄王の時、孝文王柱、太子と爲る。庶子楚有り、趙に質と爲る。陽翟の大賈呂不韋趙に適き、之を見て曰く「此れ奇貨なり居く可し」と。乃ち秦に適き、太子の妃華陽夫人の姉に因りて以て妃に說き、楚を立て〻、適嗣と爲す。不韋因りて邯鄲の美姫を納る。娠める有りて楚に獻ず。政を生む。實は呂氏なり。孝文王立つ、三日にして薨ず。楚立つ、是を莊襄

王と爲す。四年にして薨ず。政生れて十三歳なり。遂に立つて王と爲る。母を太后とす。不韋、莊襄王の時に在つて已に秦の相國たりしが、是に至つて文信侯に封ぜらる。太后復た不韋と通ず。王既に長ず。不韋、事覺はれて自殺す。太后廢せられて別宮に處りしが、茅焦諫めて、母子乃ち復た初の如し。

通解 秦の始皇帝は名は政といひ、始め邯鄲に生れた。(之より前)昭襄王の時、孝文王柱が太子となつたが、その昭襄王の妾腹の子に楚といふ者があつて、趙に人質となつてゐた。そこへ陽翟(地名)の豪商の呂不韋といふものが趙に行つて、楚の人物を見て、「之は珍しい代物である。手に入れ蓄へて置けば(後日きつと利益になるだらう)」と思つた。そこで不韋は(楚と深く交を結び、すつかり楚を我が物としておいて)秦に適き、太子柱の妃である華陽夫人の姉に依賴して華陽夫人に說き付け、(夫人に子のないのに乘じて)楚を立てゝ跡繼とした。それについて不韋は趙の邯鄲の美女を娶り、やがて其の女が身持になると、それを楚に獻じて妃となさしめた。かうして生れたのが政(即ち始皇帝)である。だから政は楚の子ではなくて、實は呂不韋の子である。孝文王柱は立つて王となつたが三日にして薨じた。次に楚が立つた。之を莊襄王といつた、が四年で薨じた。このとき政はまだ十三歳であつたが、

とう／＼立つて王となり、母を尊んで太后とした。さて不韋は既に莊襄王の時から相國になつてゐたが、此の時に至つて文信侯に封ぜられた。然るに太后は再び不韋と密通したが、秦王政も最早生長してゐたので、不韋は不義の事が露見して自殺した。太后も太后の尊號を廢せられて別の御殿に置かれたが、茅焦といふ者が秦王を諫めたので、(太后も再び都に還つて)、母子の親しみは以前のやうになつた。

語釋 庶子(妾腹の子。) ○爲質(質はこの場合は音チで人質のこと。卽ち約束の保證として相手方に渡される人のこと。) ○奇貨可居(奇貨は珍しい貨物(しろもの)、居は蓄へおく意。楚を品物に喩へて、珍しい代物ゆゑ手に入れ蓄へておけば他日必ず大儲けがあらうといふのである。後世は轉じて「機乘ずべし」とか「好機逸すべからず」とかいふ意に用ひられて、本義を失ふやうになつた。) ○適嗣(嫡嗣に同じい。) ○相國(官名、百官のかしらで我が國の總理大臣の如きもの。昔は太政大臣の唐名として用ひた。平淸盛を平相國といふやうに。) ○茅焦(茅は姓、焦は名、もと齊の人、この時は秦の臣であつた。)

逐客之議

李斯上書

秦宗室大臣議曰、諸侯人來仕者、皆爲其主游說耳。請一切逐之。於是大索逐客。客卿李斯上書曰、昔穆公取由余於戎、得百里奚於宛、迎蹇叔於宋、求丕豹・公孫枝於晉、幷國二十、遂霸西戎。孝公用商鞅之法、諸侯親服、至今治强。惠王用張儀之計、散六國從、使之事秦。昭王得范雎、强公室。此

泰山不讓土壤

韓非刑名

四君者、皆以客之功。客何負於秦哉。泰山不讓土壤、故大。河海不擇細流、故深。今乃棄黔首、以資敵國、卻賓客、以業諸侯。所謂籍寇兵、而齎盜糧者也。王乃聽李斯、復其官、除逐客令。斯楚人。嘗學於荀卿。秦卒用其謀、併天下。有韓非者。善刑名。爲韓使秦。因上書。王悅之。斯疾而間之、遂下吏。斯遺之藥令自殺。

訓讀 秦の宗室大臣、議して曰く、「諸侯の人來りて仕ふる者は、皆其の主の爲に游說する耳。請ふ、一切之を逐はん」と。是に於て大いに索めて客を逐ふ。客卿李斯、上書して曰く、「昔穆公、由余を戎に取り、百里奚を宛に得、蹇叔を宋に迎へ、丕豹・公孫枝を晉に求めて、國を幷すること二十、遂に西戎に覇たり。孝公、商鞅の法を用ひて、諸侯親服し、今に至るまで治りて強し。惠王、張儀の計を用ひて、六國の從を散じ、之をして秦に事へしむ。昭王は范雎を得て、公室を強うせり。此の四君は、皆客の功を以てす。客何ぞ秦に負かん哉。泰山は土壤を讓らず、故に大なり。河海は細流を擇はず、

故に深し。今乃ち黔首を棄てゝ、以て敵國に資し、賓客を卻けて、以て諸侯を業く。所謂寇に兵を藉し、盜に糧を齎す者也」と。王乃ち李斯に聽きて、其の官を復し、逐客の令を除く。斯は楚人なり。嘗て荀卿に學ぶ。秦卒に其の謀を用ひて天下を倂す。韓非といふ者あり。刑名を善くす。韓の爲に秦に使し、因つて上書す。王之を悅ぶ。斯、疾んで之を間し、遂に吏に下す。斯、之に藥を遺つて自殺せしむ。


秦の王族並びに大臣等が會議して、「諸侯の國の人で我が國に來て仕へて居る者は、實は皆それ〴〵自分の國の主人の利益になるやうに說きつけに來て居るのに外ありませぬ。どうかすつかり斯樣の者を放逐してしまひたいもので御座います」と願ひ出た。そこで(秦王はこれを許し)、嚴重に搜索して外來者を國外に追放した。するとその外來者で秦の大臣になつてゐる李斯が意見書を上つて曰ふには、「昔、御先祖の穆公は由余といふ人物を西戎からお取り上げになり、百里奚を宛から手に入れられ、蹇叔を宋から迎へ取られ、丕豹や公孫枝などいふ人物を晉から求められました。(さうして此等の人物の力を借りて)、二十ケ國を倂呑し、遂に西戎の地にあつて諸侯の覇者となられました。又孝公は商鞅の政策を採用されて、諸侯が親しみ服し、今に至るまで國治まり兵強いのであります。次に

惠王は張儀の計略を用ひて六國の合從を瓦解させ、彼等をしてあべこべに我が秦に事へしめられました。次に昭王は范雎を任用してお家を盛んに致されました。およそ此の四人の御先祖は皆外來者の功によつて大業を成されたのであります。外來者だとてどうして秦の不爲を致しませうや。かの巍々たる泰山は如何なる土塊でも辭退せずに受け入れたればこそ、あのやうに高大になつたのであります。又洋々たる黄河や大海は、如何なる細い流れでも擇りきらひなく受け込むからこそ、あのやうに深くなつたのであります。(すべて自らの「大」を成さうとする事は、内外大小清濁併せ呑むの大度量がなくてはなりません)。(然るに今、君にはこの道理に背いて)、大切な人民を棄てゝ(敵國の民とならせて)敵國を助けるやうなことを爲し、有爲の賓客を退けて、(諸侯の國に往かせて)諸侯の利益を計るやうなことをなさるのは、諺にいふ「敵に武器を貸してやり、泥棒に糧食を與へてやる」やうなものであります」。——(これが有名な李斯の逐客上書といふ文の大要である)。王はそこで此の意見を取り上げ、(さきに剝奪した)李斯の官を元どほりに復し、外來者追放の命令を撤回した。この李斯といふ人物は楚の國の生れで、嘗て荀卿に學んだことがある。秦は遂に彼れの謀を用ひて天下を倂呑することになるのである。また韓非といふ者があつて、名により實を制する學に明かであつた。嘗て韓の國

六國亡

の使者となつて秦へやつて來た。因つて上書して天下を併呑する策を進めたので秦王政は之を悅んだ。然るに李斯は韓非の才能をにくみ、(讒言をして、韓非と王との仲を)離間し、とう〳〵獄に入れてしまつた。そして(好意の樣に見せて)韓非に毒藥を與へて自殺させた。

語釋 宗室(御一門といふ意で同族全體をいふ。また時にはその總本家だけを指すこともある。) ○客(他國から入つて來てゐるもの。他國者、よそもの。) ○客卿(他國から來て大臣となつたもの。お客家老とでもいふか。) ○李斯(もと楚の人、秦の丞相となつて辣腕を振つたが、後ち讒に遇うて斬罪に處せられた。) ○穆公(繆公に同じい。秦の君、春秋五覇の一人、四九頁參照。) ○由余(もと晉人であるが逃げて戎(西方のエビス)へ往つたので穆公が策略を以て秦に降らしめ、後ちその謀を用ひて戎の國を攻め取つた。) ○百里奚・蹇叔(四九頁以下參照。蹇叔はもと岐州の人であるが、宋に居つた時、百里奚が穆公に推薦したのである。) ○丕豹(もと晉の人。父は鄭といひ晉の大夫であつたが、惠公が、之を殺したので、豹は秦へ走つた。それを穆公が用ひたのである。) ○公孫枝(岐州の人、時に晉に遊び遂に秦に歸した。) ○孝公・商鞅(三一八頁參照。) ○張儀(魏の條參照。) ○六國從(從は合從の意。二三九頁參照。) ○黔首(黔は音ケン。黑の義、頭髮の黑きによつて人民のことをいふ、一說に人民は黑い頭巾をかぶつたからだともいふ。) ○業二諸一侯(業はタスクと訓ず、上の資の字の意味と同じい。) ○荀卿(名は況、世人これを尊んで卿と云ふ。趙の人。孟子の後に出で、孟子の性善說に對して、性惡說を唱へた。孟子と共に戰國の二大儒である。) ○韓非(韓の公族である。嘗て李斯と共に荀卿に學び、商鞅や申不害等の民治主義の學說を研究し、これに老莊の虛無靜退の說を應用して、終に法家の學說を大成した。謂はゆる刑名の學である。著述には「韓非子」二十卷があり、就中、孤憤・五蠹・說難の諸篇が最も有名で、透徹した觀察、警拔な筆致、よく世態人情の機微を穿つて、辛辣骨を刺すの趣がある。) ○刑名(刑は形で、實績をいふ。官吏を任用するのに、その人の議論卽ち名と、その實際の成績卽ち形との一致するや否やを察して進途賞罰すべしといふ說。)

十七年內史勝ノ滅シレ韓ヲ、十九年王翦滅シレ趙ヲ、二十三年王賁滅シレ魏ヲ、二十四年王翦滅シレ楚ヲ、二十五年王賁滅シレ燕ヲ、二十六年王賁滅スレ齊ヲ。秦王初メテ并セ二天下ヲ一、自ラ以ヘラク德

號曰皇帝

傳二無窮一

兼二三皇一、功過二五帝一。更號曰二皇帝一。命爲レ制、令爲レ詔、自稱曰レ朕。制曰、死而以レ行爲レ謚、則是子議レ父、臣議レ君也。甚無レ謂。自レ今以來、除二謚法一、朕爲二始皇帝一、後世以計レ數、二世三世至二于萬世一、傳二之無窮一。收二天下兵一、聚二咸陽一、銷以爲二鍾・鐻・金人十二一。重各千石。徙二天下豪富於咸陽一、十二萬戶。

【訓讀】十七年、內史の勝、韓を滅し、十九年、王翦、趙を滅し、二十三年、王賁、魏を滅し、二十四年、王翦、楚を滅し、二十五年、王賁、燕を滅し、二十六年、王賁、齊を滅す。秦王初めて天下を幷せ、自ら以へらく、德は三皇を兼ね、功は五帝に過ぐと。更め號して皇帝と曰ふ。命を制と爲し、令を詔と爲し、自ら稱して朕と曰ふ。制して曰く、「死して行を以て謚と爲すは、則ち是れ子、父を議し、臣、君を議する也。甚だ謂はれ無し。今より以來、謚法を除き、朕を始皇帝と爲し、後世以て數を計り、二世三世より萬世に至り、之を無窮に傳へん」と。天下の兵を收めて咸陽に聚め、銷して以て鐘・鐻・金人十二を爲る。重さ各々千石なり。天下の豪富を咸陽に徙すこと十二萬戶。

【通釋】（初めの一段は、秦の大將が六國を伐ち滅ぼしたことを書いたもので、意義明瞭である。尚ほ語釋參照。）秦王は初めて天下を統一し、自ら己が德は古の三皇の德を兼ね備へ、功は五帝にも優ると考へた。（そこで皇と帝とを合はせて）自ら皇帝と號した。さうしてこれまで天子の言葉で命と言つたもの（例へば任免裁可の勅命の如き）を制と改め、令と言つたもの（例へば內外に布告する勅令の如き）は詔と改め、自身を指して朕といふことにした。さて又その制を下して曰ふには、「天子が死んでから、その生前の行ひによつて諡をつけるのが（從來の儀例になつてゐるが）これは子として父を批評し、臣として君を批評するものである、甚だ怪しからぬことだ。だから今後は諡をつける法をやめ、朕を始皇帝と稱し、以後御世の數をかぞへて、ただ二世皇帝、三世皇帝といふやうに致し、以て萬世に至り、限りなき後世にまで傳へよう」と。（天下既に一統したれば武器の必要はないといふので）國中の武器を沒收して、咸陽（秦の首都）に聚め、之を鑄つぶして鐘や鐘を吊る臺や銅像十二を造つた。銅像の重さはそれ〴〵十二萬斤あつた。又（首都の繁昌を圖つて）國中の金持十二萬戶を咸陽に移した。

【語釋】十七年（秦王政、卽位の十七年である。以下これに倣ふ。）○內史勝（內史は官名、立法官にして武官を兼ね、關內卽ち…函谷關以內百里の地を監察する官。勝は名、姓は不明。）○王賁（王翦の子である。）

罷封建
置郡縣

○三皇・五帝（太古の君、三頁、一九頁參照。）　○朕（元來ワレといふ意味で古は上下に通じ用ひたやうであるが、始皇帝が天子の自稱と定めてから後は天子に限ることになつた。）　○諡（音はシでオクリナと訓ず。德行・事業などによつて死後につける名。例へば文王・武王・桓公・文公などいふのがそれである。始皇の時これを廢したのは本文に見える通りであるが、漢以後また復活した。なほ諡は必ずしも天子諸侯に限らず、士庶人でも德行あるものには天子から賜はることがあつた。諸葛亮の武侯、陶淵明の靖節先生などがそれである。また私に諡をつける例もあつた。）　○咸陽（秦の首都。今の陝西省西安府附近。後の長安と同じ土地。）　○銷（トカスこと。つぶすこと。鑄）　○鐻（鐘を吊りさげる臺。頭は鹿、體は龍の形をしたもの。）　○金人十二（金屬で作つた人像十二個。當時は銅器時代で、武器も銅で作つたのであるから、金人は卽ち銅像である。始皇の二十六年に身丈五丈といふ巨人が十二人、臨洮といふ地に出現し、皆夷狄の服を着けてゐたといふ。蓋し天が秦を誡めて、夷狄の行をなす勿れ、夷狄の行をなさば將に其國を滅さんとの意を示したものであるのに、始皇は却つて之を以て吉兆となし、其姿を象つて金人十二を造つたものと云ひ傳へられる。）　○重各千石（石は百二十斤をいふ。然らば千石は十二萬斤である。）　○豪富（富豪といふに同じく、金滿家のこと。）

○丞相王綰等言、燕・齊・荊地遠。不置王無以鎭之。請立諸子。始皇下其議。廷尉李斯曰、周武王所封子弟同姓甚衆。後屬疏遠、相攻擊如仇讐。今海內賴陛下神靈一統、皆爲郡縣。諸子功臣、以公賦稅重賞賜之、甚足易制。天下無異意、則安寧之術也。置諸侯不便。始皇曰、天下初定。又復立國、是樹兵也。而求其寧息、豈不難哉。廷尉議是。分天下爲三十六郡、置守・尉・監。


丞相王綰等言く、「燕・齊・荊は地遠し。王を置かずんば以て之を鎭むる無し。請ふ諸子を立

てん」と。始皇其の議を下す。廷尉李斯曰く、「周の武王封ずる所の子弟同姓甚だ衆し。後疏遠に屬し、相攻撃すること仇讐の如し。今海內陛下の神靈に賴りて一統して、皆郡縣と爲る。諸子功臣、公の賦稅を以て、之を賞賜せば、甚だ足りて制し易からん。天下異意無くば、則ち安寧の術也。諸侯を置くは不便なり」と。始皇曰く、「天下初めて定まる。又復國を立つるは、是れ兵を樹つる也。而して其の寧息を求むるは、豈難からずや。廷尉の議是なり」と。天下を分ちて三十六郡と爲し、守・尉・監を置く。

【通釋】宰相の王綰等が「燕・齊・荊の地は都を遠く離れて居り、中央政府の威令が屆きかねるから、その地に諸侯を置かなければ鎮撫することが出來ません。どうぞ此の際、皇子方を立てて諸侯となさるやうに」と願ひ出た。始皇はそれを群臣の評議にかけて（意見を述べさせた）。時に司法官であつた李斯が曰ふには、「昔、周の武王は皇室の安全を圖るために、己が子弟や同族のものを澤山諸侯とせられたが、後にはそれらの者の仲が疎くなつて、お互ひに攻め合ひ、宛ら仇同志のやうでありました。今や國內は陛下の御稜威によつて統一され、皆陛下の支配下の郡縣となりました。されば皇子方や功臣達には國家の公の租稅を以て御賞與になりますならば、それで有り餘つて且つその方が取りまは

し易いと存じます。（陛下の御命令がよく行はれて）天下に異心を抱く者がなければ、それこそ國家太平の術であります。今更諸侯を置くのは便利でありません」と。そこで始皇はそれを裁決して曰ふには、「天下は今やつと平定されたところである。然るに又もや國を立てて（諸侯を置くのは）、とりもなほさず、武器をおし立てて戰亂の本を作るやうなものぢや。それで平和を希望するといふことは、なんと難かしいことではないか。これは司法大臣李斯の意見がよろしい」と。かくて天下を三十六郡に分け、郡毎に守・尉・監などの役人を置いた。

語釋　丞相（丞は承でウケル義、相はタスケル義、二字で君主の意思を承け助ける意味で執政の大臣をいふ。宰相のこと。）　〇荊（楚の國のこと。始皇の父莊襄王の諱の楚を避けて荊と云つたのである。）　〇不レ置レ王（王は王侯の意。當時の諸侯は皆僭して王と稱したのである。諸侯のこと。）　〇下二其議一（その議案を群臣に下して論議させること。）　〇廷尉（廷は平で公平の義。裁判は公平を貴ぶ意味から刑獄を掌る官をいふ。但し我國では古く之を檢非違使の佐・尉の官名として用ひた。）　〇疏遠（緣遠くなる意。互ひの仲がうとくなること。）　〇陛下（陛は天子の宮殿の階（キザハシ）。階下の護衛の武士を呼ぶ語で、直接に天子を指すことを避けて、やがて天子の尊稱となつたのである。）　〇神靈（神明の威靈。即ち御稜威のこと。）　〇郡縣（周代の封建制度をやめて全國を郡と縣との行政區劃に分ち、それぞれ中央政府から官吏を派遣して行政さる制度。封建制度に對して郡縣制度といひ、地方分權に對して中央集權である。但し我が國の郡と縣と名は同じであつても、彼は郡の方が大きくて、郡を分つて縣としたものであることを知らねばならぬ。）　〇寧息（息はヤスムと訓ず。安らかに穩やかなこと。）　〇異意（異志といふに同じく二心を抱くこと。）　〇立レ國樹レ兵（諸侯を置くと、その諸侯が皆軍備をして互ひに攻伐するから、國を立てるのは即ち兵器を押し立てるやうなもので、戰亂の本だといふ意。同じくタテル（立と樹）といふ字を用ひて說明したところが面白い。）　〇守・尉・監（守は郡守で郡の長官。尉は守をたすけて兵事を掌る官。監は郡の監察を掌る官、目付役である。なほ縣には令・丞・尉の官を置いた。）

立レ石頌ニ功業一
徐市入レ海
湘君何神

○二十八年、始皇東行ニ郡縣一、上ニ鄒嶧山一、立レ石頌ニ功業一、上ニ泰山一、立レ石、封祠祀。既下。風雨暴至。休ニ樹下一。封ニ其松一爲ニ五大夫一。禪ニ于梁父一。遂東遊ニ海上一。方士齊人徐市等、上書請下與ニ童男童女一入レ海、求中蓬萊・方丈・瀛洲三神山仙人及不死藥上。如ニ其言一遣ニ市等行一。始皇浮レ江至ニ湘山一。大風。幾不レ能レ渡。問ニ博士一曰、湘君何神。對曰、堯女舜妻。始皇大怒、伐ニ其樹一赭ニ其山一。

訓讀 二十八年、始皇、東のかた郡縣を行り、鄒嶧山に上り、石を立て、功業を頌し、泰山に上り、石を立て、封じて祠祀す。既に下る。風雨暴に至る。樹下に休ふ。其の松を封じて五大夫と爲せり。梁父に禪す。遂に東して海上に遊ぶ。方士の齊人徐市等、上書して、童男童女と海に入り、蓬萊・方丈・瀛洲の三神山の仙人及び不死の藥を求めんことを請ふ。其の言の如く市等をして行かしむ。始皇、江に浮びて湘山に至る。大風あり。幾んど渡ること能はず。博士に問ひて曰く、「湘君は何の神ぞ」と。對へて曰はく、「堯の女にして舜の妻なり」と。始皇大いに怒り、其の樹を伐つて其の山を赭にせり。

【通釋】その即位の二十八年には、始皇は東方の郡縣を巡行し、鄒嶧山に上り、石碑を立てゝ天下一統の功を譽め稱へる文を銘させ、それより泰山に上り、また石碑を立て、土を盛つて上帝を祭つた。祀が畢つて山を下る時、風雨が俄に來たので樹の下に雨宿をした。そのため松を取り立てゝ五大夫の爵を賜はつた。それから梁父山に上つて山川の神を祭つた。遂に東に向つて海上に船を浮べた。時に齊の方士の徐市等が書を上つて、身に汚なき幼少なる男女と海に航し、蓬萊・方丈・瀛洲といふ三つの神山に行き、そこの仙人や、老いず死なずの藥を求めて（陛下に献じたい）と願ひ出た。（始皇は之を信じて）その願の通にして市等を行かしめた。（その船はどうなつたか、遂に還つて來なかつた）。其の後、始皇は楊子江に浮んで湘山に行つたところ、大風が起つて水を渡ることが出來ない。そこでこの大風を湘山の神の仕業と思ひ）博士に問うていふやう、「湘山の神といふのは、一體、何者だ」と。對へていふやう、「堯の女で舜の妻でござります」と。始皇それを聞いて（婦人の身を以て萬乘の天子を妨げるは不都合だと）大いに腹を立て、山中の樹を悉く伐り拂つて禿山にしてしまつた。

【語釋】行（一通りめぐり行くこと、巡行と連用する。）○鄒嶧山（今山東鄒縣の南にある山。）○頌（その盛德や功勞を贊美すること。）○泰山（山東泰安縣の北にある、五嶽の一、東嶽である。）○封（「もりづち」することで、土を盛つて壇を築き山神を祭ること。諸侯に領土を與へることを「封」ずといふのも國境に土手を築いて領土の境界とする意であるが、こゝはそれではない。）○五大夫（秦の爵の名。）○禪（地を清めて山川の神を祭ち地

張良椎撃

亡秦者胡

神を祭ること。又ユヅルと訓じて、天子がその位をゆづることをもいふが、こゝはそれではない。而して封・禪の事は支那では歴代これを行つたもので古代に於ける自然崇拜の結果である。又一方には帝威を示す策略としても用ひた。）〇梁父（梁父山のこと。泰山の下にある山で今山東泰安縣にある。）〇方士（方は神仙の術をいふ。その術を行ふ者を方士といふ。卽ち不老不死の靈術を修める者。）〇徐市（市は古の芾の字、音フツ。徐市は卽ち徐福のことだといふ。或は云ふ、徐福は神山を尋ねて、日本に來り紀州灣に漂着したと。而して今紀州新宮の東にある徐福塚は卽ちこの徐福を祀るとの傳說がある。）〇湘山（洞庭湖邊にある山。湖南省。）〇博士（典籍の事を掌り、古今の事に精通して居る學者。）〇湘君（湘山の神といふ意。堯の娘、娥皇・女英の二人で、舜の妃となつたもの。「五帝」舜の章に見えた。）〇赭二其山一（赭は赤、山を赤裸にする意で、禿山にしたこと。）

餘論　海上に神仙の鄕ありといふことは、東海に君子國ありとか大人國ありとかいふのと同じく、五行思想から來た迷信で、何等の實在がある譯ではない。徐市が復命しなかつたのも道理である。一體、始皇といふ人は、かういふ迷信に陷り、緣起をかつぐことに於ては、尤も甚だしい人であつた。想ふにその赫々たる功名、燃ゆるが如き野心の中に、なほ何か求めて求め得ざる不安があつたのではなからうか。不老不死を希うたのも、その抑へ難き不安の表はれでなからうか。

〇韓人張良、以五世相韓、韓亡、欲爲韓報仇。始皇東遊、至博浪沙中、良令力士操鐵椎撃始皇、誤中副車。始皇驚、求弗得。令天下大索。〇三十一年、更臘爲嘉平。〇三十二年、始皇巡北邊。方士盧生入海還、奏錄圖書。曰、亡秦

者胡也。始皇乃遣蒙恬發三十萬人北伐匈奴、築長城。起臨洮至遼東。延袤萬餘里、威振匈奴。

訓讀 韓人張良、五世韓に相たるを以て、韓亡びてより爲に仇を報いんと欲す。始皇東遊して博浪沙の中に至りしとき、良、力士をして鐵椎を操りて始皇を撃たしめしが誤りて副車に中てたり。始皇驚きて求めしも得ず、天下に令して大に索む。○三十一年臘を更めて嘉平とす。○三十二年、始皇、北邊を巡る。方士盧生、海に入つて還り、錄圖書を奏す。曰く、「秦を亡す者は胡ならん」と。始皇乃ち蒙恬をして兵三十萬人を發して匈奴を伐ち、長城を築かしむ。臨洮より起り遼東に至る。延袤萬餘里、威、匈奴に振ふ。

通釋 韓の人張良は、父祖五代も韓の國の大臣であつた家柄であるので、韓が秦に滅されてからその仇を返さうと思ひ、始皇が東巡の折、博浪沙の中に着いた時、張良は力士をして（重さ百二十斤もある）鐵の椎を手に操つて始皇を撃たしめたが、誤つて控車に中てた。始皇は驚いて附近を探させたが犯人が見當らなかつた。そこで天下に布令を出してに大いに捜索させた。○三十一年に、（年

の終りの祭の名の）臘といふのを改めて、殷の時の稱へによつて嘉平といふことにした。○始皇即位の三十二年に、北方の國境を巡視した。その時神仙の術を修むる盧生といふ者が東方の海に入つて還つて來た。そして持ち來つた未來記を奏上した。その未來記には、「秦を亡す者は胡であらう」と書いてあつた。始皇（それを見ると、その胡とはえびすのことだと一途に思ひ込み）、蒙恬を大將にして三十萬の兵を出して北方の匈奴を征伐せしめ、且つ萬里の長城を築いて匈奴の侵入に備へさせた）長城は、西は臨洮から起り、東は遼東に至るまで、延長一萬餘里に亘るもので、秦の威力は匈奴に振ひ輝いた。

語釋　五世相レ韓（張良の祖の開地は韓の昭侯・宣惠王・襄王の相であつた。又父の平は釐王・桓惠王の相であつた。而して桓惠王の次の王安に至つて、秦將の內史勝に滅されたのである。）○博浪沙（地名、今の河南陽武縣にある。）○副車（副は音フ、そへる義、附屬の車である。控への車。）○臘（年の終の祭の名。夏の時に清祀といひ、殷の時には嘉平といひ、周の時には大蜡といひ、臘といつた。今これを嘉平と改めたのは、殷の舊稱に從つたのである。因みに、十二月の事を正月になつてから舊臘又は客臘といふのは此の故である。）○錄圖書（錄は籙に通じ、未來のことを豫言してある書物。豫言書。未來記。）○匈奴（戰國時代から支那の北方に居り長く漢民族を惱ました蠻族。）○胡（北方蠻族の總名、又一切の蠻族の總名にも用ひる。但し錄圖書の意は始皇の子の胡亥（二世皇帝）を指してゐたのである。胡亥の世になつて秦が亡びることは後段で明かになる。）○長城（戰國時代に燕趙秦の三國は北方のえびすの匈奴と接觸してゐる所から各〻國境に部分的に城壁を築いて防禦してゐた。始皇はそれを增築し擴張して連絡したのである。その城壁の高さ厚さ各二丈、六十間每に、塞を設けて番兵を置いた。但し今の長城は當時のものではなく南北朝以後千餘年の間に漸次に築かれたものであつて、位置も始皇當時とは大いに異る。卽ち西の起點は現在のものの方が北に移つて居るが東の終點はぐつと南へ移つて渤海岸の山海關になつてゐる。延長は日本の里程にして七百里ほどあるといふ。）○臨洮（甘肅省岷縣。）○遼東（遼東の襄平を指す。盛京省奉天府遼陽の北方。）○延袤（袤は東西南北の廣さを言ふ語で

ある、此處では單に長さの意味である。）

【餘論】○始皇が躍氣になつて張良の行方を搜索してゐる間に、張良はそ知らぬ顏して下坯のあたりに潛みかくれ、徐ろに後圖を畫してゐた。後の章に出て來る下坯の土橋で老人黃石公の履を拾ひ、帝王の師となるべき兵法の書を授けられた話の如きも、實にこの間のことである。

唐の汪遵の詩にいふ「秦築長城比鐵牢。蕃戎不敢過臨洮。雖然萬里連雲際。爭及堯階三尺高」と。萬里連雲の如き長城も堯帝が土階三等の仁政に及ばず。内に省みて我が德を修め、外萬民に臨んで仁政を行はない以上、如何なる鐵牢も長城も何かせんと慨歎したのである。また我が詩人土井晩翠氏は、この絕好の詩材を捉へ、多恨の情を雄宕の辭に寓せて、長詩「萬里の長城」を成してゐる。機會あらば一讀されんことを望む。

萬代に傳ふるものは國の爲めたてし長城の跡のみにして　稅所敦子

高き殿長き大城はつくりても死なぬ藥は求めかねけむ　仙田守夫

○三十四年、丞相李斯上書曰、異時諸侯並爭、厚招遊學。今天下已定、法

令出一。百姓當家、則力農工、士則學習法令。今諸生不師今、而學古、以非當世、惑亂黔首。聞令下、則各以其學議之。入則心非、出則巷議、率群下以造謗。臣請、史官非秦記、皆燒之、非博士官所職、天下有藏詩書百家語者、皆詣守尉、雜燒之。有偶語詩書者棄市。以古非今者族。所不去者、醫藥・卜筮・種樹之書。若有欲學法令、以吏爲師。制曰、可。

訓讀 三十四年、丞相李斯、上書して曰く、「異時諸侯並び爭ひ、厚く遊學を招く。今天下已に定まり、法令一に出づ。百姓家に當りては、卽ち農工を力め、士は則ち法令を學習す。今諸生、今を師とせずして、古を學び、以て當世を非り、黔首を惑亂す。令の下るを聞けば、則ち各々其の學を以て之を議す。入つては則ち心に非とし、出でては則ち巷に議し、群下を率ゐて、以て謗を造す。臣請ふ、史官の秦の記に非ざるものは、皆之を燒き、博士の官の職とする所に非ずして、天下詩書百家の語を藏する者有らば、皆守尉に詣り、雜へて之を燒かん。詩書を偶語する者有らば棄市せん。古を以て

今を非る者は族せん。去らざる所の者は、醫藥・卜筮・種樹の書のみ、若し法令を學ばんと欲するもの有らば、吏を以て師と爲さん」と。制して曰く、「可なり」と。


三十四年、丞相の李斯がまた上書して意見を述べた。曰く、「以前は諸侯が皆戰爭をし合ひ、(よい計略を得るために)、諸方を遊歴してあるく學者を懇ろに招聘したのでありますが、もはや天下は一統され、法令は皆我が朝廷一ケ所から出るやうになりましたから、人民共は官に仕へずして家に居るものは、農工の生業に精を出し、官に仕へて士たるものは、朝廷の法令を研究して(職務に差支ないやうに致せば宜しいわけであります)。然るに今日、諸學生は、この今の世を規準にせずに昔の學問を修め、(それを盾にとつて)當今の政治をそしり、人民を惑はし亂して居ります。さうして一たび朝廷から、法令が下つたと聞けば、各々自分の學んだ學問を標準にして之を批評します。その入つて朝廷に在る時は、(口には默つて居りますが)、心の中に非難を致し、朝廷を出てしまふと公然世間の人と道路で批評を致し、門弟を引きつれ黨をなして我が法令を謗つて居ります。(それといふのも古い下らない書物が澤山あるので、それを讀んでその說に惑はされるからである)。されば此の際、願くは歴史官の(所藏の書物の中)、秦の記錄でないもの、(卽ち列國の歴史の書は)、全部燒き棄て、博士官が

職務上保管してゐるもの丶外に、天下に詩經・書經その他多くの思想家の書いた書物を持つてゐるものがありましたら、皆郡の守や尉の役所へ持つて行つて何の書彼の書の區別なくすべて燒きすて丶了ひませう。又詩經・書經のことなんかを話し合ふものがあつたら、そのものは殺して市中に獄門にかけませう。昔の學問によつて當世の政治をそしる者は、その一族までも死刑に處しませう。たゞ書物の中で醫藥と占ひと、農業林業の本だけは、(無くてはならぬもので害もありませぬから)燒き棄てないことにしたいと思ひます。若し法令を研究したいと言ふ者がありましたら、官吏を教師して學ばせませう」と。始皇は詔して之を裁可した。

語釋　異時(異日・他日などいふに同じく、往時又は將來をいふ。こゝは往時の意。)　○遊學(諸方をめぐつて學問修業する者。)　○士(こゝは政府に仕へて官吏たるものをいふ。)　○巷議(巷はもとほそい曲つた小路のこと。轉じて街頭の意。巷議とは町中で世間の人と彼是れ批評し合ふこと。)　○史官(歴史を以て朝廷に仕へる者。)　○博士(學者で書物のことを掌る官。)　○詩書(詩經・書經はもと單に詩書と云つたのである。)　○百家(周末に出た老子莊子韓非子等々儒敎以外の多くの思想家。これを諸子百家といふ。一六七頁の「諸子」語釋參照)　○雜燒之(あれこれと區別することなく皆一緒に燒くといふ意。)　○偶語(二人で向ひ合つて話すこと。)　○棄市(刑罰の名。殺して死骸を市中にさらすこと。)　○族(一人罪あつてその一族のもの全部を處刑すること。)　○卜筮(うらなひ。卜は龜の甲を燒いて占ふをいふ、筮は筮竹即ちメドギを以て占ふをいふ。當時は何事をするにも先づ吉凶を占ふ習慣であつたから、その必要上そ書のを燒かなかつたのである。)　○種樹(種子を蒔き苗木を植ゑること。)

○三十五年。侯生・盧生、相共ニ譏ニ議シ始皇ヲ、因ツテ亡ゲ去ル。始皇大イニ怒ツテ曰ク、盧生等、吾尊ニ

賜之甚厚。今乃誹謗我。諸生在咸陽者、吾使人廉問、或爲妖言以亂黔首。於是使御史悉案問。諸生傳相告引、乃自除。犯禁者四百六十餘人、皆坑之咸陽。長子扶蘇諫曰、諸生皆誦法孔子。今、上皆重法繩之。臣恐天下不安。始皇怒、使扶蘇北監蒙恬軍於上郡。

訓讀 三十五年、侯生・盧生、相與に始皇を譏議し、因つて亡げ去る。始皇大いに怒つて曰く、「盧生等、吾れ之れを尊賜すること甚だ厚し。今乃ち我を誹謗す。諸生の咸陽に在る者、吾れ人をして廉問せしむるに、或は妖言を爲して、以て黔首を亂る」と。是に於て御史をして悉く案問せしむ。諸生傳へて相告引し、卽ち自ら除す。禁を犯す者四百六十餘人、皆之を咸陽に坑にす。長子扶蘇諫めて曰く、「諸生皆法を孔子に誦す。今、上、皆法を重くして之を繩す。臣、天下の安からざるを恐る」と。始皇怒り、扶蘇をして北のかた蒙恬の車を上郡に監せしむ。

通釋 三十五年に侯生と盧生の二人が一緒に始皇をそしつて逃亡した。始皇は大いに怒つて曰ふに

は、盧生等に對しては、朕は彼等を尊敬して色々と物を與へ厚く待遇してやつた。それにも關らず、今、朕をそしつて居る。（甚だ不都合である）。そこで朕は人を遣はして咸陽に居る學者どもを調べさせたところ、果して彼等の中には奇怪ないつはりを言つて、人民を惑はして居る者がある。（斷じてその儘にしてはおけない）」と。そこで檢察官に命じてすつかり吟味させた。すると學者達は甲から乙へ乙から丙へと次々に互ひに他人を引合ひに出して告訴し、さうして自分の罪を免れようとした。斯くて上をそしるの禁を犯したものが四百六十餘人あつたが、それを全部咸陽に於て穴埋めにしてしまつた。そこで始皇の長男の扶蘇が、「學者どもは皆聖人孔子の言葉を誦へてこれを手本として居るものであります。然るに今陛下はすべての刑法を重くして、（聖人の道を學ぶ）彼等を重罪に處せられました。（さういふ無法なことをなさつては、私はこれから天下が亂れはしないかと心配致します」と言つて諫めたが、始皇は（これを聽き入れるどころか）却て怒つて扶蘇を（都から追ひ拂ひ）、北方の上郡へ遣つて（そこにゐる）蒙恬の軍を監督させた。

語釋　侯生盧生（生は書を讀み學を爲すものの稱呼である。諸生・書生の生も同じ。）　○譏議（惡しざまに彼是と非難すること。）　○誹謗（二字共にソシルと訓ず。）　○廉問（廉は察の義で、しらべること。問ひただす。）　○妖言（奇怪なでたらめな言葉。）　○御史（官名。惡者を檢擧し、又は重大な裁判をも掌る。）　○案問（案は取り調べること。罪狀を吟味するをいふ。）　○傳相告引（告訴牽引の義

で互ひにそれからそれへと他人を引合ひにして告訴し合ふこと。甲を吟味すると乙を引き合ひにし、乙をしらべると丙にかぶせて、各々自分の罪を免れようとするのである。）○乃自除（自ら己れの罪を免れること。一説に除は簡別の義で區別すること。即ち告訴牽引して、自分の關知しないことを明かに區別する意といふ。それも亦通ず。）○扶蘇（始皇の長子、始皇の死後、李斯・趙高等に謀られて自殺した。）○誦二法孔子一（孔子の言を誦して手本とすること。孔子を祖述する意。）○繩（タダスと訓ず、罪をただして處分すること。）○臣（男子が自ら卑下していふ語であるから、子として父にいふ場合にも臣と稱したのである。）○上郡（今の陝西省楡林の附近一帶の地。）

餘論 學問が、思想が、藝術が、道德が、一個の權力者のために、これほどまでに蹂躪られたことが復とあらうか。焚書坑儒の暴政は、實に支那學術史上最大の受難であつた。書物は燒かれ、學者は殺され、盛なりし周代の文化も、周末の思想も、こつぱ微塵に打ち碎かれて、その破片を搜し出すさへ容易でなくなつた。次いで起つて漢唐の諸儒が、經籍の收拾に沒頭し、區々たる訓詁の學問に身を終らざるを得なかつたのも、一にこれに原因することを思へば、その暴學の深刻さに慄然たらざるを得ない。

然るに又一方から考へて、長い間亂痲の如く亂れた國家を統一して中央集權の實を擧げようとする始皇にあつては、徒らに保守を能事として新政を非議する儒生の言動は國家の存立上、默視すべからざるものであるから、敢てこの高壓手段を取ることも亦已むを得なかつたであらうとして、寧ろその英斷に同情する說もある。殊に博士官には一切の書籍を保存して置き、民間所藏の書を燒いたのであ

つて、天下の書を悉く燒き盡したのではない。(天下の書を燒き盡したのは咸陽の博士官の藏書を燒いた項羽である)。また坑にしたる儒生の如きも多くは無賴の徒であつた。と云つて、焚書坑儒が過激殘酷なる處置であることは認めつゝも、爲政者としての始皇の爲に辯護する人もある。序なれば併せてこゝに記しておく。

○始皇以爲、咸陽人多、先王宮庭小。乃營作朝宮渭南上林苑中、先作前殿阿房。東西五百步、南北五十丈。上可坐萬人、下可建五丈旗。周馳爲閣道。自殿下直抵南山。表南山之顚以爲闕、爲複道、自阿房渡渭、屬之咸陽。以象天極閣道絕漢抵營室也。阿房宮未成。成欲更擇令名。天下謂之阿房宮。

【訓讀】始皇以爲らく、咸陽は人多くして、先王の宮庭小なりと。乃ち朝宮を渭南の上林苑中に營作し、先づ前殿を阿房に作る。東西五百步、南北五十丈、上には萬人を坐せしむ可く、下には五丈の旗

を建つ可し。周馳して閣道を爲る。殿下より直に南山に抵る。南山の顚に表して以て闕と爲し、複道を爲り、阿房より渭を渡り、之を咸陽に屬す。以て天極閣道、漢を絕つて營室に抵るに象る也。阿房の宮未だ成らず。成らば更に令名を擇ばんと欲す。天下之を阿房宮と謂ふ。


始皇は考へた。咸陽は人口も大層多くなつたのに、先代の築かれたまゝの宮殿では小さ過ぎて、(天子の威嚴を保つに足りないと)。そこで百官のお目見えする大御殿を渭水の南にある上林苑といふ御苑の中に建てることになり、先づその前殿を阿房といふ處に作つた。(その前殿の大きさは)、東西五百歩、南北五十丈あり、殿上には一萬の人を坐らすことが出來、殿下には五丈の旗を立てゝも支へぬといふ程の高さで、(實にすばらしいものであつた)。そして到るところ周く高架式の廊下を渡して棧道をつくつた。で前殿の下から(その棧道をつたつて)そのまゝ彼方の南山に行くことが出來た。その南山の絕頂に人目に立つやうに立派に宮門を作り、又上下二重の棧道をこしらへて、君と臣との往來の道を別にし)、それを阿房から渭水を越えて、咸陽宮へ連結した。それは天極星から閣道星が天の河をわたつて營室星へ至る天象にかたどつたものである。この阿房の御殿がまだ出來上らず、出來上つたら改めて立派な名前をつける筈であつたが、(そのうちに始皇は死んでしまひ、秦は忽ち衰亡する

に至つたので)、天下の人々は(地名をそのまゝに)たゞ阿房宮と呼んだ。

語釋 宮庭(宮廷に同じく、皇居のこと。) ○朝宮(群臣朝見の宮で、天子が百官の參朝を受け政を聽く正殿である。) ○渭南(渭水の南。渭水は三二七頁に出づ。) ○上林苑(苑は庭園の大なるもの、上林はその名。帝室の御苑である。) ○阿房(これに就ては種々の説があつて一定しない。今姑らく地名といふ説に從つておく。) ○閣道(高い處にかけわたした廻廊である。高架式の廻廊ともいふべきもの。今日その作り方を確かに知ることは出來ないけれども想ふに前殿の下から南山の頂に至るまで路が險しくて歩行に困難であるから木を架して橋を作つたので、謂はゆる棧道(カケハシ)のやうなものであらうといふことである。) ○周馳(この意味は明瞭でないが、周はアマネクと訓じて、到るところ遍く廊下をかけわたすことと解する方がよからうと思ふ。一説に廊下をめぐつて走りあるけるやうにしたのであるともいふ。) ○表ニ南山之顚一(顚は巓に同じくイタダキと訓じ頂上のこと。表は表章の義で目立つやうに立派にすること。) ○闕(宮城の門。左右に臺を作り其の上に樓を設く。中央は闕けて人が通行するところ。故に闕といふ。) ○複道(上と下と二重に作つた閣道。天子は上を通り、臣下は下を行く。) ○屬ニ之咸陽一(屬はツヅクと訓ず。連ねつゞけること。連絡すること。) ○天極閣道絶レ漢抵ニ營室一(天極、閣道、營室は皆星の名。絶はワタルと訓じ流をわたること。(閣道は前出のカケハシとは別である。漢は天漢で天の河のこと、銀河ともいふ。天極星から天の河を横切つて營室星に至る間を閣道星といふ。阿房宮と咸陽宮とその間を連絡する複道との樣子を天文の象にかたどつて形容したもので、阿房宮を天極星、渭水を天漢、複道を閣道星、咸陽宮を營室星に擬したのであらう。))

餘論 唐の杜牧の阿房宮賦は、この阿房宮の豪華壯麗なるさまを、詩人の豐富な文才と想像力とを以て、思ふままに書き表はしたもの、實に豪快を極めてゐる。古文眞寶に載つてゐるから一讀されたい。

始皇爲レ人、天性剛戾自用、天下事無ニ大小一、皆決ニ於上一。至下以ニ衡石一量上レ書。日夜有レ程。不レ得ニ休息一。貪ニ於權勢一至レ如レ此。○秦有ニ出使者一。還、遇ニ人持レ璧授レ之。曰、爲

吾遺滈池君。明年祖龍死。三十七年、始皇出遊。丞相斯・少子胡亥・宦者趙高從。始皇崩於沙丘平臺。祕不發喪。詐爲受詔、立胡亥、賜扶蘇死。載始皇轀輬車中、以一石鮑魚亂其臭。至咸陽始發喪。胡亥卽位。是爲二世皇帝。

訓讀 始皇、人と爲り、天性剛戾にして自ら用ひ、天下の事大小となく、皆上に決す。衡石を以て書を重るに至る。日夜程あり、休息するを得ず。權勢を貪ること此の如きに至れり。○秦に、出でて使する者あり。還るとき人の璧を持ちて之に授くるに遇ふ。曰はく「吾が爲めに滈池の君に遺れ、明年祖龍死せん」と。三十七年、始皇、出遊す。丞相斯・少子胡亥・宦者・趙高從ふ。始皇、沙丘の平臺に崩ず。祕して喪を發せず。詐つて詔を受くと爲して、胡亥を立て、扶蘇に死を賜ふ。始皇を轀輬車の中に載せ、一石の鮑魚を以て、その臭を亂り、咸陽に至つて始めて喪を發す。胡亥、位に卽く。是を二世皇帝と爲す。

通釋 始皇の人物は天性心ごはく人にさからふ氣質で、自分の意見を立て通して己が心通りに行ひ、天下の政務は大小の區別なく總べて始皇の決裁を仰がせたので、（臣下から奏上する文書が非常に多

く)、しまひには衡石を以てその文書の量を測り、裁決する分量を定めるに至つた。そこで晝は何貫目の文書、夜間は何百目の文書を處分するといふ分量の定まりがあるので、(その分量に滿たないうちは)休息することも出來ぬといふ有樣だつた。彼が飽くまで權勢を求め勢力を振つたことは、これ程までに立ち至つたのである。○秦の人で、他國へ使者に立つた者がある。還る道で、(變な人に出會つた——その人が璧を使者に與へた。そして「どうか私の爲めに之を滈池の君(水神)に遺つて吳れ、明年、祖龍が死ぬだらうよ」と云つた。(使者その故を問はうとすると忽ち姿は消えて見えなくなつたといふ。祖龍は始皇を指すのである)。三十七年に始皇は又出遊した。丞相の李斯、末子の胡亥、宦者の趙高などが之に附き從つた。その途上、始皇は沙丘(地名)の平臺といふ御殿で病の爲に崩じた。李斯・趙高等は相談して喪を祕して公表せず、その上、始皇の詔を受けたと詐つて、胡亥を立てて(太子となし)、長子の扶蘇に自殺を命じた。始皇の死體は轀輬車に載せて運んだが、(暑氣のために臭氣を發して來たので)、(臭氣の强い)鮑魚百二十斤を積んで臭氣を紛らし、咸陽に還つて、始めて喪を發表し、胡亥が帝位に卽つた。是が二世皇帝なのである。

語釋　自用(自己の意見を立て通すこと。何でも自分の思通りにビシビシやつてのけること。)　○衡石(衡はハカリの皿、石はフンドウのこと。)　○有レ程(定量がある。)　○滈池(咸陽附近にある池の名。君

とは其の池の水神をいふ。湘山の神を湘君と云ふに同じい。）　○祖龍（祖は始祖、龍は天子の象。因て始皇に喩へたのである。）　○宦者（宮刑を受けて後宮に仕へる者。）　○沙丘平臺（沙丘は今の直隸省平郷縣。平臺は御殿の名であらう。史記正義に「始皇崩、在沙丘之宮、平臺之中」と見える。沙丘の離宮の中にある平臺といふ御殿。）　○轀輬車（車上に窓があつて開けば涼しく、閉づれば温かな車。）　○鮑魚（鹽漬の魚。また腐魚の意にもいふ。臭の甚だしきもの。）

餘論　始皇の晩年には秦室を呪ふやうな種々の浮說が行はれた。こゝの「明年祖龍死」の如きもその一つである。史記の始皇本紀によると、始皇は御府の官に命じて此の璧を檢べさせたところ、去る二十八年、始皇が巡行中、楊子江に沈めて江神に獻じたところの璧であつた。然るに江神これを受けず、始皇の都する咸陽滈池の水神にこれを返して、始皇が將に終らんとすることを告げたのであるといふ。史記には「明年」を「今年」に作る。

二世皇帝、名胡亥、元年、東行郡縣。謂趙高曰、吾欲悉耳目之所好、窮心志之樂、以終吾年。高曰、陛下嚴法刻刑、盡除故臣、更置所親信、則高枕肆志矣。二世然之、更爲法律、務益刻深。公子大臣多僇死。

訓讀　二世皇帝名は胡亥。元年、東のかた郡縣を行る。趙高に謂ひて曰はく、「吾、耳目の好む所を

悉し、心志の樂を窮めて、以て吾が年を終へんと欲す」と。高の曰はく、「陛下、法を嚴にし刑を刻にし、盡く故臣を除きて、更めて親信する所を置かば、則ち枕を高うし志を肆にせられん」と。二世、之を然りとし、更めて法律を爲り、務めて益々刻深にす。公子・大臣多く僇死す。

【通釋】秦の二世皇帝は名は胡亥といふ。即位の元年に東方の郡縣を巡幸して（政狀民情を視察した）其の後、趙高に對つて曰ふには、「朕は耳に聞き目に見る快樂の限をつくし、したい放題の樂をして、わが一生を送らう思ふが（どうぢや）」と。趙高は（佞臣であるから之に合槌をうつて）「陛下（それは至極結構に存じまする。ついては一層）法律を嚴しくし、刑罰を重くして（法の威力を示し）、前朝の臣（で諫言などする者は之）を殺し、更めて陛下が親任せらるる者を用ひられたならば、枕を高うして安眠なされ思ふまゝに遊ばすことが出來ませう」と、申し上げた。二世はこの言葉を尤であるとし改めて法律をつくり、出來るだけ嚴しくした。（これが爲めに）公子や大臣が澤山誅せられて死んだ。

【語釋】故臣（もとの臣、始皇の時から仕へて居た臣）。○刻深（きびしくむごたらしくすること）○僇死（僇は戮と同じい。コロスと訓ず、誅戮すること）

陽城人陳勝字涉。少與人傭畊。輟畊之隴上、悵然久之曰、苟富貴無相忘。

傭者笑曰、若爲傭耕、何富貴也。勝大息曰、嗟呼、燕雀安知鴻鵠之志哉。至是與吳廣起兵于蘄。時發閭左戍漁陽。勝・廣爲屯長。會大雨、不通。乃召徒屬曰、公等失期。法當斬。壯士不死則已。死則擧大名。王侯將相、寧有種乎。衆皆從之。

【訓釋】陽城の人陳勝、字は涉。少くして人と傭耕す。耕を輟めて隴上に之き、悵然之を久うして曰く、「苟くも富貴とならば相忘るゝこと無けん」と。傭者笑つて曰く、「若、傭耕を爲す、何ぞ富貴とならん」と。勝、大息して曰く、「嗟呼、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らん哉」と。是に至り吳廣と兵を蘄に起す。時に閭左を發して漁陽を戍らしむ。勝・廣屯長と爲る。大雨に會ひて、道通ぜず。乃ち徒屬を召して曰く、「公等、期を失ふ。法、斬に當す。壯士死せずんば則ち已む。死せば則ち大名を擧げんのみ。王侯將相、寧んぞ種有らんや」と。衆皆之に從ふ。

【通釋】陽城（河南）の人陳勝は、字を涉といひ、若いころは百姓たちと共に人に雇はれて耕作をしてゐた。或時、ふと仕事を止めて、畦の小高いところへ往つて、しばらく慨かはしさうにしてゐたが、

(やがて仲間のものに向つて)曰ふには、「(今こそ此のやうに日傭取をしてゐるが)、もし俺が出世をしたら、(今日からして世話になつたことを)忘れはせんぞ」と。それを聞いた相手の日傭は嘲つて、「貴樣、日傭取をしてゐる身分で、何が出世なぞ出來るものか」と言つて(てんで取り合はない)。陳勝ためいきを吐いて曰く、「あゝ、燕や雀に鴻や鵠の心が分つて堪るものかい。(小人には大人物の精神なぞ分るもんぢやない)」と——(彼はその昔、こんな豪語を恣にして大志を抱いてゐたが)、今や天下の亂れ出したのに乘じて、吳廣といふ者と共に、兵を蘄(安徽)に起した。

(さて右の陳勝・吳廣の二人が兵を擧げるに至つた徑路は斯うである)。その頃(方々に賊が起つて、秦はその警備のために、徵發すべき人民は全部徵發し盡したので)、今は村の左側に住んでゐる賦役免除の民までを徵發して、漁陽(直隷順天府)といふ處の警備にやつた。陳勝と吳廣とは、その駐屯隊長といふ格で、(軍を引きつれて出發した)。折から途中で大雨に會つて交通が杜絶し、(行くことが出來なくなつた)。そこで部下を呼び集めて、次のやうな演說をしたもんだ。「貴公等は、もう(漁陽に到著の)期限に後れてしまつた。これ軍法によれば正しく死刑に當るものだ。血氣の勇士、身を捨てざればそれまでだが、既に一命をなげうつとならば、一つ大仕事をして華々しい名を天下に揚げるばか

りぢや。天子となり大名となり大將となり大臣となるのも、何も別の人間ではない。(お互ひの力量次第だ――さう思へば、こゝは一つ、決心のしどころぢやないか)」と煽動したので、部下は皆二人の行ることに從ふやうになつたのである。

語釋 與人傭畊(與をタメニ(爲)と讀み、人を雇主とする説もある。傭は雇と同じくヤトフと訓ず、人にやとはれ、賃金を貰つて人の田を耕すこと。且傭尓作。) ○輟(音テツ。ヤムと訓ず。) ○隴(音ロウ。田の間に小高く土を盛つたところ、あぜ。) ○悵然(恨み歎く樣子。) ○傭者(共にやとはれて働いてゐる百姓、卽ち朋輩をいふ。一説に傭主、卽ち主人の意といふ。) ○燕雀安知鴻鵠之志哉(燕雀は小鳥、よつて小人に譬へ、鴻と鵠とは同種類の鳥、オホトリ、ハクテウなど訓ず。大鳥であるから大人物に譬へる。小人には大人物の志望は理解ができないといふ意である。) ○至是(秦の二世が暴政を行つて天下が亂れ出した。そこを受けていふ。二〇七頁の語釋「至是」參照。) ○閭左(閭は村里の門。閭左とは村里の左側に住む者といふこと。秦の時代には貧民は左側に住ませ、然らざるものは右側に住ませ、而して貧民には賦役を免除したのである。然るに兵役頻繁に起つて、徵發すべきものは全部徵發し盡したから、今や左側に住む賦役免除の者までも徵發するやうになつたの) ○戍(音ジユ、訓マモル。或地に兵をとゞめて守る意。衛戍。因みに戊(ボ、つちのえ)、戌(ジユツ、いぬ)、戉(エツ、まさかり)とは頗る相似て而も別な字である。注意せられたい。戍 ジユ) ○屯長(屯營の長。駐屯軍の隊長である。) ○徒屬(徒とは附き從ふ者共のこと。卽ち部下。) ○壯士不死則已云々(死なぬならばそれまでのことで問題はないが、既に死ぬと覺悟した以上はと、此の際の死刑といふことを動機として、廣く一般的に男子の覺悟といふものを喚起したのである。) ○寧有種乎(種とは血統とか家柄とか特別の條件を指したのである。)

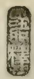
乃詐稱公子扶蘇・項燕、號大楚。勝自立爲將軍、廣爲都尉。大梁張耳・陳餘、詣軍門上謁。勝大喜、自立爲王、號張楚。諸郡縣苦秦法、爭殺長吏以應勝。

○謁者從東方來、以反者聞。二世怒、下之吏。後使者至。上問之。曰、群盜鼠竊狗偸、不足憂也。上悅。○陳勝以所善陳人武臣爲將軍、耳・餘爲校尉、使徇趙地。至趙、武臣自立爲趙王。

[illegible] 乃ち詐りて公子扶蘇・項燕と稱し、大楚と號す。勝は自立して將軍と爲り、廣は都尉と爲る。大梁の張耳・陳餘、軍門に詣つて上謁す。勝大いに喜び、自立して王と爲り、張楚と號す。諸郡縣、秦の法に苦しむもの、爭うて長吏を殺して以て勝に應ず。○謁者、東方より來り、反者を以て聞す。二世怒り、之を吏に下す。後の使者至る。上之に問ふ。曰く「群盜は鼠竊狗偸、憂ふるに足らざる也」と。上悅ぶ。○陳勝、善き所の陳人武臣を以て將軍と爲し、耳・餘を校尉と爲し、趙の地を徇へしむ。趙に至り、武臣、自立して趙王と爲る。

[illegible] そこで陳・吳の二人は（民望を得るために）、我等は秦の公子扶蘇と楚の大將項燕の死なずに匿れてゐたものだ）と詐り觸れて、國名を大楚と號した。勝は自ら立つて將軍となり、廣は都尉となつた。時に大梁（魏の都）の人で張耳といひ陳餘といふ二人が陣營に來て目通りを願つた。勝は愈々

喜んで、遂に立つて楚王の位に卽き、國號をば（楚を復興するといふ意味で）張楚と改めた。すると、あちらこちらの郡や縣で、秦の苛酷な掟に苦しんで（事あれかしと待つてゐた者たちは）、われ先きにと共の（秦政府から派遣されてゐる）長官を殺して陳勝に味方した。〇時に使者が東方卽ち張楚から來て、謀反人があると奏上した。二世皇帝これを聞いて大いに怒り、この使者を役人に渡して、（牢獄に投じた）。そこへ又次の使者がやつて來た。帝はこれに謀反人のことを尋ねた。使者は「いや、その賊の群と申すは、鼠や犬のやうなコソ泥棒で、御心配になるやうなものでは御座いませぬ」と答へたので、帝は上機嫌になつた。〇（さうして二世が一時の安を偸んでゐる間に）、陳勝は仲善しの陳の人武臣といふものを將軍に任じ、張耳と陳餘を校尉に任じて、趙の地を攻略させた。趙にゆくと武臣は獨立して趙王となつた。


公子扶蘇項燕（扶蘇は前章にも見える通り始皇の長子で、始皇を諫めて怒に觸れ上郡に追ひやられたのであるが、始皇が崩ずると、少子胡亥は丞相李斯、宦者趙高等と謀つて之に死を賜ひ、自ら立つて二世皇帝となつた。然るに人民は扶蘇の死を知らず、その賢を慕うて已まなかつた。また項燕は楚の良將で、秦と戰つて死んだのであるが、楚人は之を慕ふの餘り、項燕は死んだのではない、他國へ逃げてゐるのだなど言ひ傳へてゐた。そこで陳勝、呉廣は、この人望ある二人の名をかたつて人心を得ようとしたのである。）〇都尉（武人の官名。）〇上謁（謁は名札、卽ち名刺のこと。上謁とは其の名刺をたてまつつてお目見えすること。拜謁、請見、面謁などの謁は、その意が轉じ、貴人に面會する義となつたものである。）〇張楚（楚國を張大隆盛にするといふ意味でつけた名、楚が秦を怨むこと最も深き所以は「楚」の懷王の條下に見える。）〇長吏（郡縣の長官。秦の政府の代官である。）〇謁者（官名。四方に使し又賓客に接する役。）〇聞（ブンと音讀する。聞え上げる意で、奏上すること。）

○鼠竊狗偷(竊も偷も共にヌスムと訓ず。鼠や、犬が臺所のものを盜むやうなコソどろ。)　○所ㇾ善(善は仲のよいこと。)　○校尉(官名、武官の一。)

餘論　陳勝・吳廣の擧兵が導火線となつて、群雄、蜂の如くに起り、終にさしもに勢を張つた秦を滅して漢の世となつた。そこで、物事の端緒を出す、自ら率先して事を始め次の成功者の道を開くといふことを「陳勝吳廣を爲す」「陳吳となる」といふやうになつた。

「王侯將相寧有種乎」(漢書陳涉傳には侯王に作る)といふ語も、何人も力量次第で、どんな立身出世でも出來るといふ意味に用ひられることは誰も知る所である。謝疊山が文章軌範を編次して七集となし、その第一集を侯字集と名づけ、以下王・將・相・有・種・乎字集としたといふのも、それが受驗の書である所から、この書を讀んで文章に達すれば、登第して顯官に至るべしといふ意味である。序なればー言しておく。

沛人劉邦起於沛。父老爭殺令、迎立爲沛公。沛邑掾・主吏、蕭何・曹參爲收沛子弟得三千人。○項梁者、楚將項燕之子也。嘗殺人、與兄子籍避仇吳中。籍字羽、少時學書不成。去學劍。又不成。梁怒。籍曰、書足以記姓名而已。

劒一人敵。不足學。學萬人敵。梁乃教籍兵法。會稽守殷通欲起兵應陳涉、使梁爲將。梁使籍斬通、佩其印綬。遂擧吳中兵、得八千人。籍爲裨將。時年二十四。



沛の人劉邦、沛に起る。父老爭うて令を殺し、迎へ立てゝ沛公と爲す。沛邑の掾・主吏、蕭何・曹參、爲に沛の子弟を收めて三千人を得たり。」〇項梁は、楚の將項燕の子也。嘗て人を殺し、兄の子籍と、仇を吳中に避く。籍、字は羽、少時書を學んで成らず。去つて劒を學ぶ。又成らず。梁怒る。籍曰く、「書は以て姓名を記するに足る而已。劒は一人の敵なり、學ぶに足らず。萬人の敵を學ばん」と。梁乃ち籍に兵法を敎ふ。會稽の守、殷通、兵を起して陳涉に應ぜんと欲し、梁をして將と爲らしむ。梁、籍をして通を斬らしめ、其の印綬を佩ぶ。遂に吳中の兵を擧げ、八千人を得たり。籍、裨將と爲る。時に年二十四。



沛(江蘇)の人劉邦は沛の地で兵を擧げた。すると沛の重立つた父老たちは、われ先きにと沛の長官を殺し、劉邦を迎へて沛公と仰いだ。沛の邑の主吏の役をしてゐた蕭何と、獄掾使をしてゐ

齊燕魏趙立レ王

た曹參とが、沛公の爲に沛の青年を驅り集めて三千人を得た。○項梁は楚の大將項燕の子である。或時、人を殺して兄の子の項籍と共に、仇を避けるために、江南の地に逃げてゐた。籍は字を羽といふ。少年の頃、習字を學んだが、上達しなかつたので、やめて、劍術を稽古したが、これも物にならなかつた。そこで叔父の項梁に怒られた。すると籍の答が振つてゐる。「折角字が上手になつた所で、自分の名前を書く時に役に立つ位なもの、又劍術なんかたつた一人を相手にするだけのものだから、稽古したつて詰らない。俺は萬人を相手にして打ち負かすやうなことが學びたい」と。梁はそこで籍に兵法を敎へた。やがて會稽郡の郡守の殷通が、兵を起して陳渉に味方しようと思ひ、項梁を大將に任命した。然るに梁は却つて籍に命じて殷通を殺させ、その役目を奪ひ取つて自ら郡守となり、吳中の兵を寄せあつめて八千人の部下を得た。籍はその副將となつたが、時に年は僅かに二十四であつた。

語釋　沛(地名、今江蘇徐海道沛縣。)　○掾主吏蕭何曹參(漢書の曹參傳によると參は獄掾と爲り、何は主吏となるとある。)　○吳中(吳の地方といふ意。吳は今の江蘇省地方をいふ。江南の地である。)　○去學レ劍(去はこゝでは罷(ヤメル)の意。書をやめて劍を學ぶこと。)　○會稽(秦の時の郡の名。郡府は吳にあつた。卽ち今の江蘇蘇常道吳縣である。)　○佩ニ印綬一(印は政府から役人に賜はる官印、綬はその印を身に帶びるためのクミヒモ。官職の階級により印材にも綬色にも區別がある。「印綬を佩ぶ」といへば、その役目に就くことである。一二六頁の語釋「相印」の條參照。)　○裨將(裨は補ひ助ける義。大將をたすける副將。)

齊人田儋、自立爲ニ齊王一。○趙王武臣、使三將韓廣略ニ燕地一。廣自立爲ニ燕王一。○

陳吳死

范增

楚懷王

楚將周市、定魏地、迎魏公子咎、立爲魏王。○二年、吳廣爲其下所殺。○陳勝爲其御莊賈所殺。以降秦。○秦將章邯擊魏。齊・楚救之。齊王儋・魏王咎、與周市皆敗死。○趙王武臣、爲其將李良所殺。張耳・陳餘、立趙歇爲王。○居鄛人范增、年七十、好奇計。往說項梁曰、陳勝首事。不立楚後而自立。其勢不長。今君起江東、楚蠭起之將、爭附君者、以君世世楚將、必能復立楚之後也。於是項梁求得楚懷王孫心、立爲楚懷王、以從民望。

訓讀 ○齊の人田儋、自立して齊王となる。○趙王武臣、將の韓廣をして燕の地を略せしむ。廣自立して燕王となる。○楚の將周市、魏の地を定め、魏の公子咎を迎へ、立てて魏王と爲す。○二年、吳廣其の下の殺す所となる。○陳勝其の御莊賈の殺す所となる。以て秦に降る。○秦の將章邯、魏を擊つ。齊・楚、之を救ふ。齊王儋・魏王咎・周市と皆敗死す。○趙王武臣、其の將李良の殺す所となる。張耳・陳餘、趙歇を立てて王と爲す。○居鄛の人范增、年七十、奇計を好む。往いて項梁に說いて曰はく

く、陳勝、事を首む。楚の後を立てずして自立す。其の勢ひ長からじ。今、君、江東に起り、楚の蠭起の將、爭うて君に附く者は、君の世々楚の將にして、必ず能く復た楚の後を立てんことを以へば也」と。是に於て項梁は楚の懷王の孫心を求め得て、立てゝ楚の懷王と爲し、以て民望に從ふ。

通釋　齊の人田儋が自分で立つて齊王となつた。○趙王武臣が部下の大將韓廣に命じて燕の地を占領させた。處が韓廣が(燕の地を取ると)自ら獨立して燕王となつた。○楚の將の周市は魏の地を平げ、魏の公子咎を迎へ、これを立てて魏王とした。○二世皇帝の卽位二年に吳廣は自分の家來(副將田藏)に殺された。○陳勝は自分の御者の莊賈に殺された。(莊賈はその功を土産にして)秦に降參した。○秦の將の章邯が魏を擊つた。それで齊と楚とが魏を救つたが、齊王田儋も魏王咎も魏將周市と一所に戰ひ敗れて死んだ。○趙王武臣は部下の大將李良に殺された。そこで趙將の張耳と陳餘が趙歇を立てゝ趙王とした。こゝに居鄛(安徽)の人に范增といふ者があつて、年は早や七十に達し、常に人の思ひもつかぬ計略を行ふことを好んで居つた。それが項梁の所へ往つて說いて曰ふには「今、陳勝は率先して討秦の大事を始めたが、楚王の子孫を守り立てることをせずして、自ら立つて楚王となつて居る。それでは自然長續きしないに定つて居ります。然るに今や公、江東より起り、而して我も我

もと群がり起つた楚の大將が、先を爭うて公に從ひつくといふわけは、公の家、代々楚國の大將なれば、必ずや復び楚王の子孫を立てらるゝものと信ずるからで御座ります」と。そこで項梁は（范增の說を尤もなりとして）、楚の懷王の孫の心といふ人を搜し求めて王位に卽け、（名もそのまゝに）懷王と號し、斯くして楚人（が懷王を憐んでその敵たる秦に怨を報いようとする）希望に副ふことにした。

【語釋】略二燕地一（略は兵力を以て討ち取ること。攻め取る。かすめとる。）○首レ事（事は秦を討ち滅ぼすの事業。首はハジムと訓んで、まつさきにし始めること。）○江東（揚子江は九江邊より下は斜に北流して地を東西に分つ。故にその東部を江東といふ。卽ち今の安徽、江蘇の南半及び浙江の地方をいふ。會稽はその內にある。）○蠭起（蠭は蜂に同じ。蜂の巢をつゝいたやうに、群り起つて兵を擧げること。）○懷王（二九四頁に出づ。）○從二民望一（項梁は楚人の望に從ふことによつて人心を收攬し、楚人が秦を怨むの心を利用して、己が討秦の野心を逞しうせんとするのであることは申すまでもない。）

趙高李斯有レ隙

趙高與二丞相李斯一有レ隙。高侍二二世一、方二燕樂婦女居一レ前、使三人告二丞相斯一、可レ奏レ事。斯上謁。二世怒曰、吾嘗多二閒日一、丞相不レ來。吾方二燕私一、丞相輒來。高曰、丞相、長男李由、爲二三川守一、與レ盜通。且丞相居レ外、權重二於陛下一。二世然レ之、下二斯吏一、具二五刑一、腰二斬咸陽市一。斯出レ獄、顧謂二中子一曰、吾欲下與レ若復牽二黄犬一、倶出二上

斬二李斯一

蔡東門、逐狡兎、豈可得乎。遂父子相哭。而夷三族。

【訓讀】趙高、丞相李斯と隙有り。高、二世に侍し、燕樂して婦女前に居るときに方りて、人をして丞相斯に告げしむ。「事を奏すべし」と。斯、上謁す。二世怒つて曰はく、「吾嘗て閒日多し、丞相來らず。吾方に燕私すれば丞相輒ち來る」と。高曰はく、「丞相の長男李由、三川の守となり、盜と通ず、且つ丞相外に居て、權、陛下よりも重し」と。二世之を然りとし、斯を吏に下し、五刑を具へて、咸陽の市に腰斬せしむ。斯、獄を出づるとき、顧みて中子に謂ひて曰はく、「吾、若と復た黃犬を牽き、倶に上蔡の東門を出でて、狡兎を逐はんと欲するも、豈得べけんや」と。遂に父子相哭す。而して三族を夷せらる。

【通釋】趙高は丞相李斯と不和でなつた。（それで何とかして李斯を亡さうと思ひ）、或時、自分が二世の側に附き添ひ、二世は酒宴して樂しみ、大奧の婦人たちが御前に居並んでゐる、その最中に、ことさらに人をやつて、丞相李斯に「（只今陛下はお暇であるから政治上の事を奏聞するによい時です」と告げさした。そこで李斯は（宮中に來て）拜謁を願つた。すると二世は立腹して、「朕はこれまで閒

暇の時が多いのに、そんな時には丞相は來ないで、朕が今、奥向で酒宴すると、(意地わるく)丞相がすぐやつて來るんだ」と云つた。趙高は(この時とばかり)いふやう、「丞相の惣領の李由は三川の大守でありながら惡者と心を通じてゐます。(これだけでも不屆千萬であるのに)、その上丞相は朝廷においては陛下より重い權威を振つて居ります。(このまゝに捨てておいては一大事になりませう)とたきつけた。二世は之を尤だと考へ、李斯を捕へて牢に入れ、先づ入墨し、鼻を切り、足を切り、睾丸を拔くなど五刑を悉く施して、最後に咸陽の市中に於て腰から二つ斬りにしてしまつた、その李斯が牢を引き出されるとき、中の男の兒に向ひ、「(今となつては)お前と再び獵犬を引きつれ、(我が故里なる)上蔡の東の門を出て(野外に遊び)兎狩して樂まうと思つても、もうそれも出來なくなつたわい」と悲嘆し、父子共に大聲をあげて泣いた。そして遂にその父・母・妻の三族が皆殺にされてしまつた。

語釋 有レ隙(隙はスキで、兩者の間がピタリと一致せぬことで、不和であること。仲が惡いこと。) ○燕樂(燕は讌とも醼とも書き、宴と通用して酒宴すること。さかもりして樂しむをいふ。) ○燕私(私は公卽ち表向に對して内向のこと。奥向でくつろいだ酒宴。) ○三川(地名、今の河南汝陽縣治。) ○盜(こゝでは秦の天下を奪はんとして起つた陳渉等を指し、罵つて言つたのである。) ○居レ外(外は外朝の義で、官内に對して表向の朝廷をいふ。) ○上蔡(地名、今の河南上蔡縣。李斯の故郷である。) ○黄犬(黄色の獵犬。) ○狡兎(すばしこい兎。逐二狡兎一とは兎狩して遊ぶこと。) ○具二五刑一(五つの刑罰。卽ち人墨(イレズミ)、劓(ハナキリ)、刖(アシキリ

り、宮（去勢）、大辟（死刑）を悉く施すこと。）○腰斬（腰より兩斷すること。罪の輕いものは頸を斬り、重い者は腰を斬る。）○夷三族（父・母・妻の血族を三族といふ。夷はタヒラグと訓じ、滅ぼし盡くすこと。父・母・妻の血族を總べて殺し盡すをいふ。）

指鹿爲馬　項梁敗死　斬宋義

中丞相趙高、欲專秦權、恐羣臣不聽。乃先設驗、持鹿獻於二世曰、馬也。二世笑曰、丞相誤邪、指鹿爲馬。問左右、或默、或言。高陰中諸言鹿者以法。後羣臣畏高、莫敢言其過。○項梁與秦將章邯戰敗死。宋義先言其必敗。梁果敗。秦攻趙。楚懷王以義爲上將、項羽爲次將、救趙。義驕。羽斬之、領其兵、大破秦兵鉅鹿下、虜王離等。降秦將章邯・董翳・司馬欣。羽爲諸侯上將軍。

通解　中丞相趙高、秦の權を專らにせんと欲すれども、群臣の聽かざるを恐る。乃ち先づ驗を設け、鹿を持して二世に獻じて曰く、「馬也」と。二世笑つて曰く、「丞相誤れる邪、鹿を指して馬と爲す」と。左右に問ふに、或は默し。或は言ふ。高、陰に諸の鹿と言ふ者に中つるに法を以てす。後群臣、高を畏れ、敢て其の過を言ふもの莫し。○項梁、秦の將章邯と戰つて敗死す。宋義先づ其

の必ず敗れんことを言ひしが、梁果して敗れぬ。秦、趙を攻む。楚の懷王、義を以て上將となし、項羽を次將と爲して趙を救はしむ。義、驕る。羽、之を斬つて其の兵を領し、大に秦の兵を鉅鹿の下に破り、王離等を虜にし、秦の將章邯・董翳・司馬欣を降す。羽、諸侯の上將軍と爲る。

〔通釋〕 中丞相の趙高は、秦の權力を己れ一人して自在に振りまはさうと思つても、群臣が承知しなかろうかとの懸念があつた。(そこで先づ果して皆が自分の言ふ通りに從ふかどうかを見極める爲に)、次のやうな試驗をして見た。彼は或日、鹿を持つて來て二世皇帝に獻上して、「これは馬でございます」と申上げた。二世は笑つて「丞相、思ひ違ひをして居りはせぬか、鹿を指して馬と言つて居るぞ」と言つたが、それでも不審に思つて、左右の侍臣に尋ねると、或者は沈默し、或は(鹿でございます)と正直に言つた。(趙高はこれで自分に反抗する剛直な者を知り得たので、その場は素知らぬ顔で濟ませおき)、後でそれとなくその鹿と言つた者共を他の罪によつて罰した。これより後、秦の群臣は皆な趙高の威權を畏れて、誰れ一人として高の缺點を言ふものは無かつた。〇項梁―秦の大將の章邯と戰つて敗れ死んだ。これより先、宋義は、項梁がきつと敗れるであらうと言つたが、果して其の通り項梁は負けたのだ。又 秦は趙を攻めたので、楚の懷王は宋義を總司令官とし項羽を副司令として趙

を救はしめた。ところが宋義は驕り高ぶつて（軍事を怠つたので）、項羽は之を斬り殺して、宋義の率ゐて居た軍勢を奪ひ取つて（自分の部下とし）、秦の兵を鉅鹿の城下で打ち破り、秦の將の王離等を虜にし、章邯・董翳・司馬欣の三將を降參させた。（時に諸侯も皆楚に屬したので）項羽は諸侯の總司令官となつた。

【語釋】 中丞相（當時丞相李斯は誅せられて在らず、趙高を丞相に任じて中丞相といつた。特に中の字を加へたのは、趙高は宦官で、禁中深く出入することが出來たからである。宦官のことを中人・中官などいふ中と同じ意。）○驗（ためしみること。試驗。）○或默或言（單に「言ふ」といふ語だけでは、鹿と言つたものと馬と言つたものと兩方に考へられるが、こゝでは「默す」といふのが趙高に盲從したことを意味するのに對して、「言ふ」といふのは正直に言ふ剛直を指したのである。）○陰中以レ法（それとなく他の罪をこしらへて法にあてゝ罰すること。）○宋義先言二其必敗一（宋義は故の楚の令尹即ち宰相であつたが、項梁が山東で秦軍を破つて大いに驕色があつたので、「戰ひ勝つて將驕り卒惰る者は敗る。今、卒少しく惰れり、臣、君の爲に之を畏る」と云つて諫めたけれども、項梁はその言を用ひなかつた。時に宋義が齊に使すると、途中で齊の使の高陵君顯が項梁の所へ往くのに出遇つた。で宋義は「自分の考へでは項梁の軍はきつと敗れるに相違ない。貴殿がゆつくり行かれるなら禍を免れようが、急いで行かれると丁度項梁敗軍の場に出會はされるだらう」と云つたが、果して項梁は秦の章邯の軍に破られて定陶で戰死したのであつた。）○上將（即ち上將軍で、今の總司令官といふやうなもの。）○義驕（宋義は趙を救ふの命を受けながら、いつまでも兵を進めず、天寒く雨ふり、士卒凍飢するに、ひとり飲酒高會し、項羽の進言した戰略など一向用ひないので、項羽は怒つて、宋義の帳中に於て之を斬り、「宋義、反逆の心あり、懷王の命によつて之を誅した」と聲明した。）○鉅鹿下（鉅鹿は今の直隸平鄉縣。下は城下の意。）

【餘說】 この時の鹿は普通の鹿でなく、麋鹿か何か幾分馬に似た動物であつたらうといふやうな話もあるが、その邊の詮索は餘り必要もあるまい。何れにせよ馬鹿々々しい話には違ひない。それから此の故事が本になつて、愚かな者を馬鹿といふといふやうな俗說もあるが、それはをかしい。馬は音讀

だが、鹿は音ロクで、カと讀むのは訓であるから、支那で用ひぬことは言ふまでもない。梵語の慕何(baka)に對して、我國で馬鹿の字を當てたものであらう。

弑二世
公子嬰立
慓悍猾賊
寛大長者

先是趙高數言、關東盜無能爲。及秦兵數敗、高恐二世怒、遂使壻閻樂弑二世於望夷宮。立公子嬰爲秦王。二世之兄子也。嬰既立、族殺趙高。○初楚懷王與諸將約。先入定關中者王之。當時秦兵强。諸將莫利先入關。獨項羽怨秦殺項梁、奮願與沛公先入關。懷王諸老將皆曰、項羽爲人慓悍猾賊。獨沛公寛大長者。可遣。乃遣沛公。

訓讀

是より先、趙高數々言ふ、「關東の盜、能く爲すことなし」と。秦の兵數々敗るるに及んで、高、二世の怒を恐れ、遂に壻の閻樂をして二世を望夷宮に弑せしめ、公子嬰を立てて秦王と爲す。二世の兄の子なり。嬰既に立ち、趙高を族殺す。○初め楚の懷王、諸將と約す。先づ入りて關中を定むる者は之に王たらんと。當時秦の兵强し。諸將先づ關に入るを利とするもの莫し。獨り項羽は秦が項

梁を殺ししを怨み、奮つて沛公と先づ關に入らんことを願ふ。懷王の諸老將皆曰く、「項羽、人と爲り慓悍猾賊。獨り沛公は寬大の長者なり。遣す可し」と。乃ち沛公を遣す。

通釋 是より前、趙高は度々二世に向つて「關東に起つて盜賊は何事をも仕出かす程の力はありませぬ（御心配は御無用でござります）」といつて、（秦の敗軍を隱してゐた。然るに秦の兵が度々敗れて（大將等も敵に降參するに）至つたので、趙高は二世が（敗軍を知り、隱してゐたのを覺つて）立腹することを恐れ、とう〳〵女の夫の閻樂といふ者をして二世を望夷宮で殺させ、公子の嬰を立てて秦王とした。嬰は二世の兄（扶蘇）の子である。かくて嬰が王位に立つと、（趙高の罪を取り調べて）その三族を皆殺しにした。○初め楚の懷王心は、諸將に對してまづ先に關中に入つて秦を平定した者は、關中の王としようと約束した。しかし當時はまだ秦の兵力が強かつたので之を畏れて、誰れ一人として眞先きに關中に討ち入るのが利益だと思ふものは無かつた。たゞ項羽だけは、秦が叔父の項梁を殺したのを怨み、奮ひ立つて沛公と共に關中入りの魁をしたいと志願した。然るに懷王の老將たちは、みな「項羽の性質は、氣早で亂暴である。（そんな者は、たとひ戰に勝つても、秦の民を懷けることが出來ない）。それに反して沛公は心のゆつたりとしたおとなしい有德者である。沛公を遣はすがよ

い」と言つた。そこで沛公を遣はすことになつた。


關東（函谷關の東。卽ち秦以外の六國。楚が始め秦を攻める國々を指す。）○望夷宮（咸陽にある秦の宮殿の名。長陵の西北にあつた涇水に臨んで作られ、北夷を望むことが出來たから斯く名づけたといふ。）○爲ニ秦王一（趙高がいふやう、秦はもと王國である。然るに始皇は天下の君となられたから帝と稱されたが、今は六國が復び獨立したから、秦はもとの王國である。故に王と稱すべきであると。因つて嬰を秦王と稱した。）○關中（秦の地。今の陝西省。秦の都咸陽は略ぼその中央にある。東は函谷關、南は武關、西は散關、北は蕭關に圍まれてゐるから關中と稱するといふ。）○怨三秦殺二項梁一（項梁は會稽で兵を擧げ、懷王を奉じて隆々たる勢であつたが、心に驕る所があつて、秦將章邯の爲めに破られて脆くも戰死した。項羽は之を千載の遺恨に思つてゐたのである。）○慓悍猾賊（慓悍は氣早くして强勇なること。猾賊は亂暴で人をあやめ害ふこと。）○長者（チヤウシヤと濁んで讀む。人にすぐれた德ある人。有德者。その他、孟子の「爲ニ長者一折レ枝」など年長者の意にいふこともある。又我國ではチヤウジヤと濁つて「氏の長者」「百爲長者」など頭領・富豪などの意にも用ひる。）

高陽ノ人酈食其、謂二沛公ノ麾下ノ騎士ニ一曰ク、吾聞ク沛公ハ慢ニシテ而易レ人ヲ、多シト二大略一。此レ眞ニ吾ガ所ナリト二願ヒテ從ヒ游バント一。騎士曰ク、沛公不レ好マ儒ヲ。客ノ冠シテ二儒冠ヲ一來ル者ハ、沛公輒チ解キ二其ノ冠ヲ一、溲二溺ス其ノ中ニ一。未ダレ可カラ三以テ二儒生ヲ一說ク也。食其令メテ二騎士ヲシテ第ダ入リテ言ハ一レ之ヲ曰ク、人皆謂フ二食其ヲ狂生ト一、生自ラ謂フ二我ハ非ズト二狂生ニ一。沛公至リ二高陽ノ傳舍ニ一、召シテレ生ヲ入ラシム。沛公方ニ踞シテレ床ニ、使メテ二兩女子ヲシテ洗ハ一レ足ヲ而見ルレ生ヲ。生長揖シテ不レ拜セ曰ク、足下必ズ欲セバレ誅セント二無道ノ秦ヲ一、不レ宜シカラ三倨シテ見ル二長者ニ一。於レ是ニ沛公輟メテレ洗フヲ、起チテ攝シ衣ヲ、

沛公不レ好レ儒

酈生長揖

延二生上坐一謝レ之。生爲二沛公一說下二陳留一。後常爲二說客一。

訓讀 高陽の人酈食其、沛公の麾下の騎士に謂ひて曰はく、「吾聞く、沛公は慢にして人を易り、大略多しと。此れ眞に吾が從游を願ふ所なり」と。騎士曰はく、「沛公、儒を好まず、客の儒冠を冠して來る者は、沛公輒ち其の冠を解き、其の中に溲溺す。未だ儒生を以て說く可からざるなり」と。食其、騎士をして第だ入りて之に言はしめて曰はく、「人は皆、食其を狂生なりといふ。生は自ら謂ふ、我は狂生に非ず」と。沛公、高陽の傳舍に至り、生を召して入らしむ。沛公、方に床に踞し、兩女子をして足を洗はしめて生を見る。生、長揖して拜せずして、曰はく、「足下必ず無道の秦を誅せんと欲せば宜しく倨して長者を見るべからず」と。是に於て沛公、洗を輟め、起ちて衣を攝し、生を上坐に延きて之を謝す。生、沛公の爲めに說きて陳留を下す。後常に說客と爲る。

通釋 高陽河南の人で酈食其といふ儒者が、沛公の旗本の騎馬武者に向つて曰ふやう、「私は、沛公は高慢氣があつて人を馬鹿にする所はあるが、遠大な計略を持つてゐる人と聞いてゐる。これこそ本統に私が附き從ひたいと願ふ人である。(どうか紹介して下さい)」と。騎士が答へていふ、「沛公は

學者を好まれない。(故に若し)學者の冠を戴いて來る者があると、沛公は直ぐその冠をぬがせて、その中に小便を引つかける位だ。だから學者などと言つては沛公を說きつけることは迚も駄目だ」と。酈食其は(それでも承知せず)强ひて騎士に賴み「(私の鄕里に酈生といふ者がゐます。人は彼を狂人といひますが、彼れ自らは私は狂人ではない」といつてゐます。(その者が謁見を願つて居ります)」と、唯だ何かなしにそれだけを言はせた。(騎士が其の通り申し上げると)、沛公は高陽の旅舍についてから酈生を召し入れた。そのとき沛公は床几に腰を掛け、二人の女子に足を洗はせながら酈生に面會したので、酈生は手をこまぬいて上より下へさげる禮をした丈で、躬を屈めて拜する禮をしないで、から云つた。「貴殿が是非とも彼の暴虐な秦を攻め亡さうと思はるゝならば、足を投げ出したまゝ(無禮な態度を以て)長者に面會すべきでは御座らぬ」と。沛公いかにもと覺つて足を洗はすことを止め立つて衣服を整へ、酈生を上座に直して無禮を詫びた。そこで酈生は沛公の爲めに陳留といふところの人民を說いて從へた。その後も常に說客となつて(諸方を說き廻り、大いて沛公のために盡した)。

【語釋】高陽(地名。今の河南祥符縣治。) ○麾下(麾は大將が軍を指揮する旗。さしづばた。因て大將に屬する部下の士を麾下といふ。はたもと。) ○慢而易レ人(高慢で人を輕蔑すること。易はアナドルと訓じ、輕侮すること。) ○從游(その部下となつて附き從うてゆくこと。) ○儒(學者の稱。それより孔子孟子を祖とする學派、又はその敎義を奉ずる學問・學者をいふ。儒敎・儒者。) ○冠ニ儒冠一(上の冠は動詞、かぶること。下

子嬰降

の冠は名詞、かんむりである。）　○溲溺（小便。溺は尿に同じ。音ネウ。ゆばり。）　○第（タヾと訓ず。なにかなしにたゞ。）　○傳舍（旅舍、はたごや、長官者の宿。上に見えた。一二二頁參照。）　○長揖（揖は音イフ又はイツ。手を組んで胸のあたりへ當てること。こまぬくこと。それを上より下へ撫でて下げるを長揖といふ。禮式の一種。）　○踞（足を投げ出して坐ること。腰かける。）　○拜（身をかゞめて禮すること。）　○足下（其人の足の下といふことで、直接に其人を指さず、足下に申上げる意から、人を敬ふ稱となる。）　○延（ヒクと訓じ、まづ〳〵これへと案內すること。請じ入れること。延見と熟する。）　○倨（踞に同じ。史記本傳には上文の「踞レ床」をも「倨レ床」とある。倨踞通用したことが分る。）　○攝レ衣（攝はヲサムと訓じ、整へること。衣の前をかいつくろふをいふ。）　○說客（說はトキス、メル意の時は音ゼイ。遊說の如し。說客は遊說の客で、利害を說得して人を味方にすゝめ入れる者。）

張良從沛公西。○沛公大破秦軍、入關至霸上。秦王子嬰、素車白馬、繫頸以組、出降軹道旁。秦自始皇二十六年并天下、二世・三世而亡、稱帝止十有五年。

【訓讀】張良、沛公に從つて西す。○沛公大いに秦の軍を破り、關に入つて霸上に至る。秦王子嬰、素車白馬、頸に繫くるに組を以てし、出でて軹道の傍に降る。秦は始皇の二十六年に天下を併しより、二世・三世にして亡びぬ。帝と稱せしは止だ十有五年のみ。

【通釋】張良は沛公に從つて西の方（秦の征伐に向つた）。○沛公は遂に秦の兵を破つて函谷關に入り、霸水といふ川のほとりに至つた。すると秦王の子嬰は白木の車を白い馬に牽かせて（之に乘り、

頸に打紐をかけて罪人の姿をなし、宮門を出て軹道といふ驛場まで來て降伏を申し込んだ。秦は始皇帝が卽位の第二十六年に天下を併せてから二世・三世と(僅か三代)で亡んだ。皇帝と稱したのは僅かに十五年に過ぎなかつた。(時に皇紀四五五年、西暦二〇六年である)。

語釋 素車(飾のない白木の車、白車白馬は葬式の出で立ちである。) ○繫レ頸以レ組(組は天子の印璽の綬で、ウチヒモ。之を頸に繫けるのは自殺の決心を示したもので、罪人の姿である。素車白馬で頸に組をかけるのは、つまり降服の禮である。) ○軹道(地名。驛亭の名。長安の東十三里にあつた。) ○止十有五年(止はタダと訓じ、僅かにこれのみといふ意。)

西漢

漢高祖

隆準龍顔

漢太祖高皇帝、堯之後、姓劉氏、名邦、字季。沛豐邑中陽里人也。母媼息大澤之陂、夢與神遇。時大雷雨晦冥。父太公往、見交龍其上。已而產劉季。隆準而龍顔、美鬚髯。左股有七十二黑子。寬仁愛人、意豁如也。有大度、不事家人生產。

【訓讀】漢の太祖高皇帝は、堯の後にして、姓は劉氏、名は邦、字は季。沛の豐邑の中陽里の人也。母の媼、大澤の陂に息うて、夢に神と遇ふ。時に大に雷雨して晦冥なり。父の太公往きて、交龍を其の上に見る。已にして劉季を產む。隆準にして龍顔、美鬚髯あり。左股に七十二の黑子有り。寬仁にして人を愛し、意豁如たり。大度有り。家人の生產を事とせず。

【通釋】漢の太祖の高皇帝——いはゆる漢の高祖は、昔の堯帝の子孫で、姓は劉といひ、名は邦、といひ、字は季といひ、沛郡の豐邑の中陽里といふ處の生れである。その母なる老婦人が、或時大きな

大丈夫當如此

澤の陂に休息して居ると、(ふと眠氣を催したので、うと〳〵とまどろむ中に)夢に神様と遇つた。折から大雷雨で、天地が暗黑になつたので、父の太公が(心配して)迎へに行つたところ、蛟龍が妻女の寢てゐる上に舞ひ下つて居るのを見た。(不思議な事と思つたが)、其後妻女は劉季を産んだ。劉季は鼻高く、額が龍のやうで、ひげ美しく、左の股に七十二のほくろがあつた。心ひろく情ふかく、博く人を愛し、氣立がからりとして快濶である。且つ度量大きく、世間的な庶民のする家業なぞはそつちのけにして構はなかつた。

語釋 太祖高皇帝(劉邦の諡號。太祖は始祖の意。高とは功業最も高きを以て特に號したといふ。即ち高祖のこと。) ○媼(老女のこと。お婆さん。名ではない。) ○陂(音ヒ 堤防。池のツツミである。) ○太公(祖父または父の尊稱。太公望の條下で述べた。こゝは高祖の父の尊稱。名は煓(タン)と稱したといふ。) ○交龍(史記に「蛟龍」とあるのに同じい。ミヅチと訓じ、龍の一種で、四足を具へよく大水を起すといふ。) ○隆準(準はハナバシラ。この場合には音セツ。鼻すぢが通つて高いこと。) ○龍顏(龍のやうなヒタヒ。顏は額と同じ意に解する。一説に龍のやうなカホといふ。何れにしても非凡の相をいふのである。後には專ら天子の顏をいふやうになつた。) ○鬚髯(鬚はアゴヒゲ。髯はホヽヒゲである。因みにクチヒゲは髭(音シ)といふ。) ○黑子(ほくろ、あざ。) ○豁如(クワツジヨ。からりと開けてゐるさま。心が快活でさつぱりしてゐること。) ○家人(こゝでは官に仕へずに家に居る意。即ち庶民のこと。) ○生産(こゝは生業の意。即ちナリハヒ、家業である。)

及壯爲泗上亭長。嘗繇役咸陽、縱觀秦皇帝曰、嗟乎、大丈夫當如此矣。單父人呂公好相人。見劉季狀貌曰、「吾相人多矣。無如季相。願季自愛。吾有

息女、願爲箕帚妾。卒與劉季。卽呂后也。

訓讀 壯なるに及び泗上の亭長と爲る。嘗て咸陽に繇役し、秦の皇帝を縱觀して曰く、「嗟乎、大丈夫當に此の如くなるべし」と。單父の人呂公、好んで人を相す。劉季の狀貌を見て曰く、「吾、人を相すること多し。季の相に如くは無し。願はくは季、自愛せよ。吾に息女有り。願はくは箕帚の妾と爲さん」と。卒に劉季に與ふ。卽ち呂后也。

通解 劉季は盛りの年頃になつて泗上(江蘇沛縣)といふ地の庄屋になつた。これより先、咸陽に夫役に出たとき、秦の始皇帝の(堂々たる儀容)を拜觀することを得て、思はず斯う言つた。「あゝ、立派な一人前の男子と生れた以上、何でもあの始皇帝のやうにならねばならぬ」と。當時、單父(山東省)の人で呂公といふものがあつて、好んで人の人相を見て居つた。それが劉季の顏付を見て「俺はこれまで多くの人の人相を見て來たが、貴方の人相に及ぶものは一人もない。(きつと素破らしい出世をなさるであらう)。あなた、體を大事にして(他日の大成を期せられたい)。就ては俺に一人の娘があります。(まことに不束なものですが)、どうか、あなたの召使に使つて戴きたい」と言つて、卒に劉季に

嫁がせた。それが即ち呂皇后である。

語釋 亭長（亭は旅人を停留さする義で宿場（シュクバ）のこと。驛といふに同じい。秦の制度に十里に一亭を設けて旅人を宿泊せしめ、亭に亭長を置いて取締りをさせた。我が國でいへば村の庄屋といつたやうなものである。）　○繇役（夫役（ブヤク）のこと。官に徴發されて勞役に服するをいふ。）　○縱觀（ほしいまゝに見る義。平生は天子が外に出られても人民は勝手に拜觀できなかつたが、この時はそれが許されて自由に見ることが出來たのである。）　○呂公（名が明かでない爲に呂公と書いたのである。一說に名は文、字は叔平といふと。但し確實ではない。）　○箕帚妾（箕はチリトリ、帚はハウキ。チリトリとハウキを持つて掃除などする賤しい女の義で、妻となることを謙遜していふ言葉。「箕帚ヲ奉ズ」「箕帚ヲ執ル」ともいふ。）

餘說 嘗て始皇が會稽山に出遊したとき、項羽は叔父の項梁と共に、路傍に、その堂々たる行列を見て、「彼れ取つて代るべきなり」と思はず口を辷らしたが、かれといひ、これといひ、將又、陳勝・吳廣の豪語といひ、所詮は同工異曲、戰國人士の面影を髣髴せしめて面白いではないか。

秦始皇嘗曰、東南有天子氣。於是東遊以厭當之。劉季隱於芒・碭山澤間。呂氏與人俱求、常得之。劉季怪問之。呂氏曰、季所居上有雲氣。故從往、常得季。劉季喜。沛中子弟聞之、多欲附者。爲亭長時、以竹皮爲冠、及貴常冠。所謂劉氏冠也。

【訓讀】秦の始皇嘗て曰はく、「東南に天子の氣あり」と。是に於いて東遊して以て之を厭當す。劉季、芒・碭山澤の間に隱る。呂氏、人と倶に求めて、常に之を得たり。劉季、怪しみて之を問ふ。呂氏の曰はく、「季が居る所の上に雲氣あり。故に從ひ往きて、常に季を得たり」と。劉季喜ぶ。沛中の子弟之を聞きて、附かんと欲する者多し。亭長たりし時、竹皮を以て冠と爲ししが、貴きに及んでも常に冠せり。所謂劉氏の冠なり。

【通釋】秦の始皇帝が或時いふやう、「東南の方角に天子の雲氣が見える（これ一大事、そのまゝに置けぬ）と。そこで東方に巡幸して（威を示し）之を壓しつぶしてしまはうとした。劉季は（之を聞いて自ら疑ひを受けることを恐れ、用心して）芒・碭などといふ山地や沼澤の邊鄙な田舍に隱れた。（妻なる）呂氏は人と一所に之を探し、いつでも行く先々を尋ね當てた。季が之を不思議に思つて其の譯を尋ねると、呂氏は「あなたの居られる所の上には、きつとめでたい雲氣が立ちのぼつてゐるので、それを目當にして、いつでもお探し申しました」と答へた。劉季は之を聞いて喜んだ。沛中の青年はこの事を傳へ聞いて、（偉い人だ、きつと出世する人だ、といふので）その部下になりたいと願ふ者が多かつた。劉季が泗上の亭長をしてゐた時は、粗末な竹の皮の冠をつけて居たが、後に天子といふ

尊貴の身分になつても、(昔を忘れず)常にその冠を戴いて居た。之が世にいふ劉氏の冠である。

【語釋】厭當(厭は音アツと讀み壓の意、敵手をおしつけ鎭めて禍を祓ひのけること。) ○天子氣(偉大なる人物の居る所には、雲氣と稱して、一種の氣が雲の如くに空中に表はれて、その人物の動靜や運命を表示するものと信ずるのが漢人の思想である。同時にこゝでは劉季が將來天子となるべき特異な性格を天より受けてゐたといふことを暗示する。) ○芒碭山澤間(芒山、碭山の二山。江蘇碭山縣の東南に在り、二山相去ること八里。今、皇藏谷と稱する處が高祖の匿れた所であると云ふ。山澤とは山地や沼澤の地で、邊鄙な田舍のこと。殊に江蘇あたりは沼澤が多い。)

劉季爲縣送徒驪山。徒多道亡。自度、比至盡亡之。到豐西止飮。夜乃解縱所送徒曰、公等皆去。吾亦從此逝矣。徒中壯士願從者十餘人。季被酒夜徑澤中。有大蛇當徑。季拔劍斬之。後人來、至蛇所。有老嫗哭曰、吾子白帝子也。今者赤帝子斬之。因忽不見。後人告劉季。劉季心獨喜自負。諸從者日益畏之。陳勝起、劉季亦起兵於沛、以應諸侯。旗幟皆赤。

【通釋】劉季、縣の爲に徒を驪山に送る。徒多く道より亡ぐ。自ら度るに、至る比には盡く之を亡はんと。豐西に到りて止り飮む。夜乃ち送る所の徒を解き縱ちて曰く、「公等皆去れ。吾も亦此れより

逝かん」と。徒中の壯士、從はんと願ふ者十餘人あり。季、酒を被りて、夜、澤中を徑す。大蛇有りて徑に當る。季、劍を拔きて之を斬る。後るゝ人來り、蛇の所に至る。老嫗有り。哭して曰く、「吾が子は白帝の子也。今者赤帝の子、之を斬る」と。因りて忽ち見えず。後るゝ人、劉季に告ぐ。劉季、心に獨り喜びて自負す。諸の從ふ者、日に益々之を畏る。陳勝の起るや、劉季も亦兵を沛に起して、以て諸侯に應ず。旗幟皆赤し。

通釋 (當時始皇を陝西省の驪山に葬るといふので、四方の郡縣から、人夫として使ふために澤山の囚徒を其處へ送るのであつたが)、劉季も泗上の亭長として、その縣の命令によつて囚徒を驪山へ護送して行つた。然るに囚徒は、大部分、途中からにげ出して、驪山に着く時分には、すつかり逃げてしまひさうに考へられた。そこで劉季は豐邑の西に來た時、そこに止まつて酒を飲み、その夜、護送して行く囚徒を解放して「みんな勝手に(往きたい所へ)往け、俺もこゝから往くんだ」と、(自由行動を取ることを發表した)その時囚徒中の若者が十人あまり、劉季の手下になつて往きたいと望むものがあつた。それから劉季は、酒をひつかけて、夜中に沼地の中の小道を忍んで行つた。すると途に大蛇が橫はつてゐた。季は劍を拔いてそれを斬り殺した。後れて來た囚徒がその大蛇の所まで來ると、

そこに、一人の老婆がゐて、「わが子は白帝の子であつたが、今赤帝の子の爲めに斬られてしまうた」と、おい〳〵泣きながら訴へた。が（さう言つたかと思ふと、老婆の姿はかき消すやうに）急に見えなくなつた。後れて來た囚人は（不思議に思つて）、劉季にこの事を告げた。劉季はそれを聞いて心の中に（我こそ秦を討つて之に代るべき天運を有つものだと悟つて）、獨り喜んで自信をつけて居つた。（こんな噂が段々ひろまつたので）、大勢の手下どもは日に〳〵劉季を畏敬するやうになつた。斯くて陳勝が兵を起すと、劉季も亦兵を沛にあげて諸侯に應じた。そのとき立てた旗幟は、（我は赤帝の子なればとて）皆赤色に染めた。

語釋 驪山（山名。陝西臨潼縣の東南にある。そこに始皇を葬るとて、多くの人夫を集めて陵を築くのである。）○徒（囚徒、卽ち囚人。工事の勞働に服させしめる爲に囚人を使つたのである。）○豐西（沛縣豐邑の西。）○夜徑二澤中一（徑はコミチ。夜間小道をとほつて沼澤の地を過ぎゆくこと、人目を忍んで逃げ去るが爲である。）○老嫗（嫗は音ウ。老女のこと。）○白帝赤帝（秦は西方にある。西は五行（木火土金水）に配當すると金に屬し、五色に配當すると白に當する。故に白帝の子とは皇帝の意である。劉氏は堯の末裔、堯は火德の天子、火は赤。故に赤帝の子とは劉季を指す。赤帝の子が白帝の子を殺すとは、秦が劉季に滅されることを意味し、例の漢人の五行思想から劉季の將來を祝福して傳へたものである。）

餘論 とかく英雄の出生や生立などには、荒唐無稽の怪說がまつはり易いものだ。この高祖の事にしても、十八史略に載せたものだけでも、高祖の母が懷妊した時、天地晦冥、蛟龍その上に見れたといひ、始皇は常に「東南に天子の氣あり」と言つて畏れたといひ、呂氏はその雲氣のある所を求め步



いて遂に高祖を尋ねあてたといひ、今また白帝赤帝の説をなすなど、皆その例である。これ一は英雄が愚民を籠絡せんが爲めの宣傳と、又一には怪奇を好む人間の通有性とが、因となり果となつて作り上げたものであつて今日の吾等が首肯すべき限りでないことは勿論である。さりとて之を根も葉もない妄誕として一笑

に附し去るばかりが能事でもない。寧ろ斯くの如くありし時代、斯くの如くありし人心に就て、吾等の考察する世界が開かれてあることを知らねばならぬ。

沛公入關　法三章

楚懷王遣沛公。破秦入關、降秦王子嬰。既定秦還軍霸上。悉召諸縣父老・豪傑、謂曰、父老苦秦苛法久矣。吾與諸侯約、先入關中者王之。吾當王關中。與父老約、法三章耳。殺人者死。傷人及盜抵罪。餘悉除去秦苛法。秦民大喜。

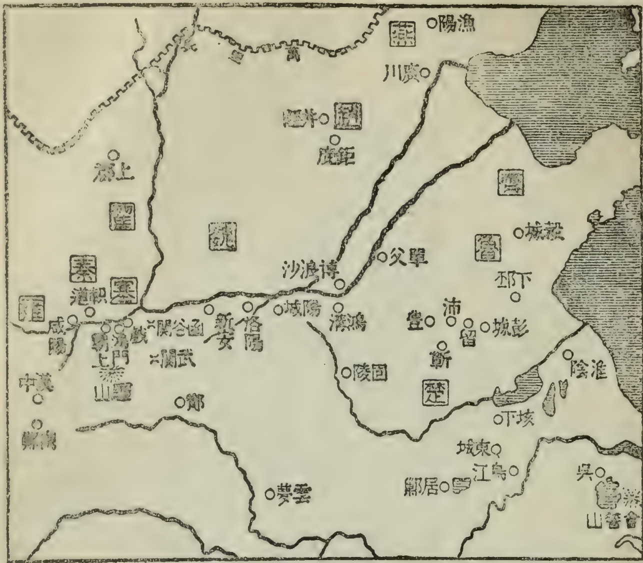
訓讀 楚の懷王、沛公を遣す。秦を破つて關に入り、秦王子嬰を降す。既に秦を定め還つて霸上に軍す。悉く諸縣の父老・豪傑を召し、謂ひて曰く、「父老、秦の苛法に苦しむこと久し。吾、諸侯と約す、先づ關中に入る者は之に王たらんと。吾當に關中に王たるべし。父老と約す、法三章耳。人を殺す者は死せん。人を傷つけ及び盜するものは罪に抵さん。餘は悉く秦の苛法を除き去らん」と。秦の民大いに喜ぶ。

通釋 （話は元にもどつて）、楚の懷王は沛公（劉季）を關中に遣はした。沛公は秦の軍を破つて關中

に進入し、秦王子嬰を降伏せしめ、關中の地を平定し、退いて霸上に軍を止めた。そこで諸縣の長老や豪傑を全部召集して告げて曰ふには、「長老は久しく秦の苛酷な法律の爲に苦しんで居られた。自分は、まづ先に關中に入つた者が其の地の王とならうと、諸侯と約束して參つたのであるから、當然自分がこの關中の王となるのである。就ては今、長老達と、（法を設けて確と）約束を致さう。その法といふのは唯三ケ條だけぢや。卽ち（第一條）人を殺したものは死刑に處する。（第二條）人に傷害を加へたものは、それぐ\罪に當てゝ罰すること。（第三條）盜みをしたものも亦相當な罪に當てゝ罰すること。その他は總て從來の秦の苛酷な法律を廢止する」と。これを聞いた秦の民は、（法律の簡單さに）大いに喜んだ。

語釋　霸上（地名。陝西長安縣の東。霸水のほとりにあるから云ふ。）○豪傑（富力を以て鄕黨に威張つてゐる者などをいふ。）○苛法（むごい法。非道な嚴しい法律。）○抵レ罪（抵はイタスと訓じ、當てること。人を傷けるといふにも曲直があり、盜にも種々あつて一定しないから、豫め罪を定めることが出來ない。故に廣く罪に當てると云つたのである。）

項羽率ニ諸侯兵一、欲ニ西入一レ關。或說ニ沛公一守ニ關門一。羽至。門閉。大怒、攻ニ破之一、進至レ戲、期ニ旦擊一ニ沛公一。羽兵四十萬、號ニ百萬一。在ニ鴻門一。沛公兵十萬、在ニ霸上一。范增說



秦漢地圖

羽曰、沛公居二山東一、貪レ財好レ色。今入レ關、財物無レ所レ取、婦女無レ所レ幸。此其志不レ在レ小。吾令二人望一其氣、皆爲レ龍、成二五采一。此天子氣也。急擊勿レ失。

訓讀 項羽、諸侯の兵を率ゐ、西のかた關に入らんと欲す。或ひと沛公に說きて關門を守らしむ。羽至る。門閉づ。大に怒り、攻めて之を破り、進んで戲に至り、旦に沛公を擊たんと期す。羽の兵は四十萬、百萬と號す。鴻門に

在り。沛兵の兵は十萬、覇上に在り。范增、羽に說きて曰く、「沛公、山東に居りしとき、財を貪り色を好めり。今關に入り、財物取る所無く、婦女幸する所無し　此れ其の志、小に在らず。吾れ人をして其の氣を望ましむるに、皆龍と爲り五采を成す。此れ天子の氣也。急に擊ちて失ふこと勿れ」と。

（通釋）項羽は諸侯の兵を率ゐて西のかた函谷關に進み入らうとした。すると或者が沛公を說きつけて函谷關を守備し（項羽を入れぬやうにさせた）。やがて、項羽はやつて來た。が、關門堅く閉されて入る由がない。項羽は大いに怒り、（門を守備するものを）攻め破つて押し入り、戲水のほとりに着いて、明朝を期して沛公をたゝき付けようと考へてゐた。時に項羽の兵は四十萬、それを百萬といふ觸れ出しで、鴻門に屯してゐる。沛公の兵は十萬、覇上に止まつてゐた。こゝに軍師の范增が項羽に說いて曰ふには、沛公は山東（沛）に居つた頃は、財寶をも貪り、女色をも好んだものでござるが、今關中に入つてからは、財寶には手を觸れず、一人の婦人も近づけて居りませぬ。これ沛公の志す所が決して小さくない證據で、（彼は實に天下を狙つて居るのでございます）。且つ拙者が部下に命じて、沛公の居る所に立ち上る雲氣を見させましたところ、皆龍の形をなし五色の色彩をして居ると申すことであります。これぞ即ち天子の雲氣でござる。（彼れ沛公が天子たるべき前兆でござる）。早速に襲ひ



撃つて、必ず討ち洩さぬやうにせねばなりませぬ」と。

語釋 關(函谷關のこと。前に出づ。) ○戲(川の名。戲水。陝西臨潼縣の東にある。驪山より出でゝ渭水に入る。) ○鴻門(地名。戲水の西岸にある阪口。) ○幸(寵愛すること。) ○其志不ㇾ在ㇾ小(沛公が欲望を抑へ身を愼んで務めて人望を集めんとしてゐるのは、これ天下に王たらんとするの大野心を有すからである。その志望するところが決して小事の上にないことがわかるとの意。) ○令三人望二其氣一(其氣は所謂雲氣のこと。) ○五采(五彩に同じ。五色。即ち青・黄・赤・白・黑。)

羽季父項伯素善二張

【項伯】【約婚姻】

良夜馳至沛公軍、告良呼與倶去。良曰、臣從沛公、有急亡不義。入具告、因要伯入見沛公。奉卮酒爲壽、約爲婚姻。曰、吾入關、秋毫不敢有所近。籍吏民、封府庫、而待將軍。所以守關者、備他盜也。願伯具言臣之不敢倍德。伯許諾曰、旦日不可不蚤自來謝。伯去具以告羽、且曰、人有大功、擊之不義。不如因善遇之。



羽の季父項伯、素より張良に善し。夜馳せて沛公の軍に至り、良に告げ呼びて與に倶に去らんとす。良曰く、「臣、沛公に從ひ、急有りて亡ぐるは不義なり」と。入りて具に告げ、因りて伯を要して入り見えしむ。沛公、卮酒を奉じて壽を爲し、約して婚姻を爲す。曰く、「吾關に入りて、秋毫も敢て近くる所有らず。吏民を籍し、府庫を封じて、將軍を待つ。關を守る所以の者は、他の盜に備ふる也。願はくは伯、具に臣の敢て德に倍かざるを言へ」と。伯、許諾して曰く、「旦日蚤く自ら來りて謝せざる可からず」と。伯去りて具に以て羽に告げ、且つ曰く、「人大功有り、之を擊つは不義なり。

因りて善く之を遇するに如かず」と。

項羽の叔父の項伯は平素から(沛公の臣の)張良と親密であつた。(ところで今や項羽が沛公の軍を一撃の下に鏖殺せんとするを知つた項伯は、親友張良の身が氣づかはれてならぬ)。そこでその夜、ひそかに沛公の軍に馳せつけて急を張良に告げ、呼び出して一緒に逃げ去らうと勸めたけれども張良は、「自分は沛公に臣として從ひながら、主人の危險を見すてゝ逃げるのは、人の道でない」と言つて、内に入つて委しく沛公に告げ談合の結果、項伯を無理に引きとめて沛公に會見させた。沛公は酒を盛つた大盃を捧げて項伯の健康を祝し、子供の婚姻を約束して(親戚關係を結んだ)。沛公曰く、「拙者、關中に入つて以來、寸分も私する所はありませぬ。即ち役人や百姓の數を調べて帳簿に記載し、財寶や武器の入れてある倉庫にはそのまゝ封印をして、項羽將軍のおいでを待つて居つたのであります。たゞ函谷關を守備したと申すのは、他の盜賊の侵入に備へたまでで、(もとより項羽將軍にお手向ひしようなどの考は微塵もござりませぬ)。どうか貴下、私が項羽將軍の御恩德を忘れないことを將軍に申上げて下さい」と賴んだ。項伯は、それを承知して、「明日は早く御自分でお詫に來られねばなりますまい」と注意した。そこで項伯は覇上を去つて(鴻門に來り)、くはしく事情を

項羽に話し、且つ曰ふには、「斯樣に大功のある人を撃つといふのは道ではない。却つて丁寧に待遇してやつたがようごわせう」。

語釋　季父（をぢ。伯父・仲父・叔父・季父、皆父方のヲヂで、之を總稱して從父といふ。伯・仲・叔・季は父の兄弟の順序をいふ。季父は即ち父の末弟である。一說に季父は從父の總稱で必ずしも末のヲヂに限らないともいふ。）　○項伯（名は纏、字は伯、項羽の季父である。嘗て人を殺して罪にあふ所を張良に助けられた恩儀がある。故に今張良の急を救はうとするのである。後に漢に歸して射陽侯に封ぜられ、姓を劉氏と賜うた。）　○張良（字は子房、高祖の三傑の一人。その家は世々韓の相であつたが、秦が韓を滅すに及んで、韓の爲めに仇を報ぜんとして、博浪沙といふ處で、一力士をして大鐵椎を以て始皇を擊たしめたが中らず。逃げて沛公に從ひその軍師となり後に留侯に封ぜられた。委しくは後章に出づ。）　○要レ伯（要は、おさへて無理やりにすること。いやと言はせぬやうにすること。）　○巵酒（巵は音シ。サカヅキ。四升（我國の四合程入りの角製の）こゝは酒をついだ大盃といふ意。）　○爲レ壽（盃を進めて其人の壽を祝すること。）　○秋毫（秋の獸の毛。すべて細小のことを「毫」といふが、特に「秋毫」といふ所以は、獸の毛は秋になると脫け變るので極めて細いからである。）　○所レ近（身に近づけ我が所有とする。即ち私すること。）　○府庫（府は朝廷の文書や金銀重寶などを藏する處、庫は兵車の諸道具を入れる處。總じて倉庫の意。くら。）　○臣不レ敢倍レ德（臣は君臣の臣ではない、當時の人は他人に對して多く臣といつたもので、後世の僕・拙者などいふと同じやうな意味であつた。倍は背と同じくソムクと訓む。德は恩德。敢て恩德に背く心はないといふので、項羽に對して他意なきことを意味するのである。）　○旦日（あした。明日。明朝。）　○蚤（音サウ。早に通ず。ハヤシ。）

沛公旦從二百餘騎一、見二羽鴻門一。謝曰、臣與二將軍一戮レ力而攻レ秦。將軍戰二河北一、臣戰二河南一。不二自意一、先入レ關破レ秦、得三復見二將軍於此一。今者有二小人之言一、令三將軍與レ臣有レ隙。羽曰、此沛公左司馬曹無傷之言。羽留二沛公一與飲。范增數目レ羽、

擧所佩玉玦者三。羽不應。增出使項莊入前爲壽、請以劍舞、因擊沛公。項伯亦拔劍起舞、常以身翼蔽沛公。莊不得擊。張良出告樊噲以事急。

訓讀 沛公旦に百餘騎を從へて、羽を鴻門に見る。謝して曰く、「臣、將軍と力を戮せて秦を攻む。將軍は河北に戰ひ、臣は河南に戰ふ。自ら意はざりき、先づ關に入りて秦を破り、復た將軍に此に見ゆるを得んとは。今者小人の言有り、將軍をして臣と隙有らしむ」と。羽曰く、「此れ沛公の左司馬曹無傷の言なり」と。羽、沛公を留めて與に飮む。范增數々羽に目し、佩ぶる所の玉玦を擧ぐる者三たび。羽、應ぜず。增出でて、項莊をして入り前んで壽を爲し、劍を以て舞はんと請ひ、因つて沛公を擊たしむ。項伯も亦劍を拔いて起つて舞ひ、常に身を以て沛公を翼蔽す。莊、擊つことを得ず。張良出でて樊噲に告ぐるに事の急なるを以てす。

通釋 沛公はその翌朝百餘騎の部下を引きつれて、鴻門に行つて項羽と會見した。（函谷關を守備した罪を）詫びて曰ふには、「拙者は將軍と力を合せて秦を攻め、將軍は黃河の北に戰はれ、拙者は南で戰ひました。併し、まさか拙者が先に關中に入つて秦を滅ぼし、このやうに此で再びお目にかゝるこ

とが出來ようとは思ひませんでした。然るに今つまらぬ者が無根の事を傳へて、將軍と拙者とを離間せんと致しました。(誠に心外の至でございます)」と。項羽は(これで一先づ怒も解けて)「それは貴殿の左司馬の曹無傷から聞いたことぢや。(が、さうと分ればそれでよい)」と言つた。項羽は沛公を引き留めて酒宴を張つた。(その席上で)范增はたび〳〵項羽に目くばして、腰に佩んでゐた玉玦を三度まで擧げて(決行せよと教へたが)、羽はどうしてもそれに應じない。(これは駄目だと見切をつけた)范增は、席を外して項莊を招き、「これから宴席に入つて沛公の前まで前み、杯を献じて健康を祝し、(それが終つたら)、劍舞を舞つて(酒興を助けたい)と申し出で、その劍舞にかこつけて沛公を斬り殺してしまふやうに」と命じた。(項莊は言はれた通りにして劍舞を始めたが)、項伯は(それと見て、これは大變だと)、自分も劍を拔いて舞を始め、(項莊が沛公に近づかうとすると)、項伯はいつも其の間に立ちふさがつて沛公をかばふので、項莊はどうしても沛公に斬りつけることが出來ない。張良は、この光景を見てびつくりし、(急いで軍門へと)出て行つて、(そこに待つてゐた樊噲に(こんな風だと)形勢の切迫してゐることを知らせた。

語釋　河北(黃河の北。すべて單に河といへば黃河のこと、江といへば揚子江のことと思つてよい。)　○有レ隙(隙はスキマ。兩者の間がピツタリと合はぬこと、で、ナカタガヒすること。不和になること。)　○左司馬



（官名。軍事を司る。）　○曹無傷（項羽が沛公を怒つてゐるのに乘じ、項羽に媚びて封祿を求めんと欲し、沛公は自ら關中の王となり秦王子嬰を大臣に任じ、財寶を悉く私せんとしてゐると讒したのである。後、沛公に誅せらる。）　○玉玦（玉で造つて腰に佩びる裝飾品。環狀をなし、一方がきれてゐる。玦と決と音の通ずる所から、これを擧げ示して、早く意を決して沛公を殺せと合圖したのである。）　○項莊（項羽の從弟。）　○翼蔽（鳥の翼をひろげたやうに立ち塞つてかばふこと。）　○樊噲（沛の人。もと犬殺しをしてゐたと云ふ。勇猛無比、沛公に從つて功を立て、後に舞陽侯に封ぜられた。）

噲擁レ盾直入、瞋レ目視レ羽。頭髪上指、目眥盡裂。羽曰、壯士、

賜₂斗巵酒₁

賜之巵酒。則與斗巵酒。賜之彘肩。則生彘肩。噲立飲、拔劍切肉啗之。羽曰、能復飲乎。噲曰、臣死且不避。巵酒安足辭。沛公先破秦入咸陽。勞苦而功高如此、未有封爵之賞。而將軍聽細人之說、欲誅有功之人。此亡秦之續耳。切爲將軍不取也。羽曰、坐。噲從良坐。

訓讀 噲、盾を擁して直ちに入り、目を瞋して羽を視る。頭髮上り指し、目眥盡く裂く。羽曰く、「壯士なり、之に巵酒を賜へ」と。則ち斗巵酒を與ふ。「之に彘肩を賜へ」と。則ち生彘肩なり。噲立つて飮み、劍を拔き肉を切つて之を啗ふ。羽曰く、「能く復た飮むか」と。噲曰く、「臣、死すら且避けず。巵酒安んぞ辭するに足らんや。沛公先づ秦を破つて咸陽に入る。勞苦して功高きこと此の如くなるに、未だ封爵の賞有らず。而も將軍、細人の說を聽き、有功の人を誅せんと欲す。此れ亡秦の續耳。切に將軍の爲に取らざる也」と。羽曰く、「坐せよ」と。噲、良に從ひて坐す。

通釋 樊噲は盾を小脇にかゝへて直ちに宴席に入り來り、目をつりあげて項羽を睨みつけた。髮の毛は（怒りに燃えて針のやうに）突つ立ち、目尻はすつかり裂けてゐる。（實にすさまじい形相だ）。

項羽は（この不意の闖入者を一目見ると）、「あつぱれの勇士ぢや。この者に杯を與へよ」と呼はると、（給仕の者が）一斗もはいる大杯を捧げた。次にまた「豚の肩の肉を取らせい」と命ずると、まだ料理せぬ生のまゝの肉を持つて來た。樊噲は立つたままで、ぐつと一息に飲み乾し、劍をぬいて肉を切りながらムシヤ〳〵食つた。項羽が「まだ飲めるか」と問ふと、樊噲は「拙者は生命を捨てることさへ何とも思つて居りませぬ。酒ぐらゐは何で御辭退いたさう（いくらでも頂戴します）」と云つて、（まづ大みえを切つてから）「主人沛公は、御覧の如く、眞先に秦を破つて咸陽に入り、艱難苦勞して立派な手柄を立てられたのに、まだ是れといふ御褒美にさへ預りませぬ。それのみか、將軍は（彼の曹無傷ごとき）小人の言葉を取り上げて、この手柄ある人物を殺さうとさへなされます。それでは先に滅んだあの亂暴な秦の二の舞とでも申さうか、（餘りに殘酷と申すもの）。拙者、心ひそかに將軍の爲に遺憾に存じまする」と、沛公の爲めに辯護した。項羽は「ともかく座につけ」と命じたので、樊噲は張良の次に坐つた。

【語釋】目眥盡裂（眥は一に眦に作る。音セイ又はシでマナジリと訓ず。音サイと讀むとニラムといふ意になる。范睢の條に「睚眦之怨必報」とあつた。）○斗卮酒（一升もはいる大杯に酒を滿たしたもの。「斗」に就ては廉頗の條に詳説した。）○彘肩（彘は音テイ。豚の子をいふ。豚の肉は肩がよい。）○封爵之賞（封は領地を與へられて大名になること。爵は爵位又は官位。論功行賞などの意である。）○細人（細は小、小人といふ意。こゝは曹無傷を指す。）○切

白璧玉斗

豎子不足謀

（窃に通じてヒソカニと訓む。併し切の字には本來ヒソカニといふ意はない。史記には竊の字が用ひてある。竊の俗字は窃で、その穴を省いて切となつたものであらう。こゝに限つてヒソカニと訓むのである。）

須臾沛公起如厠、因招噲出、間行趨霸上、留良謝羽。曰、沛公不勝桮勺、不能辭。使臣良奉白璧一雙、再拜獻將軍足下、玉斗一雙、再拜奉亞父足下。羽曰、沛公安在。良曰、聞將軍有意督過之、脫身獨去、已至軍矣。亞父拔劍、撞玉斗而破之曰、唉、豎子不足謀。奪將軍天下者、必沛公也。沛公至軍、立誅曹無傷。

〔訓讀〕須臾にして沛公起つて厠に如き、因つて噲を招きて出で、間行して霸上に趨り、良を留めて羽に謝せしめて曰く、「沛公、桮勺に勝へずして、辭すること能はず。臣良をして白璧一雙を奉じ、再拜して將軍の足下に獻じ、玉斗一雙、再拜して亞父の足下に奉ぜしむ」と。羽曰く、「沛公安くに在る」と。良曰く、「將軍、之を督過するに意有りと聞き、身を脫して獨り去り、已に軍に至らん」と。亞父、劍を拔き玉斗を撞きて之を破りて曰く、「唉、豎子謀るに足らず。將軍の天下を奪はん者は、必ず沛公

ならん」と。沛公、軍に至り、立ろに曹無傷を誅す。

【通釋】間もなく沛公は席を起つて便所に行き、それを機會に樊噲を招いて（共に項羽の陣營を）出て、ぬけ道から覇上の自分の軍へと急行した。あとには張良を殘しておき、項羽にお詫をさせて曰ふには「沛公は、この上御酒のお相手が出來ぬほどに痛く酩酊いたしましたので、お暇乞ひを申し上げることも叶はず、誠に失禮を致しました。よつて私に言ひつけまして、白璧一對を捧げ、恭しく將軍閣下のお手元にまで献上し、玉斗一對を謹んで亞父閣下に捧呈せよと申してございます」と。項羽が「では沛公は今何處に居るのだ」と尋ねると、張良は「實は、將軍に、沛公を飽くまでお咎めなさるお考へがあると聞きましたので、（恐懼の餘り）身を脱れて獨り立ち歸りました。今頃は早や覇上の軍に到着したことでございませう」と答へた。亞父范增は（これを聞くと無念でたまらず、張良の捧げた玉斗を受けとつて地上に置き）、劍を拔いて之を突き壞した。さうして曰つた「あゝ、お坊ツちやん、とても天下の大事なぞを相談は出來ぬわ。折角將軍の物であるべき此の天下を、うま〳〵と奪ひ取る者は、あの沛公ぢや」と。殘念がつた。一方、沛公は自分の軍へ歸ると、すぐに讒言者の曹無傷を誅殺した。

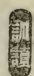
語釋　須臾（シュユ。スユ。しばらく。片時。）　○桮勺（は杯に同じくサカヅキ。勺は杓と同じく酒を汲むヒシャク。よつて酒を飲むことをいふ。こゝは「不レ勝ニ桮勺ニ」とは、これ以上一滴も飲めないといふ意で、酒の相手が出來ぬことをいふ。）　○不レ能レ辭（辭は暇乞の挨拶の言葉を述べること。）　○足下（その人を直接に指すことを失禮とする習俗から、その足下の人、即ちお側の人を指して敬意を表する語。閣下などいふと同じ意味。）　○白璧一雙（璧は藺相如の章に說いた。一雙はヒトツガヒで一對のこと。）　○玉斗（斗は酒を酌むヒシャク。大きなのを斗といひ、小さいのを勺といふ。その形には種々ある。）　○亞父（亞は次ぐ意。尊敬すること父に次ぐ義で、項羽が范增を尊敬してかう呼んだのである。齊の桓公が管仲を仲父と呼んだのと同じ類。）　○唉（音キ。アヽと訓ず。痛歎の聲である。）　○豎子（小僧・靑二才などと人を輕蔑して呼ぶ語であることは、前に屢々述べたが、こゝも、幾度合圖をしても沛公を斬り得ず、とう〳〵虎を野に放つやうな事にしてしまつた項羽の腑甲斐なさを無念に思ふ餘り、思はず發した痛憤の聲である。之を項莊を指したのだといふ說もあるが、私は採らない。）　○督過（督はタヾスと訓じ責め咎めること。督過は、あやまちを責めとがめるをいふ。督責。一說に過も亦責める意、二字で責めること。）

餘論　陰忍自重、圓熟の境に達した老猾の沛公、粗暴豪快ではあるが、それだけに一面心の弱さを持つ年少の項羽。この二人を事件の中心として、これに配するに深謀遠慮の老軍師范增、智勇兼備の忠臣張良、剛勇無比の快傑樊噲などを以てし、全篇さながらの史劇である。更にこれを「史記」の項羽本記で讀むと、項羽・沛公・范增・張良の座席の位置まで細叙し、樊噲が遮る衞士を突き倒し、幕を披いて酒席に居直る所から、最後に張良の進物を受ける項羽と范增とのそれ〴〵異つた態度に至るまで、全く舞臺そのまゝを眼前に展開して、讀者を恍惚たらしめてゐる。「十八史略」は僅かにその要を撮んだに過ぎないのであるが、それでも一部七卷中、この鴻門の會と、後の垓下の戰ほど劇的要素を多分に盛つたものはない。

火三月不レ絕

沐猴而冠

居數日、羽引レ兵西、屠二咸陽一、殺二降王子嬰一、燒二秦宮室一。火三月不レ絕。掘二始皇冢一、取二寶貨婦女一而東。秦民大失レ望。韓生說レ羽。關中阻レ山帶レ河、四塞之地肥饒。可三都以霸二。羽見二秦殘破一、且思二東歸一。曰、富貴不レ歸二故鄕一、如二衣レ繡夜行一耳。韓生曰、人言、楚人沐猴而冠。果然。羽聞レ之烹二韓生一。


訓讀 居ること數日、羽、兵を引いて西し、咸陽を屠り、降王子嬰を殺し、秦の宮室を燒く。火、三月絕えず。始皇の冢を掘り、寶貨婦女を取つて東す。秦の民大いに望を失ふ。」韓生、羽に說く。關中は山を阻て河を帶び、四塞の地にして肥饒なり。都して以て霸たる可しと。羽、秦の殘破せるを見、且つ東歸を思ふ。曰く、「富貴にして故鄕に歸らざるは、繡を衣て夜行くが如き耳」と。韓生曰く、「人言ふ、楚人は沐猴にして冠すと。果して然り」と。羽、之を聞いて韓生を烹る。

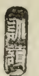

通釋 數日を經て、項羽は兵を率ゐて西に進み、咸陽の都に入つて大殺戮を行ひ、さきに降伏した元の秦王子嬰を殺し、遂に秦の宮殿に火をかけた。その火は實に三ケ月も續いたといふ。それから始

皇帝の墓を掘りかへして（その屍體を辱しめ）寶物貨財や美人を掠奪して東へ引き上げた。（仁政を待ちこがれてゐた）秦の民は（項羽のこの暴擧を見て）ひどく失望した。こゝに韓生といふ者があつて、項羽に說いて曰ふには、「關中は山によつて他と隔てられ、大河その中を流れて、四方を圍みふさいだ要害の地で、その上に地味もよく肥えて居りますから、都を定めて諸侯のはたがしらとなられるには屈竟の國であります。（このまゝ此處に居すわられたが得策でございませう）」と。然るに項羽は秦の宮殿が皆壞され燒かれて廢墟となつてしまつたのを見ては（イヤになつて其處に都を定めようといふ氣がしない）、それに（斯う成功して見るとやつぱり）故鄕へ歸りたくなつたので、「立身出世をしても故鄕へ歸らないでは、ちやうど錦の着物を着ながら、夜あるくやうなものだ。（誰も見てくれぬではないか、それでは詰らない）」と答へて（この言葉を容れなかつた）。そこで韓生は或人に話して、「世間では、楚人は猿が冠を着けたやうなものだと云つて居るが、（なるほどセカ〳〵して迚も永く上品な眞似は出來ない）。世間の評判の通りだ」と言つた。項羽はこれを聞きつけて腹を立て韓生を釜煎りの刑にした。

語釋　屠（音ト。ホフルと訓ず。もと牛馬鷄狗などを殺して其肉を取ること。轉じて他の地へ攻め入つて人民を殺すこと。殺戮。）○冢（音チヨウ。塚に同じ、ツカ。土を盛り上げた大きな墓。）○阻（ヘダツと訓じて、遮りへだつ意、）

○四塞（塞は音ソク、フサグと訓ず。四方山でふさがれた土地。）○殘破（そこなひやぶる。項羽が焼き拂つた跡だから。）○衣レ繡夜行（繡は刺繡を施した美服。それを着ても闇夜を歩いたのでは一向に見ばえがしない。折角の大成功もヤンヤと言つて呉れるもののないことに譬へたのである。繡の字「漢書」には錦となつてゐるが意味は同じこと。「衣レ錦還レ郷」「衣レ錦晝行」の語もあり、我が國にも「故郷に錦を飾る」の諺がある。）○沐猴而冠（沐猴は獼猴（ビコウ）の轉音であるといふ。猿のこと。猿が冠をかぶるといふので、衣冠ばかりは立派だが、性質粗暴で落ちつきがなく、セカ〳〵して長く衣冠してゐるに堪へず、直ちに引き脱いでしまふとて、衣冠をつけるガラでないと譏つたのである。即ち項羽がセツカチで自重大成の器量のないことを嘲つたのである。）

羽使人致命懷王。王曰、如約。羽怒曰、懷王吾家所立耳。非有功伐。何得專主約。乃陽尊爲義帝、徙江南、都郴、分天下王諸將。羽自立爲西楚霸王。乃曰、巴蜀亦關中地。立沛公爲漢王、王巴・蜀・漢中、而三分關中、王秦降將三人、以距塞漢路。漢王怒欲攻羽。蕭何諫曰、願大王王漢中、養其民、以致賢人、收用巴・蜀、還定三秦。天下可圖也。王乃就國、以何爲丞相。


羽、人をして命を懷王に致さしむ。王曰く、「約の如くせよ」と。羽怒つて曰く、「懷王は吾が家の立つる所耳。功伐有るに非ず。何ぞ專ら約を主とするを得ん」と。乃ち陽に尊びて義帝と爲し、江南に徙して郴に都せしめ、天下を分ちて諸侯を王とし、羽は自立して西楚の霸王と爲る。乃ち曰く、

「巴蜀も亦關中の地なり」と。沛公を立てて漢王と爲し、巴・蜀・漢に王たらしめ、而して關中を三分して秦の降將三人を王とし、以て漢の路を距塞す。漢王怒つて羽を攻めんと欲す。蕭何諫めて曰く、「願はくは大王、漢中に王として、其の民を養ひ、以て賢人を致し、巴・蜀を收用し還つて三秦を定めよ。天下圖る可き也」と。王乃ち國に就き、何を以て丞相と爲せり。

通釋 項羽は使を懷王の許へ遣はして、(仰せの如く關中の地を平定いたしましたと)復命させた。すると懷王は「では最初の約束通り(眞先に關中に入つた沛公を關中の王にするやうに)」と言つたので、項羽は赫となつて、「懷王は、もと我が一家の者が守り立てゝやつたものだ。(この天下平定の戰爭に)何の功があるわけではない。然るに何とて自分一存で約束などと言ひ張る權利があるものぞ」と言つたが、表向きだけは尊敬して義帝といふ尊號を上り、之を江南の地に移し(實は追ひやつて)郴(今の湖南郴州)といふ所に都させ、全土を分け割いてそれ〴〵諸將を其の地の王に封じ、項羽自らは獨立して西楚の霸王と稱した。そこで「(懷王は沛公を關中王に封ぜよと曰はれるが)、巴蜀の兩郡だつて(元の秦の領地で)やつぱり關中には違ひないのだから」と云つて沛公を巴・蜀・漢中の三郡に封じて漢王となした。さうして本當の關中の地は(之を沛公に與へることを好まず)、三つにしきつて、降服

した元の秦の將三人（章邯・董翳・司馬欣）をそれぞれ其の地の王として守らせ、漢の通路をふさいで（沛公を抑へた）。これには流石の漢王も怒つて一擧項羽を討たうとした。その時、蕭何が諫めて曰ふには、「願はくは大王、（このまゝ我慢して）漢中の王となつて往き、その地の人民を愛撫して民力を休養させ、賢人を招きよせて其の說を聽き、斯くして巴蜀の（土地・人民・財力の一切）を完全に我が物として之を利用し、その上で再びこの關中へ戾つて來て、かの三秦將を平げなさるがよい。さすれば天下は必ず大王のお手に入ります」と言つた。そこで漢王卽ち沛公も（その說に從うて霸上を引き上げ）、領國の巴蜀へ赴き、蕭何を大臣に任じた。

【語釋】 致レ命（命を受けて仕事をなし其の結果を報告すること。復命といふに同じい。）　○功伐（伐も亦テガラの意。）　○主レ約（約束を主張すること、先づ關中に入るものを之に王たらんとの約束を貫徹するをいふ。）　○陽（佯とも書く。表面上だけ見せかけること。）　○義帝（多くの人の協力によつて守り立て戴いた所の帝王といふ意味だと云ふ。）　○西楚霸王（江南を南楚、吳卽ち江東を東楚といふに對して項羽の起つた彭城の地を西楚といひ、霸者の權力をもつて王位に居るといふので霸王と稱したとの說である。）　○巴・蜀・漢中（ともに秦の郡。巴郡は今の四川重慶附近、蜀郡は同成都附近。漢中郡は今の陝西漢中附近一帶の地。）　○距塞（ふせぎふさぐ。漢の出口をふさいで袋の鼠としたのである。）　○蕭何（沛の人、高祖を助けて常に政治兵食等內部的功勞多く、高祖をして後顧の憂なからしめた。所謂漢の三傑の隨一。後に酇侯に封ぜられ文終侯と諡された。）　○收用（土地を完全に我が手に收めて、その土地人民生產等を利用すること。）　○三秦（秦の地を三分して秦の降將三人を封じたのであるから斯く云ふ。）

○漢元年、五星聚二東井一。○初淮陰韓信、家貧釣二城下一。有二漂母一。見二信餓一飯レ信。

出胯下

信曰、吾必厚報母。母怒曰、大丈夫不能自食。吾哀王孫而進食。豈望報乎。淮陰屠中少年有侮信者。因衆辱之曰、若雖長大好帶劍、中情怯耳。能死刺我。不能出我胯下。信熟視之、俛出胯下蒲伏。一市人皆笑信怯。

訓讀　漢の元年、五星東井に聚る。初め淮陰の韓信、家貧しくして城下に釣す。漂母有り。信の飢ゑたるを見て信に飯せしむ。信曰く「吾、必ず厚く母に報いん」と。母怒つて曰く「大丈夫自ら食ふこと能はず。吾、王孫を哀んで食を進む。豈報を望まんや」と。淮陰の屠中の少年に信を侮る者有り。衆に因つて之を辱しめて曰く「若、長大にして好んで劍を帶ぶと雖も、中情は怯なる耳。能く死せば我を刺せ。能はずんば我が胯下を出でよ」と。信、之を熟視し、俛して胯下より出でて蒲伏す。一市の人、皆、信が怯を笑ふ。

通釋　漢の元年に、木・火・土・金・水の五つの星が東井の星座にあつまり、（漢王が興る瑞祥があらはれた）。これより先、淮陰（江蘇）に韓信といふものがあつた。家が貧乏なために（人に哀れみを乞ひ食物を貰つて暮らしてゐたが、或時それをも斷られたので）、城の附近へ往つて釣を垂れながら（流れに

臨んでぼんやりしてゐた)。するとそこに一人の古綿を晒してゐる老婆があつたが、韓信のひもじさうな樣子を見て(かはいさうに思うて)飯を與へてやつた。(それからといふもの、韓信は毎日そこへ往つては老婆から飯を貰つてゐたが)、或時「わたしはやがてきつとお婆さんにどつさりお禮を上げるよ」と言つた。すると老婆は(喜ぶかと思ひの外あべこべに)腹を立てゝ「立派な一人前の男とありながら、自分で口すぎすることさへ出來ぬ癖に(何をお言ひだよ)。わたしは只あなたをお氣の毒に思つて御飯を上げたまでの話です。何のお禮などを望みませうぞ」と言つた。其の後、淮陰の牛馬などを屠殺する部落を通つたところ、そこの若者に韓信を馬鹿にするものがあつて、仲間の多勢を恃みにして韓信を侮辱して曰ふには、「貴樣、圖體はかり大きくて、えらさうに劍なんか下げて居るが、腹の中はビク〳〵ものさ。(それとも本當に強くて)死ぬる元氣があるなら、一番おれを刺して見ろ。それが出來ねば俺の股ぐらの下を潛れよ」と。韓信は、ぢつと其の男の顏を(無念さうに)見つめてゐたが、つと體を俯伏せて、はらばひになつて股の下をくゞつて出た。それを聞いて村全體のものが韓信の臆病さを笑つた。

語釋 漢元年(劉邦はまだ即位しないので「漢元年」とはいふべきでないが、後に天子となつたから後の事情から推し及ぼして、西曆紀元前二〇六年、秦王子嬰の殺された年を以て「漢元年」としたのである。)　○五星(木火土金水の五星。)

○東井（井は天文學上の區分の二十八宿の星座、地上の分野では關中に當つて居る。關中は即ち漢王の鎭するところ。因て漢王興隆の兆とする。） ○淮陰（淮水の南にあるから起つた地名で、今江蘇淮陽縣に屬する。） ○韓信（蕭何・張良と共に漢の三傑と稱せられ、三傑中戰場の雄を以て知られた。後に淮陰侯に封ぜられたが、終に高祖及び呂后に疑はれて殺された。） ○漂母（洗濯婆さん。漂はサラスと訓ず。古綿を水に撃つてさらすこと。母は老婆の稱。） ○王孫（青年を呼ぶ尊稱、公子といふに同じく、若樣・若旦那などいふやうなもの。一說に韓信は韓の王族の出であるから王孫と云つたのであると。） ○屠中（牛馬などを屠殺することを業とする者の住んでゐる部落の中といふ意味である。） ○中情（本當の心、心の底。） ○能死（人を殺せば自ら罪に觸れて死なねばならぬ。故に「死ぬことが出來るなら」と云つたのである） ○俛（音ベンの時は勉に通じて勉むるさま。音フの時は俯に通じてうつむくこと。こゝは後者。） ○出二胯下一蒲伏（胯は兩股の間、またぐら。蒲伏は匍匐に通ず、はらばふこと。この句、胯下を出てから匍匐したやうに見えるが、さうではない。「蒲伏して胯下を出づ」の意である。たゞ胯下を出た時に四ツ這ひになつてゐたといふ可笑味を表はす爲めに倒裝法を用ひたのである。）



これは韓信の股くゞりと云つて、我が木村重成の堪忍の話と比較して、遍く人口に膾炙せる事實である。後にも見えるやうに、韓信は漢軍隨一の猛將となつた人で、勇氣の點に於ては、當時天下の何人にも讓らなかつたであらう。さればこそこれだけの忍從が出來たのである。古人（隱士學丹）これを詠じて曰く、

末つひに海となるべき山水もしばし木の葉の下くゞるなり

と。萬人の上に立たんと欲するものは、まづ萬人の爲にその膝を屈しなければならない。それだけの大勇がなくして、人の上に立たうとは無理な注文といはねばならぬ。文中「信熟二視之一」の熟視の二字は、蓋しこの一段の生命である。ぢつと屠兒の面上を見つめた數秒の間、千萬無量の感慨を表現す

蕭何追二韓信一

る韓信の睫毛の動きを見よ。頰の肉の顫へを見よ。

項梁渡レ淮、信從レ之。又數以レ策干二項羽一。不レ用。亡歸レ漢、爲二治粟都尉一。數與二蕭何一語。何奇レ之。王至二南鄭一。將士皆謳歌思レ歸、多道亡。信度、何已數言、王不レ用。卽亡去。何自追レ之。人曰、丞相何亡。王怒、如レ失二左右手一。

訓讀 項梁、淮を渡るとき、信、之に從ふ。又數々策を以て項羽に干む。用ひられず、亡げて漢に歸し、治粟都尉と爲る。數々蕭何と語る。何、之を奇とす。王、南鄭に至る。將士、皆謳歌して歸らんことを思ひ、多く道より亡ぐ。信度るに、何、已に數々言ひしも王用ひざるなりと。卽ち亡げ去る。何、自ら之を追ふ。人曰く、「丞相何亡ぐ」と。王怒る、左右の手を失ふが如し。

通釋 後、項梁が(兵を擧げ)、淮水を渡つて(北上するや)、韓信はその項梁の部下に附いた。(項梁が敗死した後は項羽に從ひ)、たび〳〵自分の考へた計略を示して項羽に重く用ひられるやうに求めたが、一向採用されなかつた。そこで(項羽の下を)逃け出して漢王劉邦をたよつて往き、治粟都尉とい

國士無雙

ふ役目に取り立てられた。屢〻蕭何と意見を述べ合つたが、それによつて蕭何は、韓信を平凡な人間でないと思つた。漢王ば(愈〻漢中の王に封ぜられて)その都の南鄭に赴任することになつたが、部下の將士は(南鄭へ往くことを嫌ひ)、皆故鄕へ歸りたいと思つて(望鄕)の歌をうたひ、途中から大勢逃げてしまつた。時に韓信は考へた――これまで蕭何は、何度か自分のことを漢王に推薦してくれたのだらうけれど、漢王がそれを採用しないのだ――と斯う推量して、(そんな所にいつまでゐたつて詰らない、皆が逃げ出すこの機會に俺も逃げてやらうと)、早速にげ出した。蕭何は(それと聞いて、韓信を引きとめるべく)その後を追つかけた。すると(わけを知らぬ)人たちは、「すはや、丞相何殿までが逃げたぞ」と言ひ出した。漢王は怒つた。さうして左右の兩手をもぎとられたやうにがつかりした。

語釋　淮(淮水のこと。安徽の北部を過ぎて江蘇省で黃海に入る。黃河と揚子江との中間に位する大きな川である。)　○干(音カン。モトムと訓す。もとヲカスと讀む字で先方にかまはず無理にもとめる意である。こゝは自ら官位を要求すること。)
○治粟都尉(米穀を掌る役目。)　○南鄭(當時漢中の都。今陝西南鄭縣。)　○謳歌(もと人の德を稱へ歌ふ意であるが、こゝは故鄕へ歸りたいと思ふ情が自然に歌となつて發したのである。)

何來謁。王罵曰、若亡何也。何曰、追韓信。王曰、諸將亡以十數。公無所追。追信詐也。何曰、諸將易得耳。信國士無雙。王必欲長王漢中、無所事信。必欲

爭天下、非信無可與計事者。王曰、吾亦欲東耳。安能鬱鬱久居此乎。何曰、計必東、能用信。信卽留。不然信終亡耳。

訓讀 何來り謁す。王罵つて曰く、「若、亡げしは何ぞや」と。何曰く、「韓信を追ふ」と。王曰く、「諸將の亡ぐるもの十を以て數ふ。公追ふ所無し。信を追ふとは詐ならん」と。何曰く、「諸將は得易き耳。信は國士無雙なり。王必ず長く漢中に王たらんと欲せば、信を事とする所無し。必ず天下を爭はんと欲ぜば、信に非ずんば與に事を計る可き者無し」と。王曰く、「吾も亦東せんと欲する耳。安んぞ能く鬱々として久しく此に居らん乎」と。何曰く、「必ず東せんと計らば、能く信を用ひよ。信卽ち留まらん。然らずんば信終に亡げん耳」と。

通釋 そこへ蕭何が歸つて來て漢王にお目通りした。漢王はいきなり「お前までが逃げ出すとは何事だ」と罵倒した。すると蕭何が曰ふ「いえ(逃げ出したのではありませぬ)、韓信を呼び戻しに行つたのであります」と。漢王は(合點がゆかず)、「諸將の逃げ出したものが、早や何十人といふ程あるのに卿はまだ一人も引きとめに行つたことがない。然るに今、信に限つて呼びに行つたといふのは嘘だ

らう」。蕭何は「その諸將ぐらゐの人物なら(世間ザラにある)、いつでも手に入ります。併し信は一國に二人とない良士、(滅多にある人物ではありませぬ)。大王もし何時までも漢中の王で滿足なさるなら、信を引きとめるに苦心なさる要もありますまい。が、もしまた是が非でも天下を取らうと思召すならば、(餘人では駄目です)、信でなければ共にさういふ大事を相談するに足るものはありませぬ、(されば こそ私は特に信に限つて追つかけたのであります)」と曰つた。それを聞くと漢王は「無論、俺だつて東の方中原へ出て、(天下を取らうと思つてゐるのだ)。どうしていつまでも、こんな所にふさぎこんで居られるもんか」と曰つた。「その是非とも東へ出ようとの御計畫ならば、信を重用なされませ。(重くさへ用ひれば)信は留りませう。でなければ彼は逃亡するにきまつて居ります」と曰つて(蕭何は極力韓信を推薦した)。

語釋 以レ十數(十を以て單位として數へることが出來るといふので、何十と數へられるとの意。)　○國士無雙(國士は二三四頁の語釋に出づ。無雙は並びないこと。)　○無レ所レ事レ信(「事トス」とは其の事を務めとして一心にうちかゝること　こゝは信を引きとめることを務めとする要はないとの意で、信の事なんか心配するに及ばぬといふこと。)　○欲レ東(巴・蜀 漢中は邊鄙な所で天下に號令する地ではない。それで東のかた關中及中原の地に打つて出て天下を取らうと思ふといふ意。)　○鬱々(志を得ずして氣のふさぐ樣子。)

王曰、吾爲レ公以爲レ將。何曰、不レ留也。王曰、以爲二大將一。何曰、幸甚。王素慢無レ禮。

拜信爲大將

拜大將如呼小兒。此信所以去。乃設壇場、具禮。諸將皆喜、人々自以爲得大將。至拜、乃韓信也。一軍皆驚。王遂用信計、部署諸將、留蕭何、收巴・蜀租、給軍糧食。信引兵從故道出、襲雍王章邯。邯敗死。塞王司馬欣・翟王董翳皆降。

訓讀 王曰く、「吾、公の爲に以て將と爲さん」と。何曰く「留まらざる也」と。王曰く、「以て大將と爲さん」と。何曰く、「幸甚なり。王素より慢にして禮無し。大將を拜すること小兒を呼ぶが如し。此れ信の去る所以なり」と。乃ち壇場を設け、禮を具ふ。諸將皆喜び人々自ら以爲へらく大將を得んと。拜するに至つて乃ち韓信也。一軍皆驚く。王遂に信の計を用ひて諸將を部署し、蕭何を留めて巴蜀の租を收め、軍の糧食を給せしむ。信、兵を引いて故道より出で、雍王章邯を襲ふ。邯、敗死す。塞王司馬欣・翟王董翳、皆降る。

通釋 そこで漢王も（我を折つて）、「では卿の顏に免じて一方の將にしてやらう」。蕭何「それでは留

りませぬ」。漢王「然らば總司令官に任じようわい」。蕭何「結構でございます。一體、大王は平生から御高慢が過ぎて禮儀といふものを守られませぬ。それゆゑ大將を任命なさるにも、まるで子供を呼びつけるやうな橫柄な御態度に見えますが、さういふ風だから信が逃げるのであります」と曰つて注意を加へた。そこで(禮儀を鄭重にするため)に式場を設け、儀式の禮を準備した。これを見て喜んだのは諸將連で、めい〳〵自分が總司令官になるのだと一人できめてゐた。ところが愈々親任式になつて見ると、(それは意外にも)韓信であつたので、全軍みな驚いた。

斯くて漢王は韓信の計を用ひて、諸將をそれ〳〵に手分をして(東に打つて出るの準備を整へ)、蕭何を後に殘して巴・蜀の地の年貢を取り立てゝ、それによつて出征軍の糧食を供給させることにした。韓信は兵を引きつれて故道縣といふ所から出て、雍王章邯を先づ攻めた。章邯は戰ひ敗れて死んだ。ついで塞王司馬欣・翟王董翳も皆降參した。(これで謂はゆる三秦を滅ぼし、かねて望んでゐた關中を占領したわけである)。

語釋　爲レ公(自分は好まぬけれども、汝がそれほど言ふならばといふ意味で、已むを得ずといふ心が能く見える。)　○壇場(土を高くして壇を設け、地を拂ひ清めて場をつくること。天地の神に告げて命を尊ぶのである。祭祀や會合など改まつた式場をいふこと。)　○拜二大將一(拜は官職を授けること。任官。)　○部署(てわけ。てくばり。)　○粮食(粮は糧に同じ。かて。)　○故道(縣名、今陝西鳳縣の西北。)

○漢二年、項籍弑義帝於江中。○初陽武人陳平、家貧、好讀書。里中社、平爲宰、分肉甚均。父老曰、善、陳孺子之爲宰。平曰、嗟乎使平得宰天下、亦如此肉矣。初事魏王咎、不用。去事項羽、得罪亡。因魏無知求見漢王。拜爲都尉參乘典護軍。

訓讀 ○漢の二年、項籍、義帝を江中に弑す。○初め陽武の人陳平といふもの、家貧にして、書を讀むことを好む。里中の社に、平宰と爲り、肉を分つこと甚だ均し。父老の曰はく、「善し、陳孺子の宰たること」と。平曰はく、「嗟乎、平をして天下に宰たるを得しめば、亦此の肉の如くならん」と。初め魏王咎に事へて、用ひられず。去りて項羽に事へ、罪を得て亡ぐ。魏無知に因りて漢王に見えんことを求む。拜して都尉參乘典護軍と爲す。

通釋 漢の二年、項籍は（吳芮・黥布・共敖の三將を遣はして）、義帝を江中に於て殺させた。○是より前に、陽武縣の人で陳平といふものがあつて、家は貧しかつたが書を讀むことが好きであつた。（ある時）村の土神の社の（祭の日に）料理人となつたところ、（祭の後で）、（神に供へた）肉を村人に分ける

臣所レ言者能也

のに甚だ公平であつた。そこで村の老人達は（感心して）「陳少年の料理方は（至極公平で）結構ぢや」といふと、陳平がいふ、「あゝ、吾輩をして（宰相となつて）天下の政を切盛させてくれるならば、この肉の如く（公平にやつて見せるがなあ）」と。最初、陳平は魏王の咎といふ人に事へたが、用ひられなかつた。それから去つて項羽に事へたが、ここでは罪を得たので、また逃げ出して、魏無知の紹介により、漢王に謁見を願つた。（漢王は之を）都尉參乘典護軍の官に任じた。

語釋　弑二義帝於江中一（義帝を郴に移すとて促して出發せしめ、途中揚子江上に於て人をして之を弑せしめたのである。）　○里中社（里は二十五家、社は土神を祭つたヤシロ、凡そ二十五家以上に一社を立てゝ年穀を祈り災厄を祓うた。先づ我國の氏神の類。）　○宰（肉を割く役、料理人のこと。）　○孺子（年の若いもの。子供故に人を輕蔑していふこともある。小僧とか若造とかいふに同じい。こゝは陳平が年少であるので、土地の父老が陳少年と言つたのである。陳平の字であるといふ說もあるがよくない。「成二豎子之名一」（二〇七頁）參照。）　○都尉參乘典護軍（都尉は武官の名で其の種類が甚だ多い。こゝは侍從官である。參乘は王の駕に陪乘する官。典護軍は參軍のことで軍目付をいふ。之を兼ねたのである。）

周勃言二於王一曰、平雖レ美如二冠玉一。其中未二必有一也。臣聞、平居レ家盜二其嫂一、事レ魏不レ容、亡歸レ楚、又不レ容、亡歸レ漢。今大王令レ護レ軍、受二諸將金一。願王察レ之。王讓二魏無知一。無知曰、臣所レ言者能也。大王所レ問者行也。今有二尾生孝己之行一、而無

益成敗之數、大王何暇用之乎。王拜平護軍中尉、盡護諸將。諸將乃不敢復言。

〔訓讀〕周勃、王に言ひて曰はく、「平は美なりといへども冠玉の如し。その中、未だ必しも有らざる也。臣聞く、平、家に居つては其の嫂を盜み、魏に事へては容れられず、亡げて楚に歸し、又容れられず、亡げて漢に歸すと。今、大王、軍を護せしめしに、諸將の金を受けたり。願はくは王之を察せよ」と。王、魏無知を讓む。無知の曰はく、「臣の言ふ所の者は能なり。大王の問ふ所の者は行なり。今尾生・孝已の行ありとも、成敗の數に益なくんば、大王何の暇あつてか之を用ひんや」と。王、平を護軍中尉に拜し、盡く諸將を護せしむ。諸將乃ち復言はず。

〔通譯〕周勃が王に向つていふやう、「あの陳平は(風采)は立派ですが、玉を飾りつけた冠のやうなもので、其の中は空つぽで、(必ずしも遠大な思慮があるわけではございませぬ)。のみならず、私の聞くところでは、陳平はまだ官に仕へない前、自分の嫂と通じ、(その後)魏に仕へて用ひられず、更に楚に仕へて又用ひられず、逃げて我が漢軍に投じたものだといひます。今大王は彼をして軍隊を監

督せしめられましたが、彼は諸將から賄賂を受けて（私腹を肥しました）。大王どうかお考へ下さいませ」と。そこで王は魏無知を召して（不都合なる人物を推擧した罪を）讓めた。無知は之に對へていふやう、「私が彼について申上げましたのは、彼れの技倆の事です。大王のお咎めなさるのは品行上の點です。今日（戰亂の世の中に）、たとひ尾生や孝己のやうな德行家があつたとしても、（それが天下取りに）成功するか失敗するかといふ大事な謀の上に何の利益もないやうでは、大王はどうしてそんな者を登用される暇がござりませうやと。王も（成程と悟つて）陳平を護軍中尉の官に任じて、諸將に關すること一切を監督させた。そこで諸將も、もう不平を言はなかつた。

語釋　雖美如冠玉（冠は玉を以て飾り、外觀甚だ美しいが中は空しい。それを才あつて德のないのに喩へたのである。）○尾生（古の信實なる人。ある婦人と橋梁の下に相會ふことを約し、その婦人の來るのを待つてゐる間に、川水が増して來たが、その約を堅く守つて去らず、遂に橋柱を抱いて死んだといふ。この話は莊子にある。一に微生とも書き、或は微生高のことであるともいふ。）○孝己（殷の高宗の子、親に事へて能く孝を盡し、毎夜五度も起きて親に氣をつけたといふ。母は早く死んだ。然るに高宗は後妻の言に惑うて之を逐ひ、遂に殺してしまつた。）○成敗之數（成は成功、敗は失敗、數は術數の意で、そのハカリゴトのこと。）

○漢王至洛陽。新城三老董公遮說曰、順德者昌、逆德者亡。兵出無名。事故不成。明其爲賊、敵乃可服。項羽無道、放弑其主。天下之賊也。夫仁不以

爲二義帝一發レ喪

勇、義不レ以レ力。大王宜下率二三軍之衆一、爲レ之素服、以告二諸侯一而伐上レ之。於レ是漢王爲二義帝一發レ喪、告二諸侯一曰、天下共立二義帝一。今項羽放二弑之一。寡人悉發二關中兵一、收二三河之士一、南浮二江漢一而下、願從二諸侯王一、擊三楚之弑二義帝一者上。

〔訓讀〕漢王、洛陽に至る。新城の三老董公、遮り說いて曰く、「德に順ふ者は昌え、德に逆ふ者は亡ぶ。兵、出づるに名無し。事、故に成らず。其の賊たるを明にせば、敵乃ち服す可し。項羽、無道にして、其の主を放弑す。天下の賊也。夫れ仁は勇を以てせず、義は力を以てせず。大王宜しく三軍の衆を率ゐ、之が爲に素服し、以て諸侯に告げて之を伐つべし」と。是に於て漢王、義帝の爲に喪を發し、諸侯に告げて曰く、「天下共に義帝を立つ。今、項羽之を放弑す。寡人悉く關中の兵を發し、三河の士を收め、南のかた江漢に浮びて下り、願はくは諸侯王に從ひ、楚の義帝を弑する者を擊たん」と。

〔通釋〕（漢王は既に三秦を滅ぼし、進んで上郡・隴西・河東・河南・河內等の地を略し、遂に）洛陽に出た。時に新城といふ地の三老の役をしてゐる董公といふ者が、道に立ちふさがつて漢王に說を進めて

曰ふには、「すべて道德に從つて行動するものは榮え、道德にさからふ者は亡びることは（天下の通義であります）然るに（今の世の王侯は）軍を出しても何等の道德的名目がない、（即ち敵を討つのに道德的理由が立ちませぬ。）だから其の事の成功せぬのも當然であります。もし相手が君國の賊である（許すべからざるものであるといふ事を）明かにさへするならば、敵は自然と降伏するものであります。項羽は無道な人で、その主の義帝を追放して遂にこれを弑してしまつた。實に天下の爲めに（許すべからざる）逆賊であります。仁を行ふに勇は要らぬ、義を行ふに力は要らぬ。（仁義の軍に勇力は要りませぬ。仁義の仁義たる所以はたゞ道に叶ふにある。力づくではないのであります）。されば大王は此の際宜しく（君臣の道に從うて）三軍の兵を率ゐ義帝の爲めに喪服を着けて（その弔ひ合戰たることを明かにし）、諸侯に（出兵の理由を）告げて、（堂々と義軍を起して）項羽を御征伐になるべきであります」と。

漢王はその說を容れて、義帝の爲に喪を發表し、而して諸侯に告げて曰ふには、「義帝は天下の諸侯が共に天子として推戴した人である。然るに今、項羽は勝手に之を追放し之を弑逆いたした。（これ誠に許すべからざる天下の賊である）よつて不肖は關中の兵を繰り出し、河南・河東・河內の三河の兵を集め、南のかた江水・漢水に船を浮べ、（流れに從つて）下り、諸侯王と共に、義帝を弑したる楚人項羽を

擊たうと存する」と。

語釋 新城（地名。洛陽の南。） ○三老（官名。秦の時、十里を一亭とし、十亭を一郷とし、郷毎に有給の三老の官を置いて教化を掌らしめた、董公はその一人である。） ○董公（董は姓、名は詳かでない。後に成侯に封ぜられたといふ。） ○遮說（道に待ち受け、立ちふさがつて意見を述べること。） ○放弑（放は追放。即ち義帝を郴へ追ひやつたことを指し、弑は江中で弑したことを指す。） ○素服（素は白、白服は即ち喪服。） ○寡人（寡德の人の義で、諸侯が自ら謙遜していふ辭。） ○三軍（周の制に、天子は六軍を有し、諸侯は大國三軍、中國二軍、小國一軍を有す、一軍は一萬二千五百人。三軍は轉じて大軍又は全軍の意に用ひられることが多い。こゝもそれである。） ○三河（河南・河東・河內の三郡。三秦即ち關中の東に當つた黃河を挾んだ地方をいふ。）

○漢王率五諸侯兵五十六萬、伐楚入彭城、收其寶貨美人、置酒高會。項羽方擊齊。聞之、自以精兵三萬還擊漢、大破漢軍於睢水上。死者二十萬人。水爲之不流。圍漢王三匝。會大風從西北起、折木發屋、揚沙石、晝晦。王乃得與數十騎遁。審食其從太公・呂氏間行、遇楚軍。爲楚所獲。常置軍中爲質。漢王至滎陽。諸敗軍皆會。蕭何亦發關中老弱、悉詣滎陽。漢軍復大振。

【讀方】漢王、五諸侯の兵五十六萬を率ゐ、楚を伐つて彭城に入り、其の寶貨美人を收めて、置酒高會す。項羽方に齊を撃つ。之を聞き、自ら精兵三萬を以て還つて漢を撃ち、大に漢軍を睢水の上に破る。死する者二十萬人。水之が爲に流れず。漢王を圍むこと三匝。會々大風、西北より起り、木を折り屋を發き、沙石を揚げ、晝晦し。王乃ち數十騎と遁るゝを得たり。審食其、太公・呂氏に從ひて間行し、楚軍に遇ひ、楚の獲る所と爲る。常に軍中に置きて質と爲す。漢王、滎陽に至る。諸敗軍皆會す。蕭何も亦關中の老弱を發し、悉く滎陽に詣らしむ。漢軍復た大いに振ふ。

【通釋】漢王は（常山王張耳以下）の五大名の兵五十六萬人を率ゐ、楚を伐つて（項羽の根城たる）彭城に攻め入り、その寶物・貨財及び美人を奪つて、盛大な祝宴を開いた。項羽は折節齊を撃ちに行つてゐたが、これを聞くと自ら精鋭なる兵三萬を率ゐて引き返し、漢の軍を撃つて大いに睢水のほとりで破つた。漢軍の戰死者二十萬、睢水はその屍骸が一杯で流れが止つたといふ位である。（項羽は彭城にゐる漢王を）三重に包圍した。折から西北の大風起つて、木を折り屋根をめくり、沙舞ひ石飛んで、晝なほ暗き有樣であつた。漢王は（この天候に惠まれて）數十騎の部下と共に圍を脫して逃げることが出來た。この時、審食其といふものが漢王の父太公と夫人呂氏とをつれて、（敵の目をのがれる爲に）

ぬけ道から忍んで逃げたが、却つて途中で楚軍に出くはして捕へられた。(項羽はこの太公と呂夫人とを)常に自分の軍中に置いて漢の人質とした。漢王は滎陽に落ちのびた。敗れた部下の軍隊が皆來つて一緒になつた。そこへ、蕭何も(漢王を援ける爲に)、關中に殘つた老人や少年までも徵發して滎陽へ送つたので、漢軍は復た大いに氣勢をあげた。

【語釋】五諸侯(常山王張耳・河南王申陽・韓王鄭昌・魏王豹・殷王卬の五侯。一説には張耳を除いて陳餘を入れる。) ○以二精兵三萬一(以はこの場合モツテと讀んでもよいが、ヰテ又はヒキヰテと讀む。ヰテはヒキヰテの古訓である。精兵は、えりすぐつた兵。) ○彭城(今の江蘇銅山縣。) ○置酒高會(酒を設けて盛な宴會を開くこと。) ○擊レ齊(齊の將田榮が項羽に逆らつて敗北したところ、その弟田橫は榮の子の廣を立て、尙は項羽に抗したので、羽はそれを攻めた。) ○睢水(スヰスヰ。水名。河南安徽を流れ江蘇に至つて泗水に入る。) ○三匝(匝は音サウ。めぐる、かこむ。三重に取りまくこと。) ○滎陽(ケイヤウ。地名。今河南滎陽縣。) ○關中老弱(二十歲(一説に二十三歲)以下を弱とし、五十六歲以上を老とする。その中間の壯丁は旣に漢王に從つて出征してゐるから、後に殘つた老弱を徵發したのである。)

【餘論】三萬の兵を以て五十六萬の大軍を破り、二十萬の死者を出し、水これが爲めに流れずなどいふことは、今日の理性を以てしては、無條件には信ぜられぬことである。その外、四十萬人を坑にするといひ、火三月絶えずといふなど、すべて漢文には斯うした誇張の形容が多いから、讀むものは注意を要する。それと同時にまたそこに雄大・簡勁等の妙味の存することをも見のがしてはならない。

さきに咸陽に入つた時、財物取る所なく婦女幸する所なかつた漢王と、今彭城に入つて寶貨美人を

蕭何守二關中一

收めて置酒高會する漢王とを比較すると、殆ど別人の觀がある。知らず果して何れが眞の漢王であらうか。抑も原始人類が——否々現代に於ても文化の陶冶を受くること少き人類が、敵人の部落を襲撃して勝利を占めた後に、敵の財産婦女を掠奪して引きあげる有樣を想像すると、咸陽の項羽、彭城の高祖、共に一脈相通ずるもののあるを覺えるではないか。

○蕭何守關中、立宗廟社稷縣邑、事便宜施行、計關中戶口、轉漕調兵、未嘗乏絕。○魏王豹叛。漢王遣韓信擊之。豹以柏直爲大將。王曰、是口尚乳臭。安能當韓信。信伏兵、從夏陽以木罌渡軍、襲安邑虜豹。信既定魏、請兵三萬人、願以北擧燕・趙、東擊齊、南絕楚糧道、西與大王會於滎陽。王遣張耳與俱。


蕭何、關中を守り、宗廟社稷縣邑を立て、事便宜に施行し、關中の戶口を計り、轉漕、兵を調し、未だ嘗て乏絕せず。○魏王豹、叛す。漢王、韓信を遣して、之を擊たしむ。豹、柏直を以て大

將と爲す。王曰く、「是れ口尙ほ乳臭なり。安んぞ能く韓信に當らん」と。信、兵を伏せ、夏陽より木罌を以て軍を渡し、安邑を襲うて豹を虜にす。信、旣に魏を定め、兵三萬人を請ひ、願はくは、以て北のかた、燕・趙を擧げ、東のかた齊を擊ち、南のかた楚の糧道を絕ち、西のかた大王と滎陽に會せんといふ。王、張耳を遣して、與に俱にせしむ。

蕭何は（丞相となつて後にのこり）關中を留守して、漢の先祖のお靈廟を立て（國家の神として）土地の神五穀の神を祀り、縣や邑の制度を設けるなど（すべて國家經營の基礎を定め）、一切の事務は（一々漢王の指圖を受けるやうな煩雜を省いて）適宜に獨斷で取り計らひ、關中全體の戶數人口を調べて、（それによつて兵糧を取り立てゝ）水陸より運搬し、又（それによつて）兵士を徵發して（缺けたるを補充し）、いつも漢王の軍に兵粮や兵隊の不足のないやうにした。○魏王豹は（漢王の傲慢な態度を憤つてその命に從はず）反對を聲明した。漢王は韓信を遣はして之を討たしめたので、豹も柏直を大將に任じて之に應じた。漢王それと聞いてほくそ笑み、（「柏直が大將なら占めたもんだ）あアまだ口先に乳の香の殘つた童兒ぢやないか。何が韓信なぞに刄向ひの出來るもんで」と言つたが、果してその通り、韓信は敵の目に留まらぬやうに兵隊をこつそり行かせたが、夏陽縣（山西省）に（橋

井陘口之戰

がなかつたので）多くの瓶を木にしばりつけて橋の代りにして軍隊を渡し、安邑（山西省）を攻めて豹を虜にしてしまつた。斯くて韓信は豹の領してゐた魏の地を平定したが、漢王に三萬の兵を請ひ受けて、「北は燕と趙とを攻め取り、東は齊を撃ち、南の方は楚が糧食を送る道を絶ち切り、而して西のかた滎陽へ出て、そこで大王の軍と一所になるやうに致したい」と申し出た。漢王は（その願ひを容れ）張耳を遣はして韓信と共に進撃させた。

【語釋】口尙乳臭（口ばたにまだ乳のにほひがする。ちゝくさいといふ意で、年若く經驗に乏しいものを嘲つていふ。青二才。黄吻。）　○木罌（罌は音アウ、口小さく腹の大きい瓶（カメ）のこと。之を水上に浮べて口が露出すると水が入らないで能く浮くから、それを澤山に集めて木に縛りつけ、水に浮べて橋の代用としたもの。）

○三年、信・耳、以兵擊趙、聚兵井陘口。趙王歇及成安君陳餘禦之。李左車謂餘曰、「井陘之道、車不得方軌、騎不得成列。其勢糧食必在後。願得奇兵、從閒道絕其輜重。足下深溝高壘、勿與戰。彼前不得鬭、退不得還、野無所掠。不十日、兩將之頭、可致麾下。」餘儒者自稱義兵、不用奇計。信閒知之、大

喜乃敢下。

訓讀 三年、信・耳、兵を以るて趙を擊ち、兵を井陘口に聚めんとす。趙王歇及び成安君陳餘、之を禦ぐ。李左車、餘に謂つて曰く、「井陘の道、車、軌を方ぶるを得ず、騎、列を成すを得ず。其の勢ひ糧食必ず後に在らん。願はくは奇兵を得て、間道より其の輜重を絶たん。足下、溝を深くし壘を高くし、與に戰ふこと勿れ。彼れ前みては鬪ふを得ず、退きては還るを得ず、野には掠むる所無し。十日ならずして、兩將の頭、麾下に致す可し」と。餘は儒者にして自ら義兵と稱し、奇計を用ひず。信、間して之れを知り、大いに喜び、乃ち敢て下る。

通釋 漢の三年に、韓信・張耳の二人は、兵を率るて趙を擊つといふので、先づ兵を井陘口に集めようとした。趙では王の歇とその臣の成安君陳餘が、その防禦に當つた。時に趙の李左車といふものが陳餘に計略を話して曰ふには、「井陘口へ出る道は、車は二臺ならべることが出來ず、騎馬も二列になつて進めないほど(狹い所である)。從つて(漢の軍が井陘口を通るときには)、自然その糧食や武器はズツと後になければなりませぬ。そこで私は不意打の兵を頂戴して行つて、拔道から漢軍の武器

糧食の車を絕ち切りませう。足下は城の濠を深くし、城壁を高くして、（敵が如何に攻めても）相手にしなさいますな。さすれば漢軍は前へ進んでも鬪ふことが出來ず、退いても還ることが出來ず、（折から冬の初めで）田畑にも掠る物がありませんから（直ちに飢餓に苦しんで）、十日たゝぬうちに、韓信・張耳二人の大將の首は足下のお手元に差上げることが出來ます」と。しかし陳餘は元來が儒者で我が軍が義兵であるから、（正々堂々の戰をしなければならぬと言つて）、この奇計を用ひなかつた。一方韓信は、間者を出してこの事を探知し、大いに喜んで、意を決して（井陘の阻道から趙へと）下つて出た。

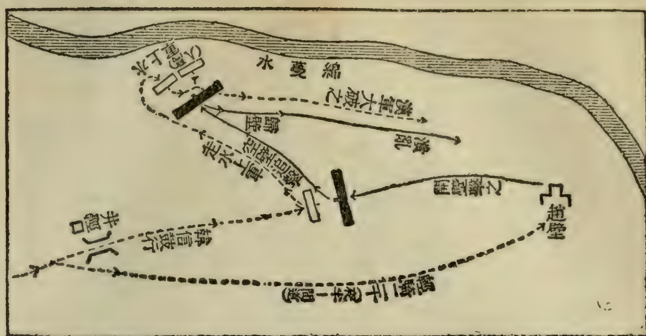
【語釋】井陘口（井陘山上の隘路で、一に井陘關といひ、歷代軍事上最も要害の地とした處。今直隷保定道井陘縣の東北。）○趙王歇（歇はケツ又はカツの音であるが、此の人の名のときはアツと讀むことになつてゐる。）○成安君陳餘（成安は趙の地名、趙王が陳餘を封じて成安君としたのである。）○不レ得レ方レ軌（軌は車のワダチ（轍）、方は比べナラブ。車が二臺並んで行くことが出來ぬといふので道の狹隘な形容。）○騎不レ得レ成レ列（二騎以上、横に並ぶことが出來ぬので、やはり道のせまい形容。）○野無レ所レ掠（時に十月、季、冬に入つて稻も刈り取られ畑に成り物もないから、取つて食糧とする何物もないのである。）○輜重（兵糧や荷物を載せる車。）○奇兵（敵の不意を討つ兵。奇襲の兵。）○麾下（麾は大將の指圖する旗。よつて大將のお側といふ意に用ひる。）○義兵（正義の爲めに起した軍。）

【餘論】「聚二兵井陘口一」の句は、前掲の通り十八史略では「信耳以レ兵擊レ趙」の下にあつて、韓信張耳が兵を井陘に集めたことになつてゐるが、これは恐らく史記列傳に「信與二張耳一以二兵數萬一欲下東下二

井陘一撃上レ趙。趙王・成安君陳餘聞二漢且一レ襲レ之也、聚二兵井陘口一云々」とあるのを、著者が引き誤つたものであらう。通鑑にも「韓信張耳撃レ趙。趙王及成安君陳餘聚二兵井陘口一云々」となつてゐる。卽ち兵を井陘口に集めたのは趙王・陳餘であつて、信・耳ではない。信・耳は井陘を下つて趙を撃たうと計畫したまでである。下文「未レ至二井陘口一止」といふのに徴して見ても、さうあるべきものと思ふ。但しこゝには姑らく十八史略の記す所に從つて解いておいた。

未レ至二井陘口一止、夜半傳二發輕騎二千人一、人持二赤幟一、從二閒道一望二趙軍一。戒曰、趙見二我走一、必空レ壁逐レ我。若疾入二趙壁一、拔二趙幟一、立二漢赤幟一。乃使二萬人先背レ水陣一。平旦、建二大將旗鼓一、鼓行出二井陘口一。趙開レ壁撃レ之。戰良久。信・耳佯棄二鼓旗一、走二水上軍一。趙果空レ壁逐レ之。水上軍皆殊死戰。趙軍已失二信等一、歸レ壁、見二赤幟一大驚、遂亂遁走。漢軍夾撃大破レ之、斬二陳餘一、禽二趙歇一。

〔訓讀〕未だ井陘口に至らずして止り、夜半に輕騎二千人を傳發し、人ごとに赤幟を持ち、閒道より



岡田博士の考案に據る

趙の軍を望ましむ。戒めて曰く、「趙、我が走るを見ば、必ず壁を空うして我を逐はん。若、疾く趙の壁に入り、趙の幟を拔いて、漢の赤幟を立てよ」と。乃ち萬人をして先づ水を背にして陣せしむ。平旦、大將の旗鼓を建て、鼓行して井陘口を出づ。趙、壁を開いて之を擊つ。戰ふこと良ゝ久し。信・耳佯つて鼓旗を棄てゝ水上の軍に走る。趙、果して壁を空しうして之を逐ふ。水上の軍、皆殊死して戰ふ。趙の軍已に信等を失うて壁に歸り、赤幟を見て大いに驚き、遂に亂れて遁れ走る。漢軍夾擊して大いに之を破り、陳餘を斬り、趙歇を禽にす。

通釋 (韓信等の軍は)まだ井陘口へ行き着かないその手前で止まつて、(先づ別働隊として)眞夜中に身輕にいでたつた騎兵二千人に命令を傳へて出發させ、全員に赤の幟を持たせ、ぬけ道から(こつそり行つて)趙の軍を望んで見張りするやうに命

じた。その際、注意を與へて曰ふには、「趙は我が軍(本隊)の退却するのを見たら、必ず城を空にして追撃して來るであらう。そのとき汝等は(横合から)速かに趙の城中へ入つて、趙の幟を引きぬき、持つたる漢の赤旗を立てよ」と。(かくて二千の輕騎軍は出發した)。そこで又、(今一つの別働隊として一萬の兵を出して、わざと川を後に控へた(逃げるに逃げられぬ危いところ)に陣取らせた。そのうちに夜が明けると、(本隊は)大將の旗を立て太鼓を打つて、堂々と井陘口を出た。それと見ると趙軍は城をあけ放して撃つて出た。斯くて戰ひを大分しばらく續いた。(その中に時分はよしと)、韓信・張耳は敵はぬふりをして旗や鼓を棄てゝ川のほとりに陣してゐる味方の別働隊へ向つて逃げ出した。すると趙は果して城を空にして追つて來た。(その間に例の輕騎二千人は趙の城へ入つてその旗を拔いて漢の赤旗を立てゝしまつた)川岸の軍は死を決して奮戰した。そのため趙の軍は韓信等を討ち損うて、城に歸らうとすると、漢の赤旗が立つてゐるので大いに驚き、遂に混亂して逃げ出した。漢軍は(輕騎軍と水上軍とで)これを夾み撃ちにして大いに破り、陳餘を斬り殺し、趙王歇を捕虜にした。

語釋　傳發(命令を隊から隊へと傳へて出發せしめるといふ意。)　○壁(城壁のことであるが、轉じて城壘そのものをいふ。)　○背レ水陣(川を後に控へて陣取ることで、逃げるにも逃げられない。だから自然決死の奮闘をするわけである。この故事から總て豫備線を設けず、のるかそるかの最後の奮鬪をすることを「背水の陣を敷く」といふ。ここの水は綿蔓水といふ川で、當時の河道では黄河の一支流であつた。)　○平旦(平明といふに同じ。夜明け方。)　○鼓行(攻め鼓を鳴ら

陷之死地而後生

して進軍すること。）○水上軍（上はホトリと讀じ、川のほとりに陣する軍隊。水軍といふと異る。混同しないやうに。）○殊死（殊は決又は絶の意。決死といふに同じい。）○禽（擒に同じい。とりこ。）

諸將賀。因問曰、兵法右倍山陵、前左水澤。今背水而勝何也。信曰、兵法不曰陷之死地而後生、置之亡地而後存乎。諸將皆服。信募得李左車、解縛師事之。用其策、遣辯士奉書於燕。燕從風而靡。

訓讀　諸將、賀す。因つて問うて曰く、「兵法に、山陵を右にし倍き、水澤を前にし左にすと。今、水を背にして勝ちしは何ぞ也」と。信曰く、「兵法に、之を死地に陷れて而して後に生き、之を亡地に置いて而して後に存すと曰はずや」と。諸將、皆服す。信、李左車を募り得て、縛を解いて之に師事す。其の策を用ひ、辯士を遣して書を燕に奉ぜしむ。燕、風に從つて靡く。

通釋　諸將は（この希代の戰捷に對して）皆祝辭を述べた。且つそれに就て韓信に質問を發して曰ふには、「兵法によれば、山や丘は右又は後に控へること、川や沼は左又は前にして陣すること〻なつて居りますのに、今、川を後にして勝つたといふのは、如何なるわけでありますか」と。韓信は答へて、

隨何說二黥布一
酈食其

「（いや、それもちゃんと兵法にあることだ）。すべて人は絶對絶命といふ必死的な危險の場所に置けば、（死んではならぬと死物狂ひの努力をするから、却つて敵に勝つて）生き殘るものだと出てゐるではないか。（自分はその法によつた迄である）」と曰つたので、諸將は皆なるほどと感服した。それから韓信は、趙の李左車を懸賞で捕へさせ、（兵士が縛つて來た）繩を解いて、師として之に事へた。そして遂にその李左車の計略を用ひ、雄辯の士を燕へ遣はし、手紙を持たせて降伏を勸めにやつたところが、燕は漢の威風に恐れて、草の風に靡くが如くに降服した。

語釋 右二倍山陵一（倍は背に通じてソムクと訓じ後ろにすること。山や丘陵は之を右か後に控へて陣を取るべしとの意。） ○陷二之死地一云云（「死地」は死を免れ得ぬ危險な場所。「亡地」は滅亡を免れぬ苦境。つまりは同じこと。また「生」は「死」に對し「存」は亡に對したので是れも意味は同じい。たゞ對句にしたまでである。即ちとても逃れ得ぬものと覺悟がつけば、全軍一致、死を決して努力するから、却つて負けるべき戰にも勝ち、危險を脫して生存するといふ意である。「孫子」九地編に「陷二之亡地一然後存、陷二之死地一然後生」とある。）

餘論 孟子曰く、「生二於憂患一、死二於安樂一」と。この章は當に之れが好個の註脚であらねばならぬ。

○隨何說二九江王黥布一、畔レ楚歸レ漢。既至。漢王方踞レ床洗レ足。召レ布入見。布悔怒、欲二自殺一。及下出就レ舍、帳御食飲從官、皆如中漢王居上。又大喜過レ望。○酈食其

借レ箸發ニ八難一

說漢王、立六國後。王曰、趣刻印。張良來謁。王方食。具告良。良曰、請借前箸、爲大王籌之。遂發八難。其七曰、天下遊士、離親戚、棄墳墓、從大王遊者、徒欲望尺寸之地。今復立六國後、游士各歸事其主。大王誰與取天下乎。且楚惟無彊。六國復撓而從之、大王焉得而臣之乎。誠用客謀、大事去矣。漢王輟食吐哺、罵曰、豎儒幾敗乃公事。令趣銷印。

【訓讀】隨何、九江王黥布に說き、楚に畔きて漢に歸せしむ。既に至る。漢王方に床に踞して足を洗ふ。布を召し入りて見えしむ。布悔い怒りて自殺せんと欲す。出でて舍に就くに及び、帳、御食飲從官、皆漢王の居の如し。又大に望に過ぎたるを喜べり。〇酈食其、漢王に說く、六國の後を立てんと。王曰はく、「趣に印を刻せよ」と。張良來り謁す。王方に食す。具に良に告ぐ。良曰はく、請ふ、前箸を借りて、大王の爲に之を籌せん」と。遂に八難を發す。その七に曰はく、「天下の游士、親戚を離れ、墳墓を棄てて、大王に從ひ遊ぶ者は、徒に尺寸の地を望まんと欲す。今復六國の後を立てば、

游士各歸りて其の主に事へん。大王誰と與に天下を取らんや。且楚より惟れ彊きは無し。六國復撓みて之に從はゞ、大王焉んぞ得て之を臣とせんや。誠に客の謀を用ひば大事去らん」と。漢王、食を輟めて哺を吐き、罵つて曰く、「豎儒、幾ど乃公の事を敗らんとす」と。趣かに印を銷せしむ。

通釋 ○隨何といふものが、九江王の黥布に對し、今まで楚に附いてゐたのを止めて漢に附くやうに說きすゝめた。布は（それに從つて）漢王の處へやつて來た。時に漢王は床几に腰をかけて足を洗つて居つたが、そのまゝ布を引き入れて會見した。布は（その無禮さに憤慨し、隨何に欺かれたことを）後悔もし腹も立てゝ自殺しようと思つた。ところが其場を出て宿舍に入つて見ると、（これは又おどろいた）。部屋の帳も衣服調度も、附添ひの役人も、すつかり漢王の住居と同じにしてあつたので、（前とは反對に）、今度は自分の望み以上の待遇を大いに喜んだ。○漢の三年に、項羽は漢王を滎陽に包圍したので、漢王は恐れ憂へて、酈食其といふ學者に、項羽の勢ひを弱める方法を相談した。そこで）酈食其は、（さきに秦に滅された）六國の跡目を立てゝ（大名にしてやることを）說きすゝめた。（さうすれば六國は漢王の恩義に感じ王を慕うて臣となり、王の德、一時に盛になるであらう。こゝに於て王が天下に覇を稱へられるならば、項羽も大勢に敵し難く自然に降服して來るに違ひないといふのであ

る)。漢王(それを尤もとして)「では、速にその六國の君の印章を作れ、(それを與へてそれ〳〵六國の君に任ずるであらう)」と言つた。そこへ丁度張良が來て拜謁した。漢王は折から食事中であつたが、右の趣を詳しく張良に話した。良(これを聞いて不可となし)「どうか御前のお箸を拜借して、大王の爲めに、天下の形勢を書いて御覽に入れませう」と言つて、それから八ケ條の難問題を出して(一々說明した)。其の第七條に「今天下の浪人共が、その親子兄弟に別れ、生れ故鄕の地を去つて、大王につき從ひ仕へて居るのは、たゞ僅ばかりの土地でも得たいと欲してゐるからであります。然るに今再び六國の後目を立てたならば、浪人共はそれ〳〵元の故國に歸つて其の王に事へるでありませう。すれば大王は(そんなに多くの敵國を作つて)誰と共に天下をお取にならうとするのですか。とても天下を取ることは出來ますまい。その上に(今日のところ)楚より國はないから、(六國を立てたところが)その勢ひが弱つてまた楚に從ふやうになつたら、大王はどうして六國を臣となさることが出來ませう。もし食其の謀をお用ひになつたら、天下取りの大業もこれまででありませう」と申し上げたので漢王は(驚き怒り)食事をやめ、口に入れた食物も吐き出して、怒鳴つていふには、「あの靑二才學者が、おれの事業を目茶々々にするところだつた。」と。早速その印判の文字を消しつぶさせてしまつた。

骨鯁之臣

亞父請ニ骸骨一

紀信佯降

語釋 黥布（黥は入れ墨すること本名は英布といふのだが、嘗て法に觸れて顔に入墨されたので黥布といふ。楚の將であつた。） ○及ニ出就レ舍云々（舍は宿舍。帳は帷帳で室内のトバリや蓐の類。御は服御で、衣服手近具の類。）こゝは黥布が先に久しく自ら王と稱して威張つてゐたから、漢王が、その鼻柱を挫くために、わざと上下の分を嚴にしてこんな横柄な眞似をしたのであるが、やがて又一面に帳御飲食從官を手厚くして優遇し、布の心を喜ばせたのである。皆英雄が人心を收攬するの手段に外ならぬ。） ○食其（當時の儒者で、遊說の士である。史記の列傳に「年六十餘、身長八尺、人皆之を狂生と謂ふ。生は自ら我は狂生に非ずと謂ふ云云とある。） ○六國（楚・韓・魏・燕・趙・齊の六國で、秦に滅されたもの。） ○趣刻レ印（趣はスミヤカと訓み、早くと促す意。印は印判。官職を授けるには其の印判を與へるのが例である。こゝは六國の大名に封ずる爲に渡す印判をいふ。） ○借ニ前箸一爲ニ大王一籌レ之（君前で天下の形勢や軍の計略などを說明する際、指先で地形や方略を圖示することがある、之を指畫といふ。こゝは御前の箸を借りて、それで以て天下の形勢を圖示說明したのであると一說に、箸はカズトリと訓み、弓の競射の時に勝負けの矢數を數へ示すものである。こゝは八ケ條の難問を出すに就て、一問を終る毎に箸を置いてカズトリとして八難を數へ算ることであるともいふ。） ○墳墓（父祖の墳墓のある地。墳墓の地ともいふ。生れ故郷といふこと。） ○尺寸之地（僅かの土地といふ意。） ○楚惟無レ彊（「惟無レ彊ニ於楚一」の倒裝である。） ○撓而從レ之（勢力が弱り屈して楚に從ふこと。楚に屈從すること。） ○大事去（一大事が駄目になつてしまふ。） ○乃公（乃はナンヂと訓み、汝のこと。公はキミと訓んで尊稱。汝の君といふので、もと君主が臣下に向つて自己のことをいふ稱呼であるが、人に對して自ら尊大ぶつて言ふ時に用ひる。おれ。高祖は人を罵る時多く乃公と言つたといふ。） ○銷（消に同じ。）

○楚圍ニ漢王於滎陽一。漢王謂ニ陳平一曰、天下紛紛。何時定乎。平曰、項王骨鯁之臣、亞父輩數人耳。行レ間以疑ニ其心一、破レ楚必矣。王與ニ平黃金四萬斤一、不レ問ニ其出入一。平多縱ニ反間一。羽大疑。亞父請ニ骸骨一歸。疽發レ背死。○楚圍ニ漢王一益急。紀信曰、事急矣。請誑レ楚。乃乘ニ漢王車一、出ニ東門一曰、食盡漢王出降。楚人皆之ニ

城東ニ觀ン。漢王乃チ得タリ下出デテ二西門一ヨリ去ルヲ上。項羽燒二殺ス紀信一ヲ。

【語釋】○楚、漢王を滎陽に圍む。漢王、陳平に謂つて曰く、「天下紛紛たり何の時か定まらん」と。平曰く、「項王骨鯁の臣、亞父の輩數人のみ。間を行うて以て其の心を疑はしめば、楚を破ること必せり」と。王、平に黄金四萬斤を與へ、其の出入を問はず。平、多く反間を縱つ。羽、大いに疑ふ。亞父、骸骨を請うて歸る。疽、背に發して死す。○楚、漢王を圍むこと益々急なり。紀信曰く、「事、急なり。請ふ、楚を誑かん」と。乃ち漢王の車に乘り、東門より出づ。曰く、「食盡き、漢王出で降る」と。楚人、皆城東に之きて觀る。漢王、乃ち西門より出でて去ることを得たり。項羽、紀信を燒殺す。

【通釋】楚軍(項羽)は漢王を滎陽といふ處に攻圍した。漢王は(重圍に陷つて大いに苦しみ)、側の陳平に向つて「今や天下は亂れに亂れて麻の如しぢやが、一體これはいつになつたら治まることであらうか」と述懐した。すると陳平は斯う答へた、「(なに、そんなに案じたものではありませぬ。敵といへば項王ですが)、項王だとて忠義直言の臣は僅かに亞父范增の輩數人に過ぎませぬ。(だからそれらをさへ除いて了へば、項羽を圖ることは何でもありませぬ。幸ひ項王は疑ひ深い仁ですから)、反間を

縱つて、項王と亞父等との間に互ひに疑ひの心を起させて（君臣を離間するなら）、楚を破ることは間違ひありませぬ」と。そこで漢王は陳平に四萬斤の黄金を與へて、その金の出し入れ用途は勝手たるべしと云つたので、陳平はそれで間者を買收して楚の軍中に縱ち、（范增等が漢王と內通して項羽を除かうと企らんでゐるといふやうに言はしたもんた）。果然、項羽は范增を疑ひ、（段々その權力を殺いで信用しなくなつたので）、范增は大いに怒つて、（もう私なぞに用はござるまいと言つて）、身の暇を請うて歸つたが、（その途中で）疽といふ恐ろしい腫物が背中に出來て死んでしまつた。○楚軍は漢王を（滎陽城に）圍み、城は今にも落ちさうになつた。その時、紀信が（漢王の前に進み出て）曰ふには、「事態旣に斯くの如く危急に迫つて居ります。この上は一つ楚軍を欺いて（大王をお逃し申すより外ありませぬ」と。かくて漢王の車に乘つて自ら漢王を裝ひ、（滎陽城）の東門を開いて乘り出した。そして「糧食缺乏し、漢王已むなく出でて降伏する」と揚言した。楚軍の兵は（そりやこそとばかりに）皆東門へと（楚王の降參する樣を）見に行つた。その隙に漢王は（反對の側の）西門からぬけ出で、まんまと遁げ去ることが出來た。項羽は（欺かれたことを知ると、怒つて）紀信を捕へて燒き殺した。

語釋 滎陽（今河南開封道滎陽縣）○紛々（物のもつれ亂れたさま。紛亂の貌。）○骨鯁之臣（鯁は魚の骨が喉に立つたのをいふ。忠諫直言の臣は君の御機嫌にさはること恰も骨が喉に立つたやうであるとの譬から、忠

諫直言の臣をいふ。）　○請二骸骨一（一たび君主に仕へた以上は、身命は君に捧げたものである。故に職を辭して君主に離れるのは、その死骸を引き取るやうなものだとの義から辭職することをいふ。）　○誑（音キヤウ。たぶらかす。あざむく。）

餘論　蘇東坡の「范增論」は八家文にも文章軌範にも見え、范增として項羽を去るべき時機を痛論した有名な論文であるが、その結尾に「增は高帝の畏れし所なり。增去らずんば項羽亡びず。嗚呼、增も亦人傑なるかな」と云つてゐる。「增去らずんば項羽亡びず」は斷乎たる鐵案である。誠にその增の去つたのは、謂はゆる「一葉落ちて天下の秋を知る」もの、項羽が運命の凋落は、既にこの時十分に兆してゐるのであつた。

太平記によると、元弘三年正月、足利勢六萬、吉野城を圍んで、大塔宮護良親王の御運命も危く見えさせ給うた時、忠臣村上義光は、宮のお身代りとなつて危急を救ひ奉るべきを申し出た。宮は「死なば一所にてこそ」とて中々お許しがない。すると義光、聲を荒らげて「かゝる淺ましき御事や候ふ。漢の高祖、滎陽を圍まれし時、紀信、高祖のまねをして、楚を欺かんと乞ひしを、高祖これを許し給ひしに候はずや」とて、强ひて親王の御物具を身にまとひ、「一品兵部卿親王護良、たゞ今自害するぞ」と名のつて、腹一文字にかき切つて相果て、その隙に宮を高野へ落し參らせたとある。なほ同書は、

敖倉之粟

蒯徹說二韓信一

花山院藤原師賢が、帝と詐つて比叡山に登ることをも、紀信の故事に結びつけ、「紀信が事」といふ一文を附け加へてゐる。いづれも紀信の「身代り」といふ悲壯な事實が、我が先人の心を動かした證據である。

○漢王軍二成皐一。羽圍レ之。王逃去、北渡レ河、晨入二趙壁一、奪二韓信軍一、令下信收二趙兵一擊上レ齊。○酈食其說レ王收二滎陽一、據二敖倉粟一、塞二成皐之險一。王從レ之。○酈食其爲二漢王一、說二齊王一下レ之。蒯徹說二韓信一曰、將軍擊レ齊。而漢獨發二閒使一下レ之。寧有レ詔止二將軍一乎。酈生伏レ軾、掉二三寸舌一、下二七十餘城一。將軍爲レ將數歲、反不レ如二一豎儒之功一乎。○四年。信襲破レ齊。齊王烹二食其一而走。

【訓讀】漢王、成皐に軍す。羽之を圍む。王逃れ去り、北のかた河を渡り、晨に趙の壁に入り、韓信の軍を奪ひ、信をして趙兵を收めて齊を擊たしむ。○酈食其、王に說き、滎陽を收め、敖倉の粟に據りて、成皐の險を塞がんとす。王之に從ふ。○酈食其、漢王の爲に、齊王に說きて之を下す。蒯徹、

韓信に說きて曰はく、「將軍　齊を擊つ。而るに漢獨り間使を發して之を下せり。寧ろ　詔　ありて將軍を止めし乎。酈生・軾に伏して、三寸の舌を掉ひ、七十餘城を下せり。將軍、將たること數歲・反りて一豎儒の功に如かざる乎」と。○四年信襲ひて齊を破る。齊王・食其を烹て走る。

 漢王は(危き處をのがれて)成皐に陣取つた。項羽が之を圍んで攻擊したので、漢王はまた逃げ去つて、北を指して黃河を渡り、朝早く趙の城壁に入り、(そこに陣してゐた)韓信に取つて代つて其の軍を我が手に收め、韓信には趙の兵を集めて齊を擊たしめた。○酈食其が漢王に向つて「(楚は滎陽を拔いたが之を守らずに兵を引き上げ、敖倉山の穀物もその儘にしてあります故)滎陽城を取り、敖倉山の穀物を收めて兵食に供し、成皐の要害を守るがよろしからう」と。說いたので、漢王は之に從つた。○酈食其は又、漢王の爲に齊王を說伏して降參させた。(その時韓信は齊を討たうとしてゐたので)、蒯徹が韓信に說いていふやう、「將軍が齊を擊つの　詔　を受けられたのに、漢王は更に酈生といふ忍の使を出して齊を降しましたが、これは一體、王より將軍に征伐中止の命が下つたのですか。(甚だ人を馬鹿にした話ではござらぬか)。あの酈生は(車の上に安座して)橫木によりかかり(一兵を用ひずして)三寸の舌を動かし、(何の骨も折らずにたゞ辯舌だけで)、齊の七十餘城を降參させました。將軍

吾翁若翁

數二羽十罪一

は既に大將たること五年六年にもなるのに、一青二才儒者の手柄にも及ばぬのですかなあ」と。○四年信は（蒯徹の言葉に發憤して）齊を不意討して之を破つた。齊王は（食其が油斷させに來たものと思ひ、其の不信を怒つて）、釜茹でにして殺してから逃げた。

語釋 成皐（地名。今の河南開封汜水縣。）○奪二韓信軍一（軍を奪ふとは、その軍の將軍たる證の兵符を奪ふこと。王と雖も兵符がなくては、將卒はその命令に從はないからである。つまり軍の統率權を橫取りすることをいふ。當時、漢王は軍の使者だと僞つて未明に韓信・張耳の陣營へ馳け込んで、まだ寢てゐた兩將の兵符を奪ひ取つた。兩將は眼をさまし之を知つて大いに驚いたといふことだ。）○敖倉（山名。そこに秦の米倉があつた。）○間使（間道を行かしめる使。忍びの使。こゝは酈生を指す。）○寧有レ詔止二將軍一乎（こゝの「寧」は「豈」と同じ意に解く。ナントとでも譯するがよい。）○伏レ軾云々（軾は車の前にある橫木、車に乘つた者が敬禮する時には之に憑りかゝるものである。「伏」はヨリカヽル意。憑レ軾ともいふ。たゞ安坐して車に乘り、軍兵を用ひずして遊說し、骨折らずして敵を除すといふ意。）

○漢與レ楚皆軍二廣武一。羽爲二高俎一、置二太公其上一、告二漢王一曰、不二急下一、吾烹二太公一。漢王曰、吾與レ若倶北面事二懷王一、約爲二兄弟一。吾翁卽若翁。必欲レ烹二而翁一、幸分二我一杯羹一。羽願與レ王挑戰。王曰、吾寧鬭レ智、不レ鬭レ力。因數二羽十罪一。羽大怒、伏レ弩射レ王傷レ胸。

【訓讀】漢と楚と皆廣武に軍す。羽、高俎を爲つて、太公を其の上に置き、漢王に告げて曰く、「急に下らずんば、吾太公を烹ん」と。王曰く、「吾と若と倶に北面して懷王に事へ、約して兄弟と爲る。吾が翁は卽ち若が翁なり。必ず而が翁を烹んと欲せば、幸に我に一杯の羹を分て」と。羽、王と挑戰せんと願ふ。王曰く、「吾れ寧ろ智を鬪はさん。力を鬪はさず」と。因つて羽の十罪を數ふ。羽、大いに怒り、弩を伏せて王を射、胸を傷つく。

【通釋】(漢の四年に)漢・楚の兩軍が悉く廣武に對陣して居つた。或日、項羽は高いまないたを作り、(かねて虜にしてある漢王の父)太公をその上に載せて(漢軍へ見せつけながら)、「早く降參しないと、この太公を煮殺すぞ」と漢王に宣告した。漢王答へて曰く、「(よく物の道理といふものを考へて見よ)。吾と汝とは共に懷王を君と仰ぎ、これに臣として事へたもので、當時、汝と兄弟の約束をしておいた。すれば吾が父は取りもなほさず又汝の父でもある筈ぢや。然るに今、是非にもその汝の父を煮殺さうとならば、どうか吾にも一杯、その父を煮た吸物を馳走せよ」と。項羽は(理につまつて)漢王と勝負を決したいと申し込んだが、漢王は「吾は、それよりは智慧の勝負をしたい。力の勝負は御免蒙る」と言つて撥ねつけた。そして項羽の罪十ケ條を數へ上げて(之を責めた)、項羽は大いに立腹し、弩

を隱しておいて、不意に漢王を射つて、その胸を傷つけた。

語釋 廣武（今河南河陰縣の北にある山の名。中間に澗（谷川）があり、廣武澗といふ。漢・楚の兩軍、その澗を隔てゝ東西に相對峙したといふ。） ○高俎（俎は肉を載せて切る臺マナイタのこと。太公を切つてこれを煮んとする意を示して俎上に載せたのである。） ○北面（天子は南面するに對し、臣下は北面して之に事へる。） ○翁（もと年老へた男のこと。轉じて父をいふ。） ○若翁・而翁（若も而も共に汝に同じくナンヂのこと。） ○羹（音カウ。アツモノと訓ず。すひもの。） ○挑戰（挑はイドムと訓じ、戰をしかけること。又戰はんと申し込むこと。ここは一騎打ちの勝負を申し込んだのである。） ○十罪（項羽が懷王の約に反して、先づ關中に入つた漢王を漢中へ逐うたこと。秦の宮室を燒き始皇の塚を掘り財物を收めたこと。秦の降王子嬰を殺したこと。義帝を弑したこと等々十ケ條を擧げたのである。）

韓信易與耳

躡足附耳語

○楚使龍且救齊。龍且曰、韓信易與耳。寄食於漂母、無資身之策、受辱於胯下、無兼人之勇。進與信夾濰水而陣。信夜使人囊沙壅水上流、旦渡擊且、佯敗還走。且追之。信使決水。且軍大半不得渡。急擊殺且。信使人言之漢王、請爲假王以鎭齊。漢王大怒罵之。張良陳平躡足附耳語。王悟、復罵曰、大丈夫定諸侯、卽爲眞王耳。何以假爲。遣印立信爲齊王。

訓讀 楚、龍且をして齊を救はしむ。龍且曰はく、「韓信は與し易き耳。漂母に寄食して、身を資く

るの策無く、辱を胯下に受けて、人を兼ぬるの勇なし」と。進んで信と濰水を夾んで陣す。信、夜、人をして沙を嚢にして水の上流を壅がしめ、旦に渡つて且を撃ち、佯り敗れて還り走る。且、之を追ふ。信、水を決せしむ。且の軍大半渡るを得ず。急に撃ちて且を殺す。信、人をして之を漢王に言はしめ、假王と爲り以て齊を鎭せんと請ふ。漢王大に怒つて之を罵る。張良・陳平、足を躡み、耳に附けて語る。王悟り、復た罵つて曰はく、「大丈夫、諸侯を定めば、卽ち眞王たらん耳。何ぞ假を以て爲さん」と。印を遣し信を立てて齊王と爲す。

通釋　楚の項羽は龍且を將として齊を救はせた。且曰く、「あの韓信は相手にするにも足らぬ者である。（それは彼の少年の時を考へても分る）、洗濯婆に食をもらつて自活の術も知らず、人の胯をくぐる樣な恥を受けても平氣で、人を淩ぎ勝つの勇氣のない者だ」と。（大に侮り）進んで濰水を夾んで對陣した。韓信は夜間ひそかに人をやつて沙を嚢につめさせ、それで川の上流を壅いで水を偃きとめ、翌る朝早く川を渡つて龍且を撃ち、わざと敗れた風をして逃げ還つた。龍且の軍は（それとは知らず追つかけて來た。（時分はよしと）韓信は、偃いた水を切らした。それが爲に龍且の軍勢の半分以上は渡ることが出來ない。そこを韓信は急に撃つて龍且を殺した。そして人を遣はして此の捷報を漢王に傳

へ、且つ假に齊王となつて自分が齊の地を鎭めたいと願つた。漢王は（韓信が自立の意あることを知つて）大に怒り罵倒して、（その無禮を責めたが）、張良と陳平とが側から漢王の足を蹈んで（注意を與へ）、耳に口を附けて（許したがよろしからう）と囁いたので、王も悟つて、また罵つていふやう、「苟くも男子たるもの、諸侯を平げ得たならば眞の王となるばかりだ。（何を苦しんで）假の王號などを用ひる要があるか」と。早速（齊王としての）印判を遣はし、韓信を立てて齊王とした。

語釋 易與耳（與に戰ひ易しといふ意で、相手にし易い、恐るゝに足らぬといふこと。） ○兼人之勇（字義は一人で二人を兼ねる意で、人の分まで自分がするといふやうに、やり過ぎるほど人を凌ぎ勝つ勇氣。論語の先進篇に「由也兼人、故退之」とある。） ○濰水（山東省にある川。） ○躡足附耳（韓信の使者に知れぬやうに漢王の足を蹈んで之に意を諭し、耳に口を附けて密かにさゝやき、韓信を齊王にするがよいと語つた。）

○項羽聞龍且死大懼、使武渉說信、欲與連和三分天下。信曰、漢王授我上將軍印、解衣衣我、推食食我。言聽計用。我倍之不祥。雖死不易。蒯徹亦說信。信不聽。○漢立黥布爲淮南王。

訓讀 項羽、龍且死すと聞いて大に懼れ、武渉をして信に說かしめ、與に連和して天下を三分せん

項羽與レ漢約

と欲す。信曰はく「漢王、我に上將軍の印を授け、衣を解いて我に衣せ、食を推して我に食ましむ。言聽かれ、計用ひらる。我之に倍くは不祥なり。死すと雖も易へじ」と。蒯徹も亦信に說く。信聽かず。○漢、黥布を立てて淮南王と爲す。

【通釋】項羽は龍且の敗死を聞いて大いに恐れ、武涉といふ辯士を遣つて、項羽と韓信と和睦し、(漢王と三人で)天下を三分しようじやないかと、韓信に說きつけさせた。韓信曰く、「漢王は私に上將軍の印綬を授け下さつた。のみならず御自分の衣を解いて私に着せ、御自分の食物を推し讓つて私に食はせて下さる(といふ愛され方である)。私の言ふことは何でも聽き入れられ、私の謀は總べて用ひて下さる。(私は全く感激に堪へない)。然るに今、私が漢王に背くといふことは天罰の程も恐ろしい。私はたとひ死んでも漢王への義理は破りませぬ」と。その後、蒯徹も亦同じく天下三分の說を進めたが、信は(頑として)聽かなんだ。○漢王が(この年に)黥布を立てて淮南王とした。

【語釋】連和(連合和睦すること。) ○推レ食(自分の食物を推し讓つて人に與へる。) ○雖レ死不レ易(不レ易は節を變へぬこと。心がはりせぬをいふ。)

○項王少レ助食盡。韓信又進レ兵擊レ之。羽乃與レ漢約、中二分天下一、鴻溝以西爲

養レ虎遺レ患

レ漢、以東爲レ楚。歸二太公・呂后一、解而東歸。漢王亦欲二西歸一。張良・陳平曰、漢有二天下大半一。楚兵饑疲。今釋不レ擊、此養レ虎自遺レ患也。王從レ之。〇五年、王追レ羽至二固陵一。韓信・彭越期不レ至。張良勸レ王、以二楚地・梁地一許二兩人一。王從レ之。皆引レ兵來。黥布亦會。

訓讀 項王、助け少く、食盡く。韓信、又兵を進めて之を擊つ。羽、乃ち漢と約す、天下を中分し、鴻溝以西を漢と爲し、以東を楚と爲さんと。太公・呂后を歸し、解きて東に歸る。漢王も亦西に歸らんと欲す。張良・陳平曰く、「漢天下の大半を有つ。楚の兵饑疲す。今釋して擊たずんば、此れ虎を養うて自ら患を遺す也」と。王、之に從ふ。〇五年、王、羽を追うて固陵に至る。韓信・彭越、期して至らず。張良、王に勸めて、楚の地・梁の地を以て兩人に許さしむ。王之に從ふ。皆兵を引いて來る。黥布も亦會す。

通釋 （その後、項羽の勢ひは漸く衰へ）、援軍も少く、糧食も盡きて來た。それにまた韓信は兵を進めて攻擊の手をゆるめなかつた。そこで項羽は、（漢と妥協するを有利と考へ）、全國を二分して、

河南の鴻溝といふ川を中心としてそれより西を漢の地とし、東を楚の領土としようと約束した。かくて項羽は(人質にしてゐた)漢王の父太公と妻の呂后とを漢王にかへし、戰をやめて東のかた楚の國へと歸つた。漢王も亦西のかた關中へ引き上げようと思つた。すると張良と陳平の二人が、(漢王を諫めて)、「漢は今や天下の半ば以上を領して(盛大である。それに引き換へ)楚の兵は飢ゑ疲れて(弱りきつて居る。楚を滅ぼすのは今であります)。若しこのまゝ楚を縱し歸して擊たなかつたならば、(彼は再び勢力を養つて盛り返して來るに違ひない)、これ宛ら彼の恐るべき虎を養つて、自ら憂をのこすと同じである。)この機を外さず、討つて留めを刺さねばなりませぬ」と言つたので、漢王もそれに從ふことにした。

漢の五年、漢王は項羽を追うて固陵へ行つた。時に韓信と彭越とは(漢王とそこで出會ふやうに)約束しておきながら、やつて來なかつた。そこで張良は漢王に勸めて、「楚の地を韓信に與へ、梁の地を彭越に與へることをお許しあらば、(二人はきつと來るでありませう)」と言つたので、漢王はその言葉に從つて、楚と梁とを二人に與へる約束をした)。果して二人とも兵を引きつれてやつて來た。黥布も亦來り會して。(漢軍の勢は益〻振うた)。

四面楚歌

時不利
騅不逝

語釋 鴻溝（河南省にある川の名。秦の始皇が黄河の水を引いて大梁へ灌いだ運河。今賈魯河といふ。古の汴水の分流である。）○陳平（陽武の人。初め魏王咎に仕へたが用ひられず、去つて項羽に仕へ、罪を得て、漢に歸した。高祖に從つて六たび奇計を出し、曲逆侯に封ぜられた。）○固陵（地名。今河南淮陽縣の北。）○彭越（昌邑の人。秦末に群雄の蜂起するや、越また兵を擧げ、暫く獨立してゐたが、後つひに漢に歸した。この時梁王に封ぜられたが、後に叛を告ぐるものあつて誅せられた。）○黥布（本名は英布。黥とは嘗て入れ墨の刑を受けたので、さう呼ぶのである。初め項梁に屬し、次いで項羽に從ひ、その命によつて義帝を弑したが、後に漢に仕へて淮南王に封ぜられた。叛を圖つて殺さる。）

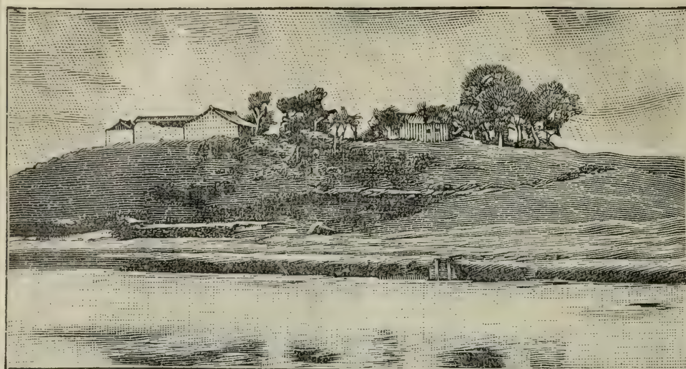
羽至垓下。兵少食盡。信等乘之。羽敗入壁。圍之數重。羽夜聞漢軍四面皆楚歌、大驚曰、漢皆已得楚乎。何楚人多也。起飲帳中、命虞美人起舞。悲歌慷慨。泣數行下。其歌曰、力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。騅者羽平日所乘駿馬也。左右皆泣、莫敢仰視。

訓讀 羽、垓下に至る。兵少く食盡く。信等之に乘ず。羽、敗れて壁に入る。之を圍むこと數重。羽、夜、漢の軍四面皆楚歌するを聞き、大に驚いて曰く、「漢皆已に楚を得たる乎、何ぞ楚人の多きや」と。起つて帳中に飮し、虞美人に命じて起つて舞はしむ。悲歌慷慨、泣數行下る。其の歌に曰く、「力山を拔き、氣は世を蓋ふ。時利あらず騅逝かず。騅逝かず奈何すべき。虞や虞や若を奈何せん」と。

騅とは羽が平日乘る所の駿馬なり。左右皆泣き、敢て仰ぎ視る莫し。



楚の項羽は漢の軍に追はれて垓下といふ處まで來た。もう兵も少く、糧食も盡きてしまつた。漢の大將韓信等がそこを附けこんで攻めたてたので、項羽は敗れて城壁の中へ入つた。漢の軍がそれを幾重にも取り圍んだ。或夜のこと、項羽は我を圍んだ漢軍が城の四方で楚の國の唄を歌ふのを聞いて、大いに驚いて言つた。「さては、漢軍は、(我が味方と恃む)楚の地を、もうすつかり手に入れて了つたか。(敵の軍中に)何と楚人の多いことぞ」と。——漢が楚の地を占領し、楚人が漢に降參したから、漢軍の中に楚の唄を歌ふものが多いのである——そこで項羽は(もうこれまでと覺悟をきめ)はね起きて帳の中で永訣の酒を酌みかはした。寵姫虞美人に命じて一曲舞はしめ、自らも悲しく歌うて男泣きに泣く。幾すぢの涙がはら〳〵と頰をつたうた。歌に曰く「力山を拔き氣は世を蓋ふ。云々」——我が力は山をも突き崩し、我が意氣は一世を呑み盡す。(天下何物をも恐れぬ我であるが)武運拙うしては、駿馬「騅」も躊躇して進まなくなつた(と、運命の行き詰つたことを馬の進まぬのに喩へて悲しみ)、併し騅が進まぬとてどうしようぞ、どうすることも出來ない。否、否、それよりも、我が愛するもの虞よ、虞よ、お前をどうしたものであらうか——と。騅といふのは項羽が平生乘つてゐた



項王廟

駿馬である。左右の近臣これが爲に皆泣いて、一人も顔をあげて見得る者はなかつた。

語釋 垓下（地名。今安徽省にある。）○楚歌（楚の地の俗謠。）○帳中（トバリのうち。帳は内の見えぬやうに垂れる幕。）○虞美人（項羽の愛妾。）○悲歌慷慨（悲しく歌うて歎き憤る。）○泣數行下（涙が幾條も流れおちる。泣はこゝはネ詞に讀む、ナミダ。涙に同じ。）○時不レ利兮（時勢が我が爲に有利でない。運がわるい。兮は音調を助ける爲に置く字で、韻文に用ひる。）○騅（馬の毛色の蒼白なのをいふ。アシゲの馬。こゝはその毛色を取つて馬の名としたのである。）○奈何（イカニ。イカン。如何と同じ。）

餘論 英雄の末路は古來あはれなるものといはれてゐるが、その中でも之を西にして奈翁、之を東にしては項羽の如き、蓋しその尤なるものであらう。而して此の一段はその末路の悲壯さを叙して、ゆたかな劇的氣分を含んでゐること、前の鴻門の會と併せて、項羽悲史の二大場面といつてよい。殊に項羽の歌は、英雄の心緒亂れて絲の如く、悲絶哀絶讀む者を

してそゞろに涙を催さしめる。之を漢の高祖が、項羽を伐ち天下を平定して後、鄕里の沛に歸つた時、親戚知人を招いて盛宴を張り、自ら筑を撃つて歌つたといふ所謂大風の歌、「大風起兮雲飛揚。威加海內兮歸故鄕。安得猛士兮守四方。」と對照するに、一は失意のどん底、一は得意の絕頂。一は情の人、一は知の人。その氣象とその境遇と、寥々たる短章の間に髣髴して、人をして無量の感慨に打たれしめる。

「四面楚歌」は此の故事から轉じて、四方から非難されて所謂孤立無援の立場にあることを形容する語として用ひられ、「力拔山兮氣蓋世」は、「拔山蓋世」といふ熟語となつて英雄の勇猛な氣象を表はすのに用ひられる。

因みに項羽の悲歌に和した虞美人の歌として傳へらるるものに、「漢兵已略地。四方楚歌聲。大王意氣盡。賤妾何聊生。」といふのがある。そのまた虞美人は、項羽が戰死した時、自刎して果てたが、その墓の上の草を、人呼んで虞美人草と稱したといふ。（今わが國のひなげしを虞美人草といふ）。後世、虞美人草に託して詠まれた詠史の詩の少からぬ中に、宋の曾鞏の「鴻門玉斗紛如雪。十萬降卒夜流血」云々の七言二十句は、哀切悲壯、最も人口に膾炙するものである。

天亡我

項羽自刎

羽乃夜從八百餘騎、潰圍南出、渡淮、迷失道、陷大澤中。漢追及之。至東城。乃有二十八騎。羽謂其騎曰、吾起兵八歲、七十餘戰、未嘗敗也。今卒困此。此天亡我。非戰之罪。今日固決死。願爲諸君決戰、必潰圍斬將、令諸君知之。皆如其言。於是欲東渡烏江。亭長艤船待。曰、江東雖小、亦足以王。願急度。羽曰、藉與江東子弟八千人渡江而西。今無一人還。縱江東父兄、憐而王我、我何面目復見。獨不愧於心乎。乃刎而死。

訓讀 羽、乃ち夜八百餘騎を從へ、圍を潰して南に出で、淮を渡り、迷うて道を失ひ、大澤の中に陷る。漢追うて之に及ぶ。東城に至る。乃ち二十八騎有り。羽、其の騎に謂つて曰く、「吾、兵を起してより八歲、七十餘戰、未だ嘗て敗れざる也。今卒に此に困しむ。此れ天我を亡すなり。戰の罪に非ず。今日固より死を決す。願はくは諸君の爲に決戰し、必ず圍を潰し將を斬り、諸君をして之を知らしめん」と。皆其の言の如くす。是に於て東のかた烏江を渡らんと欲す。亭長、船を艤して待つ。

曰く、「江東、小なりと雖も、亦以て王たるに足る。願はくは急に渡れ」と。羽曰く、「籍、江東の子弟八千人と江を渡つて西す。今一人の還るもの無し。縱ひ江東の父兄憐んで我を王とすとも、我、何の面目ありて復見ん。獨り心に愧ぢざらん乎」と。乃ち刎ねて死す。

通釋　項羽はそこで夜中に八百餘騎を從へ、敵の重圍を突きくづして南へ逃げ、淮水を渡つたが、道に迷つて大きな沼地の中へと踏みこんでしまつた。(そこで愚圖々々してゐる間に)漢の追撃軍が追付いてしまつた。項羽はまた逃げて東城に着いた。その時は手兵わづかに二十八騎になつてゐた。項羽はもう迚も脱れぬ運命と覺悟して、從ふ部下を顧みて曰つた。「予が兵を起してよりこゝに八年、七十餘度の戰ひを經たが、未だ嘗て一度も敗れたことはなかつた。然るに今つひに此處に進退谷まるに至つた。(これ天命の然らしむる所だ)、天が予を亡ぼすのだ。斷じて戰に弱いためではないぞ。今日は勿論死ぬ覺悟で居る。就ては皆のために最後の奮戰を試み、必ずこの重圍を突き破り、敵將を斬つて、(いかにも天命だ、戰ひの罪でないといふことを)皆に見せようと思ふ」と(さう言つて項羽は力戰奮鬪、將を斬り兵を殺し、目覺しい働き振りを示した)。すべてが彼の言つた通りであつた。(併し手兵はもうたつた二騎だけになつてゐた。)是において項羽は東して烏江の川を渡らうとした。そこには

烏江の亭長が、豫め船出の用意をして項羽を待つてゐた。そして「江東の地は狹くはあるが、それでもまだ君王となつて天下に號令するには十分です。さア急いでお渡り下さい」と言つて勸めた。項羽は曰ふ、「（いや、厚意は有難いが）、予は嘗て兵を起す時、江東の青年八千人とこの川を渡つて西へ向つたものだ。然るに今や一人の生きて還るものもない。たとひ江東の父兄たちが、予に同情して君王として吳れても、予はどの顏をして二度と彼等に會ふことが出來ようぞ。（よし父兄達は子弟のことを何も言はぬとしても）、予が心中これを愧ぢずに居られようか」と。そこで我と我が首を搔き落して死んだ。

語釋 潰（音クワイ。つひゆ、つひやす。總崩れになること。又敵を總崩れにすること。）○大澤（大きな水溜りの池。沼地。項羽は一農夫に欺かれて沼地へ落ちこんだのである。）○東城（今安徽定遠縣の東南。）○起レ兵八歲（二十四歲にして兵を起し、今三十一歲に至るまで八年になる。）○決戰（一本に「快戰」とある。その方がよいといふ說である。）○烏江（川の名。今安徽安慶道和縣の東北にある。烏江浦といふ。）○亭長（四〇一頁の語釋に出づ。）○艤（音ギ。船を岸に向けて出船の用意をすること。ふなよそひ。）

餘論 項羽の最後を詠んだ詩の數多ある中に、最も有名なのは、唐の杜牧の「題ニ烏江亭一」といふ詩、

勝敗兵家事不レ期。包レ羞忍レ恥是男兒。江東子弟多ニ才俊一。卷土重來未レ可レ知。

であらう。彼は當に然りである。併しながら、渡らるべき烏江を故らに渡らずして、江東八千の子弟の父兄に會はす顏がないとて、長くもない三十一年の生涯を、痛ましき自刄で結んだ心根の優しさは、東洋流の英雄精神を發揮したものとして、吾等は爲めに一掬の涙なきを得ないのである。否、むしろこの最期の一齣あつてこそ、謂はゆる「慓悍猾賊」の彼を以てして、なほ千歳の下、人の同情を惹き人の涙を唆ることが出來るのである。そこに人間性の尊さと人間味の光とを認めねばならぬ。

烏江の項羽を思ふとき、吾等は期せずして乃木將軍の

皇師百萬征二强虜一。野戰攻城屍作レ山。愧我何顏看二父兄一。凱歌今日幾人還。

の詩に想到せざるを得ない。項羽と乃木將軍。これは無論、人と時と事とを異にして、到底同日に論ずべきではないが、たゞ併し、多くの部下の死を痛み、その父兄の胸中を想ひ遣つて、何の顏か之に見えんといふ悲しき心情に至つては、二者即ち同じと謂はねばならぬ。

楚地悉定。獨魯不レ下。王欲レ屠レ之、至二城下一、猶聞二絃誦之聲一、爲下其守二禮義一之國上、爲レ主死レ節、持二羽頭一示レ之。乃降。王還、馳入二齊王信壁一、奪二其軍一、立レ信爲二楚王一。彭

越爲梁王漢王卽皇帝位。

【訓讀】楚の地悉く定まる。獨り魯のみ下らず。王之を屠らんと欲し、城下に至れば、猶ほ絃誦の聲を聞く。其の禮儀を守るの國にして、主の爲に節に死するが爲に、羽の頭を持して之に示す。乃ち降る。王還り、馳せて齊王信の壁に入り、其の軍を奪ひ、信を立てゝ楚王と爲し、彭越を梁王と爲す。漢王、皇帝の位に卽く。

【通釋】楚の地は全部平定したが、たゞ魯だけが降參しない。（魯はもと項羽の封ぜられた國である）そこで漢王は魯を全滅にするつもりで都城のそばまで攻め入つて見ると、（魯はさすがに孔子の國だけに）、かうした際にも、音樂を奏し詩を歌ふ聲が聞えてゐた。魯はかういふ風に、禮儀道德を守る國であるから、主の項羽の爲に、（敵に降らずして）節義を立て、死ぬ覺悟であると見たので、漢王は（これを弑戮するに忍びず）項羽の首を持つて來て魯人に示し、（戰爭の無益なることを諭した）。魯人も（斯くなる上からはと思つて）そこで始めて降參した。是において漢王はその軍を引きかへし、大急ぎで齊王韓信の城へと突き入つて、韓信の軍を奪ひ取つた。さうして（先の固陵での約に從つて）韓信を

であらう。理は當に然りである。併しながら、渡らるべき烏江を故らに渡らずして、江東八千の子弟の父兄に會はす顏がないとて、長くもない三十一年の生涯を、痛ましき自刃で結んだ心根の優しさは、東洋流の英雄精神を發揮したものとして、吾等は爲めに一掬の涙なきを得ないのである。否、むしろこの最期の一齣あつてこそ、謂はゆる「慓悍猾賊」の彼を以てして、なほ千歳の下、人の同情を惹き人の涙を唆ることが出來るのである。そこに人間性の尊さと人間味の光とを認めねばならぬ。

烏江の項羽を思ふとき、吾等は期せずして乃木將軍の

皇師百萬征強虜。野戰攻城屍作山。愧我何顏看父兄。凱歌今日幾人還。

の詩に想到せざるを得ない。項羽と乃木將軍。それは無論、人と時と事とを異にして、到底同日に論ずべきではないが、たゞ併し、多くの部下の死を痛み、その父兄の胸中を想ひ遣つて、何の顏か之に見えんといふ悲しき心情に至つては、二者卽ち同じと謂はねばならぬ。

楚地悉定。獨魯不下。王欲屠之、至城下、猶聞絃誦之聲。爲其守禮義之國、爲主死節、持羽頭示之。乃降。王還、馳入齊王信壁、奪其軍、立信爲楚王、彭

越爲梁王漢王卽皇帝位。

訓讀 楚の地悉く定まる。獨り魯のみ下らず。王之を屠らんと欲し、城下に至れば、猶ほ絃誦の聲を聞く。其の禮儀を守るの國にして、主の爲に節に死するが爲に、羽の頭を持して之に示す。乃ち降る。王還り、馳せて齊王信の壁に入り、其の軍を奪ひ、信を立てゝ楚王と爲し、彭越を梁王と爲す。漢王、皇帝の位に卽く。

通釋 楚の地は全部平定したが、たゞ魯だけが降參しない。(魯はもと項羽の封ぜられた國である)そこで漢王は魯を全滅にするつもりで都城のそばまで攻め入つて見ると、(魯はさすがに孔子の國だけに)、かうした際にも、音樂を奏し詩を歌ふ聲が聞えてゐた。魯はかういふ風に、禮儀道德を守る國であるから、主の項羽の爲に、(敵に降らずして)節義を立て、死ぬ覺悟であると見たので、漢王は(これを弑戮するに忍びず)項羽の首を持つて來て魯人に示し、(戰爭の無益なることを諭した)。魯人も(斯くなる上からはと思つて)そこで始めて降參した。是において漢王はその軍を引きかへし、大急ぎで齊王韓信の城へと突き入つて、韓信の軍を奪ひ取つた。さうして(先の固陵での約に從つて)韓信を

置酒南宮

立てゝ楚王となし、彭越を梁王となし、漢王自ら皇帝の位に卽いた。(これを漢の太祖高皇帝、卽ち高祖といふ。)

語釋 魯(初め項羽は懷王によつて魯に封ぜられ魯公となつた。而して魯は孔子の國で、禮儀道德に厚いので、旣に死したる舊主項羽の爲に節を守つて降らなかつたのである。) ○絃誦(琴をひき詩をうたふことで、學問敎育にはげむをいふ。) ○守禮義之國(禮義は禮儀道德のこと。魯は孔子の故鄕で、儒者達は猶ほ聖人の遺化に從ひ、斯る際にあつても禮樂を習つて止めないのである。) ○齊王信(これより先、漢王が楚と苦戰中、韓信は齊を攻め取つて、自ら假に齊王となつて齊を鎭せんことを漢王に請うたので、漢王大に怒つて之を罵つたが、張良・陳平の諫によつて悟る所あり、王となるなら假王などとケチな事を言はないで堂々と眞王になるがよいと言つて、之を齊王に任じたのである。)

○置酒洛陽南宮。上曰、徹侯諸將、皆言、吾所以得天下者何、項氏所以失天下者何。高起・王陵對曰、陛下使人攻城掠地、因而與之、與天下同其利。項羽不然。有功者害之、賢者疑之、戰勝而不予人功、得地而不與人利。

訓讀 洛陽の南宮に置酒す。上曰く、「徹侯諸將、皆言へ、吾の天下を得たる所以は何ぞ、項氏の天下を失ひし所以は何ぞ」と。高起・王陵對へて曰く、「陛下は人をして城を攻め地を掠めしむれば、因つて之に與へ、天下と其の利を同じうす。項羽は然らず。功有る者は之を害し、賢者は之を疑ひ、戰ひ勝つて人に功を予(與)へず、地を得て人に利を與へず」と。

【通釋】（高祖は或日）洛陽の南宮といふ御殿で宴會を開いたが、その時高祖の曰ふには、「諸侯並びに諸將たちよ、各〻、予が天下を得たる原因は何か、また項羽が天下を失つた理由は何であるかを言つて見られよ」と。すると高起と王陵の二人が對へて曰つた。「（それは外でも御座りませね）、陛下は部下に城を攻め土地を占領させられますと、その功に因つてその城や土地を、その大將に與へて、天下の人に利益をお分ちになります。（だから民心歸服して、陛下を天子と推戴するに至つたので、これ即ち陛下が天下を得られた所以であります）。項羽はそれに反して、功あるものは（嫉んで）之を殺害し、賢者は（忌み憚つて）これを疑ひ、戰に勝つても人の功勞を賞せず、土地を取つても人に利益を與へませぬ。だから誰も項羽に信服するものなく、自然項羽は孤立となりました。これ即ち彼が天下を失つた所以であると存じます」と

【語釋】置酒（酒を置くといふので酒宴を開くこと。「置酒高會」などいふ。）○洛陽（今河南洛陽縣。高祖は初め洛陽に都したが後に長安に遷つた。）○上（シヤウと音讀する。今上といふに同じく、現在の天子を尊んでいふ稱。）○徹侯（列侯といふに同じい。徹は通で其人の功徳が王室に通ずる義。後に漢の武帝の諱の徹を避けて改めて通侯といひ、又列侯といつた。）○高起・王陵（高起は都武侯に封ぜられた人。その事は詳かでない。王陵は沛の人、高祖のとき安國侯に封ぜられ、後に大傅に進んだ。）

上曰、公知其一、未知其二。夫運籌帷幄之中、決勝千里之外、吾不如子房。

季布髡鉗

棄壯士資敵國

之。五百人在島中者、聞之自殺。○初季布爲項羽將、數窘帝。羽滅、帝購求布。敢匿者罪三族。布乃髡鉗爲奴、自賣於魯朱家。朱家心知其布也、之洛陽見滕公曰。季布何罪。臣各爲其主耳。以布之賢、漢求之急、不北走胡、南走越耳。此棄壯士資敵國也。滕公言於上。卽赦布、召拜郎中。

訓讀　故の齊の田横、其の徒五百餘人と海島に入る。上之を召して曰はく「横來れ。大なる者は王とせん。小なる者は侯とせん。來らずんば且に兵を擧げて誅せんとす」と。横、二客と傳に乘り、洛陽の尸鄕に至りて自剄す。王禮を以て之を葬る。二客自剄して之に從ふ。五百人島中に在る者之を聞いて自殺す。○初め季布、項羽の將と爲り、數々帝を窘しむ。羽滅びて、帝、布を購求す。敢て匿す者は三族を罪せんと。布乃ち髡鉗して奴と爲り、自ら、魯の朱家に賣る。朱家、心に其の布なるを知る。洛陽に之き滕公に見えて曰く、「季布、何の罪かある。臣、各其の主の爲にする耳。布の賢を以て、漢之を求むること急なるときは、北のかた胡に走らずんば、南のかた越に走らん耳。此れ壯士を

棄てて敵國を資くる也」と。滕公、上に言ふ。乃ち布を赦し、召して郎中に拜す。

通釋 故の齊王田横は、(漢王が天下を平定したので難を恐れて)一味の者五百餘人と(山東半島外の海中の島に入つた。高祖が之を召して「横よ來れ、重く用ひば王にしよう。低くとも侯に取り立てよう。もし來ぬならば兵を遣して誅して了ふぞ」と。いひ送つた。そこで田横は二人の客と宿つぎの馬に乘り、洛の尸鄕といふ處まで來たが、(今更身を屈して漢に仕へることを恥ぢ、自分で首をはねて死んでしまつた。高祖は(あはれに思ひ)王としての禮儀を以て厚く葬つた。二人の客も亦自殺して之に殉した。海島にゐた五百人の者も之を聞き(田横に節をたてて)自殺した。○初め季布といふもの項羽の部將となつて度々高祖を窘しめたので、高祖は項羽が滅び(わが天下となると)賞金を懸けて季布の首を求め、もし布を匿ふものは三族までも罪にすると(布令を出した)。布は(大いに恐れ、身を隱すために)髮を剃り首枷を着けて(奴隸の姿に身を窶し)、自分で魯の國の朱家といふものに身を賣つて(奉公した)。朱家は心中これが季布であることを知つたので、洛陽に行き(帝の近侍の)滕公にお目通ししていふには、「一體、季布には何の罪がありますか、臣たるものは(誰だつて)めい〳〵其の主の爲に忠義を盡すばかりであります。(季布はその主項羽の爲に忠を盡す爲に漢王を窘しめたのであつて、臣

として當然の道であります）。賢明な季布のこと故、漢が彼を嚴しく彼を搜索するならば、彼は北の方匈奴に走るか、さなくば南の方越に逃げるばかりでござらう。これは漢が勇士を棄てて敵を資けることになります」と。滕公がこれを帝に申し上げた。（帝も悟つて）布を赦し、召して郎中といふ役にした。

語釋　大者王小者侯（大は田横を指し小は其部下を指す、卽ち田横を王にし部下を侯にしようといふ意であるとの說もあるが、やはり大なれば王に封じ、小なりとも侯には取り立てようといふ意に取るがよい。）　○傳（驛々を連絡する車馬。傳車・傳馬。「孟嘗君」の條に述べた二一二頁參照。）　○髡鉗（髡は髮を剃ること、鉗は音ケン。慣用音カン。くびがせ。髮を剃り首かせをはめるとは奴隷のしるしである。當時奴隷賣買のあつたことが之でも知られる。）　○朱家云々（朱家に身をまかせて奉公すること。身賣する。朱家は魯の大俠で、朱は氏、家は名である。）　○滕公（夏侯嬰のこと。嘗て滕の令となつたから滕公といふ。高祖の同郷で功勞あり、太僕の官にゐた。朱家が滕公に說いたのは、滕公が高祖に信用あり、高祖が必ず滕公の言を聽き入れることを考へたからである。）

斬丁公

○丁公爲項羽將、嘗逐窘帝彭城西、短兵接。帝急顧曰、兩賢豈相厄哉。丁公乃還。至是謁見。帝以徇軍中曰、丁公爲臣不忠。使項王失天下。遂斬之。曰、使後爲人臣、無效丁公也。

婁敬說高祖

○齊人婁敬說上曰、洛陽天下之中。有德易以興、無德易以亡。秦地被山帶河、四塞以爲固。陛下案秦之故、此搤天下

之亢、而拊其背也。上問張良。良曰、洛陽四面受敵。非用武之國。關中左殽函、右隴蜀、阻三面而守。敬說是也。上卽日西都關中。

訓讀　丁公、項羽の將となり、嘗て逐ひて帝を彭城の西に窘め、短兵接す。帝顧みて曰はく、「兩賢豈相厄せんや」と。丁公乃ち還りぬ。是に至つて謁見す。帝以て軍中に徇へて曰はく、「丁公、臣となりて不忠なり。項王をして天下を失はしむ」と。遂に之を斬る。曰く「後の人臣たるものをして、丁公に効ふこと無からしむるなり」と。齊人婁敬、上に說いて曰く、「洛陽は天下の中なり。德あれば以て興り易く、德無ければ以て亡び易し。秦の地は山を被り河を帶び、四塞以て固を爲す。陛下秦の故を案ぜば、此れ天下の亢を搤して、其の背を拊つなり」と。上、張良に問ふ。良曰く、「洛陽は四面に敵を受く。武を用ふる國に非ず。關中は殽函を左にし、隴蜀を右にし、三面を阻てて守る。敬の說、是なり」と。上、卽日西して關中に都す。

通釋　丁公固といふものが項羽の部將となり、高祖を彭城の西に逐ひつめ、劍を揮つて間近く迫つた。帝は急にふりかへつて「貴公も乃公も共に賢者ぢや、それが困め合ふのは止さうぢやないか」と

いふと、(丁公はその言葉によつて)帝を見逃して引き上げた。さて世も定まつたので、丁公は帝にお目見えに來た。すると帝は(之を捕へ)軍中に引き廻していふやう、「この丁公は人の臣として(敵の大將を見逃した)不忠者である。項王をして天下を失はしめたものは此奴である」とて、とう〳〵之を斬り殺し、「今後、人臣たる者をして丁公に效はぬやう見せしめにするのだ」と云つた。○齊の人婁敬といふ者が高祖に說いていふやう、「河南の洛陽は天下の中央に位し(結構な都でありますが、軍事上から見ますと要害の地でないから、こゝに都する天子に)德のある時は盛になり易いけれども、德の無いときは亡び易くあります。かの秦の地の關中は、後に山を負ひ、前に渭水をめぐらし、四方が塞がつて固をなして居る。陛下が若し秦の故の地に立てこもられたならば、これは人の亢を締めてその背中を擊つやうに天下を自由にすることが出來ます」と。帝は之を張良に謀つた。良のいふやう、「誠に洛陽は四面に敵を受け易くて武事を行ふによい國ではありませぬ。(之に反し)關中は殽山や函谷關を左に控へ、隴山や蜀の險を右に控へて、三面を險阻で圍んで守り(たゞ東南の一方のみ開けて諸侯を制することが出來ますから誠に申分ない處です)。婁敬の說は尤と思ひます」と。帝は(之を聞いて)其の日に西に向ひ關中に都を奠めた。

張良謝レ病

孺子可レ教

語釋 丁公（楚漢春秋に丁公、名は固といふとある。季布の異父弟である。）○短兵（短い武器といふ意で、刀劍のこと。敵味方の兩方が接近しては長い武器の用ひ樣がないから短い劍で切り込む。接近して急迫なることを「短兵接」とも「短兵急」ともいふのである。）○兩賢豈相厄哉（兩賢は高祖自身と丁公とを指す。厄は困厄で苦しみ困ること。「我と汝と共にこれ賢者である。然るに互に苦しめ合ふのは詰らぬ事ではないか」といった、そこで丁公は此の言に感じて高祖を撃つことを止めたのである。一說は、兩賢は季布と丁公とを指し、「御身等二人が吾を苦しめるのは餘りひどいではないか」と言つたのだと。牽强の嫌なきを得ない。）○婁敬（後に姓を劉と賜うて劉敬と云つた。）○被レ山帶レ河（四面に山を負ふこと衣服を被つたやうであるから被レ山といふ。帶河は帶の如く河をめぐらすこと。山河襟帶ともいふ。）○案ニ秦之故一（案は據の意、よりこもること。故は故地、もとの土地である。）○搤ニ天下之亢一拊ニ其背一（搤は扼と同じく捉へ掴むこと。亢は咽喉で關中に喩へる。拊はウツと訓じ、撃つこと。背はセナカで天下に喩へる。天下のノドクビを掴んでその背中を打つといふので、天下を自由にすることが出來るといふ意。）○左ニ殽函一右ニ隴蜀一（殽は崤に同じく、河南省永寧縣にある山の名。函は函谷關。隴は今の甘肅省秦州にある大阪。蜀は四川省成都府の古稱。右左は陝西方面を背にして中京に向つての位置から云つたのである。）○都ニ關中一（卽ち長安の都である。）

○留侯張良謝レ病辟レ穀、曰、家世相レ韓。韓滅、爲レ韓報レ讎。今以ニ三寸舌一爲ニ帝者師一、封ニ萬戸侯一。此布衣之極。願棄ニ人間事一、從ニ赤松子一遊耳。良少時於ニ下邳圯上一、遇ニ老人一。墮ニ履圯下一、謂レ良曰、孺子下取レ履。良欲レ毆レ之。憫ニ其老一、乃下取レ履。老人以レ足受レ之曰、孺子可レ教。後五日、與レ我期ニ於此一。良如レ期往。老人已先在。怒曰、與ニ長者一期、後何也。復約ニ五日一。

【訓讀】留侯張良、病と謝し、穀を辟け、曰く、「家世々韓に相となる。韓滅びて韓の爲に讎を報ず。今三寸の舌を以て、帝者の師と爲り、萬戶侯に封ぜらる。此れ布衣の極なり。願はくは人間の事を棄て、赤松子に從つて遊ばん耳」と。良、少時、下邳の圯上に於いて、老人に遇ふ。履を圯下に墮し、良に謂つて曰く、「孺子、下りて履を取れ」と。良、之を毆たんと欲す。其の老いたるを憫み、乃ち下りて履を取る。老人、足を以て之を受けて曰く、「孺子、敎ふ可し。後五日に、我と此に期せよ」と。良、期の如く往く。老人已に先づ在り。怒つて曰く、「長者と期して後るゝは何ぞ也」と。復た五日を約す。

【通釋】留侯張良は病と稱して世間のうるさい事をすつかり斷り、穀物を食ふことをやめて（仙人の行を修め）人に語つていふには、「わが家は代々韓の國の大臣であつたが、韓が秦の爲に滅されたので、自分は（漢の高祖に從つて秦を滅して）、韓の爲に讎を報いた。而して今や口先一つで帝王の師となり、一萬戶の地に封ぜられてゐる。一平民として、これほどの出世はない。（然るにいつまでも富貴の地位にゐることは禍の本であるから）、どうかもう世間の事は棄てゝしまつて仙人と一緒に悠々と餘生を送りたいものである」と。張良のまだ若いころの事であるが、下邳といふ所の或る橋の上で

一人の老人に出會つた。そのとき老人は履を橋の下に落して、張良に、「おい、若造、下へおりて俺の履を取つて來い」と言つた。（餘りの無禮に）、張良はこの老人を毆りとばしてやりたかつたが、よぼ〳〵してゐるのを不便に思つて、言ふがまゝに降りて行つて履を拾つて來てやつた。すると老人はそれを足で受けて、「若造、お前は見込みがある。五日の後に、俺と又こゝで出會ふことに約束をしよう」と言つて（別れた）。張良は約束の時刻に行つて見た。行つて見ると老人は早や先に來て居つて、「年寄と約束しておいて、後から來るとは何事だ」と叱りつけた。さうしてまた五日の後にと約束した。

語釋 留侯（留は今江蘇沛縣の東南にある地、張良、留に封ぜらる。故に留侯といふ。） ○謝レ病（病と稱して人事を謝絕する意。病氣だといつて世間のうるさいことを斷つて引きこもること。） ○辟レ穀（辟は避と通じでサクと訓む。仙人の術たる導引を行つて穀物を食はないこと。導引とは大氣を導いて體內に引き入れるといふ義で、深呼吸をして心を靜め欲を絕つのだといふ。） ○三寸舌（辯舌といふ意。張良は戰場の功なく、たゞ軍師參謀として常に高祖の左右に侍した。故に「以二三寸之舌一爲二帝者之師一」といふ。） ○布衣（庶人の服。故に庶人のことをいふ。平民。） ○人間（人の世。世間といふ意。これを人類といふ意に用ひるのは、それが轉じたのである。） ○赤松子（上古神農氏時代に居つた仙人の名。こゝはたゞ仙人といふ意味に用ひたのである。） ○下邳（地名。今江蘇邳縣。） ○圯（音イ。楚では橋のことを圯と云つたさうである。） ○毆（音ウ。ウツと訓ず。毆打。）

及レ往老人又先在。怒復約二五日一。良半夜往。老人至。乃喜授以二一編書一。曰、讀

帝者師

祠ニ黄石一

此可レ爲二帝者師一。異日見二濟北穀城山下黄石一、卽我也。且視レ之、乃太公兵法。良異レ之、晝夜習讀。既佐レ上定二天下一。封二功臣一、使三良擇二齊三萬戸一。良曰、臣始與二陛下一遇二於留一。此天以レ臣授二陛下一。封レ留足矣。後經二穀城一、果得二黄石一焉。奉二祠之一。

訓譯 往くに及んで老人又先づ在り。怒つて復五日を約す。良、半夜に往く。老人至る。乃ち喜び、授くるに一編の書を以てす。曰く、「此を讀まば帝者の師と爲るべし。異日、濟北の穀城山下の黄石を見ば、卽ち我也」と。旦に之を視れば、乃ち太公の兵法なり。良、之を異とし、晝夜習讀す。既にして高祖を佐けて天下を定む。功臣を封ずるとき、良をして齊の三萬戸を擇ばしむ。良曰く、「臣始め陛下と留に遇ふ。此れ天、臣を以て陛下に授くるなり。留に封ぜらるれば足る」と。後、穀城を經しに、果して黄石を得たり。之を奉祠す。

通譯 (さてその日になつて)出かけて見ると、老人はまた先に來て居つた。その日も怒つてまた五日の後に來いと言つた。(今度こそはといふので)、張良は眞夜中に行つて見たところが、(さすがにまだ老人の姿は見えない)。併しやがてやつて來た。さうして(張良の辛抱づよさに)喜んで、一冊の本

を授け、「この本を讀めば天子の師となることが出來る。他日、濟北の穀城山の下で黄色の石を見つけたら、それは俺ぢやと思はつしやい」と言つた。張良は夜が明けてからその本を披いて見ると、太公望の書いた兵法の書であつた。これは不思議なことだと思つて、日となく夜となく（一生懸命にその本を）勉强した。その後、張良は高祖をたすけて天下を平定した。高祖が功臣に領地を與へるとき、張良には、齊の國でどこでも勝手に三萬戸の土地を擇び取らせようとしたが、張良は辭退して、「私が初めて陛下にお目にかゝつたのが留でありました。即ち留の地は、天が私を陛下に授けられた處と申すべきであります。されば私は留を頂戴することが出來れば、それで結構に存じます」と答へて、（終に留に封ぜられた）。後に穀城を通つたところが、果して黄色の石を見つけたので、（先の老人の言葉を思ひ出して、それを拾ひ上げ）、恭しく社にお祀りした。

語釋 濟北（地名。今の山東省西部一帶の地。）○穀城山（山名。今山東東阿縣の東北にある。一名黄山といふ。）○黄石（黄色の石。この事から、この老人は黄石公といふ仙人であつたと云ふ。）○太公兵法（太公望の兵法の書といふ意。太公望は周の文王・武王の師であつた呂尙のこと。この時張良に授けた兵書は「三略」といひ、黄石公の撰であるともいふが、三略は僞書であるから、固より信ずるには足らない。）○擇二齊三萬戸一（齊の國の内で自分の望む所の土地三萬戸の處を勝手に選び取らせること。）

餘論 張良年少、主家たる韓のために秦の始皇を討つて仇を報いんと欲し、一力士を得て、重さ

告韓信反

百二十斤の大鐵槌を作り、始皇の東遊するを伺うて、力士と共に博浪沙中に狙ひ撃つたところ、誤つて副車に中り、始皇を打ち漏らした。始皇は大いに怒つて草を分けてもと張良を捜し求めたが、張良は姓名を變へて下邳に隱れ忍んでゐた。圯上で老人に遇つたのは其の時である。老人が幾たびか張良を試みたのは、實に斯の如き剛鋭の氣、忿々の心を抑へて、よく「忍」の眞諦を體認せしめよう爲であつたに違ひない。その邊の考察は蘇東坡の留侯論に委しく論じてある。唐宋八家文にもあり文章軌範にもあつて有名な文章であるから、まだ讀まぬ方は是非とも一讀せられたい。

○功成り名遂げた張良が、久しく富貴の地に居らずして勇退高踏したのは、最も賢明の策であつたと云はれてゐる。所謂三傑を以てして、韓信は誅せられ、蕭何も獄に繫がれたのに徵すれば、げにもと首肯かれることである。司馬溫公が「明哲、身を保つ者」として稱揚したのは故なきことではない。

○張良の風采については史記に曰く、「余以爲其人必魁梧奇偉。至見其圖、狀貌如婦人好女。」と。而して蘇東坡は曰ふ、「此其所以爲子房歟」と。

○六年、人有上書告楚王韓信反。諸將曰、發兵坑孺子耳。上問陳平。平危

僞遊雲夢

狡兎死走狗烹

之曰、「古有巡守會諸侯。陛下第僞遊雲夢、會諸侯於陳、因禽之、一力士之事耳。」上從之、告諸侯。會陳、吾將遊雲夢。至陳。信上謁。命武士縛信、載後車。信曰、「果若人言。狡兎死走狗烹、飛鳥盡良弓藏、敵國破謀臣亡。天下已定。臣固當烹。」遂械繫以歸。赦爲淮陰侯。

訓讀 六年、人、上書して楚王韓信反すと告ぐるもの有り。諸將曰く、「兵を發して豎子を坑にせん耳」と。上、陳平に問ふ。平、之を危んで曰く、「古、巡守して諸侯を會すること有り。陛下、第僞つて雲夢に遊び、諸侯を陳に會し、因つて之を禽にせば、一力士の事耳」と。上、之に從ひ、諸侯に告ぐ。「陳に會せよ、吾將に雲夢に遊ばんとす」と。陳に至る。信、上謁す。武士に命じて信を縛せしめ、後車に載す。信曰く、「果して人の言の如し。狡兎死して走狗烹られ、飛鳥盡きて良弓藏まり、敵國破れて謀臣亡ぶと。天下已に定る。臣固より當に烹らるべし」と。遂に械繫して以て歸る。赦して淮陰侯と爲す。

【通釋】六年に、或人が高祖に書を上つて楚王の韓信が謀反したと告げた。諸將は「兵を出して小僧を穴埋めにするまでだ」と言つて(聞くので)、高祖は(其の可否を)陳平にたづねた。陳平は(尋常のことでは韓信を討滅し得ないことを)懸念して、不贊成を唱へて曰く、「昔、天子は諸侯の領地を巡視して、諸侯を參會せしめることがありました。この際、陛下は何がなしに出て雲夢澤に遊ぶと僞られて、諸侯を陳に集めなさい。(すると韓信もやつて來ませうから)、その時彼を捕へるならば、(大軍を出すまでもなく)、たつた一人の力士で澤山であります」と。高祖は陳平の意見に從ひ、諸侯に「陳に集合せよ。吾はこれより雲夢澤に出遊しようと思ふ」と通告した。さて高祖が陳に着くと、韓信は(諸侯の一人として陳に來て)拜謁を賜つた。(その機を逸せず)高祖は武士に命して(其の場で難なく)韓信を捕へて繩をかけさせ、副車に載せた。韓信は驚いて、「果してあの蒯徹の言つた通りだ。兎狩をしてすばしこい兎が捕り殺されると、(今まで駈けまはつて働いた)犬ももう用がないから烹て食はれてしまふ。空を飛ぶ鳥が射盡されると、(もはや良い弓も要らぬから藏ひ込まれてしまふ)。(それと同じく)敵國が亡んでしまへば、折角働いた謀臣も殺されてしまふと(言つたが、)其の通りだ。楚を滅ぼす爲にこそ自分は漢王に必要であつたが、既に楚が滅んだ今日、自分はもう無用の人間だから)、烹

殺されるのも當然であらう」と言つた。遂に高祖は韓信に手がせ足がせをかけて連れかへつた。併し直ぐに赦して淮陰侯に封じた。

語釋 巡守（諸侯の守る所を天子が巡視してその治績をしらべること、巡狩とも書く。） ○第（タダと訓む。先づ何であらうとも。何がなしになどいふ意。） ○雲夢（ウンボウと讀む。雲夢澤といつて洞庭湖の北、湖北陸安縣の南にある湖。） ○陳（地名。河南陳州の地。） ○力士（力の强い人。謂はゆる角力取のことではない。） ○後車（副車。そへぐるま。） ○若ニ人言一（人とは蒯徹を指す。徹、嘗て韓信に、漢王に背いて獨立し、漢楚と天下を三分せよと勸め、いつまでも漢に附いてゐては、今こそよいが、漢王が成功した曉には、きつと邪魔物にされるだらうと忠告して、「野獸已盡而獵狗烹」と言つたことがある。「人言」とはそれを指す。尙ほこの故事からして、嘗て役に立つた人物も、事が濟めば邪魔物にされて除かれるといふ意に、「狡兎死走狗烹云々」といふやうになつた。） ○狡兎（狡猾なる兎の意で、逃げることのすばしこい兎をいふ。） ○械繫（械は手がせ足がせ。繫はつなぐこと。）

上嘗從容問信諸將能將兵多少。上曰、如我能將幾何。信曰、陛下不過將十萬。帝曰、於君何如。曰、臣多多益辦。帝笑曰、多多益辦、何以爲我禽。曰、陛下不能將兵、而善將將。此信所以爲陛下禽。且陛下所謂天授、非人力也。

訓讀 上、嘗て從容として信に諸將の能く兵に將たるの多少を問ふ。上曰く、「我の如きは能く幾何に將たらんか」と。信曰く、「陛下は十萬に將たるに過ぎず」と。帝曰く、「君に於ては何如」と。曰く、「臣は多多益〻辦ず」と。帝笑つて曰く、「多多益〻辦ぜば、何を以て我が禽と爲れる」と。曰く、「陛

下は兵に將たること能はざれども、而も善く將に將たり。此れ信が陛下の禽と爲りし所以なり。且つ陛下は所謂天授にして、人力に非ざるなり」と

【通釋】高祖は或時うち寛いだ樣子で、諸將が各々幾人の兵に大將たるの器量があるかを、韓信に尋ねた。（そして最後に）、「予はどれほどの兵を統率し得るだらうか」と問うた。すると韓信はこれに答へて、「陛下は十萬人位の大將にしかなれませぬ」と言つた。高祖は「ではお前はどんなものだ」ときいた。韓信は、「私は萬でも億でも多ければ多いほど上手に取りまはします」と威張つた。高祖は笑ひ出して、「多ければ多いほど巧く治めるといふやうな人物ならば、どうして（十萬人にしか大將になれない）予に擒にされたのぢや」といふと、韓信は「陛下は兵卒の大將には不向ですが、併し大將の大將たる器量を具へて居られます。（まるで桁が違ひます）。ですから私も陛下の爲に擒にされたのでございます。その上、陛下は謂はゆる天が授けたもの、（天成の帝王であらせられるので）、人間の力で出來たお方ではございませぬ」と言つた。

【語釋】從容（おちついて騷がぬ樣子であるが、こゝでは威格にせずに打ちくつろいだ形容として用ひた。）　○多々益辦（多ければ多いほど巧みに取り計らふといふ意。辦の字は中に力を書いてつとむ、取り計ふなどの意である。）
○爲ニ我禽ニ（韓信が高祖の計略にかゝつて陳で捕へられたことを指す。）

剖ㇾ符封ニ功臣ー

功狗功人

○剖符封功臣。酇侯蕭何食邑獨多。功臣皆曰、臣等被堅執鋭、多者百餘戰、少者數十合。蕭何未嘗有汗馬之勞。徒持文墨議論、顧反居臣等上、何也。上曰、諸君知獵乎。逐殺獸者狗也。發縱指示者人也。諸君徒能得走獸耳。功狗也。至如蕭何、功人也。羣臣皆莫敢言。

訓讀 符を剖き功臣を封ず。酇侯蕭何、食邑獨り多し。功臣皆曰く、「臣等、堅を被り鋭を執り、多き者は百餘戰、少き者は數十合。蕭何は未だ嘗て汗馬の勞有らず、徒文墨を持して議論し、顧つて臣等の上に居るは何ぞ也」と。上曰く、「諸君、獵を知れりや。獸を逐殺する者は狗也。發縱して指示する者は人也。諸君は徒能く走獸を得る耳。功は狗也。蕭何の如きに至りては、功は人也」と。群臣、皆敢て言ふもの莫し。

通釋 高祖は割符を分ち授けて功臣に所領を與へた。其の中で酇侯の蕭何の領地だけが特別に多かつたので、功臣は皆「私どもは堅い鎧を着、鋭い矛や刀を手に執つて、戰といつたら多いものは百餘

回、少いものでも數十回もして居ります。(その苦勞は並大抵ではありませぬ)。然るに蕭何はと言へばつひに一度も戰場をかけめぐつた手柄もなく、ただ帳面をなぶつて議論して居るだけでありました。それが却つて今私どもの上に居るといふのは、一體どういふ譯でございませうか」と言つて(不平を漏らした)。すると高祖の答へはかうだつた。「諸君は獵を知つて居るだらう。あの獵の時に、獸を追つかけて行つて嚙み殺すのは犬であり、犬の紐を解き放ち、指圖をして追つかけさすものは人間である。(今度の手柄を此の獵にたとへて見ると)、諸君はたゞ(人に指圖されて)逃げゆく獸を捕へただけだ。功は功でも狗の功といはねばならぬ。蕭何と來ては(諸君に指圖をした人であるから)其の功は人間の功である」と。そこで群臣は皆ぐうの音も出なくなつた。

語釋 剖レ符(符はワリフ。剖はサクと訓じて二つに割ること。竹片を二つに割つて、一つを渡し、一つを手許に控へて置いて、後の證據にするもの、合はせた時ぴつたりと合へば間違ひないといふ證となる。諸侯を封ずる時にも割符を以てし、之を剖いて半分は官に藏し、半分は其人に與へて證據とするのである。) ○酇侯(酇は地名、今湖北省光化縣の北。) ○食邑(邑を食む。土地を領有すること。領地。) ○被レ堅執レ鋭(被二堅甲一執二鋭兵一の略。堅い鎧を着、鋭利な武器を持つ。卽ち武裝すること。) ○數十合(合は戰場で敵と手合せする意で、戰の回數をいふ。數十回。) ○汗馬之勞(戰場を乗りまはして、馬が汗かく程の苦勞するをいふ。實戰の功勞。) ○持二文墨一(文書や筆墨を携へること。卽ち字を書き帳面調べること。こゝは實戰の功勞に對して、政治經濟等の文治的事業を賤しんで言つたのである。) ○顧反(顧も反もカヘツテであるが、こゝは二字でカヘツテと訓む。) ○發縱(犬をつないだ綱を解いて放しやること。) ○指示(向ふ所を指でさし示す。) ○得二走獸一(此の句は史記に從つたものであらう。漢書には「走得レ獸」とある。)

○上已封大功臣。餘爭功不決。上從複道上望見諸將往往坐沙中相與語。上問張良。良曰、陛下以此屬取天下。今所封皆故人親愛、所誅皆平生仇怨。此屬畏不能盡封、又恐見疑平生過失及誅。故相聚謀反耳。

訓讀 上、已に大功臣を封ず。餘は功を爭うて決せず。上、複道の上より望み見るに、諸將、往々、沙中に坐して相與に語る。上、張良に問ふ。良曰く「陛下、此の屬を以て天下を取る。今、封ずる所は皆故人親愛にして、誅する所は皆平生の仇怨なり。此の屬、盡く封ぜらるゝ能はざるを畏れ、又、平生の過失を疑はれて誅に及ばんことを恐る。故に、相聚つて反を謀る耳」と。

通釋 高祖は既に功勞の大きなものだけは領地を與へて大名としたが、その外は、手柄の大小有無などを爭うて定らぬので、（まだ封を行ふことが出來ないでゐた）。（或日のこと）、高祖は二重廊下の上から下を見おろすと、諸將があつちにもこつちにも沙の上に坐つて（何かひそ〱と）話し合つてゐる。（不思議に思うて）張良に尋ねると、張良は斯う云つた。「陛下は、この人たちの力によつて天下を取られましたが、今日、領地を與へられた者を見ると、何れも皆陛下の昔馴染や親しみ愛せ

張良善諫

蕭何殊禮

られる者ばかりである、又誅滅された者を見ると、それは皆陛下が平生から憎み怨んで居られる者ばかりでございますので、この人たちは、(陛下の故人親愛でない限り)、とても皆が皆まで知行を戴くことは出來ぬだらうと心配いたし、又一方には平素落度のあつた事にお疑をかけられて殺されるやうなことになりはせぬかと恐れて、それであのやうに聚つて、いつそ謀反を起さうかと相談して居るのでごごいます」と。

語釋 上(シヤウと音讀する。今上の意で、時の天子をいふ尊稱。) ○複道(上下二重になつた渡廊である。閣道といふに同じい。) ○此屬(このともがら。あの人達。こゝは諸將を眼前に見つゝそれを指していふのである、) ○故人(昔なじみ。古い友達。) ○仇怨(仇として憎み怨むもの。意趣遺恨あるもの。)

上曰、奈何。良曰、陛下平生所憎、羣臣所共知、誰最甚者。上曰、雍齒。良曰、急先封齒。於是封齒爲什方侯。而急趣丞相・御史、定功行封。羣臣皆喜曰、雍齒且侯、吾屬無患矣。詔定元功十八人位次、賜丞相何劍履上殿、入朝不趨。

訓讀 上曰く、「奈如せん」と。良曰く、「陛下平生憎む所にして群臣の共に知る所は、誰か最も甚だ

じき者ぞ」と。上曰く「雍齒なり」と。良曰く「急に先づ雍齒を封ぜよ」と。是に於て齒を封じて什方侯と爲す。而して急に丞相・御史を趣して、功を定め封を行ふ。群臣皆喜んで曰く、「雍齒すら且つ侯たり、吾が屬、患ひ無けん」と。詔して元功十八人の位次を定め、丞相何に劍履して殿に上り、入朝して趨らざるを賜ふ。

通釋 高祖は（それを聞いて大いに驚いて）、「どうしたものだらう」と曰ふ。張良（すかさず）一體陛下が平素から憎いと思召すもので、而も群臣の皆が（彼は陛下の御意に入らぬ者だと）知つてゐるといふやうな者は誰れが一番でせうか」と問うた。高祖は「それは雍齒だ」と曰ふ。「然らば至急まづその雍齒に知行をお與へなさい」と張良が曰つた。そこで高祖は雍齒を封じて什方侯といふ大名に取り立てた。そして急いで丞相や御史の役目のものを急き立てゝ、諸將の功勞を調べ定めて知行を當て行うた。（それと知つた）群臣は皆よろこんで、「（あの一番陛下のお氣に入らない）雍齒でさへも大名に取り立てられた。すれば我々共は（勿論のことだ）、心配は要るまい」と曰つた。斯くて（全部の論功行賞も濟んでから）、詔によつて大功のあるもの十八人の席順を定め、（一に蕭何、二に曹參、三に張敖、四に周勃、五に樊噲といふやうに順序を立て）、丞相の蕭何には劍を帶し履を穿ちて殿上にのぼるこ

叔孫通起朝儀

爲緜蕝

とを許し、朝廷に入つても小走りに歩くには及ばぬといふ恩典を賜はつた。

【語釋】什方侯（什方は地名。そこの大名である。）○趣（ウナガスと訓ず、促に同じ、せき立てること。）○丞相・御史（丞相は執政の大臣、宰相のこと。御史は御史大夫のことで法律を掌り人民の罪惡をたゞす官の總長。それに軍事の長官たる太尉を加へて代の三公といつた。）○元功（元は大、大功。）○劍履上殿（當時群臣が殿上に上る時は必ず劍を脫し履をぬぐのが禮であつたが、今それには及ばぬと許されたのである、）○入朝不趨（趨は小走りにすることで、貴人の前を通る時の禮である。これも朝廷に入つては小走りにするが規則なれども、それに及ばぬといふ恩典である。）

【餘論】不平不滿があつて、ひそ〳〵と謀反の相談などをすることを「沙中偶語」といふのは、この故事から起つたのである。「偶語」とは向ひ合つて話すことをいふ。史記に「諸將往々坐沙中相與語」とあるのを、漢書には「往往數人偶語」とあるから、それに據つたのである。

○尊太公爲太上皇。○帝懲秦苛法、爲簡易。群臣飲酒爭功、醉或妄呼、拔劍擊柱。叔孫通說上曰、儒者難與進取、可與守成。願徵魯諸生、共起朝儀。上從之。魯有兩生。不肯行曰、禮樂積德而後可興也。通與所徵及上左右、與弟子百餘人、爲緜蕝野外習之。

【自釋】太公を尊んで太上皇と爲す。○帝、秦の苛法に懲りて簡易を爲す。羣臣酒を飮んで功を爭ひ、醉うて或は妄語し、劍を拔いて柱を擊つ。叔孫通、上に說いて曰く「儒者は與に進んで取り難く、與に成を守る可し。願はくは魯の諸生を徵して、共に朝儀を起さん」と。上之に從ふ。魯に兩生あり。行くを肯ぜずして曰く、「禮樂は德を積んで後に興す可き也」と。通、徵す所のもの及び上の左右と、弟子百餘人と緜蕝を野外に爲つて之を習はす。

【通釋】○高祖は父の太公を尊んで太上皇といふ尊號を奉つた。○高祖は秦の苛酷な法律が（世を亂した）のに懲りて、簡單で手輕な法律を設けた。ところが諸臣は酒を飮むと、その功を爭ひ、醉うては時に無茶にどなり立て、劍を拔いて御殿の柱を斬つたりした。（その亂暴な樣子を見て）叔孫通といふ博士が（禮樂を知らしむるの必要を痛感し）、帝に勸めて言ふには、「儒者と申すものは、進み攻めて國を取る相談は出來ぬが、取つた天下を治め守る相談相手にはなるもので御座ります。願くは（昔聖人の出られた）魯の國の儒者を召されて、朝廷の儀式を興されたく存じます」と。帝はこれに從はれた。このとき魯の國に二人の儒者があつたが、（召に應じて）行くことを承知しないで曰ふには、「禮儀や音樂といふものは、德を積んでから興すべきものだ。（まだ戰が濟んで間もない中に禮樂など行

長樂宮成

知皇帝之貴

はれるわけがない)」と。併し叔孫通は(これには構はず)徵に應じて來たものと帝の近臣と自分の弟子百餘人とで、野外に繩を張つて場所のしきりとし、茅を束ねたものを立て、百官の席順を定めて、儀式の練習をさせた。

語釋　叔孫通(漢代の儒者で博士となり多くの儀式典禮を定めた學者である。)　○難與進取(與はトモニと訓むが、相談相手として一緒に事をする意である。)　○守成(出來上つた業功を落さぬやうに守ること。)　○魯有兩生(魯は孔子の國、禮樂を重んずる國だからである。兩生は兩人の學者。生は學者の稱。)　○與所徵及上左右與弟子百餘人(「與所徵」の下に「諸生」の二字を加へ「上左右」の下に「爲學者」の三字を加へ、「弟子」の上に「其」の字を加へて見ると明瞭である。)　○緜蕝(緜は綿に同じく木綿糸のこと。それを張つて式場のシキリとする。蕝はチガヤ(茅)を束ねて草箒のやうに造り之を立て、天子百官の位次を定めること。實際の人を一々立ち會はせることが出來ぬからその代りに用ひたのである。)

○七年、長樂宮成。諸侯群臣皆朝賀。謁者治禮、引諸侯王以下至吏六百石、以次奉賀。莫不振恐肅敬。禮畢置法酒。御史執法、擧不如儀者、輒引去。竟朝罷酒無敢讙譁失禮者。上曰、吾乃今日知爲皇帝之貴也。拜通爲太常。

訓讀　七年、長樂宮成る。諸侯群臣、皆朝賀す。謁者、禮を治め、諸侯王以下、吏六百石に至るま

でを引き、次を以て奉賀せしむ。振恐粛敬せざるもの莫し。禮畢つて法酒を置く。御史、法を執り、儀の如くならざる者を擧げ、輒ち引き去る。朝を竟へ酒を罷むるまで、敢て諠譁して禮を失ふ者無し。上曰く、「吾れ乃ち今日、皇帝たるの貴きを知る」と。通を拜して太常と爲す。

通釋 七年(十月)長樂宮の工事が落成した。諸侯群臣は皆朝廷へお祝ひに出た。(そのとき叔孫通の定めた朝禮を行ひ)、謁者(禮儀を掌る役人が)式場を整頓し、諸侯王以下知行六百石までの官吏を導いて順次にお祝を言上せしめたが、皆恐れ入つて粛み敬はないものはなかつた。賀禮が畢つて儀式の酒を賜はつた。(其の間にも)御史の官が法式を守らせて、禮儀に違ふものがあると(容赦なく)退場させた。それで朝賀を竟つて酒をやめるまで、少しも高聲で騒ぎなどして禮を失ふ者は無かつた。そこで帝が(喜んで)いはれるやう、「吾は今日始めて皇帝たるの尊さが分つた」と。(これは全く叔孫通の功であるといふので)通を任じて太常といふ官にした。

語釋 朝賀(朝廷へ出て御祝儀を申し上げること。) ○謁者(官名、朝廷の儀式を掌る官、應接・取次等をなし、又君命を受けて各國に使する官。今の式部官の如きもの。) ○吏六百石(漢代の俸祿は二千石より百石まで十四等あり。六百石は第六等の官である。尤も丞相・太尉・將軍などは此の外である。) ○置二法酒一(法酒とは禮酌といふに同じく、儀式の御酒で、飲んで醉に至らぬを謂ふ。その法酒を出して宴を開くこと。) ○御史(こゝは殿中侍御史のことで、供奉を掌り班列を正しくする官である。) ○執レ法(作法を執り行ふこと。) ○輒(その都度といふ意。) ○諠譁(かまびすしきをいふ。高聲にさわぐこと。) ○太常(神祇の禮を掌る官で九卿の一。)

冒頓單于

陳平奇計

○匈奴寇邊。帝自將擊之。聞冒頓單于居代谷、悉兵三十萬、北逐之、至平城。冒頓精兵四十萬騎、圍帝於白登七日。用陳平祕計、使間厚遺閼氏。冒頓乃解圍去。平從帝征伐、凡六出奇計。輒益封邑。○九年、遣劉敬使匈奴和親、取家人子名公主、妻單于。

訓讀 匈奴、邊に寇す。帝自ら將として之を擊つ。冒頓單于、代谷に居ると聞き、兵三十萬を悉し、北して之を逐ひ、平城に至る。冒頓の精兵四十萬騎、帝を白登に圍むこと七日。陳平の祕計を用ひて、間に厚く閼氏に遺らしむ。冒頓乃ち圍を解いて去る。平帝に從うて征伐し、凡そ六たび奇計を出す。輒ち封邑を益す。○九年、劉敬を遣はして匈奴に使せしめて和親し、家人の子を取つて公主と名づけ單于に妻す。

通釋 匈奴が漢の國境に攻め入つたので、帝は自ら將となつて之を征伐した。（さうして匈奴の天子の）冒頓單于が代谷に居ると聞いて、すべて三十萬の兵を率ゐて北上し、逃げるのを逐うて平城に至

つた。然るに冒頓單于の精兵四十萬が（襲擊して來て）帝を白登といふところに包圍すること七日間に及んだ。（その爲に内外の聯絡を絶たれて困苦したが）陳平の奇拔な計で、單于の妻に内々賄賂を遣つて（單于を宥めさせた）。之が爲に冒頓は圍を解いて去つた。陳平は帝に從つて征伐した間に凡そ六度も奇計を出して（帝を救つたが）、その度ごとに領地を加增せられた。○九年、劉敬を使者として匈奴に遣はして和親の（談判をさせ）、その結果、庶人の女を以て高祖の女だと僞つて單于に妻はせた。（匈奴を宥めるための結婚政略である）。

語釋 冒頓單于（冒頓は人名、原名バクツール Baktur の漢字音譯。單于は天の廣大を形容する蒙古語で、轉じて天子といふ意味の尊稱。）○代谷（代州の上谷。今の直隷省易州。）○平城・白登（皆山西省大同府にある地名。）○陳平秘計（その秘計が如何なるものであつたかは史記の陳平傳にも敢て知る者なしとしてある。鹽鐵論によるとこんな事である。陳平、美女の人形を作り、城中でその手足を動かせた。一方の大將となつて戰つてゐた單于の閼氏も之を見て漢に美女の多いのを信じた。そこで陳平は間者を遣して閼氏に賄賂を贈り且つ「落城の際は單于は必ず漢女を納れて寵愛し、君を疎んずるであらう。今の内に早く圍を解くことを單于に勸められよ。さもなくば君は必ず後悔するだらうと言はした。閼氏は驚いて單于に迫つて包圍を解かしめたといふのである。必ずしも信ずるわけにも行かぬが參考の爲に記しておく。）○閼氏（エンシ。匈奴の王の后をいふ。烟支・焉支などとも書く。その音を詰めると天となるので、天后といふ義であると。）○六出奇計（集覽に「六計謂請捐金行間、一也。以惡草具進楚使、二也。夜出女子二千人解滎陽圍、三也。躡足請封韓信、四也。請僞遊雲夢禽信、五也。解白登圍、六也、とある。而して此の白登の圍を解かせた秘計に就て、鹽鐵論の記す所は既に述べた。）○家人子（庶人の子で宮中に仕へる女のこと。漢書によると、宮人の名號に上家人子・中家人子などいふのがある。それは良家の女を擇んで宮中に入れ、まだ職號のない間は、たゞ家人子といふのであると。）○公主（天子の女のこと。姫宮。）

○十年、代相國陳豨反。帝自將擊之。淮陰侯韓信舍人弟。上變、告信陰與

呂后斬韓信

豨謀。呂后與蕭何謀、詐稱豨已敗死、紿信入賀、使武士縛信、斬之。信曰、吾悔不用蒯徹之謀、乃爲兒女子所詐。遂夷信三族。

訓讀 十年、代の相國陳豨、反す。帝自ら將として之を撃つ。淮陰侯韓信の舍人の弟、變を上り、信が陰に豨と謀ると告ぐ。呂后、蕭何と謀り、詐りて豨已に敗死すと稱し、信を紿いて入りて賀せしめ、武士をして信を縛せしめ、之を斬る。信曰く「吾、蒯徹の謀を用ひず、乃ち兒女子の詐る所と爲りしを悔ゆ」と。遂に信の三族を夷ぐ。

通釋 十年、代の國の家老の陳豨が謀反をおこした。高祖は自身に兵を率ゐて陳豨を撃ちに出た。(其の留守)に淮陰侯韓信の家來某といふものの弟が、信がひそかに陳豨と氣脈を通じて謀叛をはかつてゐると訴へて出た。そこで(高祖の皇后)呂后は(丞相の)蕭何と相談して、詐つて、陳豨は早や負けて誅に服したと觸れさせ、韓信をあざむいて(反賊平定の)祝賀の挨拶を述べに參内させ、そこで武士に命じて韓信を取りおさへて縛り上げ、死刑に處した。(首を斬られる前に)韓信は「あゝ吾は(曾て獨立をすゝめて呉れた蒯徹の計を用ひないで、今や却つて(呂后輩の)女子供に詐られたこと

を後悔する」と言つて口惜しがつた。呂后等は遂に韓信の親族一同までも殺してしまつた。

語釋 代（國名。今の直隷省保定府附近一帶の地。）○相國（シヤウコク。單に相といふも同じ。天子の大臣をいひ、又諸侯の家老をいふ。こゝは家老の意である。我が國では太政大臣の唐名として用ひた。）○上變（非常の大變事を奏上するといふ意で、こゝは謀反人のあることを申し上げたこと。）○紿（音タイ。アザムクと訓ずる。）○蒯徹（史記には徹を通に作る。齊の辯士である。嘗て韓信に獨立を勸めたことは前に述べた。）○兒女子（子供や女子といふ意であるが、こゝは主として呂后を指す。）○夷二三族一（夷は平に同じくタヒラグと讀む。滅ぼすこと。三族は父母・兄弟・妻子といひ、或は父・子・孫といひ、或は父族・母族・妻族といひ、其の他いろ〳〵の說があつて一定しないが、要するに本人以外の親族のものまで罪に問うて殺すのである。「滅二九族一」などいふ言葉もある。）

捕二蒯徹一

〇十一年、帝破レ豨還、詔捕二蒯徹一。至曰、秦失二其鹿一、天下共逐。高材疾足者先得レ之。當時臣獨知二韓信一。非レ知二陛下一。天下欲レ爲二陛下所一レ爲者甚衆。力不レ能耳。又不レ可二盡烹一邪。帝赦レ之。

誅二彭越一

〇梁王彭越、太僕告二其將扈輒勸一レ越反。上使二人掩一レ越囚レ之。反形已具。赦處レ蜀。呂后曰、此自遺レ患。遂誅レ之夷二三族一。

訓讀 十一年、帝、豨を破りて還り、詔して蒯徹を捕ふ。至りて曰はく、「秦、其の鹿を失ひ、天下共に逐ふ。高材疾足の者先づ之を得たり。當時臣獨り韓信を知れり。陛下を知れるに非ず。天下陛下の爲しし所を爲さんと欲する者甚だ衆し。力、能はざるのみ。又盡く烹るべからざるか」と。帝

之を赦す。○梁王彭越の太僕、其の將の扈輒、越を勸めて反せしむと告ぐ。上、人をして越を掩ひて之を囚へしむ。反形已に具る。赦して蜀に處らしむ。呂后曰はく、「此れ自ら患を遺すものなり」と。遂に之を誅して三族を夷す。

 十一年に帝は陳豨の軍を破つて凱旋したが、(韓信の最後の語によつて蒯徹が韓信に謀反をすゝめたことを知り、そこで) 詔を出して蒯徹を捕へた。徹が(京に)來て、(帝の訊問に答へて)曰ふやう、「秦が鹿を取りにがし、天下の人(これを得んとして擧つて中原に)鹿を逐うたが、丈高く足早いものが最先にこれを捕へました。――秦が帝權を失ふや天下みな之を得んとして中原に相爭ふたが、遂に帝權は優れたる人材の手に落ちた。即ち陛下が帝位を占められた。――(さういふ時勢にあつては誰が天子とも誰が君主とも定つて居らぬので)、私としては、たゞ韓信あるを知つて陛下あるを知りませんでした。(故に私が、帝位を得よと韓信にすゝめたとて、それが何の罪惡でござりませう)。當時、天下には、陛下の爲された(天下取りの事業を)爲さうと欲する者が澤山ござつた。たゞ力の足らぬ爲に(成功しなかつたまででござる)。(そこで其等のものを引つ捕へて)悉く烹殺すといふことが出來ませうか。(恐らく不可能の事でござりませう。偶々私一人が見つかつたからとて烹殺されるといふこ

馬上得二
天下一

とは聞えぬ話でございます)。と言つたので、高祖も(その理に服して)之を赦した。○(この年)梁王彭越の近侍の頭が、「彭越の部將扈輒が彭越を勸めて謀叛させた」と告げて來た。帝は兵を遣つて急に彭越を襲うて之を捕へさせた。(罪狀を取調べて見ると)謀叛の形跡がすつかり具はつて(一點の疑もなかつた)。(しかし平生の功を思つて)赦して(庶人として)蜀に居らすことにした。併し呂后が「(越を赦すことは)自分で後日の患を遺すといふものです」と言つたので、とう〳〵之を殺し、三族をも皆殺にした。

語釋 失レ鹿(鹿は王位に譬ふ。故に「失レ鹿」とは帝王の權を失つたこと。隨つて「逐レ鹿」とは王位を得んとして爭ふこと。今は轉じて選擧運動に於て當選を得ようと爭ふことをいふ。一說に鹿は音ロクで祿に通じ、祿の最大至上たる王位を意味すると。牽强の嫌なきを得ない。) ○高材疾足(有爲の人材に譬へる。高材逸足ともいふ。) ○又不レ可ニ譏烹一邪(史記の本傳には不の字が無い。卽ち「盡ク烹ル可ケンヤ」である。本文の不の字は恐らくは衍(ヨケイな字)であらう。) ○反形已具(形は形跡。謀反の證據がスツカリ分つて、少しの疑ひもないこと。) ○掩(不意に討つこと。おそふ。掩襲と熟する。)

遣二陸賈一立二南海尉佗一爲二南粤王一。佗稱レ臣奉二漢約一。賈歸報。拜二太中大夫一。○賈時前說二詩書一。帝罵レ之曰、乃公馬上得二天下一。安事二詩書一。賈曰、陛下以二馬上一得レ之、寧可下以二馬上一治上レ之乎。文武並用長久之術也。使下秦幷二天下一、行二仁義一、法中先

陸賈著新語

聖、陛下安得有之。帝曰、試爲我著書。秦所以失、吾所以得、及古成敗。賈著書十二篇。每奏稱善。號曰新語。

訓讀 陸賈を遣し南海の尉佗を立てて南粤王と爲す。佗臣と稱して漢の約を奉ず。賈歸りて報ず。太中大夫に拜せらる。○賈、時〻進んで詩書を說く。帝、之を罵つて曰く、「乃公、馬上に天下を得たり。安んぞ詩書を事とせん」と。賈曰く、「陛下、馬上を以て之を得るも、寧んぞ馬上を以て之を治むべけんや。文武竝び用ふるは、長久の術なり。秦をして、天下を幷せ、仁義を行ひ、先聖に法らしめば、陛下、安んぞ之を有するを得ん」と。帝曰く「試に我が爲に書を著はせ。秦の失ひし所以と、吾の得たる所以と、及び古の成敗とを」と。賈、書十二篇を著はす。奏する每に、善しと稱す。號して新語といふ。

通釋 (この年儒臣)の陸賈を遣して、南海郡の尉である趙佗を立てて南粤王とした。佗は(賈に諭されて)臣と稱し漢の命令を奉じた。(其の功により)賈は太中大夫の官に任ぜられた。○陸賈は、時〻高祖の前へ進み出ては、詩經・書經などを講釋したが、或時、高祖はこれを罵つて「おれは(戰場

をかけめぐつて）馬上に天下を取つたものだ。そんな詩經や書經の穿鑿なぞ何になるものぞ。（學問で天下は取れない、たゞ力あるのみだ）」と曰つた。陸賈はそれに答へていふ「いかにも陛下は馬上で天下を取られましたが、併しどうして馬上で之を治めてゆくことが出來ませうぞ。（群雄を征服して天下を取ることは武の力であらうが、一旦取つた天下を治めてゆくことは、德の力、學の力——文の力でなくてはならぬ）。されば文武兩道を併せ用ひてこそ國家長久の道と申すべきであります。若しあの秦がよく天下を統一して、仁義の政治を行ひ、古への聖人を手本として（德を修め民を憐れんで國家を治めて）行つたならば、（陛下がいかに武力に長けておはさうとも）どうして其の天下を取られることが出來ませうや」と。高祖も（なるほどと悟つて）「では試みに予のために一書を著はして、それに秦が天下を失つた理由と、予が天下を取つた理由と、而して古への人君の成功し失敗したる理由とを書いて見よ」と曰つた。そこで陸賈は（その趣意に本づいて）十二篇の書を著はしたが、それを第一篇から讀んで聞え上げる毎に、高祖はいつでも「成程、尤もぢや」と曰つた。さうして書名を「新語」とつけた。

【語釋】陸賈（もと楚人であるが學者で、賓客として高祖に從ひ、太中大夫に拜せられた。辯舌に長けた人であつた。）○詩書（詩經・書經のこと。儒教の經典として尊重せられた書。）○乃公（汝の君といふ義で、臣子に對して横柄

にいふ語である。おれ。今は一般にオレとえらぶつていふ時に用ひるやうになつた。）　○新語（王道を尊び覇道を卑しみ、論語や春秋の語を引き、孔子の教を本として、身を修め人を知るの要を說いた書。高祖平生未だ嘗て此の言を聞かなかつたといふので新語と題したといふ。）

【餘論】馬上、天下を得べし、馬上、天下を治むべからず。これ實に千古の確論である。高祖が陸賈の言を聽いて善しとなしたることは、卽ち二百年の治世を開くの樞機といはねばならぬ。我が德川家康が靖亂の後、儒者を聘し教學を興し、以て三百年治平の基を築いたのと、その旨を同じうするものである。一說に、高祖は儒者の冠を着けて來るものがあると、その冠を解かせて之に小便をしかけたといふ程の野人で、元來詩書學問などの分る人間ではないから、次の節の孔子を祠るに太牢を以てしたといふが如きは、中心孔子を崇拜するものではなく、それによつて天下の人心を收攬せんとする英雄の策略に外ならぬ。陸賈の言を善しとしたのも亦その流儀で、必ずしも文教が治世の根本たることを悟つたのではない、たゞ彼の口辯に服したまでであるとする論者もある。果して何れが眞か。

擊黥布

○淮南王黥布、見帝殺韓信、醢彭越、以同功一體之人、自疑禍及、遂反。帝自將擊之。

大風之歌

○十二年、帝破布還、過魯、以太牢祠孔子。過沛置酒、召宗室故人飲。酒酣、上自歌曰、大風起兮雲飛揚、威加海內兮歸故鄉。安得猛士兮

守四方。令沛中子弟習歌之、以沛爲湯沐邑。

訓讀 淮南王黥布、帝の韓信を殺し、彭越を醢にせしを見て、同功一體の人なるを以て、自ら禍の及ばんことを疑ひ、遂に反す。帝自ら將として之を擊つ。〇十二年、帝、布を破つて還り、魯に過り、太牢を以て孔子を祠る。沛に過りて置酒し、宗室故人を召して飲す。酒酣にして上自ら歌つて曰く、「大風起つて雲飛揚す。威海内に加はつて故鄉に歸る。安にか猛士を得て四方を守らしめん」と。沛中の子弟をして之を習ひ歌はしめ、沛を以て湯沐の邑と爲す。

通釋 淮南王の黥布は、帝が韓信を殺し、彭越を誅して醢にしたのを見て、自分も彼の二人と功を同じくし、一身同體ともいふべき者ゆゑ、この身も亦あのやうに誅せられるかと疑つて遂に謀叛した。帝は自分で軍の大將となつて之を征伐した。十二年に高祖は、黥布を滅ぼしてかへり、途中、魯に立ち寄つて、牛羊豚の供物を具へて孔子を祭つた。それから故鄉の沛に立ち寄つて酒宴を開き、一族舊友を招いて共に飲んだ。酒もしつかりまはつて來た時、高祖は自ら歌を作つた歌つた。「大風起つて雲飛揚す」云々——大風吹き起つて雲は四方に飛び散る、それと同じく我れ一たび兵を擧ぐれば、

欲レ廢二太子一

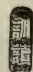
さしもの擾亂も忽ちにして平定するに至つた（第一句）。今や我が威力は全國に及び、われは天下の帝王となつて郷里に歸つて榮譽をかゞやかす。げに快心の極みである（第二句）。たゞこの上は何とか勇猛の士を手に入れて國の四方を守らせ、わが天下を永遠に安定ならしめたいものである（第三句）。と大風を高祖自身に喩へ、雲を秦末の擾亂に喩へて、滿腔の得意を叙したのである。沛中の青少年にこの歌を練習して歌はせ、沛を以て帝室の御料地とした。

語釋　破レ布（布は黥布のこと。布は自分と同功一體の韓信や彭越が高祖の爲に殺されたのを見て、自分もやられはすまいかと疑うて謀反を起したのである。）　○太牢（牛・羊・豚の三種のいけにへ。それを供物として祭ることは祭典の最も盛大なるものである。又「太牢の珍味」などいつて、牛羊豚を具へた馳走のことをもいふ。）　○宗室（もと本家の義であるが、こゝは一家中の意で同族全體をいふ。）　○湯沐邑（湯は體を洗ひ、沐は髮を洗ふこと。その地からあがる税を沐浴の入費に使用するといふ意味から、天子や諸侯の料地をいふ。）

餘論　讀み來れば得意滿面の高祖の風丰、宛として見るがやうである。これと項羽垓下の歌との比較は前に述べたが、漢・楚の興亡は約してこの二篇の歌にありといふも過言ではあるまい。

○初戚姬有レ寵。生二趙王如意一。呂后見レ疏。太子仁弱。上以二如意類一レ己、欲レ廢二太子一而立レ之。群臣爭レ之、皆不レ能レ得。呂后使下人彊要二張良一畫上レ計。良曰、此難下以二口

舌爭也。顧上所不能致者四人。曰東園公・綺里季・夏黃公・甪里先生。以上嫚侮士故、逃匿山中、義不爲漢臣。上高此四人。今令太子爲書卑詞、安車固請、宜來。至以爲客、時從入朝、令上見之、則一助也。


初め戚姬、寵有り。趙王、如意を生む。呂后疏んぜらる。太子仁弱なり。上、如意の己に類するを以て、太子を廢して之を立てんと欲す。群臣之を爭へども、皆得ること能はず。呂后、人をして張良を彊要して畫計せしむ。良曰はく、「此れ口舌を以て爭ひ難き也。顧ふに上の致すこと能はざる所の者四人あり。東園公・綺里季・夏黃公・甪里先生といふ。上、士を嫚侮する故を以て、逃れて山中に匿れ、義として漢の臣と爲らず。上、此の四人を高しとす。今、太子をして書を爲り詞を卑うし、安車もて固く請はしめば、宜しく來るべし。至らば以て客と爲し、時に從へて入朝し、上をして之を見しめば則ち一助也」と。


これより先、戚姬といふ妃が帝に寵愛せられて、趙王如意を生んだ。それで呂后はとかく疏遠にせられた。其の上、呂后の腹なる盈太子は仁慈ではあるが身體が弱かつた。それで帝は太子を廢

し性格の自分に似てゐる如意を立てようと思つた。群臣は之を諫めたが聽き入れられなかつた。呂后は(氣が氣でなく)使者を張良の許に遣して、無理強ひに(太子安全)の計畫を立てゝ呉れと賴ませた。良は之に答へて、「これは口先でお諫しても聽き入れられることはむづかしい。(まあかうしたらよからうと思ひますのは)、帝が招かうとせられても何ともならぬ者が四人ありまして、東園里・綺里季・夏黃公・甪里先生といひます。彼等は帝が士人を侮り辱しめられるのを見て、逃れて山中に匿れ、義を張り通して漢の臣となりませぬ。帝は此の四人を見識の高い者(とお褒めになつてゐます)。今、太子が手紙を書かれて、詞を卑くし、安車を以て是非にと彼等を招待せられたならば(彼等も其の義理に動かされて)きつと參りませう。來ましたならば(太子は彼等を)賓客として(待遇し)、時々彼等を從へて朝廷に出られて、この四人を帝のお目にかけるのが、(今度の廢立をふせぐための)一つの助けでござりますと申し上げた。

【語釋】 類レ己(性格の自分に似てゐること。氣の合ふこと。) ○群臣爭レ之(爭は諫爭の意。「それはいけない」と云つて諫めて言ひ爭ふこと。) ○彊要(彊は強に同じ、(要は境)。しひてもとめること、) ○四人(東園公、姓は唐、字は宣明。夏黃公、姓は崔、名は廣。甪里先生、姓は周名は術。綺里季は不詳。皆當時の隱君子で、秦の亂を避けて商山にかくれてゐた。鬚髮共に白かつたので商山の四皓と呼ばれた。) ○嫚侮(あなどる。馬鹿にする。) ○高二此四人一(この四人をえらい者と思ふ。) ○安車(老人長老を乘せる車、車輪を蒲の葉で編み、車が搖れても乘人に響かぬやうにしてあるもの。)

羽翼已成

呂后使人奉太子書招之。四人至。帝擊布還、愈欲易太子。後置酒。太子侍。良所招四人者從。年皆八十餘。鬚眉皓白、衣冠甚偉。上怪問之。四人前對、各言姓名。上大驚曰、吾求公數歲、公避逃我。今何自從吾兒遊乎。四人曰、陛下輕士善罵。臣等義不辱。今聞太子仁孝恭敬愛士、天下莫不延頸願爲太子死者。故臣等來耳。上曰、煩公。幸卒調護。四人出。上召戚夫人指示之曰、我欲易之、彼四人者輔之。羽翼已成。難動矣。

訓讀 呂后人をして太子の書を奉じて之を招かしむ。四人至る。帝、布を擊つて還り。愈々太子を易へんと欲す。後、置酒す。太子侍す。良の招く所の四人の者從ふ。年皆八十餘、鬚眉皓白、衣冠甚だ偉なり。上怪んで之を問ふ。四人前んで對へ、各々姓名を言ふ上、大に驚いて曰く、「吾れ公を求むること數歲なれども、公、我を避逃せり。今何に自つて吾が兒に從つて游ぶ乎」と。四人曰く「陛下、士を輕んじて善く罵る。臣等、義として辱しめられず。今、太子、仁孝恭敬にして士を愛し、天下頸

を延べて太子の爲に死するを願はざる者莫しと聞く、故に臣等來れる耳」と。上曰く、「公を煩はさん。幸に卒に調護せよ」と。四人出づ。上、戚夫人を召し、之を指示して曰はく、「我れ之を易へんと欲すれども、彼の四人の者之を輔く。羽翼已に成れり動かし難し」と。



呂后は（早速に張良の言の如く）使を遣し太子の書狀を捧げて四人を招いた。四人は（快く）來た。さて帝は黥布を撃つて還り、いよ〳〵太子を易へようと思つた。ところが、或日酒宴を催すと太子も陪席し、張良が招いた所のかの四人も太子に從つて（其場へ出た）。年は何れも八十歳以上、鬚も眉も眞つ白で、衣冠嚴然として立派な風采であつた。帝は不思議に思はれ、何人なるかを問はれた。四人は進み出て名乘つた。すると帝は大いに驚いて、「予はお身達を求めること數年になるけれど、お身達は予を避けて山中に遁れ去つたと聞いたが、それがどうして吾が兒に從ふやうになつたのであるか」と言はれた。四人の者が答へて申すやう、「陛下は士人を馬鹿にして、ぢきに罵倒せられる。臣等は義として陛下の侮辱を受けることは出來ませぬ。（故に山中に隱れ避けて居りました）。然るに今太子は仁慈で孝心深く、恭敬の德があつて士を愛されるから、天下の者が頸を延ばして太子の爲に死ぬることを願はぬものがないと聞き及んで居ります。それで私共も來つて（身を太子に委せたので

ございます)」と。帝は「然らばお身達の御苦勞にあづからう。どうか我が子を保護して下さい」と頼んだ。(斯くて四人が退出するとき)、帝は戚夫人を召し、この四人を指し示して「太子を易へようと思つたが、あの四人が太子を輔けて居る故、鳥の子に羽が出來上つた樣なもの、最早如何ともなしがたい(諦めてくれよ)」といはれた。

語釋 皓白(皓も白。まつ白。) ○善罵(とかく人を罵り易いといふ意。「善ク疾ム」などいふ「善ク」に同じい。) ○延レ頸(エリクビを延ばしてといふので其人を敬ひ慕うて仰ぎ望むさま。) ○調護(調は之を和平するの意。護は之を保安するの意。保護すること。) ○羽翼已成(鳥の羽翼の出來揃つたやうに、基礎の確立したこと。)

繫蕭何

○蕭何以長安地陿、上林中多空地棄、請令民得入田。上大怒、下何廷尉、械繫之。數日而赦之。

呂后問相

○上擊布中流矢、疾甚。呂后問、陛下百歲後、蕭相國死、誰可代之。曰、曹參。其次。曰、王陵。然少戇。陳平可以助之。平智有餘。然難獨任。周勃重厚少文、可令爲太尉。安劉氏者必勃也。復問其次。上曰、此後亦非乃所知也。

高帝崩

○上崩。葬長陵。爲漢王者四年。爲帝者八年。凡十二年。太

子盈立。是爲孝惠皇帝。

【訓讀】蕭何、長安の地陿くして、上林の中に空地の棄られたるもの多きを以て、民をして入りて田つくることを得しめんと請ふ。上大いに怒り、何を廷尉に下して、之を械繫せしが、數日にして之を赦せり。○上、布を撃つや、流矢に中りて、疾むこと甚し。呂后問ふ、「陛下百歲の後、蕭相國死なば、誰か之に代るべき」と。曰く「曹參なり」と。「其の次は」と。曰く「王陵なり。然れども少しく戇なり。陳平以て之を助く可し。平の智は餘有り。然れども獨り任じ難し。周勃は重厚にして文少なく、太尉たらしむべし。劉氏を安んぜん者は必ず勃也」と。復た其の次を問ふ。上曰く「此の後は亦、乃の知る所に非るなり」と。○上、崩ず。長陵に葬る。漢王たること四年、帝たること八年、凡べて十二年なり。太子盈立つ。是を孝惠皇帝となす。

【通解】蕭何が、長安の土地は狹いのに、御料林の中には空地そのまゝで棄てられて居る地が多くある故、(無用に捨ておくより)人民に耕作することを許してやつて下さいと願つた。帝は(蕭何が市人に賄賂を貰つて斯く言ひ出したことかと疑つて)大に立腹し、何を獄吏の手に下して、獄中に繫がせ

ておいたが、（諫める者があつて帝も何の廉潔を知り）、數日にして何を赦した。○帝は黥布を撃つたとき、流れ矢に中つて其の疵がひどく疾み出した。そこで呂后が帝に、「陛下萬一の事あらせられた後で、相國の蕭何が死去しましたならば、誰を代りにすべきでございませうかと問うた。帝が答へて「曹參である」と。呂后が「其の次は誰でせう」と尋ねると、帝は「王陵である。しかし陵は少し愚直だ。陳平に助けさすがよい。陳平の智慧は十二分であるが（物騒な人物だから）一人では事を任せ難い。周勃はどつしりと手厚い人物だが、才氣が乏しい。よつて太尉とするがよい。（兎に角）わが劉氏を安全にする（忠義者は）きつと周勃である」と。言つた呂后が又その次はと聞くと、帝のいふやう「（そなたは何時まで生きる積りぢや。そのうちには、そなたも死んでしまうから）、それから先の事はそなたの知つたことぢやないわ」と。○帝崩じて、長陵に葬つた。帝は漢王であること四年、帝となつて八年凡て十二年である。太子の盈が天子に立つた。是を孝惠皇帝と申した。（略して惠帝といふ。）

語釋 上林（宮廷の御苑の名。上林苑。御料林のこと。）○田（佃に同じく田を耕作すること、）○流矢（誰れが射たとも分らぬ矢。ながれ矢、それ矢。）○百歳後（人は長壽と雖も百歳を出でない。故に死といふことを諱んで敢て顯はに言はず、婉曲に百歳の後といふ。死後といふ意。）○戇（音タウ。愚直。俗にいふ馬鹿正直。）○重厚少レ文（重厚はおも〱しくシツトリとしておだやかに丁寧なこと。文とは文飾で、才氣の外に表はれて見事なるをいふ。こゝはさういふ才氣が少いとの意。）○劉氏（漢の帝室のこと。高祖は劉氏であるから、その子孫を指していふ。）○長陵（今の陝西省咸陽縣の東。これより以後、天子の葬地を陵といひ、各々石を立てゝ之を表することとなつた。）

○孝惠皇帝(漢代—西漢・東漢ともに—は天子の諡に皆孝の字を冠するが、それは永く天下を保つて長へに宗廟に祀として祭られることを祈る意味であると云ふ。)

【解説】高祖が蕭何を縛つた時、近侍の王衞尉が、其の何故なるかを尋ねたら、高祖は、「彼は商人の賄賂を受けて吾が宮苑を請ひ、民に媚びて自ら利せんとするもの、甚だ不都合であるから」と答へた。王衞尉は懇々とその誤解を解いた。高祖は其場はいやな顏をしてゐたが、即日、使を以て蕭何の罪を赦した蕭何は相國の重職にあり、既に老年に及んでゐたが、元來頗る恭謹な人、罪を赦されると素足で帝の前に出てお禮を言上した。すると高祖は、「先づ樂にしなさい。相國は民のために苑を請うたのに、予がそれを許さなかつた。予は實に桀紂の暴君たるに過ぎず、而して相國は實に賢相である。そこでわざと相國を獄に下して、予の過を天下に知らしめんとしたのぢや。惡く思うて呉れるな」と云つたと、史記の世家に見えてゐる。

十八史略新釋卷二(上)終

支那本部地圖



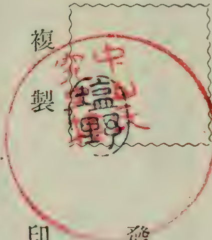
1:11,000,000

昭和五年六月二日印刷
昭和五年六月五日發行

第十一回配本

昭和漢文叢書
十八史略新釋
（上卷）

不許複製



著作者 中山久四郎
著作者 鹽野新次郎
東京市神田區北神保町十一番地
發行者 辻本卯藏
東京市神田區今川小路二丁目一番地
印刷者 山縣精一

東京市神田區北神保町十一番地
發行所 弘道館
電話九段二三六八・一三六九番
振替口座東京八一一五番

印刷所 山縣製本印刷株式會社

東京帝大文科教授 文學博士 吉田熊次著

教育的倫理學

洋裝菊判上製 ●定價金三圓 送料金十二錢

●我國民道德の根本問題たる本邦固有の道德思想と歐米傳來の倫理思想との融合調和を計れるもの即ち本書也。斯問題に頭を惱す者豈看過するを得んや。

文學博士 紀平正美著

最新 論理學綱要

洋裝菊判上製 ●價二圓五十錢 送料金十二錢

●乾燥無味なる論理學を斯く平易簡潔且面白く叙述し得たるものは本書を措いて他に之あるを見ず。尙註釋は讀者の注意と興味とを惹起し自ら了解を得しむ。

東京帝大文科教授 文學博士 松本亦太郎著

實驗心理學十講

洋裝菊判上製 ●定價金五圓 送料金十八錢

●著者自身のは申す迄もなくスクリプチユーア・ヴンド等を初め、內外諸學者の實驗研究して得たる精粹を簡明平易に說述せしもの。蓋し類書中の白眉。

故橫濱市視學 澤正著

再究 學級經營

洋裝中判上製 ●價一圓五十錢 送料金八錢

●小學校に於ける學級教育をして一層意義あり効果あらしむる爲に嶄新なる方法と其の實際とを親切叮嚀に說述したるものなり。

文學博士 建部遯吾著

國體問題

國是及現時の思想

洋裝菊判上製 ●定價金四圓 送料金廿四錢

●社會學の權威たる著者が嚴正なる學術に立脚して我國體の眞髓を闡明し國是の何たるかを指示し兼ねて思潮の誤れる者を警醒せんとするもの也。

東京帝大文科教授 文學博士 桑木嚴翼著

現代思潮十講

洋裝菊版上製 ●價二圓三十錢 送料金十二錢

●現代思潮の源泉を辿り精確に其の變遷沿革を推究して實證主義と理想主義との論理的發展を講述し旁々著者自らの理想的傾向を說述發表したるもの也。

理學博士 林鶴一著

初等幾何の體裁

洋裝四六版上製 ●定價金二圓 送料金十二錢

●本書は我數學界の麒麟兒林博士會心の名著にして好評嘖々たりしが可惜彼大震火災は之を我等より奪へり爾來數星霜茲に再び江湖に見ゆ讀め而て眞價を知れ。

文學博士 中島力造著

改訂增補 教育的倫理學講義

洋裝四六版並製 ●價二圓三十錢 送料金十二錢

●深遠該博なる學識を以て斯界に鳴りし著者が倫理學上重大なる諸問題を提ひて之に明快なる解說を與へ斷案を下したる眞に之學徒の見遁すべからざるの名著也

工學士 兒玉信太郎著

化學計算問題 考へ方と解き方

洋裝三六版並製 ●定價金六十錢 送料金四錢

●化學計算問題に解説を施し簡明的確なる計算法を指示し如何なる難問題も自由に氷解し得らる。問題解決の鍵とは即ち本書也。

文學士 渡邊庸三著

受驗參考 英文集註

洋裝四六判並裝 ●定價金一圓 送料金八錢

●本書は高等學校又は專門學校等への入學受驗準備のため編述し趣味と實益とを兼ね最も平易に解釋せられたるもの受驗參考の良書也。

澤田總清著

支那韻文史

洋裝四六判上製 近刊

國學院大學教授 鳥野幸次著

枕草子新解

洋裝四六判上製 ●價三圓五十錢 送料金十二錢

●典雅優麗なる枕草子の解釋數多き中にも本書の如きは其の類を見ざる所なり。著者三十年の苦心研究の結果なるを以つて其價値は推して知るべきのみ。

文學士 八波則吉著

現代模範作文

洋裝四六判上製 ●價一圓八十錢 送料金十二錢

●題して現代模範作文と云ふ。生きた文例として優良なる作文、特色ある文章を收むること約百篇、蓋し之其の名にそむかず諸君の要望に應ずる唯一の良書なり

淺田四郎氏著

漢文選釋

洋裝四六判並製 ●價一圓九十錢 送料金十二錢

●本書は專門學校程度の受驗者の參考研鑽に資する爲に編纂したるもの。試驗問題を掲げて明快なる答案を附し語法の一斑を示し故事熟語をも網羅せり。

東京帝大文科教授 文學博士 深作安文著

國民道德要義

洋裝菊判上製 ●價金四圓 送料金十六錢

●國民道德專攻の著者が其蘊蓄を披瀝せられたるもの以て本書の價値を知り得べし。今や道德頽廢の聲高きの時敢へて一本をすゝむる所以なり。

京都帝大文科教授 文學博士 高瀨武次郎著

易學講話

洋裝菊判並製 ●價一圓三十錢 送料金八錢

●易學に就いて造詣深き著者が易の幽旨を闡明せん爲に最も平易簡明に說述したるものなれば如何なる人にも了解し得る良著なり。

海漢文叢
晉劉生仿





